

### 第231A号住居跡（第179・180図）

**位置** 調査区北部のG12j7区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第231B・233号住居跡を掘り込み、第266号住居、第8号方形竪穴遺構、第274号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 一辺5.2m前後の方形で、主軸方向はN-7°-Wである。壁高は16~24cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、中央部が踏み固められ、壁際を除いて床全面が貼床である。壁溝は認められない。

**竈** 北壁の中央部に付設されており、煙道部の一部を第274号土坑に掘り込まれている。規模は焚口部から煙道部まで約90cmが確認でき、袖部幅は約100cmである。火床部は床面から深さ5cmほど皿状に掘りくぼめ、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

#### 竈土層解説

- 1 にぶい黄褐色 砂質粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 灰褐色 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
- 3 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・砂質粘土ブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量
- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量
- 7 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
- 8 暗褐色 ロームブロック・砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック少量
- 9 暗褐色 ローム粒子多量、粘土粒子中量、焼土ブロック少量
- 10 暗赤褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック中量、炭化粒子少量
- 11 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量
- 12 暗褐色 ロームブロック多量、砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 13 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

**ピット** 5か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さはP1が約70cmと深く、P2~P4が40~60cmである。

P5は深さ約20cmで、竈と対峙する位置にあり、出入口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 8層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

#### 土層解説

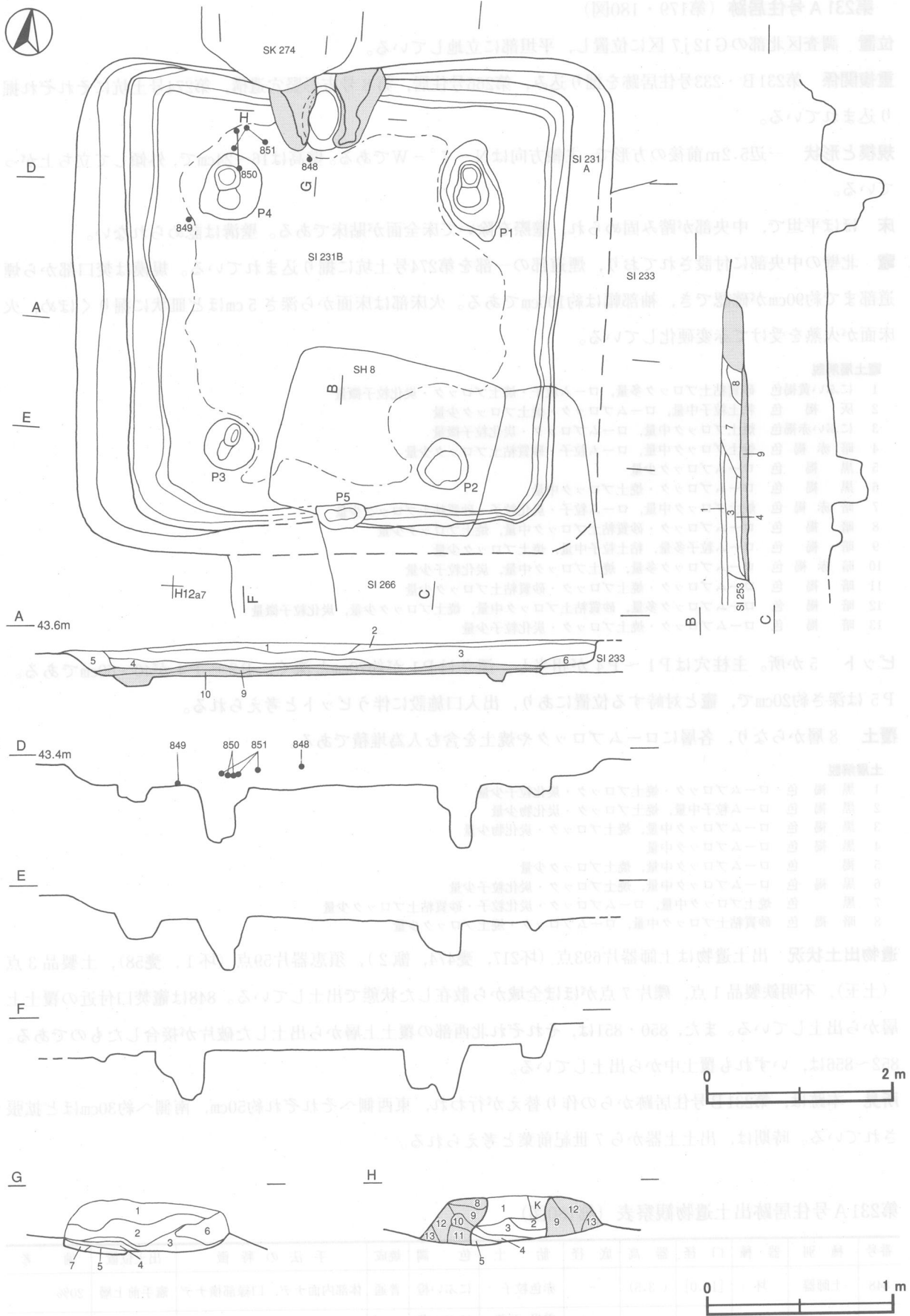
- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量
- 5 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 6 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 黒色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
- 8 暗褐色 砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片693点（坏217、甕474、甗2）、須恵器片59点（坏1、甕58）、土製品3点（土玉）、不明鉄製品1点、礫片7点がほぼ全域から散在した状態で出土している。848は竈焚口付近の覆土上層から出土している。また、850・851は、それぞれ北西部の覆土上層から出土した破片が接合したものである。852~856は、いずれも覆土中から出土している。

**所見** 本跡は、第231B号住居跡からの作り替えが行われ、東西側へそれぞれ約50cm、南側へ約30cmほど拡張されている。時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。

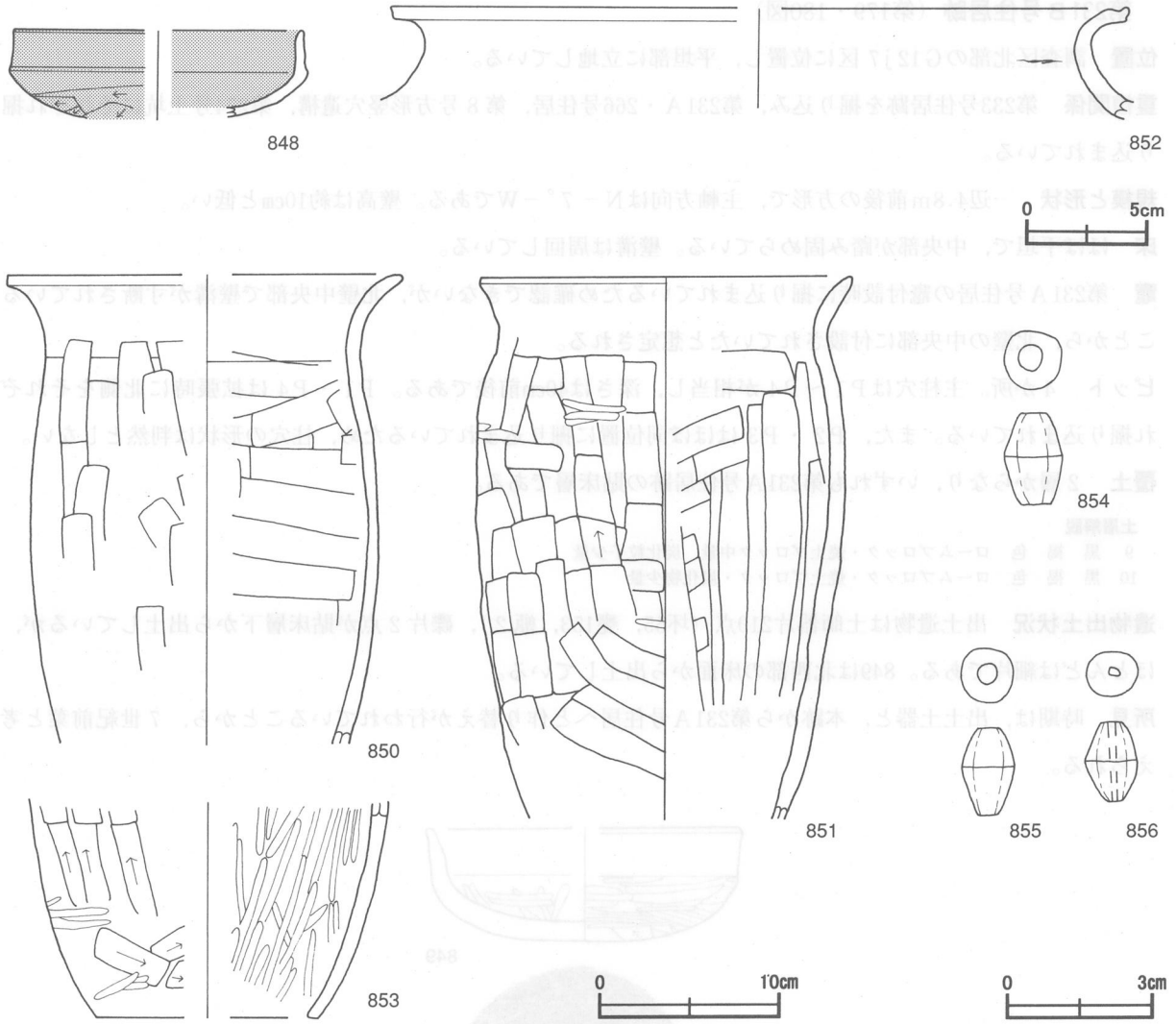
### 第231A号住居跡出土遺物観察表（第180図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
848	土師器	坏	[12.0]	(3.5)	-	赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面ナデ、口縁部横ナデ	竈手前上層	20%
850	土師器	甕	[21.8]	(26.0)	-	雲母・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ	北西部上層	60%



第179図 第231 A・B住居跡実測図





第180図 第231A住居跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
851	土師器	甕	23.8	(30.0)	-	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ	北西部上層	80%
852	須恵器	甕	[39.8]	(6.1)	-	長石・石英・赤色粒子	灰黄	普通	口縁部ロクロナデ	覆土中	5%
853	土師器	甗	-	(11.9)	[12.0]	長石・石英	にぶい褐	普通	体部内面ヘラ磨き	覆土中	10%

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
854	土玉	1.9	1.2	0.5	2.8	雲母・石英	側面ヘラ削り, 両面穿孔	覆土中	
855	土玉	1.8	1.1	0.4	2.1	雲母・石英	側面ヘラ削り, 両面穿孔	覆土中	
856	土玉	1.6	1.0	0.2	1.6	雲母・石英	側面ヘラ削り, 両面穿孔	覆土中	

### 第231B号住居跡（第179・180図）

**位置** 調査区北部のG12j7区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第233号住居跡を掘り込み、第231A・266号住居、第8号方形竪穴遺構、第274号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 一辺4.8m前後の方形で、主軸方向はN-7°-Wである。壁高は約10cmと低い。

**床** ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝は周回している。

**竈** 第231A号住居の竈付設時に掘り込まれているため確認できないが、北壁中央部で壁溝が寸断されていることから、北壁の中央部に付設されていたと想定される。

**ピット** 4か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは40cm前後である。P1・P4は拡張時に北側をそれぞれ掘り込まれている。また、P2・P3はほぼ同位置に掘り込まれているため、柱穴の形状は判然としない。

**覆土** 2層からなり、いずれも第231A号住居跡の貼床層である。

#### 土層解説

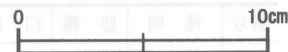
- 9 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量
- 10 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片210点（坏55，甕153，甑2），礫片2点が貼床層下から出土しているが、ほとんどは細片である。849は北西部の床面から出土している。

**所見** 時期は、出土土器と、本跡から第231A号住居へと作り替えが行われていることから、7世紀前葉と考えられる。



849



第181図 第231B号住居跡出土遺物実測図

第231B号住居跡出土遺物観察表（第181図）

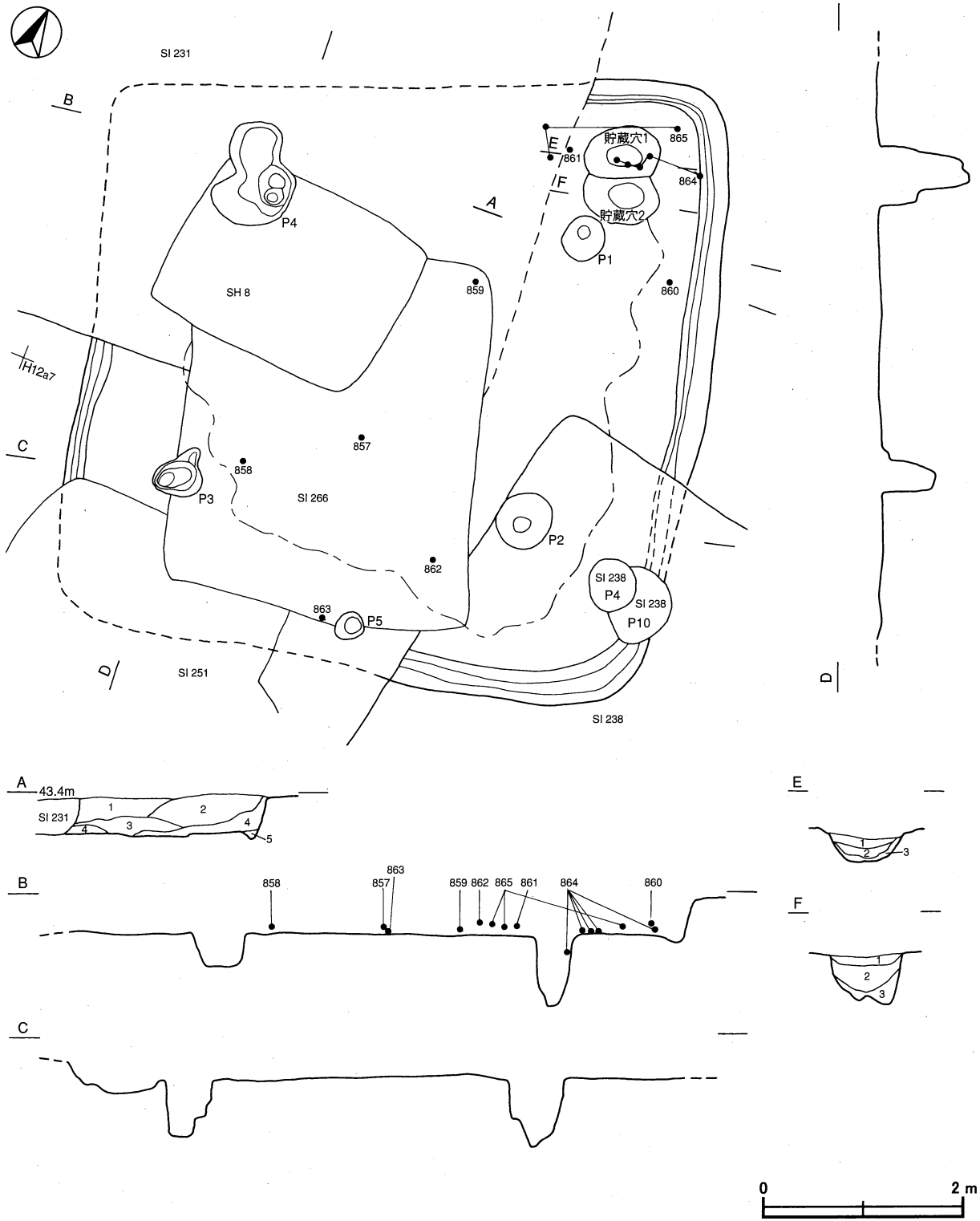
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
849	土師器	坏	[12.8]	4.7	-	赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内外面ヘラ磨き、口縁部横ナデ	北西部床面	70%

### 第233号住居跡（第182～184図）

**位置** 調査区北部のG12j7区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第231・238・251・266号住居、第8号方形竪穴遺構にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 壁は北東部と西部の一部で確認でき、一辺が6.0m前後の方形と推定される。主軸方向はN-20°-Wである。壁高は18～32cmで、やや外傾して立ち上がる。炉・竈については、重複によって掘り込まれているために不明である。



第182図 第233号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は東部で認められることから、周回していたものと思われる。

貯蔵穴 貯蔵穴1・2はいずれも北東部に付設され、貯蔵穴1が貯蔵穴2を掘り込んでいる。貯蔵穴1は長軸約70cm、短軸約50cmの隅丸長方形、深さ約30cmである。また、貯蔵穴2は長径約70cm、短径約50cmのほぼ楕円形、深さ約50cmで、覆土上層は固く締まっており、上面は貼床となっている。

貯蔵穴1土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量

貯蔵穴2土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

ピット 5か所。支柱穴はP1～P4が相当し、深さはP1が約90cmと深く、P2～P4は50～65cmである。P5は深さ15cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。

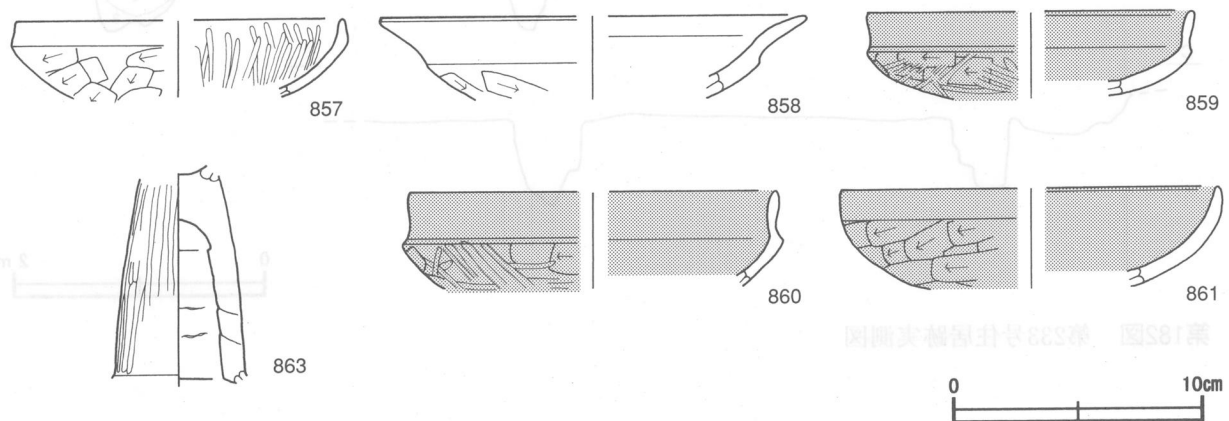
覆土 5層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

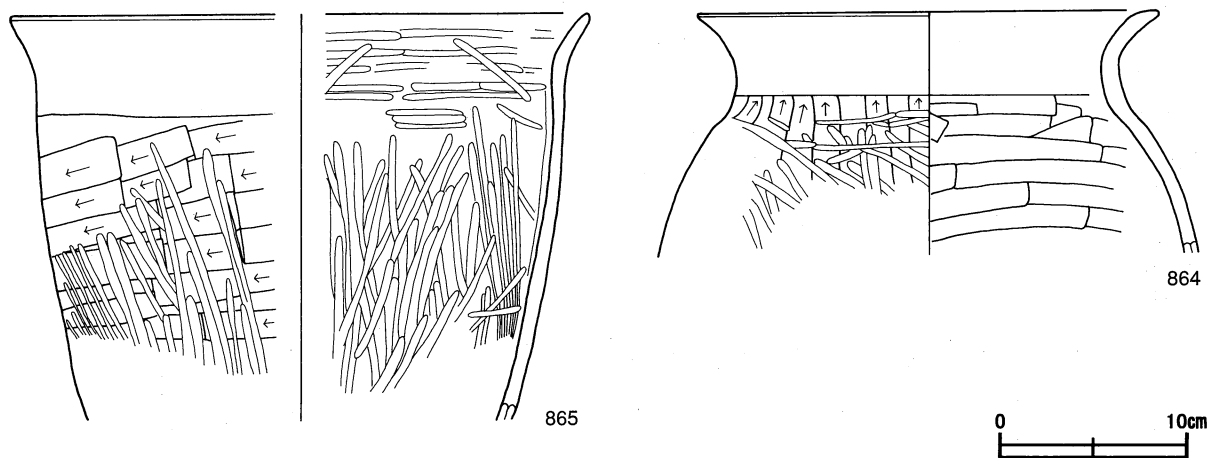
- 1 黒褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化物少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 黒色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 出土遺物は土器器片522点（坏205、甕309、高坏7、瓶1）、須恵器片8点（甕6、蓋2）、鉄製品1点（不明）、石器1点（砥石）、礫片6点がほぼ全域から散在した状態で出土している。857～859は中央部の覆土下層、860は東部の覆土下層、861は北東部の覆土下層、863は南部の床面からそれぞれ出土している。また、864は北東部の覆土下層と貯蔵穴の上・中層、865は北東部の覆土下層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。

所見 本跡は重複のために炉や竈を確認できないが、7世紀前葉に比定される第231B号住居跡に掘り込まれていることと、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第183図 第233号住居跡出土遺物実測図(1)



第184図 第233号住居跡出土遺物実測図(2)

第233号住居跡出土遺物観察表 (第183・184図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
857	土師器	坏	[13.0]	(3.0)	-	白色粒子	にぶい褐	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	中央部下層	10%
858	土師器	坏	[17.0]	(3.3)	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	体部内面ナデ, 口縁部横ナデ	中央部下層	10%
859	土師器	坏	[12.8]	(3.4)	-	雲母・石英	灰黄褐	普通	体部内面ナデ, 口縁部横ナデ	中央部下層	10%
860	土師器	坏	[14.6]	(3.8)	-	雲母・石英	浅黄	普通	体部内面ナデ, 口縁部横ナデ	東部下層	20%
861	土師器	坏	[15.0]	(3.9)	-	雲母・石英	灰褐	普通	体部内面ナデ, 口縁部横ナデ	北東部下層	10%
863	土師器	高坏	-	(8.6)	-	雲母・石英・白色粒子	にぶい褐	普通	脚部外面ヘラ磨き	南部床面	20%
864	土師器	甕	24.0	(12.6)	-	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部内面ヘラナデ	北東部下層	10%
865	土師器	甗	[30.6]	(21.5)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	体部内面ヘラ磨き	北東部下層	20%

### 第236号住居跡 (第185~187図)

**位置** 調査区北部のH12c9区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第113号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 一辺が8.0m前後の方形で、主軸方向はN-17°-Wである。壁高は13~17cmで、やや外傾して立ち上がる。東側に長さ約85cm、深さ約10cmの溝が2.2mの間隔で2本、西側に長さ約85cm、深さ約10cmの溝が1本認められ、間仕切り溝と考えられる。

**床** ほほ平坦で、南壁中央部付近に出入り口施設に伴うと考えられる土手状の高まりが認められ、この高まりの北側から中央部がよく踏み固められている。壁溝は周回している。

**竈** 北壁の中央部に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで約100cm、袖部幅約90cm、壁外への掘り込みは約15cmである。火床部は床面から深さ約10cmほど掘りくぼめ、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

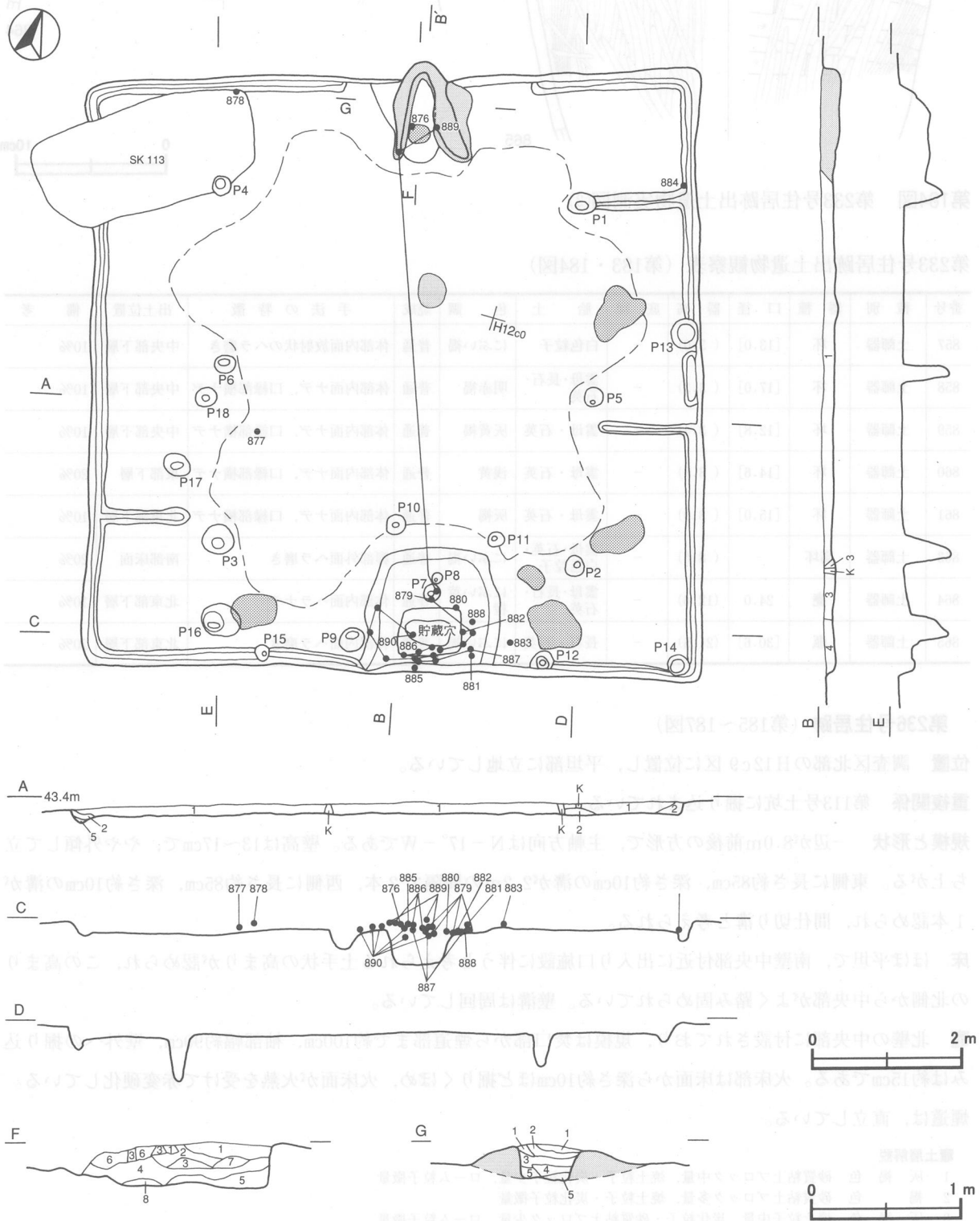
煙道は、直立している。

#### 竈土層解説

- 1 灰 褐 色 砂質粘土ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量
- 2 褐 色 砂質粘土ブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 灰 褐 色 焼土粒子中量, 炭化粒子・砂質粘土ブロック少量, ローム粒子微量
- 4 暗 褐 色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化物少量, 砂質粘土ブロック微量
- 5 褐 色 ロームブロック中量, 焼土粒子・ローム粒子微量

- 6 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 7 暗褐色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック中量、炭化物少量
- 8 赤褐色 焼土ブロック中量、炭化物少量

**貯蔵穴** 南壁中央部付近の出入口施設に伴うと考えられる土手状の高まりの内側に位置している。規模は長軸約60cm、短軸約45cmの長方形で、深さ約30cmである。



第185図 第236号住居跡実測図

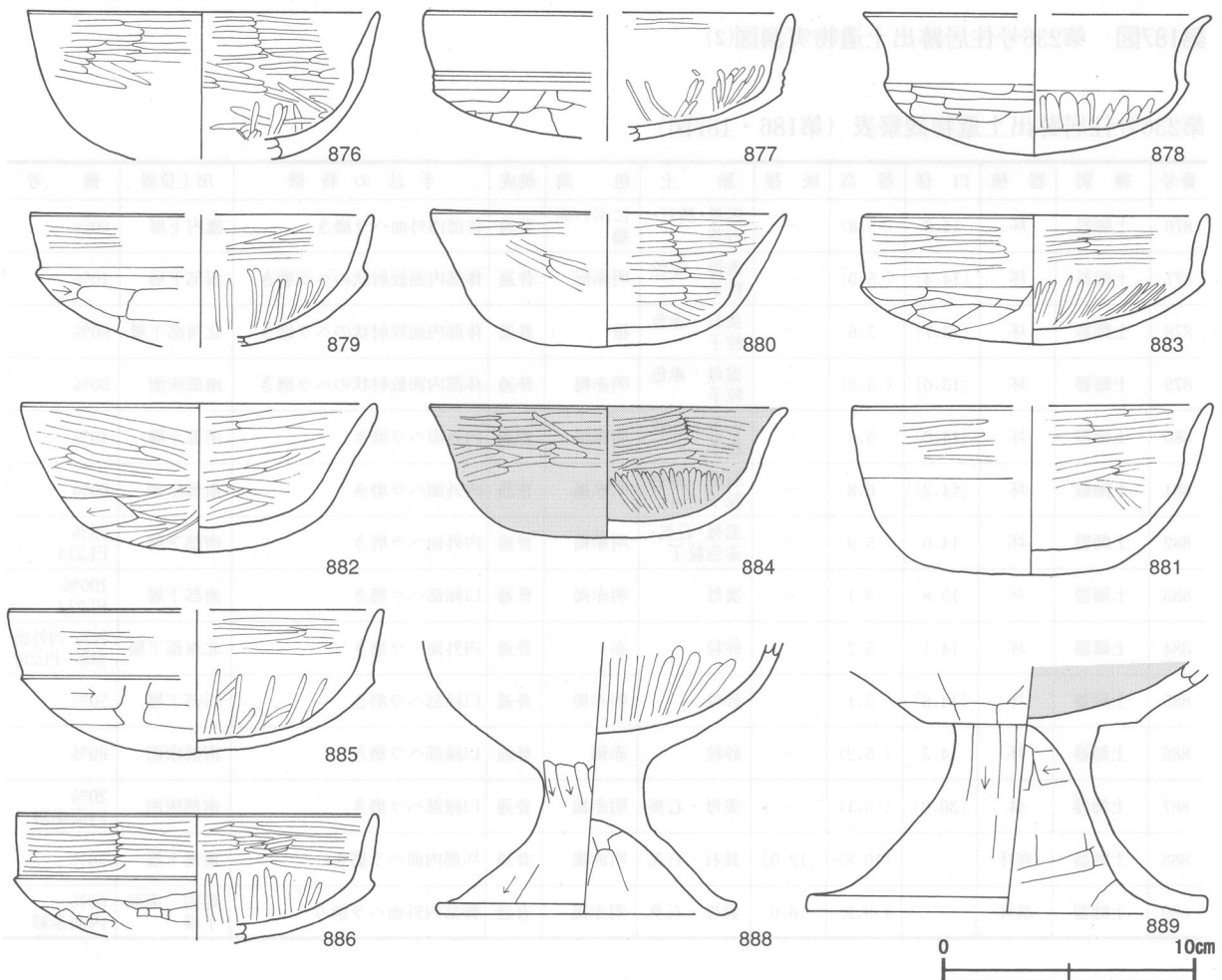
**ピット** 18か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは35～50cm、柱間寸法はいずれも3.6mを測り、規則的に配されている。P5・P6は深さ50cm前後で、主柱穴の間にそれぞれ位置し、補助的な柱穴と考えられる。また、P7・P8は深さ20cm前後で竈と対峙する位置にあり、P9～P12は深さ15～20cmで弧状の高まりの外周に位置し、それぞれ出入口施設に伴うピットと考えられる。さらに、P13～P15は深さ20cm前後で、壁柱穴と考えられる。

**覆土** 5層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 4 黒色 炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量

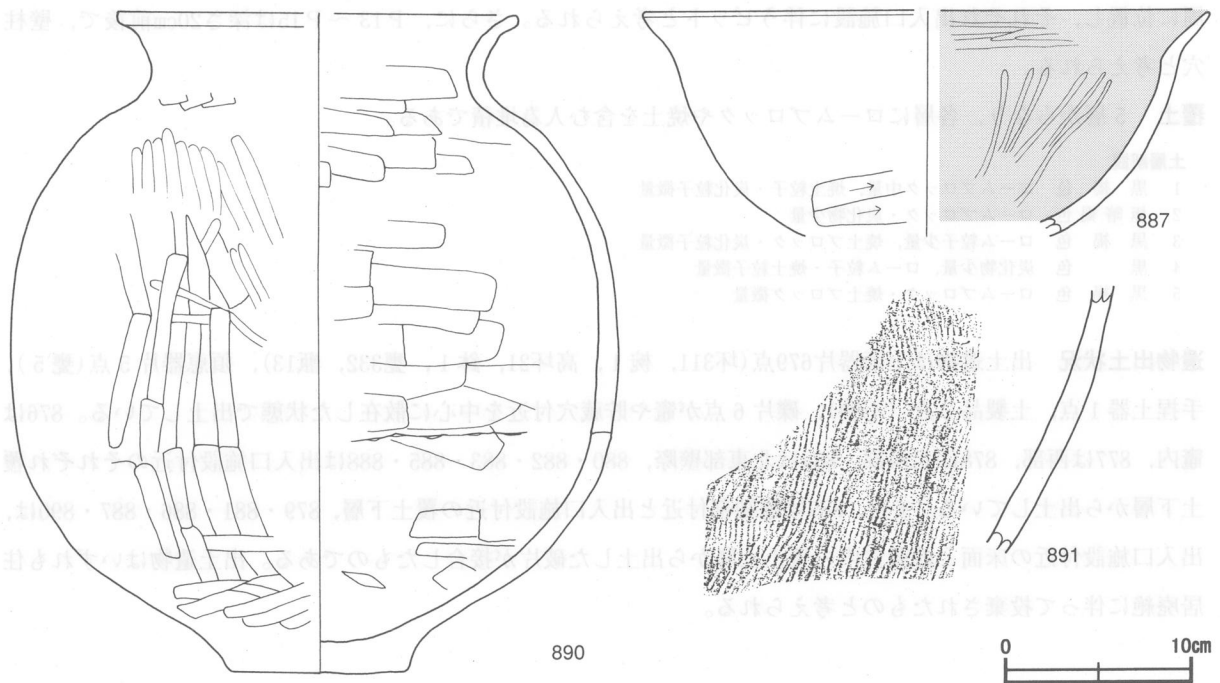
**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片679点(坏311, 椀1, 高坏21, 鉢1, 甕332, 甌13), 須恵器片5点(甕5), 手捏土器1点, 土製品2点(不明), 礫片6点が竈や貯蔵穴付近を中心に散在した状態で出土している。876は竈内, 877は西部, 878は北西部, 884は北東部壁際, 880・882・883・885・888は出入口施設付近のそれぞれ覆土下層から出土している。また, 889は竈袖部付近と出入口施設付近の覆土下層, 879・881・886・887・890は, 出入口施設付近の床面と貯蔵穴内の覆土上層から出土した破片が接合したものである。出土遺物はいずれも住居廃絶に伴って投棄されたものと考えられる。



第186図 第236号住居跡出土遺物実測図(1)



所見 本跡の時期は、遺構の形態と出土土器の形状から6世紀前葉と考えられ、東へ約17mに位置する第189号住居跡と同一の集落を構成していたことが想定される。



第187図 第236号住居跡出土遺物実測図(2)

第236号住居跡出土遺物観察表 (第186・187図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
876	土師器	坏	14.0	(5.8)	-	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部内外面ヘラ磨き	竈内下層	60%
877	土師器	坏	[14.4]	(5.0)	-	雲母・赤色	明赤褐	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	西部下層	40%
878	土師器	坏	[13.7]	5.6	-	長石・赤色	橙	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	北西部下層	60%
879	土師器	坏	[13.6]	(5.2)	-	雲母・赤色	明赤褐	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	南部床面	50%
880	土師器	坏	[14.0]	5.3	-	石英・赤色	明赤褐	普通	内外面ヘラ磨き	南部下層	40%
881	土師器	坏	[14.2]	6.8	-	石英・赤色	明赤褐	普通	内外面ヘラ磨き	南部床面	60%
882	土師器	坏	14.0	5.9	-	雲母・石英・赤色	明赤褐	普通	内外面ヘラ磨き	南部下層	95% PL214
883	土師器	坏	13.8	5.1	-	雲母	明赤褐	普通	口縁部ヘラ磨き	南部下層	100% PL214
884	土師器	坏	14.1	5.2	-	砂粒	赤	普通	内外面ヘラ磨き	北東部下層	70% 内外面 赤彩 PL214
885	土師器	坏	[14.8]	5.1	-	砂粒	明赤褐	普通	口縁部ヘラ磨き	南部下層	50%
886	土師器	坏	14.3	(5.2)	-	砂粒	赤褐	普通	口縁部ヘラ磨き	南部床面	60%
887	土師器	鉢	[30.0]	(5.1)	-	雲母・石英	明赤褐	普通	口縁部ヘラ磨き	南部床面	20% 内面赤彩
888	土師器	高坏	-	(10.8)	[12.0]	長石・石英	明赤褐	普通	坏部内面ヘラ磨き	南部下層	50%
889	土師器	高坏	-	(9.9)	16.0	雲母・石英	明赤褐	普通	脚部内外面ヘラ削り	竈内・南部 下層	60% 内面赤彩

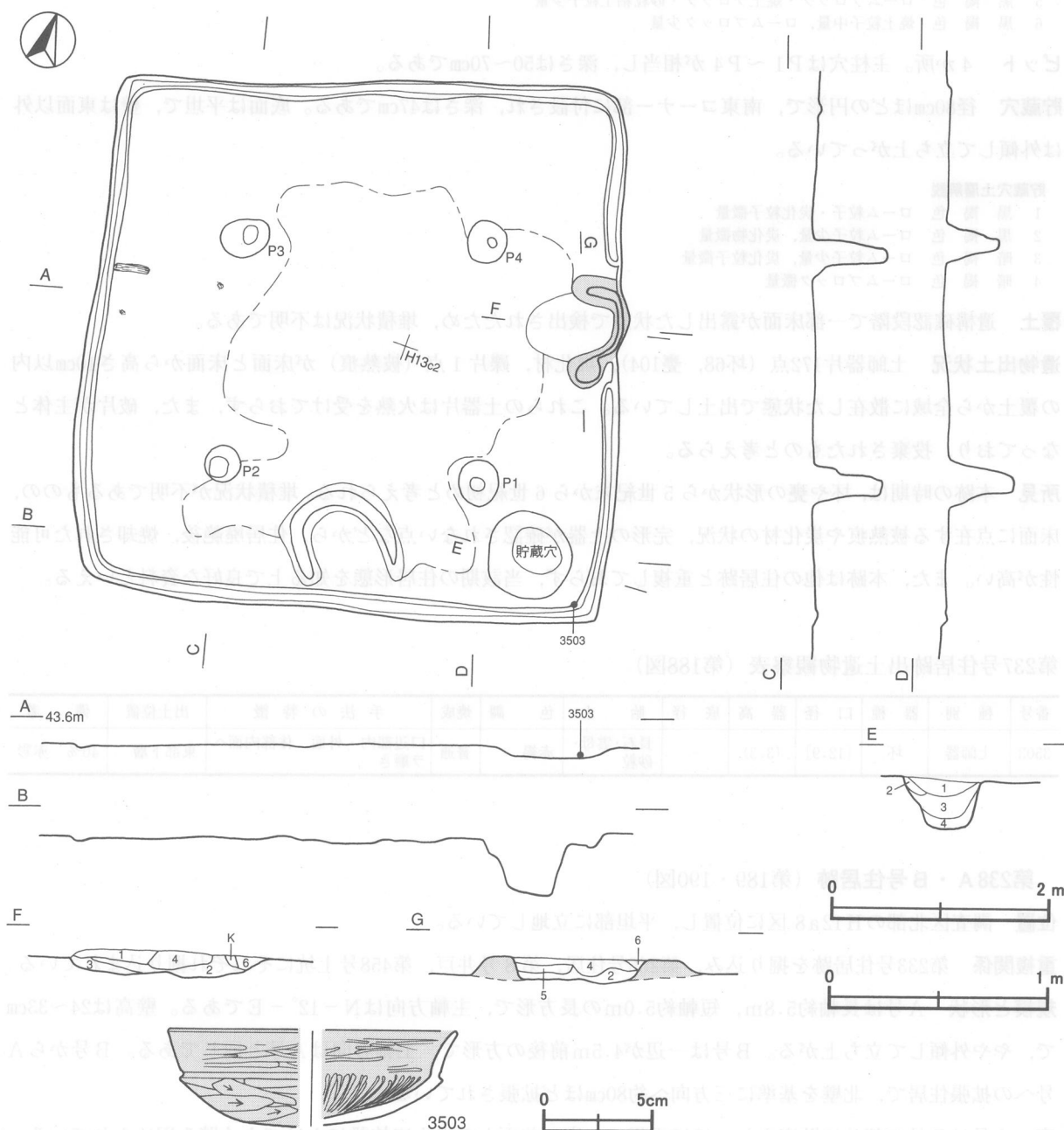


番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
890	土師器	甕	[20.4]	34.5	9.0	長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ	南部床面	40%
891	須恵器	甕	-	(14.1)	-	雲母・石英	黄灰	普通	縦位の平行叩き	覆土中	5%

### 第237号住居跡 (第188図)

位置 調査区北部のH13c1区に位置し、平坦部に立地している。

規模と形状 長軸5.0m、短軸4.9mの方形で、主軸方向はN-80°-Eである。壁高は10cmと低い。



第188図 第237号住居跡・出土遺物実測図

床 ほぼ平坦であるが南壁中央部付近に出入り口施設に伴うと考えられる土手状の高まりが認められ、この高まりの北側から中央部がよく踏み固められている。また、床面に火熱を受けた痕跡が認められ、壁溝は周回している。

竈 東壁の中央部に構築されているが、竈の大半が削平されており、検出できたのは火床面と袖部の一部だけである。左袖部は、地山を掘り残して芯材とし、その周囲にローム土混じりの砂質粘土を貼り付けて構築されている。また、煙道は外傾して立ち上がっている。

**竈土層解説**

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物少量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子多量
- 4 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂粒・粘土粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・砂粒粘土粒子少量
- 6 黒褐色 焼土粒子中量，ロームブロック少量

ピット 4か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは50～70cmである。

貯蔵穴 径80cmほどの円形で、南東コーナー部に付設され、深さは47cmである。底面は平坦で、壁は東面以外は外傾して立ち上がっている。

**貯蔵穴土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量，炭化物微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量

覆土 遺構確認段階で一部床面が露出した状態で検出されたため、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片172点（坏68，甕104），炭化材，礫片1点（被熱痕）が床面と床面から高さ10cm以内の覆土から全域に散在した状態で出土している。これらの土器片は火熱を受けておらず、また、破片が主体となっており、投棄されたものと考えらる。

所見 本跡の時期は、坏や甕の形状から5世紀末から6世紀初めと考えられる。堆積状況が不明であるものの、床面に点在する被熱痕や炭化材の状況、完形の土器が確認されない点などから、住居廃絶後、焼却された可能性が高い。また、本跡は他の住居跡と重複しておらず、当該期の住居形態を知る上で良好な資料といえる。

**第237号住居跡出土遺物観察表（第188図）**

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3503	土師器	坏	[12.9]	(3.3)	-	長石・雲母・砂粒	赤褐	普通	口辺部内・外面，体部内面へラ磨き	東部下層	40% 赤彩

**第238 A・B号住居跡（第189・190図）**

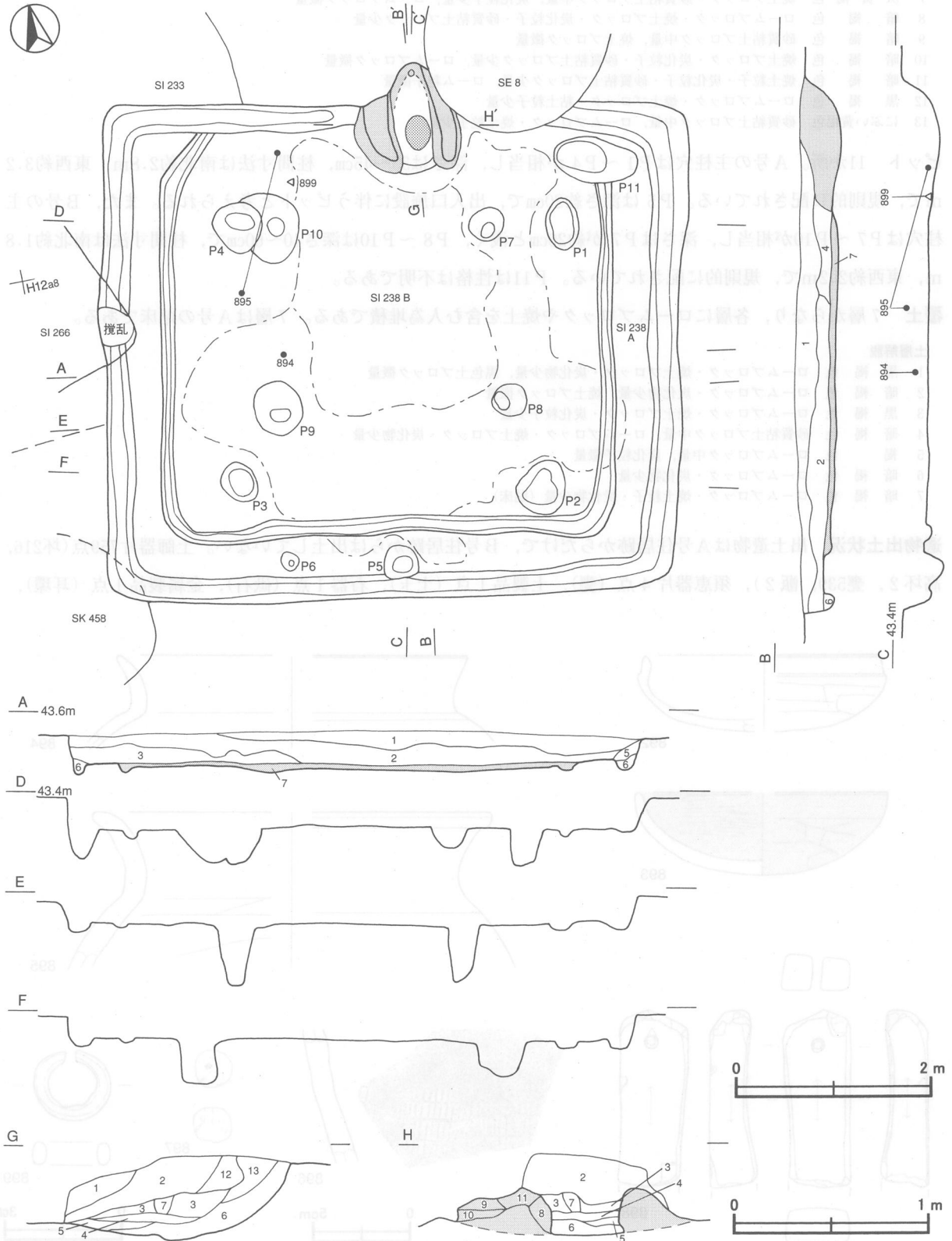
位置 調査区北部のH12a8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第233号住居跡を掘り込み、第266号住居，第8号井戸，第458号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 A号は長軸約5.8m，短軸約5.0mの長方形で、主軸方向はN-12°-Eである。壁高は24～33cmで、やや外傾して立ち上がる。B号は一辺が4.5m前後の方形で、主軸方向はA号と同じである。B号からA号への拡張住居で、北壁を基準に三方向へ約80cmほど拡張されている。

床 A号はB号の部分に貼床をし、ほぼ平坦で、竈の前面から出入口施設にかけてよく踏み固められている。壁溝は、周回している。また、B号は全面が地山のローム面を床面としており、中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁の中央部に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで約110cm、袖部幅約100cm、壁外への掘り込みは約40cmである。火床部は床面から深さ約10cmほど皿状に掘りくぼめ、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は緩やかに外傾して立ち上がっている。



第189図 第238A・B住居跡実測図

竈土層解説

- 1 黒褐色 色 ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量
- 2 黒褐色 色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量
- 3 暗褐色 色 粘土粒子中量, ロームブロック・焼土ブロック少量
- 4 黒褐色 色 灰中量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 色 焼土ブロック多量
- 6 黒褐色 色 灰中量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 灰黄褐色 色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック中量, 炭化粒子少量, ロームブロック微量
- 8 暗褐色 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
- 9 暗褐色 色 砂質粘土ブロック中量, 焼土ブロック微量
- 10 暗褐色 色 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量, ロームブロック微量
- 11 暗褐色 色 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量, ローム粒子微量
- 12 黒褐色 色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量
- 13 にぶい黄褐色 色 砂質粘土ブロック中量, ロームブロック・焼土粒子少量

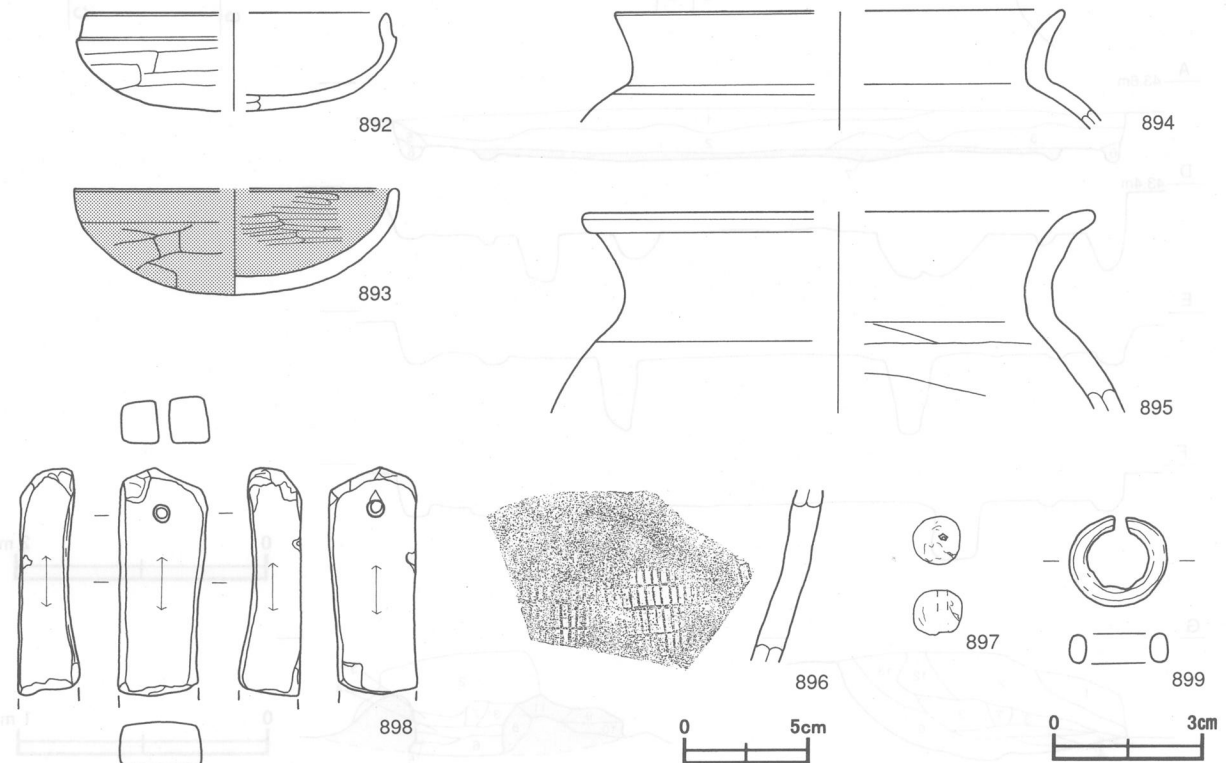
ピット 11か所。A号の主柱穴はP1～P4が相当し、深さは35～45cm、柱間寸法は南北約2.8m、東西約3.2mで、規則的に配されている。P5は深さ約20cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。また、B号の主柱穴はP7～P10が相当し、深さはP7が約20cmと浅く、P8～P10は深さ40～60cmで、柱間寸法は南北約1.8m、東西約2.2mで、規則的に配されている。P11は性格は不明である。

覆土 7層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。7層はA号の貼床である。

土層解説

- 1 黒褐色 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量, 黒色土ブロック微量
- 2 暗褐色 色 ロームブロック・炭化物少量, 焼土ブロック微量
- 3 黒褐色 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 色 砂質粘土ブロック中量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 5 褐色 色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 6 暗褐色 色 ロームブロック・炭化物少量
- 7 暗褐色 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量(貼床)

遺物出土状況 出土遺物はA号住居跡からだけで、B号住居跡からは出土していない。土師器片759点(坏216, 高坏2, 甕539, 甌2), 須恵器片4点(甕), 土製品1点(土玉), 石器1点(砥石), 金属製品1点(耳環),



第190図 第238A号住居跡出土遺物実測図

礫片1点がほぼ全域から散在した状態で出土している。894は中央部西寄りの覆土下層，892・893・896～898は覆土中，899は北西部の床面から出土している。また，895は北西部の覆土中層と覆土下層から出土した破片が接合したものである。

**所見** 本跡はB号からA号への作り替えが行われており，北側を基準に三方へ約80cmほど拡張され，比較的長期間にわたって使用されていたと思われる。時期は，出土土器の形状から6世紀前葉から中葉と考えられる。

第238A号住居跡出土遺物観察表（第190図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
892	土師器	坏	[12.0]	3.9	-	砂粒	赤	普通	口縁部横ナデ	覆土中	20%
893	土師器	坏	[12.6]	4.2	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ	覆土中	30%
894	土師器	甕	[17.8]	(4.7)	-	雲母・石英	明赤褐	普通	体部内面ヘラナデ，口縁部横ナデ	中央部下層	5%
895	土師器	甕	[20.0]	(8.0)	-	雲母・石英	褐灰	普通	体部内面ヘラナデ，口縁部横ナデ	北西部中層・床面	10%
896	須恵器	甕	-	(6.8)	-	雲母・赤色粒子	暗灰黄	普通	体部外面格子状叩き，内面ヘラナデ	覆土中	5%

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
897	土玉	0.8	1.0	0.2	0.53	雲母・石英・赤色粒子	片面穿孔	覆土中	PL258

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
898	砥石	(9.0)	3.6	2.4	(101.9)	凝灰岩	砥面4面，有孔	覆土中	PL266

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
899	耳環	2.0	1.8	0.6	5.45	銅	断面楕円形，鍍金	北西部床面	PL283

### 第240号住居跡（第191・192図）

**位置** 調査区北部のH13e1区に位置し，平坦部に立地している。

**重複関係** 第215・241号住居，第162号土坑，第15号溝にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 一辺が7.8m前後の方形で，主軸方向はN-12°-Wである。壁高は20～27cmで，やや外傾して立ち上がる。

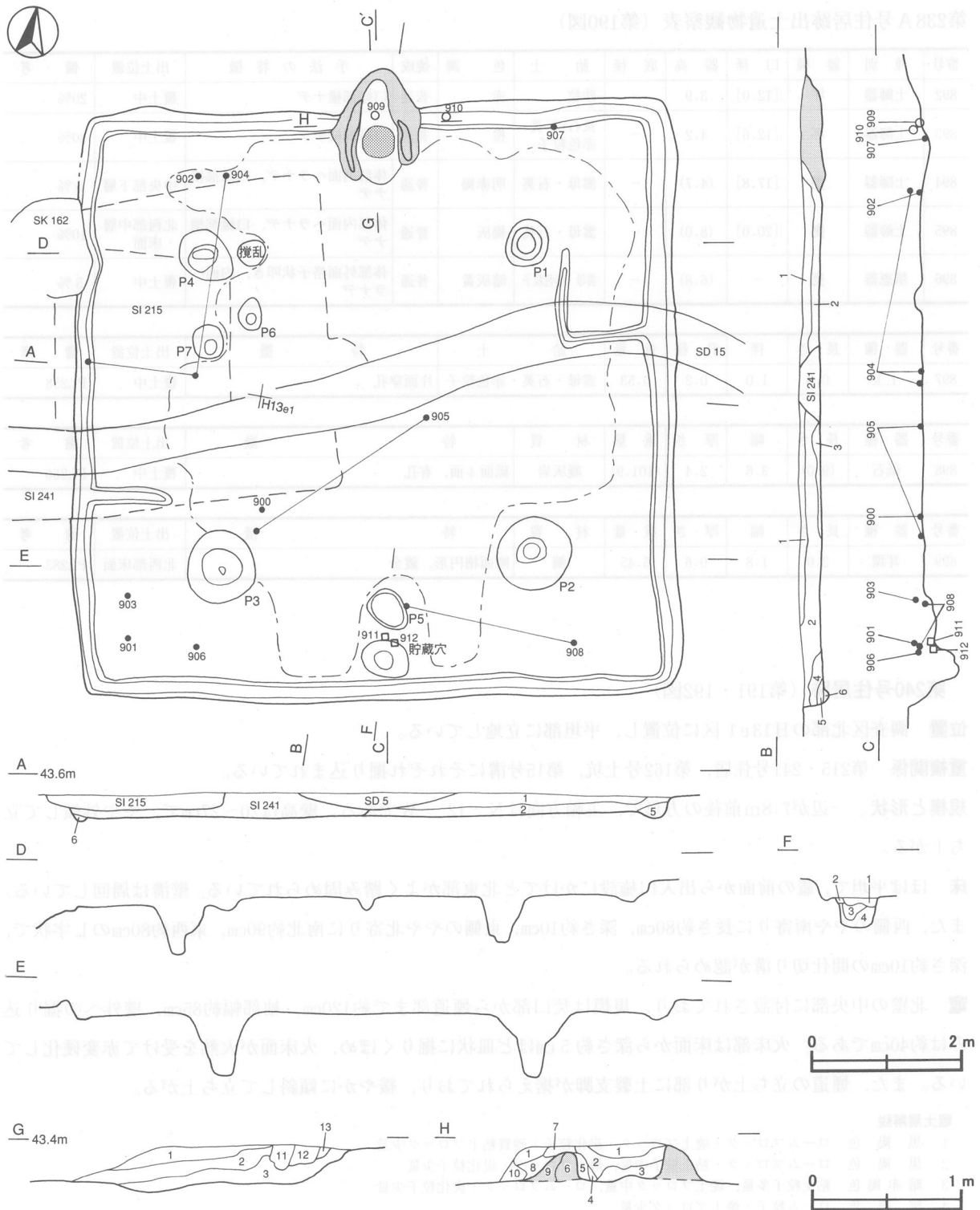
**床** ほぼ平坦で，竈の前面から出入口施設にかけてと北東部がよく踏み固められている。壁溝は周回している。また，西側のやや南寄りに長さ約80cm，深さ約10cm，東側のやや北寄りに南北約90cm，東西約80cmのL字状で，深さ約10cmの間仕切り溝が認められる。

**竈** 北壁の中央部に付設されており，規模は焚口部から煙道部まで約120cm，袖部幅約85cm，壁外への掘り込みは約40cmである。火床部は床面から深さ約5cmほど皿状に掘りくぼめ，火床面が火熱を受けて赤変硬化している。また，煙道の立ち上がり部に土製支脚が据えられており，緩やかに傾斜して立ち上がる。

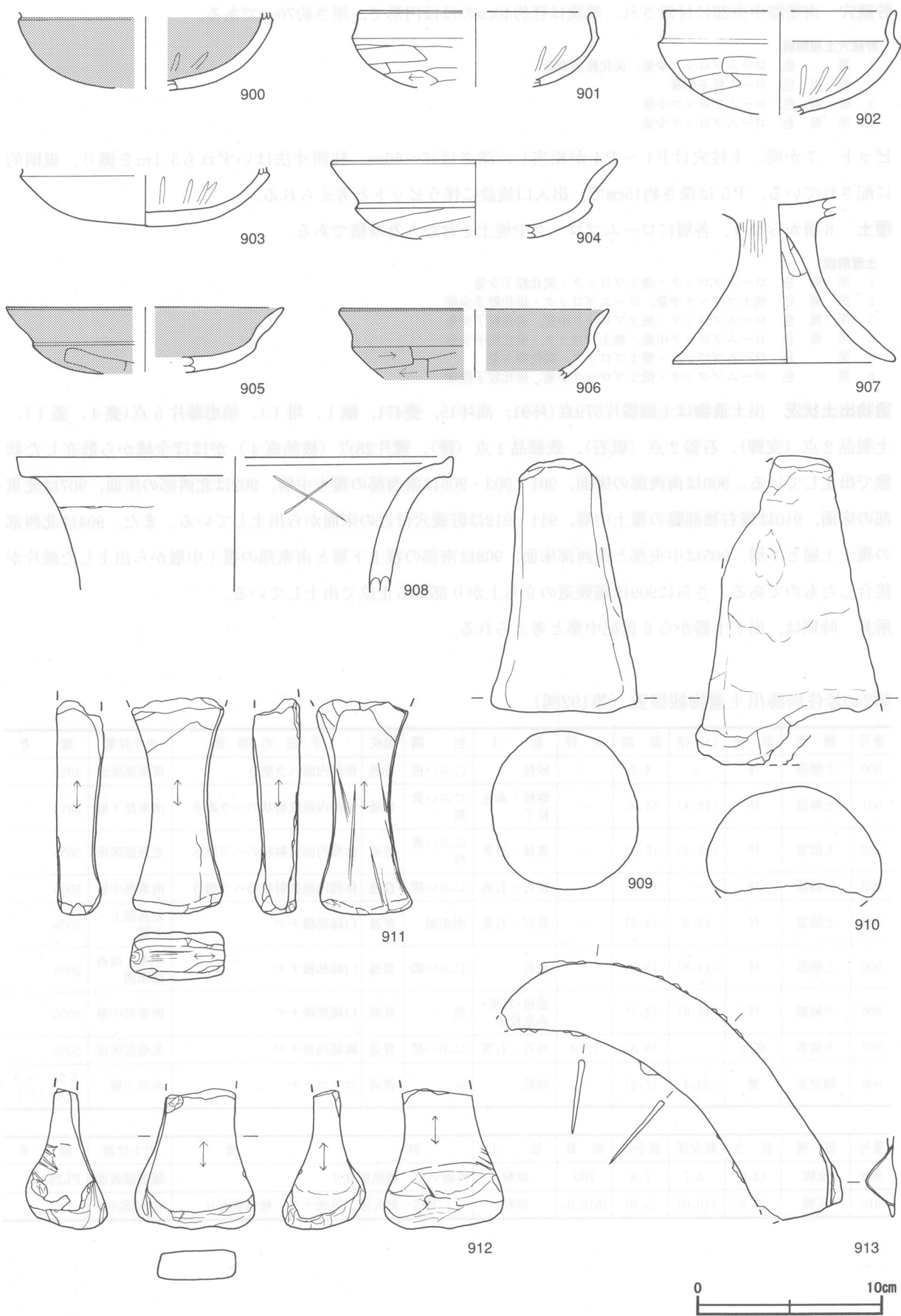
#### 竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・粘土粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 粘土粒子多量，焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量
- 5 暗赤褐色 粘土粒子中量，ローム粒子・焼土ブロック少量

- 6 黒褐色 粘土粒子多量, ロームブロック・焼土ブロック少量
- 7 黒褐色 粘土粒子中量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 8 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 9 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 10 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量
- 11 暗赤褐色 砂質粘土ブロック・焼土ブロック中量, 炭化粒子少量
- 12 暗赤褐色 焼土ブロック多量, 炭化粒子少量, ローム粒子微量
- 13 黒褐色 炭化粒子中量, 焼土ブロック少量, ローム粒子微量



第191図 第240号住居跡実測図



第192図 第240号住居跡出土遺物実測図

貯蔵穴 南壁際中央部に付設され、規模は径約40cmのほぼ円形で、深さ約70cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量

ピット 7か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは45～66cm、柱間寸法はいずれも3.1mを測り、規則的に配されている。P5は深さ約15cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 6 黒色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片579点(坏91, 高坏15, 甕471, 甗1, 埴1), 須恵器片5点(甕4, 蓋1), 土製品2点(支脚), 石器2点(砥石), 鉄製品1点(鎌), 礫片28点(被熱痕4)がほぼ全域から散在した状態で出土している。900は南西部の床面, 901・903・906は南西部の覆土中層, 902は北西部の床面, 907は北東部の床面, 910は竈右袖部脇の覆土中層, 911・912は貯蔵穴付近の床面から出土している。また, 904は北西部の覆土上層と下層, 905は中央部と南西部床面, 908は南部の覆土下層と南東部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。さらに909は竈煙道の立ち上がり部から正位で出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。

第240号住居跡出土遺物観察表 (第192図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
900	土師器	坏	-	4.2	-	砂粒	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き	南東部床面	40%
901	土師器	坏	[12.4]	(4.0)	-	砂粒・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	南東部下層	30%
902	土師器	坏	[12.4]	(5.5)	-	雲母・石英	にぶい黄橙	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	北西部床面	30%
903	土師器	坏	-	(3.0)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	南東部中層	50%
904	土師器	坏	15.3	(4.2)	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部横ナデ	北西部上・下層	50%
905	土師器	坏	[14.8]	(3.5)	-	長石	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ	中央・南西部床面	20%
906	土師器	坏	[14.6]	(3.7)	-	雲母・石英・赤色粒子	黒	普通	口縁部横ナデ	南東部中層	20%
907	土師器	高坏	-	(8.8)	12.0	長石・石英	にぶい橙	普通	脚部内面ナデ	北東部床面	50%
908	須恵器	甕	[23.4]	(7.3)	-	砂粒	灰	普通	ロクロナデ	南部下層	5% ヘラ記号「×」

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
909	支脚	13.0	8.7	7.8	700	砂粒	外面ナデ, 被熱痕有り	煙道部底面	PL263
910	支脚	16.6	(10.0)	(5.0)	(612.0)	砂粒	上・下部一部欠損, 外面ナデ, 被熱痕有り	右袖部脇中層	



番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
911	砥石	(11.6)	(5.1)	2.6	(201.0)	凝灰岩	砥面5面	南部床面	PL266
912	砥石	(7.6)	6.4	4.4	(215.0)	凝灰岩	砥面4面, 上部欠損	南部床面	PL281

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
913	鎌	(20.4)	15.8	2.7	(114.8)	鉄	先端部・柄付部一部欠損	覆土中	PL281

### 第243号住居跡 (第193・194図)

**位置** 調査区北部のH12f9区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第241・283号住居、第191号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸が約6.0m、短軸が約5.8mの方形で、主軸方向はN-16°-Wである。壁高は約16cmで、ほぼ直立して立ち上がる。南西部は調査区域外のために確認できない。

**床** ほぼ平坦で、南壁の中央部に出入口施設に伴う弧状の高まりが認められ、この高まりの北側から中央部がよく踏み固められている。また、中央部には径約70cmのほぼ円形で、深さ約10cm、底面は皿状を呈する。硬化部分が認められるが、性格については不明である。壁溝は周回している。

**竈** 北壁の中央部に付設されているが遺存状態は悪く、袖部の一部が残るだけである。規模は焚口部から煙道部まで約100cm、袖部幅約100cm、壁外への掘り込みは約10cmである。火床部は床面から深さ約5cmほど皿状に掘りくぼめ、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道はほぼ直立して立ち上がる。

#### 竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量
- 5 黒褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量, 炭化粒子少量
- 8 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量
- 9 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

**貯蔵穴** 長径約90cm、短径約70cmの楕円形で、南東コーナー部に付設され、深さ約40cmである。

#### 貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

**ピット** 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは30～50cm、柱間寸法はいずれも3.3mを測り、規則的に配されている。P5は深さ20cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。

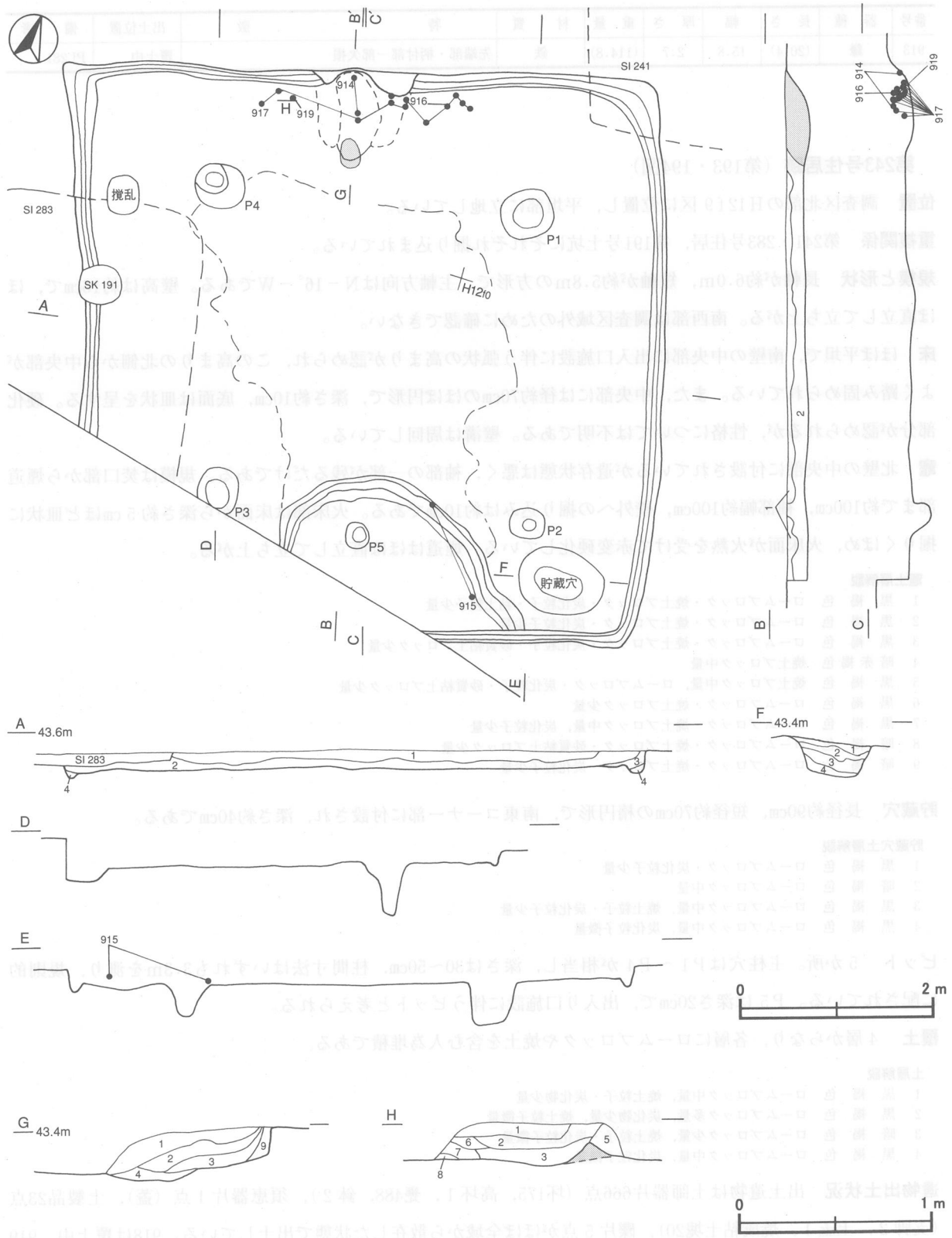
**覆土** 4層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

#### 土層解説

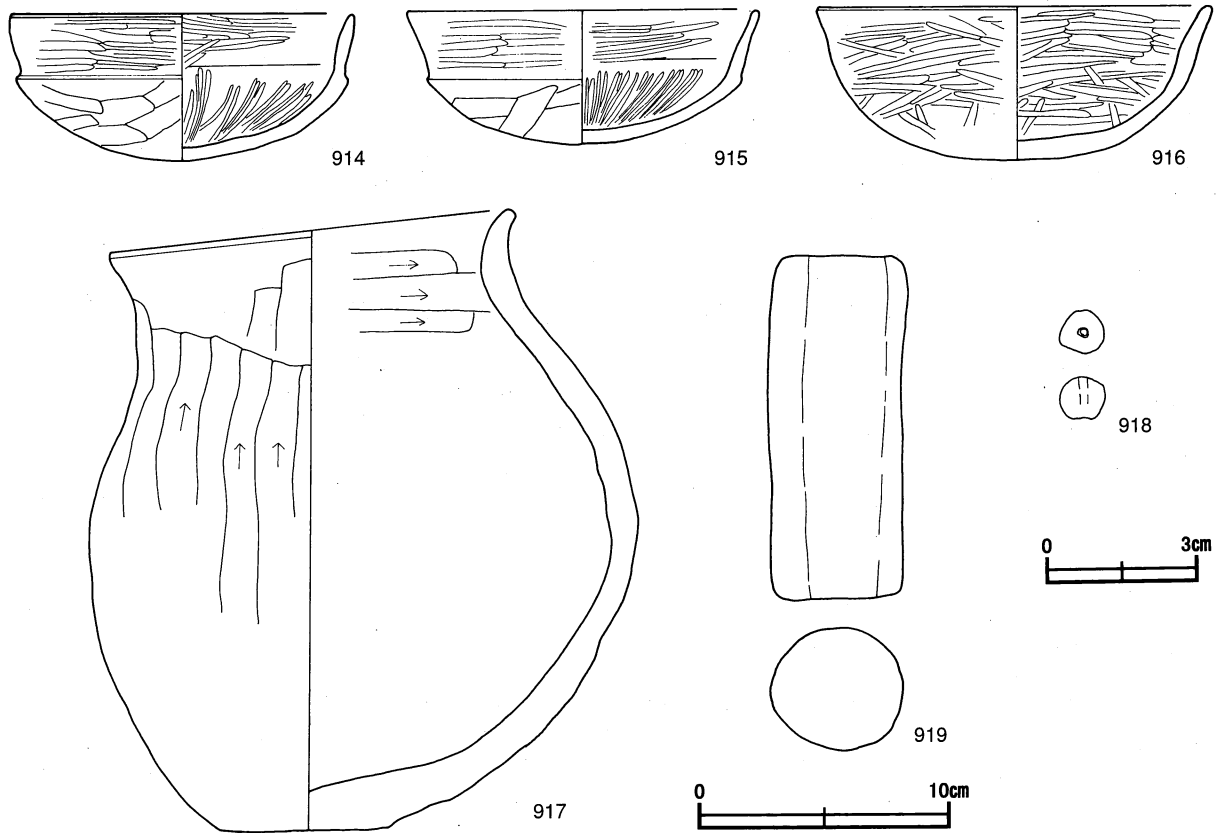
- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化物少量
- 2 黒褐色 ロームブロック多量, 炭化物少量, 焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片666点(坏175, 高坏1, 甕488, 鉢2), 須恵器片1点(蓋), 土製品23点(支脚2, 土玉1, 焼成粘土塊20), 礫片5点がほぼ全域から散在した状態で出土している。918は覆土中, 919は竈左袖部脇の床面から出土している。また, 914は竈内の覆土中層と煙道部底面, 915は南部の覆土下層, 916は竈右袖部付近の覆土中層, 917は竈内及び竈周辺の覆土下層から出土したものが接合したものである。

所見 本跡は竈を北壁の中央部、貯蔵穴を南東コーナー部に付設し、土手状の高まりを持つ出入口施設を備えるなど、形態的な特徴が顕著である。時期は、遺構の形態と出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第193図 第243号住居跡実測図



第194図 第243号住居跡出土遺物実測図

第243号住居跡出土遺物観察表 (第194図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
914	土師器	坏	13.4	5.8	-	雲母・赤色粒子	赤褐	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	竈内中層・底面	90% PL214
915	土師器	坏	13.8	5.3	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	赤褐	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	南部下層	100% PL214
916	土師器	坏	15.5	6.1	-	砂粒	赤褐	普通	内外面ヘラ磨き	竈左袖部中層	95% PL214
917	土師器	甕	16.0	25.6	6.4	角礫・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内外面ヘラ削り	竈付近下層	70%

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
918	土玉	0.8	0.9	0.2	0.5	雲母・石英・赤色粒子	片側穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
919	支脚	13.7	5.6	4.9	442	砂粒	外面丁寧なナデ, 円柱形	左袖部脇床面	

第245号住居跡 (第195・196図)

位置 調査区北部のH12e7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第171号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸が約3.0m、短軸が約2.8mのほぼ方形で、主軸方向はN-105°-Wである。壁高は16~22cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈 西壁の南寄りに付設されており、規模は焚口部から煙道部まで約60cm、袖部幅約50cm、壁外への掘り込みは約10cmである。火床面は火熱を受けた痕跡がほとんど認められない。煙道は緩やかに傾斜して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量
- 3 黒色 焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 6 褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量

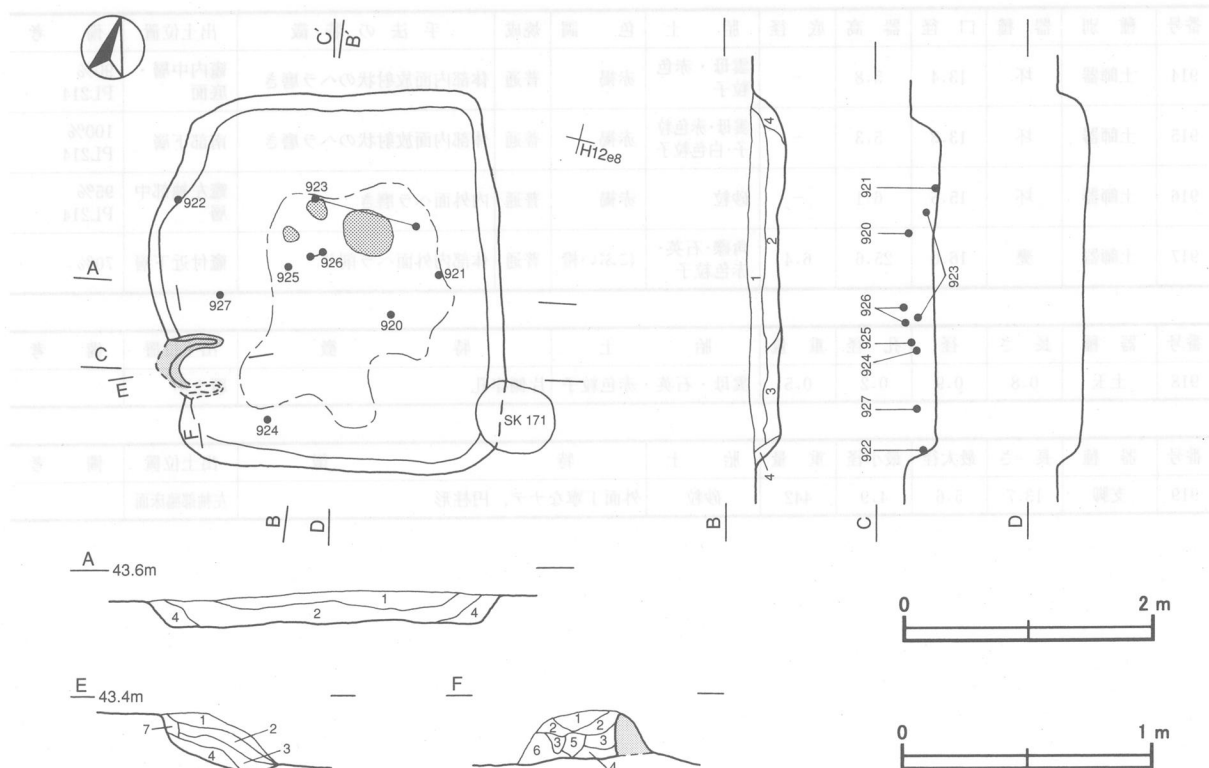
ピット 床面を精査したが、検出されなかった。

覆土 4層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒色 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量

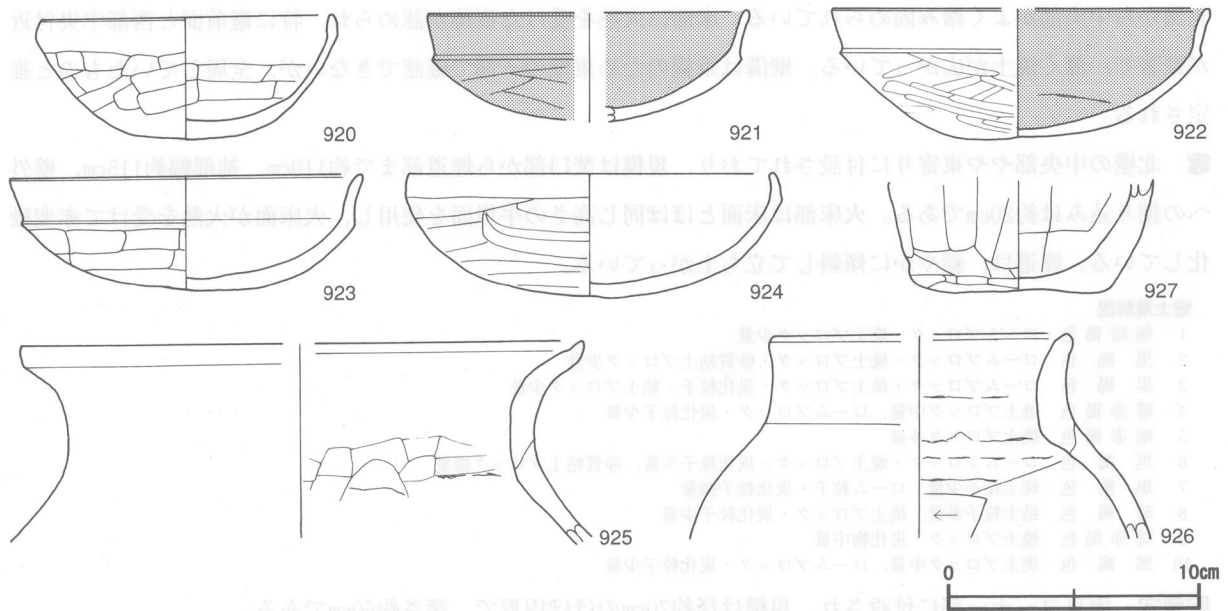
遺物出土状況 出土遺物は土師器片693点(坏197, 高坏5, 甕487, 甑3, 手捏土器1), 須恵器片3点(甕1, 蓋2), 土製品1点(支脚), 礫片14点がほぼ全域から散在した状態で出土している。920・925・926は中央部



第195図 第245号住居跡実測図

の覆土上層，921は東部の床面，922・927は西部の覆土下層，924は南西部の覆土中層からそれぞれ出土している。また，923は中央部の覆土中層と覆土下層から出土した破片が接合したものである。出土遺物のほとんどは，住居廃絶に伴って投棄されたものと考えられる。

所見 この時期としては小形の住居跡で，西壁のやや南寄りに竈を付設している例は本跡だけであり，火床面の状況から竈の使用頻度も低く，付属的施設と想定できる。時期は，出土土器の形状から6世紀後葉と考えられる。



第196図 第245号住居跡出土遺物実測図

第245号住居跡出土遺物観察表（第196図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
920	土師器	坏	11.4	4.9	4.7	長石・石英	明赤褐	二次焼成	体部内面ナデ，口縁部横ナデ	中央部上層	70%
921	土師器	坏	[12.7]	(4.3)	-	砂粒	にぶい褐	普通	体部外面ヘラナデ	東部床面	30%
922	土師器	坏	[14.8]	5.2	-	長石	橙	普通	口縁部横ナデ	西部下層	60%
923	土師器	坏	13.8	4.5	-	長石・石英	黒褐	普通	口縁部横ナデ	中央部中・下層	80%
924	土師器	坏	14.4	5.0	-	石英	橙	普通	体部外面ヘラナデ，口縁部横ナデ	南西部中層	100% PL218
925	土師器	甕	[22.4]	(8.2)	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部横ナデ	中央部上層	10%
926	土師器	甕	[11.8]	(8.2)	-	砂粒	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ	中央部上層	10%
927	土師器	手捏土器	-	(4.5)	7.6	長石	にぶい褐	普通	底部木葉痕	西部下層	80%

## 第248号住居跡（第197～199図）

**位置** 調査区北部のH12c5区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第249号住居跡を掘り込み、第244・247・259号住居、第257・461号土坑、第15号溝にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 一辺5.5m前後の方形で、主軸方向はN-4°-Eである。壁高は24～38cmで、やや外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、南壁中央部付近に出入口施設に伴うと考えられる土手状の高まりが認められ、この高まりの北側から中央部がよく踏み固められている。床面に火熱を受けた痕跡が認められ、特に竈前面と西部中央付近が顕著で、薄く焼土が広がっている。壁溝は重複のため東壁の一部で確認できないが、全周していたものと推定される。

**竈** 北壁の中央部やや東寄りに付設されており、規模は焚口部から煙道部まで約110cm、袖部幅約115cm、壁外への掘り込みは約20cmである。火床部は床面とほぼ同じ高さの平坦面を使用し、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は、緩やかに傾斜して立ち上がっている。

### 竈土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック多量
- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量、砂質粘土ブロック微量
- 7 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 8 暗褐色 粘土粒子多量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 9 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物中量
- 10 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量

**貯蔵穴** 南東コーナー部に付設され、規模は径約70cmのほぼ円形で、深さ約60cmである。

### 貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒色 ローム粒子・焼土ブロック少量
- 3 暗褐色 焼土粒子中量、ロームブロック少量
- 4 暗褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 6 黒色 ロームブロック・焼土ブロック少量

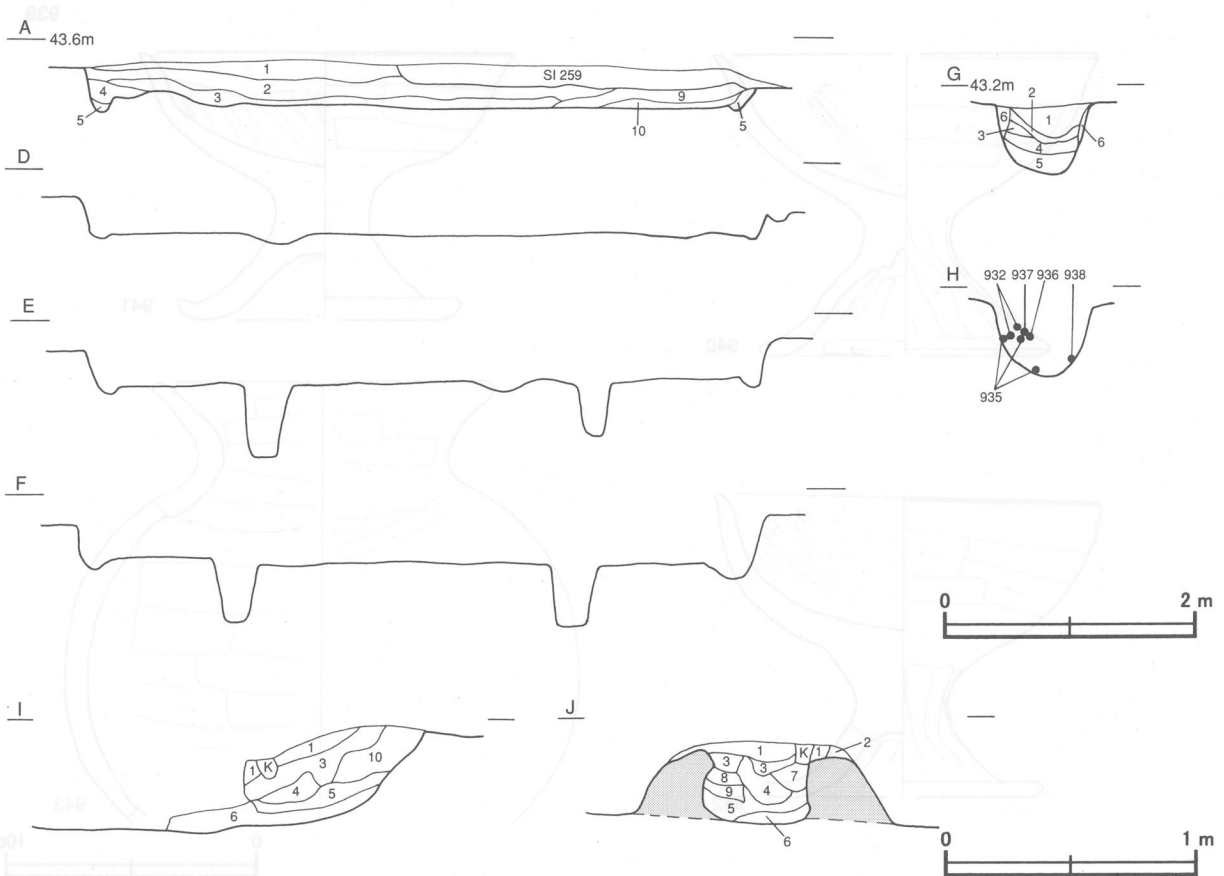
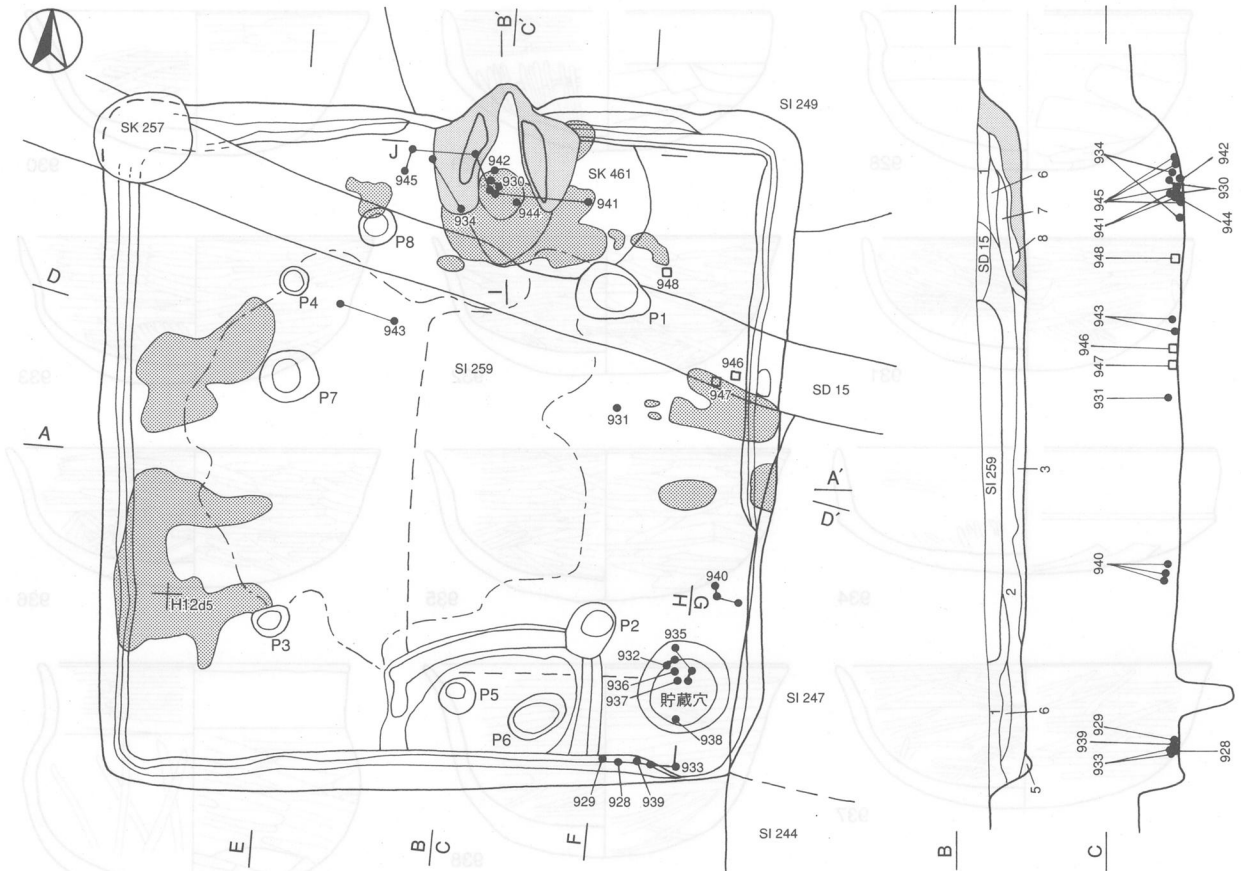
**ピット** 8か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは50～70cm、柱間寸法はいずれも2.6mを測り、規則的に配されている。また、P5・P6は深さ50cm・17cmで、竈に対峙した土手状の高まりの中に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 10層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

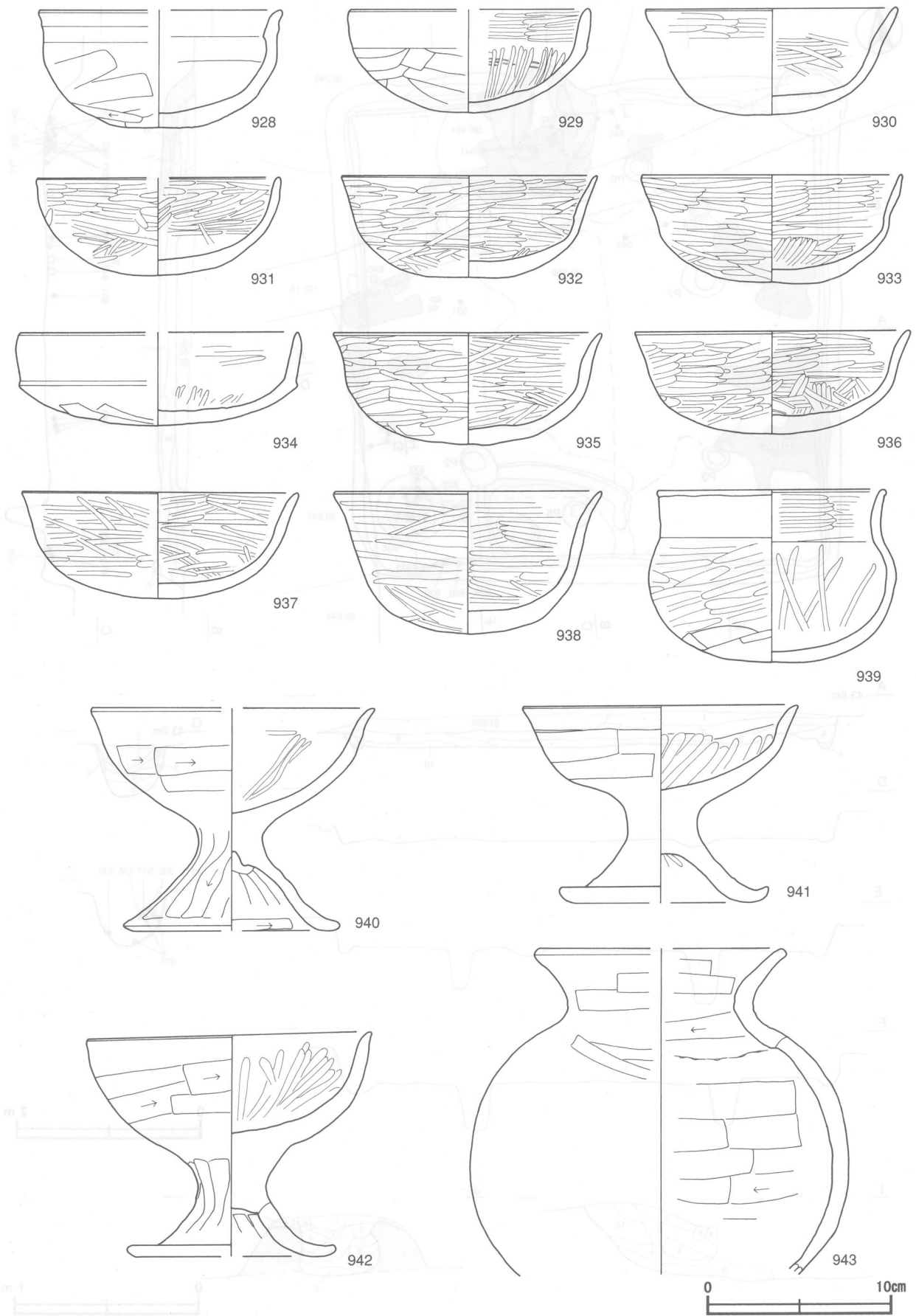
### 土層解説

- 1 黒色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量
- 6 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量
- 7 暗褐色 焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 8 暗褐色 砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 9 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 10 黒色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片883点（坏259、高坏26、椀1、甕562、甗35）、須恵器片4点（甕）、灰釉陶器片1点、土製品12点（支脚3、焼成粘土塊9）、石器3点（砥石）、礫片26点がほぼ全域から散在した状態で出土している。930は竈火床面から逆位で出土しており、火熱を受けていることから支脚として転用されたと考えられる。928・929・933・939は南東コーナー部の床面、936・937は貯蔵穴の覆土中層、934は竈左袖部、944

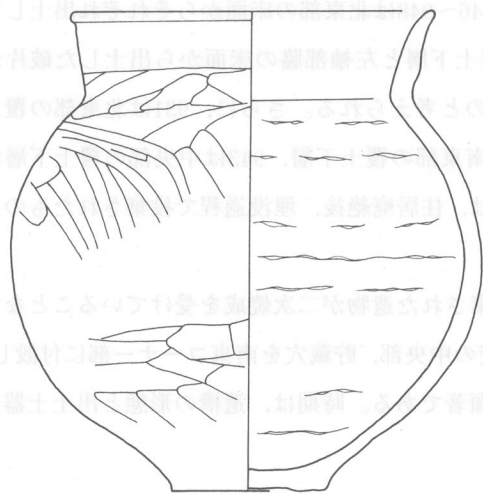


第197图 第248号住居跡実測図

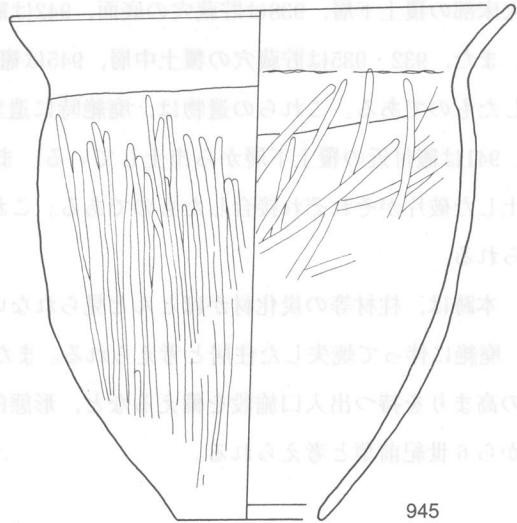


第198图 第248号住居跡出土遺物実測図(1)

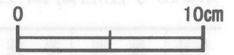




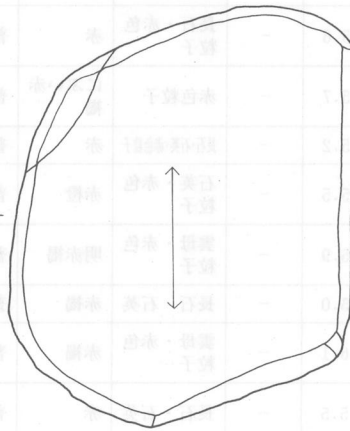
944



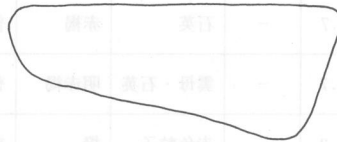
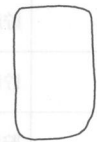
945



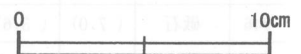
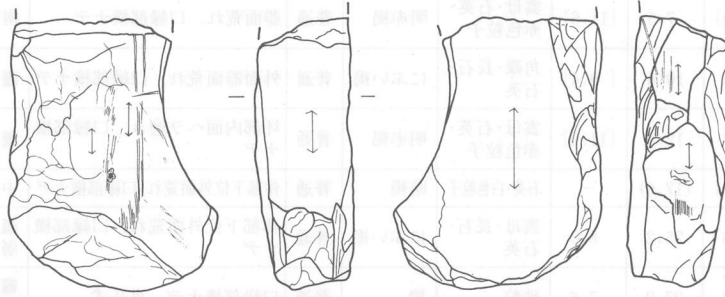
946



948



947



第199図 第248号住居跡出土遺物実測図(2)

は竈火床部の覆土下層, 938は貯蔵穴の底面, 942は竈火床面, 946~948は北東部の床面からそれぞれ出土している。また, 932・935は貯蔵穴の覆土中層, 945は竈火床部の覆土下層と左袖部脇の床面から出土した破片が接合したものである。これらの遺物は, 廃絶時に遺棄されたものと考えられる。さらに, 931は北東部の覆土下層, 941は竈付近の覆土下層から出土している。また, 940は南東部の覆土下層, 943は中央部の覆土下層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。これらの遺物は, 住居廃絶後, 埋没過程で投棄されたものと考えられる。

所見 本跡は, 柱材等の炭化材がほとんど見られないことや遺棄された遺物が二次焼成を受けていることなどから, 廃絶に伴って焼失した住居と考えられる。また, 竈を北壁の中央部, 貯蔵穴を南東コーナー部に付設し, 弧状の高まりを持つ出入口施設を備えるなど, 形態的な特徴が顕著である。時期は, 遺構の形態と出土土器の形状から6世紀前葉と考えられる。

第248号住居跡出土遺物観察表 (第198・199図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
928	土師器	坏	[13.0]	6.3	-	角礫・長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ	南東コーナー部床面	30%
929	土師器	坏	[12.9]	5.6	-	長石・赤色粒子	赤	普通	口縁部内面ヘラ磨き, 外面横ナデ	南東コーナー部床面	50%
930	土師器	坏	13.4	5.7	-	赤色粒子	にぶい赤褐	普通	器面荒れ, ヘラ磨き	竈火床面	100% PL214
931	土師器	坏	[13.0]	5.2	-	長石・石英・赤色粒子	赤	普通	内外面ヘラ磨き	北東部下層	50%
932	土師器	坏	13.7	5.5	-	石英・赤色粒子	赤橙	普通	内外面ヘラ磨き	貯蔵穴中層	95% PL214
933	土師器	坏	14.0	5.9	-	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	内外面ヘラ磨き	南東コーナー部床面	90% PL214
934	土師器	坏	[15.0]	5.0	-	長石・石英	赤褐	普通	器面荒れ, 口縁部横ナデ	左袖部内	30%
935	土師器	坏	14.5	6.1	-	雲母・赤色粒子	赤褐	普通	内外面ヘラ磨き	貯蔵穴中層	90% PL214
936	土師器	坏	14.8	5.5	-	長石・石英	赤	普通	内外面ヘラ磨き	貯蔵穴中層	100% PL215
937	土師器	坏	14.8	5.7	-	石英	赤褐	普通	内外面ヘラ磨き	貯蔵穴中層	100% PL215
938	土師器	坏	14.4	7.7	-	雲母・石英	明赤褐	普通	内外面ヘラ磨き	貯蔵穴底面	100% PL215
939	土師器	椀	12.2	9.3	-	赤色粒子	橙	普通	口縁部内面ヘラ磨き, 外面横ナデ	南東コーナー部床面	90% PL215
940	土師器	高坏	[15.0]	7.5	[11.6]	雲母・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	器面荒れ, 口縁部横ナデ	南東部下層	60%
941	土師器	高坏	14.6	10.6	[9.4]	角礫・長石・石英	にぶい褐	普通	外面器面荒れ, 口縁部横ナデ	竈付近下層	80% PL215
942	土師器	高坏	15.2	12.0	[11.2]	雲母・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	坏部内面ヘラ磨き, 口縁部横ナデ	竈火床面	90% PL215
943	土師器	甕	[13.0]	(17.6)	-	石英・白色粒子	暗褐	普通	体部下位外面荒れ, 口縁部横ナデ	中央部下層	30%
944	土師器	甕	18.8	25.2	8.0	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	体部下位外面荒れ, 口縁部横ナデ	竈火床部下層	90% PL216
945	土師器	甕	26.3	27.2	7.6	砂粒	橙	普通	口縁部横ナデ, 単孔式	竈火床部下層	50% PL215

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
946	砥石	(7.0)	(3.6)	(5.3)	(211.0)	凝灰岩	砥面1面, その他は破断面	北東部床面	
947	砥石	(10.7)	4.1	8.2	(471.0)	凝灰岩	砥面4面, その他は破断面	北東部床面	PL266
948	砥石	16.7	13.7	5.7	1680.0	砂岩	砥面2面, その他は自然面	北東部床面	

### 第249号住居跡 (第200図)

**位置** 調査区北部のH12b5区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第248・250・263号住居跡にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 南北軸は約5.0mで、東西軸は重複により約3.9mが確認できるだけで、平面形については不明であるが、方形と推定される。壁高は約5cmと低く、炉や竈についても確認できない。

**床** 硬化面や壁溝は認められない。

**炉・竈** 検出されなかった。

**ピット** 認められない。

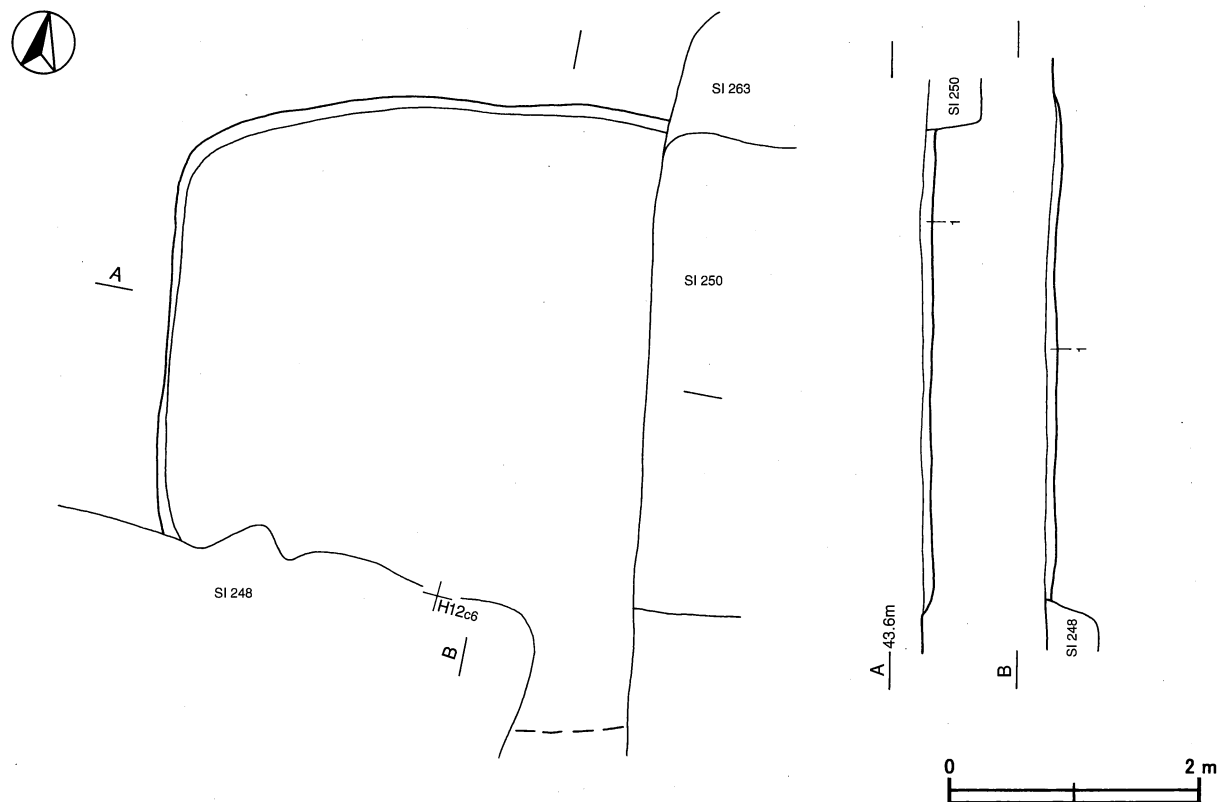
**覆土** 1層だけで、堆積状況については不明である。

#### 土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片45点(坏14, 甕30, 埴1), 土製品2点(瓦1, 轆羽口1), 礫片1点がほぼ全域から散在した状態で出土しているが、いずれも細片のために図示できない。また、土製品は住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。

**所見** 本跡の時期は、6世紀前葉に比定される第248号住居跡に掘り込まれていることから、6世紀前葉以前と考えられる。

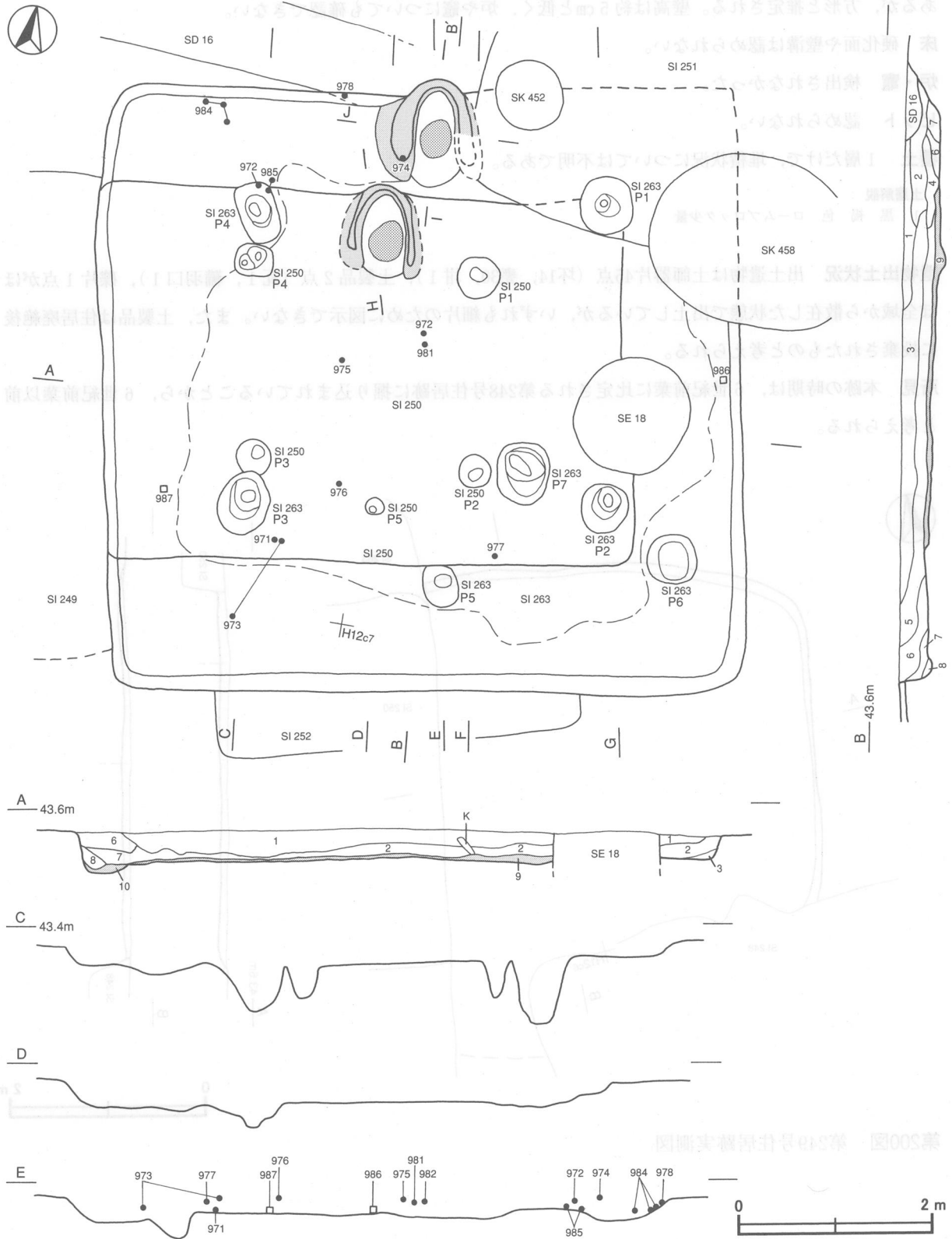


第200図 第249号住居跡実測図

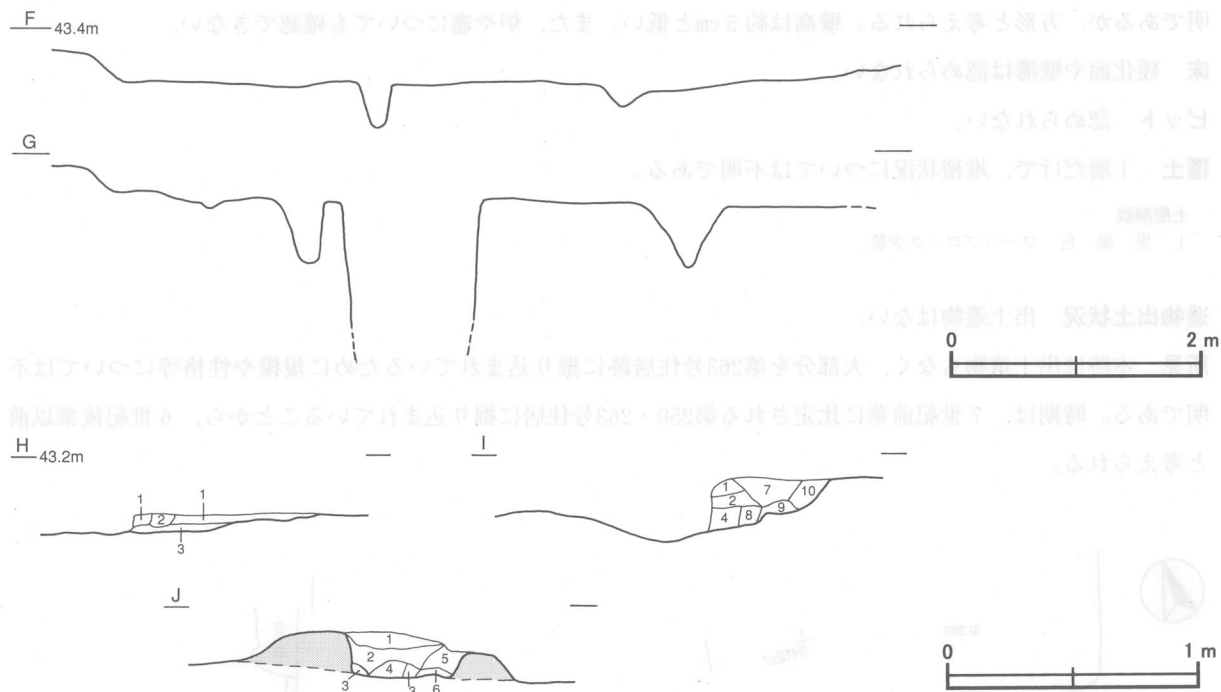
第250号住居跡 (第201・202図)

位置 調査区北部のH12b6区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第249・252号住居跡を掘り込み、第251・263号住居、第18号井戸にそれぞれ掘り込まれている。



第201図 第250・263号住居跡実測図(1)



第202図 第250・263号住居跡実測図(2)

**規模と形状** 第263号住居跡の床下から本跡の床面が確認されたため、壁の立ち上がりは不明である。長軸が約5.3m、短軸が約3.8mの長方形で、主軸方向はN-11°-Wである。

**床** 床の状況については、貼床をされていたために判然としない。壁溝は認められない。

**竈** 北壁の中央部に付設されているが、ほとんど遺存しておらず、袖部の一部と火床面が認められるだけである。火床部は床面と同じ高さの平坦面を使用し、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

**竈土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量

**ピット** 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは20～36cm、柱間寸法は南北2.0m、東西2.2mで、規則的に配されている。また、P5は深さ約26cmで、竈に対峙する位置にあり、出入口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 2層からなり、第263号住居跡の貼床である。

**土層解説**

- 9 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 10 黒褐色 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 出土遺物はない。

**所見** 本跡は第263号住居跡へと作り替えが行われており、西壁を基準に三方へ拡張されている。時期は、7世紀前葉に比定される第263号住居跡とほぼ同時期と考えられる。

**第252号住居跡 (第203図)**

**位置** 調査区北部のH12c7区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第250・263号住居に掘り込まれている。

**規模と形状** 東西軸は約3.7mで、南北軸は重複のため約0.5mだけが確認できただけで、平面形については不

明であるが、方形と考えられる。壁高は約5cmと低い。また、炉や竈についても確認できない。

床 硬化面や壁溝は認められない。

ピット 認められない。

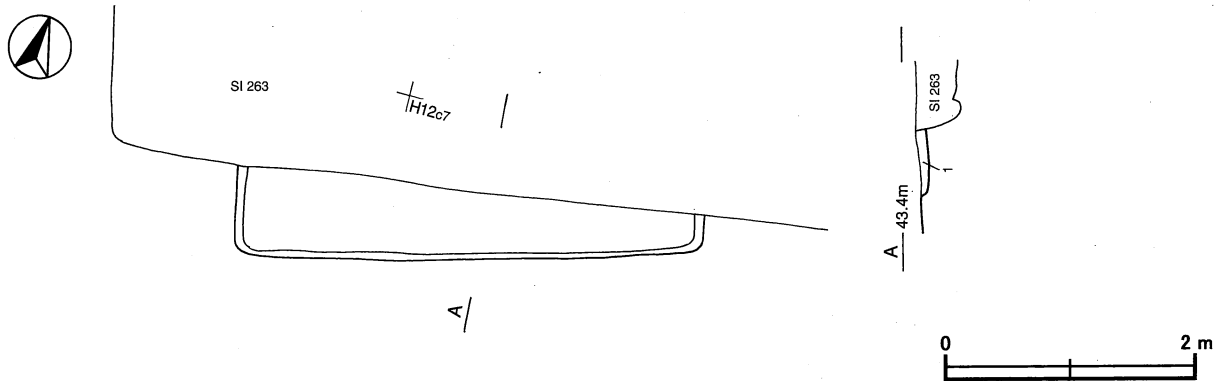
覆土 1層だけで、堆積状況については不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 出土遺物はない。

所見 本跡は出土遺物もなく、大部分を第263号住居跡に掘り込まれているために規模や性格等については不明である。時期は、7世紀前葉に比定される第250・263号住居に掘り込まれていることから、6世紀後葉以前と考えられる。



第203図 第252号住居跡実測図

第258号住居跡 (第204~207図)

位置 調査区北部のG12c7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第257号住居に掘り込まれている。

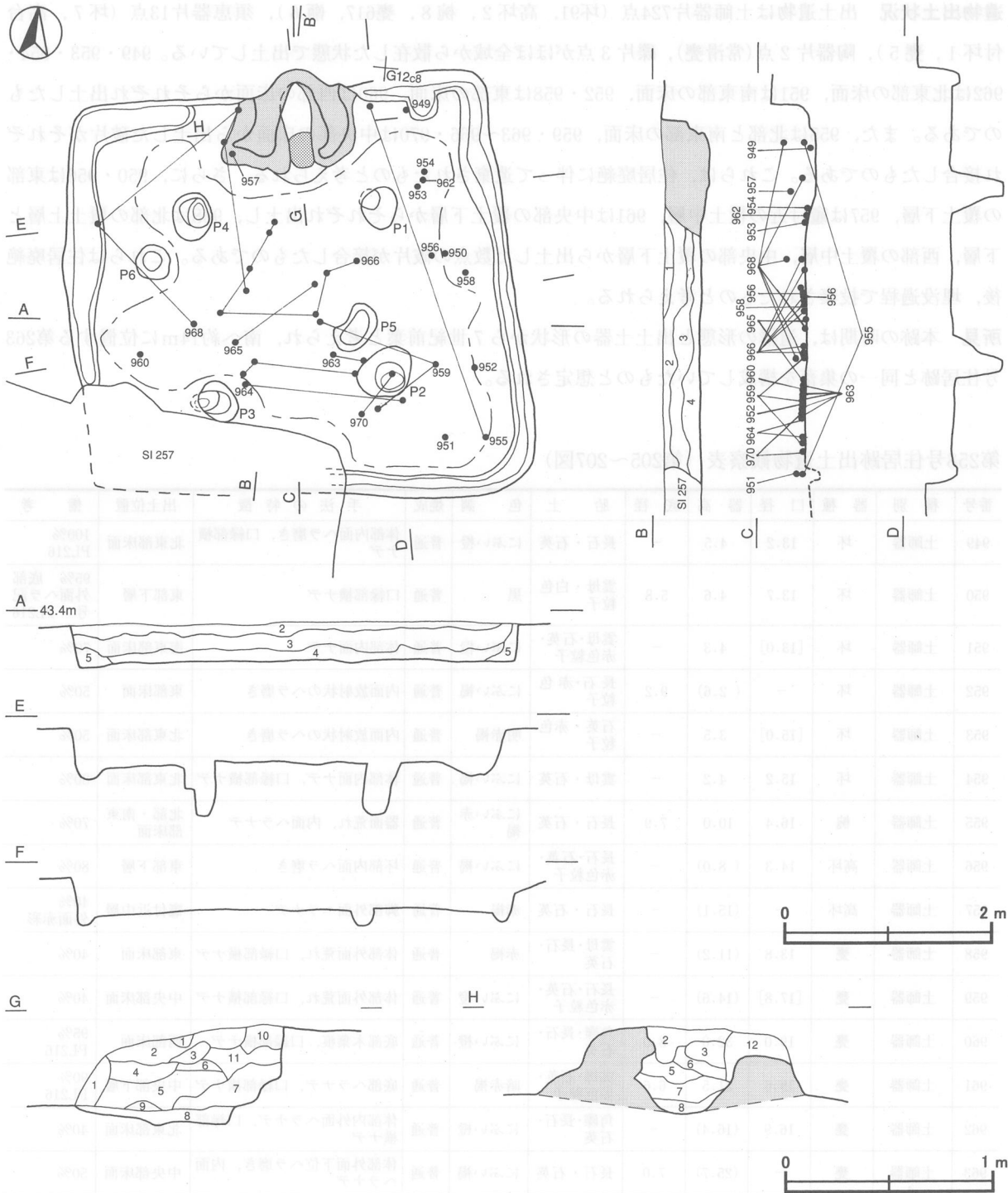
規模と形状 一辺4.1m前後の方形で、主軸方向はN-10°-Wである。壁高は17~35cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。壁溝は重複のために南西部が確認できないが、周回していたものと思われる。

竈 北壁の中央部に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで約110cm、袖部幅約120cm、壁外への掘り込みは約20cmである。火床部は床面から深さ約5cmほど皿状に掘りくぼめ、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は、ほぼ直立して立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 砂質粘土ブロック中量、炭化粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、砂質粘土ブロック微量
- 5 暗褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック・砂質粘土ブロック微量
- 8 灰黄褐色 砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 9 にぶい黄褐色 砂質粘土ブロック多量
- 10 灰黄褐色 砂質粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土ブロック少量
- 11 灰黄褐色 ローム粒子・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量
- 12 黒色 ロームブロック・焼土ブロック少量



第204図 第258号住居跡実測図

ピット 6か所。支柱穴はP1～P4が相当し、深さは50cm前後、柱間寸法はいずれも1.8mで、規則的に配されている。

覆土 5層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒色 炭化粒子中量，ロームブロック少量，砂質粘土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量，炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量，粘土粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

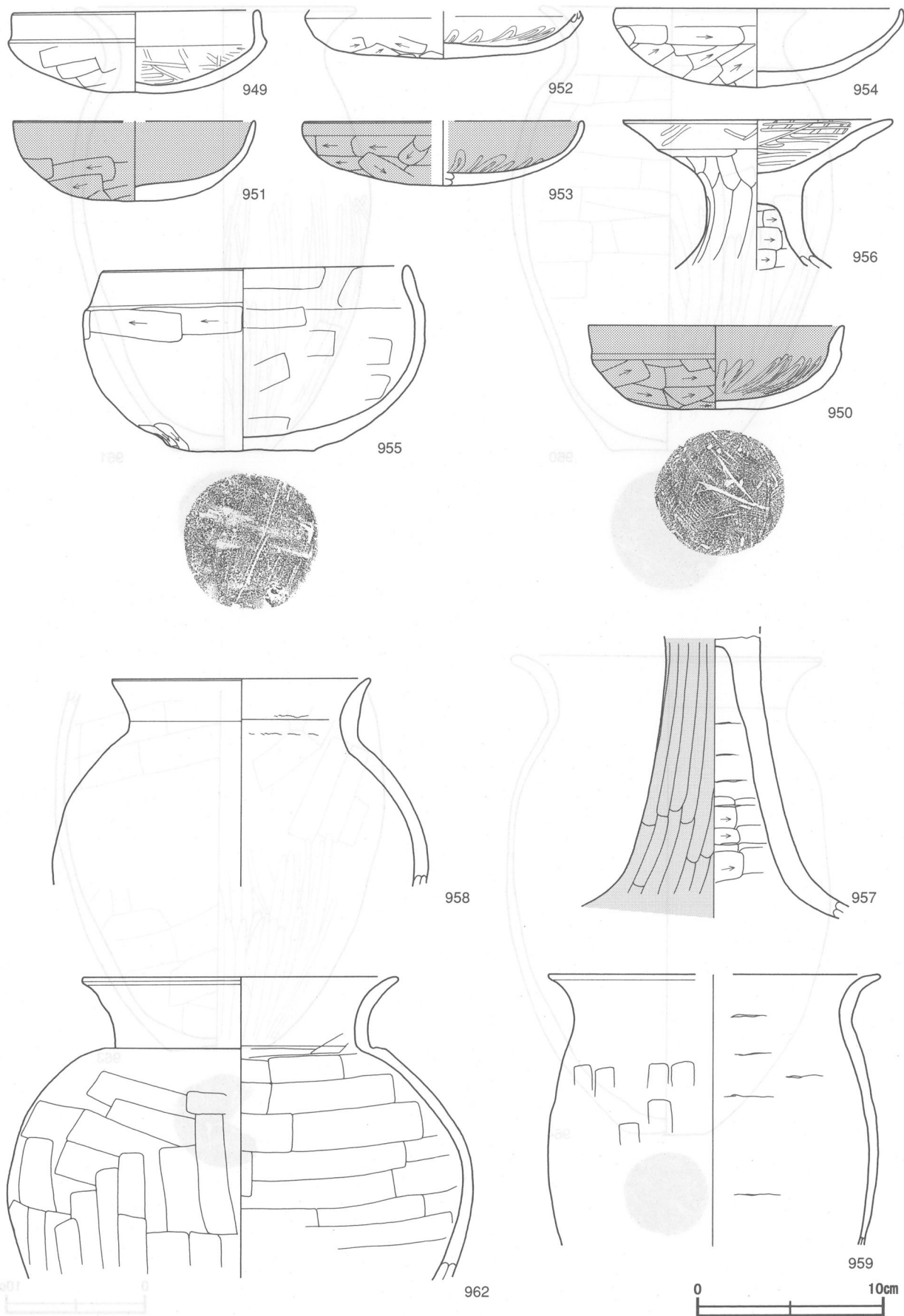
遺物出土状況 出土遺物は土師器片724点（坏91，高坏2，椀8，甕617，甗6），須恵器片13点（坏7，高台付坏1，甕5），陶器片2点（常滑甕），礫片3点がほぼ全域から散在した状態で出土している。949・953・954・962は北東部の床面，951は南東部の床面，952・958は東部の床面，960は西部の床面からそれぞれ出土したものである。また，955は北部と南東部の床面，959・963～966・970は中央部の床面から出土した破片がそれぞれ接合したものである。これらは，住居廃絶に伴って遺棄されたものと考えられる。さらに，950・956は東部の覆土下層，957は竈付近の覆土中層，961は中央部の覆土下層からそれぞれ出土し，968は北部の覆土上層と下層，西部の覆土中層，中央部の覆土下層から出土した数点の破片が接合したものである。これらは住居廃絶後，埋没過程で投棄されたものと考えられる。

所見 本跡の時期は，遺構の形態と出土土器の形状から7世紀前葉と考えられ，南へ約14mに位置する第263号住居跡と同一の集落を構成していたものと想定される。

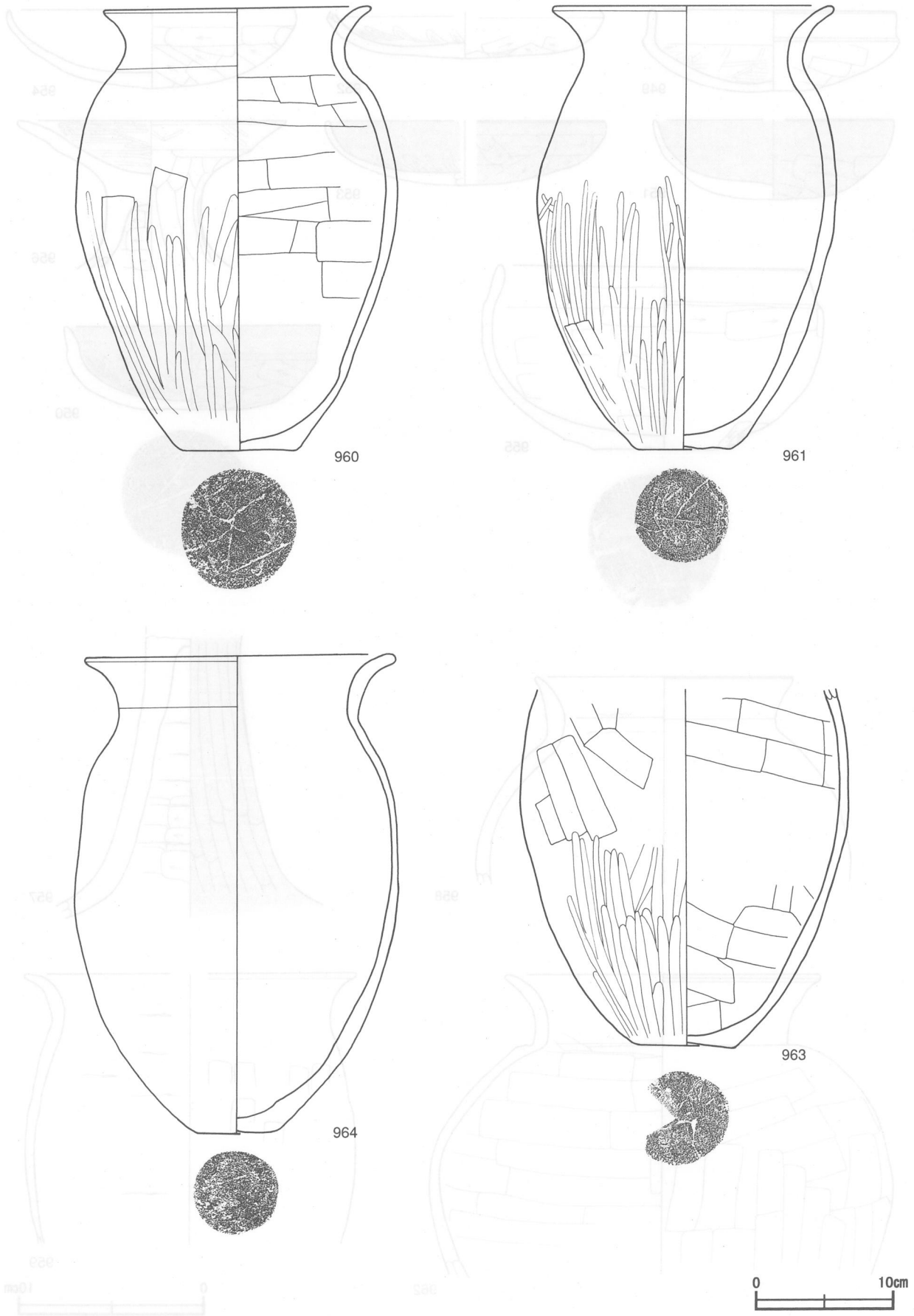
第258号住居跡出土遺物観察表（第205～207図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
949	土師器	坏	13.2	4.5	-	長石・石英	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き，口縁部横ナデ	北東部床面	100% PL216
950	土師器	坏	13.7	4.6	5.8	雲母・白色粒子	黒	普通	口縁部横ナデ	東部下層	95% 底部 外面ヘラ記 号 PL216
951	土師器	坏	[13.0]	4.3	-	雲母・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面ナデ	南東部床面	70%
952	土師器	坏	-	(2.6)	9.2	長石・赤色粒子	にぶい褐	普通	内面放射状のヘラ磨き	東部床面	50%
953	土師器	坏	[15.0]	3.5	-	石英・赤色粒子	明赤褐	普通	内面放射状のヘラ磨き	北東部床面	50%
954	土師器	坏	15.2	4.2	-	雲母・石英	にぶい褐	普通	体部内面ナデ，口縁部横ナデ	北東部床面	80%
955	土師器	椀	16.4	10.0	7.9	長石・石英	にぶい赤褐	普通	器面荒れ，内面ヘラナデ	北部・南東部床面	70%
956	土師器	高坏	14.3	(8.0)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	坏部内面ヘラ磨き	東部下層	80%
957	土師器	高坏	-	(15.1)	-	長石・石英	赤褐	普通	脚部外面ヘラナデ	竈付近中層	40% 外面赤彩
958	土師器	甕	13.8	(11.2)	-	雲母・長石・石英	赤褐	普通	体部外面荒れ，口縁部横ナデ	東部床面	40%
959	土師器	甕	[17.8]	(14.6)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面荒れ，口縁部横ナデ	中央部床面	40%
960	土師器	甕	19.0	32.0	8.0	角礫・長石・石英	にぶい橙	普通	底部木葉痕，口縁部横ナデ	西部床面	95% PL216
961	土師器	甕	19.6	31.5	6.6	雲母・石英・赤色粒子	暗赤褐	普通	底部ヘラナデ，口縁部横ナデ	中央部下層	90% PL216
962	土師器	甕	16.9	(16.4)	-	角礫・長石・石英	にぶい橙	普通	体部内外面ヘラナデ，口縁部横ナデ	北東部床面	40%
963	土師器	甕	-	(25.7)	7.0	長石・石英	にぶい褐	普通	体部外面下位ヘラ磨き，内面ヘラナデ	中央部床面	50%
964	土師器	甕	24.4	33.8	5.7	角礫・長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	器面荒れ，口縁部横ナデ	中央部床面	70%
965	土師器	甕	19.1	33.0	8.4	雲母・石英・赤色粒子	暗褐	普通	底部外面ヘラ削り，口縁部横ナデ	中央部床面	80% PL216
966	土師器	甕	22.3	37.0	7.0	角礫・雲母・石英	にぶい橙	普通	底部外面ヘラナデ，口縁部横ナデ	中央部床面	80% PL216
968	土師器	甗	[27.2]	(16.9)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部内外面ヘラナデ，口縁部横ナデ	中央部下層	30%
970	土師器	甗	26.6	32.0	9.2	角礫・長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ，単孔式	中央部床面	80%

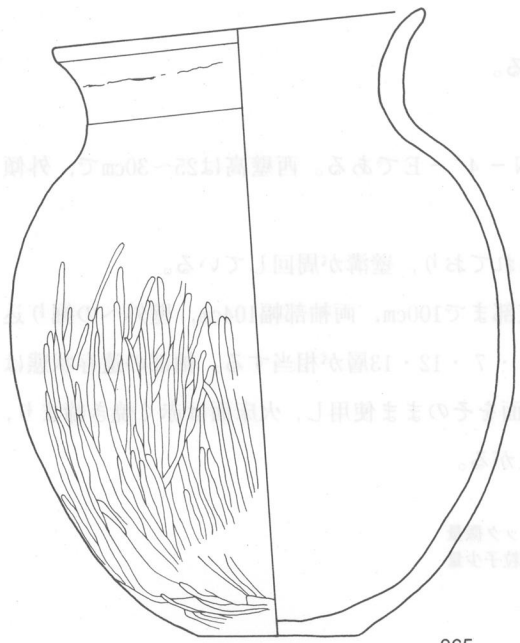




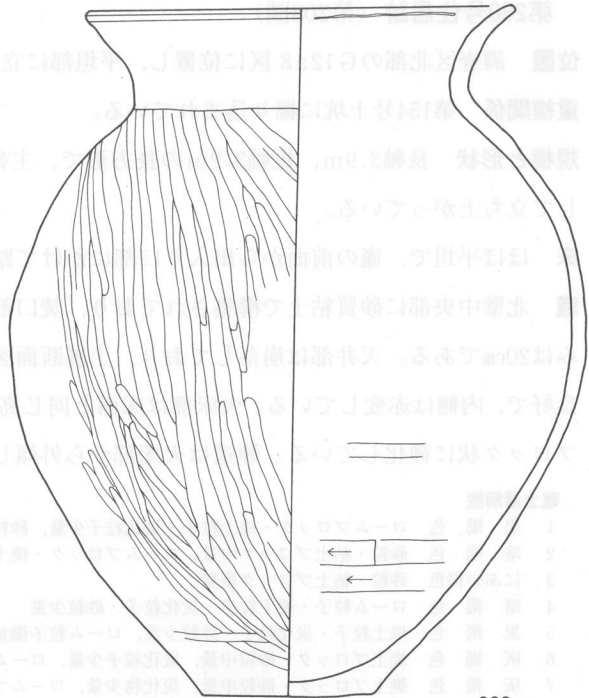
第205図 第258号住居跡出土遺物実測図(1)



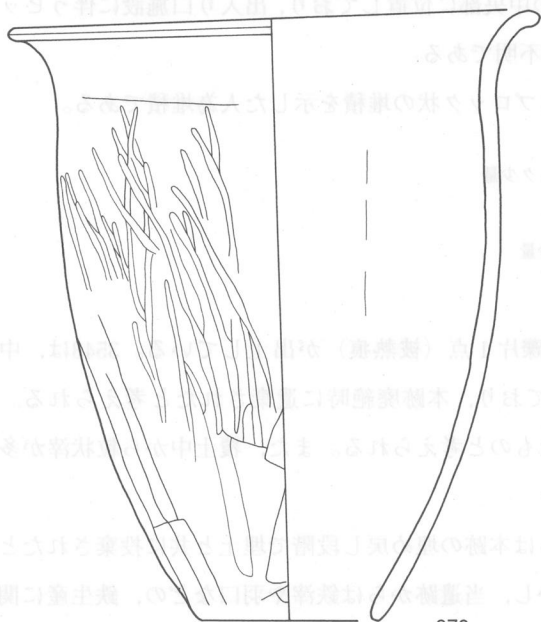
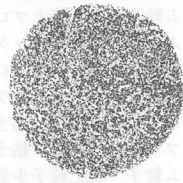
第206图 第258号住居跡出土遺物実測図(2)



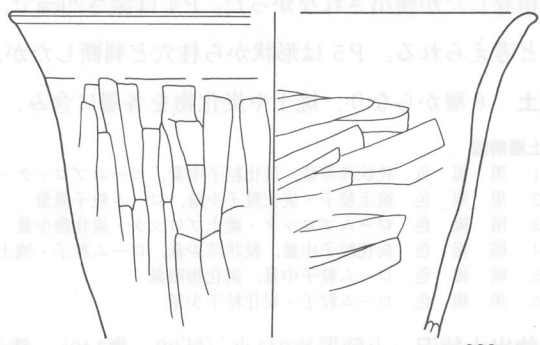
965



966



970



968



第207図 第258号住居跡出土遺物実測図(3)

## 第260号住居跡（第208図）

**位置** 調査区北部のG12a8区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第154号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸3.9m、短軸3.2mの長方形で、主軸方向はN-4°-Eである。西壁高は25～30cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、竈の前面から出入り口部にかけて踏み固められており、壁溝が周回している。

**竈** 北壁中央部に砂質粘土で構築されており、焚口部から煙道部まで100cm、両袖部幅104cm、壁外への掘り込みは20cmである。天井部は崩落しており、土層断面図中、第6・7・12・13層が相当する。袖部の遺存状態は良好で、内側は赤変している。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火床面は赤く焼き締まり、ブロック状に硬化している。煙道は火床部から外傾して立ち上がる。

### 竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、砂粒・粘土ブロック微量
- 2 暗褐色 砂粒・粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 にぶい褐色 砂粒・粘土ブロック多量
- 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量、ローム粒子微量
- 6 灰褐色 焼土ブロック・砂粒中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 7 灰褐色 焼土ブロック・砂粒中量、炭化物少量、ロームブロック微量
- 8 黒褐色 ローム粒子多量、焼土粒子微量
- 9 褐色 ローム粒子多量、焼土ブロック少量
- 10 黒色 ローム粒子・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 11 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 12 灰褐色 粘土ブロック多量、焼土ブロック少量
- 13 褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量
- 14 黒褐色 焼土ブロック・砂粒・粘土ブロック少量
- 15 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、砂粒・粘土ブロック微量

**ピット** 5か所。主柱穴はP1～P3が相当し、深さは12～22である。南西コーナー寄りに想定される主柱穴は精査したが検出されなかった。P4は深さ29cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5は形状から柱穴と判断したが、性格は不明である。

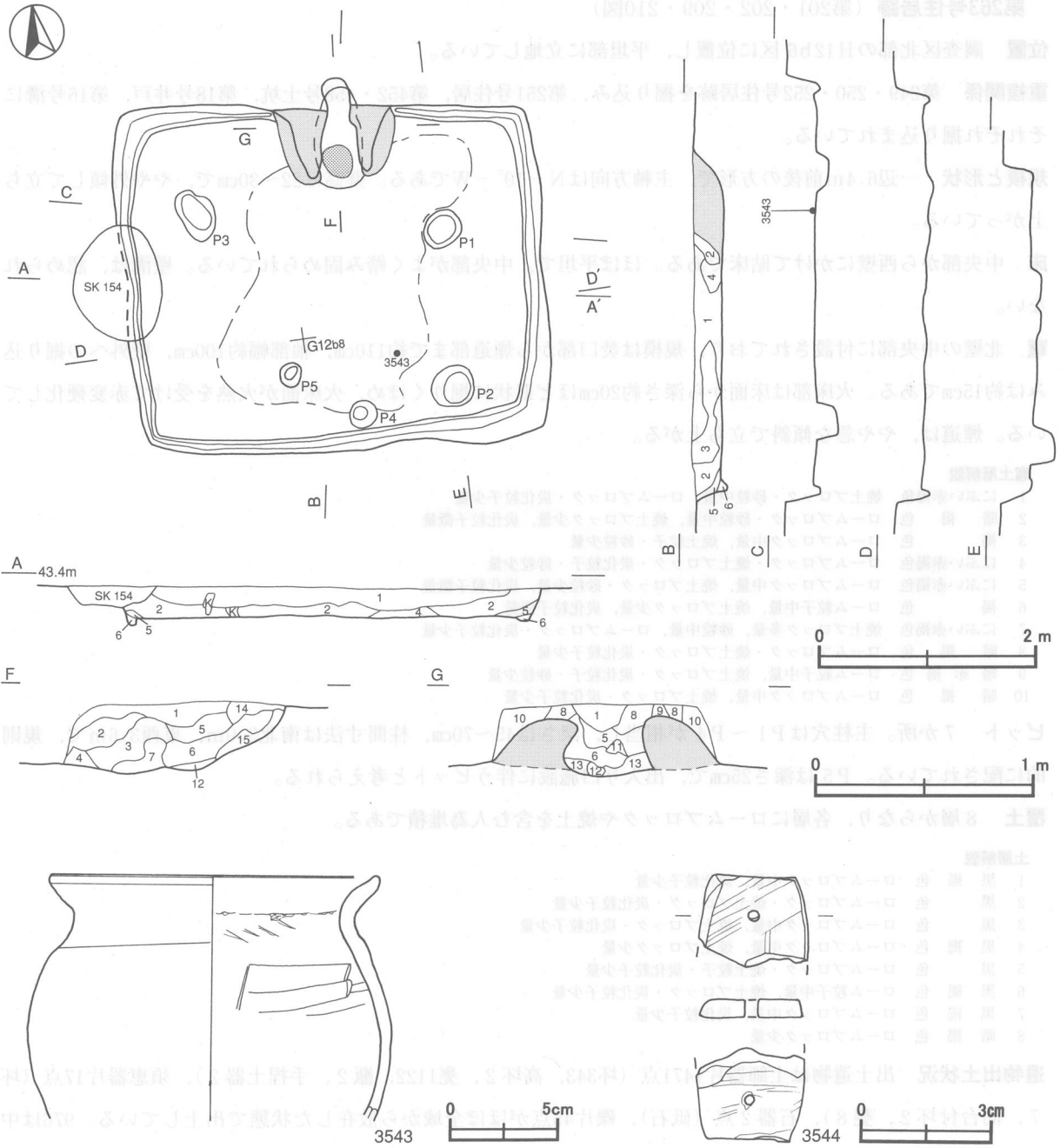
**覆土** 6層からなり、焼土や炭化物を各層に含み、不規則なブロック状の堆積を示した人為堆積である。

### 土層解説

- 1 黒褐色 粒状滓多量、炭化粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 4 暗褐色 炭化粒子中量、粒状滓少量、ローム粒子・焼土ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物微量
- 6 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

**遺物出土状況** 土師器片241点（坏92、甕149）、鉄滓1点、礫片1点（被熱痕）が出土している。3543は、中央部の南東コーナー寄りの床面からつぶれた状態で出土しており、本跡廃絶時に遺棄されたと考えられる。3544は、覆土中から出土しており、埋め戻す段階で混入したものと考えられる。また、覆土中から粒状滓が多く出土している。

**所見** 多量の粒状滓が覆土上層から出土しているが、これらは本跡の埋め戻し段階で埋土と共に投棄されたと考えられ、工房として機能していたとは考えられない。しかし、当遺跡からは鉄滓や羽口などの、鉄生産に関わる遺物も埋土中から多数検出されており、本跡周辺に工房があったと推測される。なお、坏や甕の形状から、時期は7世紀前葉と考えられる。



第208図 第260号住居跡・出土遺物実測図

第260号居跡出土遺物観察表 (第208図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3543	土師器	甕	14.7	(11.1)	-	長石・雲母・石英	にぶい褐色	普通	体部内面へラナデ, 外面ナデ	中央部床面	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3544	有孔円板	(2.5)	(2.1)	(0.45)	0.2	(3.8)	滑石	3分の1欠損, 擦痕顕著	覆土中	

## 第263号住居跡（第201・202・209・210図）

**位置** 調査区北部のH12b6区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第249・250・252号住居跡を掘り込み、第251号住居、第452・458号土坑、第18号井戸、第16号溝にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 一辺6.4m前後の方形で、主軸方向はN-10°-Wである。壁高は22~30cmで、やや外傾して立ち上がっている。

**床** 中央部から西壁にかけて貼床である。ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は、認められない。

**竈** 北壁の中央部に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで約110cm、袖部幅約100cm、壁外への掘り込みは約15cmである。火床部は床面から深さ約20cmほど皿状に掘りくぼめ、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は、やや急な傾斜で立ち上がる。

### 竈土層解説

- 1 におい赤褐色 焼土ブロック・砂粒中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・砂粒中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・砂粒少量
- 4 におい赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量
- 5 におい赤褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量
- 6 褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 7 におい赤褐色 焼土ブロック多量、砂粒中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 8 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 9 暗赤褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量
- 10 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量

**ピット** 7か所。支柱穴はP1~P4が相当し、深さは45~70cm、柱間寸法は南北3.0m、東西3.6mで、規則的に配されている。P5は深さ25cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

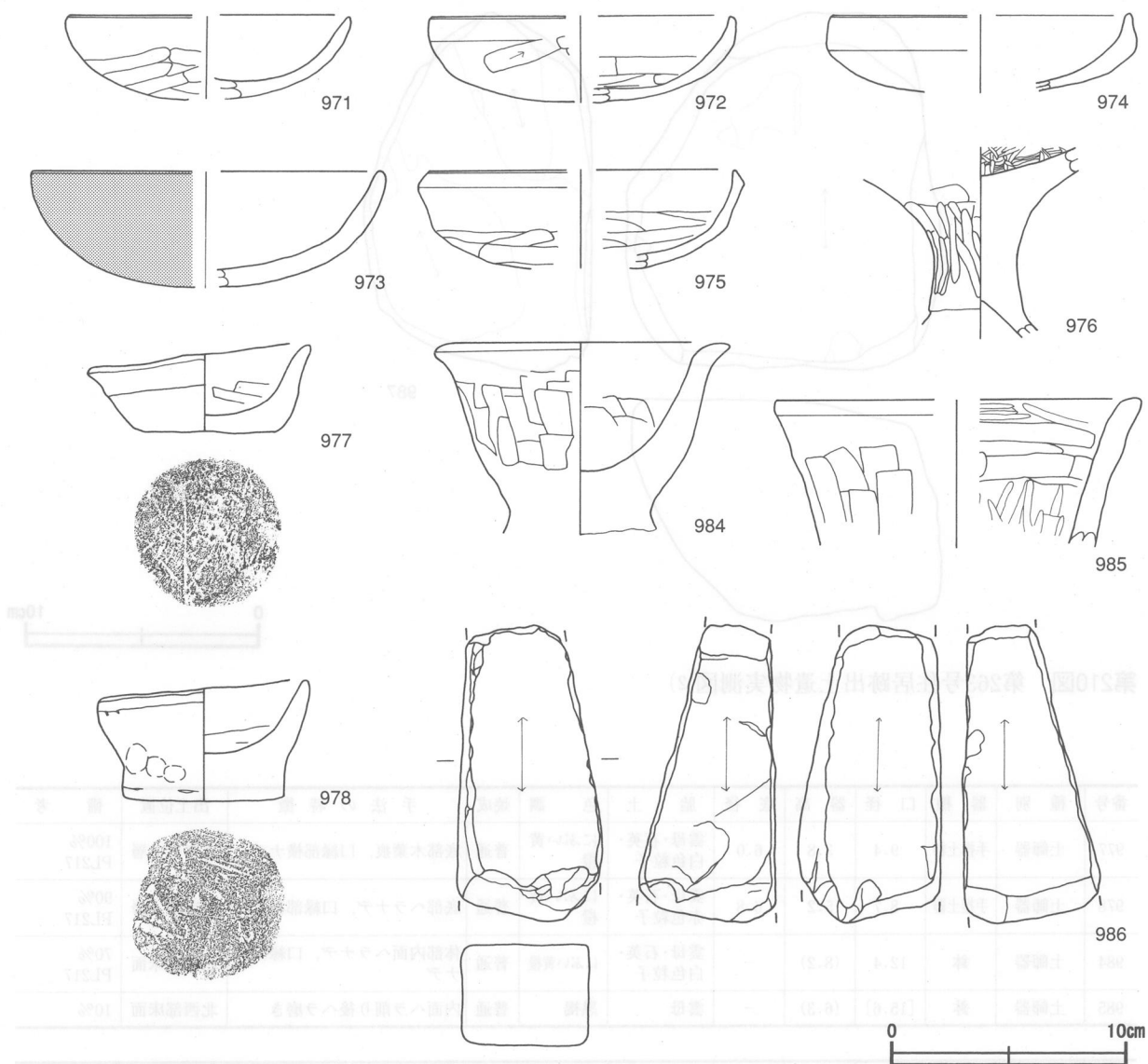
**覆土** 8層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

### 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 2 黒色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 5 黒色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 黒褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 8 暗褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片1471点（坏343、高坏2、甕1122、甗2、手捏土器2）、須恵器片17点（坏7、高台付坏2、甕8）、石器2点（砥石）、礫片45点がほぼ全域から散在した状態で出土している。976は中央部の床面、986は東壁際の床面、987は西部の床面からそれぞれ出土し、984・985は北西部の床面から出土した破片が接合したものである。これらは、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また、971は南西部の床面から出土し、973は南西部の覆土上層と下層から出土した破片が接合したものであり、住居廃絶時に投棄されたものと考えられる。さらに、972は北西部の覆土上層、974は竈左袖部の覆土上層、975は中央部の覆土上層、977は南東部の覆土上層、978は北部壁際の覆土上層から出土しており、住居廃絶後、埋没過程で投棄されたものと考えられる。

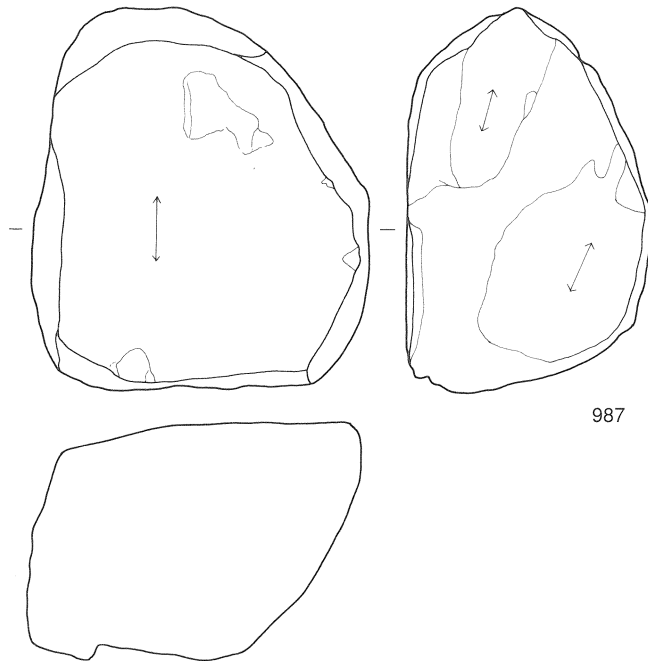
**所見** 本跡は第250号住居跡から作り替えが行われており、西壁を基準に三方へ1.2~1.3m拡張されている。時期は遺構の形態と出土土器の形状から7世紀前葉と考えられる。



第209図 第263号住居跡出土遺物実測図(1)

第263号住居跡出土遺物観察表 (第209・210図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
971	土師器	坏	[12.0]	(3.5)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面へラ削り, 口縁部横ナデ	南西部床面	10%
972	土師器	坏	[12.8]	(3.7)	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面へラナデ, 口縁部横ナデ	北西部上層	20%
973	土師器	坏	[15.0]	(4.9)	-	長石・石英・赤色粒子	暗灰黄	普通	器面荒れ	南西部上・下層	20%
974	土師器	坏	[12.6]	(3.3)	-	長石・石英	黒褐	普通	器面荒れ, 口縁部横ナデ	竈左袖部上層	20%
975	土師器	坏	[13.0]	(4.2)	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面へラナデ, 口縁部横ナデ	中央部上層	10%
976	土師器	高坏	-	(8.2)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	脚部外面・坏部内面へラ磨き	中央部床面	20%



987



第210図 第263号住居跡出土遺物実測図(2)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
977	土師器	手捏土器	9.4	3.8	6.0	雲母・石英・白色粒子	にぶい黄橙	普通	底部木葉痕, 口縁部横ナデ	南東部上層	100% PL217
978	土師器	手捏土器	8.7	5.2	6.8	雲母・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部ヘラナデ, 口縁部横ナデ	北壁際上層	90% PL217
984	土師器	鉢	12.4	(8.2)	-	雲母・石英・白色粒子	にぶい黄橙	普通	体部内面ヘラナデ, 口縁部横ナデ	北西部床面	70% PL217
985	土師器	鉢	[15.6]	(6.3)	-	雲母	黒褐	普通	内面ヘラ削り後ヘラ磨き	北西部床面	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
986	砥石	(12.7)	6.3	4.2	(640.0)	凝灰岩	砥面4面, その他は破断面	東壁際床面	PL267
987	砥石	15.2	13.4	9.8	2970.0	砂岩	砥面2面, その他は自然面	西部床面	



第268号住居跡 (第211図)

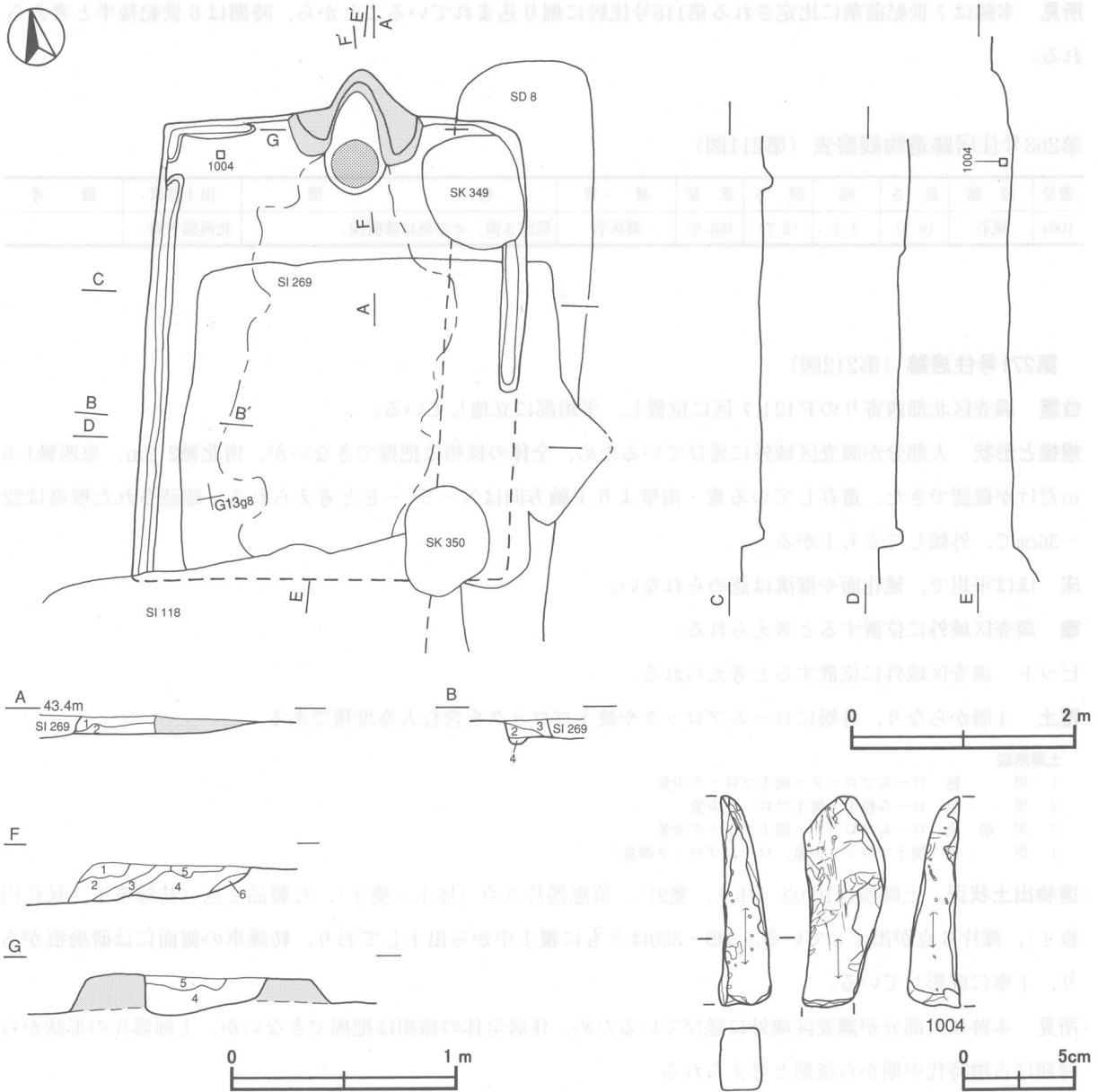
位置 調査区北部のG13f8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第118・269号住居、第349・350号土坑、第8号溝に掘り込まれている。

規模と形状 重複により長軸は約3.9mが確認でき、短軸は約3.3mで、長方形を呈していたものと推定される。主軸方向はN-10°-Eである。壁高は約16cmで、ほぼ直立する。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は重複のために南壁と南東部で確認できないが、周回していたと思われる。

竈 北壁の中央部に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで約110cm、袖部幅約120cm、壁外への掘り込みは約40cmである。火床部は床面と同じ高さの平坦面を使用し、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は、緩やかに傾斜して立ち上がっている。



第211図 第268号住居跡・出土遺物実測図

#### 竈土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子少量, 炭化粒子・粘土粒子微量
- 3 極暗赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子中量, 炭化粒子少量, ロームブロック微量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック多量, ロームブロック中量, 炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
- 5 極暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量

覆土 4層からなり, 各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量
- 4 褐色 ローム粒子多量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片16点(坏3, 高台付坏2, 甕11), 石器5点(砥石), 焼成粘土塊6点, 礫片1点がほぼ全域から散在した状態で出土しているが, 土師器片は細片のため図示できない。1004は北西部の覆土下層から出土しており, 住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。

所見 本跡は7世紀前葉に比定される第118号住居に掘り込まれていることから, 時期は6世紀後半と考えられる。

#### 第268号住居跡遺物観察表(第211図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1004	砥石	(9.3)	2.3	(3.7)	(68.9)	凝灰岩	砥面3面, その他は破断面。	北西部下層	

#### 第271号住居跡(第212図)

位置 調査区北部西寄りのF12h7区に位置し, 平坦部に立地している。

規模と形状 大部分が調査区域外に延びているため, 全体の様相は把握できないが, 南北軸2.2m, 東西軸1.0mだけが確認できた。遺存している東・南壁より主軸方向はN-5°-Eと考えられる。確認された壁高は22~36cmで, 外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で, 硬化面や壁溝は認められない。

竈 調査区域外に位置すると考えられる。

ピット 調査区域外に位置すると考えられる。

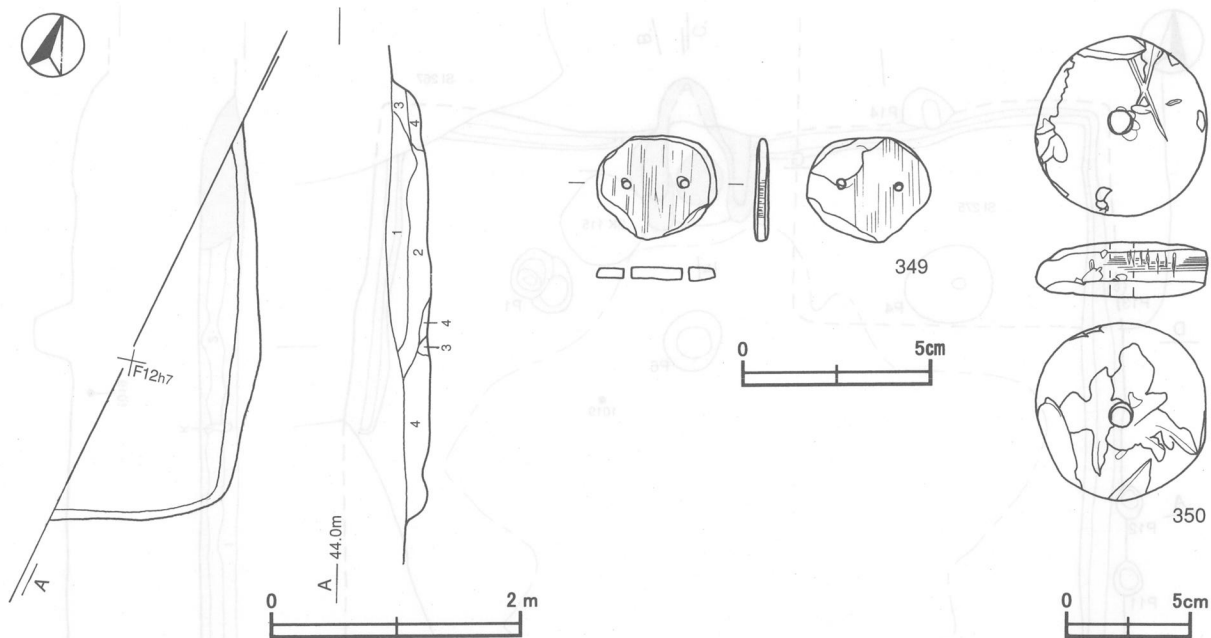
覆土 4層からなり, 各層にロームブロックや焼土ブロックを含む人為堆積である。

#### 土層解説

- 1 黒色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 黒色 ローム粒子・焼土ブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 4 黒色 焼土ブロック少量, ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片100点(坏9, 甕91), 須恵器片2点(坏1, 甕1), 石製品2点(紡錘車1, 双孔円板1), 礫片6点が出土している。349・350はともに覆土中から出土しており, 紡錘車の側面には研磨痕があり, 丁寧成形している。

所見 本跡は大部分が調査区域外に延びているため, 住居全体の様相は把握できないが, 土師器片の形状から時期は古墳時代中期から後期と考えられる。



第212図 第271号住居跡・出土遺物実測図

第271号住居跡出土遺物観察表（第212図）

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
349	双孔円板	3.2	0.3	0.2	4.46	滑石	片面穿孔，両面縦位の研磨痕	覆土中	
350	紡錘車	7.1	2.2	0.9	136.9	粘板岩	片面穿孔，側面摩擦痕	覆土中	

### 第273号住居跡（第213・214図）

**位置** 調査区北部のF12i7区に位置し，平坦部に立地している。

**重複関係** 第264・267・275号住居，第115号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

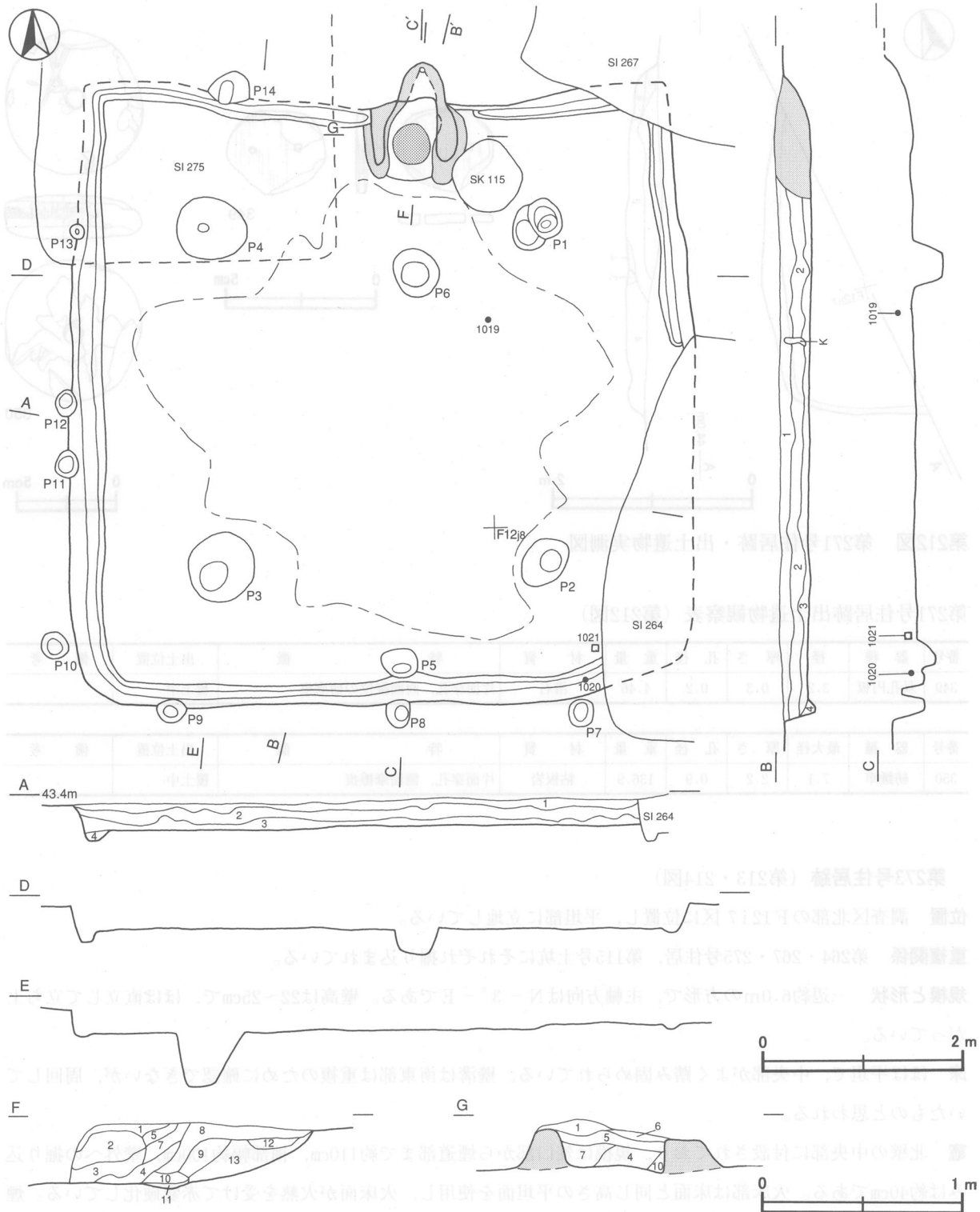
**規模と形状** 一辺約6.0mの方形で，主軸方向はN-3°-Eである。壁高は22~25cmで，ほぼ直立して立ち上がっている。

**床** はほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。壁溝は南東部は重複のために確認できないが，周回していたものと思われる。

**竈** 北壁の中央部に付設されており，規模は焚口部から煙道部まで約110cm，袖部幅約100cm，壁外への掘り込みは約40cmである。火床部は床面と同じ高さの平坦面を使用し，火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は緩やかに傾斜して立ち上がる。土層断面図中，2・4・5層は天井部の崩落土である。

#### 竈土層解説

- 1 褐色 ロームブロック・粘土粒子・砂粒多量，焼土ブロック中量
- 2 褐色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック多量，ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック・砂粒中量，焼土ブロック少量・粘土ブロック少量
- 4 明褐色 砂質粘土ブロック多量，ロームブロック中量，焼土ブロック少量
- 5 明褐色 砂質粘土ブロック多量，焼土ブロック少量
- 6 暗褐色 ロームブロック・砂粒中量，焼土ブロック少量
- 7 黒色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 8 黒褐色 ロームブロック中量，焼土ブロック少量
- 9 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量



第213図 第273号住居跡実測図

- 10 赤褐色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量
- 11 黒色 ロームブロック少量
- 12 灰褐色 砂質粘土ブロック多量, 焼土ブロック少量 (天井部)
- 13 暗褐色 ロームブロック・砂質粘土ブロック少量

ピット 14か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは45～50cm、柱間寸法はいずれも約3.4mを測り、規則的に配されている。P5・P8は深さ20cm・30cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は径50cmの円形、深さ約30cmで、性格については不明である。また、P7・P9～P14は深さ22～50cmで、南・西・北壁の外側に住居を囲むように位置しており、壁を構築した壁柱穴と考えられるが、明確ではない。

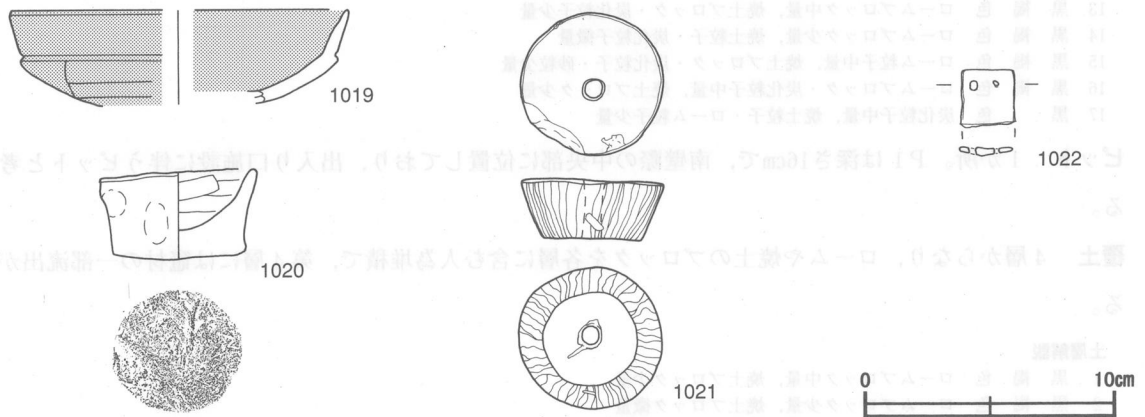
覆土 4層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片1409点（坏533、高坏25、甕849、手捏土器2）、須恵器片28点（坏16、高台付坏2、甕9、蓋1）、灰釉陶器片1点、鉄製品1点（小札カ）、石器1点（紡錘車）、石製品1点（双孔円盤）、礫片1点、鉄滓1点がほぼ全域から散在した状態で出土している。1019は中央部覆土上層、1020、1021は南東部の覆土下層、1022は覆土中から出土しており、いずれも住居廃絶後、埋没過程で投棄されたものと考えられる。また、須恵器片・灰釉陶器片は断面が摩滅しており、耕作等による混入と考えられる。

所見 本跡は主軸方向がほぼ真北を指し、また、北壁の中央部に竈を付設し、煙道部の壁外への掘り込みが約40cmであることなどから、時期は7世紀前葉と考えられる。



第214図 第273号住居跡出土遺物実測図

第273号住居跡出土遺物観察表（第214図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1019	土師器	坏	[13.4]	(3.7)	-	雲母・赤色粒子	灰褐	普通	体部内面ナデ、口縁部横ナデ	中央部上層	10%
1020	土師器	手捏土器	6.2	3.7	5.2	角礫・長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	底部外面ヘラ削り後ナデ	南東部下層	95%

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1021	紡錘車	5.5	2.3	0.9	91.8	滑石	側面削り痕有り、両面穿孔	南東部下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1022	小札カ	(2.1)	2.1	1.5	(2.4)	鉄	板状で、二孔有り	覆土中	

第276号住居跡（第215図）

位置 調査区北部のG12b6区に位置し、平坦部に立地している。

規模と形状 長軸4.2m、短軸3.0mの東西に長い長方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は18cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁の中央部に砂質粘土で構築されており、焚口部から煙道部まで72cm、袖部幅90cm、壁外への掘り込みは20cmである。天井部と両袖部の内側は崩落しており、土層断面図中の第4層がこれらに相当する。火床部は床面を10cmほど掘り込んだ浅い皿状を呈し、火熱を受けた部分が厚さ5cmにわたって硬く焼き締まり、使用頻度の高さがうかがわれる。煙道は火床部から外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 灰褐色 焼土粒子・砂粒中量、炭化粒子少量
- 4 赤褐色 焼土ブロック多量、砂粒少量
- 5 黒褐色 砂粒中量、焼土粒子・粘土ブロック少量
- 6 黒色 焼土粒子・砂粒中量、炭化粒子少量
- 7 明褐色 ローム粒子微量
- 8 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量
- 9 灰黄褐色 ローム粒子・炭化粒子・砂粒中量、焼土ブロック・灰少量
- 10 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子中量、焼土粒子少量
- 11 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子中量、焼土ブロック・炭化物微量
- 12 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子中量、焼土ブロック少量
- 13 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 14 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 15 黒褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量
- 16 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子中量、焼土ブロック少量
- 17 黒色 炭化粒子中量、焼土粒子・ローム粒子少量

ピット 1か所。P1は深さ16cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 4層からなり、ロームや焼土のブロックを各層に含む人為堆積で、第4層には竈材の一部流出が見られる。

土層解説

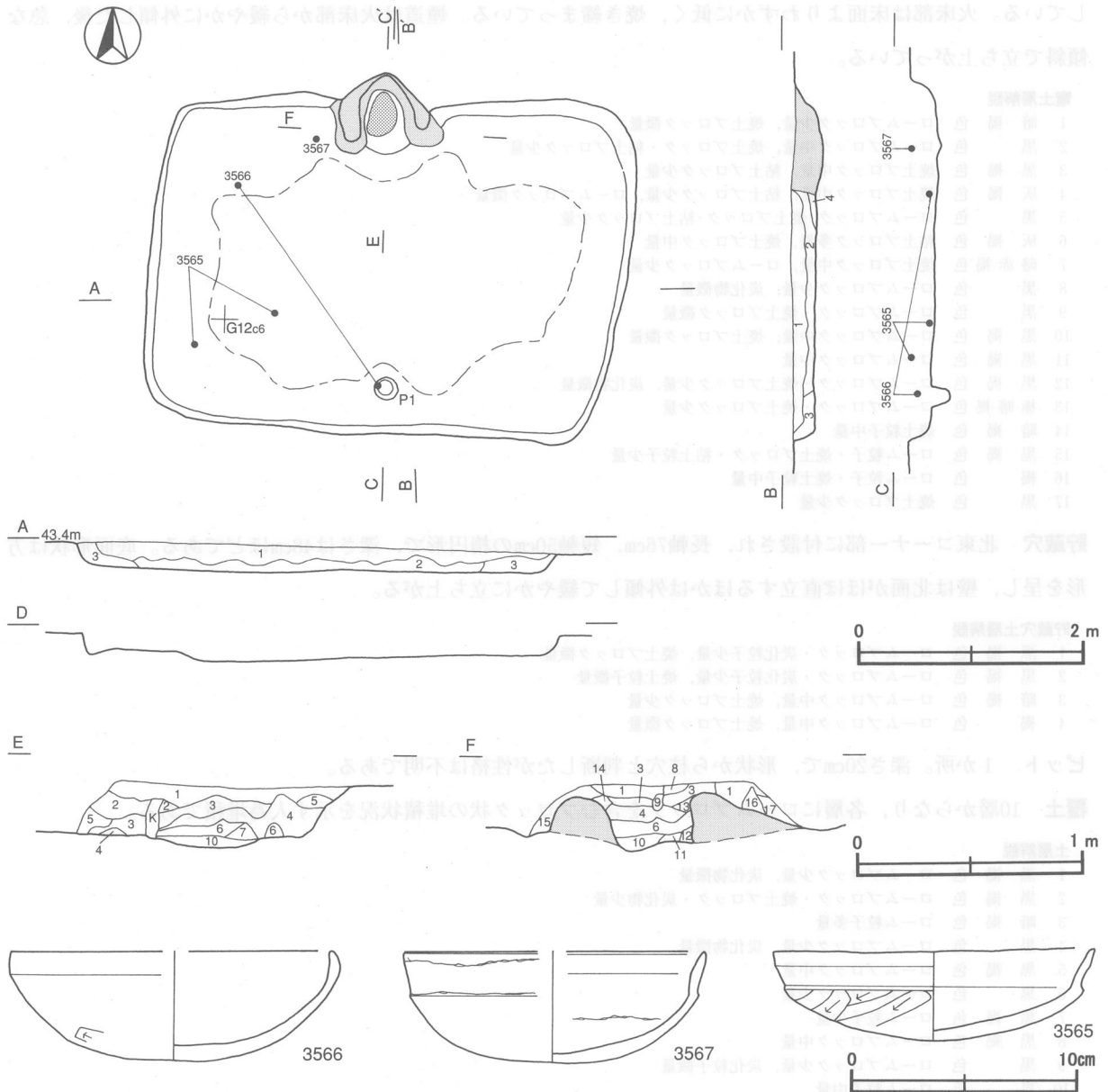
- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 3 黒色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 4 灰褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量

遺物出土状況 土師器片161点（坏78，甕83）が覆土中層と下層から出土している。3565は南西部の覆土上層と下層の破片が接合されたものである。また、3566は北西部と南壁際の破片が接合したものである。3567は竈付近の覆土上層から出土したもので、本跡廃絶後の埋め戻しの段階で投棄されたと考えられる。

所見 本跡は床面がよく踏み固められていることや、竈の火床面の焼き締まり具合からみて、存続期間の長い住居であることが推測され、出土遺物の形状から、時期は7世紀前葉と考えられる。

第276号住居跡出土遺物観察表（第215図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3565	土師器	坏	14.2	4.1	-	雲母・砂粒	橙	普通	体部内面ナデ、外面ヘラ削り	南西部上・下層	75%
3566	土師器	坏	[14.0]	4.8	-	雲母・砂粒	褐	普通	体部内面ナデ、外面ヘラ削り	北西部・南部下層	60%
3567	土師器	坏	[13.0]	5.0	-	長石・石英・砂粒	明赤褐	普通	体部内・外面ナデ	竈付近上層	55%



第215図 第276号住居跡・出土遺物実測図

第278号住居跡 (第216・217図)

位置 調査区北部のG12c5区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第279号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.2m、短軸4.0mの方形で、主軸方向はN-11°-Wである。壁高は30~37cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から南壁際にかけてよく踏み固められており、壁溝は北西コーナーを除き確認された。

竈 北壁の中央部に砂質粘土で構築されており、焚口部から煙道部まで96cm、袖部幅80cm、壁外への掘り込みは20cmである。天井部は崩落しており、土層断面図中の第4・6層が崩落土に相当し、粘土や焼土のブロックを多く含んでいる。袖部は遺存状態が悪く、竈手前の床面には竈材の一部と考えられる粘土粒子や砂粒が散在

している。火床部は床面よりわずかに低く、焼き締まっている。煙道は火床部から緩やかに外傾した後、急な傾斜で立ち上がっている。

#### 竈土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量
- 2 黒色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 3 黒褐色 焼土ブロック中量, 粘土ブロック少量
- 4 灰褐色 焼土ブロック中量, 粘土ブロック少量, ロームブロック微量
- 5 黒色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 6 灰褐色 粘土ブロック多量, 焼土ブロック中量
- 7 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック少量
- 8 黒色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 9 黒色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 10 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック微量
- 11 黒褐色 ロームブロック中量
- 12 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量
- 13 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 14 暗褐色 焼土粒子中量
- 15 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子少量
- 16 褐色 ローム粒子・焼土粒子中量
- 17 黒色 焼土ブロック少量

**貯蔵穴** 北東コーナー部に付設され、長軸76cm、短軸50cmの楕円形で、深さは48cmほどである。底面形状は方形を呈し、壁は北面がほぼ直立するほかは外傾して緩やかに立ち上がる。

#### 貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック微量

**ピット** 1か所。深さ20cmで、形状から柱穴と判断したが性格は不明である。

**覆土** 10層からなり、各層にロームブロックを含むブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

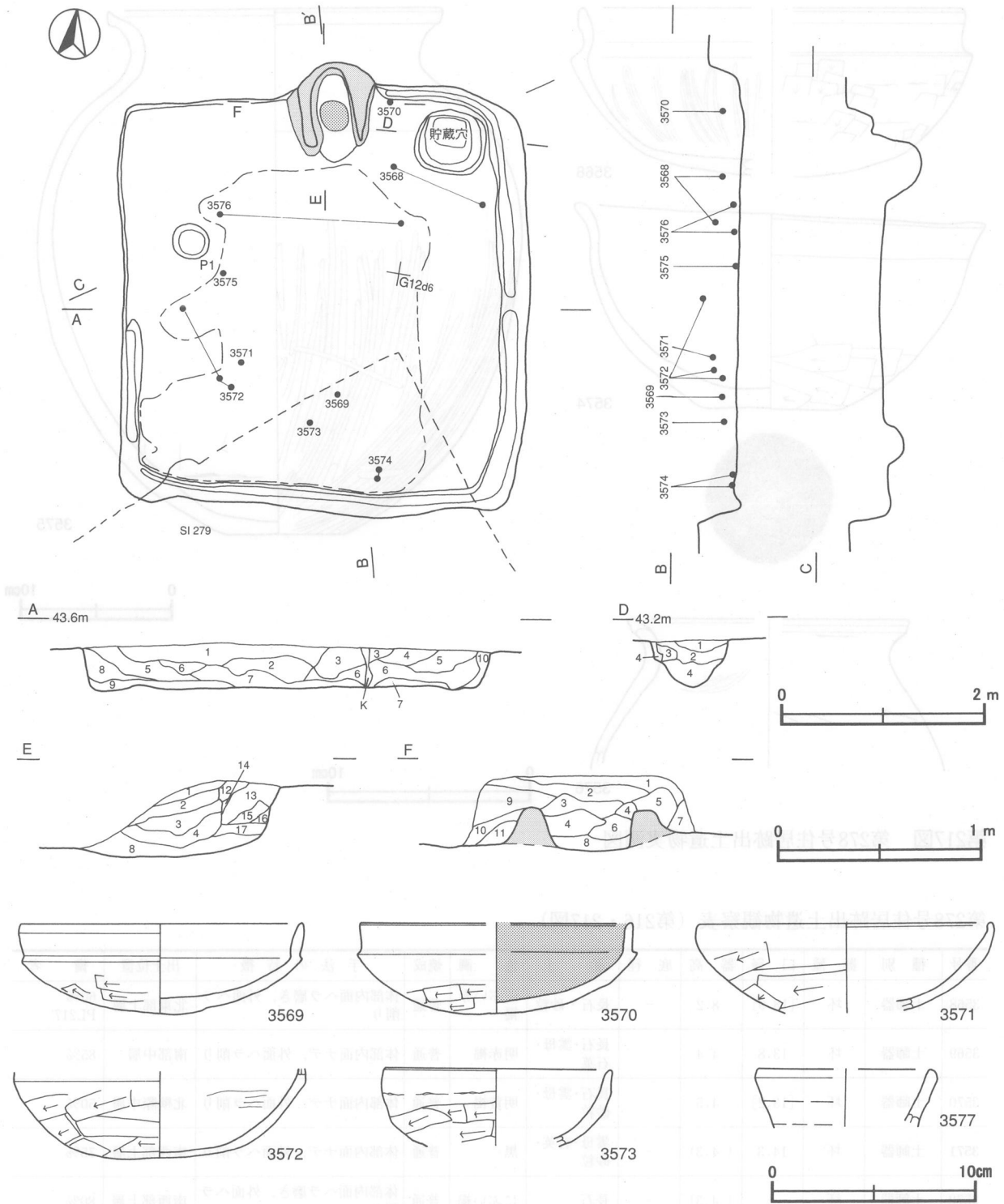
#### 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量
- 4 黒色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量
- 6 黒色 ロームブロック少量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量
- 8 黒褐色 ロームブロック中量
- 9 黒色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 10 黒色 ローム粒子中量

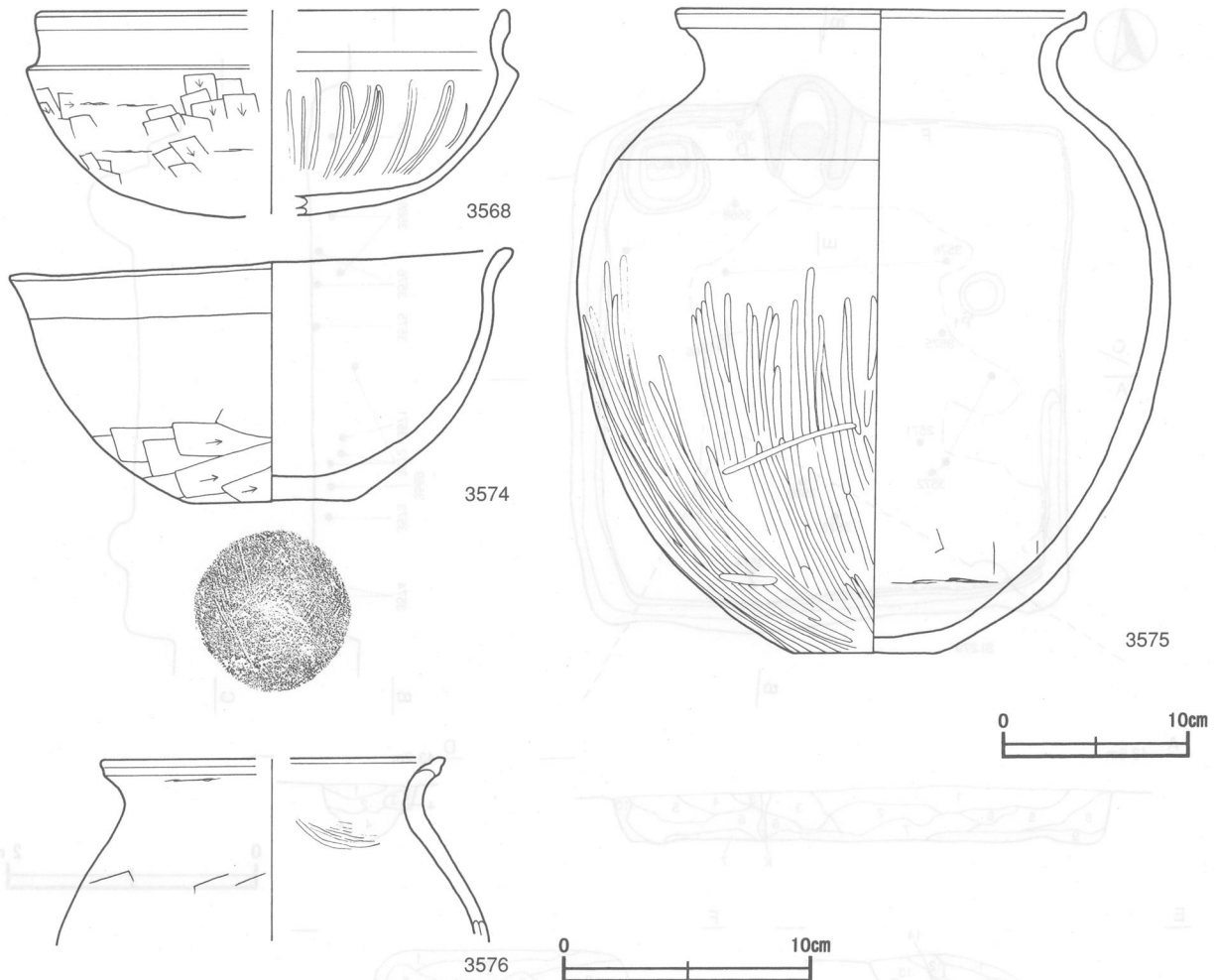
**遺物出土状況** 土師器片346点(坏165, 高台付坏1, 甕178, 甑1, 鉢1), 須恵器片9点(甕)が床面と覆土上・中層から主に出土している。これらは、本跡廃絶時に遺棄、あるいは投棄されたものと、廃絶後に投棄されたものに大別され、図示した土器の中では床面から出土した3574と3575が前者に、覆土上層と中層から出土した3568~3573, 3576が後者にそれぞれ相当すると考えられる。

**所見** 時期は、坏や甕の口縁部の形状から7世紀前葉と考えられる。





第216図 第278号住居跡・出土遺物実測図



第217図 第278号住居跡出土遺物実測図

第278号住居跡出土遺物観察表 (第216・217図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3568	土師器	坏	[18.9]	8.2	-	長石・砂粒	にぶい赤褐	普通	体部内面ヘラ磨き, 外面ヘラ削り	北東部上層	60% PL217
3569	土師器	坏	13.8	4.4	-	長石・雲母・石英	明赤褐	普通	体部内面ナデ, 外面ヘラ削り	南部中層	85%
3570	土師器	坏	[13.2]	4.5	-	長石・雲母・砂粒	明黄褐	普通	体部内面ナデ, 外面ヘラ削り	北壁際中層	50%
3571	土師器	坏	14.3	(4.3)	-	雲母・石英・砂粒	黒	普通	体部内面ナデ, 外面ヘラ削り	南西部上層	75%
3572	土師器	坏	-	(4.3)	-	長石	にぶい褐	普通	体部内面ヘラ磨き, 外面ヘラ削り	南西部上層	80%
3573	土師器	坏	11.1	(3.8)	-	雲母・砂粒	にぶい褐	普通	体部内面ナデ, 外面ヘラ削り	南部上層	75% PL217
3574	土師器	坏	20.0	10.1	6.4	長石・石英・砂粒	赤褐	普通	体部内面ナデ, 外面ヘラ削り	南部床面	60% PL217
3575	土師器	甕	21.3	35.0	8.2	長石・石英	褐	普通	体部内面ナデ, 外面ヘラ磨き	中央部床面	100% PL217
3576	土師器	甕	[13.6]	(7.5)	-	長石・砂粒	浅黄	普通	体部内・外面ヘラナデ	中央部中層	10%
3577	須恵器	小形鉢	[8.6]	(2.6)	-	砂粒	灰黄褐	普通	体部内・外面ロクロナデ	覆土中	10%

## 第281号住居跡（第218・219図）

**位置** 調査区北部のG12d3区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 南東コーナー部を第101号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 南北軸約6.0m、西側が調査区域外に延びているために東西軸は4.5mだけが確認でき、平面形は方形または長方形と想定され、主軸方向はN-90°である。壁高は20～32cmで、ほぼ直立する。

**床** ほぼ平坦で、南壁中央部付近に出入口施設に伴う土手状の高まりの北側から中央部にかけてよく踏み固められている。床面に火熱を受けた痕跡が認められる。西壁際は調査区域外のため確認できないが、壁溝は周回していたものと想定される。

**竈** 東壁の中央部南寄りに付設されており、規模は焚口部から煙道部まで約120cm、袖部幅約105cm、壁外への掘り込みは約15cmである。天井部は崩落しており、土層断面図中の3層が砂質粘土を多量に含んでおり、天井部の崩落土と考えられる。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面をそのまま利用しており、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は、緩やかに傾斜して立ち上がっている。

### 竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量
- 3 にぶい黄褐色 砂質粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
- 7 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子・砂質粘土ブロック少量
- 8 暗赤褐色 焼土ブロック多量、砂質粘土ブロック少量
- 9 にぶい赤褐色 焼土ブロック多量、炭化物中量、ロームブロック少量
- 10 黒色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 11 黒色 焼土粒子多量、ロームブロック・炭化物少量

**貯蔵穴** 一辺が約90cmの隅丸方形で、南東コーナー部に付設され、深さは約40cmである。

### 貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・炭化物中量
- 5 黒褐色 炭化物中量、ロームブロック少量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量

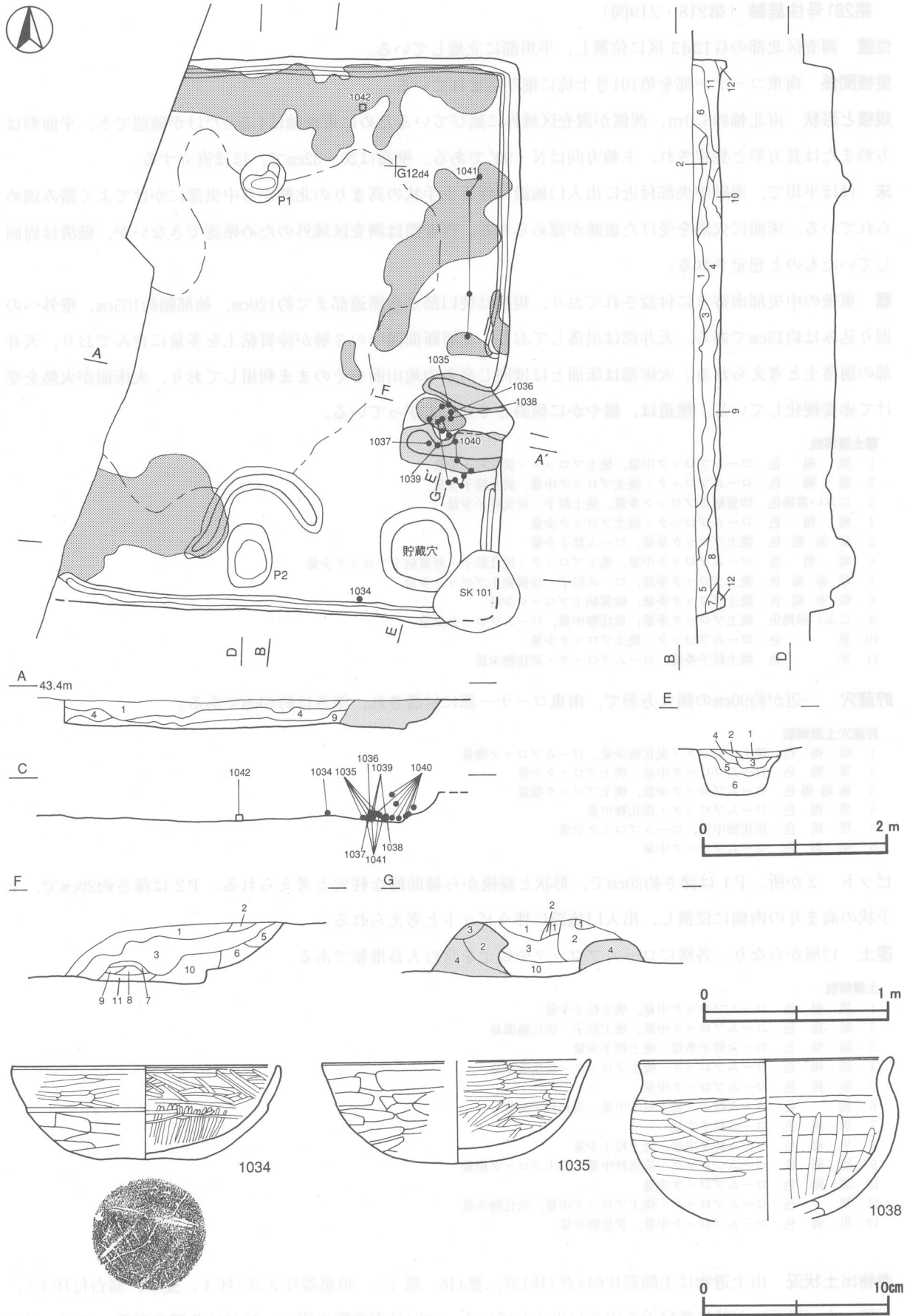
**ピット** 2か所。P1は深さ約20cmで、形状と規模から補助的な柱穴と考えられる。P2は深さ約20cmで、土手状の高まりの内側に位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 12層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

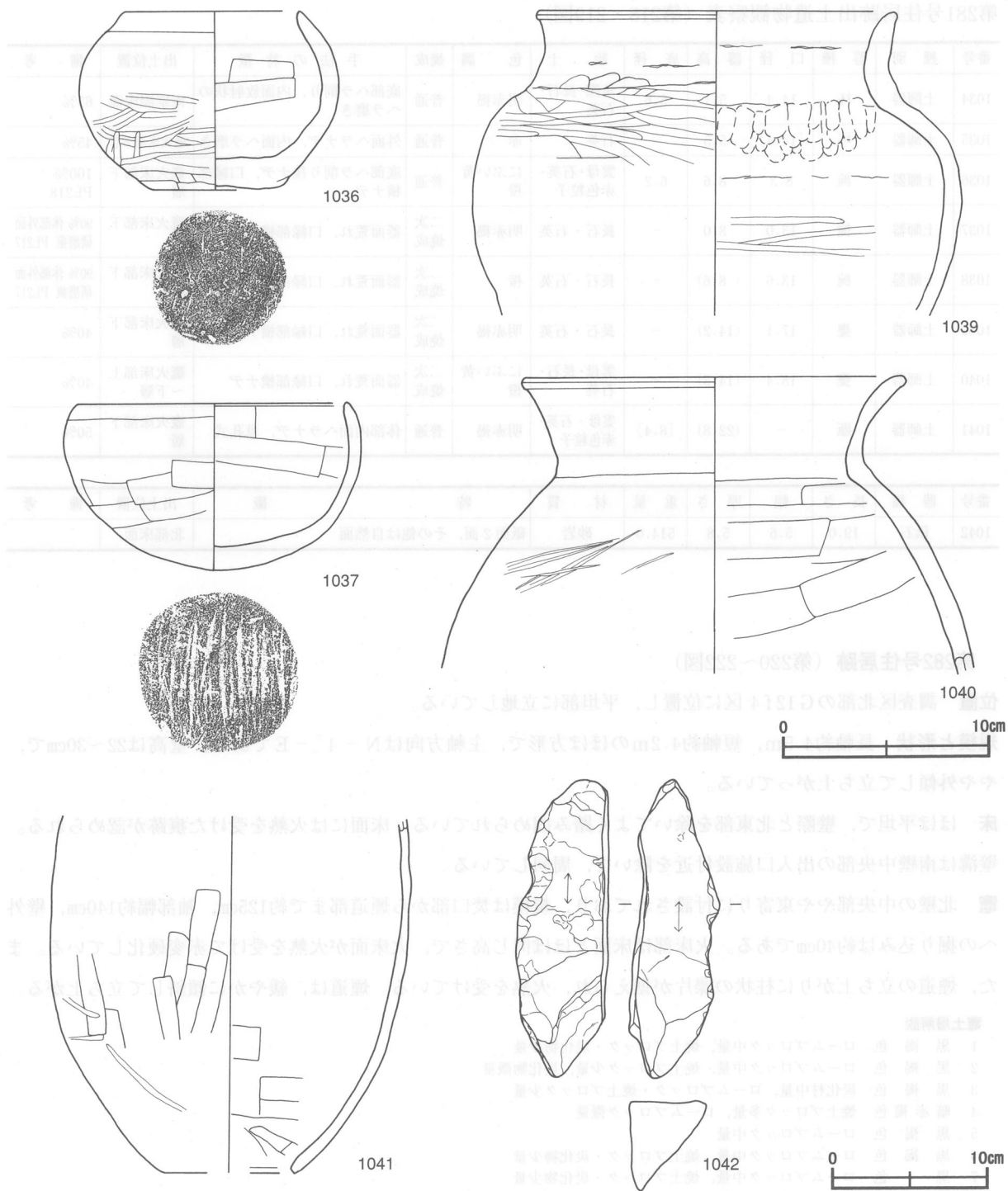
### 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量
- 6 褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量
- 8 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 9 暗褐色 ロームブロック・炭化材中量、焼土ブロック微量
- 10 黒褐色 ロームブロック少量
- 11 褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物少量
- 12 黒褐色 ロームブロック中量、炭化物少量

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片644点（坏197、甕446、甑1）、須恵器片3点（坏1、甕1、高台付坏1）、石器1点（砥石）が特に竈付近を中心に出土している。1034は南壁際の床面、1042は北部の床面、1035～1040は竈火床部、1041は北東部の覆土下層からそれぞれ出土している。また、北部及び南西部では床面を覆うよう



第218図 第281号住居跡・出土遺物実測図



第219図 第281号住居跡出土遺物実測図

に焼土が広がり、その下からは多量の炭化材が出土している。

所見 本跡は覆土中に多くの焼土を含有し、床面にも火熱を受けた痕跡が認められる焼失住居であり、床面と竈内から出土した遺物は焼失前に遺棄されたものと考えられる。本跡の時期は、出土土器の形状と遺構の形態から5世紀末から6世紀初め頃と考えられる。

第281号住居跡出土遺物観察表 (第218・219図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1034	土師器	坏	14.4	5.1	5.6	角礫・長石・石英	明赤褐	普通	底部ヘラ削り, 内面放射状のヘラ磨き	南壁際床面	65%
1035	土師器	坏	[14.4]	5.5	-	石英	赤	普通	外面ヘラナデ, 内面ヘラ磨き	竈火床部下層	45%
1036	土師器	椀	8.3	8.6	6.2	雲母・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部ヘラ削り後ナデ, 口縁部横ナデ	竈火床部下層	100% PL218
1037	土師器	椀	13.0	8.0	-	長石・石英	明赤褐	二次焼成	器面荒れ, 口縁部横ナデ	竈火床部下層	90% 体部外面研磨痕 PL217
1038	土師器	椀	13.6	(8.6)	-	長石・石英	橙	二次焼成	器面荒れ, 口縁部横ナデ	竈火床部下層	90% 体部外面研磨痕 PL217
1039	土師器	甕	17.1	(14.2)	-	長石・石英	明赤褐	二次焼成	器面荒れ, 口縁部横ナデ	竈火床部下層	40%
1040	土師器	甕	18.4	(14.3)	-	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	二次焼成	器面荒れ, 口縁部横ナデ	竈火床部上～下層	40%
1041	土師器	甗	-	(22.8)	[8.4]	雲母・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内面ヘラナデ, 単孔式	竈火床部下層	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1042	砥石	19.0	5.6	5.8	514.0	砂岩	砥面2面, その他は自然面	北部床面	

第282号住居跡 (第220～222図)

位置 調査区北部のG12f4区に位置し, 平坦部に立地している。

規模と形状 長軸約4.5m, 短軸約4.2mのほぼ方形で, 主軸方向はN-4°-Eである。壁高は22～30cmで, やや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 壁際と北東部を除いてよく踏み固められている。床面には火熱を受けた痕跡が認められる。壁溝は南壁中央部の出入口施設付近を除いて, 周回している。

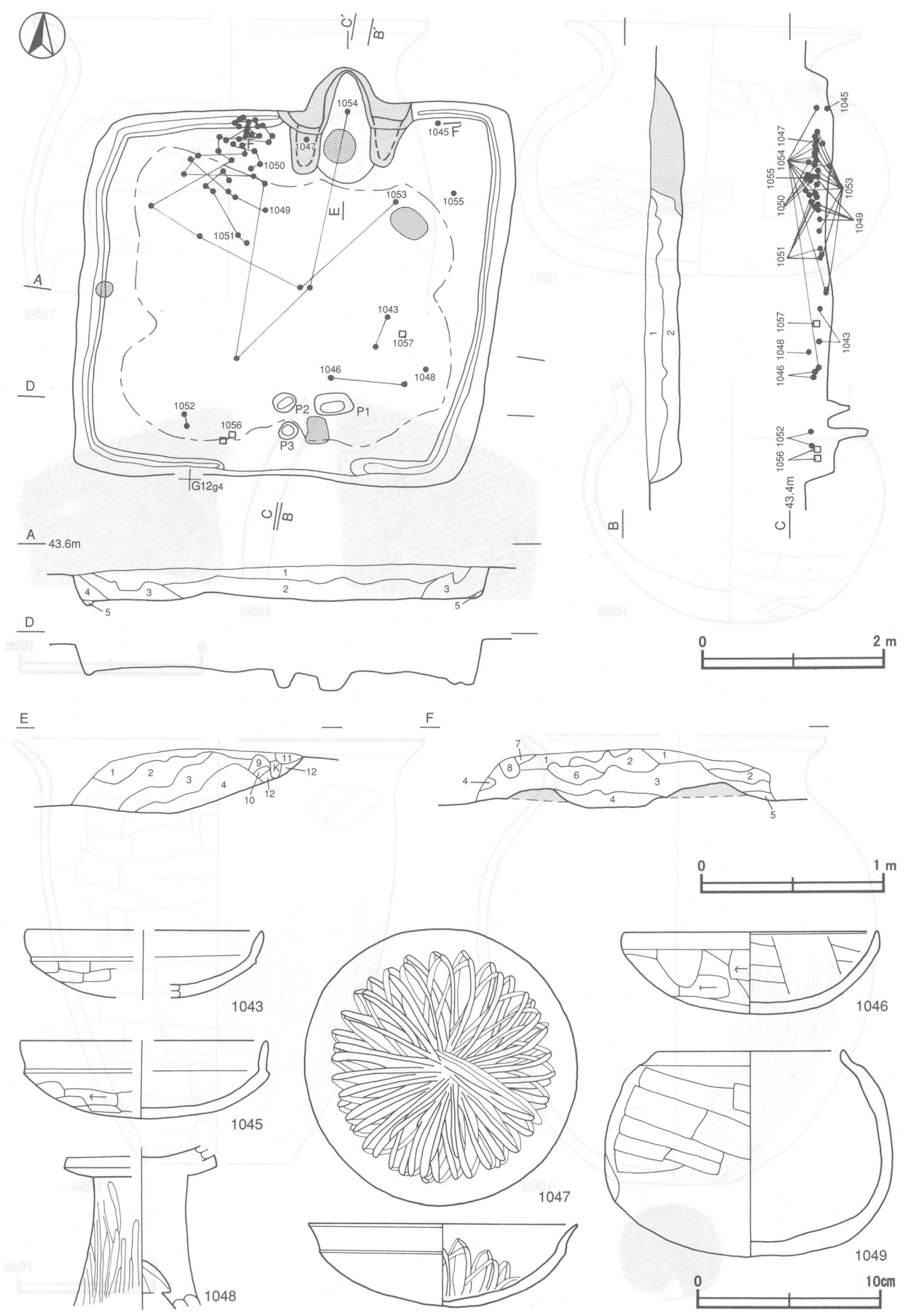
竈 北壁の中央部やや東寄りに付設されており, 規模は焚口部から煙道部まで約125cm, 袖部幅約140cm, 壁外への掘り込みは約40cmである。火床部は床面とほぼ同じ高さで, 火床面が火熱を受けて赤変硬化している。また, 煙道の立ち上がりに柱状の礫片が据えられ, 火熱を受けている。煙道は, 緩やかに傾斜して立ち上がる。

竈土層解説

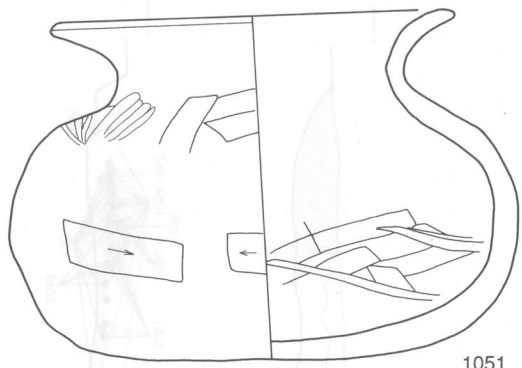
- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化物微量
- 3 黒褐色 炭化材中量, ロームブロック・焼土ブロック少量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック多量, ロームブロック微量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量
- 6 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少量
- 7 黒色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少量
- 8 黒色 ロームブロック微量
- 9 極暗赤褐色 焼土ブロック多量, 炭化材少量
- 10 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子中量
- 11 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化材微量
- 12 暗赤褐色 ローム粒子多量, 焼土ブロック微量

ピット 3か所。P1～P3は深さ20～42cmで, いずれも竈に対峙した位置に認められることから出入口施設に伴うピットと考えられる。

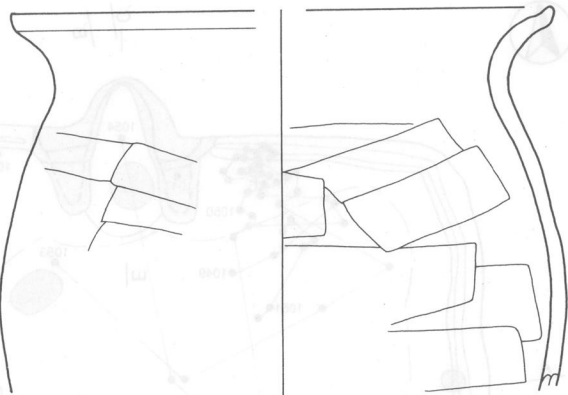
覆土 5層からなり, 各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。



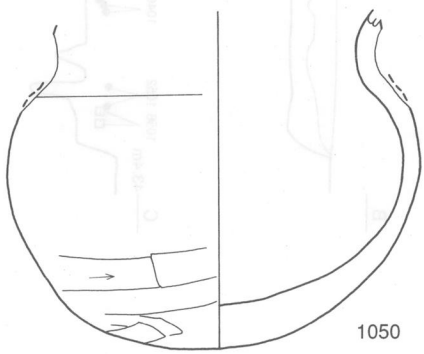
第220图 第282号住居跡・出土遺物実測図



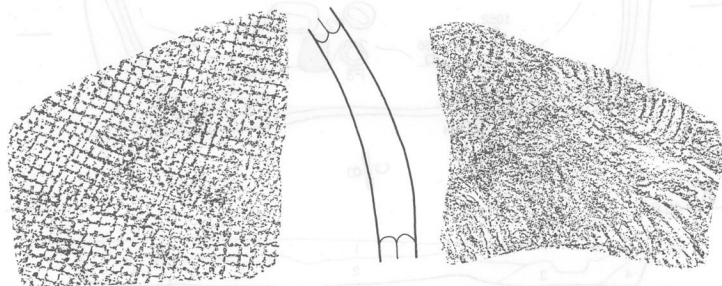
1051



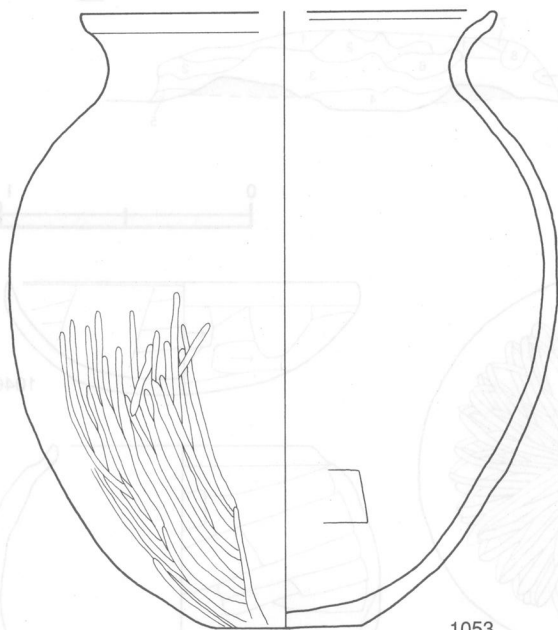
1052



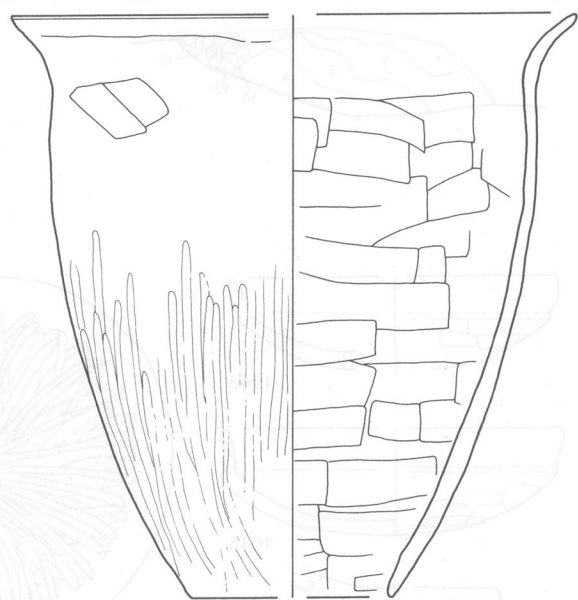
1050



1055



1053

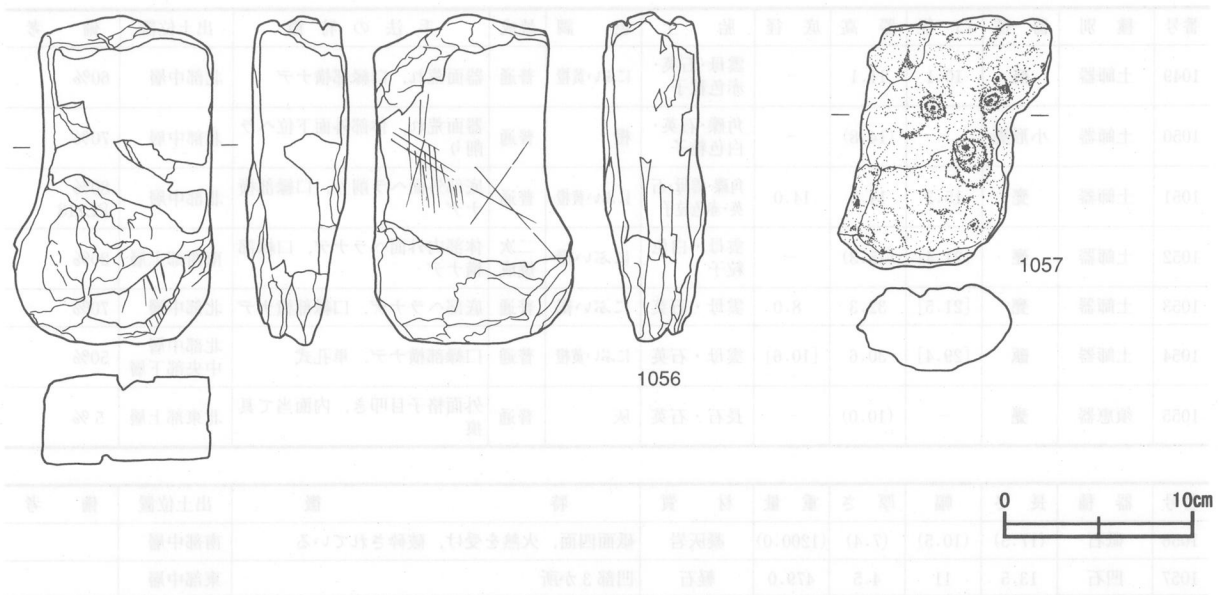


1054



第221图 第282号住居跡出土遺物実測図(1)





第222図 第282号住居跡出土遺物実測図(2)

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量
- 2 黒色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量
- 3 黒褐色 ロームブロック多量, 焼土ブロック・炭化物少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・炭化物中量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片954点(坏220, 高坏12, 甕704, 甗18), 須恵器片31点(坏1, 高台付坏1, 甕29), 石器2点(砥石), 礫片59点(被熱痕)がほぼ全域から散在した状態で出土している。1045は北東部の床面, 1047は竈付近の中層からそれぞれ出土しており, 廃絶に伴って遺棄されたものと考えられる。また, 1048は南東部の覆土上層, 1055は北東部の覆土上層, 1057は東部の覆土中層からそれぞれ出土している。さらに, 1056は南部の覆土中層, 1043は東部覆土中層, 1046は南東部中層, 1049・1050・1051は北部の覆土中層, 1052は南部の覆土上層, 1053・1054は北部から中央部にかけての覆土中層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。これらは, 住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。

**所見** 本跡は床面から多量の炭化材が出土しているが, 柱材が認められていない。その状況から, 住居廃絶に伴う焼失住居と考えられる。時期は, 出土土器から7世紀前葉と考えられる。

第282号住居跡出土遺物観察表 (第220~222図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1043	土師器	坏	[12.8]	(3.6)	-	雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラナデ, 口縁部横ナデ	東部中層	40%
1045	土師器	坏	[13.4]	4.2	-	雲母・石英・白色粒子	灰褐	普通	体部内外面ヘラナデ, 口縁部横ナデ	北東部床面	60%
1046	土師器	坏	13.8	4.4	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部内外面ヘラナデ, 口縁部横ナデ	南東部中層	55%
1047	土師器	坏	14.6	4.5	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部内面暗文状のヘラ磨き	竈付近中層	100% PL218
1048	土師器	高坏	-	(8.8)	-	角礫・長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	脚部外面ヘラ磨き, 内面ナデ	南東部上層	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1049	土師器	椀	10.1	11.1	-	雲母・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	器面荒れ、口縁部横ナデ	北部中層	60%
1050	土師器	小形甕	-	(14.8)	-	角礫・石英・白色粒子	橙	普通	器面荒れ、体部外面下位ヘラ削り	北部中層	70%
1051	土師器	甕	15.3	14.0	14.0	角礫・雲母・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ	北部中層	80% PL218
1052	土師器	甕	[21.4]	(15.3)	-	雲母・白色粒子	にぶい橙	二次焼成	体部内外面ヘラナデ、口縁部横ナデ	南西部上層	20%
1053	土師器	甕	[21.5]	32.3	8.0	雲母・石英	にぶい褐	普通	底部ヘラナデ、口縁部横ナデ	北部中層	70%
1054	土師器	甕	[29.4]	30.6	[10.6]	雲母・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ、単孔式	北部中層・中央部下層	50%
1055	須恵器	甕	-	(10.0)	-	長石・石英	灰	普通	外面格子目叩き、内面当て具痕	北東部上層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1056	砥石	(17.5)	(10.5)	(7.4)	(1200.0)	凝灰岩	砥面四面、火熱を受け、破碎されている	南部中層	
1057	凹石	13.5	11	4.5	479.0	軽石	凹部3か所	東部中層	

### 第283号住居跡（第223図）

**位置** 調査区北部のH12f9区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第243号住居跡を掘り込み、第191号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 東西軸が約2.5m、南北軸は南側が調査区域外に延びているために2.1mだけが確認でき、平面形は長方形と想定される。主軸方向はN-5°-Wであり、壁高は10cmと低い。

**床** 床面は平坦で、中央部がよく踏み固められている。東側の約半分が貼床である。壁溝は認められない。

**ピット** 2か所。P1・P2は深さは40cm・30cmで、底面が固く締まっていることから柱穴と考えられる。

**覆土** 3層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。3層は貼床である。

#### 土層解説

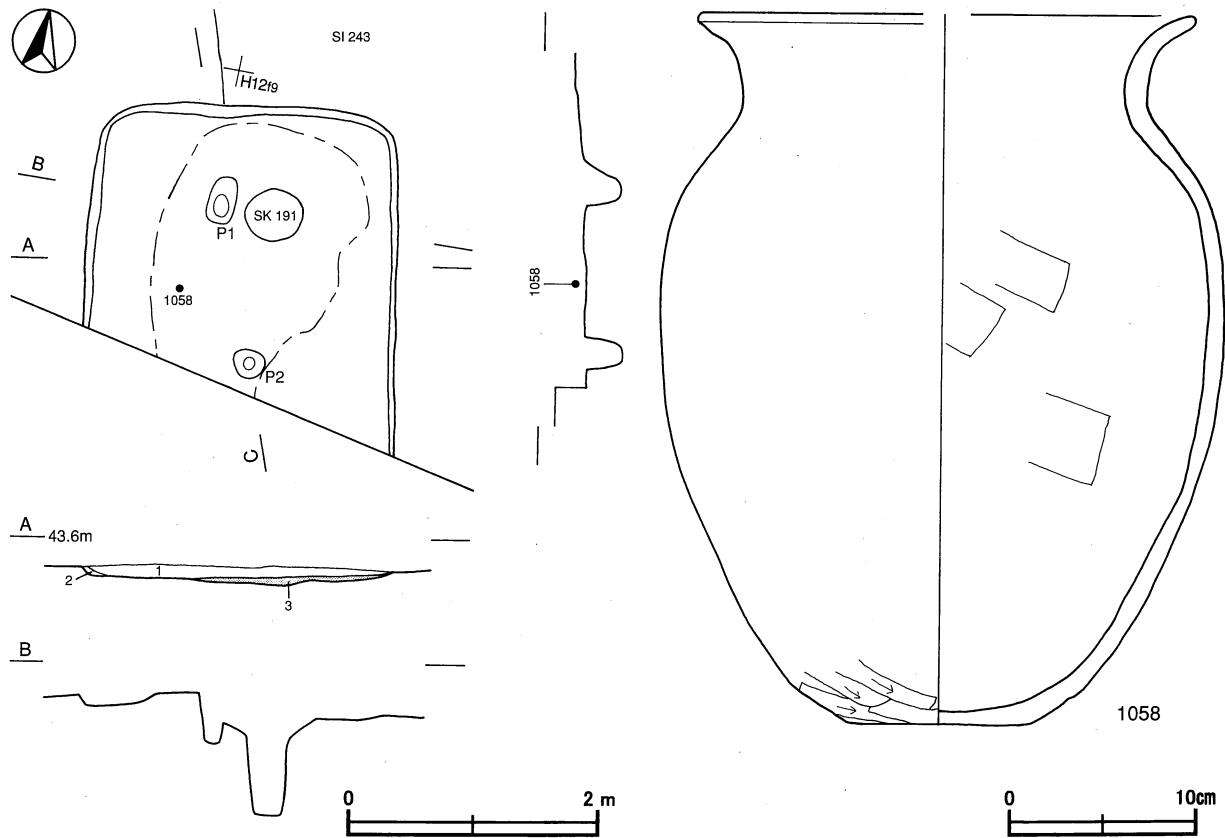
- 1 黒色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物少量、焼土ブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量（貼床）

**遺物出土状況** 出土遺物は少なく、土師器片46点（坏3、甕43）がほぼ全域から散在した状態で出土しただけである。1058は中央部の覆土下層から出土している。

**所見** 確認できた範囲で炉や竈は検出されず、遺構の形態は判然としないが、小竪穴状遺構の可能性が想定され、時期は、出土土器から7世紀代と考えられる。

### 第283号住居跡出土遺物観察表（第223図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1058	土師器	甕	[25.4]	37.2	9.6	雲母・石英・赤色粒子	にぶい褐	二次焼成	外面荒れ、底部外面ヘラ削り	中央部下層	50%



第223図 第283号住居跡・出土遺物実測図

第287号住居跡 (第224図)

位置 調査区北部のG12g2区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第280号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南北軸は北側が重複で掘り込まれているために約2.3m、東西軸は西側が調査区域外に伸びているために約2.7mが確認でき、平面形については判然としない。主軸方向は貯蔵穴の位置と東壁から、 $N-4^{\circ}-W$ と推定される。壁高は20~27cmで、やや外傾して立ち上がる。炉と竈については、北側を重複で掘り込まれていることや西側が調査区域外に伸びていることなどから不明である。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は壁際を巡っていることから、周回していたものと想定される。

貯蔵穴 南東コーナー部に付設され、規模は径約70cmのほぼ円形で、深さ約55cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 3 黒色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

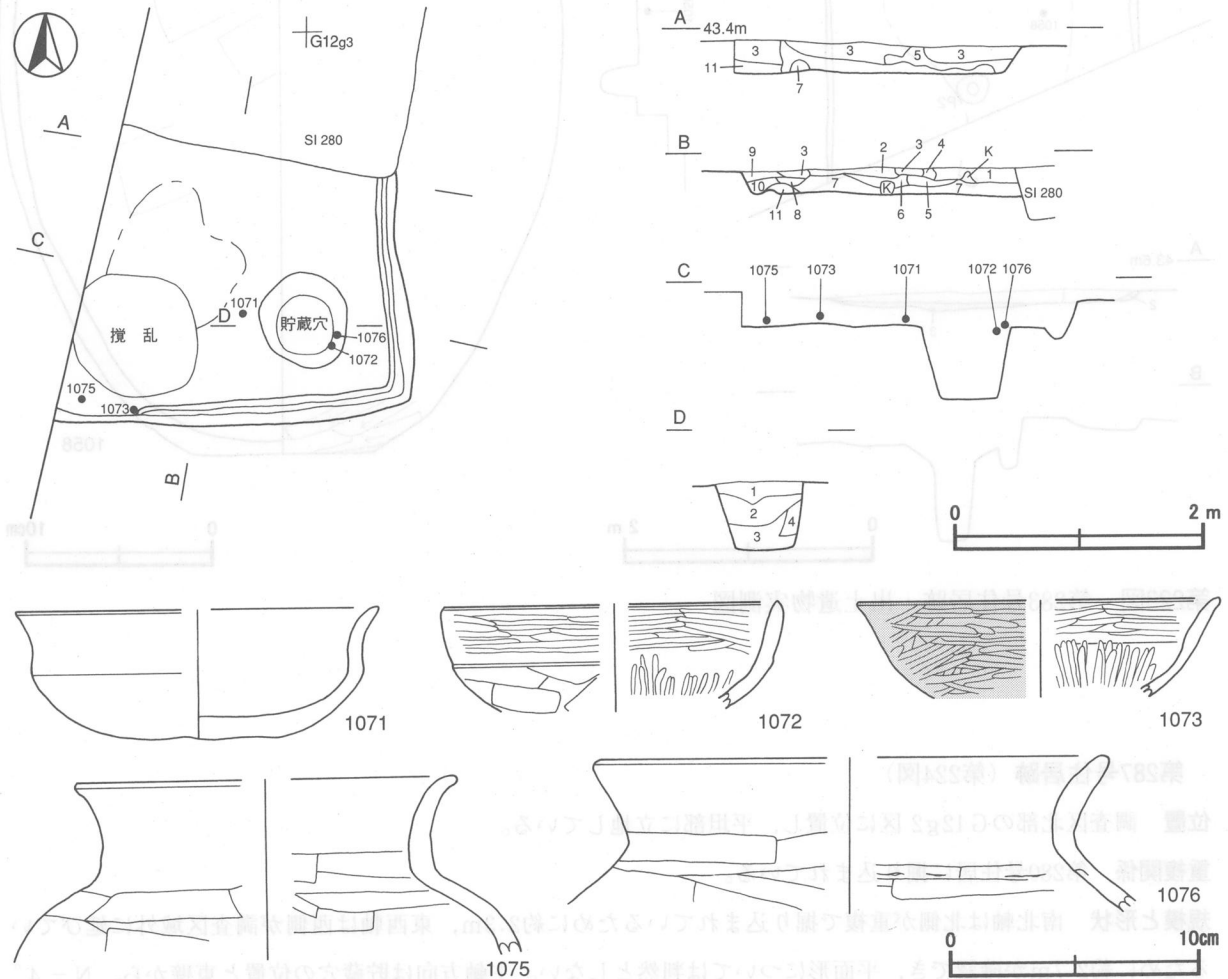
ピット 認められない。

覆土 11層からなり、ロームブロックや焼土を含み、ブロック状の堆積状況を示したた人為堆積である。

土層解説

- 1 黒色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量

- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土ブロック微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 5 黒色 炭化粒子少量, ロームブロック・焼土ブロック微量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量
- 7 極暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック微量
- 8 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 9 黒褐色 ローム粒子少量
- 10 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 11 黒色 ローム粒子微量



第224図 第287号住居跡・出土遺物実測図

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片380点(坏77, 甕303), 須恵器片2点(坏1, 蓋1)がほぼ全域から散在した状態で出土している。1071・1073・1075は南部下層, 1072・1076は貯蔵穴の覆土上層からそれぞれ出土している。

**所見** 本跡は, 北部が重複で掘り込まれ, さらに西部が調査区域外のために遺構全体の状況は確認できないが, 南東部に貯蔵穴が付設されている。時期は, 出土土器から6世紀前葉と考えられる。

第287号住居跡出土遺物観察表(第224図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1071	土師器	坏	[14.4]	5.2	-	石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	器面荒れ, 口縁部横ナデ	南部下層	50%
1072	土師器	坏	[13.4]	(4.2)	-	砂粒	明赤褐	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	貯蔵穴上層	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1073	土師器	坏	[14.4]	(3.8)	-	長石・石英	赤	普通	内外面ヘラ磨き	南部下層	10% 外面赤彩
1075	土師器	甕	[15.0]	(7.0)	-	長石・石英	暗赤褐	普通	体部内外面ヘラナデ, 口縁部横ナデ	南部下層	10%
1076	土師器	甕	[20.0]	(6.2)	-	角礫・長石・石英	明赤褐	普通	体部内外面ヘラナデ, 口縁部横ナデ	貯蔵穴上層	5%

### 第291号住居跡 (第225図)

**位置** 調査区北部北東寄りのF14h6区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第8号住居跡を掘り込み、第17・34号住居に掘り込まれている。

**規模と形状** 南北軸は約6.0mで、西側部分が調査区域外に延びているため、東西軸は約4.0mが確認できた。東側部分の形状からN-11°-Wを主軸とする方形または長方形と推定される。壁高は30cm前後で、各壁とも外傾して立ち上がっている。

**床** やや軟弱な床で、硬化面は確認されなかった。壁溝は壁際を巡っており、全周していたと推測される。床面に炭化材が散在しており、焼失住居である。

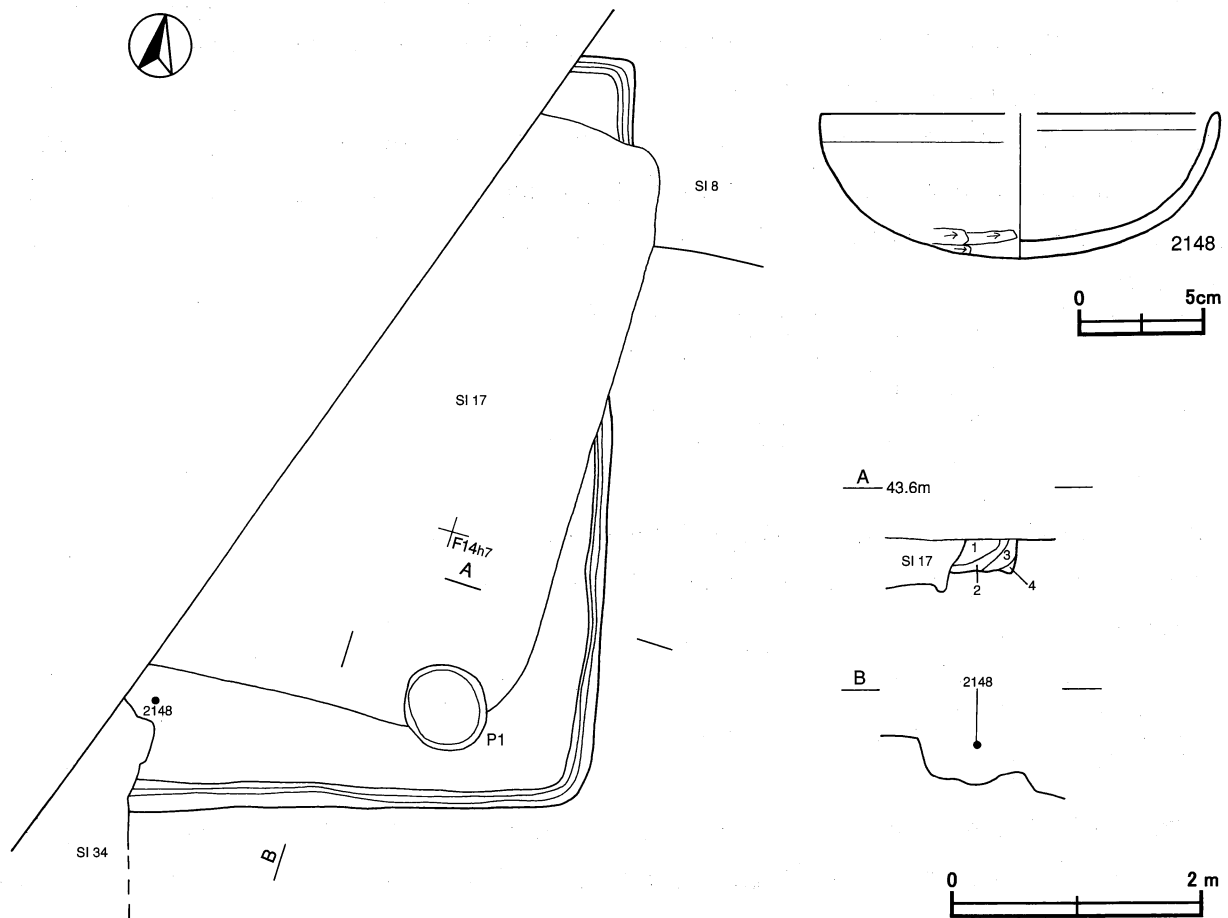
**竈** 検出されなかったが、調査区域外に存在していると考えられる。

**ピット** 1か所。深さは36cmで、形状から柱穴と判断したが、他は検出されず不明である。

**覆土** 4層からなり、ロームブロックや焼土ブロックの含有状況から、人為堆積であると思われる。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量, 炭化粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック・焼土粒子中量



第225図 第291号住居跡・出土遺物実測図

- 3 暗 褐 色 焼土粒子中量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子少量

**遺物出土状況** 土師器片77点（坏13，甕64）が出土したが、ほとんどが覆土中層からのものであり、床面から確認された遺物は少ない。南部上層出土の2148は、割れ口が摩滅しているため、本跡廃絶後に混入したものと考えられる。また、東壁際床面や南壁際床面から炭化材が4点出土している。

**所見** 本跡は西側部分が調査区域外に延びており、加えて、本跡の大部分を第17号住居に掘り込まれているため、全体の形状を把握することはできなかった。本跡は炭化材の出土状況から焼失住居と考えられる。本跡は遺存状態が悪いため、焼失状況については不明である。遺物はいずれも細片であり、形状の把握が困難であるが、本跡の時期は、出土土器から7世紀後半と考えられる。

第291号住居跡出土遺物観察表（第225図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2148	土師器	坏	[15.8]	5.7	-	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	底部外面多方向のヘラ削り	南部上層	40%

### 第293号住居跡（第226・227図）

**位置** 調査区北部のH12c2区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第294・297号住居跡を掘り込み、第292号住居、第440号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸が約4.6m、短軸が約3.0mの長方形で、主軸方向はN-79°-Wである。壁高は8cmと低い。

**床** ほぼ平坦で北部は貼床であるが、特に硬化した部分は認められない。壁溝は東壁で重複のために一部で確認できないが、周回していたものと想定される。

**竈** 西壁の北寄りに付設されており、規模は焚口部から煙道部まで約100cm、袖部幅約90cm、壁外への掘り込みは約30cmである。火床部は床面とほぼ同じ高さの平坦面を利用し、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は火床面から緩やかな傾斜で立ち上がり、中位では急な傾斜で立ち上がっている。

#### 竈土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子中量、焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量
- 2 暗 赤 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 5 褐 色 ローム粒子多量、炭化粒子微量
- 6 黒 褐 色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 暗 褐 色 ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量

**ピット** 4か所。P1～P4は深さ16cm前後と浅いが、配置から支柱穴と考えられる。

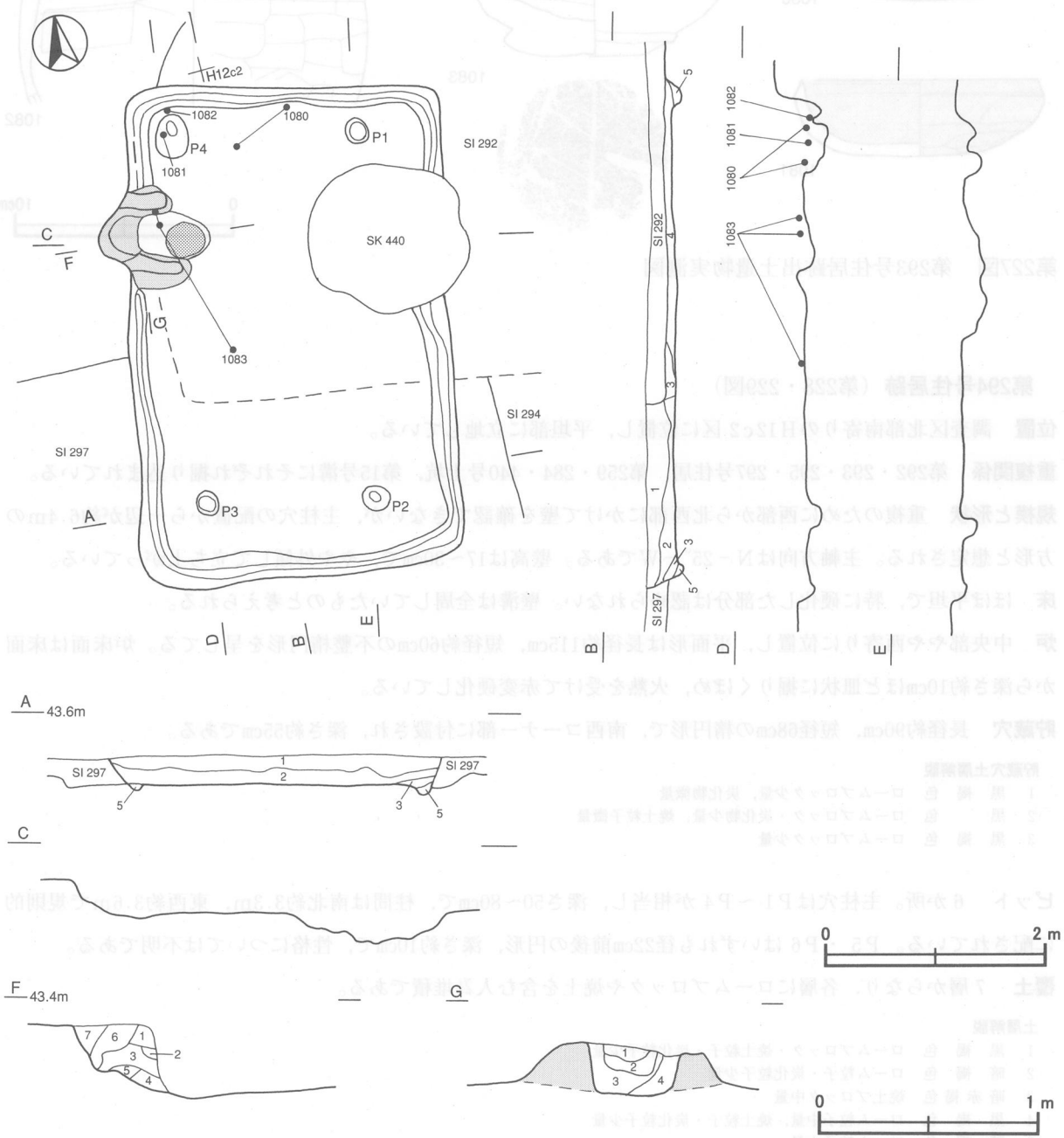
**覆土** 5層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

#### 土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック中量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック多量
- 4 黒 褐 色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子中量

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片92点（坏20，高坏1，甕71），礫片2点がほぼ全域から散在した状態で出土している。1080は北部の床面，1083は竈火床部の覆土下層と西部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。また，1081・1082は，いずれも北西部の床面から出土している。

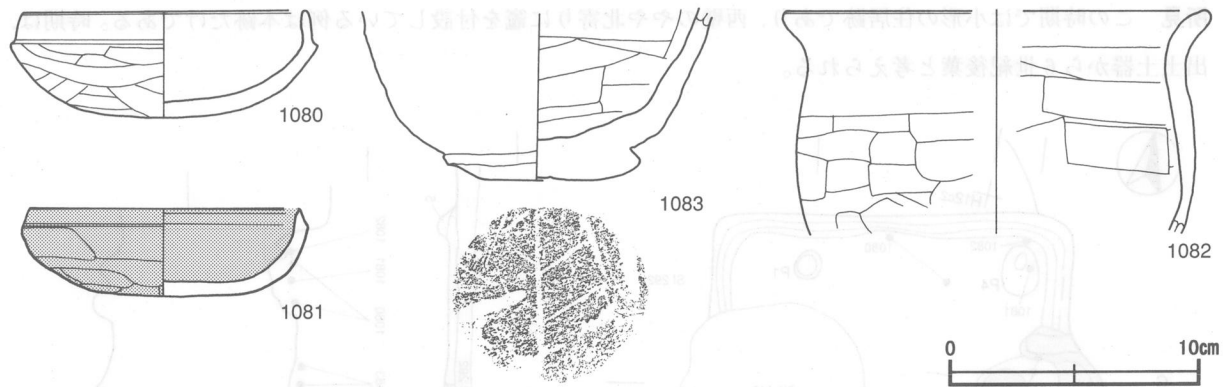
所見 この時期では小形の住居跡であり、西壁のやや北寄りに竈を付設している例は本跡だけである。時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第226図 第293号住居跡実測図

第293号住居跡出土遺物観察表 (第227図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1080	土師器	坏	11.2	4.2	-	石英・赤色 粒子	にぶい橙	普通	体部内面ナデ, 口縁部横ナデ	北部床面	100% PL218
1081	土師器	坏	10.8	3.5	-	石英・赤色 粒子	灰褐	普通	外面荒れ, 体部内面ナデ, 口 縁部横ナデ	北西部床面	100% PL218
1082	土師器	小形甕	[16.6]	(8.9)	-	長石・石英	明赤褐	普通	体部内外面ヘラナデ, 口縁部 横ナデ	北西部床面	10%
1083	土師器	小形甕	-	(6.6)	7.4	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい褐	普通	底部木葉痕, 体部内面ヘラナ デ	竈火床部・ 西部下層	10%



第227図 第293号住居跡出土遺物実測図

### 第294号住居跡 (第228・229図)

**位置** 調査区北部南寄りのH12c2区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第292・293・295・297号住居，第259・284・440号土坑，第15号溝にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 重複のために西部から北西部にかけて壁を確認できないが，支柱穴の配置から一辺が約6.4mの方形と想定される。主軸方向はN-25°-Wである。壁高は17~30cmで，やや外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で，特に硬化した部分は認められない。壁溝は全周していたものと考えられる。

**炉** 中央部やや西寄りに位置し，平面形は長径約115cm，短径約60cmの不整楕円形を呈している。炉床面は床面から深さ約10cmほど皿状に掘りくぼめ，火熱を受けて赤変硬化している。

**貯蔵穴** 長径約90cm，短径68cmの楕円形で，南西コーナー部に付設され，深さ約55cmである。

#### 貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量，炭化物微量
- 2 黒色 ロームブロック・炭化物少量，焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量

**ピット** 6か所。支柱穴はP1~P4が相当し，深さ50~80cmで，柱間は南北約3.3m，東西約3.6mで規則的に配されている。P5・P6はいずれも径22cm前後の円形，深さ約10cmで，性格については不明である。

**覆土** 7層からなり，各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

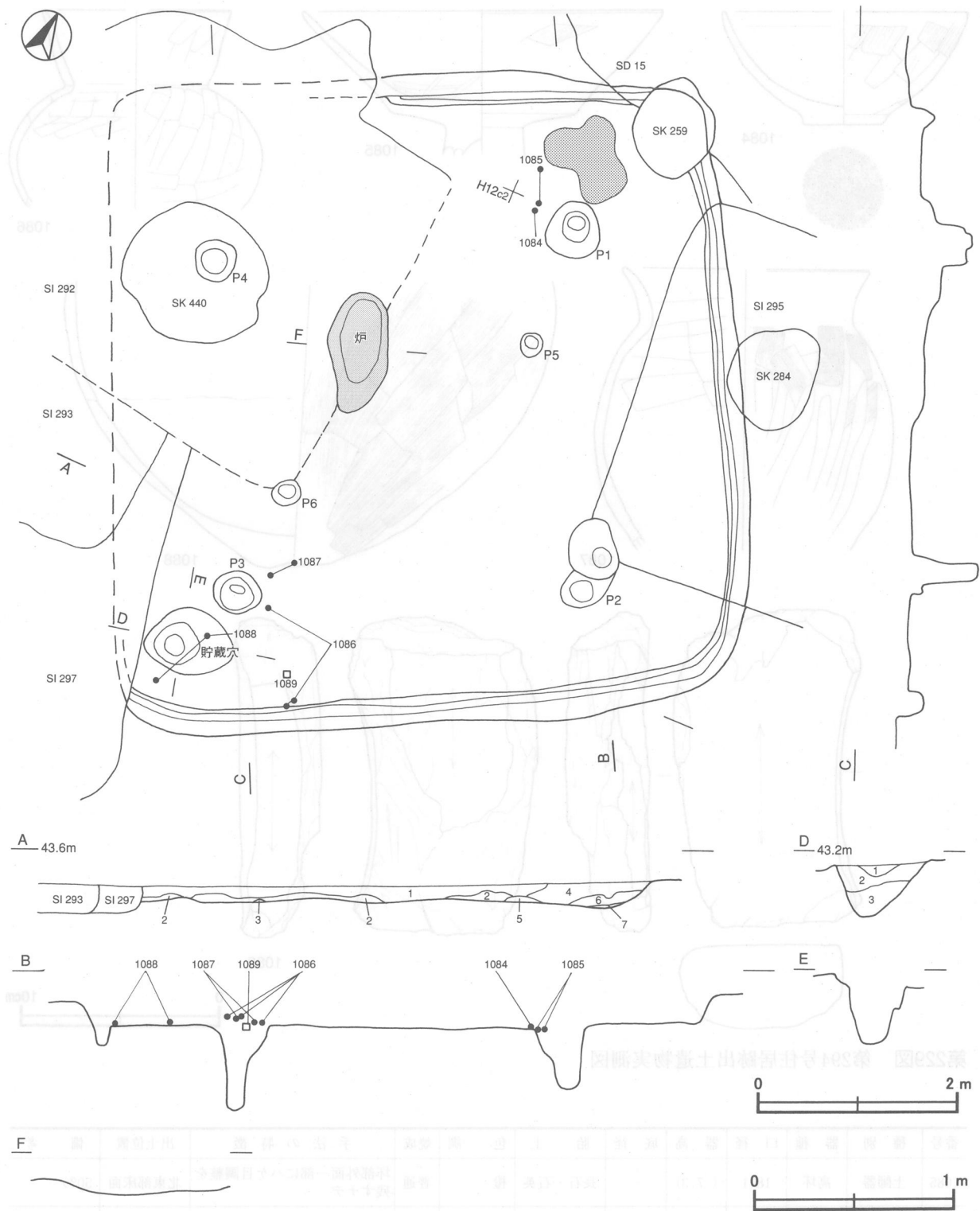
#### 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量
- 6 極暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子多量，炭化粒子微量

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片197点（坏32，高坏12，埴1，甕152），石器1点（砥石）がほぼ全域から散在した状態で出土している。1084は北東部，1089は南西部の床面からそれぞれ出土している。また，1085は北東部の床面，1086~1088はいずれも南西部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。

**所見** 時期は，炉を中央部西寄りに有し，貯蔵穴を南西コーナー部に付設する遺構の形態や出土土器から4世紀末と考えられる。

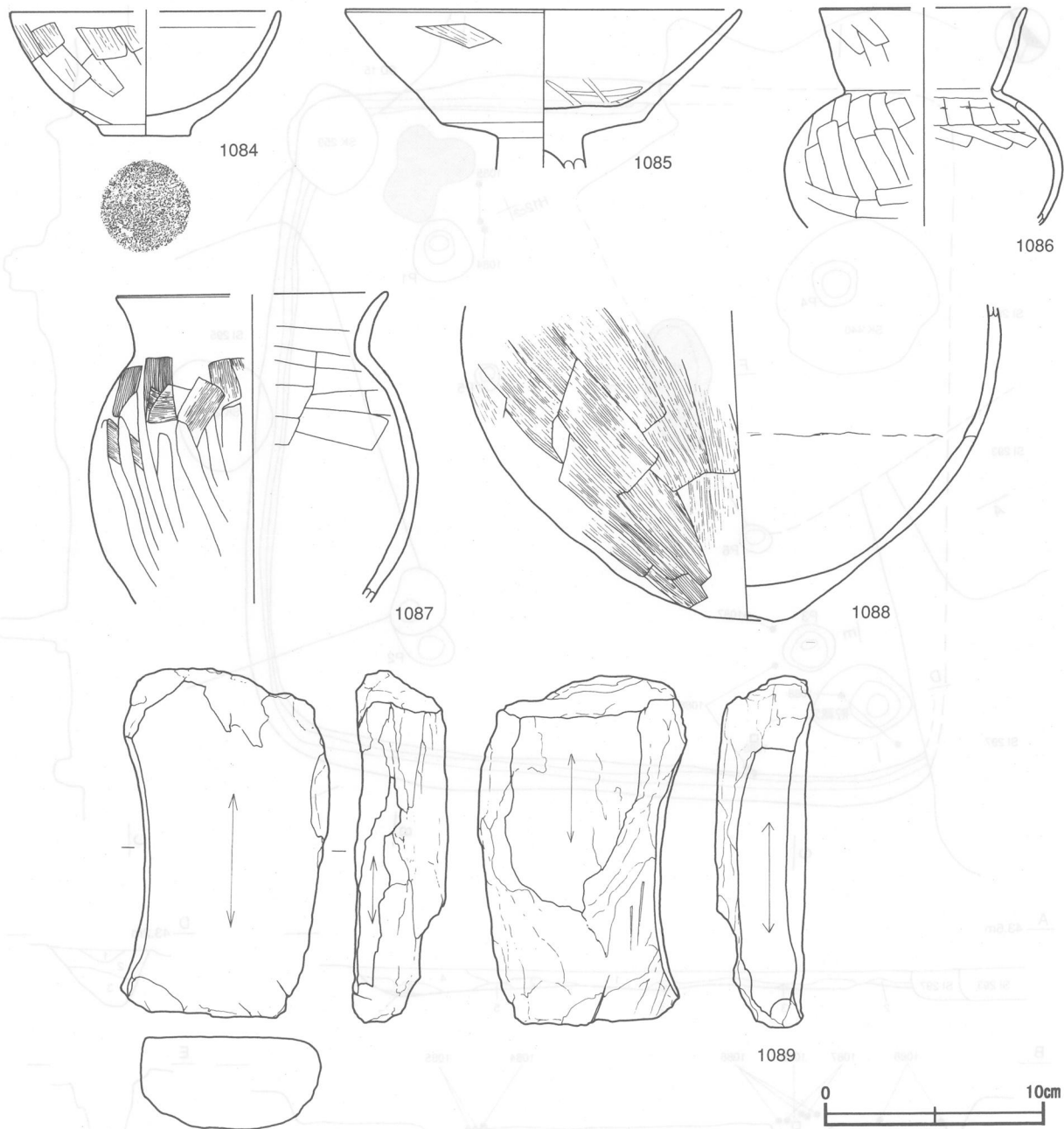




第228図 第294号住居跡実測図

第294号住居跡出土遺物観察表 (第229図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1084	土師器	坏	[12.3]	5.7	3.9	長石・石英	にぶい橙	普通	底部外面ヘラナデ, 体部内面ナデ	北東部床面	20%



第229図 第294号住居跡出土遺物実測図

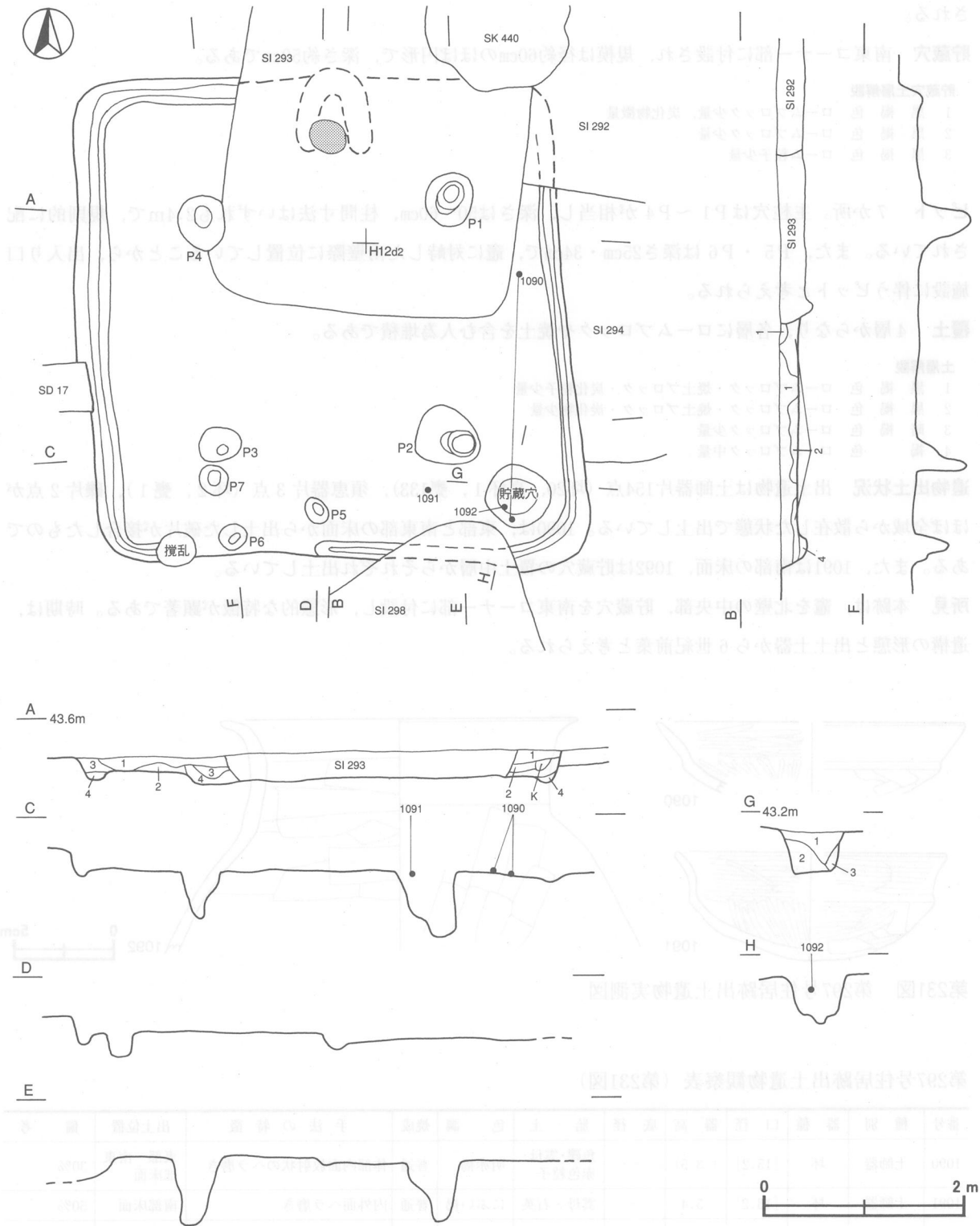
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1085	土師器	高坏	18.1	(7.3)	-	長石・石英	橙	普通	坏部外面一部にハケ目調整を残すナデ	北東部床面	50%
1086	土師器	柑	[9.4]	(6.3)	-	雲母・長石	明赤褐	普通	内外面ヘラナデ	南西部下層	20%
1087	土師器	甕	[12.2]	(14.0)	-	角礫・長石・石英	灰褐	普通	体部外面ハケ目調整後ヘラ磨き	南西部下層	15%
1088	土師器	甕	-	(17.1)	2.8	雲母・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面ハケ目調整, 底部外面ヘラ削り	南西部下層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1089	砥石	(16.0)	(9.5)	(4.5)	(890.0)	凝灰岩	砥面4面, その他は破断面	南西部床面	PL268

第297号住居跡 (第230・231図)

位置 調査区北部のH12d1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第294号住居跡を掘り込み、第292・293・298号住居、第440号土坑、第17号溝にそれぞれ掘り込まれている。



第230図 第297号住居跡実測図

**規模と形状** 一辺が4.8m前後の方形で、主軸方向はN-4°-Eである。壁高は約20cmで、やや外傾して立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、特に硬化している部分は認められない。壁溝は重複のため北東部では確認できないが、南壁の一部を除き、周回してしていたものと思われる。

**竈** 重複のために遺存状態が悪く、火床面の一部が確認できただけで、北壁の中央部に付設されていたと想定される。

**貯蔵穴** 南東コーナー部に付設され、規模は径約60cmのほぼ円形で、深さ約50cmである。

**貯蔵穴土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

**ピット** 7か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは50～60cm、柱間寸法はいずれも2.4mで、規則的に配されている。また、P5・P6は深さ25cm・34cmで、竈に対峙した南壁際に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

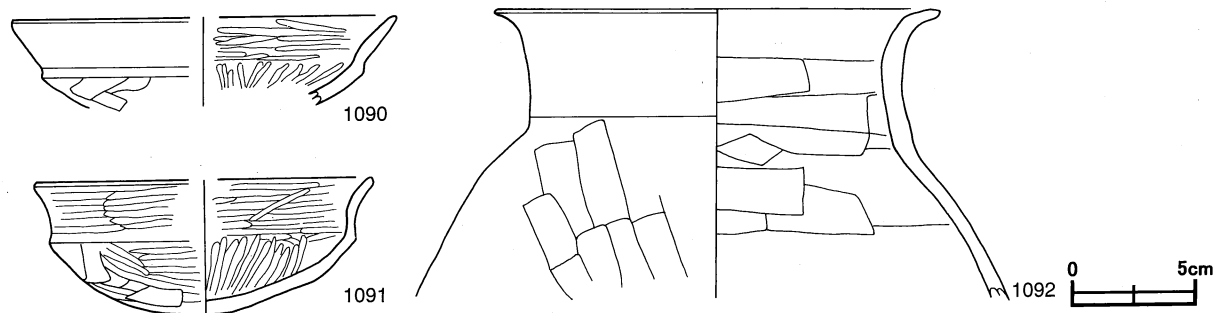
**覆土** 4層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片154点（坏20，高坏1，甕133），須恵器片3点（坏2，甕1），礫片2点がほぼ全域から散在した状態で出土している。1090は、東部と南東部の床面から出土した破片が接合したものである。また、1091は南部の床面、1092は貯蔵穴の覆土中層からそれぞれ出土している。

**所見** 本跡は、竈を北壁の中央部、貯蔵穴を南東コーナー部に付設し、形態的な特徴が顕著である。時期は、遺構の形態と出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第231図 第297号住居跡出土遺物実測図

第297号住居跡出土遺物観察表（第231図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1090	土師器	坏	[15.2]	(3.5)	-	角礫・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	東部・南東部床面	30%
1091	土師器	坏	[13.2]	5.4	-	雲母・石英	にぶい褐	普通	内外面ヘラ磨き	南部床面	50%
1092	土師器	甕	17.4	(11.5)	-	角礫・長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内外面ヘラナデ，口縁部横ナデ	貯蔵穴中層	30%

第298号住居跡（第232図）

位置 調査区北部のH12d2 区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第297号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 ほとんどが調査区域外のために北東コーナー部だけが検出され、南北軸約1.5m、東西軸約1.4mが確認されたが、平面形については判然としない。炉や竈は、確認されていない。

床 ほぼ平坦である。壁溝は認められない。

ピット 3か所。いずれも性格は不明である。

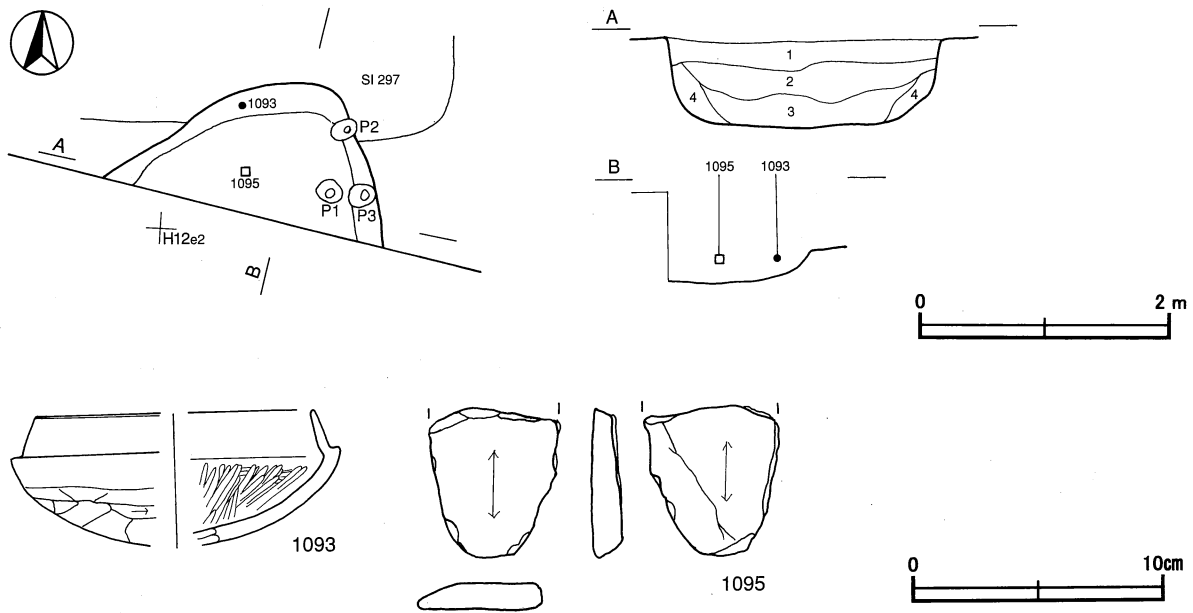
覆土 4層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量，ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 炭化粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片23点（坏8，高坏5，甕10），須恵器片1点（甕），石器1（砥石）が散在した状態で出土している。1093は北壁際の覆土上層，1095は北東部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は6世紀前葉と比定される第297号住居跡を掘り込んでおり，出土土器から時期は6世紀中葉と考えられる。



第232図 第298号住居跡・出土遺物実測図

第298号住居跡出土遺物観察表（第232図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1093	土師器	坏	[11.0]	(5.3)	-	石英	にぶい褐	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	北部上層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1095	砥石	(6.0)	5.3	1.1	(46.1)	砂岩	砥面2面	北東部上層	

第302号住居跡 (第233図)

位置 調査区北部のH12g4区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第301・303号住居にそれぞれ掘り込まれている。

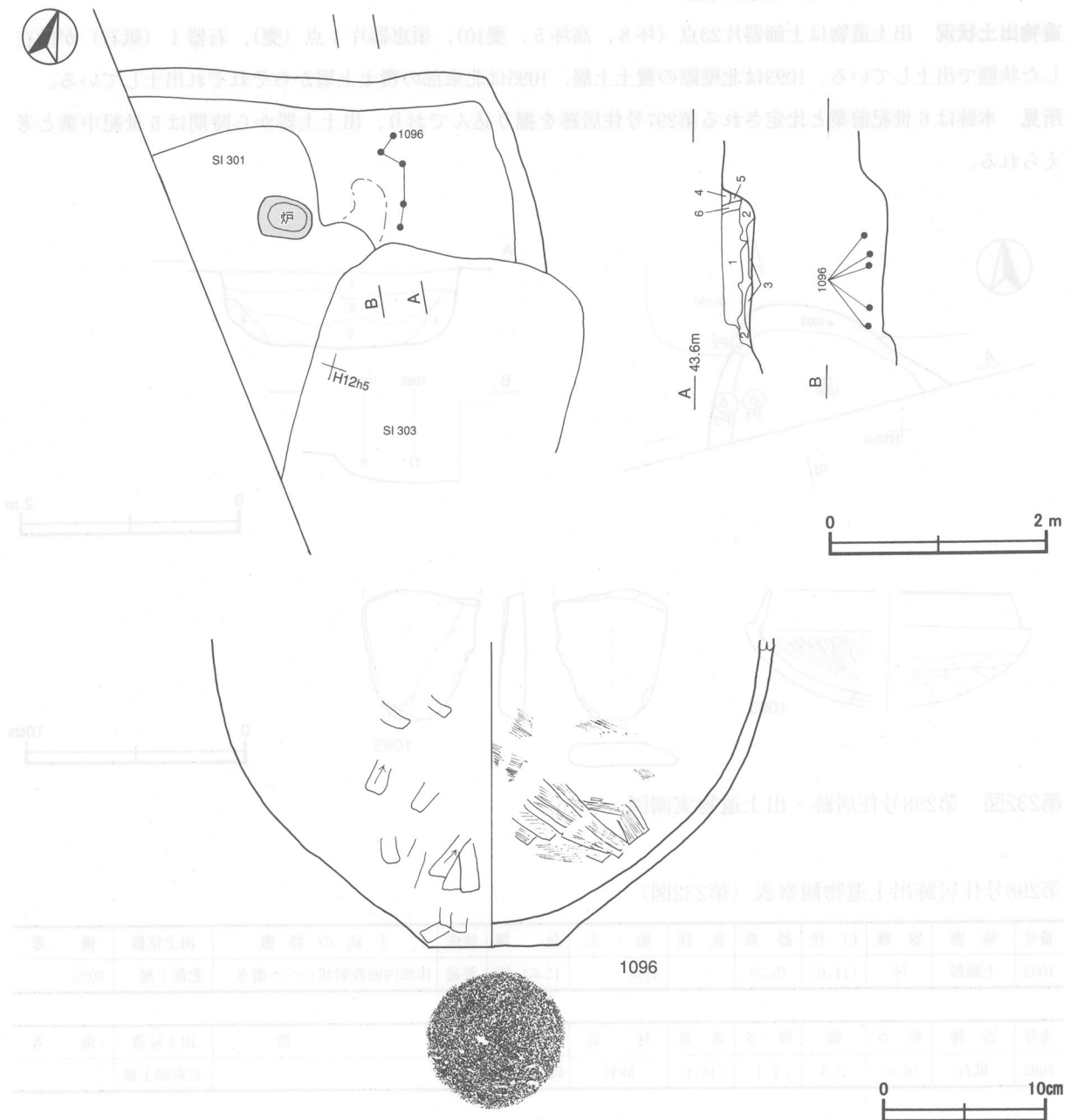
規模と形状 西側部分のほとんどが調査区域外に延び、さらに重複で中央部及び西部を掘り込まれているために北東コーナー部だけが検出され、南北軸約3.3m、東西軸約3.0mが確認されたが、平面形は長方形または方形と推定される。主軸方向はN-15°-Wである。壁高は18~30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、調査区域外にかかる西側中央部で硬化した部分が認められる。壁溝は認められない。

炉 北部のほぼ中央に付設され、長径約50cm、短径約36cmの楕円形で、炉床は火熱を受け赤変硬化している。

ピット 認められない。

覆土 6層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。



第233図 第302号住居跡・出土遺物実測図

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量

**遺物出土状況** 出土遺物は少なく, 土師器片20点(坏1, 甕19), 須恵器片1点(坏)が散在した状態で出土している。1096は, 北東部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。

**所見** 本跡は炉が北部中央に付設されていることや, 出土した土師器片の中にハケ目調整痕が残るものが多数みられることから, 時期は4世紀後葉に位置づけられる。

#### 第302号住居跡出土遺物観察表(第233図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1096	土師器	甕	-	(18.5)	8.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	底部ヘラナデ, 体部内外面ハケ目調整後ナデ	北部中層	30%

#### 第304号住居跡(第234図)

**位置** 調査区北部のH12j6区に位置し, 平坦部に立地している。

**重複関係** 第307号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 西側部分のほとんどが調査区域外に延びているため, 東壁と南東コーナー部だけが検出され, 南北軸は約4.4m, 東西軸は約0.5mだけが確認でき, 平面形は方形または長方形と推定される。壁高は約25cmで, ほぼ直立する。炉や竈は確認されていない。

**床** 全面が貼床で, ほぼ平坦である。壁溝は認められない。

**炉・竈** 検出されなかった。

**ピット** 認められない。

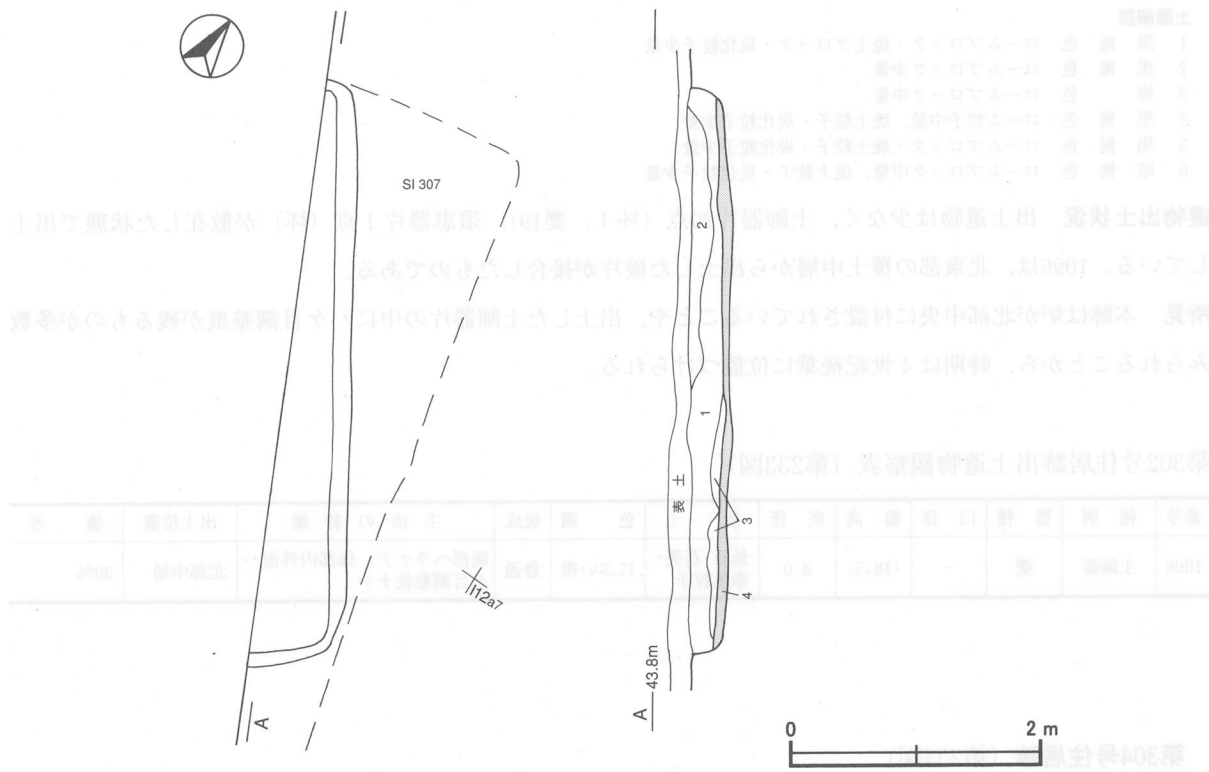
**覆土** 3層からなり, 各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。土層断面図中, 4層は貼床層である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量, ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒色 炭化粒子中量, ロームブロック・焼土ブロック少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片145点(坏42, 高坏4, 甕98, 甗1), 須恵器片9点(坏4, 甕3, 蓋2)が散在した状態で出土しているが, いずれも細片のために図示できない。須恵器片は破断面がいずれも摩滅していることから, 後世の耕作等による混入と考えられる。

**所見** 本跡は4世紀末に比定される第307号住居跡を掘り込んでいることや土師器片から判断して, 時期は6世紀前葉と位置づけられる。



第234図 第304号住居跡実測図

第305号住居跡 (第235・236図)

位置 調査区中央部西寄りのH12i6区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第303・306号住居、第201・202・800号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 西部が調査区域外に延びているため、全体の様相は把握できないが、南北軸6.8m、東西軸4.3mだけが確認できた。遺存している竈、北・東・南壁、ピットより主軸方向はN-28°-Wと考えられる。確認された壁高は27~34cmで、直立して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、ピットの内側から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っていることから、全周していたものと考えられる。貯蔵穴周辺は土手状の高まりが見られる。また、南部床面から焼土が検出されていることから、焼失住居である。

竈 北壁の中央部に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで132cm、袖部幅111cm、壁外への掘り込みは23cmである。天井部は崩落しており、土層断面図中の第10~13層が天井部の崩落土に相当し、粘土ブロック・粘土粒子を多量に含んでいる。火床部は床面と同じ高さの平坦面を使用し、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道は火床部から傾斜して立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 3 黒 褐 色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 4 褐 色 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 6 暗 赤 褐 色 焼土粒子多量、炭化粒子・粘土粒子少量
- 7 暗 赤 褐 色 炭化粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
- 8 暗 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 9 極 暗 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 10 極 暗 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック少量



- |    |        |   |                               |
|----|--------|---|-------------------------------|
| 11 | 黒      | 色 | ローム粒子・焼土ブロック・粘土ブロック少量         |
| 12 | にぶい黄褐色 |   | 粘土粒子多量, 焼土粒子少量                |
| 13 | 暗赤褐色   | 色 | 焼土粒子多量, 炭化粒子・粘土粒子少量           |
| 14 | 黒      | 色 | ロームブロック, 焼土ブロック・炭化粒子少量        |
| 15 | 極暗黒褐色  |   | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量  |
| 16 | 暗褐色    | 色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量      |
| 17 | 褐色     | 色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量       |
| 18 | 褐色     | 色 | ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量           |
| 19 | 暗赤褐色   | 色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子少量      |
| 20 | 暗褐色    | 色 | 焼土粒子中量, ロームブロック・炭化粒子少量        |
| 21 | にぶい黄褐色 |   | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量  |
| 22 | 暗赤褐色   | 色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量        |
| 23 | 暗褐色    | 色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量         |
| 24 | 暗褐色    | 色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック・粘土ブロック少量    |
| 25 | 黒褐色    | 色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量    |
| 26 | 暗赤褐色   | 色 | 焼土粒子中量, ロームブロック・粘土粒子少量        |
| 27 | 極暗褐色   | 色 | ロームブロック・焼土ブロック少量              |
| 28 | 暗赤褐色   | 色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子・粘土ブロック少量 |
| 29 | 暗赤褐色   | 色 | 焼土ブロック多量                      |
| 30 | 暗赤褐色   | 色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量         |

**ピット** 5か所。主柱穴はP1・P2が相当し、深さはP1が76cmで、P2は30cmとやや浅い。P4・P5は深さはいずれも47cmで、壁際に位置することから壁柱穴と考えられる。

**貯蔵穴** 南壁の中央部に付設され、平面形は一辺約75cmの円形である。深さは30cmで、底面が平坦であり、壁は直立している。

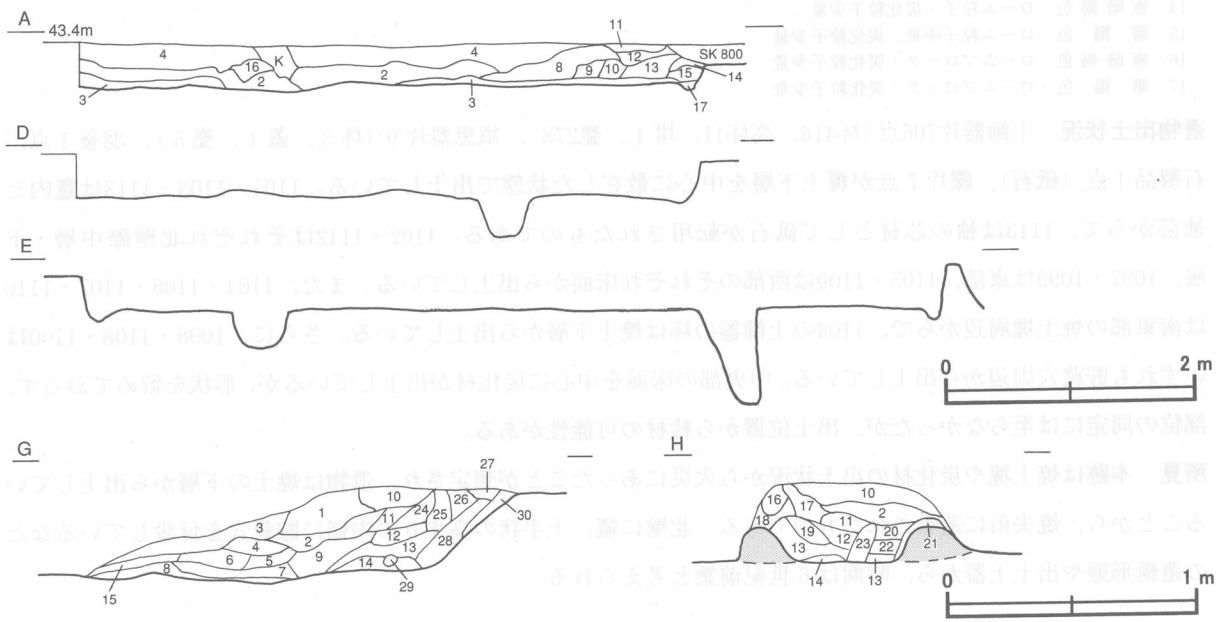
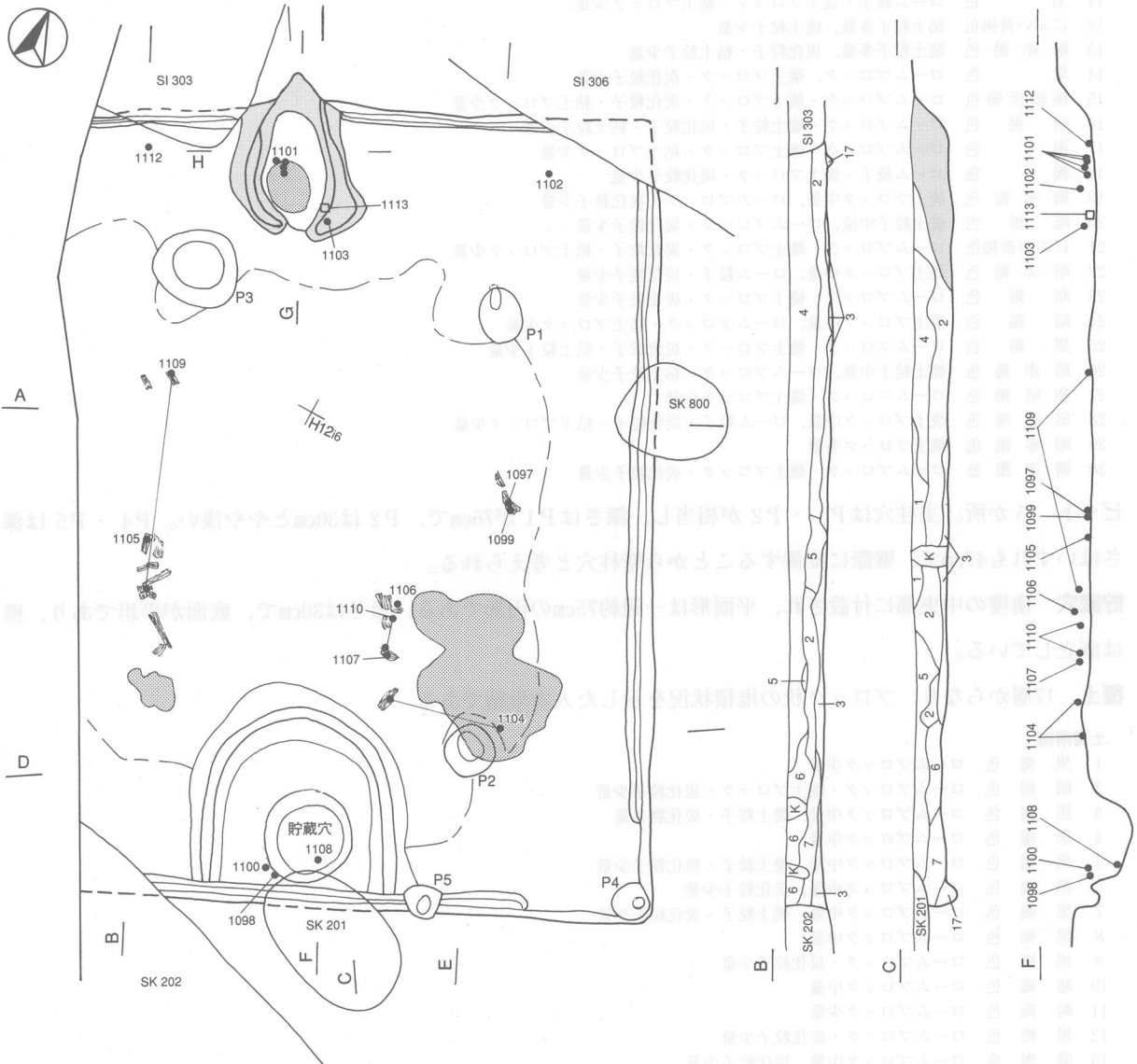
**覆土** 17層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

#### 土層解説

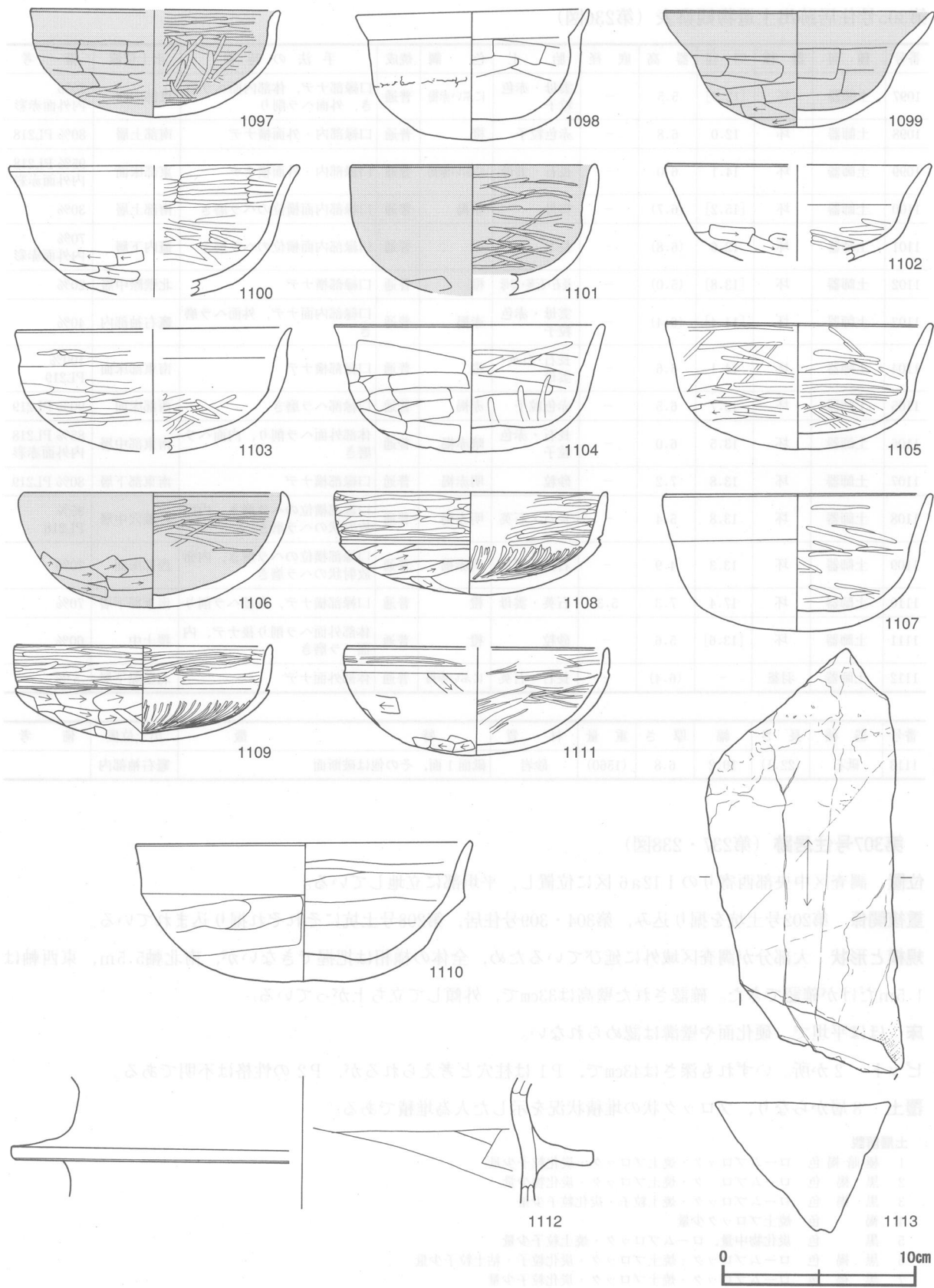
- |    |      |   |                        |
|----|------|---|------------------------|
| 1  | 黒褐色  | 色 | ロームブロック少量              |
| 2  | 暗褐色  | 色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量  |
| 3  | 黒褐色  | 色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化物少量  |
| 4  | 黒褐色  | 色 | ロームブロック中量              |
| 5  | 黒褐色  | 色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 6  | 黒褐色  | 色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量      |
| 7  | 黒褐色  | 色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 8  | 黒褐色  | 色 | ロームブロック中量              |
| 9  | 黒褐色  | 色 | ロームブロック・炭化粒子少量         |
| 10 | 暗褐色  | 色 | ロームブロック中量              |
| 11 | 暗褐色  | 色 | ロームブロック少量              |
| 12 | 黒褐色  | 色 | ロームブロック・炭化粒子少量         |
| 13 | 暗褐色  | 色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量      |
| 14 | 極暗褐色 | 色 | ローム粒子・炭化粒子少量           |
| 15 | 暗褐色  | 色 | ローム粒子中量, 炭化粒子少量        |
| 16 | 極暗褐色 | 色 | ロームブロック・炭化粒子少量         |
| 17 | 暗褐色  | 色 | ロームブロック・炭化粒子少量         |

**遺物出土状況** 土師器片706点(坏416, 高坏11, 埴1, 甕278), 須恵器片9(坏3, 蓋1, 甕5), 羽釜1点, 石製品1点(砥石), 礫片7点が覆土下層を中心に散在した状態で出土している。1101・1103・1113は竈内と袖部からで、1113は袖の芯材として砥石が転用されたものである。1102・1112はそれぞれ北壁際中層・下層, 1097・1099は東部, 1105・1109は西部のそれぞれ床面から出土している。また, 1104・1106・1107・1110は南東部の焼土塊周辺からで、1104の土師器の坏は焼土下層から出土している。さらに, 1098・1108・1100はいずれも貯蔵穴周辺から出土している。中央部の床面を中心に炭化材が出土しているが、形状を留めておらず、部位の同定には至らなかったが、出土位置から柱材の可能性はある。

**所見** 本跡は焼土塊や炭化材の出土状況から火災にあったことが想定され、遺物は焼土の下層から出土していることから、焼失前に遺棄されたものである。北壁に竈, 土手状の高まりの内側に貯蔵穴を付設しているなどの遺構形態や出土土器から、時期は6世紀前葉と考えられる。



第235図 第305号住居跡実測図



第236図 第305号住居跡出土遺物実測図

第305号住居跡出土遺物観察表（第236図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1097	土師器	坏	[12.9]	5.5	-	雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部ナデ，体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り	東部床面	30% 内外面赤彩
1098	土師器	坏	12.0	6.8	-	赤色粒子	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	南部上層	80% PL218
1099	土師器	坏	14.1	6.0	-	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ	東部床面	95% PL218 内外面赤彩
1100	土師器	坏	[15.2]	(6.7)	-	雲母	赤褐	普通	口縁部内面横位のヘラ磨き	南部上層	30%
1101	土師器	坏	12.6	(6.8)	-	長石・雲母	赤	普通	口縁部内面横位のヘラ磨き	竈内下層	70% 内外面赤彩
1102	土師器	坏	[13.8]	(5.0)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ	北壁際中層	20%
1103	土師器	坏	[14.4]	(6.4)	-	雲母・赤色粒子	赤褐	普通	口縁部内面ナデ，外面ヘラ磨き	竈右袖部内	40%
1104	土師器	坏	14.1	6.6	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ	南東部床面	100% PL219
1105	土師器	坏	13.7	6.5	-	赤色粒子	赤褐	普通	口縁部ヘラ磨き	西部床面	90% PL219
1106	土師器	坏	13.5	6.0	-	長石・赤色粒子	暗赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面ヘラ磨き	南東部中層	85% PL218 内外面赤彩
1107	土師器	坏	13.8	7.2	-	砂粒	明赤褐	普通	口縁部横ナデ	南東部下層	80% PL219
1108	土師器	坏	13.8	5.4	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部横位のヘラ磨き，内面放射状のヘラ磨き	貯蔵穴中層	95% PL218
1109	土師器	坏	13.3	4.9	-	石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部横位のヘラ磨き，内面放射状のヘラ磨き	西部床面	70%
1110	土師器	坏	17.4	7.3	5.3	石英・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ，底部ヘラ削り	南東部下層	70%
1111	土師器	坏	[13.6]	5.6	-	砂粒	橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き	覆土中	60%
1112	土師器	羽釜	-	(6.4)	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部外面ナデ	北壁際下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1113	砥石	(22.1)	10.2	6.8	(1560)	砂岩	砥面1面，その他は破断面	竈右袖部内	

第307号住居跡（第237・238図）

位置 調査区中央部西寄りのI12a6区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係 第202号土坑を掘り込み，第304・309号住居，第208号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 大部分が調査区域外に延びているため，全体の様相は把握できないが，南北軸5.5m，東西軸は1.5mだけが確認できた。確認された壁高は33cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，硬化面や壁溝は認められない。

ピット 2か所。いずれも深さは43cmで，P1は柱穴と考えられるが，P2の性格は不明である。

覆土 8層からなり，ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

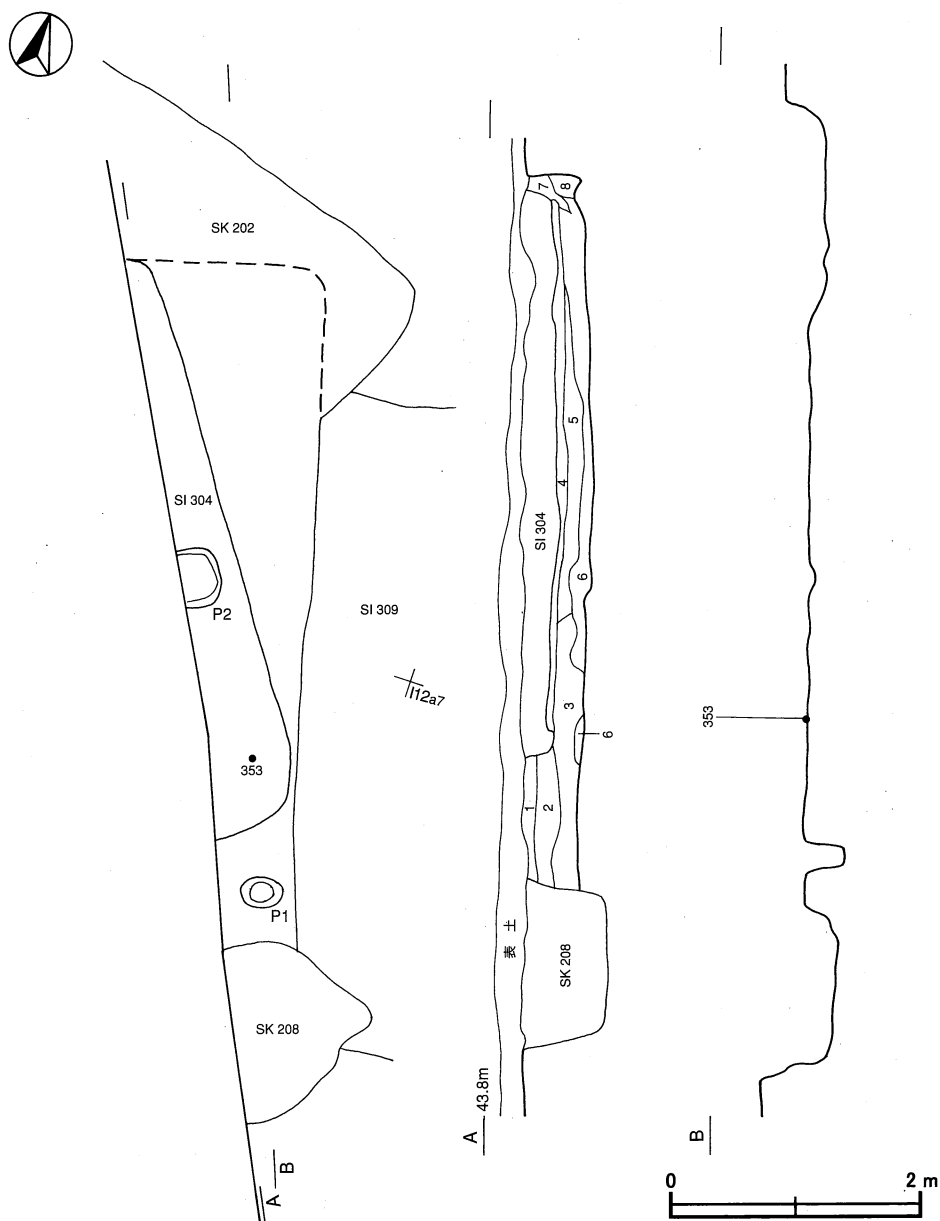
土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 褐色 焼土ブロック少量
- 5 黒色 炭化物中量，ロームブロック・焼土粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 8 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 出土遺物は少なく，土師器片39点（坏7，高坏2，甕30），礫片5点が出土しただけである。

いずれも細片で，図示できたものは3点である。353は東部床面，354・393は南部覆土中からで，353は坏部が伏せられた状態で出土している。

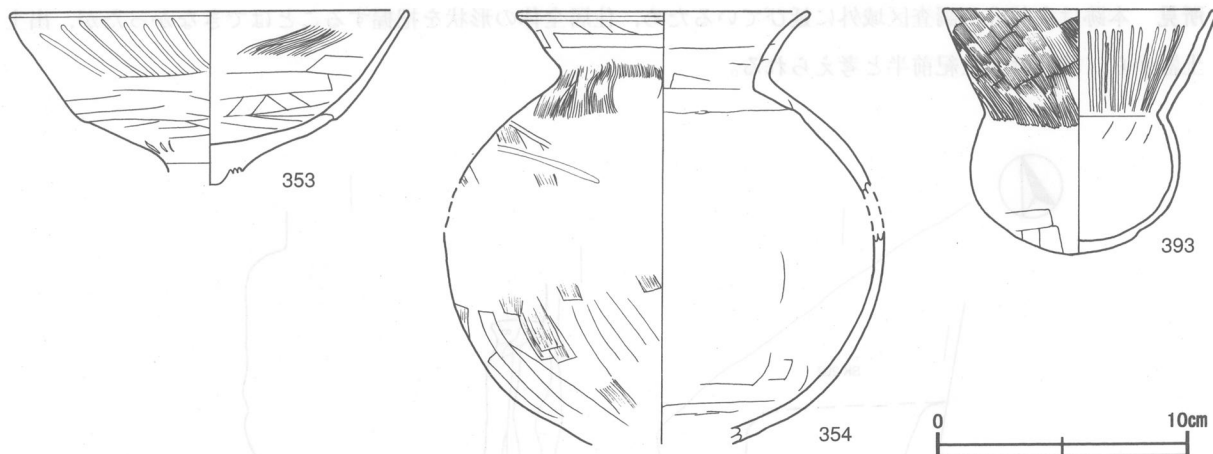
所見 本跡は大部分が調査区域外に延びているため、住居全体の形状を把握することはできなかったが、出土土器から、時期は5世紀前半と考えられる。



第237図 第307号住居跡実測図

第307号住居跡出土遺物観察表 (第238図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
353	土師器	高坏	15.8	(6.9)	-	長石	にぶい橙	普通	体部内面ハケ目調整後ナデ, 外面ヘラ磨き後ナデ	東部床面	50%
393	土師器	罎	10.8	9.8	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外面ハケ目調整, 内面ヘラ磨き	覆土中	90% PL219
354	土師器	甕	11.7	[17.2]	-	長石	にぶい黄橙	普通	体部外面ハケ目調整, 口縁部ナデ	覆土中	30%



第238図 第307号住居跡・出土遺物実測図

第309号住居跡 (第239・240図)

位置 調査区中央部西寄りのH12j7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第307号住居跡，第202号土坑を掘り込み，第205・208号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 一辺約6.0mの方形で，主軸方向はN-18°-Wである。壁高は28cmで，外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で，竈の手前から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は東・西壁の一部を除いて巡っていることから，全周していたものと考えられる。

竈 北壁の中央部に付設されており，規模は焚口部から煙道部まで104cm，袖部幅92cm，壁外への掘り込みはほとんど見られない。火床面は床面とほぼ同じ高さの平坦面を使用し，火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック多量
- 2 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック・粘土粒子少量
- 3 暗赤褐色 粘土ブロック中量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗赤褐色 粘土粒子中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 6 暗褐色 粘土粒子中量，ローム粒子・焼土ブロック少量
- 7 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

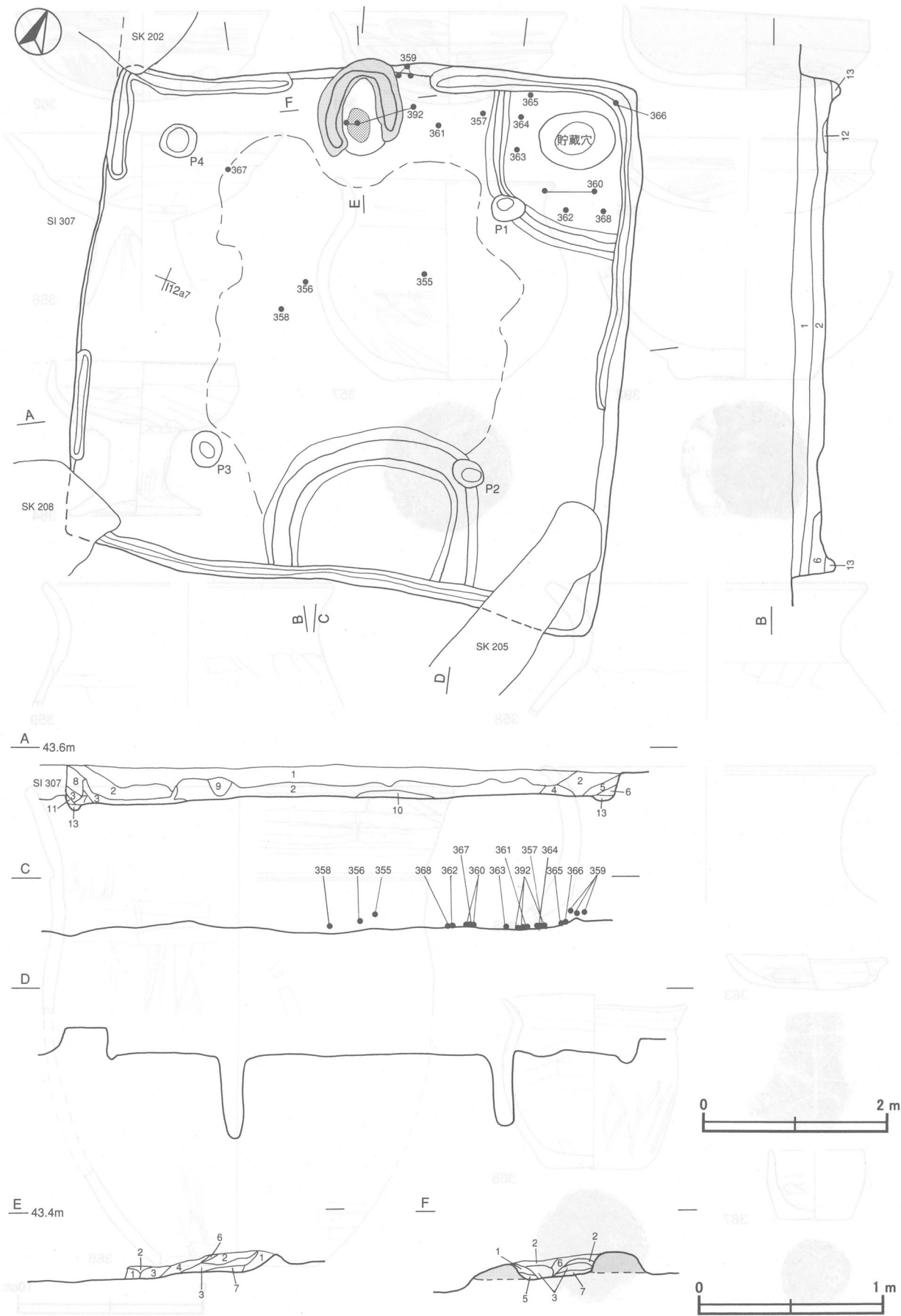
ピット 4か所。主柱穴はP1～P4が相当し，深さはP3が50cmで，その他は60～85cmである。

貯蔵穴 北東コーナー部の土手状の高まりで区画された中に付設され，長軸90cm，短軸64cmの楕円形で，深さは48cmである。

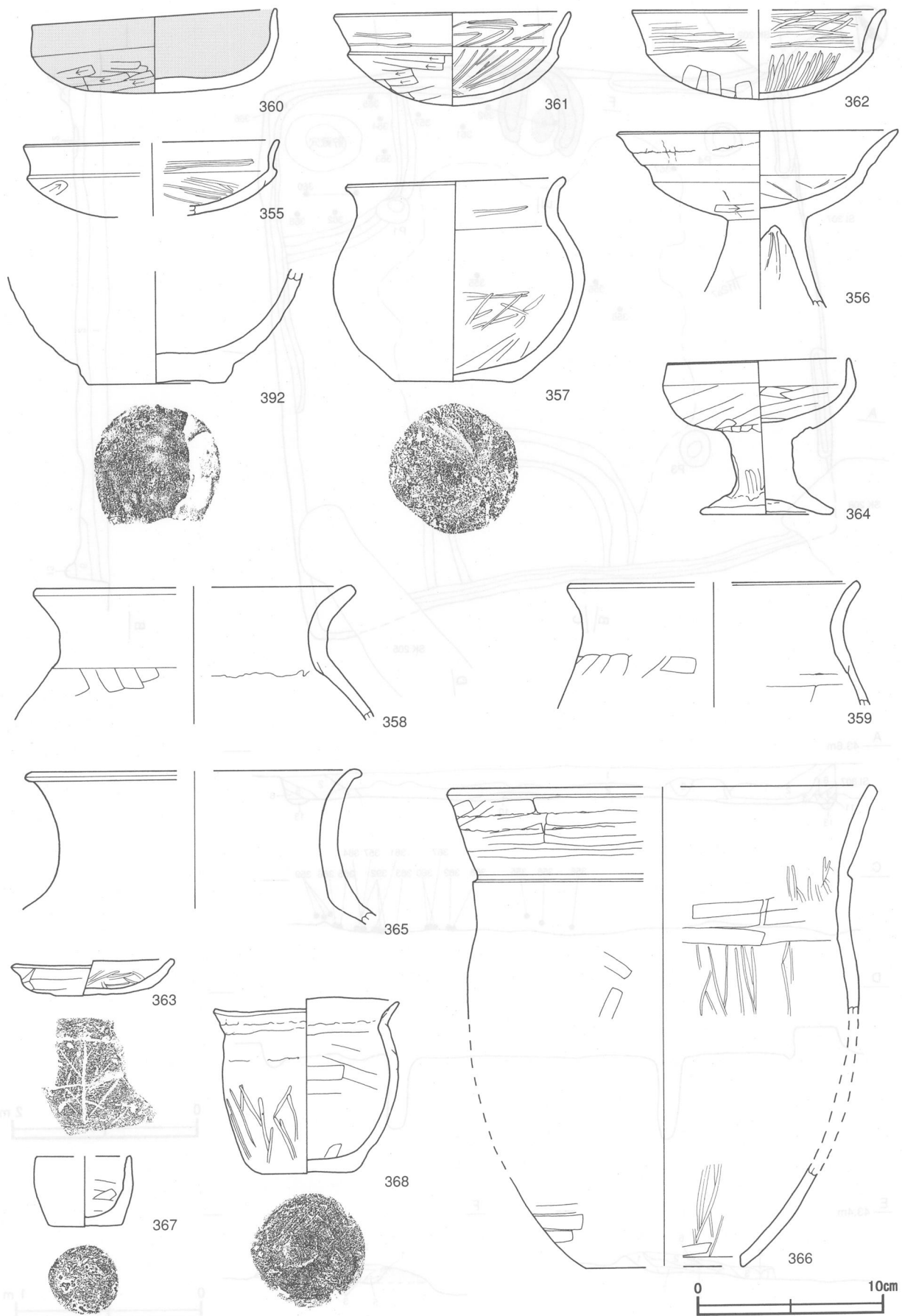
覆土 13層からなり，ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒色 ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック中量
- 4 黒褐色 焼土粒子中量，ロームブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック多量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 8 黒色 ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 9 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 10 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量
- 11 黒褐色 ロームブロック中量，焼土粒子・炭化物少量
- 12 暗褐色 焼土粒子中量，ロームブロック・炭化粒子少量
- 13 暗褐色 ロームブロック中量



第239图 第309号住居迹实测图



第240图 第309号住居跡出土遺物実測図



**遺物出土状況** 土師器片2307点（坏546，椀1，高坏11，埴1，甕1740，甗5，ミニチュア土器3），須恵器片34点（坏19，蓋6，甕9），緑釉陶器片1点，礫片2点が貯蔵穴・竈周辺の下層や床面を中心に出土している。357・359・360～366・368は北壁際や北東部の覆土下層と床面，392は竈内からそれぞれ出土している。392の土師器小形甕は火熱を受けており，支脚に転用されたと考える。また，367は北西部床面，355・356・358は中央部のそれぞれ覆土中層や下層から出土している。

**所見** 時期は出土土器から6世紀前葉と推定され，住居の規模や主軸方向，または出入口施設と貯蔵穴周辺に馬蹄形土手状の高まりを有しているなど，当該期の住居形態の特徴を顕著に残す好例といえる。

第309号住居跡出土遺物観察表（第240図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
355	土師器	坏	[13.6]	(4.0)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内面へら磨き，外面ナデ	中央部中層	30%
356	土師器	高坏	15.0	(9.7)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	坏部内面へらナデ，外面へら削り	中央部下層	60%
357	土師器	小形甕	11.6	11.0	6.3	長石・石英・雲母	橙	二次焼成	底部へら削り後ナデ，外面剥落の為調整不明	北東部床面	80% PL219
358	土師器	甕	[17.0]	(7.2)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	中央部下層	5%
359	土師器	甕	[15.4]	(6.7)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ	北壁際下層	20%
360	土師器	坏	13.2	4.2	-	長石・石英・小礫	赤	普通	体部外面下位へら削り，内面剥落の為調整不明	北東部床面	80% 内外面 赤彩 PL219
361	土師器	坏	12.6	5.0	-	長石	橙	普通	体部外面へら削り，内面へら磨き	北東部床面	70%
362	土師器	坏	[13.6]	4.8	-	長石・石英	赤褐	普通	口縁部横位のへら磨き，内面放射状のへら磨き	北東部床面	50%
363	土師器	ミニチュア土器	8.3	2.0	4.6	長石・石英	橙	普通	体部外面ナデ，内面へら磨き，底部木葉痕	北東部床面	60%
364	土師器	高坏	9.9	8.4	7.2	雲母・赤色粒子	赤褐	普通	坏部内・外面ナデ，脚部外面へら削り後ナデ	北東部床面	90% PL219
365	土師器	甕	[17.5]	(8.3)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ，外面煤付着	北壁際床面	25%
366	土師器	甗	[22.4]	[26.0]	[8.6]	長石・石英	橙	普通	口縁部ナデ，内面へら磨き後ナデ	北東壁際床面	5%
367	土師器	ミニチュア土器	[5.0]	3.8	3.8	長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部内・外面ナデ，底部へら削り	北西部床面	75% PL219
368	土師器	ミニチュア土器	10.0	9.3	5.0	長石・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ，底部へら削り	北東部床面	100% PL219
392	土師器	小形甕	-	(6.1)	7.4	長石・石英	橙	普通	体部内・外面ナデ，底部ナデ	竈内下層	20%

第310号住居跡（第241・242図）

**位置** 調査区中央部のI12c7区に位置し，平坦部に立地している。

**重複関係** 第312号住居跡を掘り込み，第311号住居，第207号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 南北軸は約7.8mで，中央部と西側部分が調査区域外に延びているため，東西軸は約2.2mだけが確認された。遺存している壁から，N-30°-Wを主軸とする方形あるいは長方形と推測される。壁高は約12cmで，ほぼ直立して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で，それほど硬化した部分は認められないが，床面全体に焼土ブロックや炭化材が散在している。また，遺存している壁際から壁溝が確認されている。

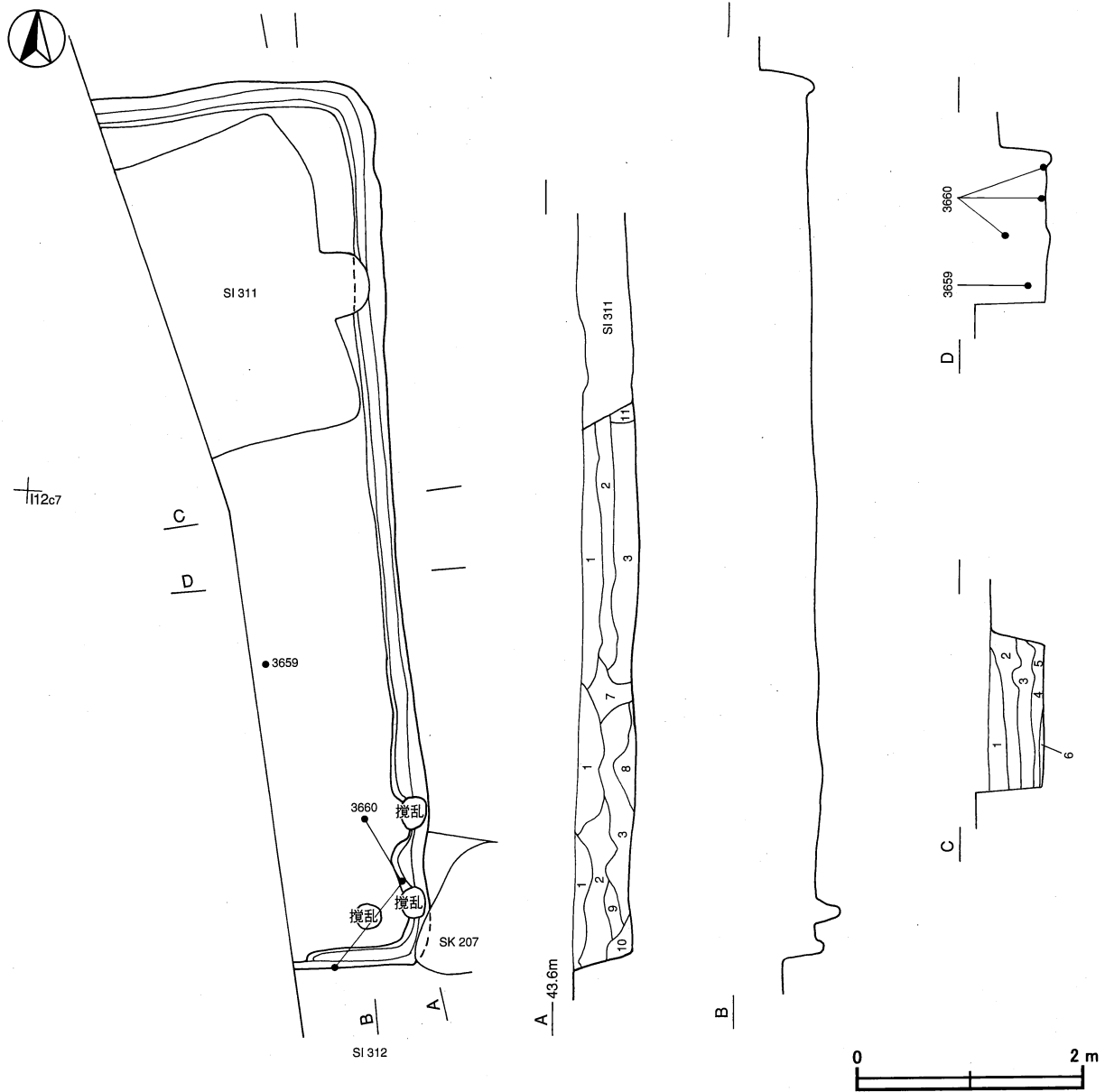
**竈** 調査区域からは確認されていない。

**ピット** 確認されていない。

覆土 11層からなり、ロームブロックや焼土を含んだ、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

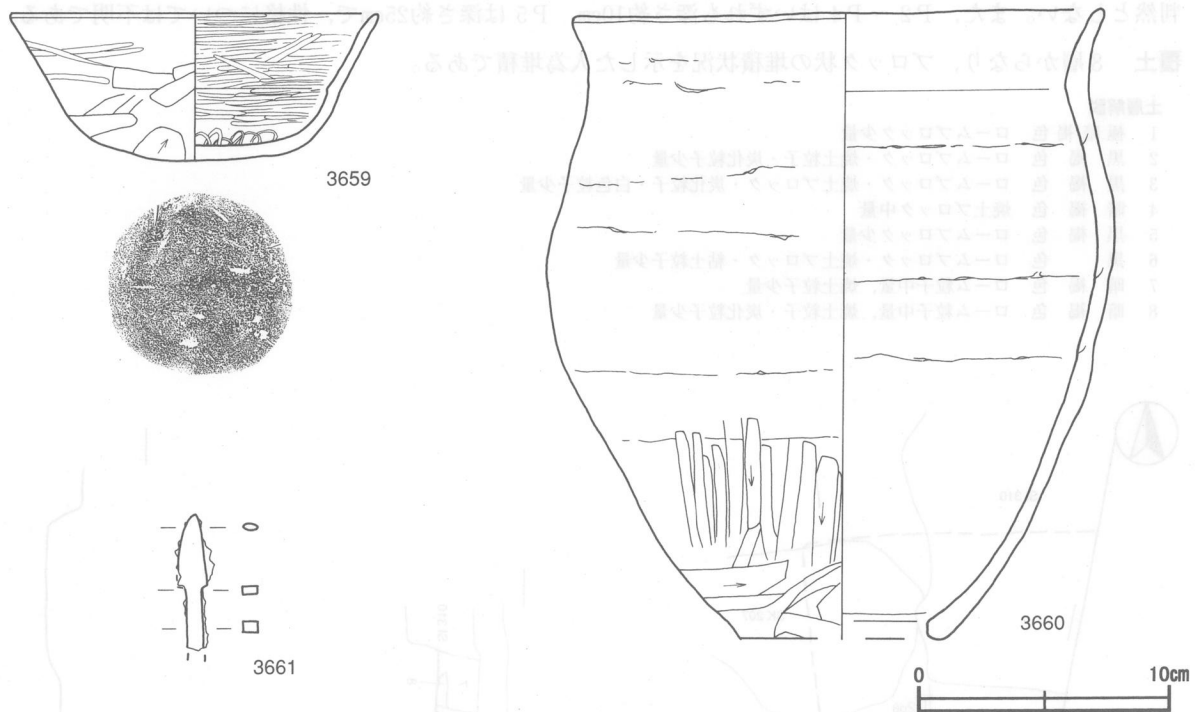
- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 2 黒色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化物少量
- 4 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 極暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 褐色 ロームブロック多量
- 7 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量
- 8 黒褐色 ロームブロック中量
- 9 極暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子少量
- 10 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 11 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量



第241図 第310号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片570点（坏149，高坏3，甕417，甑1）が全域から出土しているが、床面から確認された遺物はなく、すべて覆土下層以上から出土したものである。これらは本跡廃絶後に埋め戻す過程で投棄されたと考えられ、3659と3660が相当し、3659は北壁際の覆土中層から、3660は南東コーナー部の覆土中層と床面から出土した破片が接合したものである。

所見 床面から焼土が検出され、供膳具類はあらかじめ持ち出されていることから見て、住居廃絶に伴った焼失家屋と考えられる。伴出遺物が少ないため時期は明確ではないが、覆土下層から出土した坏や甕の形状などから見て6世紀前葉と推測される。



第242図 第310号住居跡出土遺物実測図

第310号住居跡出土遺物観察表（第242図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3659	土師器	坏	14.6	5.9	-	雲母・赤色 粒子	明赤褐	普通	体部内・外面ヘラ磨き	南西部覆土 中層	100%
3660	土師器	甕	21.0	25.2	[7.9]	長石・雲母・ 石英	明赤褐	普通	体部下端ヘラ磨き	南西部覆土 中層・床面	60%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3661	鏃	(5.3)	[1.2]	0.6	(6.6)	鉄	両関，鏃身長2.7cm	南部覆土中	

第312号住居跡 (第243図)

位置 調査区北部のI12d7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第310号住居、第207号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 西側部分が調査区域外に延び、さらに北側部分は重複のため確認できない。東壁と南東コーナー部だけが検出されている。南北軸約4.4m、東西軸は約2.2mだけが確認でき、平面形は方形または長方形と推定される。壁高は約16cmで、外傾して立ち上がっている。炉や竈は確認されていない。

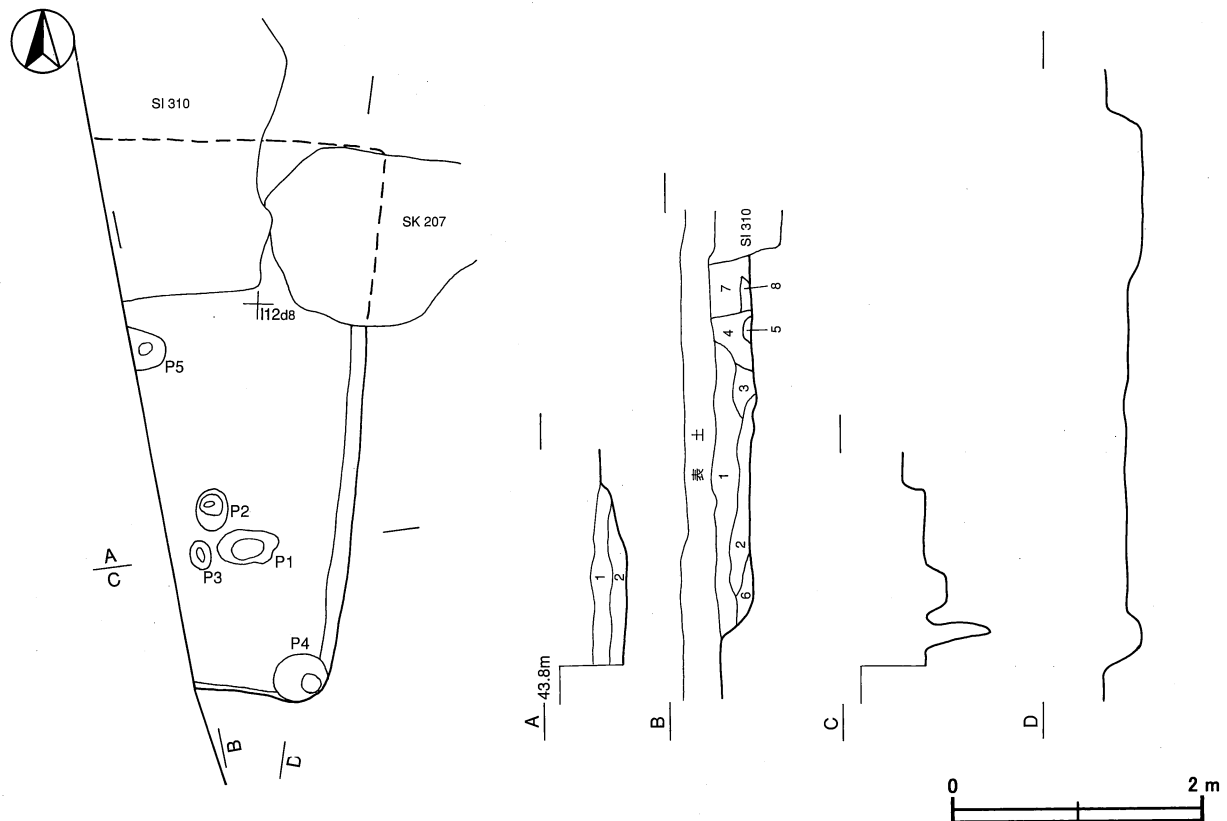
床 全面が貼床で、ほぼ平坦である。壁溝は認められない。

ピット 5か所。P1は深さ約50cmで、形状から主柱穴と想定されるが、対応するピットが確認できないため、判然としない。また、P2～P4はいずれも深さ約10cm、P5は深さ約25cmで、性格については不明である。

覆土 8層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・白色粒子少量
- 4 暗褐色 焼土ブロック中量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量
- 6 黒色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 8 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量



第243図 第312号住居跡実測図

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片203点（坏31，高坏4，甕166，埴2），須恵器片3点（坏2，甕1）が散在した状態で出土しているが、いずれも細片のために図示できない。また、須恵器片はいずれも破断面が摩滅しており、耕作等による混入と考えられる。

**所見** 時期は、6世紀前葉に比定される第310号住居に掘り込まれていることと土器片から判断して、5世紀後葉と考えられる。

### 第313号住居跡（第244～246図）

**位置** 調査区北部のH12e9区に位置し、平坦部に立地している。

**規模と形状** 後世の耕作あるいは整地によって南壁および東壁の一部が削平されているため、東西軸は約6.5m，南北軸は約5.9mだけが確認でき、平面形は方形と推定される。主軸方向はN-10°-Eである。壁高は約20cmで外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、中央部から竈付近にかけてよく踏み固められている。壁溝は確認できた壁際を巡っていることから、周回していたものと想定される。

**竈** 北壁の中央部に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで約140cm，袖部幅約160cm，壁外への掘り込みは約40cmである。右袖部は土師器甕を芯材として構築されており、また、左袖部付近からは土師器甕片が出土していることから、右袖部と同様に土師器甕を芯材として使用していたものと考えられる。火床部は床面とほぼ同じ高さの平坦面を使用し、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は、急な傾斜で立ち上がる。

#### 竈土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・白色粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック，白色粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子・粘土粒子中量，焼土ブロック・白色粒子少量
- 4 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・白色粒子少量
- 5 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 6 褐色 ロームブロック中量，焼土粒子・砂質粘土ブロック少量
- 7 褐色 焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子少量
- 8 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量，粘土粒子少量
- 9 暗赤褐色 ロームブロック中量，焼土粒子少量
- 10 暗赤褐色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック中量，ローム粒子少量
- 11 褐色 焼土ブロック中量，炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
- 12 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土ブロック少量
- 13 暗褐色 ローム粒子中量，焼土ブロック・白色粒子少量

**ピット** 7か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さ40～60cmで、柱間寸法はいずれも3.3mで規則的に配されている。また、P5は深さ約20cmで、竈と対峙する位置にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ約26cm，P7は深さ約15cmで、性格については不明である。

**覆土** 6層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

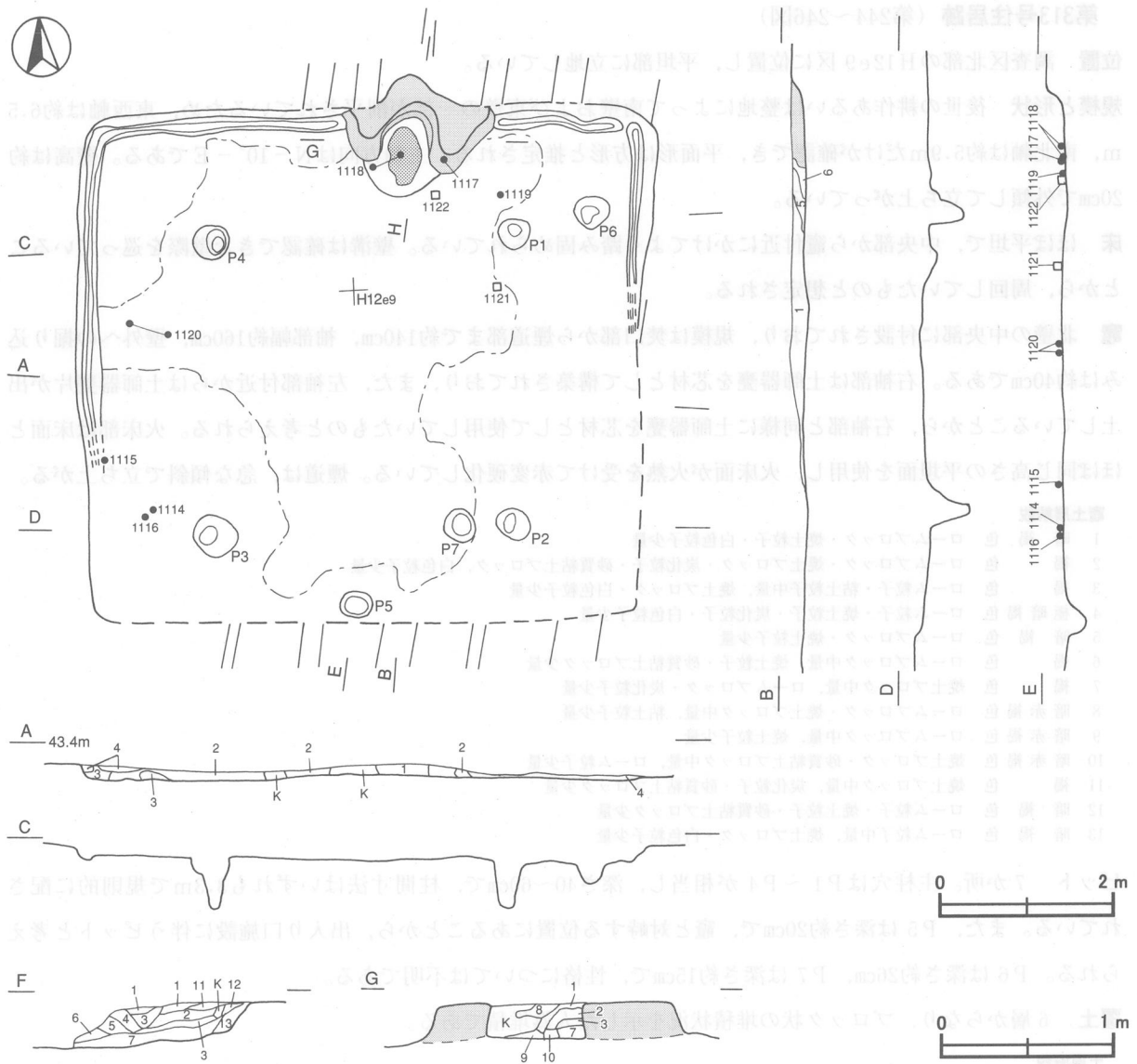
#### 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量，焼土ブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子少量

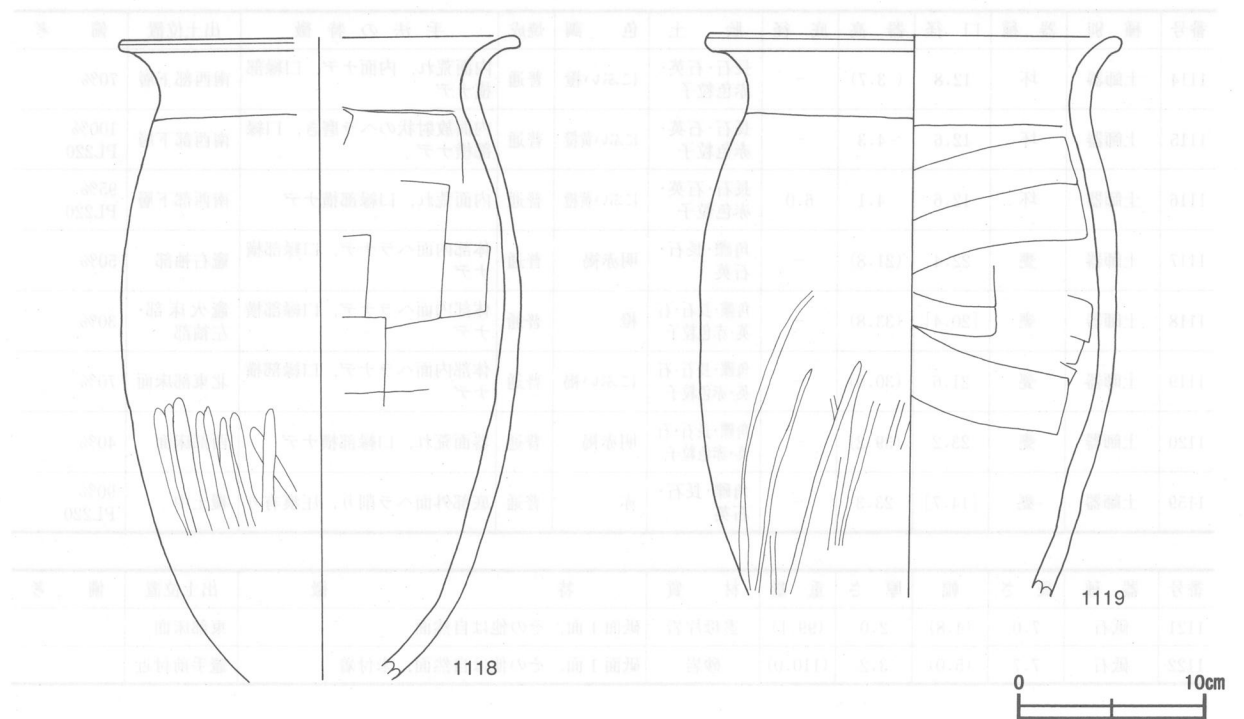
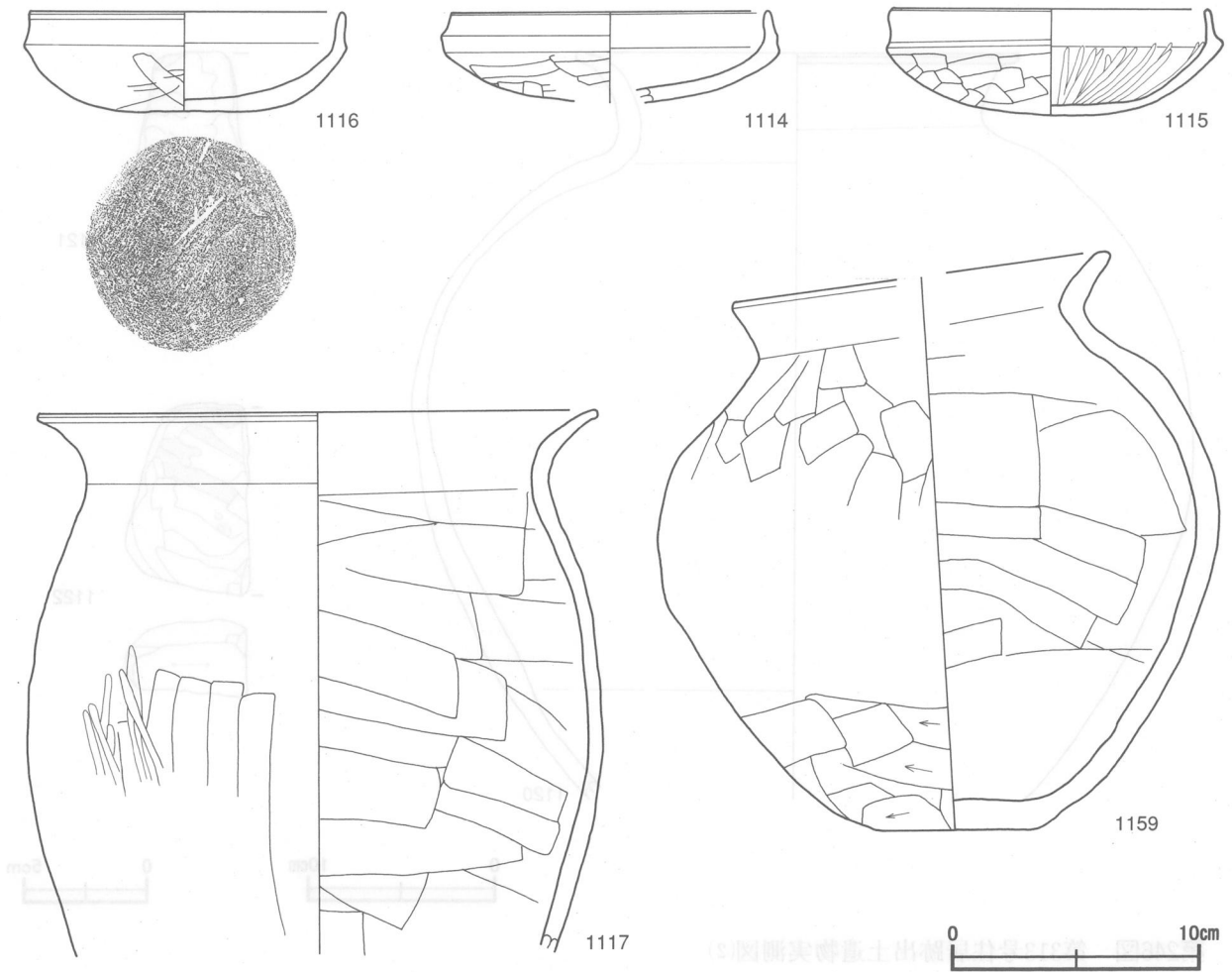
**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片498点（坏128，高坏6，甕362，埴1，椀1），須恵器片4点（坏1，甕3），陶器片1点（椀），土製品1点（支脚），石器2点（砥石），鉄滓1点が散在した状態で出土している。1117は竈右袖部，1118は竈左袖部付近からそれぞれ出土しており、竈の芯材として使用されたものである。1114～1116は南西部，1119は北東部，1121は東部，1122は竈手前付近のいずれも床面から出土しており、廃絶時に遺棄さ

れたものと考えられる。また、1120は西部の床面から出土しており、1159も覆土中から出土した破片が接合したもので、これらは住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。また、鉄滓も廃絶後に投棄されている。須恵器片と陶器片は破断面が摩滅していることから、後世の耕作等により混入したものと考えられる。

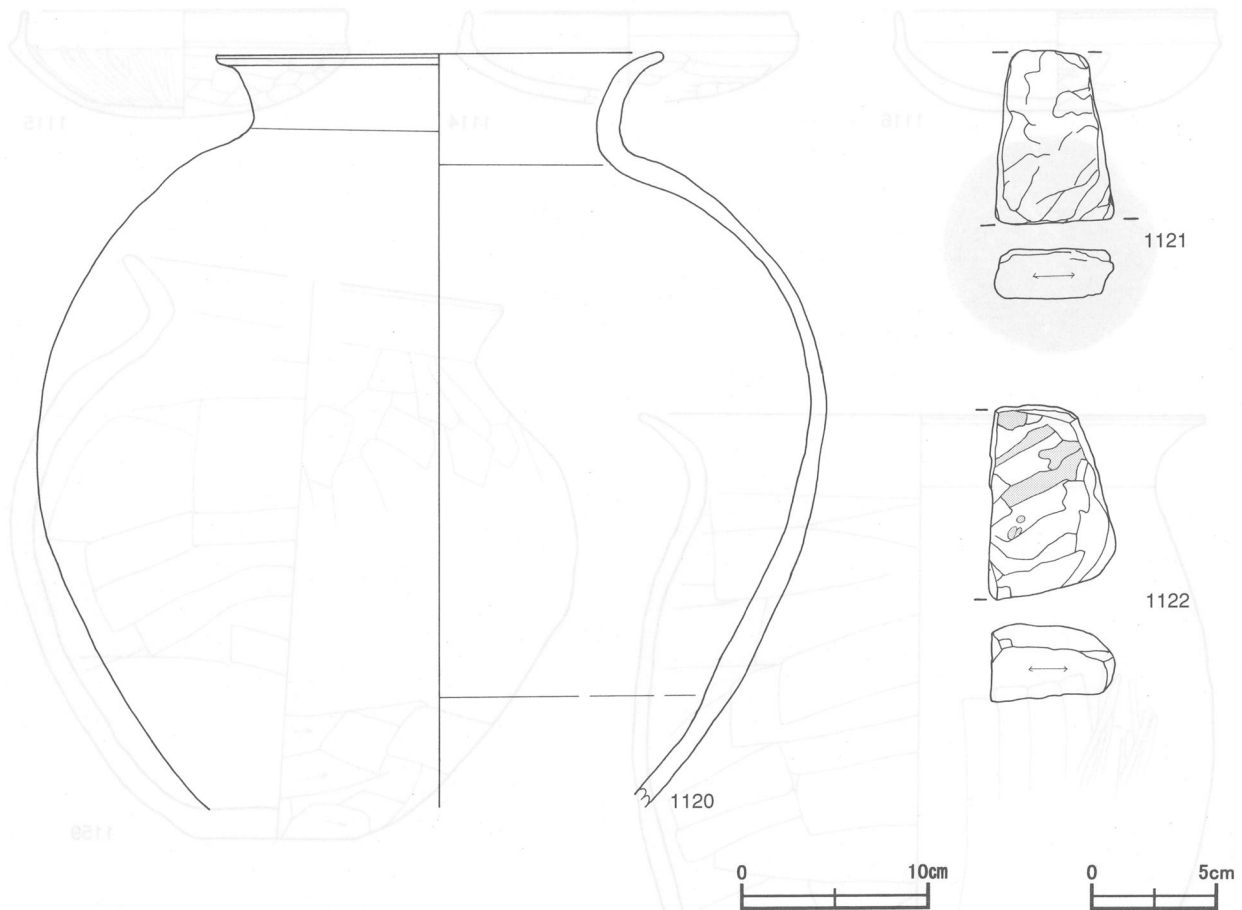
所見 本跡は一辺約6.0mの方形で、支柱穴を約3.3mで規則的に配している。また、竈は北壁のやや東寄りに付設され、壁外への掘り込みが30cmを超えているなど、当該期の形態的特徴が顕著である。時期は、遺構の形態と出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第244図 第313号住居跡実測図



第245图 第313号住居跡出土遺物実測図(1)



第246図 第313号住居跡出土遺物実測図(2)

第313号住居跡出土遺物観察表 (第245・246図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1114	土師器	坏	12.8	(3.7)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面荒れ, 内面ナデ, 口縁部横ナデ	南西部下層	70%
1115	土師器	坏	12.6	4.3	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	内面放射状のヘラ磨き, 口縁部横ナデ	南西部下層	100% PL220
1116	土師器	坏	12.6	4.1	6.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	内面荒れ, 口縁部横ナデ	南西部下層	95% PL220
1117	土師器	甕	22.4	(21.8)	-	角礫・長石・石英	明赤褐	普通	体部内面ヘラナデ, 口縁部横ナデ	竈右袖部	50%
1118	土師器	甕	[20.4]	(33.8)	-	角礫・長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部内面ヘラナデ, 口縁部横ナデ	竈火床部・左袖部	30%
1119	土師器	甕	21.6	(30.0)	-	角礫・長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部内面ヘラナデ, 口縁部横ナデ	北東部床面	70%
1120	土師器	甕	23.2	(39.2)	-	角礫・長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	器面荒れ, 口縁部横ナデ	西部床面	40%
1159	土師器	甕	[14.7]	23.3	-	角礫・長石・石英	赤	普通	底部外面ヘラ削り, 圧痕有り	覆土中	90% PL220

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1121	砥石	7.0	(4.8)	2.0	(99.1)	雲母片岩	砥面1面, その他は自然面	東部床面	
1122	砥石	7.7	(5.0)	3.2	(110.0)	砂岩	砥面1面, その他は自然面, 朱付着	竈手前付近	



第314号住居跡（第247・248図）

位置 調査区中央部のI12f8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第315号住居跡、第580号土坑を掘り込み、第316号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南北軸は約5.0mで、西側部分が調査区域外に延びているため、東西軸は約1.7mだけが確認でき、N-10°-Wを主軸とする一辺5.0m前後の方形あるいは長方形と推測される。壁高は約35cmで、外傾して立ち上がっている。

床 遺存している部分はほぼ平坦で、全体的に軟弱である。

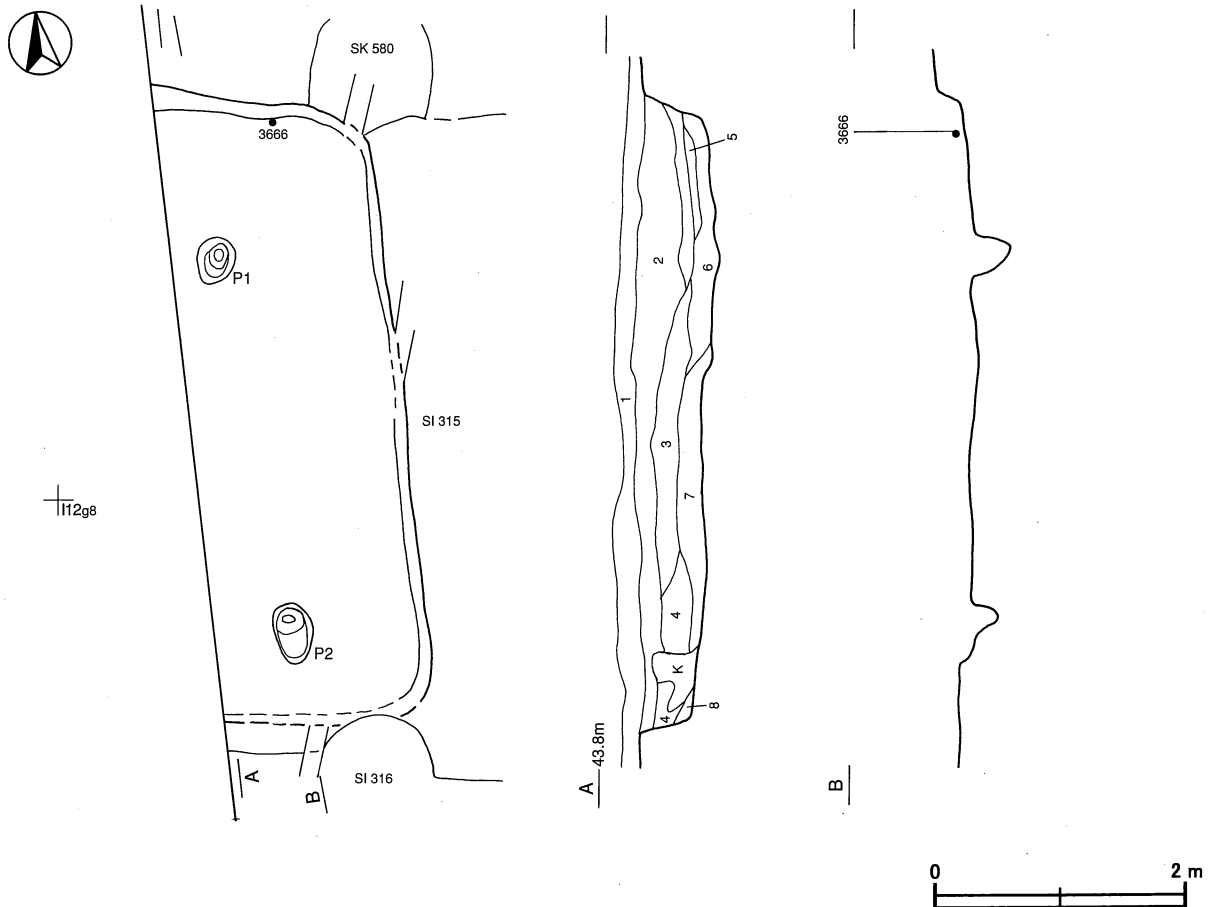
竈 確認されていない。

ピット 2か所。いずれも支柱穴で、深さ30~33cmである。相対すると予測される西側部分は、調査区域外のため不明である。

覆土 8層からなり、ロームや焼土のブロックを含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。土層断面図中の第1・2層は耕作土の層である。

土層解説

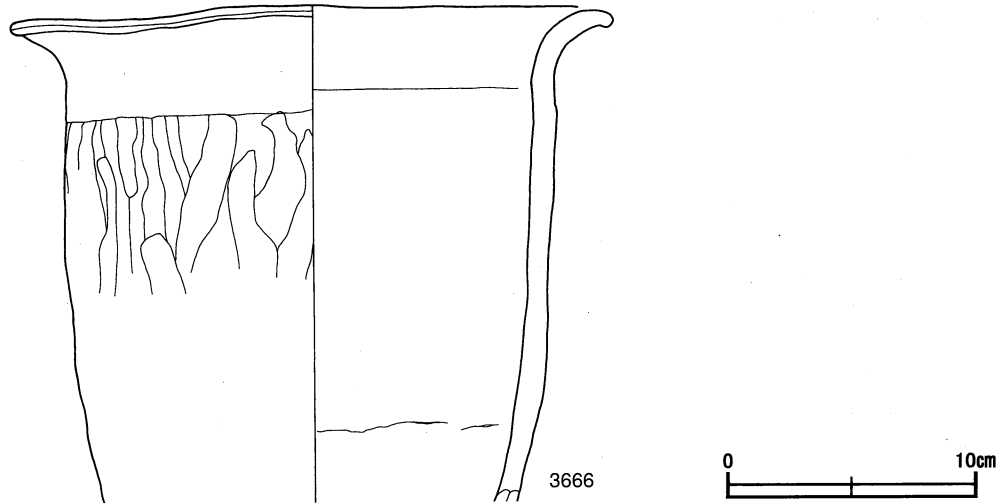
- 1 極暗褐色 炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、砂質粘土ブロック微量
- 6 極暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
- 7 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 8 極暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量



第247図 第314号住居跡実測図

**遺物出土状況** 土師器片150点(坏99, 甕51)が, 全域から出土している。大半が細片で, これらは本跡廃絶後に投棄されたものや, 本跡廃絶後の埋め戻す段階で埋土中に混入したもの, さらに耕作による攪乱で混入したと考えられる。3666は, 北壁際の覆土下層から据えられた状態で出土しており, 本跡廃絶時に遺棄されたと考えられる。

**所見** 伴出遺物が少ないため時期は明確ではないが, 出土した土器が古墳時代後期の様相を示しており, 重複関係から, 7世紀前葉の第316号住居跡より古い段階の, 7世紀代以前と推測される。



第248図 第314号住居跡出土遺物実測図

第314号住居跡出土遺物観察表 (第248図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3666	土師器	甕	23.9	(20.0)	-	長石・雲母・石英	橙	普通	体部外面ヘラ磨き	北壁際覆土下層	70%

### 第315号住居跡 (第249・250図)

**位置** 調査区北部の I 12g9 区に位置し, 平坦部に立地している。

**重複関係** 第314・316・317・422号住居, 第1号地下式墳, 第580・582・829号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 西側部分が調査区域外に延び, また, 重複のために南側と西側部分が掘り込まれているが, 支柱穴と考えられるピットが認められることから, 一辺約8.0mで, 平面形は方形と推定され, 主軸方向はN-0°である。壁高は約10cmと低い。

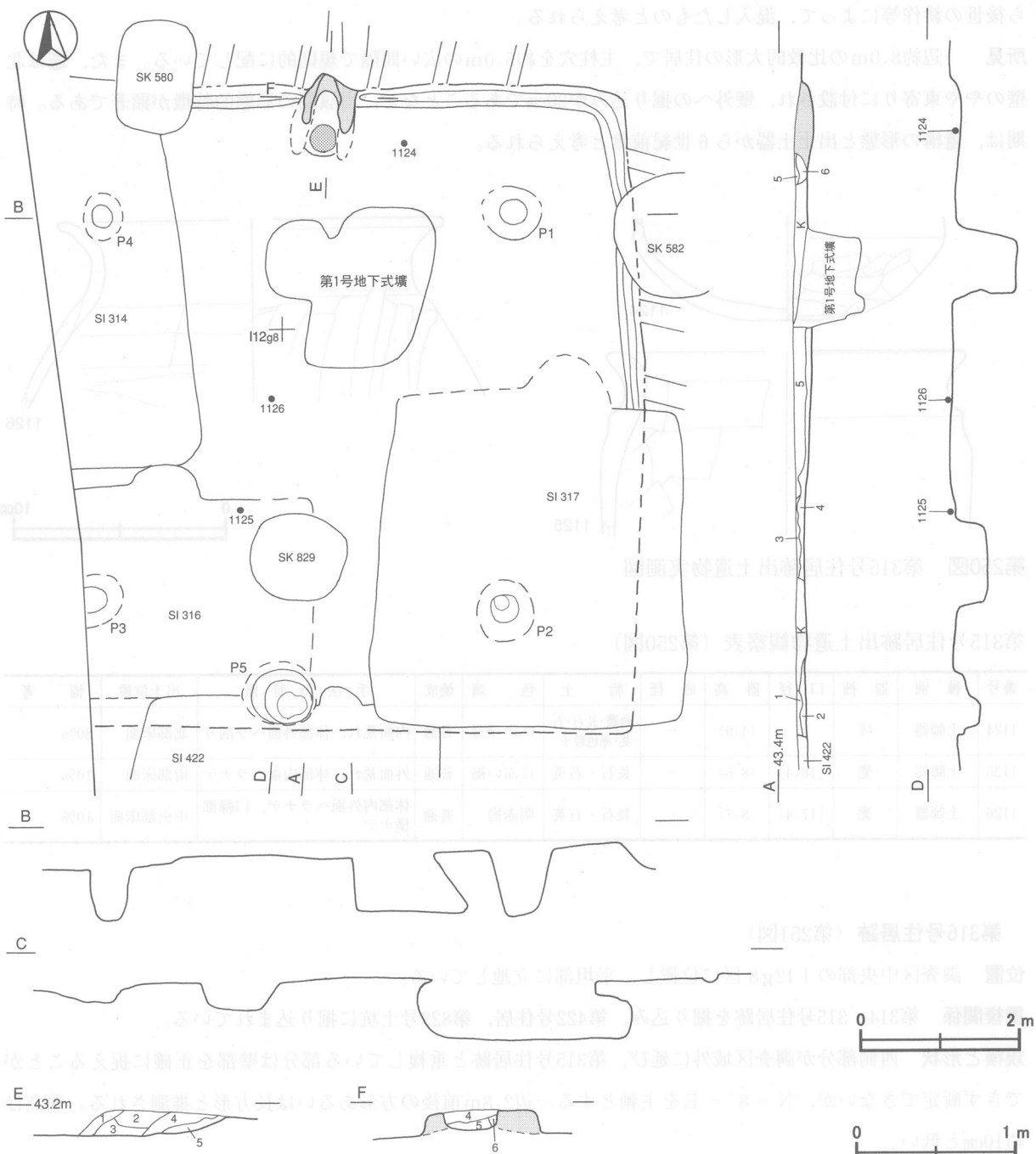
**床** 重複と後世の耕作のために掘り込まれており, 特に硬化した部分は認められない。壁溝は確認できた壁際を巡っていることから, 周回していたものと想定される。

**竈** 北壁のほぼ中央部に付設されており, 規模は焚口部から煙道部まで約100cm, 袖部幅約70cm, 壁外への掘り込みは約20cmである。火床部は床面とほぼ同じ高さの平坦面を使用し, 火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は, 緩やかに傾斜して立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 2 灰黄褐色 粘土粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 にぶい赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 赤褐色 焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 5 にぶい赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子少量，炭化粒子少量
- 6 暗褐色 砂質粘土ブロック多量，焼土ブロック中量

ピット 5か所。支柱穴はP1～P4が相当し，深さは40cm前後で，柱間寸法はいずれも5.0mで規則的に配されている。また，P5は深さ約25cmで，竈と対峙する位置にあることから，出入口施設に伴うピットと考えられる。



第249図 第315号住居跡実測図

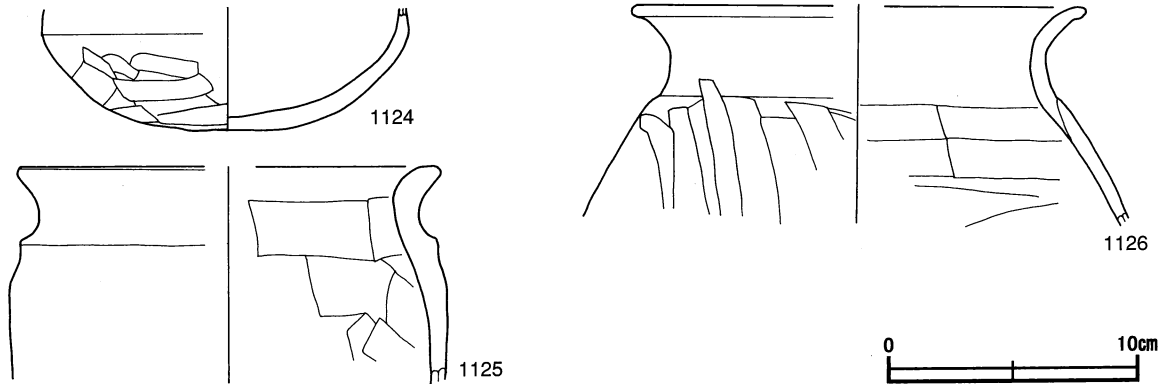
覆土 6層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黒色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片364点(坏165, 高坏1, 甕197, 埴1), 須恵器片6点(坏4, 高台付坏2), 緑釉陶器片1点(皿)が散在した状態で出土している。1124は北部, 1125は南部, 1126は中央部のいずれも床面から出土しており, 廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また, 緑釉陶器片は断面が摩滅していることから後世の耕作等によって, 混入したものと考えられる。

所見 一辺約8.0mの比較的大形の住居で, 支柱穴を約5.0mの広い間隔で規則的に配している。また, 竈は北壁のやや東寄りに付設され, 壁外への掘り込みが20cmであることなど, 当該期の形態の特徴が顕著である。時期は, 遺構の形態と出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第250図 第315号住居跡出土遺物実測図

第315号住居跡出土遺物観察表 (第250図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1124	土師器	坏	-	(4.9)	-	角礫・長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	内面荒れ, 体部外面ヘラ削り	北部床面	80%
1125	土師器	甕	[16.4]	(8.6)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	外面荒れ, 体部内面ヘラナデ	南部床面	10%
1126	土師器	甕	[17.4]	(8.7)	-	長石・石英	明赤褐	普通	体部内外面ヘラナデ, 口縁部横ナデ	中央部床面	10%

第316号住居跡 (第251図)

位置 調査区中央部のI12g8区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第314・315号住居跡を掘り込み, 第422号住居, 第829号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西側部分が調査区域外に延び, 第315号住居跡と重複している部分は壁部を正確に捉えることができず断定できないが, N-8°-Eを主軸とする一辺2.8m前後の方形あるいは長方形と推測される。壁高は約10cmと低い。

床 ほぼ平坦で, 中央部と竈前面がよく踏み固められている。

**竈** 北壁の中央部に構築されていたと推測されるが、後世の耕作などのため、遺存状態は悪く、直径約80cmのほぼ円形に掘りくぼめられ、砂質粘土と焼土ブロックが確認されており、さらに火熱を受けた土器片が数点確認されただけである。

**竈土層解説**

- 1 暗赤褐色 ローム粒子・砂質粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、炭化粒子微量

**ピット** 確認されていない。

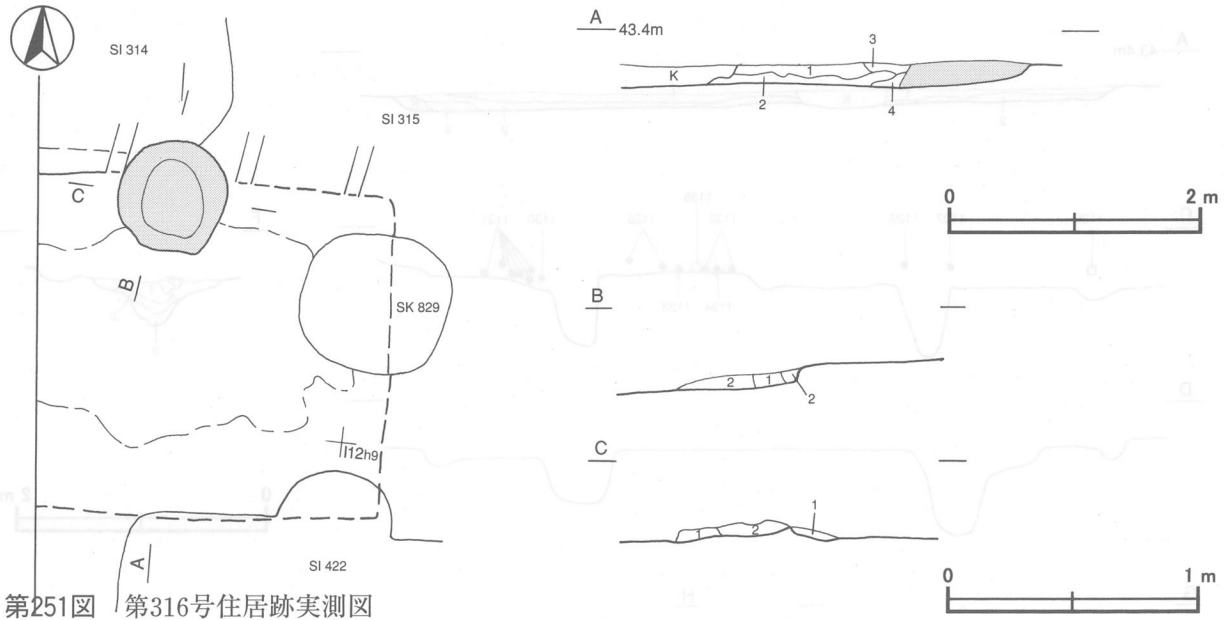
**覆土** 4層からなり、焼土ブロックを各層に含む人為堆積である。

**土層解説**

- 1 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
- 4 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片148点（坏45，甕103），須恵器片2点（甕），礫片1点（被熱痕）が、主に竈周辺の覆土中から出土しており、床面から検出された遺物はない。これらはすべて細片であり、投棄されたものや埋土中に混入したものである。

**所見** 出土遺物が少ないため時期は不明であるが、大半が古墳時代後期の所産であることや、住居跡の重複関係などから見て、7世紀代の第314号住居跡より新しい段階と考えられる。



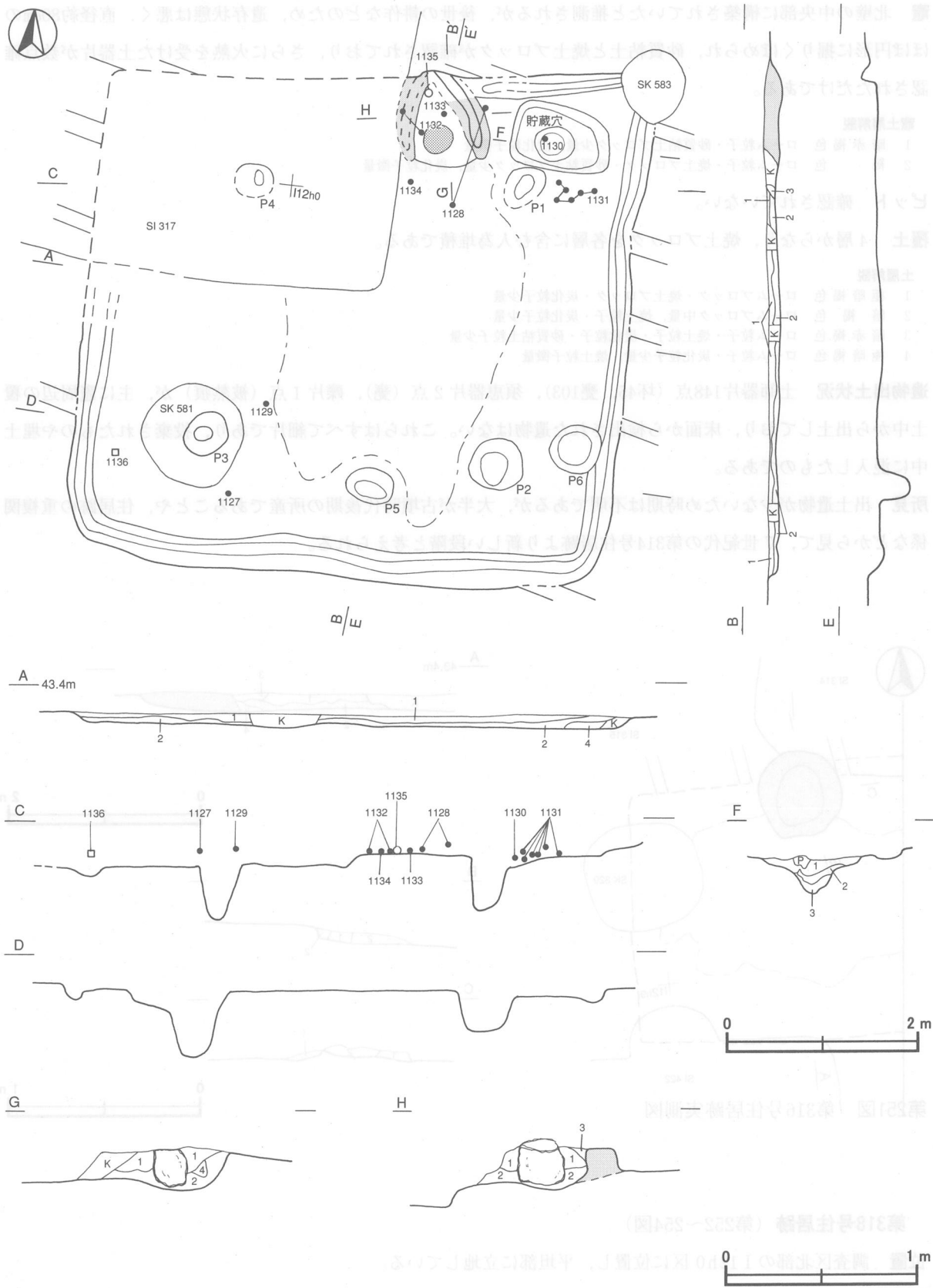
第251図 第316号住居跡実測図

**第318号住居跡（第252～254図）**

**位置** 調査区北部のI12h0区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第317号住居，第581・583号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸が約5.6m，短軸が約5.3mのほぼ方形で，主軸方向はN-2°-Eである。壁高は約20cmで，やや外傾して立ち上がっている。



第252図 第318号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は重複のために北西部では確認できないが、周回していたものと考えられる。

竈 北壁の中央部東寄りに付設されており、規模は焚口部から煙道部まで約100cm、袖部幅は左袖部が重複のため約90cmだけが確認できた。壁外への掘り込みは約5cmである。火床部は床面から深さ約10cmほど皿状に掘りくぼめ、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は、急な傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 灰黄褐色 砂質粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 4 にぶい黄褐色 砂質粘土ブロック中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

貯蔵穴 北東コーナー部に位置し、規模は長軸約105cm、短軸約70cmの隅丸長方形で、深さ約40cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ロームブロック少量

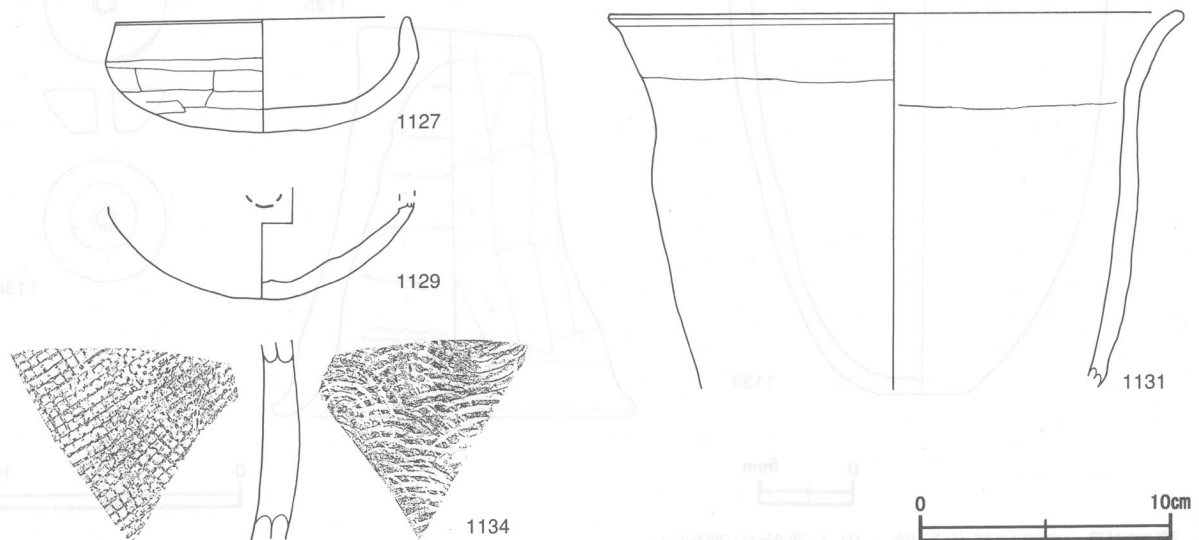
ピット 6か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは40～60cm、柱間寸法はいずれも2.9m前後で、規則的に配されている。また、P5は深さ約30cmで、竈と対峙する位置にあることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ約30cmであるが、性格については不明である。

覆土 4層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

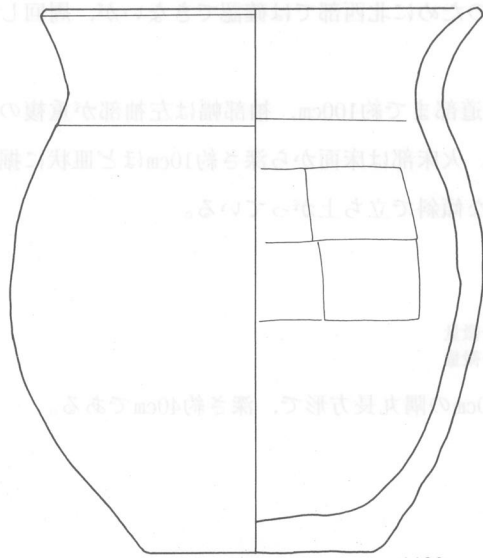
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

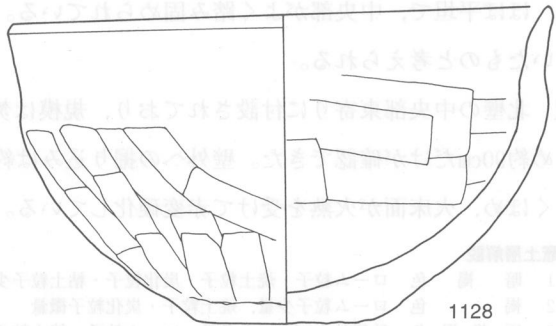
遺物出土状況 出土遺物は土師器片494点(坏89, 甕389, 埴2, 鉢14), 須恵器片14点(坏8, 甕6), 土製品1点(支脚), 石製品1点(紡錘車), 礫片14点が散在した状態で出土している。1130は貯蔵穴の覆土上層, 1132・1133は竈火床部の覆土下層, 1135は煙道部の立ち上がり付近からそれぞれ出土しており、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また、1127・1129・1136は南西部の覆土上層, 1134は竈手前の床面からそれぞれ出土し、1128は竈付近の覆土下層, 1131は北東部の覆土下層から出土した破片が接合したもので、これらはいずれも住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。



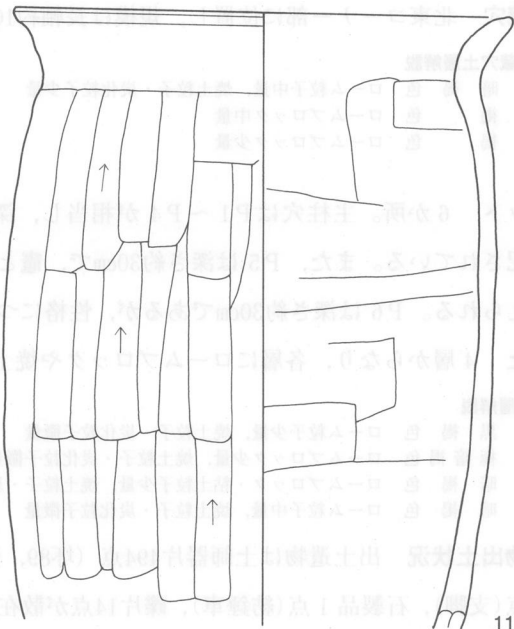
第253図 第318号住居跡・出土遺物実測図(1)



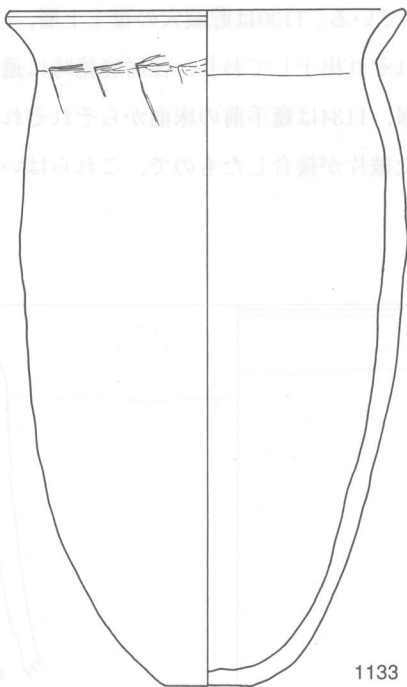
1130



1128



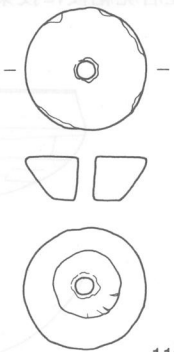
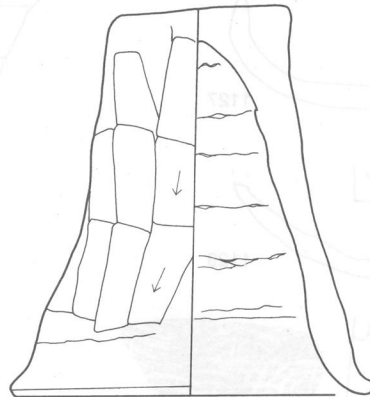
1132



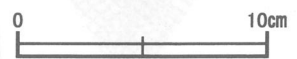
1133



1135



1136



第254図 第318号住居跡・出土遺物実測図(2)



所見 本跡は竈を北壁の中央部東寄りに、貯蔵穴を北東部に付設しているという形態的特徴を示している。時期は、遺構の形態と出土土器の形状から7世紀前葉と考えられる。

第318号住居跡出土遺物観察表（第253・254図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1127	土師器	坏	11.6	4.5	-	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	普通	内面ナデ，口縁部横ナデ	南西部上層	90%
1128	土師器	大形坏	21.4	12.4	7.2	雲母・石英	にぶい黄橙	普通	体部内面ヘラナデ，口縁部横ナデ	竈付近下層	100% PL220
1129	須恵器	甗	-	(4.4)	-	長石	暗灰	良好	ロクロナデ	南西部上層	20%
1130	土師器	甗	17.2	21.7	9.0	雲母・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面荒れ，底部外面木葉痕	貯蔵穴上層	80%
1131	土師器	甗	22.6	(14.9)	-	長石・石英	にぶい橙	二次焼成	器面荒れ，口縁部横ナデ	北東部下層	60%
1132	土師器	甗	19.8	(24.5)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部内面ナデ，口縁部横ナデ	竈火床部下層	70%
1133	土師器	甗	20.8	35.5	4.4	長石・石英・赤色粒子	橙	二次焼成	外面荒れ，底部外面ヘラ削り	竈火床部下層	70% PL220
1134	須恵器	甗	-	(7.7)	-	砂粒	灰	普通	外面格子目叩き，内面当て具痕	竈手前付近床面	5%

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
1135	支脚	15.5	14.1	6.8	990.0	長石・石英	上面木葉痕，側面ヘラ削り，裾部横ナデ	竈煙道部下層	90% PL263

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1136	紡錘車	4.8	1.8	0.7	45.0	粘板岩	片面穿孔	南西部上層	

第321号住居跡（第255図）

位置 調査区中央部東寄りのI13i0区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係 第698・699号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 床面が露出した状態で検出され，壁の立ち上がりが確認されなかったため，炉やピットの位置から判断して，N-4°-Eを主軸とする長軸4.7m，短軸4.5mの方形と推定される。

床 耕作等により床面が部分的に削平されているが，硬化面は確認できず，また壁溝も認められない。

炉 中央部やや北寄りに位置しており，長径51cm，短径45cmの楕円形で，床面を5cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内の覆土の各層にブロック状の焼土が混じり，炉床全体に赤変硬化した状態が認められることから，使用頻度の高かったことがうかがわれる。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック多量
- 2 極暗赤褐色 焼土ブロック少量

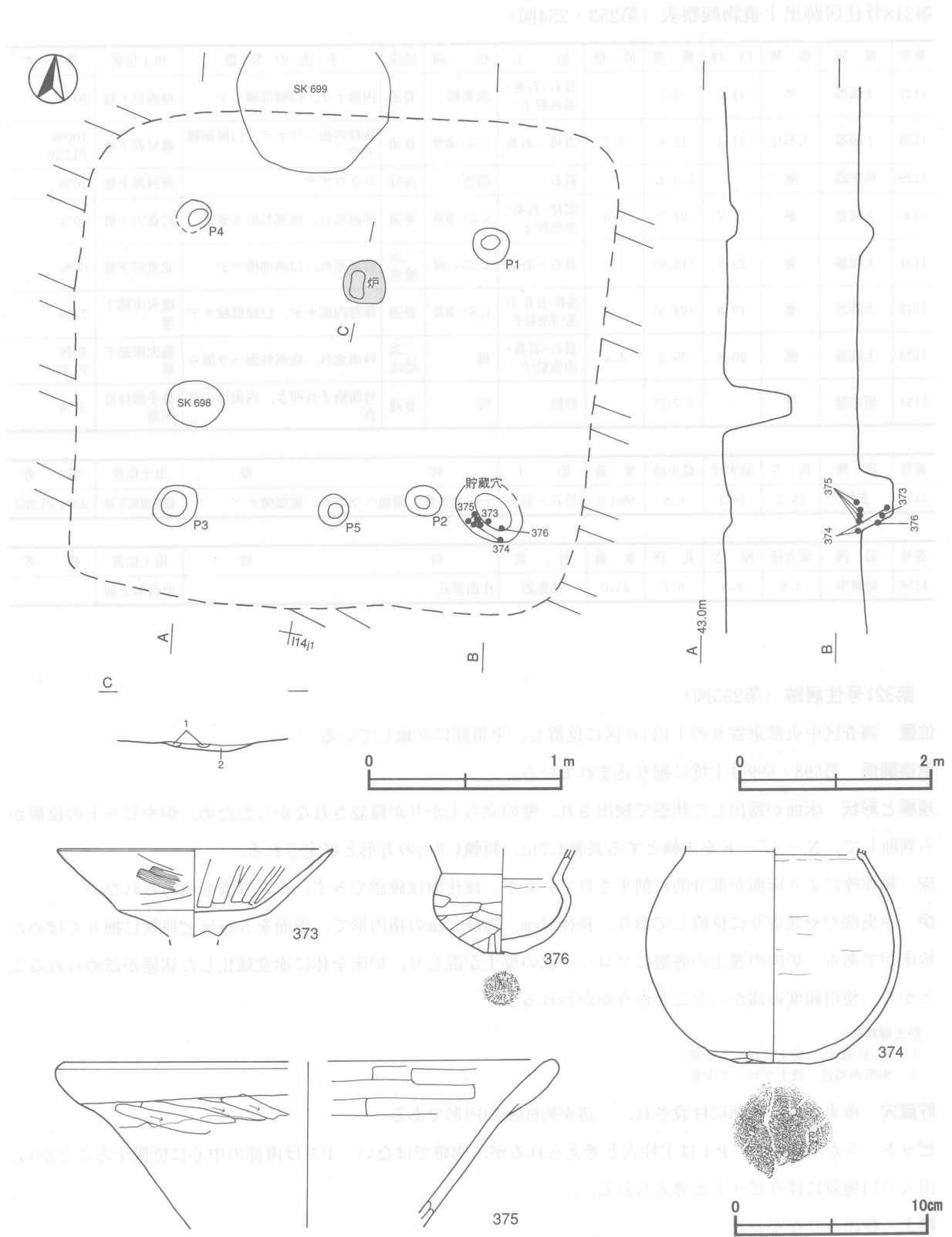
貯蔵穴 南東コーナー部に付設され，一辺が約60cmの円形である。

ピット 5か所。P1～P4は主柱穴と考えられるが，明確ではない。P5は南部の中心に位置することから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 検出されなかった。

遺物出土状況 土師器片252点(坏25，高坏23，埴28，甗169，甗6，ミニチュア土器1)，須恵器片1点(甗)，灰釉陶器片1点，礫片2点，鉄滓1点が出土している。373～376は貯蔵穴から出土している。灰釉陶器片は猿

投産で、須恵器片と共に後世の耕作等により混入されたものと思われる。  
 所見 本跡は覆土が薄く壁の立ち上がりも確認できなかったため、住居全体の形状を把握することはできなかったが、貯蔵穴から資料が出土している。時期は出土土器から、4世紀末と考えられる。



第255図 第321号住居跡・出土遺物実測図

第321号住居跡出土遺物観察表（第255図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
373	土師器	高坏	14.0	(4.7)	-	長石・石英	明赤褐	普通	体部外面ハケ目調整後ナデ，内面ヘラ磨き後ナデ	貯蔵穴中層	35%
374	土師器	埴	-	(11.1)	3.4	長石・雲母	橙	普通	体部内・外面ナデ，底部ヘラ削り	貯蔵穴上・下層	40%
375	土師器	甑	[26.0]	(8.6)	-	長石・雲母	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ	貯蔵穴上層	5%
376	土師器	埴	-	(5.4)	1.8	雲母	にぶい橙	普通	口縁部ナデ，底部ヘラ削り	貯蔵穴中層	70%

第323号住居跡（第256図）

位置 調査区北部のH12h8区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係 第324号住居跡を掘り込み，第320・346号住居にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 東西軸約8.3m，南北軸は北側が調査区区域外に延びているために約7.1mだけが確認でき，平面形については方形または長方形と推定され，主軸方向はN-15°-Wである。壁高は26~50cmでほぼ直立する。また，炉や竈については，調査した範囲内では認められない。

床 ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。壁溝は重複のため南西部で一部確認できないが，周回していたものと推定される。

炉・竈 確認されていない。

ピット 4か所。P1~P3は深さ40~45cmで，形状と配置から主柱穴と考えられる。P4は深さ約15cmで，南壁際のほぼ中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 8層からなり，レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

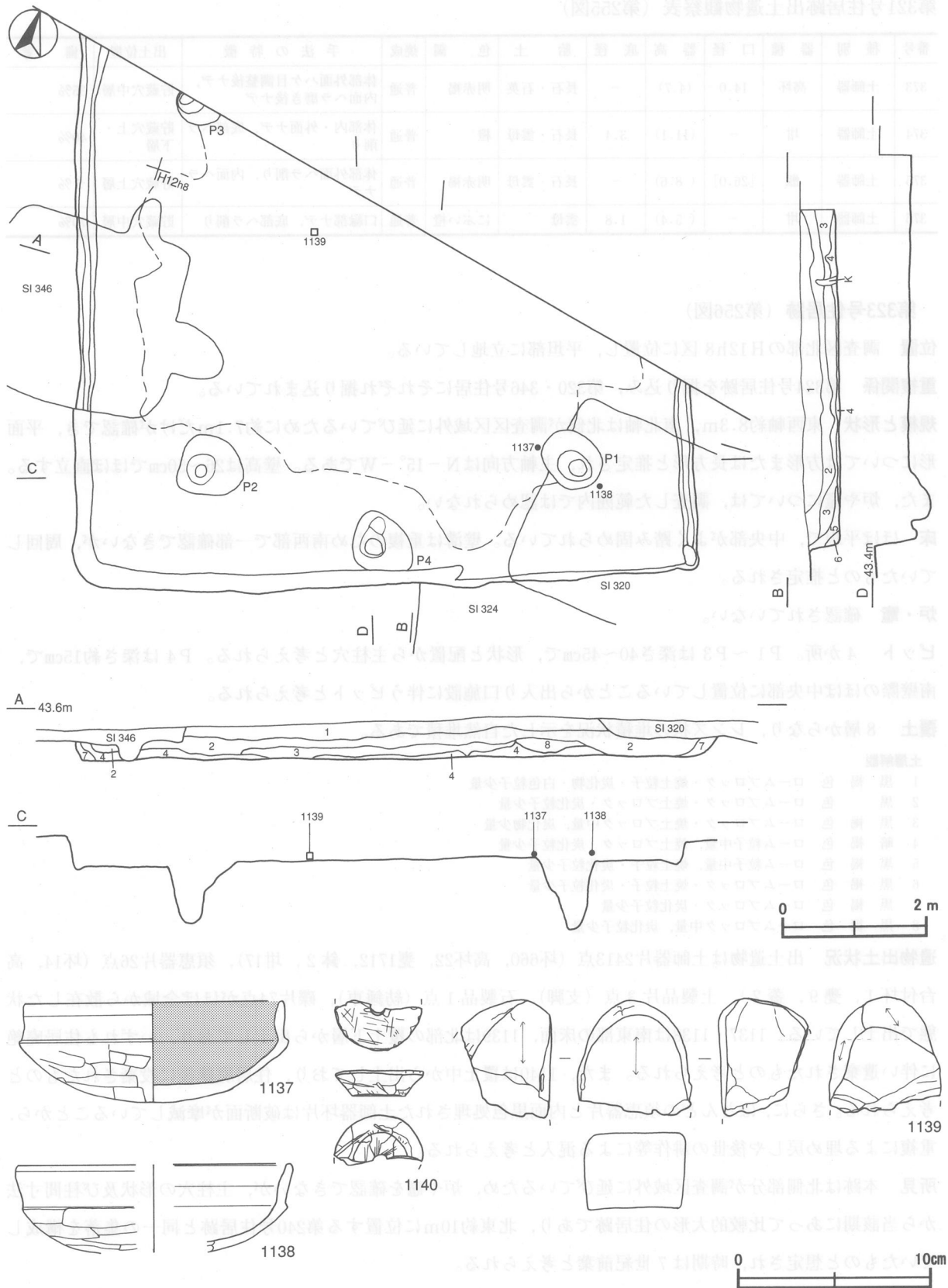
- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物・白色粒子少量
- 2 黒色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量，炭化物少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 8 黒褐色 ロームブロック中量，炭化粒子少量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片2413点（坏660，高坏22，甕1712，鉢2，埴17），須恵器片26点（坏14，高台付坏1，甕9，蓋2），土製品片3点（支脚），石製品1点（紡錘車），礫片74点がほぼ全域から散在した状態で出土している。1137・1138は南東部の床面，1139は北部の覆土下層から出土しており，いずれも住居廃絶に伴い遺棄されたものと考えられる。また，1140は覆土中から出土しており，住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。さらに，ほとんどの須恵器片と内面黒色処理された土師器坏片は破断面が摩滅していることから，重複による埋め戻しや後世の耕作等による混入と考えられる。

所見 本跡は北側部分が調査区域外に延びているため，炉や竈を確認できないが，主柱穴の形状及び柱間寸法から当該期にあって比較的大形の住居跡であり，北東約10mに位置する第240号住居跡と同一の集落を構成していたものと想定され，時期は7世紀前葉と考えられる。

第323号住居跡出土遺物観察表（第256図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1137	土師器	坏	13.2	5.1	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部内面ナデ，口縁部横ナデ	南東部床面	100% PL220



第256図 第323号住居跡・出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1138	土師器	坏	[14.0]	(4.5)	-	長石・石英	明赤褐	普通	体部内面ナデ, 口縁部横ナデ	南東部床面	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1139	砥石	(6.0)	(5.8)	(4.6)	(218.0)	蛇紋岩	砥面4面	北部下層	
1140	紡錘車	4.5	1.3	0.8	(270.0)	粘板岩	片面穿孔, 擦痕有り	覆土中	

### 第324号住居跡 (第257・258図)

**位置** 調査区中央部のH12i9区に位置し, 平坦部に立地している。

**重複関係** 第334号住居跡を掘り込み, 第320・323・325・507号住居, 第264号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 北西部は重複のため確認できないが, 一辺約5.8mの方形と想定され, 主軸方向はN-7°-Wである。壁高は約20cmで, ほぼ直立する。

**床** ほぼ平坦で, 中央部がとくに踏み固められている。壁溝は認められない。

**炉** 中央部やや西寄りに位置し, 平面形は長径約72cm, 短径約60cmのほぼ楕円形である。炉床面は床面から深さ約8cmほど掘りくぼめ, 火熱を受けて赤変硬化している。

#### 炉土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量

**貯蔵穴** 径約85cmのほぼ円形で, 南西コーナー部に付設され, 深さ約60cmである。

#### 貯蔵穴土層解説

- 1 黒色 ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
- 2 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・砂質粘土ブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 6 極暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・鹿沼バミス少量

**ピット** 7か所。P1・P5はいずれも深さ約20cmで, 形状から柱穴と考えられる。また, P3・P4はいずれも深さ約10cmと浅く, さらに, P2・P6・P7はいずれも深さ20cm前後で, 底面に硬化した部分は認められず, 遺物等も出土していないことから性格については不明である。

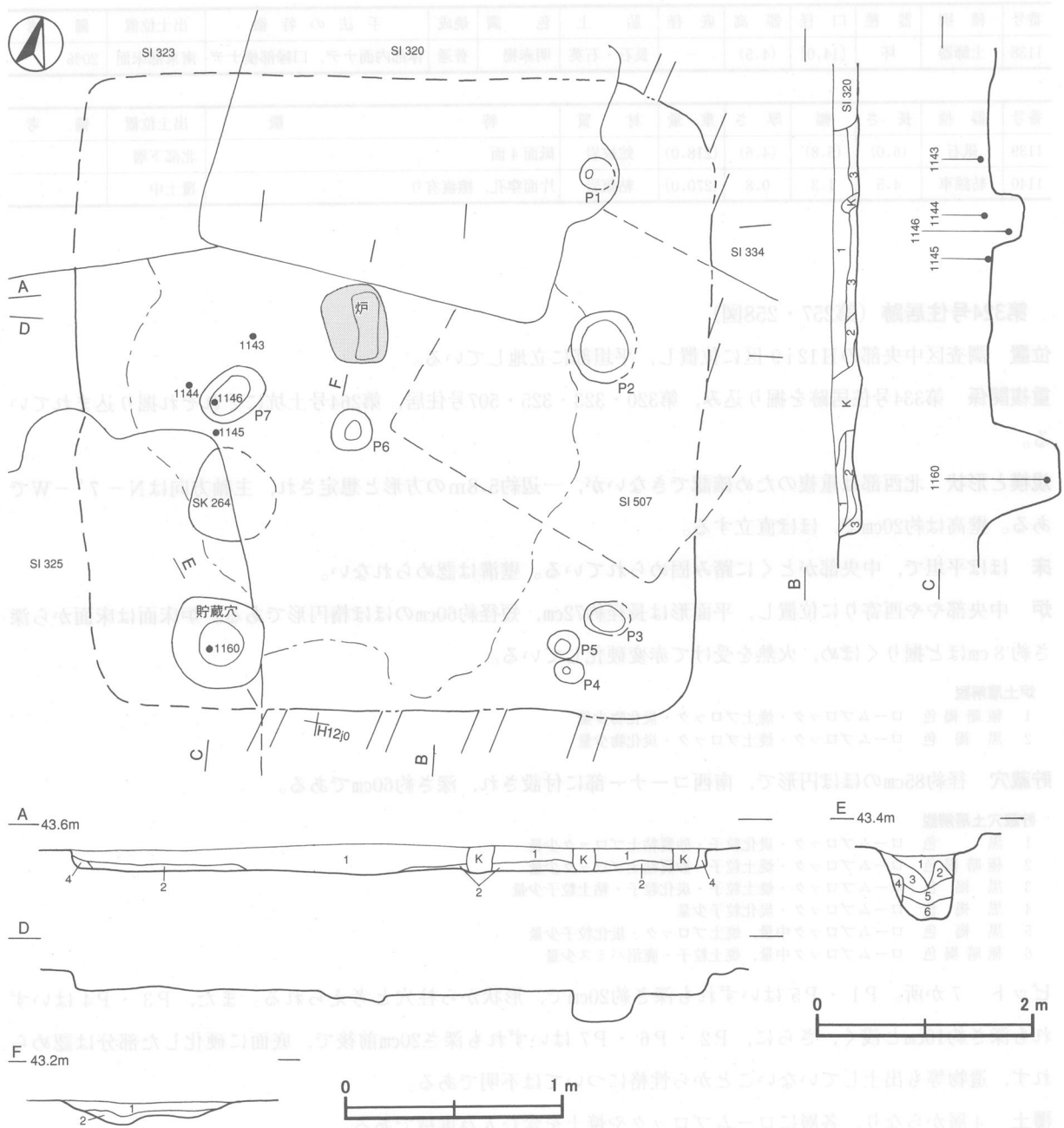
**覆土** 4層からなり, 各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 極暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片1713点 (坏496, 高台付坏17, 高坏13, 甕1183, 甌2, 椀2), 須恵器片15点 (坏12, 高台付坏1, 蓋2), 陶器片2点 (椀), 土製品2点 (籬羽口1, 不明1), 石器1点 (砥石), 礫片2点がほぼ全域から散在した状態で出土している。1143~1146はいずれも西部の床面, 1160は貯蔵穴の覆土下層から出土しており, これらは住居廃絶に伴って遺棄されたものと考えられる。また, 土師器の高台付坏片, 須恵器片, 陶器片は破断面が摩滅していることから, 後世の耕作等による混入と考えられる。

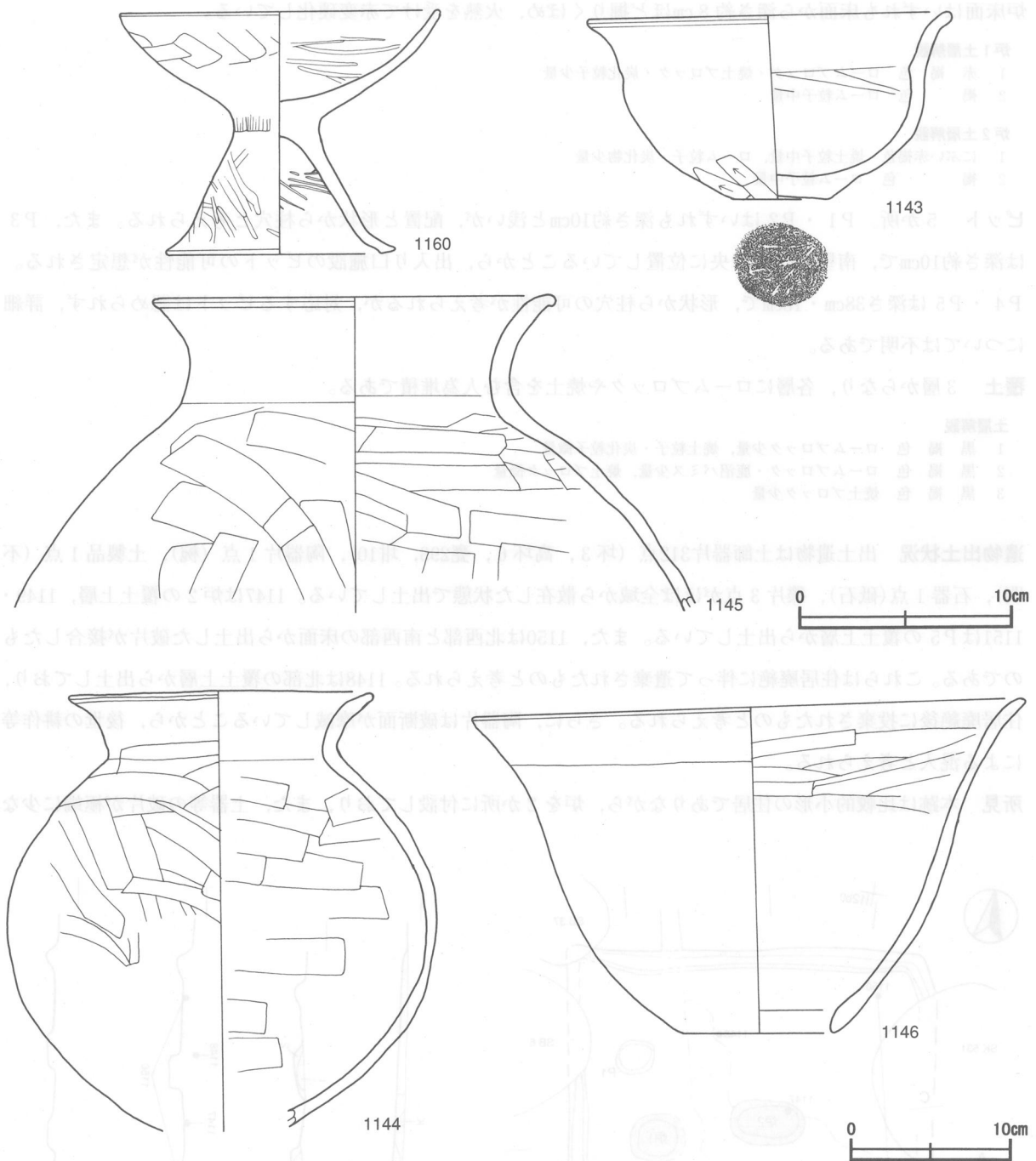
**所見** 時期は, 炉を中央部西寄り, 貯蔵穴を南西コーナー部に付設する遺構の形態と出土土器の形状から5世紀後葉と考えられる。



第257図 第324号住居跡実測図

第324号住居跡出土遺物観察表 (第258図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1160	土師器	高坏	15.0	11.4	10.6	長石・石英	橙	普通	坏部外面一部に刷毛目調整を残すナデ	貯蔵穴覆土下層	95% PL221
1143	土師器	鉢	16.8	8.8	4.8	長石・石英	橙	普通	底部外面へラ削り, 口縁部横ナデ	西部床面	90% PL220
1144	土師器	甕	18.6	(26.8)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部内外面へラナデ, 口縁部横ナデ	西部床面	60%
1145	土師器	甕	18.9	(14.8)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内外面へラナデ, 口縁部横ナデ	西部床面	30%
1146	土師器	甗	34.0	20.6	9.2	角礫・長石・石英・赤色粒子	橙	普通	器面荒れ, 口縁部横ナデ	西部床面	100% PL221



第258図 第324号住居跡出土遺物実測図

第327号住居跡 (第259・260図)

位置 調査区中央部のI12b9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第6・37号掘立柱建物、第531号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 一辺3.3m前後の方形で、主軸方向はN-15°-Eである。壁高は10cm前後と低い。

床 ほぼ平坦で、北東部から南西部にかけてとくに踏み固められている。壁溝は後世の耕作等により削平されているため一部で確認できないが、周回していたものと考えられる。

炉 2か所である。平面形は、炉1が径約48cmのほぼ円形、炉2が長径約70cm、短径約48cmの楕円形である。

炉床面はいずれも床面から深さ約8cmほど掘りくぼめ、火熱を受けて赤変硬化している。

**炉1土層解説**

- 1 赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量

**炉2土層解説**

- 1 にぶい赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化物少量
- 2 褐色 ローム粒子中量

**ピット** 5か所。P1・P2はいずれも深さ約10cmと浅いが、配置と形状から柱穴と考えられる。また、P3は深さ約10cmで、南壁のほぼ中央に位置していることから、出入り口施設のピットの可能性が想定される。P4・P5は深さ38cm・18cmで、形状から柱穴の可能性が考えられるが、対応するピットは認められず、詳細については不明である。

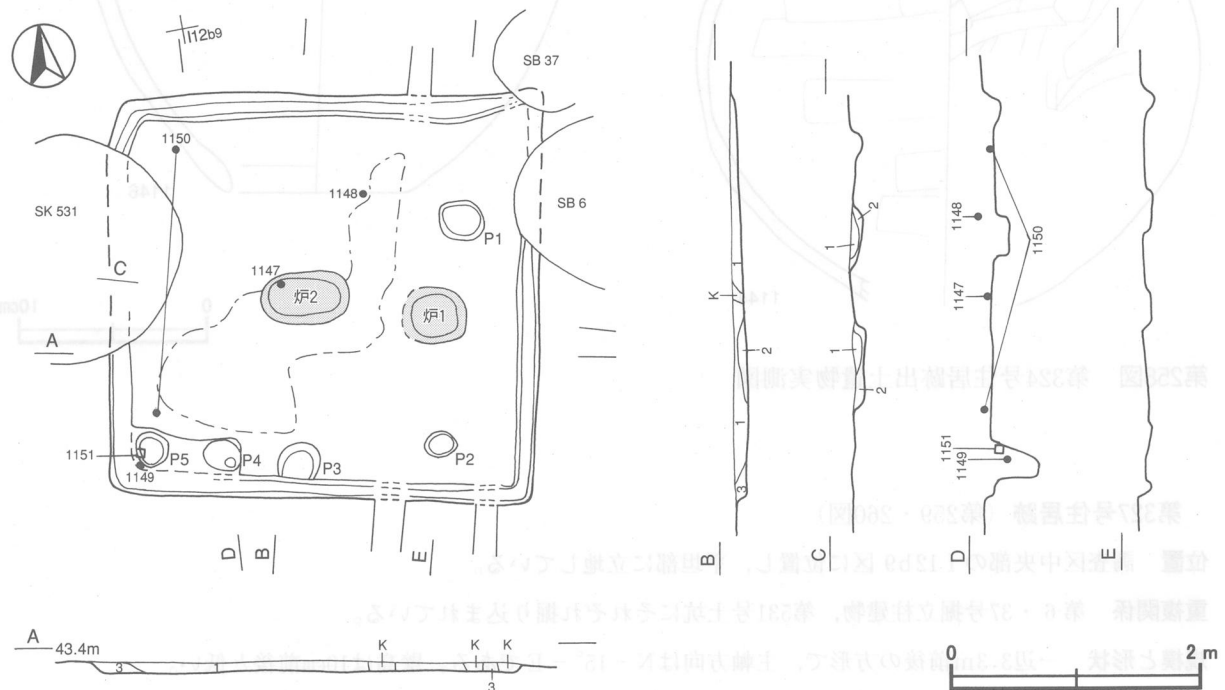
**覆土** 3層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・鹿沼パミス少量, 焼土ブロック微量
- 3 黒褐色 焼土ブロック少量

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片312点（坏3, 高坏6, 甕293, 埴10）、陶器片1点（椀）、土製品1点（不明）、石器1点（砥石）、礫片3点がほぼ全域から散在した状態で出土している。1147は炉2の覆土上層、1149・1151はP5の覆土上層から出土している。また、1150は北西部と南西部の床面から出土した破片が接合したものである。これらは住居廃絶に伴って遺棄されたものと考えられる。1148は北部の覆土上層から出土しており、住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。さらに、陶器片は破断面が摩滅していることから、後世の耕作等による混入と考えられる。

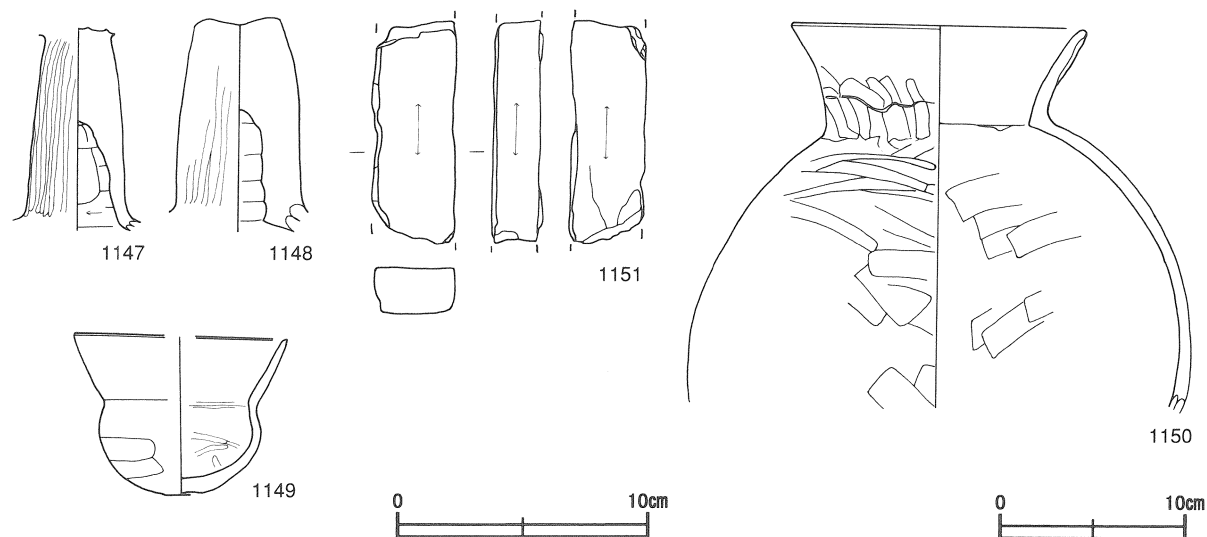
**所見** 本跡は比較的小形の住居でありながら、炉を2か所に付設しており、また、土器等の破片が極端に少な



第259図 第327号住居跡実測図



いことなどから、住居よりは作業場または工房として機能していた可能性が考えられる。しかし、そのことを裏付ける遺物はほとんど出土しておらず、詳細については判然としない。時期は、出土土器から5世紀中葉に機能していたものと考えられる。



第260図 第327号住居跡出土遺物実測図

第327号住居跡出土遺物観察表（第260図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1147	土師器	高坏	-	(8.1)	-	雲母・石英	橙	普通	脚部外面ヘラ磨き，内面ヘラ削り	炉2覆土上層	30%
1148	土師器	高坏	-	(8.6)	-	雲母・石英	にぶい褐	普通	脚部外面ヘラ磨き，内面ヘラ削り	北部上層	30%
1149	土師器	埴	[8.4]	6.6	1.5	長石・石英	橙	普通	底部外面ヘラ削り	P5覆土上層	60%
1150	土師器	甕	15.4	(20.4)	-	長石・石英	橙	普通	体部内外面ヘラナデ	北西部・南西部床面	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1151	砥石	(8.5)	3.5	2.0	140.3	凝灰岩	砥面4面，その他は剥離面。	P5覆土上層	

### 第329号住居跡（第261・262図）

**位置** 調査区北部のI12b0区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第319・328号住居，第6・37号掘立柱建物，第519・523号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 床面が露出した状態で検出されたため、壁の立ち上がりは確認されず、平面形は一辺約7.5mの方形で、主軸方向はN-28°-Wである。

**床** ほぼ平坦で、特に硬化した部分は認められない。壁溝は東部で確認できないが、周回していたものと考えられる。

**竈** 遺存状態が悪く、北壁の中央部やや東寄りの壁際から火床面が確認されただけである。付近の床面に粘土粒子や砂粒が散在しており、竈材の一部が流失したものと考えられる。火床部は北壁ラインの内側に位置し、床面と同じ高さの平坦面を使用し、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

**貯蔵穴** 径約50cmの円形で、南壁際の中央部東寄りに付設され、深さ約65cmである。

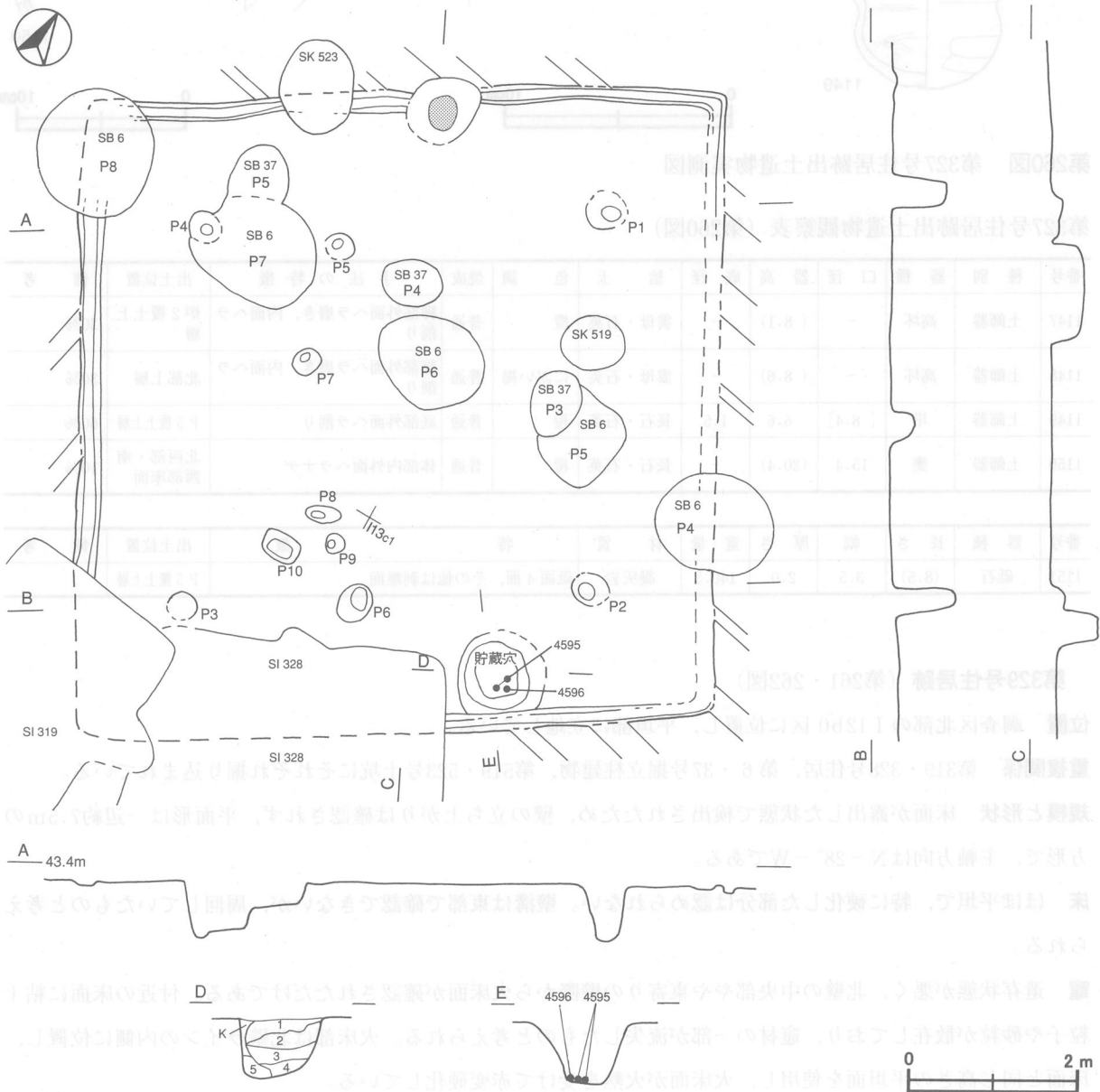
**貯蔵穴土層解説**

- 1 黒色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化物微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化物微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 5 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子微量

**ピット** 10か所。支柱穴はP1～P4が相当し、深さは60～65cm, 柱間寸法は南北が約4.4m, 東西が約4.7mで、規則的に配されている。また、P5・P6は深さ58cm・30cmで、いずれも支柱穴の東西間にあり対峙した位置にあることから間柱の柱穴の可能性が考えられる。さらに、P7～P10は深さ16～40cmで、性格については不明である。

**覆土** 確認されてない。

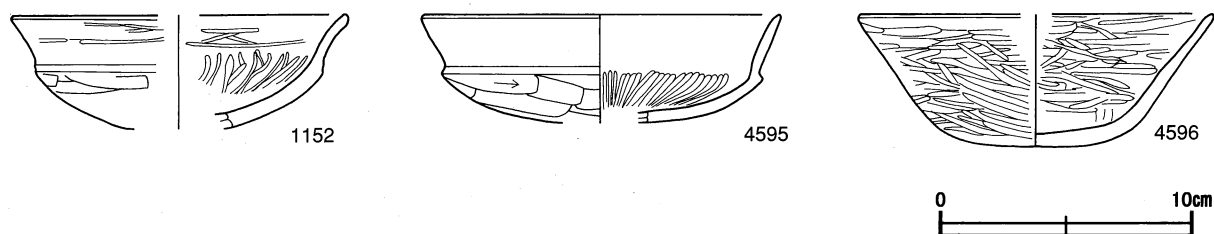
**遺物出土状況** 出土遺物は少なく、土師器片15点(坏6, 甕9), 礫片2点で、そのほとんどが貯蔵穴から出



第261図 第329号住居跡実測図

土している。1152は床面から出土した土師器坏片である。また、4595・4596は、貯蔵穴の底面からそれぞれ出土している。これらは住居廃絶に伴って遺棄されたものと考えられる。

**所見** 本跡は北壁に竈，南壁の竈に対峙した位置に貯蔵穴を付設し，一辺7.0mを超える比較的大形の住居跡である。時期は，遺構の形態と出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第262図 第329号住居跡・出土遺物実測図

第329号住居跡出土遺物観察表（第262図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1152	土師器	坏	[13.4]	(4.5)	-	潮汐・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内面放射状・口縁部横位のヘラ磨き	床面	5%
4595	土師器	坏	14.1	4.3	-	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	貯蔵穴底面	50%
4596	土師器	坏	[14.0]	5.2	[3.8]	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	内外面ヘラ磨き	貯蔵穴底面	30%

### 第330号住居跡（第263図）

**位置** 調査区中央部のI13a2区に位置し，平坦部に立地している。

**重複関係** 第6・37号掘立柱建物，第564・571号土坑，第15号井戸にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 床面が露出した状態で検出されたため，壁の立ち上がりは確認されず，平面形は長軸約8.0m，短軸約7.0mの長方形で，主軸方向はN-28°-Wである。

**床** 後世の耕作等によって攪乱を受けており，部分的に硬化した面が残るだけである。壁溝は周回している。

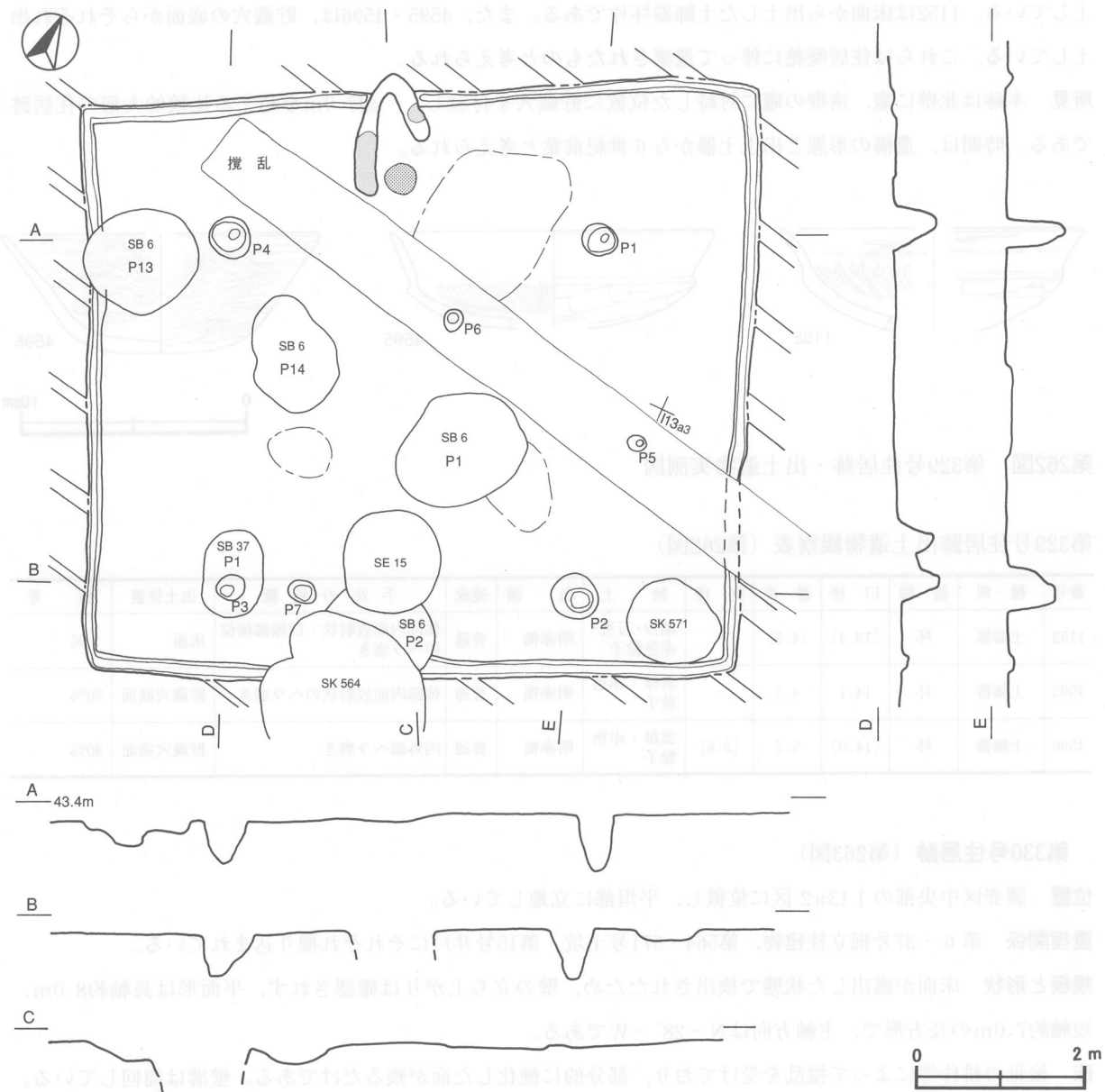
**竈** 遺存状態が悪く，北壁の中央部の壁際から火床面と袖部の一部が確認されただけである。火床部は北壁ラインから約80cm内側に位置して床面と同じ高さの平坦面を使用し，火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

**ピット** 7か所。主柱穴はP1～P4が相当し，深さは50～72cm，柱間寸法は約3.2mで，規則的に配されている。P6・P7は深さ33cm・17cmであるが，性格については不明である。

**覆土** 検出されなかった。

**遺物出土状況** 出土遺物は少なく，土師器片78点（坏23，高台付坏1，甕54），須恵器片5点，陶器片1点，平瓦片1点，礫片3点がほぼ全域から散在した状態で出土しているが，いずれも細片のため図示できない。土師器の高台付片や陶器片は，後世の耕作等による混入と考えられる。

**所見** 本跡は北壁に竈を付設し，主軸方向が西へやや傾き，長軸が8mの比較的大形の住居跡である。時期は，遺構の形態と土師器坏片から6世紀後葉と考えられる。



第263図 第330号住居跡実測図

第332号住居跡 (第264図)

位置 調査区中央部のH13i2区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第204・549号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東西軸約4.0mで、北側部分が調査区域外に延びているため、南北軸は約4.4mだけが確認でき、N-17°-Eを主軸とする長方形と推測される。壁高は15cmで、直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝は南西コーナー壁際と東壁際の一部から確認された。なお、南西コーナー部には、深さ16cm、径約40cmの皿状のくぼみが認められた。

炉 中央部にあり、長径約54cm、短径約36cmの楕円形で、床面を約12cmほど掘りくぼめている。炉床は赤変しているが、焼き締まった感じはない。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量，炭化粒子少量

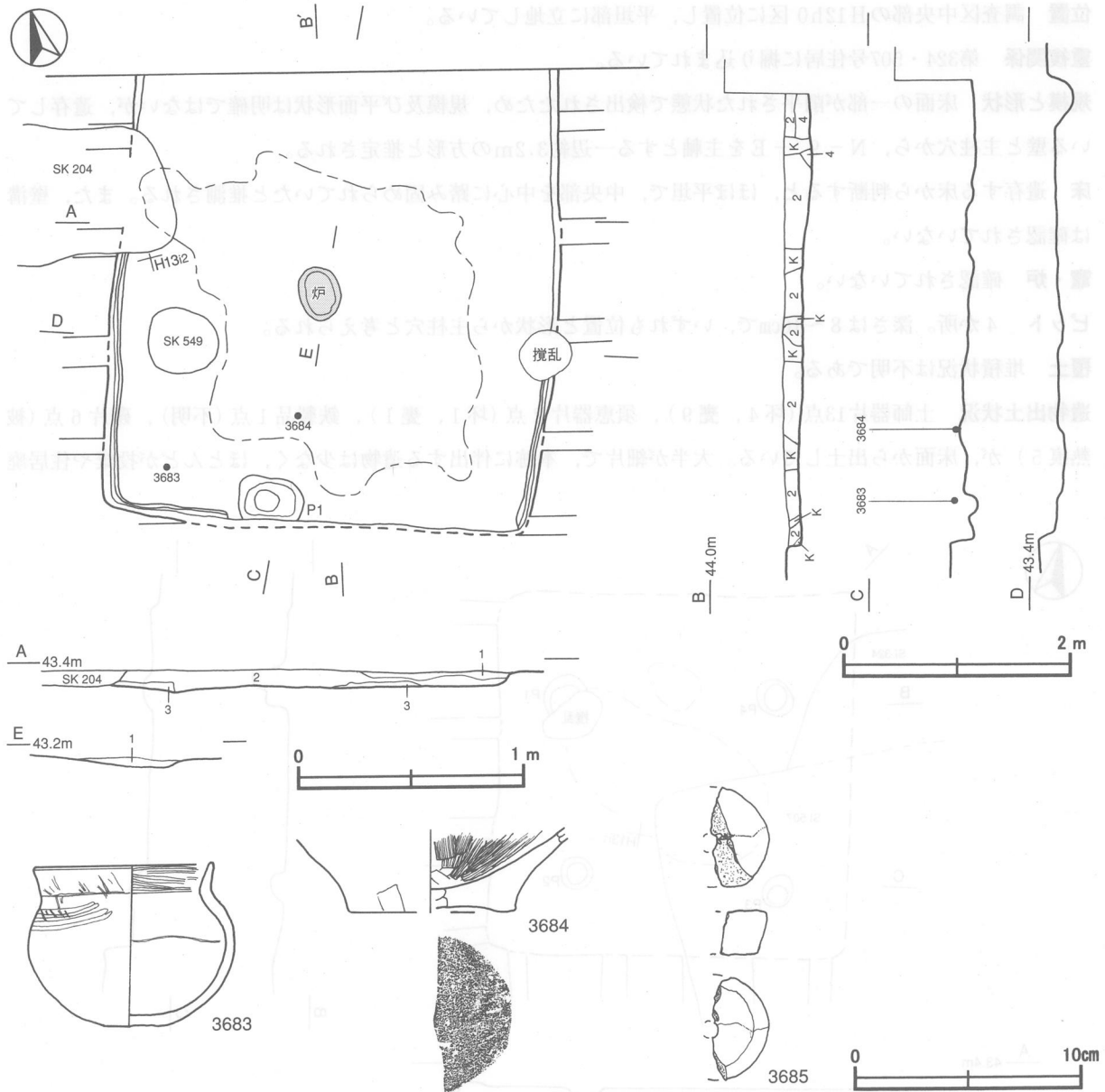
ピット 1か所。深さ14cmで，南壁際の中央部に位置しており，出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 4層からなり，焼土や炭化粒子を含み，不規則なブロック状の堆積をした人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量，ロームブロック・焼土粒子微量  
 2 黒褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量  
 3 暗褐色 ロームブロック中量，炭化粒子微量  
 4 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量，焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片84点（碗1，坏35，高台付坏4，埴3，甕42），須恵器片2点（甕），石製品1点（紡錘車），礫片4点（被熱痕）が出土している。床面から確認された遺物は少なく，大半が攪乱部から出土し，投棄あるいは混入したものと考えられる。3683は，南西コーナー部の覆土中層から出土している。



第264図 第332号住居跡・出土遺物実測図

所見 伴出遺物が少なく、明確には判断できないが、床面から出土している椀や小形甕の形状から、時期は4世紀後半と考えられる。

第332号住居跡出土遺物観察表（第264図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3683	土師器	小形甕	7.7	7.3	2.5	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部内面・体部外面ヘラ磨き	南西部覆土中層	60%
3684	土師器	甕	-	(3.6)	[7.2]	長石・雲母・石英	明褐	普通	体部内面縦位のハケ目調整	中央部床面	10%

番号	器種	長さ・幅	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3685	紡錘車	(4.5)	1.9	[0.7]	(20.6)	土製	2分の1欠損	東側覆土上層	

第334号住居跡（第265図）

位置 調査区中央部のH12h0区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第324・507号住居に掘り込まれている。

規模と形状 床面の一部が削平された状態で検出されたため、規模及び平面形状は明確ではないが、遺存している壁と支柱穴から、N-9°-Eを主軸とする一辺約3.2mの方形と推定される。

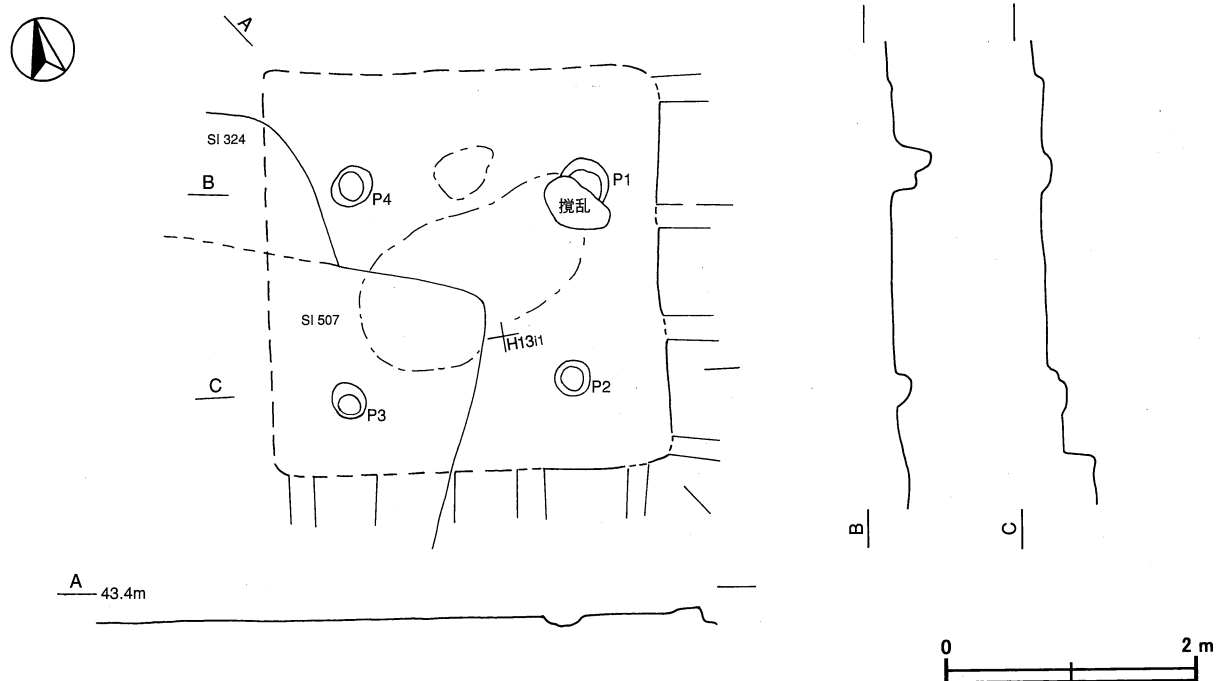
床 遺存する床から判断すると、ほぼ平坦で、中央部を中心に踏み固められていたと推測される。また、壁溝は確認されていない。

竈・炉 確認されていない。

ピット 4か所。深さは8~16cmで、いずれも位置と形状から支柱穴と考えられる。

覆土 堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片13点(坏4, 甕9), 須恵器片2点(坏1, 甕1), 鉄製品1点(不明), 礫片6点(被熱痕5)が、床面から出土している。大半が細片で、本跡に伴出する遺物は少なく、ほとんどが投棄や住居廃



第265図 第334号住居跡実測図

絶後の埋め戻しの段階で混入したものである。

**所見** 出土遺物が少なく時期は明確ではないが、大半が古墳時代の所産であることや重複関係などから、5世紀中葉以前と考えられる。

### 第336号住居跡 (第266・267図)

**位置** 調査区中央部のH13i4区に位置し、平坦部に立地している。

**規模と形状** 東西軸は約4.0mで、北側部分が調査区域外に延びているため、南北軸は約1.7mだけが確認でき、N-103°-Eを主軸とする一辺4.0m前後の方形あるいは長方形と推測される。壁は遺存していないため立ち上がり具合は不明である。

**床** 遺存している部分はほぼ平坦であるが、それほど硬化した部分は認められず、壁溝も確認されていない。南西コーナー部からは径約50cmに渡って焼土が広がっているが、床面に火熱を受けた痕跡はない。

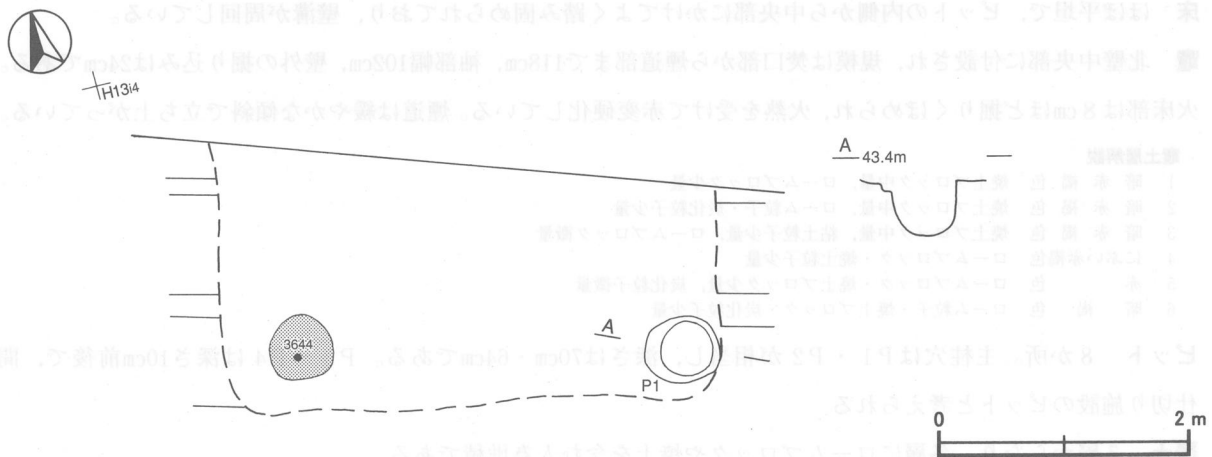
**竈** 検出されていない。

**ピット** 1か所。深さ44cmで、形状から柱穴と判断できないが詳細は不明である。

**覆土** 確認されていない。

**遺物出土状況** 土師器片32点(坏1, 埴1, 甕30), 礫片6点(被熱痕)が、攪乱部や覆土中から主に出土しており、大半は投棄または混入したものと考えられる。なお、南西コーナー部の床面には径約50cmの焼土塊が認められて、その上に3644が出土しているが、これらも住居廃絶後間もなく投棄されたものと考えられる。

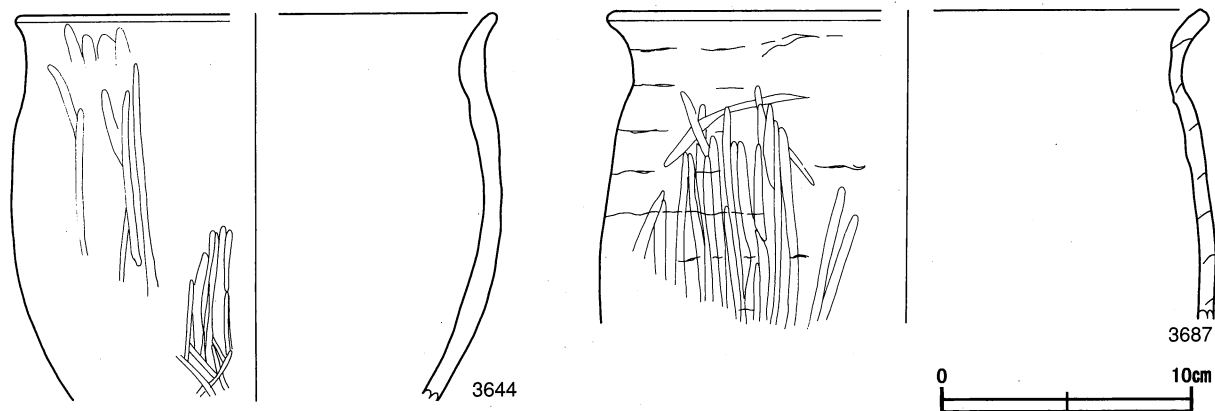
**所見** 出土遺物が少ないため時期は明確ではないが、投棄された甕の形状から6世紀代と推測される。



第266図 第336号住居跡実測図

### 第336号住居跡出土遺物観察表 (第267図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3644	土師器	小形甕	[18.8]	(15.5)	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部外面へラ磨き	南西部覆土中	10%
3687	土師器	甕	[23.4]	(12.4)	-	長石・石英	明赤褐	普通	体部外面縦位のへラ磨き	遺構確認面	10%



第267図 第336号住居跡出土遺物実測図

### 第340号住居跡 (第268・269図)

**位置** 調査区北部から中央部のH13g6区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第132・420号住居跡、第293号土坑を掘り込み、第16号井戸、第12号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 道路の南側に南西コーナー部が認められ、一辺約9.5mのN-15°-Wを主軸とする方形と考えられる。壁高は16cmで、垂直に立ち上がっている。長さ100cm前後、深さ約10cmの溝が北壁の両コーナー部寄りにそれぞれ1本ずつ認められ、間仕切り溝と考えられる。また、東壁のほぼ中央部に長さ約60cm、深さ約10cmの溝が認められ、その延長線上に径22~26cmの円形で、深さ10cm前後のピットが3か所認められ、間仕切り施設に伴う溝とピットと考えられる。

**床** ほぼ平坦で、ピットの内側から中央部にかけてよく踏み固められており、壁溝が周回している。

**竈** 北壁中央部に付設され、規模は焚口部から煙道部まで118cm、袖部幅102cm、壁外の掘り込みは24cmである。火床部は8cmほど掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化している。煙道は緩やかな傾斜で立ち上がっている。

#### 竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、粘土粒子少量、ロームブロック微量
- 4 にぶい赤褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 5 赤色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量

**ピット** 8か所。支柱穴はP1・P2が相当し、深さは70cm・64cmである。P3~P4は深さ10cm前後で、間仕切り施設のピットと考えられる。

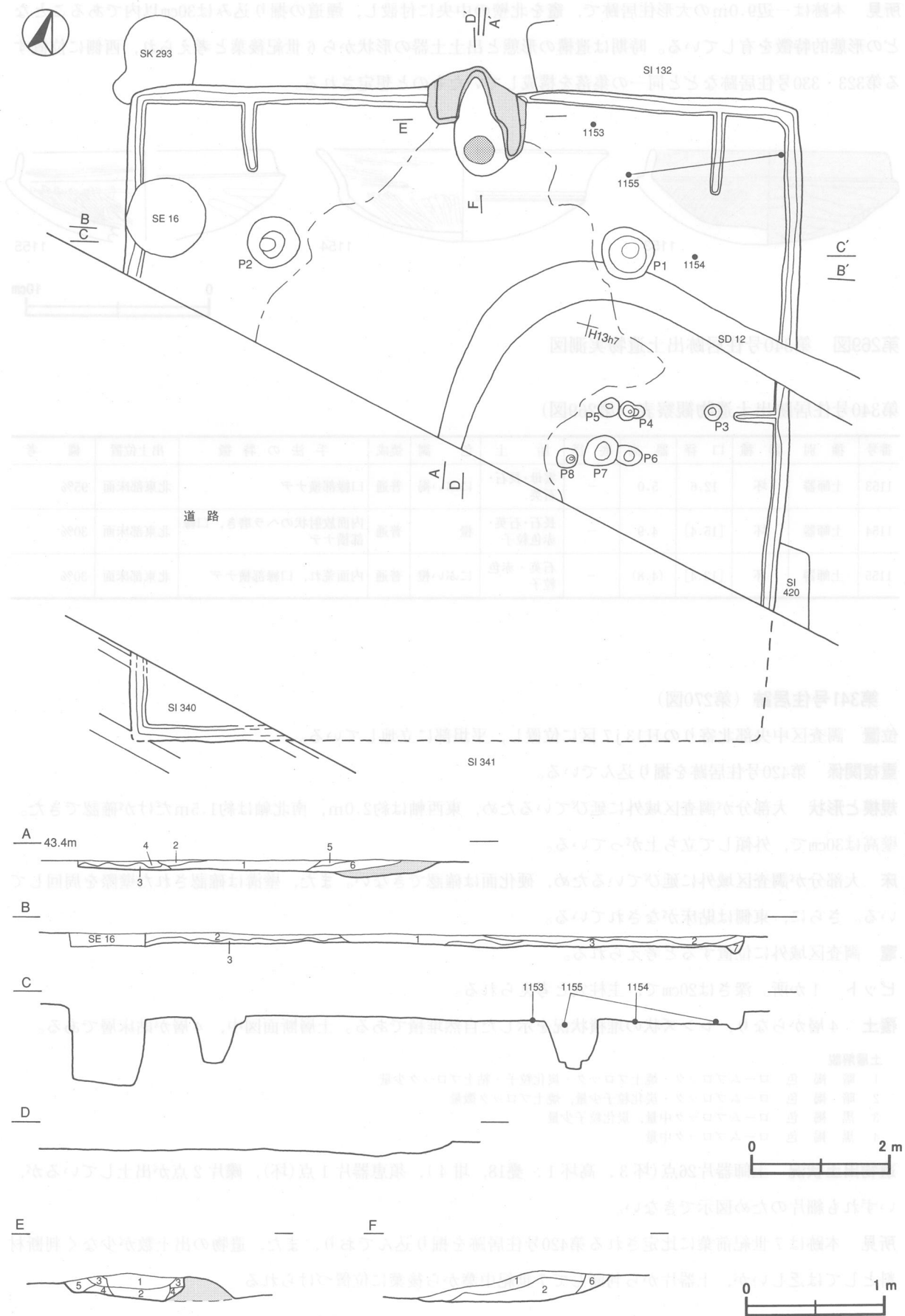
**覆土** 7層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化材・粘土ブロック少量
- 2 黒色 ロームブロック中量、焼土ブロック、炭化材少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 5 極暗褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物・粘土粒子少量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・焼土粒子・粘土ブロック少量
- 7 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

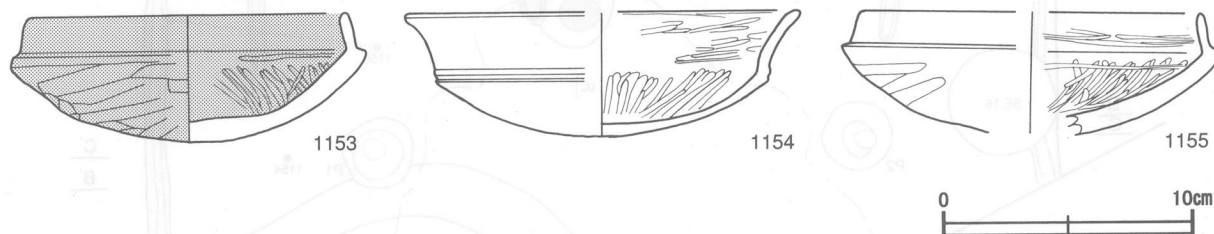
**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片570点(坏223, 高坏8, 埴11, 甕322, 甗1, 手捏土器5), 須恵器片2点(坏1, 甕1), 鉄滓1点, 礫片25点(内被熱痕10)が出土している。1153~1155はいずれも北東部の床面から出土しており、住居廃絶に伴って遺棄されたものと考えられる。





第268図 第340号住居跡実測図

所見 本跡は一辺9.0mの大形住居跡で、竈を北壁の中央に付設し、煙道の掘り込みは30cm以内であることなどの形態的特徴を有している。時期は遺構の形態と出土土器の形状から6世紀後葉と考えられ、西側に位置する第323・330号住居跡など同一の集落を構成していたものと想定される。



第269図 第340号住居跡出土遺物実測図

第340号住居跡出土遺物観察表 (第269図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1153	土師器	坏	12.6	5.0	-	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ	北東部床面	95%
1154	土師器	坏	[15.4]	4.9	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	内面放射状のヘラ磨き、口縁部横ナデ	北東部床面	30%
1155	土師器	坏	[13.4]	(4.8)	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面荒れ、口縁部横ナデ	北東部床面	30%

### 第341号住居跡 (第270図)

位置 調査区中央部北寄りのH13j7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第420号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 大部分が調査区域外に延びているため、東西軸は約2.0m、南北軸は約1.5mだけが確認できた。壁高は30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 大部分が調査区域外に延びているため、硬化面は確認できない。また、壁溝は確認された壁際を周回している。さらに、東側は貼床がなされている。

竈 調査区域外に位置すると考えられる。

ピット 1か所。深さは20cmで、支柱穴と考えられる。

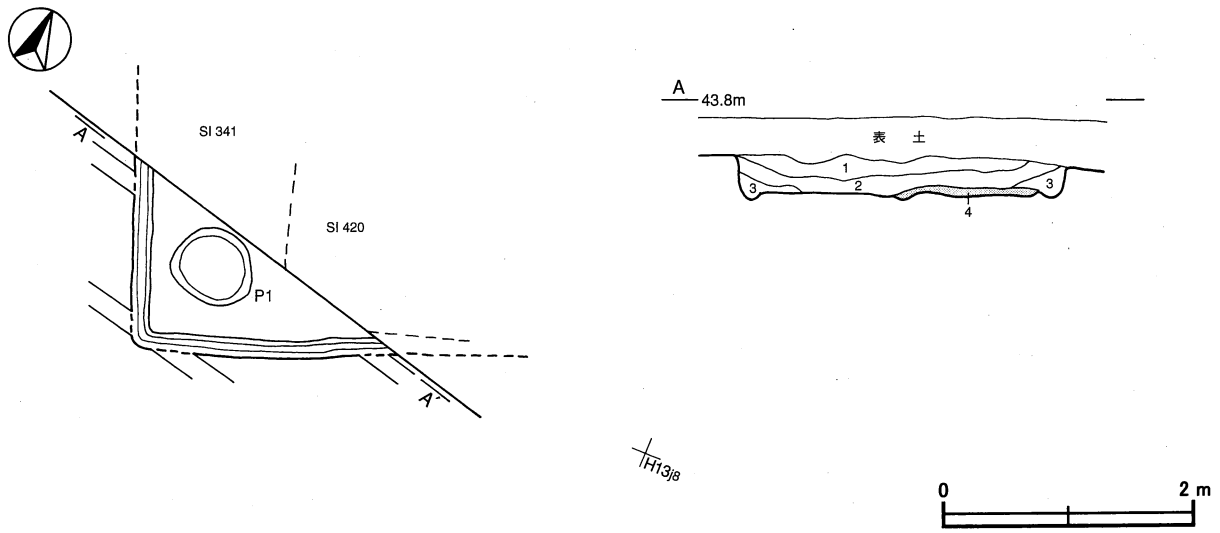
覆土 4層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。土層断面図中、4層が貼床層である。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片26点(坏3, 高坏1, 甕18, 埴4), 須恵器片1点(坏), 礫片2点が出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 本跡は7世紀前葉に比定される第420号住居跡を掘り込んでおり、また、遺物の出土数が少なく判断材料としては乏しいが、土器片から判断して7世紀中葉から後葉に位置づけられる。

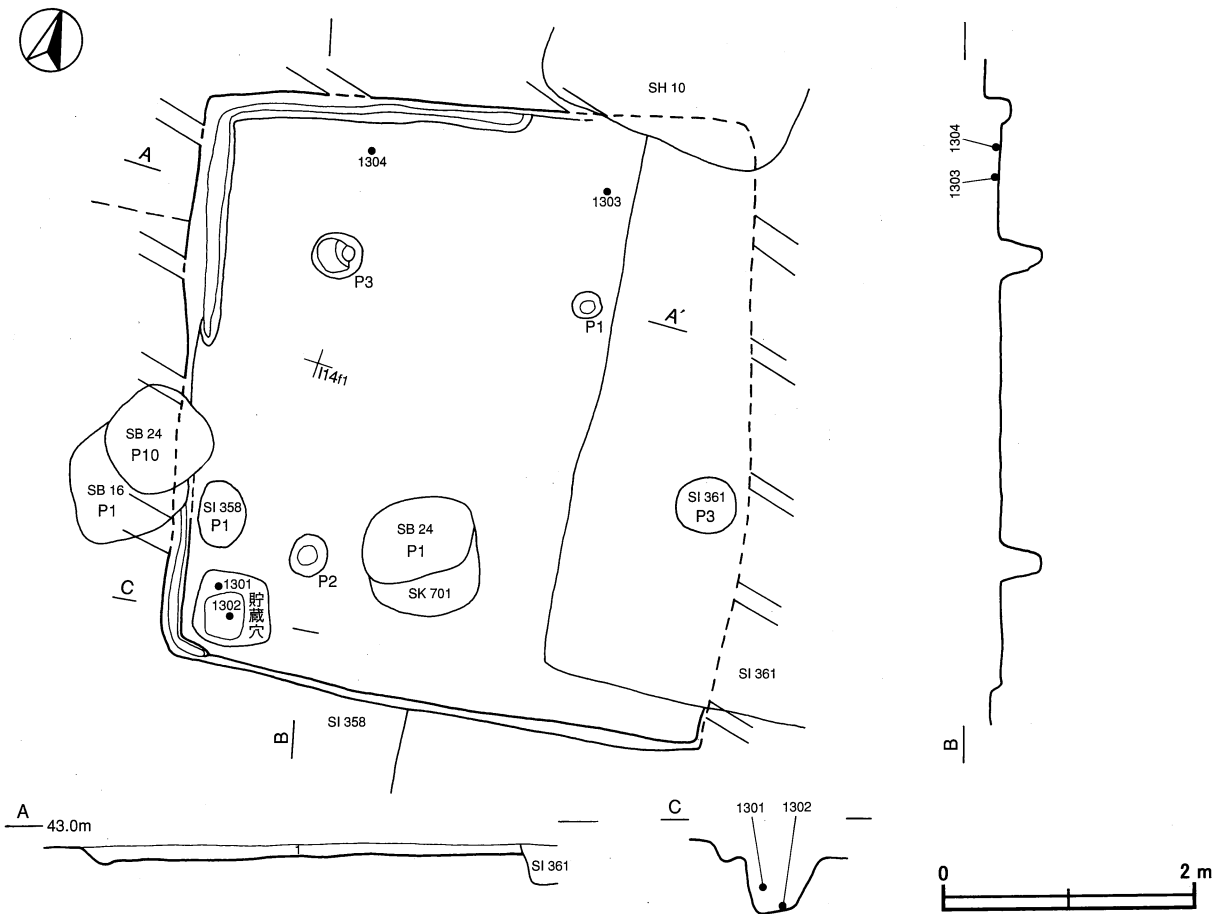


第270図 第341号住居跡実測図

**第350号住居跡 (第271・272図)**

**位置** 調査区中央部の I 14e1 区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第358・361号住居、第10号方形竪穴遺構、第16・24号掘立柱建物、第701号土坑にそれぞれ掘り込



第271図 第350号住居跡実測図

まれている。

**規模と形状** 遺存している北・西壁やピットの位置から、N-13°-Wを主軸とする南北軸4.8m、東西軸4.5mの方形と推定される。確認された壁高は4~6cmと低く、立ち上がり状況は判然としない。

**床** ほぼ平坦で、硬化面は認められない。壁溝は北・西壁の一部で検出された。

**炉・竈** 検出されなかった。

**ピット** 3か所。主柱穴はP1~P3が相当し、深さは22~45cmである。

**貯蔵穴** 南西部壁際に位置し、一辺約60cmの方形で、深さは45cmを測り、底面は平坦である。

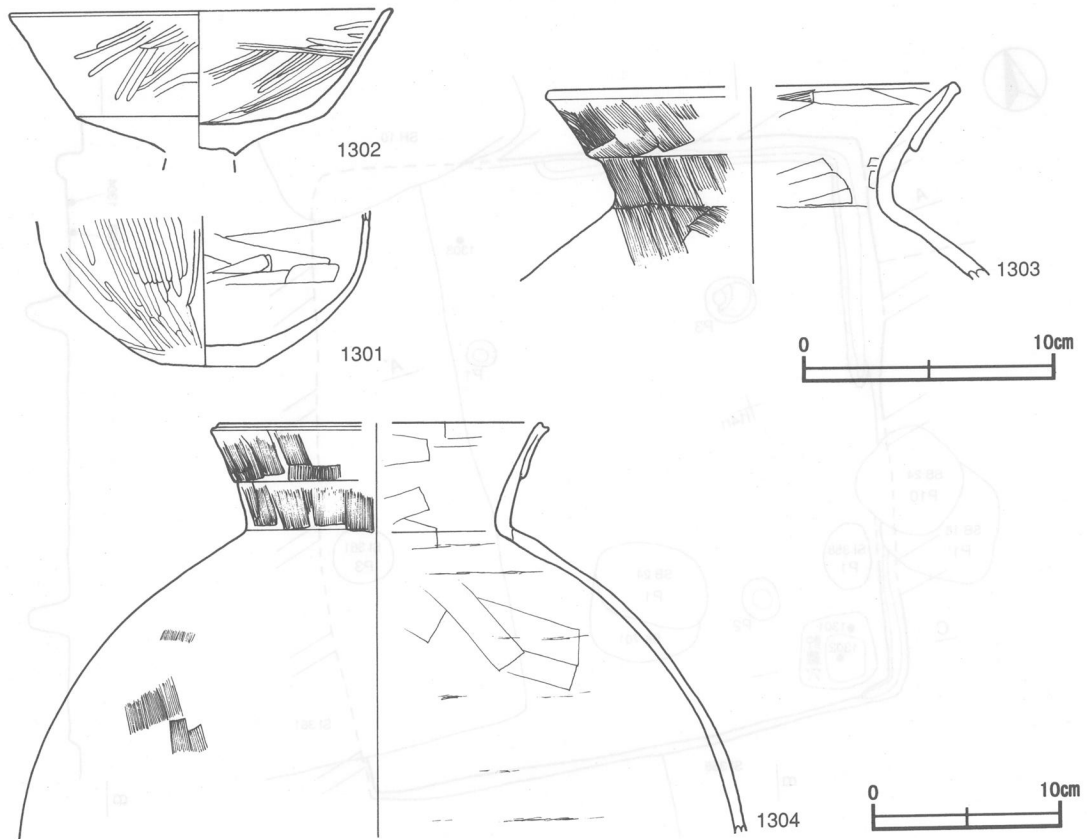
**覆土** 単一層である。ロームブロック・焼土ブロックを含む人為堆積である。

**土層解説**

1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片333点(坏39, 高坏9, 甕265, 甑5, 埴15), 須恵器片4点(坏), 陶器片1点(椀), 礫片5点が散在した状態で出土している。1301は貯蔵穴の覆土中層, 1302は貯蔵穴の底面, 1303は北東部の床面, 1304は北部の床面から出土しており, いずれも住居廃絶に伴って遺棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は, 6世紀前葉に比定される第358号住居跡に掘り込まれていることと, 出土土器から5世紀末と考えられる。



第272図 第350号住居跡出土遺物実測図

第350号住居跡出土遺物観察表（第272図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1301	土師器	埴	-	(6.0)	4.0	雲母・長石	にぶい橙	普通	体部外面ヘラミガキ, 体部内面ヘラナデ	貯蔵穴中層	20%
1302	土師器	高坏	15.3	(5.7)	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	坏部内外面ヘラ磨き	貯蔵穴底面	50%
1303	土師器	壺	[16.2]	(7.8)	-	長石・石英	橙	普通	複合口縁, 内面ハケ目調整後ナデ	北東部床面	10%
1304	土師器	壺	[15.2]	(21.8)	-	長石・石英	橙	普通	複合口縁, 口唇部に弱い沈線	北部床面	20%

第351号住居跡（第273・274図）

**位置** 調査区中央部東寄り I 14d1 区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第444号住居跡、第10号方形竪穴遺構を掘り込み、第347号住居、第789号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸約5.5m、短軸約5.0mの方形で、主軸方向はN-18°-Wである。壁高は10~18cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、北東部から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は南東部を除いて周回している。

**竈** 北壁中央部に付設され、規模は焚口部から煙道部まで約94cm、袖部幅約114cmである。壁外の掘り込みは約26cmで、煙道は急な傾斜で立ち上がる。火床部は16cmほど掘りくぼめられ、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

**竈土層解説**

- 1 灰 褐色 粘土粒子多量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 3 灰 褐色 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 褐 灰色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 5 にぶい赤褐色 焼土ブロック多量
- 6 黒 褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 7 黒 褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 8 暗 褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量

**ピット** 5か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さはP2が20cmで、その他は40~58cmである。P5は深さ62cmで、南壁際の中央部に位置することから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

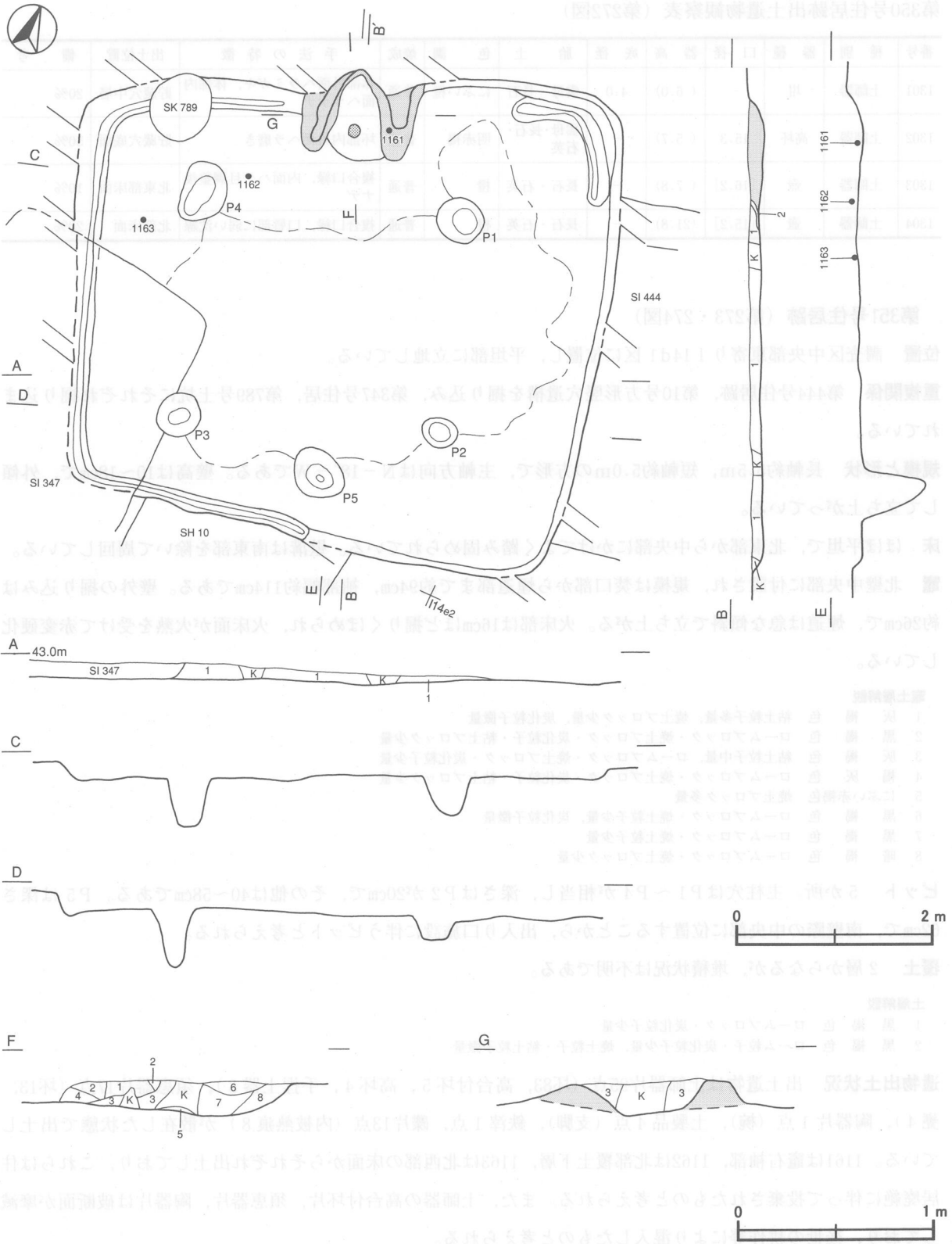
**覆土** 2層からなるが、堆積状況は不明である。

**土層解説**

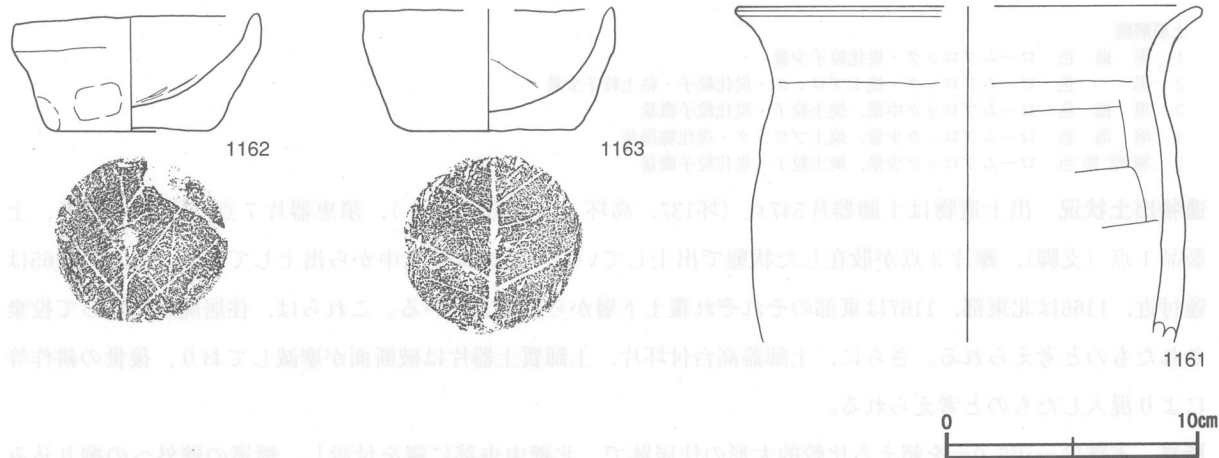
- 1 黒 褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 黒 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片95点（坏83、高台付坏5、高坏4、手捏土器3）、須恵器片17点（坏13、甕4）、陶器片1点（椀）、土製品4点（支脚）、鉄滓1点、礫片13点（内被熱痕8）が散在した状態で出土している。1161は竈右袖部、1162は北部覆土下層、1163は北西部の床面からそれぞれ出土しており、これらは住居廃絶に伴って投棄されたものと考えられる。また、土師器の高台付坏片、須恵器片、陶器片は破断面が摩滅しており、後世の耕作等により混入したものと考えられる。

**所見** 本跡は竈から東側の北壁が約20cmほど張り出し、硬化面も北西部へと広がっており、当該期の中にあって形態的な特徴を有している。時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第273図 第351号住居跡実測図



第274図 第351号住居跡出土遺物実測図

第351号住居跡出土遺物観察表 (第274図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1161	土師器	甕	[18.4]	(13.4)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面荒れ, 口縁部横ナデ	竈右袖部内	30%
1162	土師器	手捏土器	9.6	4.7	6.4	雲母・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	底部木葉痕, 内外面指頭痕を残すナデ	北部下層	90% PL221
1163	土師器	手捏土器	[9.8]	4.9	7.0	雲母・石英	にぶい褐	普通	底部木葉痕, 内外面指頭痕を残すナデ	北西部床面	80% PL221

### 第352号住居跡 (第275・276図)

**位置** 調査区中央部の I 13d9 区に位置し, 平坦部に立地している。

**重複関係** 第358号住居跡を掘り込み, 第355・448号住居, 第9・16・24号掘立柱建物, 第795号土坑にそれぞれ掘り込まれ, 耕作による攪乱も受けている。

**規模と形状** 長軸6.8m, 短軸6.3mの方形で, 主軸方向はN-0°である。壁高は10cmで, 外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で, 硬化面は認められない。壁溝は東壁際だけで検出された。

**竈** 北壁中央部に付設され, 規模は焚口部から煙道部まで約125cm, 袖部幅約110cmである。火床部は約8cmほど掘りくぼめられ, 火床面が火熱を受けて赤変硬化している。壁外の掘り込みは約40cmで, 煙道は緩やかな傾斜で立ち上がっている。

#### 竈土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 3 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量, ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック多量, 粘土粒子少量, ローム粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック多量, 粘土粒子少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 8 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック微量

**ピット** 4か所。主柱穴はP1～P4が相当し, 深さは50～88cmで, 柱間寸法はいずれも約3.5mで規則的に配されている。

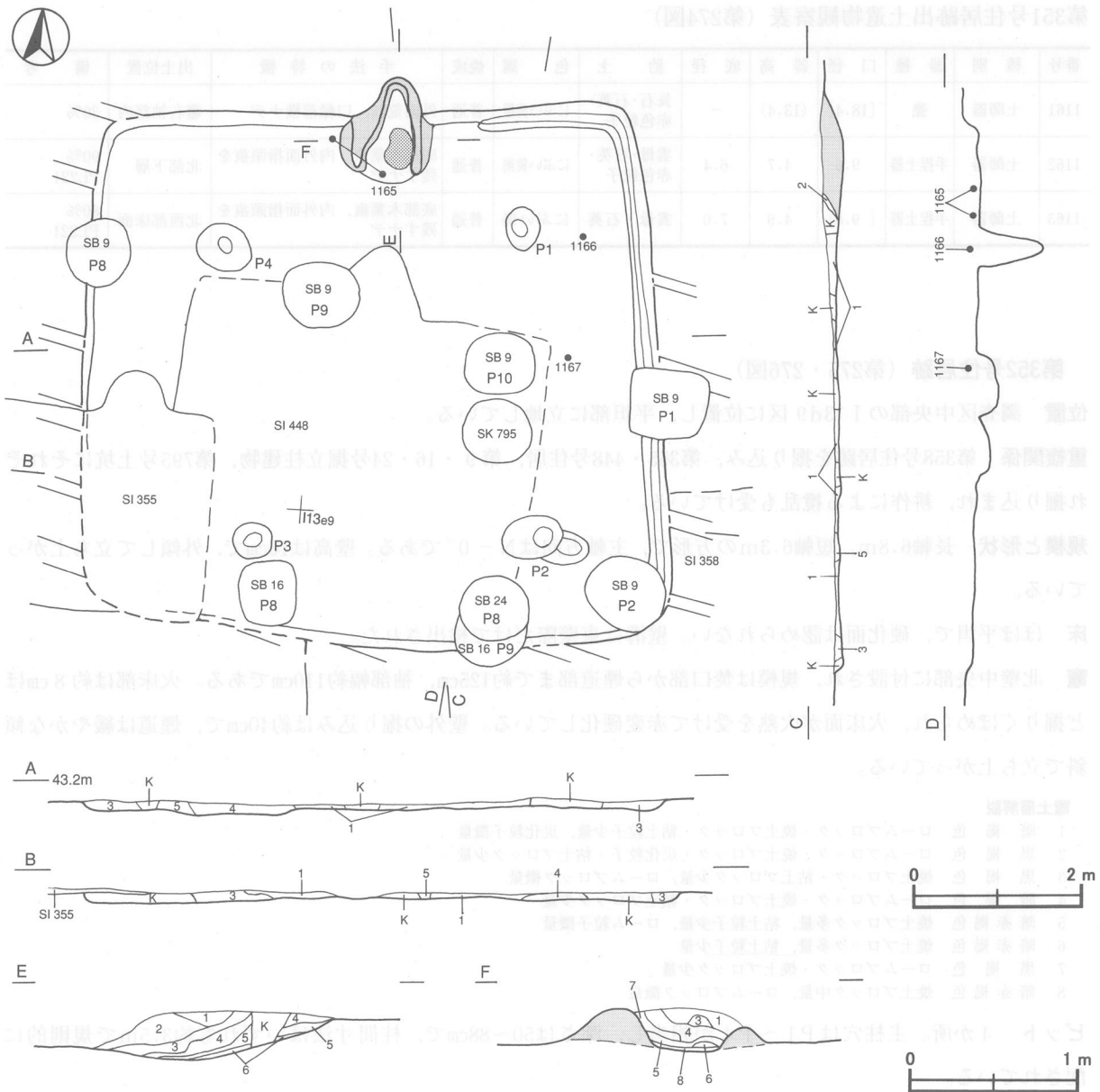
**覆土** 覆土は薄い5層からなり, ロームブロックや焼土の含有状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 黒色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量
- 5 極暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

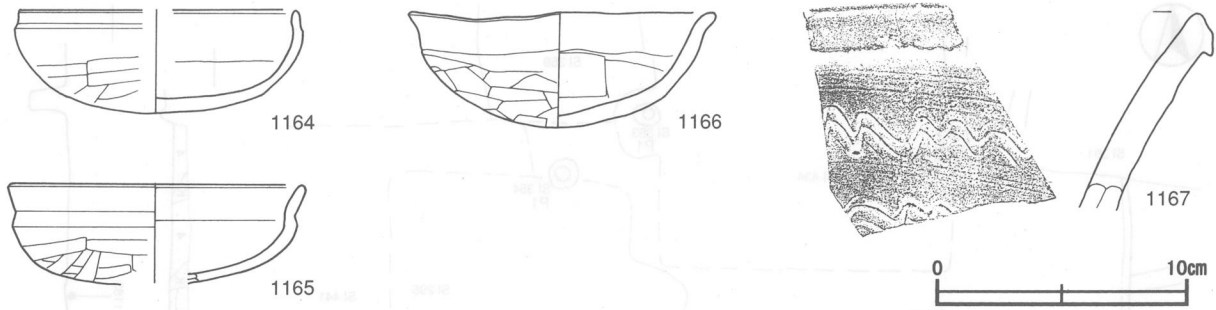
遺物出土状況 出土遺物は土師器片547点(坏137, 高坏4, 甕405, 埴1), 須恵器片7点(坏2, 甕5), 土製品1点(支脚), 礫片3点が散在した状態で出土している。1164は覆土中から出土しており, また, 1165は竈付近, 1166は北東部, 1167は東部のそれぞれ覆土下層から出土している。これらは, 住居廃絶に伴って投棄されたものと考えられる。さらに, 土師器高台付坏片, 土師質土器片は破断面が摩滅しており, 後世の耕作等により混入したものと考えられる。

所見 本跡は一辺6.0mを超える比較的大形の住居跡で, 北壁中央部に竈を付設し, 煙道の壁外への掘り込みは30cmを超えている。時期は, 遺構の形態と出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第275図 第352号住居跡実測図





第276図 第352号住居跡出土遺物実測図

第352号住居跡出土遺物観察表 (第276図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1164	土師器	坏	[11.1]	4.0	-	長石・石英	橙	普通	体部内面ナデ, 口縁部横ナデ	覆土中	70%
1165	土師器	坏	11.6	(4.0)	-	長石・雲母	橙	普通	体部内面ナデ, 口縁部横ナデ	甕付近下層	50% 破断面摩滅
1166	土師器	坏	12.1	4.6	-	雲母	橙	普通	体部内面ヘラナデ, 口縁部横ナデ	北東部下層	70%
1167	須恵器	甕	-	(7.9)	-	砂粒	褐灰	普通	口縁部外面波状文(2本)	東部下層	5%

### 第354号住居跡 (第277・278図)

**位置** 調査区中央部東寄りのI14g3区に位置し, 平坦部に立地している。

**重複関係** 第296・359・361・362・363・434・441号住居, 第691・692号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 中央部から北部にかけて第362・363号住居などに掘り込まれているため, 東西軸約7.5m, 南北軸は約3.0mだけが確認された。遺存している南・東壁とピットの位置から, N-10°-Wを主軸とする方形と推定される。確認された壁高は5~18cmで, ほぼ直立する。

**床** ほぼ平坦で, 硬化面や壁溝は確認されなかった。

**炉・竈** 第363・359号住居跡に掘り込まれていると考えられ, 遺存していない。

**ピット** 4か所。主柱穴はP1~P3が相当し, 深さは約40cmである。北西部に位置する主柱穴は検出されなかった。P4の深さは60cmで, 主柱穴間に位置することから, 間柱と考えられる。

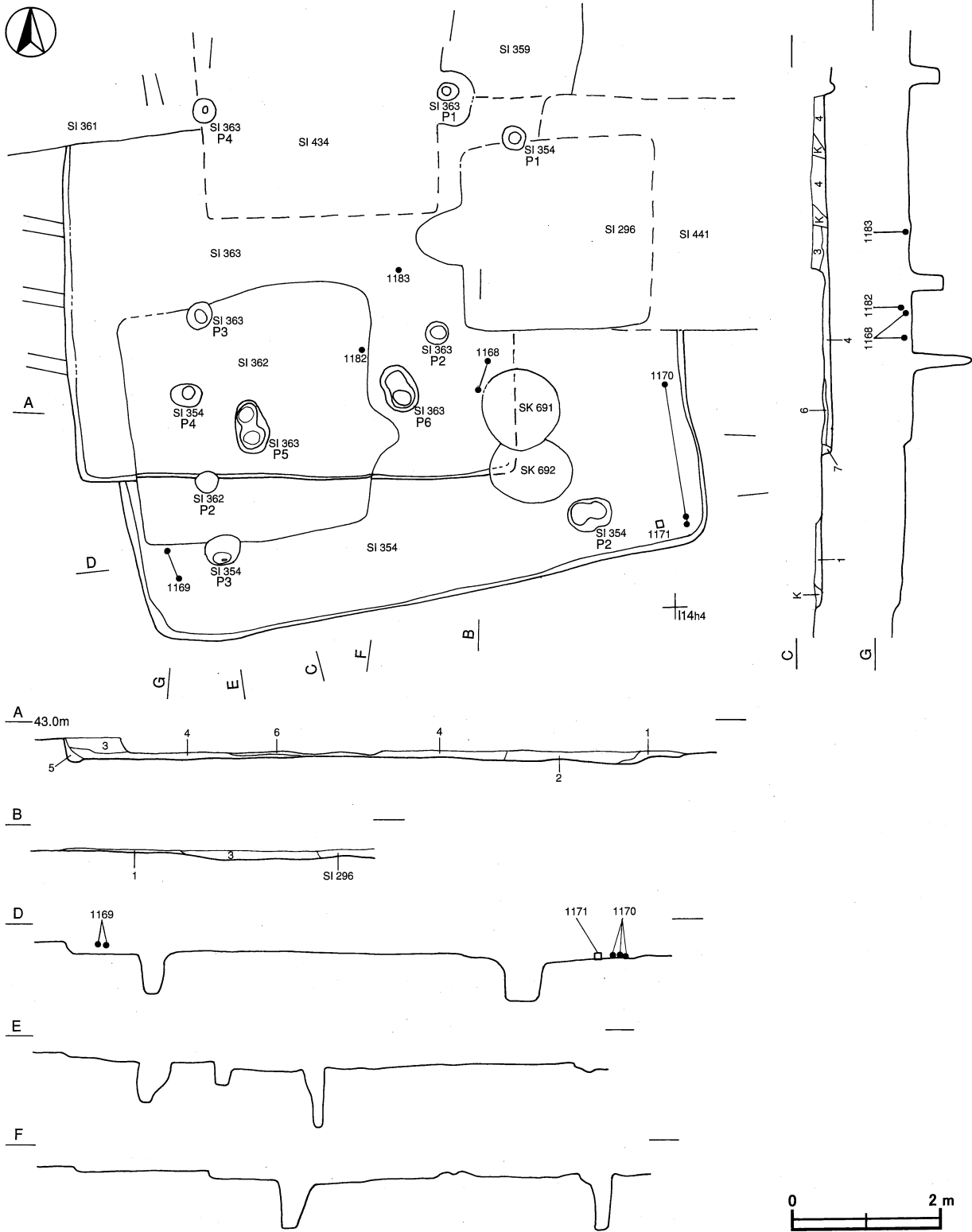
**覆土** 2層からなるが, 堆積状況は判然としない。

#### 土層解説

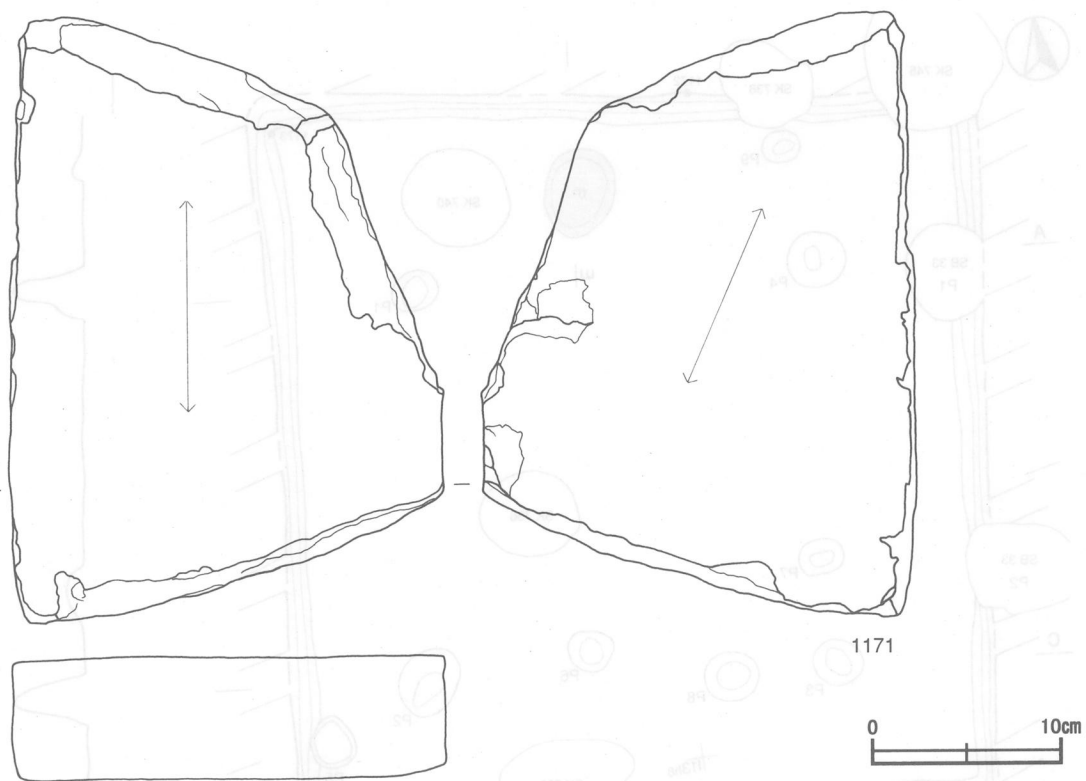
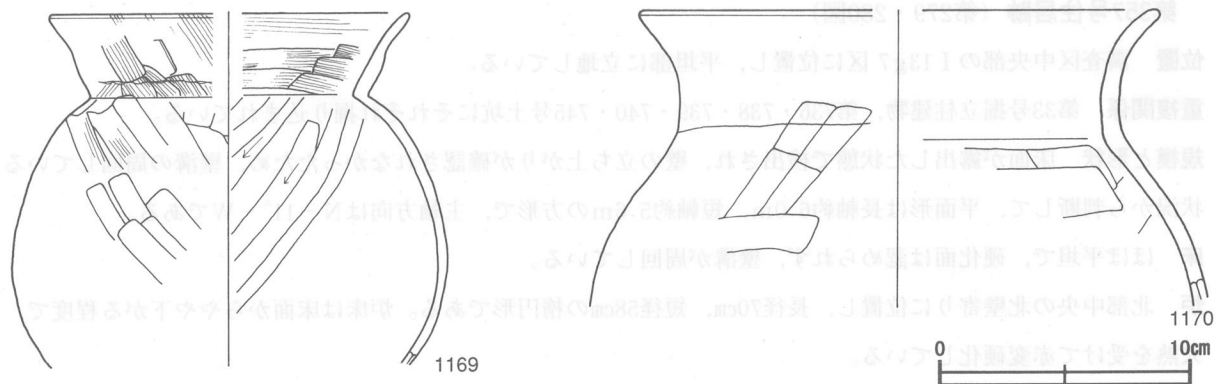
- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子少量

**遺物出土状況** 土師器片260点(坏16, 椀4, 高台付坏3, 高坏9, 甕227, 甌1), 須恵器片1点(蓋), 鉄滓2点, 礫片4点が散在した状態で出土している。1170・1171は南東部の床面からそれぞれ出土しており, 住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また, 1169は南西部の覆土上層から出土しており, 住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。なお, 土師器の高台付坏片や須恵器片は混入されたものである。

**所見** 本跡の時期は, 5世紀後葉に比定される第363号住居に掘り込まれていることと出土土器から, 5世紀中葉と考えられる。



第277图 第354・363号住居跡実測图



第278図 第354号住居跡出土遺物実測図

第354号住居跡出土遺物観察表 (第278図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1169	土師器	甕	[13.4]	(14.0)	-	砂粒	にぶい黄橙	普通	体部内外面ヘラナデ、口縁部ハケ目調整	南西部上層	20%
1170	土師器	甕	[20.7]	(11.3)	-	砂粒・赤色粒子	橙	普通	体部内外面ヘラナデ、口縁部横ナデ	南東部床面	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1171	砥石	31.9	22.9	6.5	8200.0	砂岩	砥面2面、その他は自然面	南東部床面	

第357号住居跡 (第279・280図)

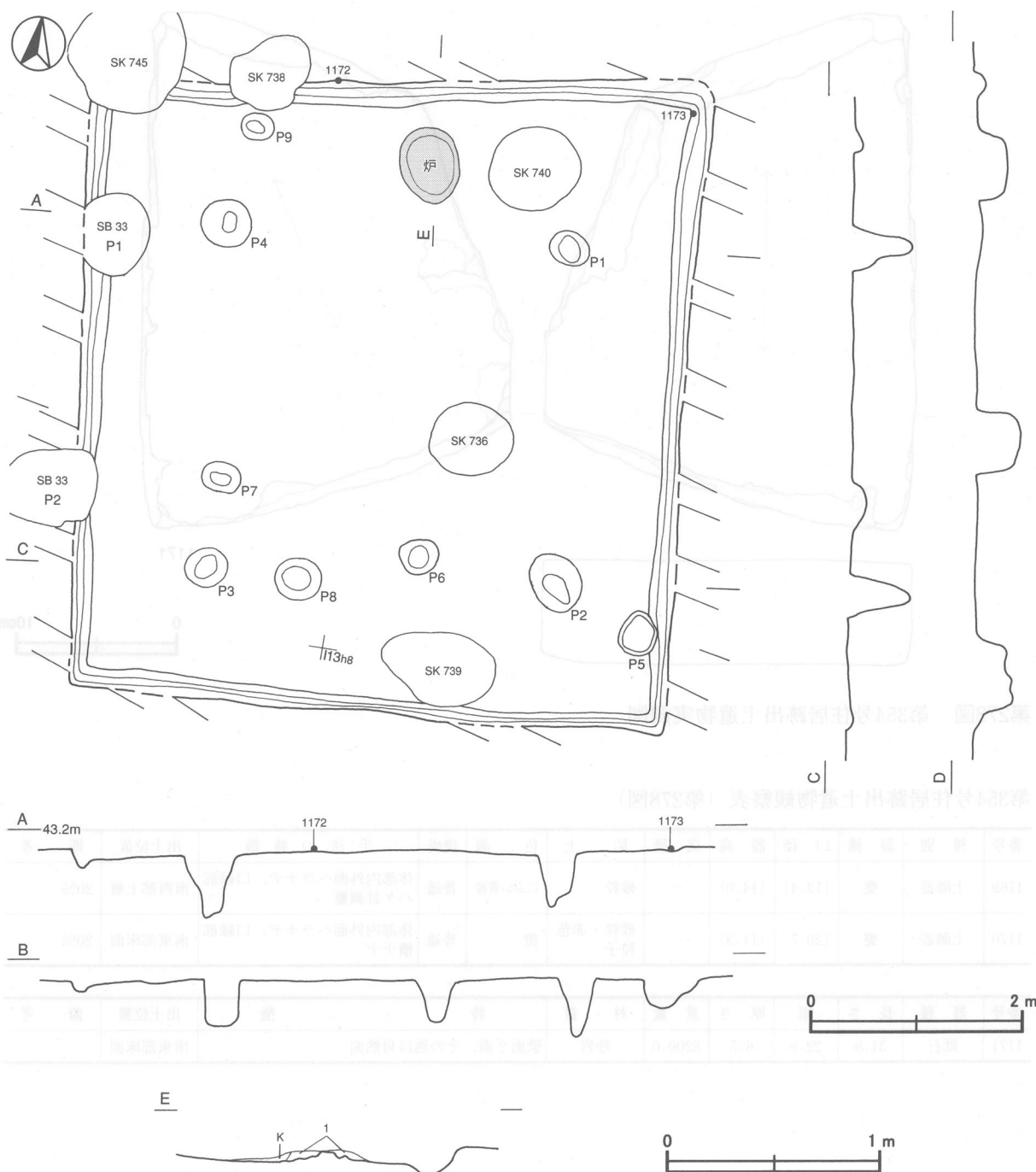
位置 調査区中央部の I 13g7 区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第33号掘立柱建物、第736・738・739・740・745号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 床面が露出した状態で検出され、壁の立ち上がりが確認されなかったため、壁溝の周回している状況から判断して、平面形は長軸約6.0m、短軸約5.6mの方形で、主軸方向はN-11°-Wである。

床 ほぼ平坦で、硬化面は認められず、壁溝が周回している。

炉 北部中央の北壁寄りに位置し、長径70cm、短径58cmの楕円形である。炉床は床面からやや下がる程度で、火熱を受けて赤変硬化している。



第279図 第357号住居跡実測図

炉土層解説

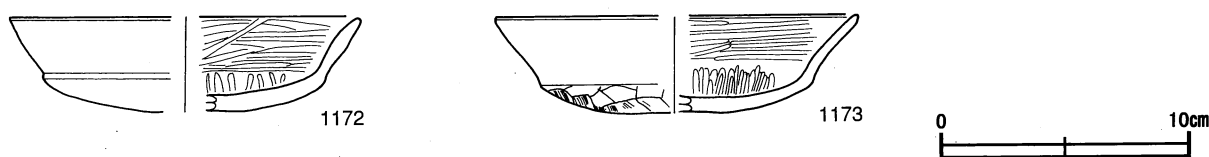
1 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量, ローム粒子少量

ピット 9か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは52～58cmで、柱間寸法はいずれも3.2mで、規則的に配されている。P5～P9は深さ16～42cmで、性格については不明である。

覆土 壁溝からローム粒子を含む暗褐色土が認められただけである。

遺物出土状況 出土遺物は土師器片43点(坏20, 高坏1, 甕22), 須恵器片1点(坏)が散在した状態で出土している。1172と1173は、いずれも北部の床面と考えられる確認面から出土した土師器坏片である。

所見 本跡は、北部ほぼ中央の北壁寄りに炉が付設され、一辺約6.0m前後の方形をした住居跡である。遺構の形態と出土土器の形状から、時期は6世紀初頭と考えられる。



第280図 第357号住居跡出土遺物実測図

第357号住居跡出土遺物観察表 (第280図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1172	土師器	坏	[12.8]	(3.7)	-	砂粒・赤色 粒子	橙	二次 焼成	内面ヘラ磨き, 口縁部横ナデ	北部下層	20%
1173	土師器	坏	[12.6]	(3.9)	(6.0)	砂粒	橙	普通	内面ヘラ磨き, 口縁部横ナデ	北部壁溝	20%

第358号住居跡 (第281・282図)

位置 調査区中央部のI13f0区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第350号住居跡を掘り込み、第352・375・448号住居、第9・16・23・24号掘立柱建物、第701・702・703・704・707号土坑にそれぞれ掘り込まれ、耕作による攪乱も受けている。

規模と形状 遺存している東・西壁やピットの位置から、一辺約9.5mのN-8°-Wを主軸とする方形と推定される。壁高は2～6cmと低く、立ち上がり状況は判然としない。

床 ほぼ平坦で、硬化面は認められない。壁溝は西壁際の一部で検出された。

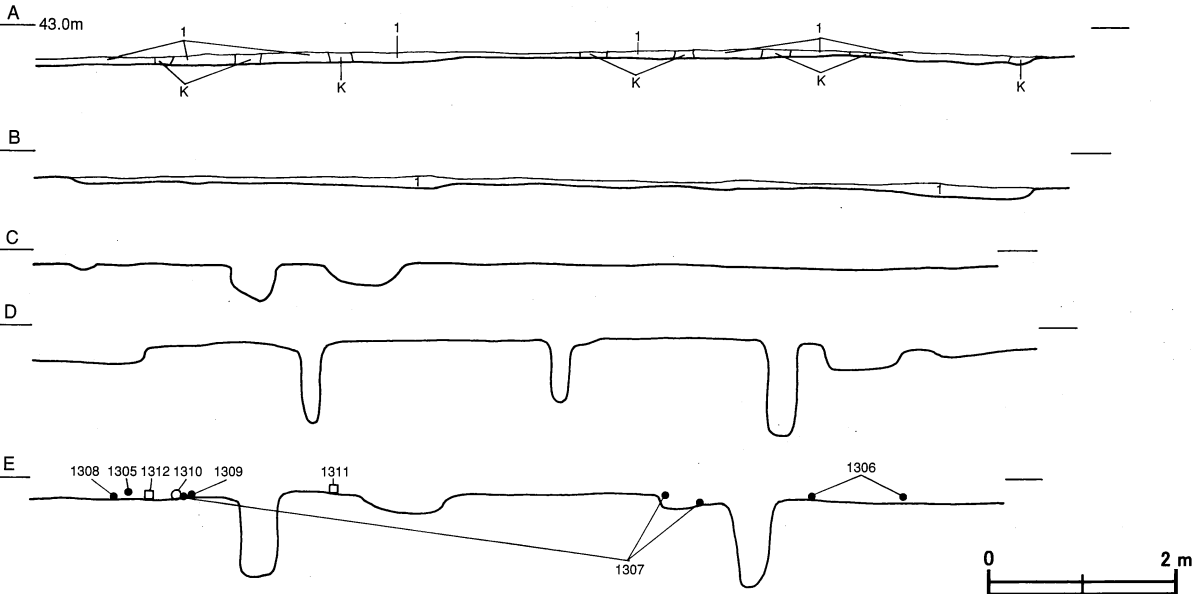
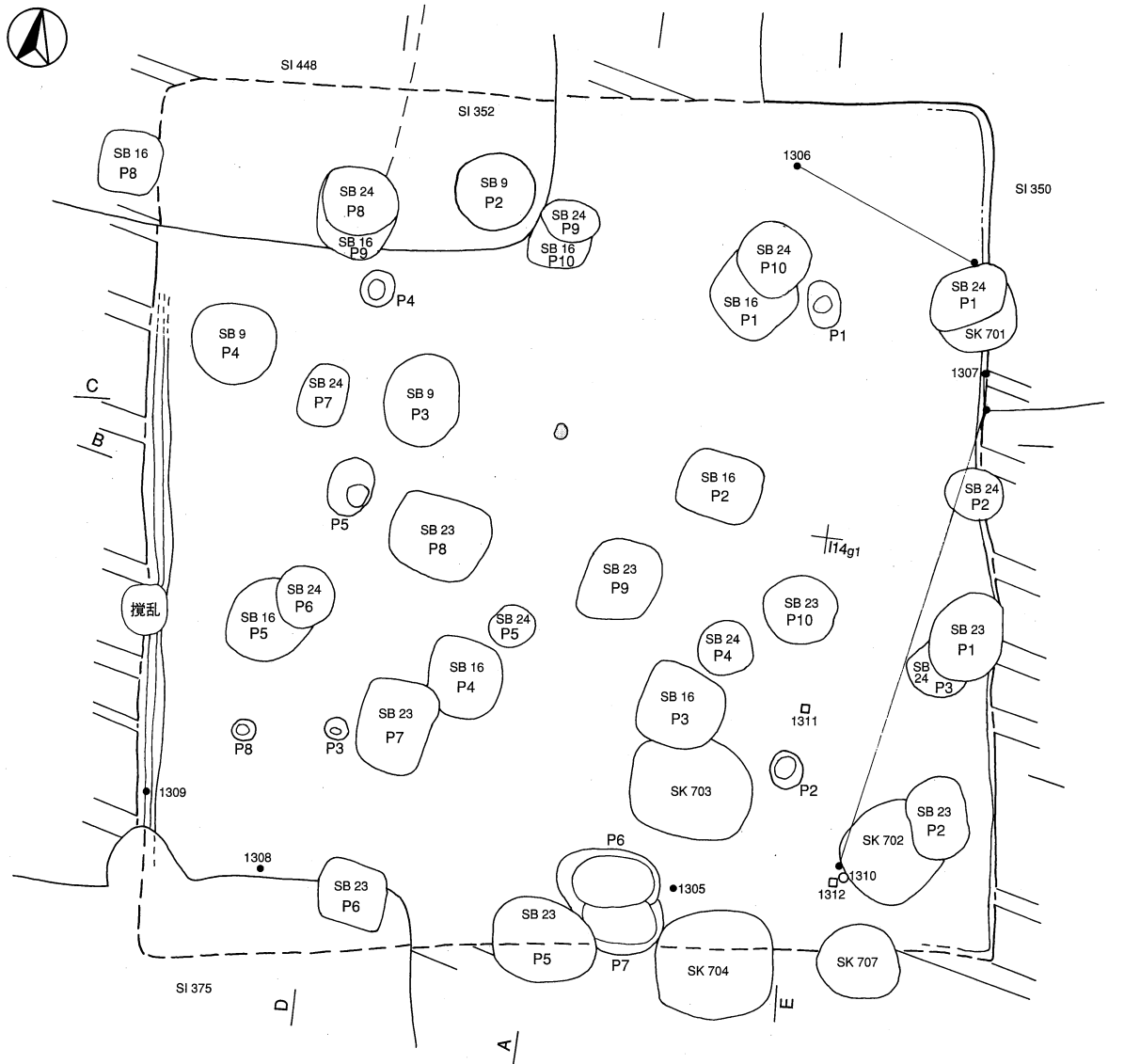
炉 中央部北寄りに径約12cmの円形に火熱を受けた痕跡が、わずかに認められただけである。

ピット 8か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは85～100cmで、柱間寸法はいずれも5.0mで、規則的に配されている。P5は深さ約60cmで、P3とP4のほぼ中間に位置していることから間柱と考えられる。P6・P7は深さ15cm・20cmで、南壁際の中央部に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 1層だけが確認されたが、堆積状況は判然としない。

土層解説

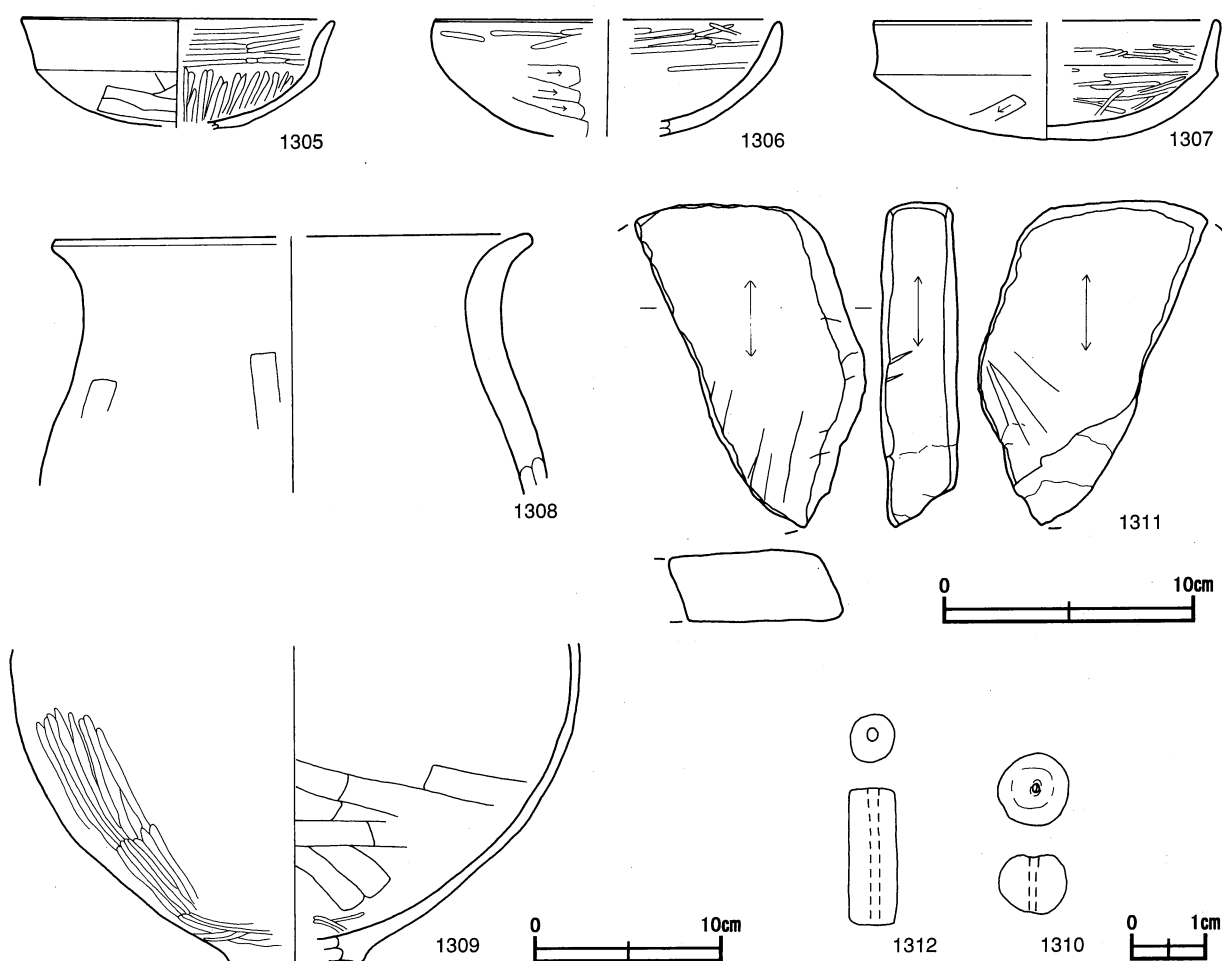
1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量



第281图 第358号住居跡実測图

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片903点（坏188，高台付坏2，高坏10，甕685，甑3，埴15），須恵器片3点（蓋），緑釉陶器片1点（椀），磁器片1点（碗），土製品1点（土玉），石製品1点（管玉），石器1点（砥石），鉄滓4点，礫片19点が散在した状態で出土している。1305は南部の覆土下層，1308・1309は南西部の床面，1311・1312は南東部の床面，1310は南東部覆土下層からそれぞれ出土している。また，1306は北東部の覆土下層，1307は東部と南東部の床面から出土した破片がそれぞれ接合したものである。さらに，土師器高台付坏片，須恵器蓋片，緑釉陶器片，磁器片は破断面が摩滅していることから，後世の耕作等による混入と考えられる

**所見** 本跡は後世の耕作や重複による掘り込みのために遺存状態が悪く，床面の状況や炉の形状が判然としませんが，当該期の住居にあって一辺9.0mを超える大形の住居跡である。時期は，遺構の形態と出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第282図 第358号住居跡出土遺物実測図

第358号住居跡出土遺物観察表（第282図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1305	土師器	坏	12.4	(4.4)	-	雲母・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	内外面ヘラ磨き，口縁部横ナデ	南部下層	60%
1306	土師器	坏	[13.6]	(4.6)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	内面荒れ，口縁部横位のヘラ磨き	北東部下層	25%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1307	土師器	坏	[13.6]	4.7	-	角礫・長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部内面ヘラ磨き, 口縁部横ナデ	東部・南東部床面	75%
1308	土師器	甕	[19.2]	(10.3)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ	南西部床面	10%
1309	土師器	甕	-	(16.8)	[7.0]	雲母・石英	にぶい黄橙	普通	底部外面・体部内面ヘラナデ	南西部床面	20%

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
1310	土玉	1.4	1.5	0.2	2.3	長石・石英	片面穿孔	南東部下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1311	砥石	(12.9)	3.2	2.9	(443.0)	砂岩	砥面3面, その他は破断面	南東部床面	

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1312	管玉	2.8	0.9	0.3	4.8	碧玉	片面穿孔	南東部床面	PL266

### 第359号住居跡 (第283・284図)

**位置** 調査区中央部のI14e3区に位置し, 平坦部に立地している。

**重複関係** 第360・361号住居跡を掘り込み, 第434号住居にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 遺存している東壁やピットから, 南北軸約6.3m, 東西軸約5.6mのN-4°-Wを主軸とする方形と推定される。壁高は約12cmで, 垂直に立ち上がっている。

**床** ほほ平坦で, 硬化面は認められない。壁溝は東壁の一部で検出された。

**竈** 北壁中央部に付設され, 規模は焚口部から煙道部まで110cm, 袖部幅80cm, 壁外の掘り込みは48cmである。

#### 竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・粘度ブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック中量, 粘土粒子少量, ロームブロック微量

**ピット** 4か所。主柱穴はP1～P4が相当し, 深さは63～80cmで, 柱間寸法はいずれも3.0mで, 規則的に配されている。

**貯蔵穴** 北東コーナー部に付設されている。長径128cm, 短径94cmの楕円形で, 深さは14cm, 底面は皿状である。

#### 貯蔵穴土層解説

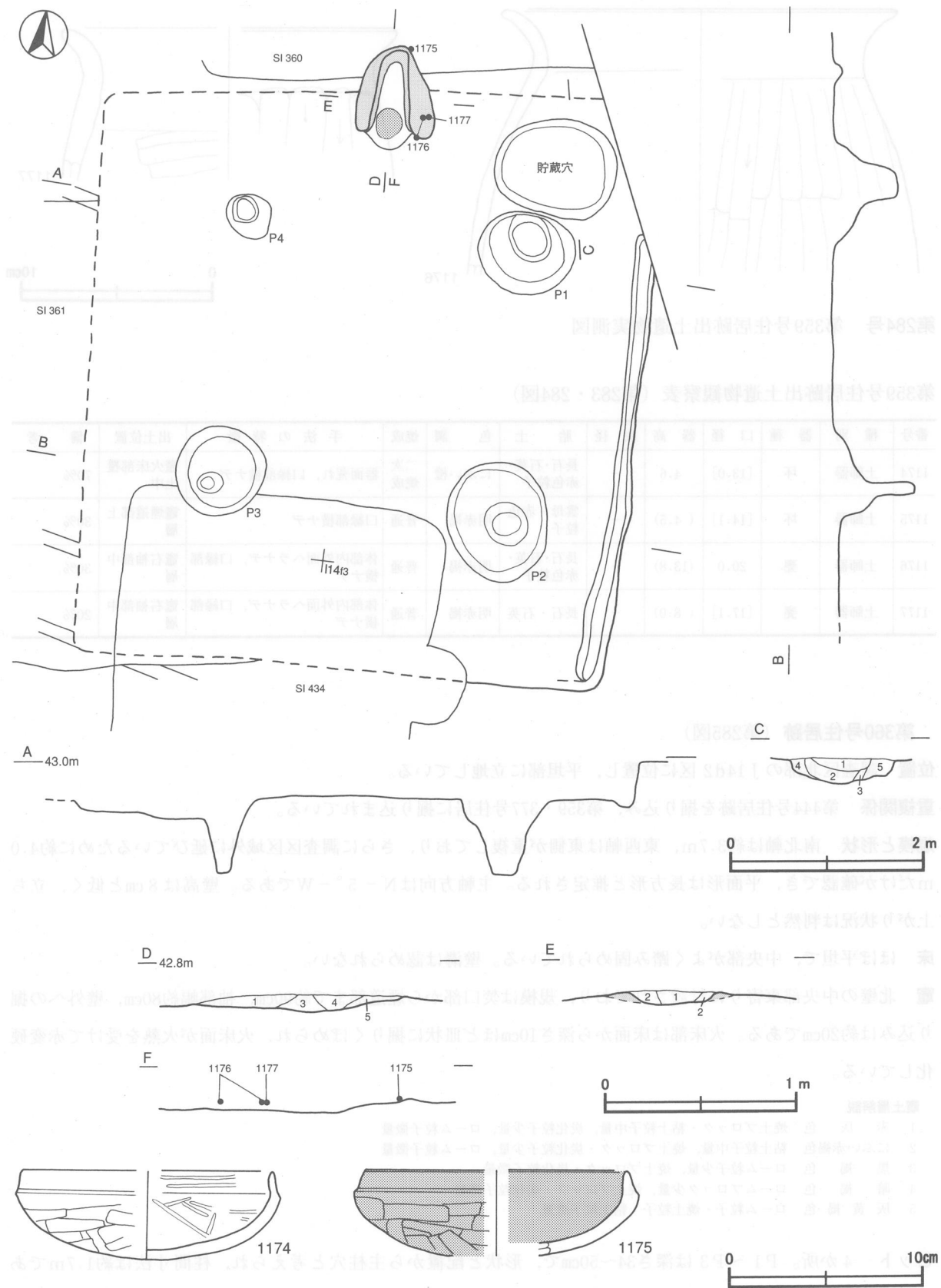
- 1 黒色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量

**覆土** 遺存状態が悪く確認できなかった。

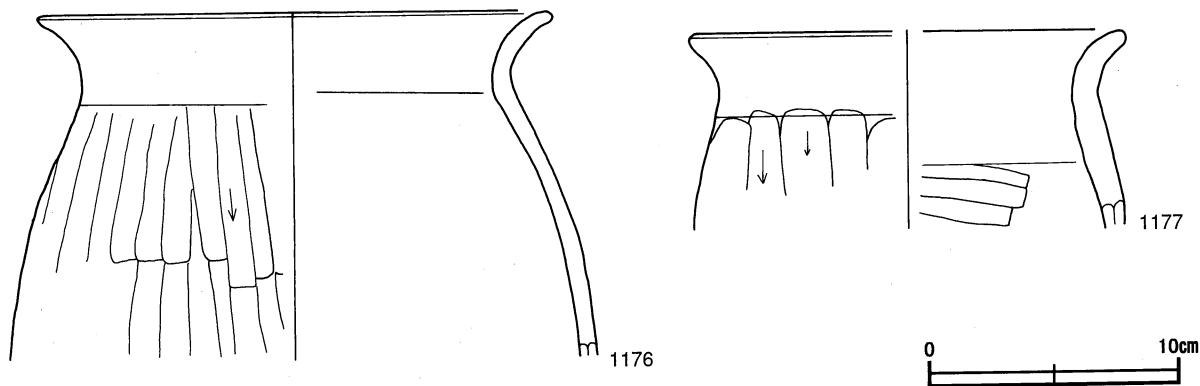
**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片89点(坏15, 甕72, 鉢2), 礫片7点が散在した状態で出土している。1174は竈火床部の覆土中, 1175は竈煙道部の覆土上層からそれぞれ出土している。また, 1176・1177は竈右袖部から出土しており, 袖部の芯材として転用されたものと考えられる。

**所見** 本跡の時期は, 出土土器から7世紀前葉と考えられる。





第283図 第359号住居跡・出土遺物実測図



第284号 第359号住居跡出土遺物実測図

第359号住居跡出土遺物観察表 (第283・284図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1174	土師器	坏	[13.0]	4.6	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	二次焼成	器面荒れ, 口縁部横ナデ	竈火床部覆土中	70%
1175	土師器	坏	[14.1]	(4.5)	-	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部横ナデ	竈煙道部上層	30%
1176	土師器	甕	20.0	(13.8)	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内外面ヘラナデ, 口縁部横ナデ	竈右袖部中層	30%
1177	土師器	甕	[17.1]	(8.0)	-	長石・石英	明赤褐	普通	体部内外面ヘラナデ, 口縁部横ナデ	竈右袖部中層	20%

### 第360号住居跡 (第285図)

**位置** 調査区北部のJ14d2区に位置し, 平坦部に立地している。

**重複関係** 第444号住居跡を掘り込み, 第359・377号住居に掘り込まれている。

**規模と形状** 南北軸は約3.7m, 東西軸は東側が重複しており, さらに調査区区域外に延びているために約4.0mだけが確認でき, 平面形は長方形と推定される。主軸方向はN-5°-Wである。壁高は8cmと低く, 立ち上がり状況は判然としない。

**床** ほぼ平坦で, 中央部がよく踏み固められている。壁溝は認められない。

**竈** 北壁の中央部東寄りに付設されており, 規模は焚口部から煙道部まで約90cm, 袖部幅約80cm, 壁外への掘り込みは約20cmである。火床部は床面から深さ10cmほど皿状に掘りくぼめられ, 火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

#### 竈土層解説

- 1 赤灰色 焼土ブロック・粘土粒子中量, 炭化粒子少量, ローム粒子微量
- 2 にぶい赤褐色 粘土粒子中量, 焼土ブロック・炭化粒子少量, ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 5 灰黄褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量

**ピット** 4か所。P1~P3は深さ34~50cmで, 形状と配置から主柱穴と考えられ, 柱間寸法は約1.7mである。また, P4は深さ約15cmで, 性格については不明である。

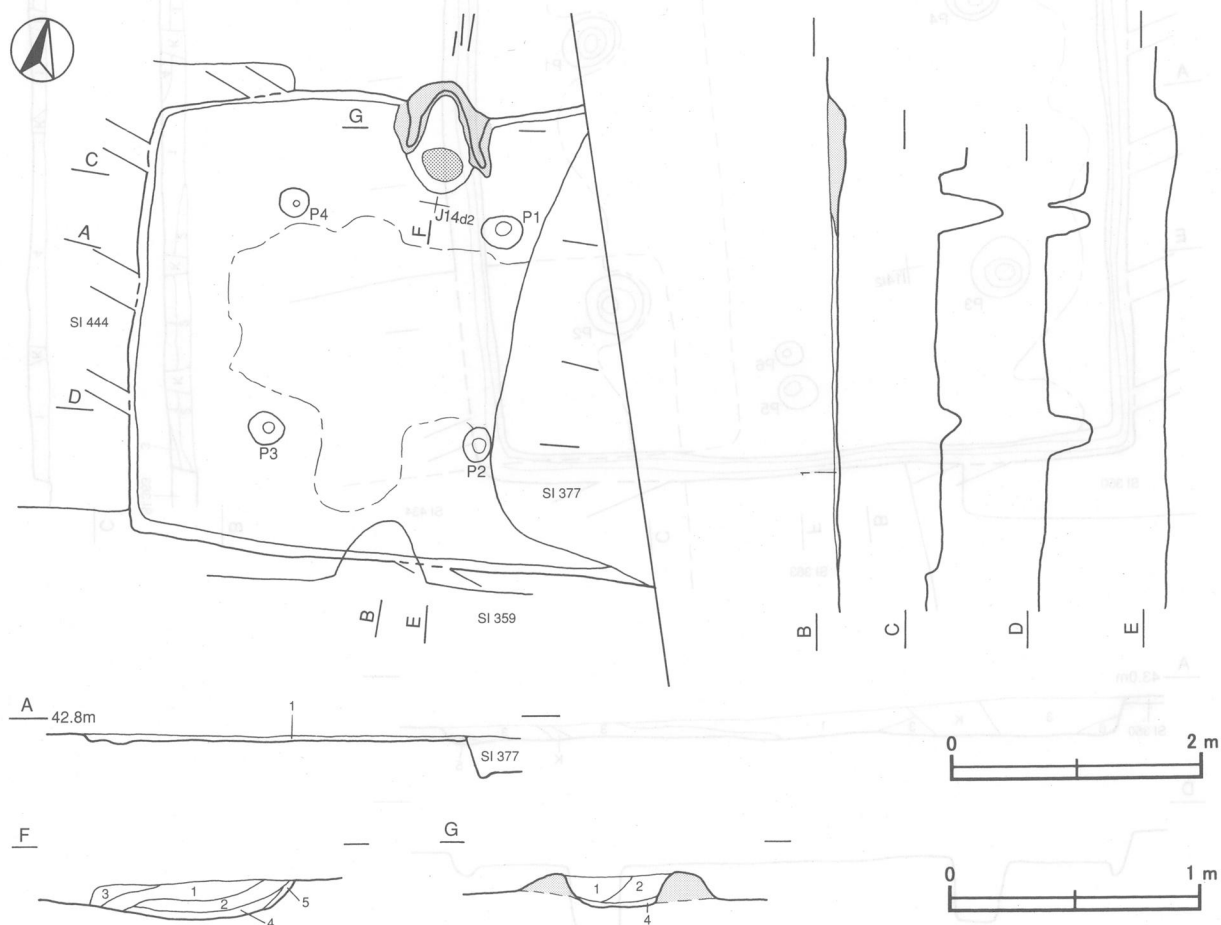
**覆土** 1層のみ確認され, 堆積状況は判然としない。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物・白色粒子少量

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片113点（坏28，甕83，埴2），礫片4点が出土しているが，いずれも細片のため図示できない。

**所見** 本跡の時期は，出土土器すべてが細片であるため，判断材料に乏しいが，土師器片から6世紀代と考えられる。



第285図 第360号住居跡実測図

### 第361号住居跡（第286図）

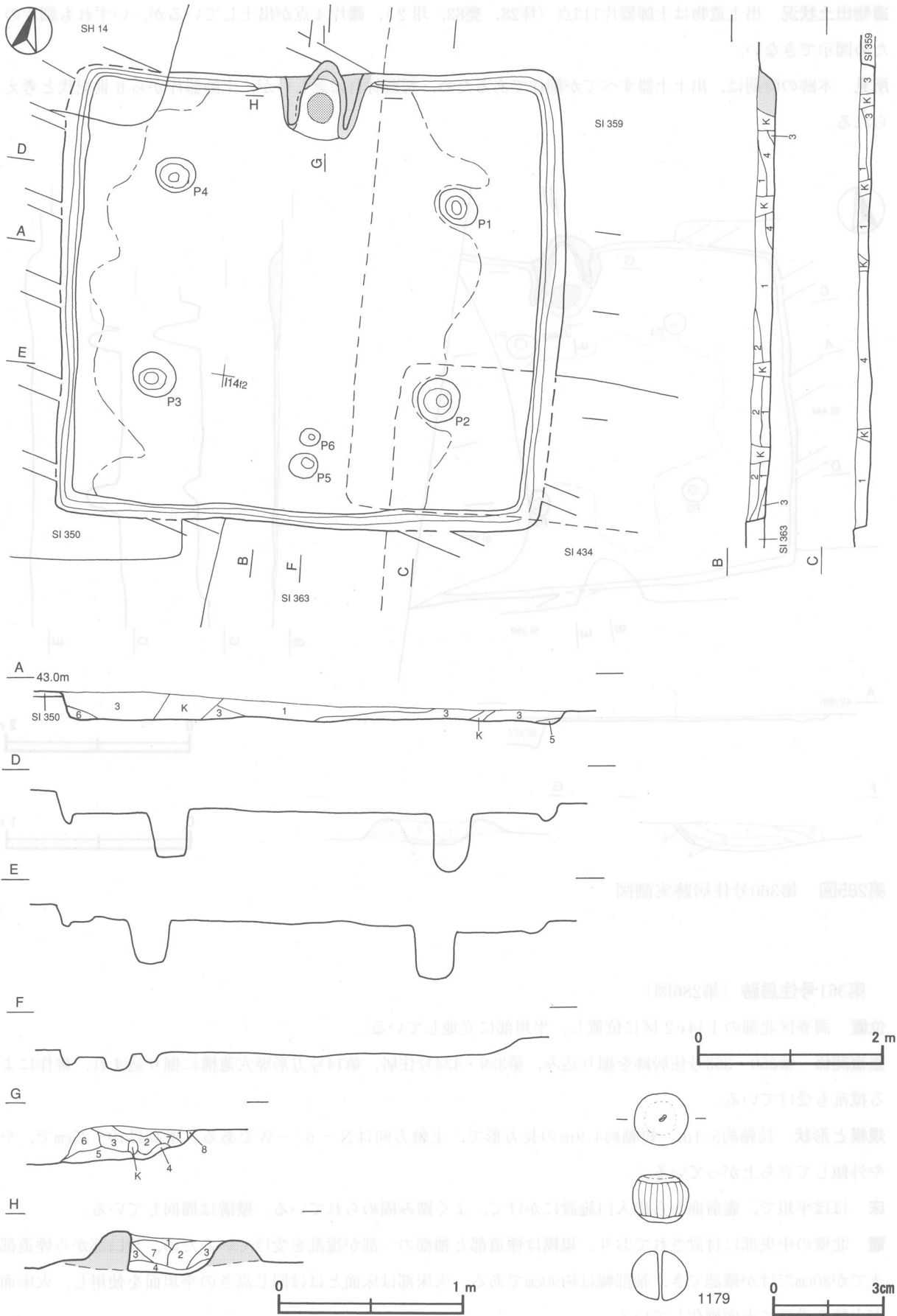
**位置** 調査区北部のI14e2区に位置し，平坦部に立地している。

**重複関係** 第350・363号住居跡を掘り込み，第359・434号住居，第14号方形竪穴遺構に掘り込まれ，耕作による攪乱も受けている。

**規模と形状** 長軸約5.4m，短軸約4.9mの長方形で，主軸方向はN-6°-Wである。壁高は10~25cmで，やや外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で，竈前面から出入口施設にかけて，よく踏み固められている。壁溝は周回している。

**竈** 北壁の中央部に付設されており，規模は煙道部と袖部の一部が攪乱を受けているため，焚口部から煙道部までが80cmだけが確認でき，袖部幅は約90cmである。火床部は床面とほぼ同じ高さの平坦面を使用し，火床面が火熱を受けて赤変硬化している。



第286図 第361号住居跡・出土遺物実測図

#### 竈土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 黒 褐 色 粘土粒子中量, ロームブロック・焼土ブロック少量
- 3 にぶい黄褐色 焼土粒子・粘土粒子中量, ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 褐 色 ローム粒子多量
- 5 暗 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 6 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量, 炭化粒子微量
- 7 暗 赤 褐 色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化物・粘土ブロック少量
- 8 灰 黄 褐 色 粘土粒子多量

**ピット** 6か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは45～60cmで、柱間寸法は南北約2.1m、東西約3.1mになり、規則的な配置がなされている。P5・P6は深さ18cm・10cmで、配置から出入り口施設の伴うピットと考えられる。

**覆土** 6層からなり、各層においてロームブロックや焼土ブロックを含むブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

#### 土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 4 黒 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック微量
- 5 黒 褐 色 ロームブロック中量
- 6 黒 褐 色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 出土遺物は土師器片368点(坏41, 高坏12, 甕301, 甑2, 埴12), 須恵器片2点(甕1, 蓋1), 緑釉陶器片1点(碗), 土製品1点(土玉), 鉄製品1点(不明)がほぼ全域から散在した状態で出土している。1179は覆土中から出土している。須恵器片と緑釉陶器片は破断面が摩滅しており、後世の耕作等による混入と考えられる。

**所見** 本跡の時期は、遺構の形態と土師器片から6世紀後半と考えられる。

#### 第361号住居跡出土遺物観察表 (第286図)

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
1179	土玉	2.0	1.3	0.2	2.8	長石・石英	両面穿孔, 側面ヘラ磨き	覆土中	100% PL258

#### 第363号住居跡 (第277・287図)

**位置** 調査区中央部東寄りのI14f2区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第354号住居跡を掘り込み、第296・359・361・362・434号住居、第691・692号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 重複のため、東西軸約4.5m、南北軸は約3.5mだけが確認でき、南・西壁からN-2°-Wを主軸とする方形と推定される。確認できた壁高は8～14cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。

**炉・竈** 第296・434号住居に掘り込まれていると考えられ、遺存していない。

**ピット** 6か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは約35cm前後である。P1は第434号住居跡の竈下から検出された。P5・P6の深さは、45cm・60cmと深い性格不明である。

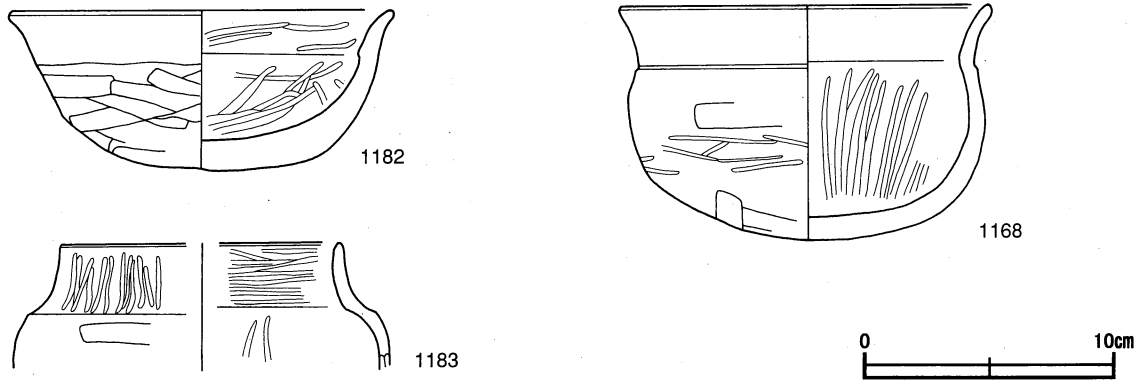
**覆土** 5層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

- 3 黒 褐 色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量
- 4 黒 褐 色 ロームブロック・炭化物少量, 焼土ブロック微量
- 5 黒 褐 色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 黒 褐 色 粘土粒子中量, 焼土粒子少量, ロームブロック微量
- 7 黒 褐 色 焼土粒子少量, ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片579点 (坏347, 高台付坏6, 高坏10, 甕216), 須恵器片3点 (坏2, 甕1), 鉄滓2点, 礫片23点が出土している。大半が細片のため図示できたものは少ない。1183は東部の下層, 1182は南部の下層からそれぞれ出土しており, 住居廃絶時に遺棄されたものである。なお, 土師器高台付坏片と須恵器片は混入されたものである。

所見 時期は, 5世紀中葉に比定される第354号住居跡を掘り込み, 6世紀代に比定される第441号住居に掘り込まれていることや, 出土土器から5世紀後葉と考えられる。



第287号 第363号住居跡出土遺物実測図

第363号住居跡出土遺物観察表 (第287図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1182	土師器	坏	15.0	6.3	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内面ヘラ磨き, 口縁部横ナデ	南部下層	70%
1183	土師器	椀	[11.1]	(5.0)	-	砂粒	明赤褐	普通	口縁部ヘラ磨き	東部下層	10%
1168	土師器	椀	14.6	9.3	-	砂粒・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内面ヘラ磨き, 口縁部横ナデ	中央部下層	70%

第364号住居跡 (第288図)

位置 調査区中央部のI14g4区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第767号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南北軸は約4.0mで, 東側部分が調査区域外に延びているため, 東西軸は約2.3mだけが確認でき, N-0°を主軸とする一辺4.0m前後の方形あるいは長方形と推測される。壁高は12cmで, 外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で, 中央部と炉の西側がよく踏み固められており, 壁溝は北壁際から西壁際にかけて確認された。

炉 中央部の北壁寄りに付設され, 長径約80cm, 短径約72cmの地床炉で, 炉床は約14cmほど掘りくぼめた皿状を呈しており, 強く焼き締まっている。

炉土層解説

- 1 暗 赤 褐 色 焼土粒子・炭化粒子中量, ロームブロック少量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量

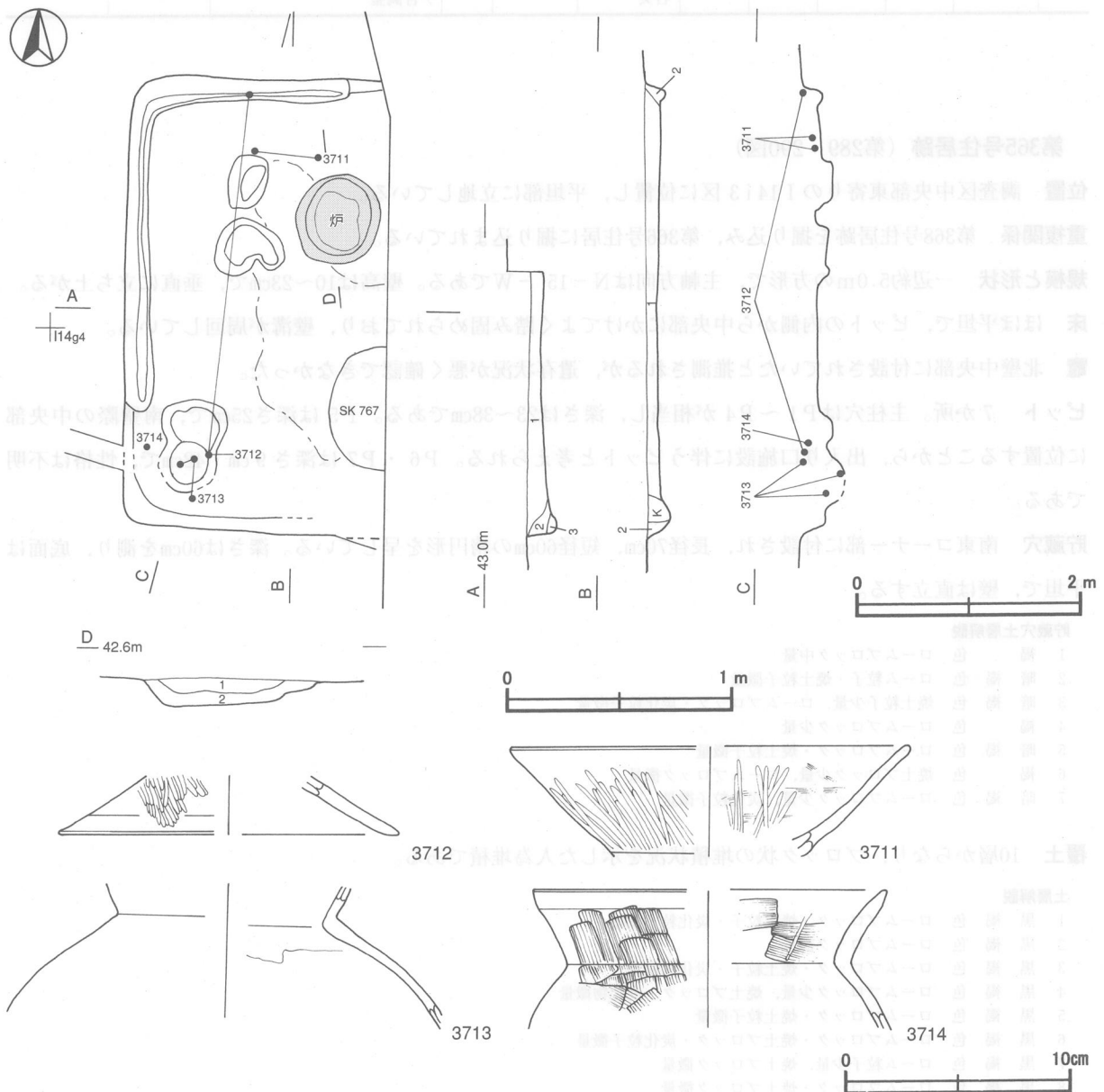
ピットは確認されていない。

覆土は3層からなり、焼土や炭化粒子を各層に含む人為堆積で、第2層は壁溝部の層である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片123点(坏46, 高台付坏7, 高坏7, 埴28, 甕35), 鉄製品1点(不明), 礫片4点(被熱痕)が, 全域の覆土下層と床面を中心に出土している。大半が細片で, 埋土中に混入していたものや, 住居廃絶後間もなく, 投棄されたものと推測され, 中には広範囲にわたって接合関係にある土器片も多い。また, 3711は北部周辺, 3712は北壁際と南西コーナー部, 3713は南西コーナー部からそれぞれ出土している。



第288図 第364号住居跡・出土遺物実測図

所見 炉床は焼き締まっており、床面もよく踏み固められていることからみて、存続期間の長い住居であることが推測される。なお、伴出遺物がないため時期は明確ではないが、住居廃絶後間もなく投棄された高坏の形状から5世紀中葉と推測される。

### 第364号住居跡出土遺物観察表（第288図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3711	土師器	埴	[18.6]	(4.8)	-	長石・雲母・石英	橙	普通	口縁部内・外面ヘラ磨き	北部覆土下層	10%
3712	土師器	高坏	-	(2.6)	[14.6]	長石・雲母・石英	明赤褐	普通	裾部外面ヘラ磨き	北部覆土上層・南部覆土上層	10%
3713	土師器	埴	-	(6.3)	-	長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ磨き	南東部床面	10%
3714	土師器	小形壺	[15.4]	(6.2)	-	長石・雲母・石英	明赤褐	普通	口縁部内・外面、体部外面ハケ目調整	南東部上層	10%

### 第365号住居跡（第289・290図）

位置 調査区中央部東寄りのI14i3区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第368号住居跡を掘り込み、第366号住居に掘り込まれている。

規模と形状 一辺約5.0mの方形で、主軸方向はN-15°-Wである。壁高は10~23cmで、垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、ピットの内側から中央部にかけてよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁中央部に付設されていたと推測されるが、遺存状況が悪く確認できなかった。

ピット 7か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは23~38cmである。P5は深さ25cmで、南壁際の中央部に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は深さ9cm・42cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に付設され、長径70cm、短径60cmの楕円形を呈している。深さは60cmを測り、底面は平坦で、壁は直立する。

#### 貯蔵穴土層解説

- 1 褐 色 ロームブロック中量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 3 暗 褐 色 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 褐 色 ロームブロック少量
- 5 暗 褐 色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 6 褐 色 焼土ブロック少量、ロームブロック微量
- 7 暗 褐 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

覆土 10層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

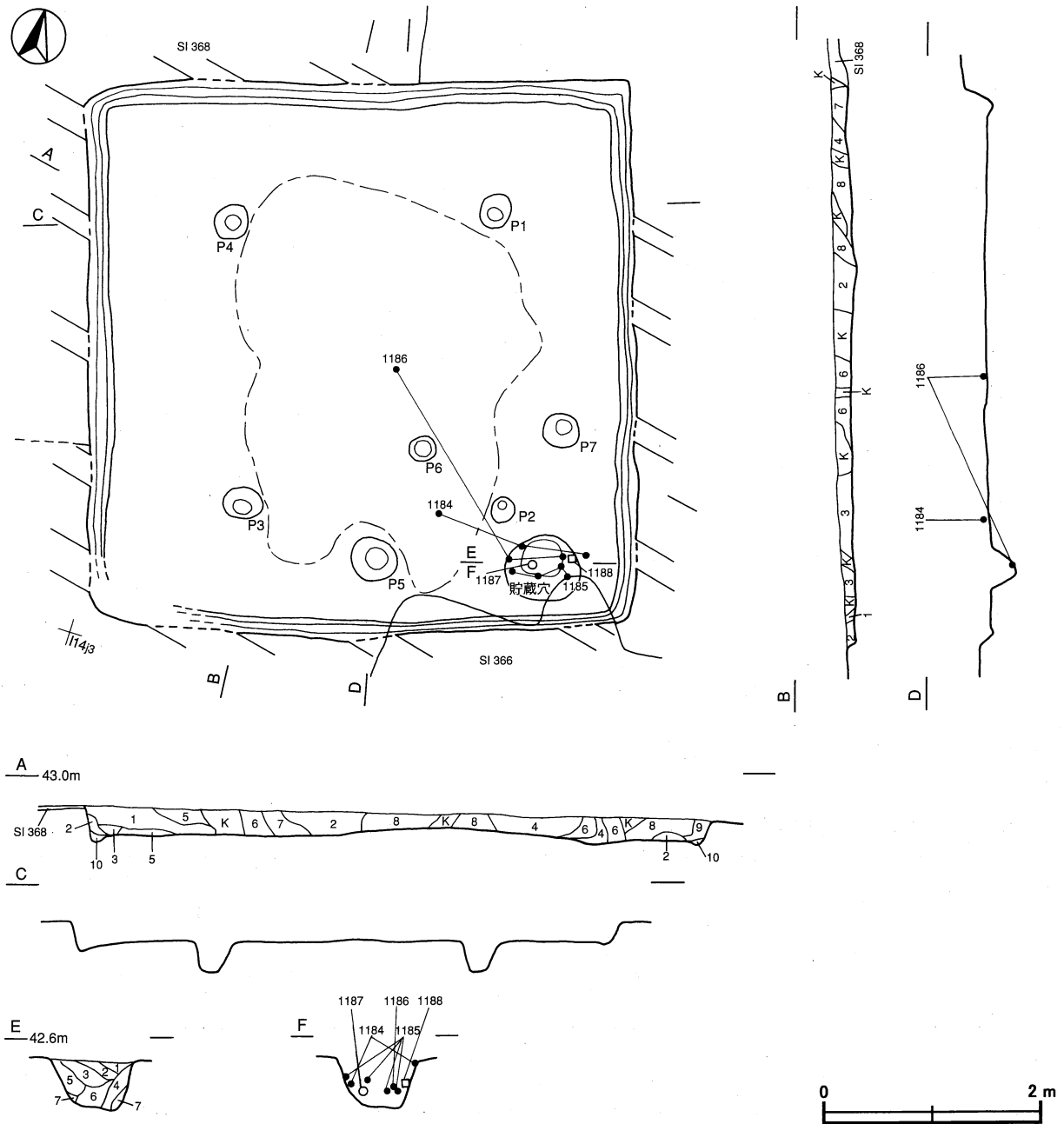
#### 土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック微量
- 3 黒 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 4 黒 褐 色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 5 黒 褐 色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 6 黒 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 7 黒 褐 色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量
- 8 黒 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 9 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 10 暗 褐 色 ローム粒子少量

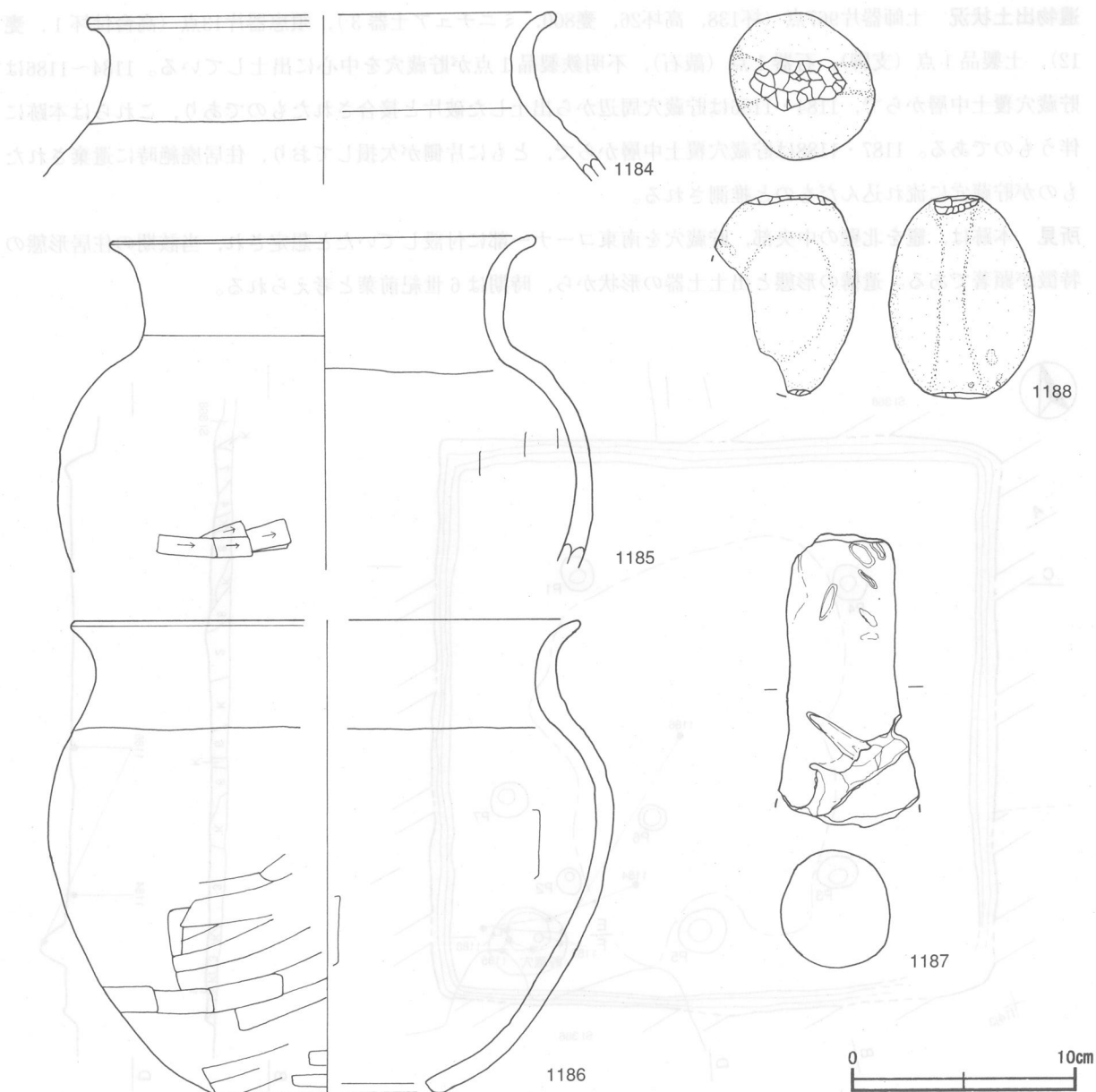


**遺物出土状況** 土師器片967点（坏138，高坏26，甕800，ミニチュア土器3），須恵器片13点（高台付坏1，甕12），土製品1点（支脚），石器1点（敲石），不明鉄製品1点が貯蔵穴を中心に出土している。1184～1186は貯蔵穴覆土中層からで，1184・1186は貯蔵穴周辺から出土した破片と接合されたものであり，これらは本跡に伴うものである。1187・1188は貯蔵穴覆土中層からで，ともに片側が欠損しており，住居廃絶時に遺棄されたものが貯蔵穴に流れ込んだものと推測される。

**所見** 本跡は，竈を北壁の中央部，貯蔵穴を南東コーナー部に付設していたと想定され，当該期の住居形態の特徴が顕著である。遺構の形態と出土土器の形状から，時期は6世紀前葉と考えられる。



第289号 第365号住居跡実測図



第290図 第365号住居跡出土遺物実測図

第365号住居跡出土遺物観察表 (第290図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1184	土師器	甕	[20.6]	(7.5)	-	砂粒	明赤褐	普通	口縁部横ナデ	貯蔵穴中層	10%
1185	土師器	甕	18.8	(14.7)	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内面ヘラナデ, 口縁部横ナデ	貯蔵穴中層	50% 体部外面煤付着
1186	土師器	甗	[27.7]	21.2	10.0	雲母・長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内面ヘラナデ, 口縁部横ナデ	貯蔵穴中層	80%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
1187	支脚	(13.0)	4.8	5.5	(422.0)	砂粒	円柱形で裾部がやや開く, 側面ナデ	貯蔵穴中層	80%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1188	敲石	(8.9)	(6.2)	6.5	(410.0)	結晶質石灰岩	上下に敲き痕, 一部欠損	貯蔵穴中層	

第367号住居跡 (第291・292図)

位置 調査区中央部東寄りのI14i4区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第1522号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 大部分が調査区域外に延びるため、全体の様相は把握できないが、南北軸3.7m、東西軸は1.0mだけが確認された。北・西壁より主軸方向はN-5°-Wと考えられ、壁高は20cmで外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中心部から南部がよく踏み固められていると考えられる。壁溝は検出されなかった。

炉 調査区域外に位置すると考えられる。

ピット 1か所。東部が調査区域外に延びるため、深さ・性格とも不明である。

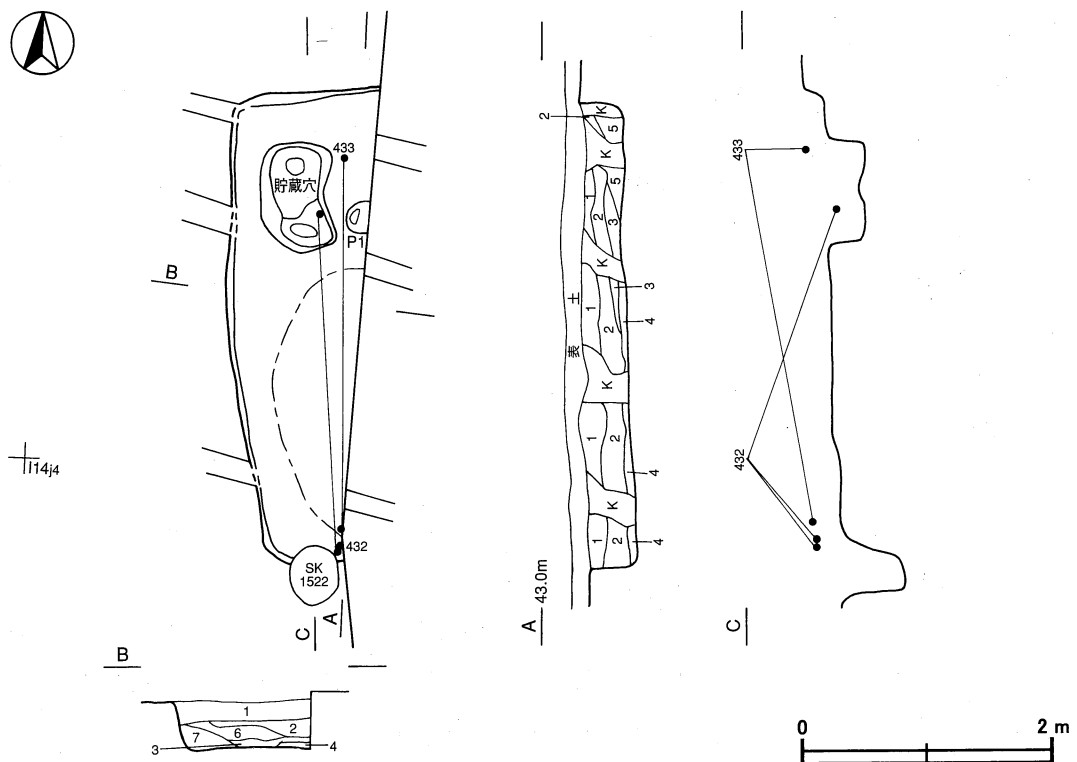
貯蔵穴 北西コーナー部に付設され、平面形は長径60cm、短径50cmの長方形で、深さは30cmを測る。底面は平坦であり、壁は直立して立ち上がる。

覆土 7層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

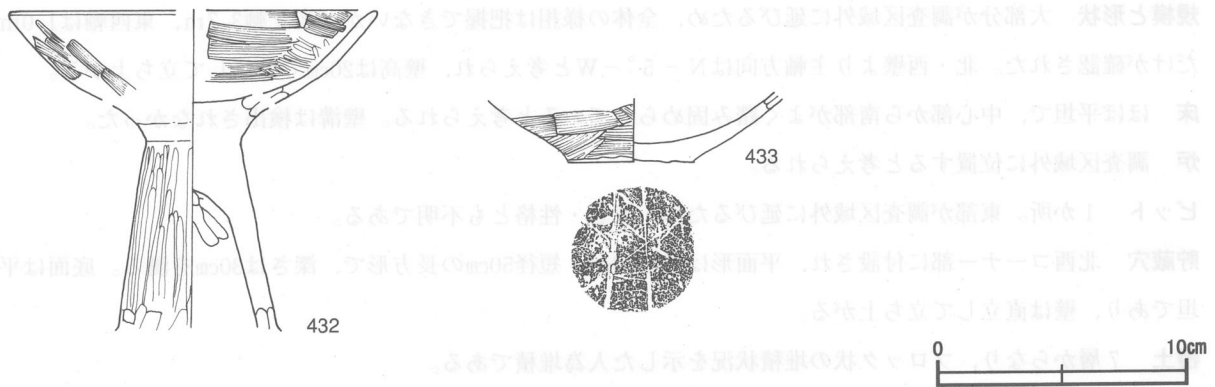
- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片300点(坏38, 高坏20, 埴22, 甕220), 須恵器片2点(坏), 礫片5点が散在した状態で出土している。ほとんどが細片で図示できたものは少なく、破断面が磨滅していることから住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと考えられる。432は貯蔵穴と南部の覆土上層から出土した破片が接合されたもので、本跡に伴うものと考えられる。また、433は北部と南部の覆土上層から出土した破片が接合されたものである。なお、須恵器坏片は混入したものである。



第291図 第367号住居跡実測図

所見 本跡は大部分が調査区域外に延びているため、住居全体の様相は把握できないが、出土した土師器片の形状から、時期は4世紀後半と考えられる。



第292図 第367号住居跡出土遺物実測図

第367号住居跡出土遺物観察表 (第292図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
432	土師器	高坏	[14.5]	(12.8)	-	石英・雲母	にぶい橙	普通	坏部外面ハケ目調整, 内面ハケ目調整後ヘラ磨き, 脚部外面ヘラ磨き	貯蔵穴上層 南部上層	70%
433	土師器	甕	-	(2.5)	5.0	長石・雲母	橙	普通	体部外面ハケ目調整, 内面ナデ, 底部木葉痕	北・南部上層	5%

### 第368号住居跡 (第293・294図)

位置 調査区中央部のI14h2区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第365号住居に掘り込まれている。

規模と形状 東部が第365号住居に掘り込まれているため、遺存している壁から、東西軸5.4m、南北軸4.8mのN-9°-Wを主軸とする長方形と推定される。壁高は2~7cmと低く、立ち上がり状況は判然としない。

床 ほぼ平坦で、ピットの内側から中央部にかけてがよく踏み固められており、壁溝は認められない。

炉 第365号住居跡に掘り込まれていると考えられ、遺存していない。

ピット 2か所。深さは20cm・35cmで、支柱穴と考えられるが、P1は壁際に寄りすぎており支柱穴と判断しがたい。

覆土 単一層のみである。堆積状況は判然としない。

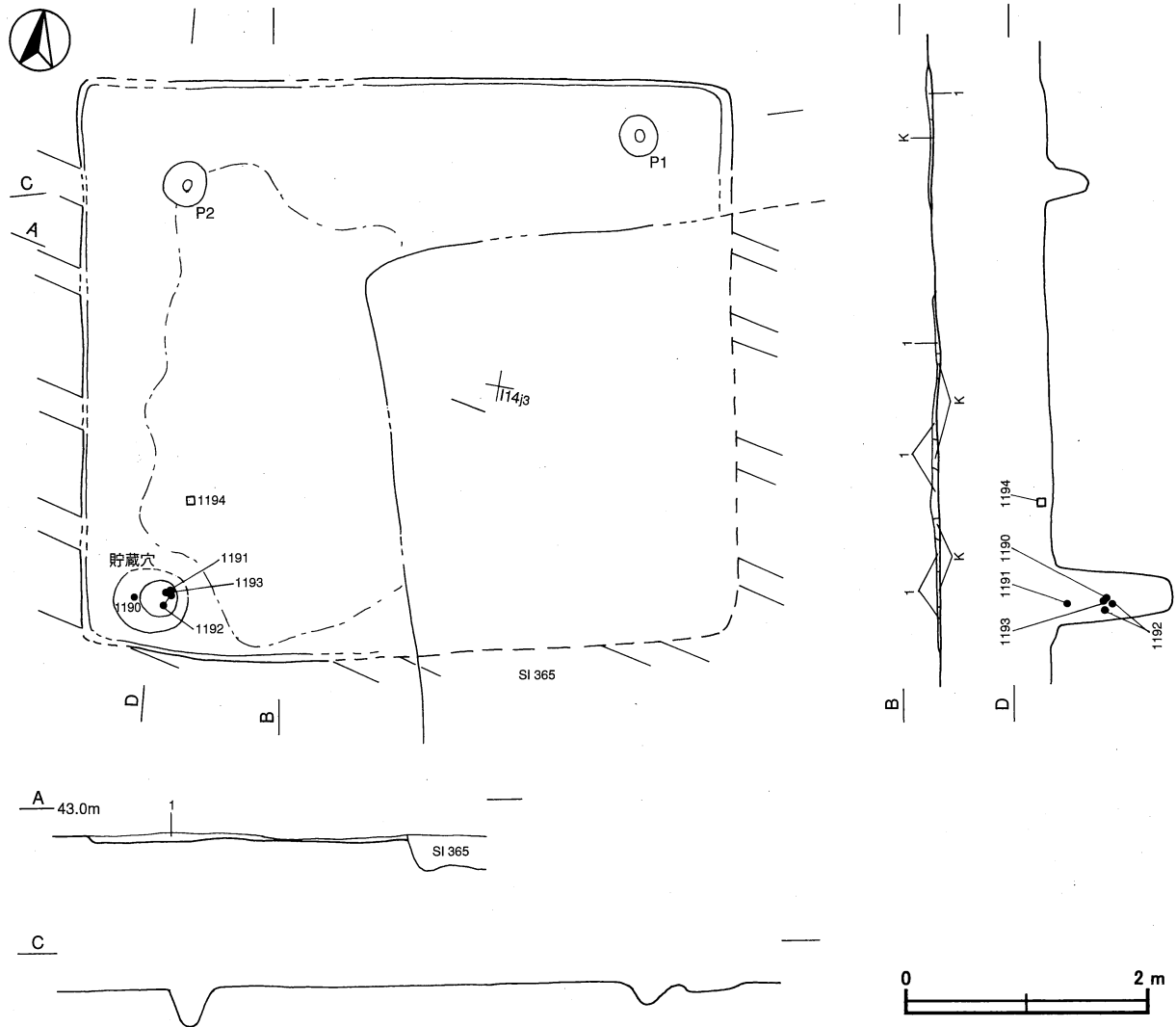
#### 土層解説

1 褐色 ローム粒子多量

遺物出土状況 土師器片251点(高坏9, 埴29, 甕212, ミニチュア土器1), 須恵器片2点(坏), 灰釉陶器片1点, 石器1点(砥石)が西部の覆土下層や貯蔵穴を中心に出土している。1190・1191・1192・1193は貯蔵穴の上・中層から出土している。1194は南西部の覆土下層から出土したもので、住居廃絶後に遺棄されたものである。また、南西部の覆土上層から出土している灰釉陶器片1点は、胎土から猿投産の折戸53号窯式併行と推測され、須恵器片とともに住居廃絶後に混入したものである。

所見 時期は、貯蔵穴から出土した土器の形状から4世紀中頃と推測され、貯蔵穴を南西コーナー部に有する

当該期の住居形態の特徴を顕著に残す好例といえる。

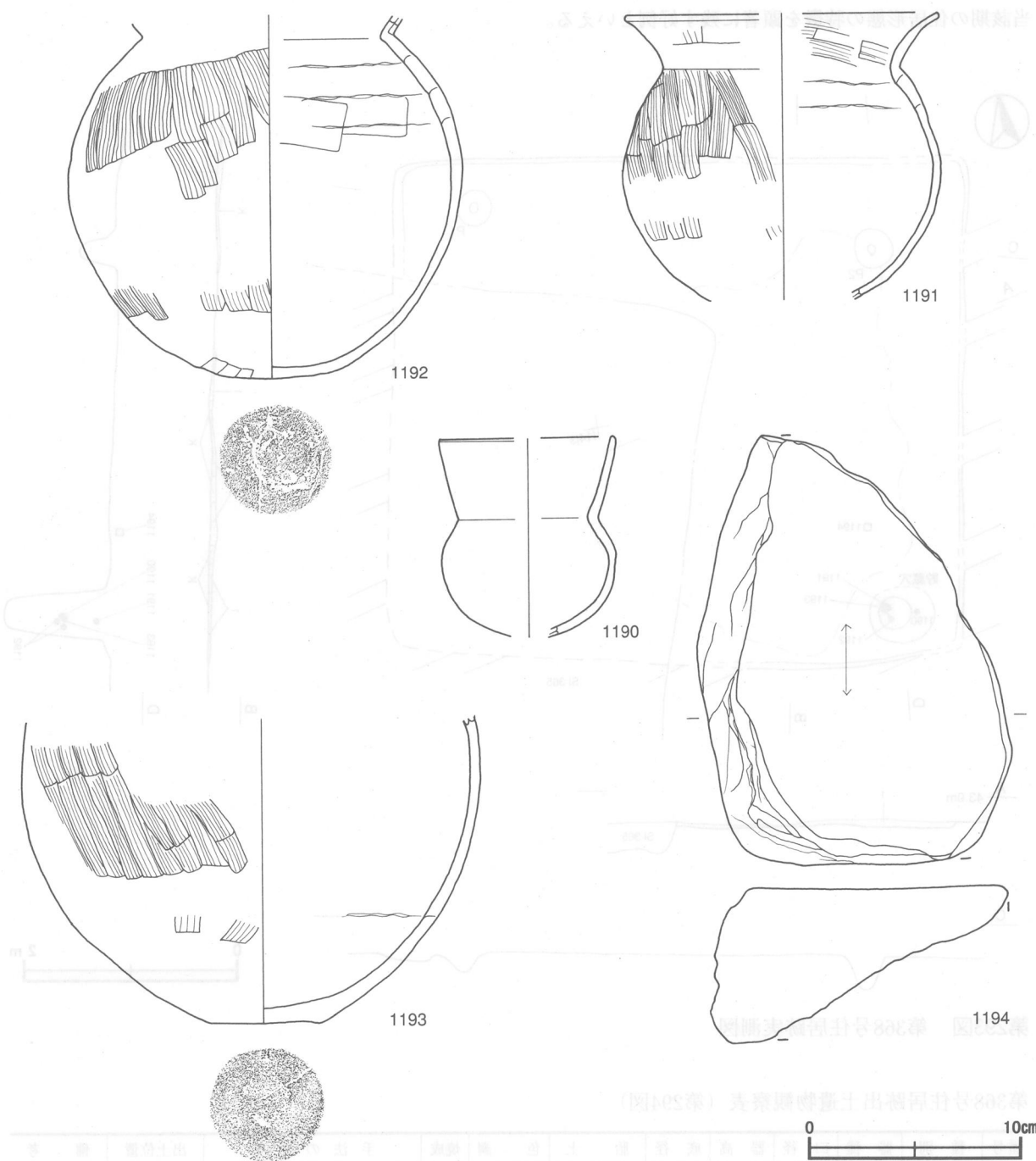


第293図 第368号住居跡実測図

第368号住居跡出土遺物観察表 (第294図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1190	土師器	埴	[ 8.1 ]	( 9.4 )	-	長石・石英	橙	二次焼成	剥落のため調整不明	貯蔵穴中層	30%
1191	土師器	小形甕	[ 14.6 ]	( 13.5 )	-	雲母・石英	赤褐	普通	内面ハケ目調整後ナデ	貯蔵穴上層	30%
1192	土師器	小形甕	-	( 17.1 )	5.2	雲母・石英	橙	普通	底部外面ヘラ削り, 体部内面ヘラナデ	貯蔵穴中層	50%
1193	土師器	甕	-	( 7.7 )	5.0	砂粒	灰	普通	内面荒れ, 底部外面ヘラ削り	貯蔵穴中層	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1194	砥石	20.2	( 14.8 )	7.3	( 1950.0 )	砂岩	砥面1面, その他は自然面	南西部下層	



第294図 第368号住居跡出土遺物実測図

第370号住居跡 (第295図)

位置 調査区中央部東寄りのJ14a2区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第372・376・406号住居、第33号溝に掘り込まれている。

規模と形状 床面がほぼ露出された状態で検出され、壁の立ち上がりが確認されなかったため、暗褐色を呈した床面の広がりやピットの位置から判断して、N-0°を主軸とする一辺約4.0mの方形と推定される。

床 ほぼ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。

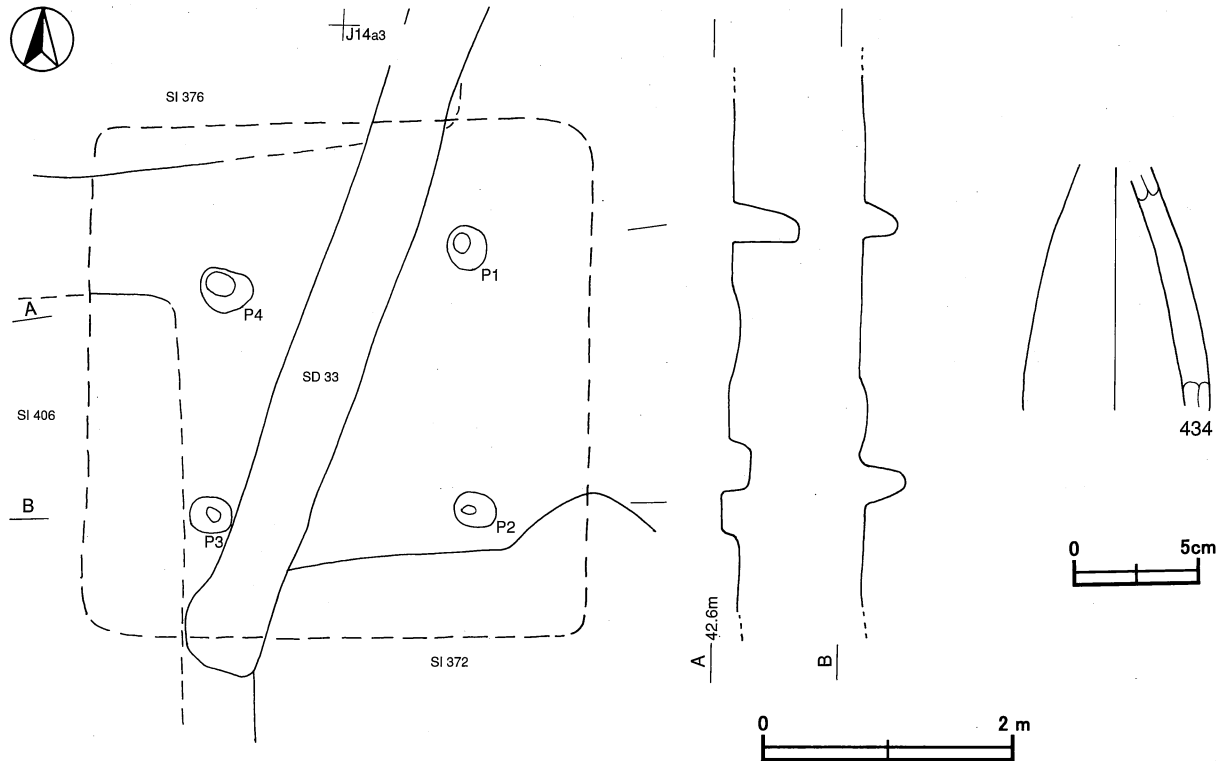
炉 第33号溝に掘り込まれていると考えられ、検出されなかった。

ピット 4か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは25～50cmである。

覆土 確認されなかった。

遺物出土状況 出土遺物は少なく、土師器片17点（高坏3，埴3，甕11），須恵器片1点（甕）が出土しただけである。434と須恵器甕片は器面や破断面が摩滅しているため、住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと思われる。

所見 時期は，出土した土師器片や古墳時代中期と比定される第376号住居跡に掘り込まれていることから，5世紀前半に位置づけられる。



第295図 第370号住居跡・出土遺物実測図

第370号住居跡出土遺物観察表（第295図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
434	土師器	高坏	-	(9.7)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	脚部外面剥落のため調整不明，内面ナデ	南東部覆土中	30%

### 第372号住居跡（第296・297図）

位置 調査区中央部東寄りのJ14b3区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係 第370・406・517号住居跡を掘り込み，第33号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南東部が調査区域外に延びているが，一辺約5.0mのN-5°-Wを主軸とする方形と推定される。

壁高は13～23cmで，垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，ピットの内側から中央部にかけてがよく踏み固められており，壁溝が周回している。

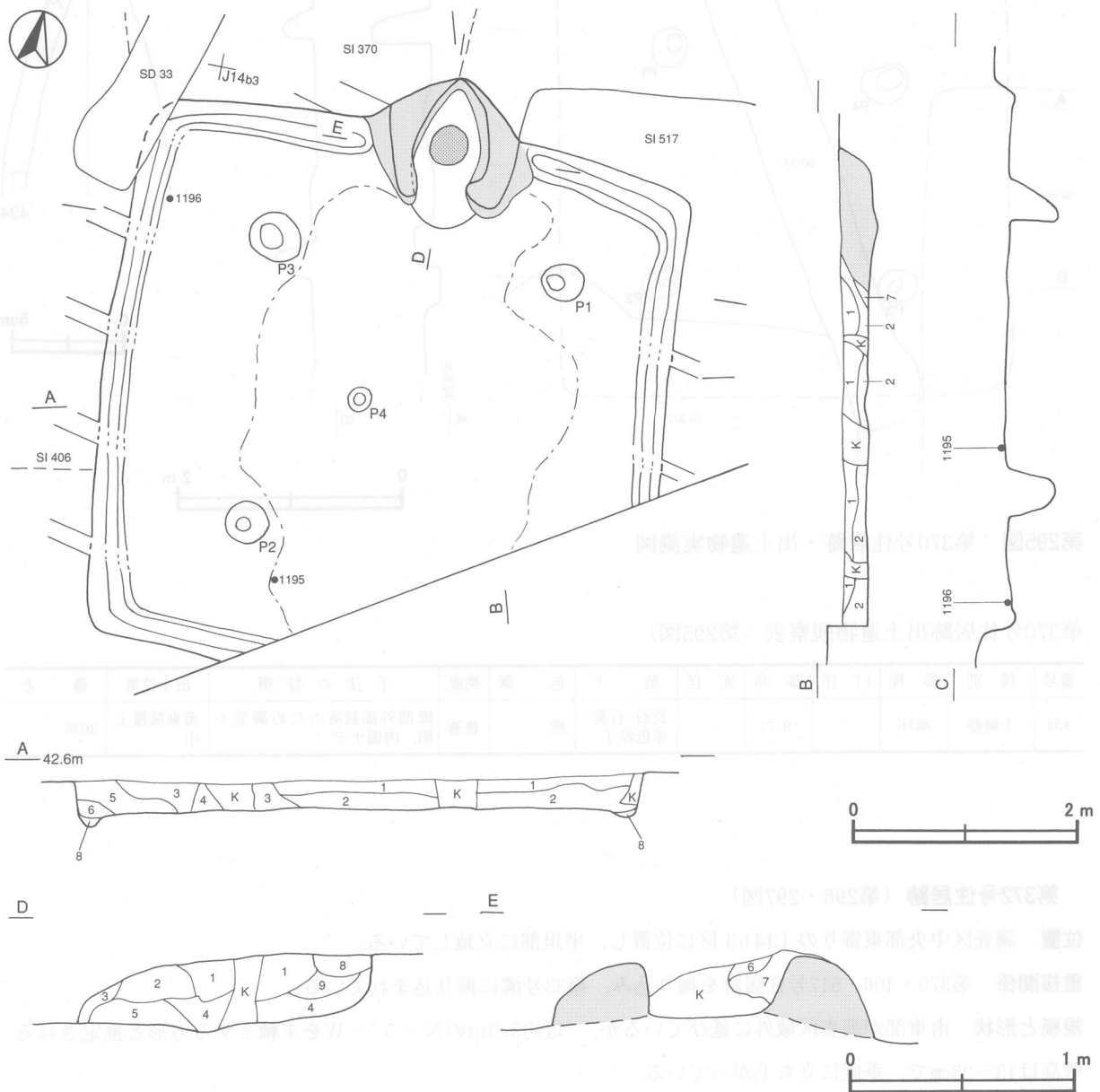
竈 北壁中央部に付設され、規模は焚口部から煙道部まで130cm、袖部幅144cmである。壁外の掘り込みは40cm、火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 4 黒色 炭化粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 8 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 9 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量

ピット 4か所。P1～P3は支柱穴で、深さは40～60cmである。柱間寸法はいずれも2.5mで、規則的に配されている。P4は深さ30cmで、性格は不明である。

覆土 8層からなり、各層にロームブロックを含む人為堆積である。



第296図 第372号住居跡実測図

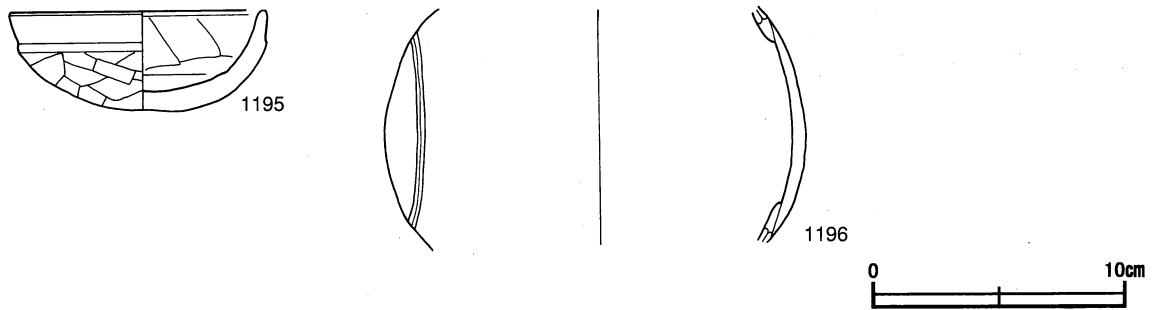


土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ロームブロック中量
- 7 黒褐色 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化粒子微量
- 8 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片939点(坏330, 高坏19, 甕587, 甌3), 須恵器片1点(瓶), 礫片66点が全域から散在して出土している。1195は南部の床面から完形の状態で出土している。また, 1196は瓶の閉鎖部片であり, 北西部の床面から出土している。それぞれ住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 本跡の時期は6世紀代と比定される第406号住居跡を掘り込んでいることや, 床面から出土した坏が小形化されていることから, 7世紀後葉と考えられる。



第297図 第372号住居跡出土遺物実測図

第372号住居跡出土遺物観察表 (第297図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1195	土師器	坏	10.0	3.9	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	内面ヘラナデ, 口縁部横ナデ	南部床面	100% PL221
1196	須恵器	フラスコ形瓶	-	(9.3)	-	長石	オリーブ黒	良好	閉鎖部に二本の弱い沈線が巡る	北西部床面	10%

第374号住居跡 (第298・299図)

位置 調査区中央部のJ13a8区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第390号住居, 第36号掘立柱建物, 第12号柵跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.0m, 短軸6.7mの方形で, 主軸方向はN-18°-Wである。壁高は8cmと低く, 立ち上がり状況は不明である。

床 ほぼ平坦で, 中央部がよく踏み固められており, 壁溝が周回している。

炉 炉1は中央部やや北西寄りに位置し, 長径80cm, 短径70cmの楕円形である。床面は15cmほど皿状に掘りくぼめ, 火床部は火熱を受けて赤変硬化している。また, 被熱痕が見られる礫片3点が出土している。炉2は中央部やや東寄りに位置し, 径約40cmの円形を呈している。遺存状況が悪く, 覆土は確認できなかった。

炉1土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土ブロック微量
- 2 褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 炭化粒子中量, 焼土ブロック少量, ロームブロック微量

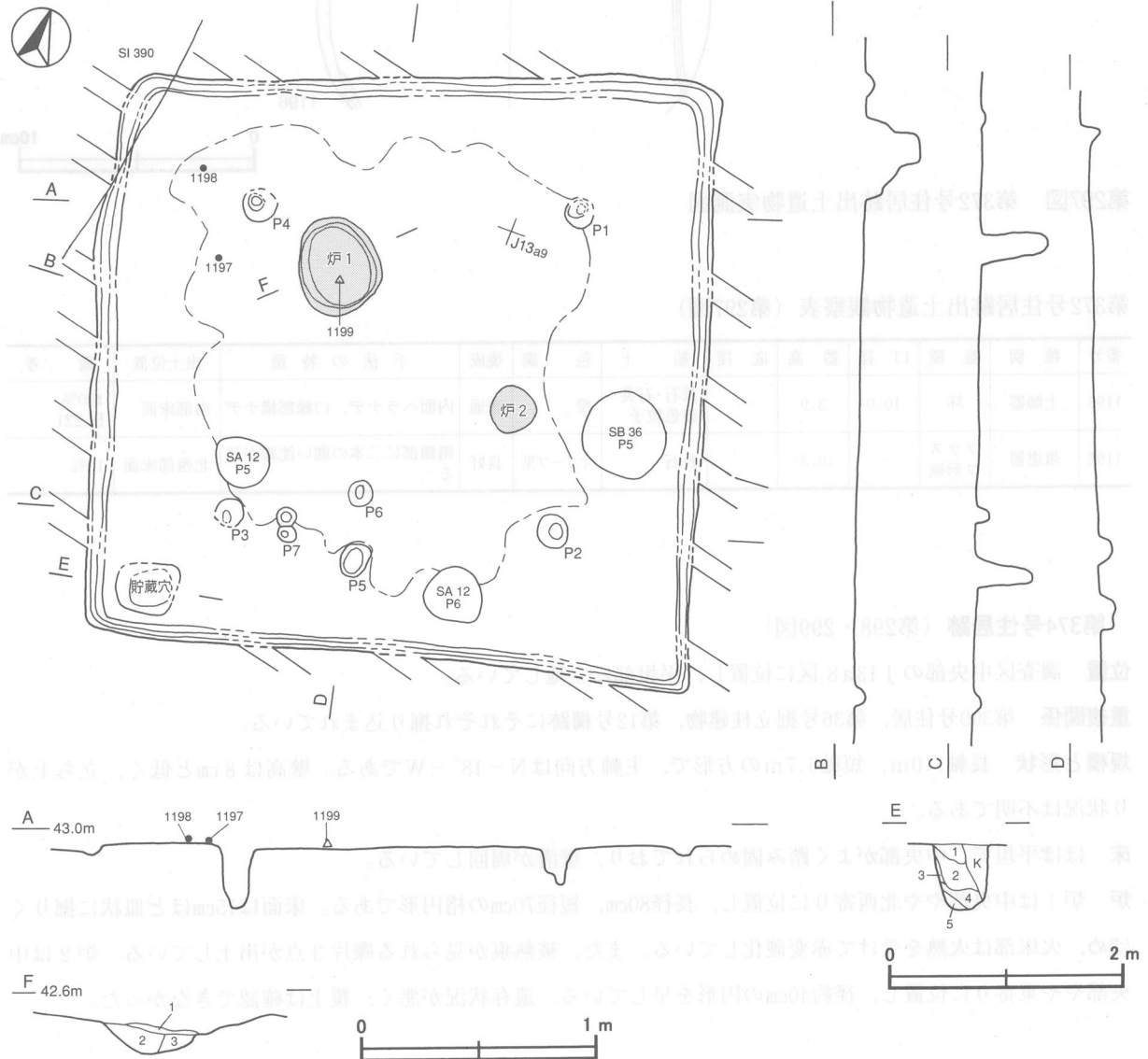
ピット 7か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは30～55cmである。柱間寸法はいずれも約3.6mを測り、規則的に配されている。P5は深さ15cmで、南壁際の中央部に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は深さ10cm・24cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南西コーナー部に付設され、長径50cm、短径40cmの長方形を呈している。深さは75cmを測り、底面は平坦で壁が直立する。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 黒色 ローム粒子微量
- 5 極暗褐色 鹿沼パミス微量

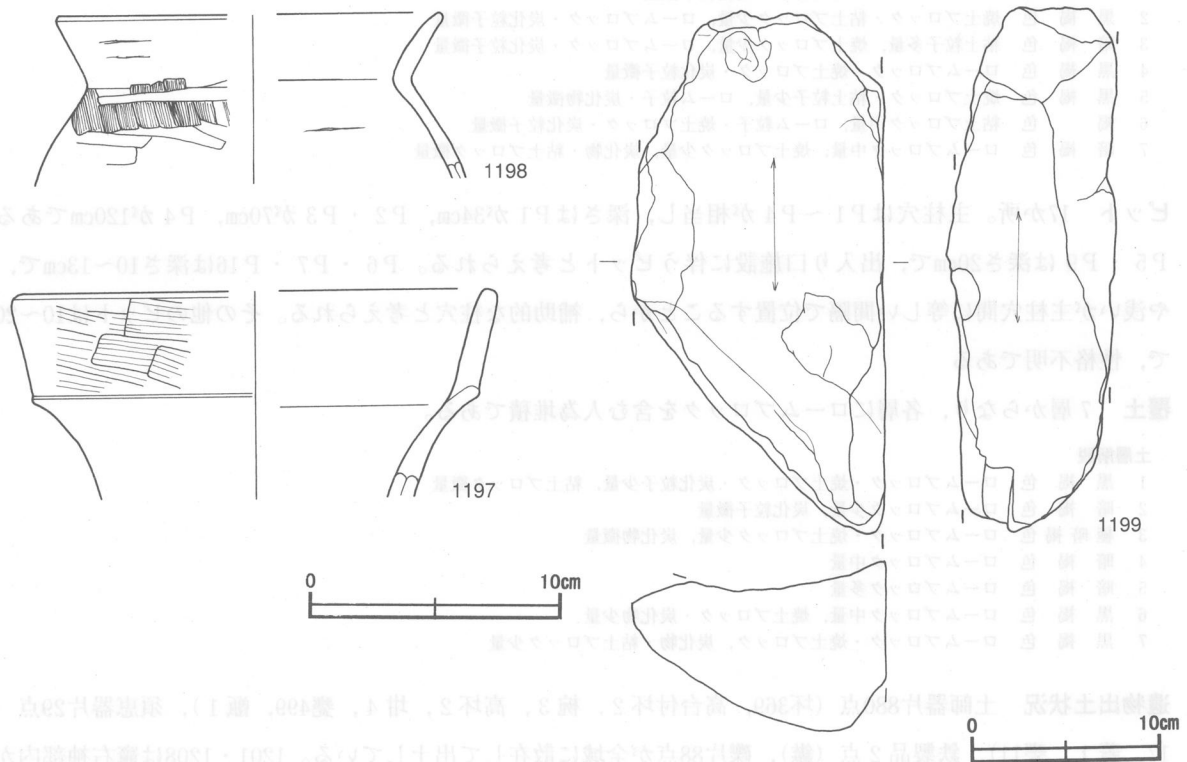
覆土 遺存状況が悪く、確認できない。



第298図 第374号住居跡実測図

**遺物出土状況** 土師器片126点（坏17，高坏9，埴2，甕98），石器1点（砥石），礫片11点が床面から出土している。1197・1198は北西部の床面，1199は中央部の床面から出土している。これらは住居廃絶に伴って遺棄されたものと考えられる。

**所見** 本跡の時期は炉を中央部やや西寄り，貯蔵穴を南西コーナー部に付設する遺構の形態と，出土土器の形状から4世紀中葉と考えられる。



第299図 第374号住居跡出土遺物実測図

第374号住居跡出土遺物観察表（第299図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1197	土師器	壺	[18.4]	(8.2)	-	長石	橙	普通	口縁部外面にハケ目調整を残すナデ	北西部床面	5%
1198	土師器	甕	[15.3]	(6.6)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	北西部床面	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1199	砥石	(27.6)	13.4	8.8	(3290.0)	砂岩	砥面2面，その他は破断面	中央部床面	

**第375号住居跡（第300・301図）**

**位置** 調査区中央部のI13h9区に位置し，平坦部に立地している。

**重複関係** 第358号住居跡を掘り込み，第378号住居，第23号掘立柱建物に掘り込まれている。また，耕作による攪乱を多く受けている。

**規模と形状** 長軸6.5m, 短軸5.8mの方形で, 主軸方向はN-6°-Wである。壁高は14~20cmで, ほぼ垂直に立ち上がると考えられる。

**床** ほぼ平坦で, ピットの内側から中央部にかけてがよく踏み固められており, 壁溝が周回している。

**竈** 北壁中央部に付設され, 規模は焚口部から煙道部まで110cm, 袖部幅110cmである。壁外の掘り込みは60cmで, 火床部は10cmほど皿状に掘りくぼめられており, 火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

**竈土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量, ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 粘土粒子多量, 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量, ローム粒子・炭化物微量
- 6 褐色 粘土ブロック中量, ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化物・粘土ブロック微量

**ピット** 17か所。主柱穴はP1~P4が相当し, 深さはP1が34cm, P2・P3が70cm, P4が120cmである。P5・P9は深さ20cmで, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7・P16は深さ10~13cmで, やや浅いが主柱穴間に等しい間隔で位置することから, 補助的な柱穴と考えられる。その他のピットは10~20cmで, 性格不明である

**覆土** 7層からなり, 各層にロームブロックを含む人為堆積である。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量, 粘土ブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 暗褐色 ロームブロック多量
- 6 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック, 炭化物・粘土ブロック少量

**遺物出土状況** 土師器片880点(坏369, 高台付坏2, 椀3, 高坏2, 埴4, 甕499, 甑1), 須恵器片29点(坏17, 蓋1, 甕11), 鉄製品2点(鏃), 礫片88点が全域に散在して出土している。1201・1208は竈右袖部内から出土し, 袖部の芯材として使用されたものである。また, 1200は北東部床面から出土しており, 住居廃絶に伴って遺棄されたものと考えられる。1202・1204は北壁際下層からそれぞれ出土している。

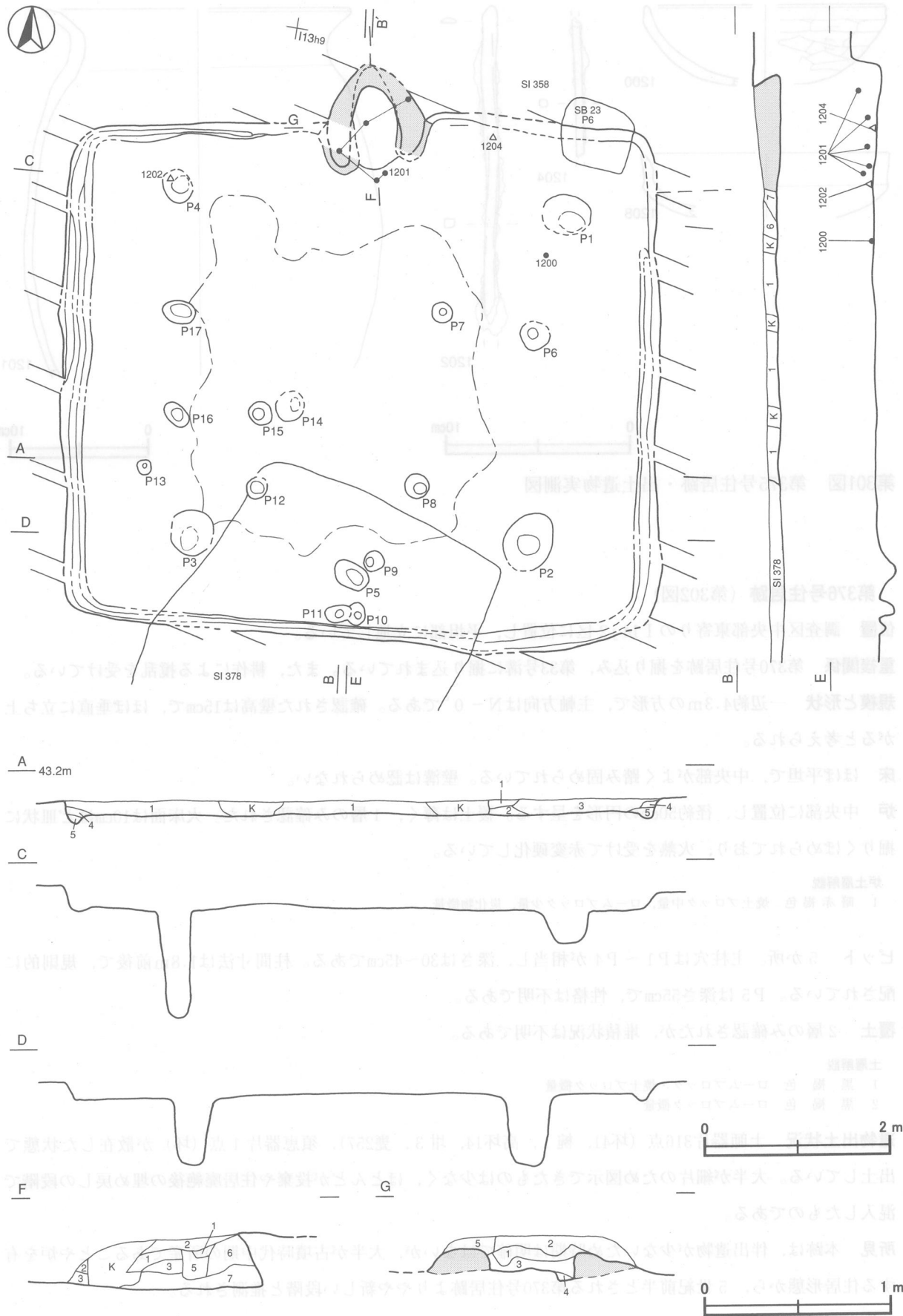
**所見** 本跡は一辺6.0mを越える比較的大型の住居跡で, 北壁中央部に竈を付設し, 煙道の壁外への掘り込みは30cmを越えている。時期は, 遺構の形態と出土土器の形状から6世紀後葉と考えられる。

第375号住居跡出土遺物観察表(第301図)

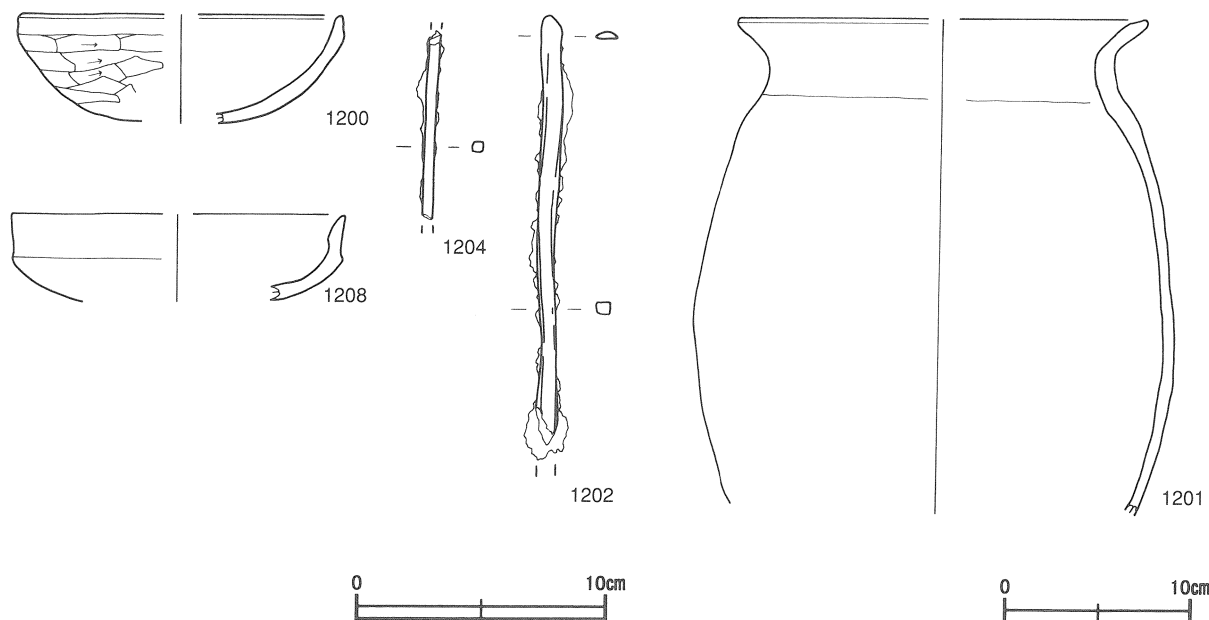
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1200	土師器	坏	[12.6]	(4.3)	-	石英	にぶい黄橙	普通	体部内面ナデ, 口縁部横ナデ	北東部床面	10%
1208	土師器	坏	[13.2]	(3.4)	-	雲母・石英	橙	普通	器面荒れ, 口縁部横ナデ	竈右袖部内	10%
1201	土師器	甕	[21.4]	(26.3)	-	角礫・雲母・長石・石英	赤褐	普通	器面荒れ, 口縁部横ナデ	竈右袖部内	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1202	鏃	(17.1)	0.8	0.5	(30.1)	鉄	先端は断面凸レンズ状, 下位は断面長方形	北壁際下層	
1204	鏃	(7.6)	0.5	0.4	(5.5)	鉄	断面方形, 基部カ	北壁際下層	



第300図 第375号住居跡実測図



第301図 第375号住居跡・出土遺物実測図

### 第376号住居跡（第302図）

**位置** 調査区中央部東寄りのI14j2区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第370号住居跡を掘り込み、第33号溝に掘り込まれている。また、耕作による攪乱を受けている。

**規模と形状** 一辺約4.3mの方形で、主軸方向はN-0°である。確認された壁高は15cmで、ほぼ垂直に立ち上がると考えられる。

**床** ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は認められない。

**炉** 中央部に位置し、径約50cmの円形を呈する。覆土は薄く、1層のみ確認された。火床面は10cmほど皿状に掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変硬化している。

#### 炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化物微量

**ピット** 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは30～45cmである。柱間寸法は1.8m前後で、規則的に配されている。P5は深さ55cmで、性格は不明である。

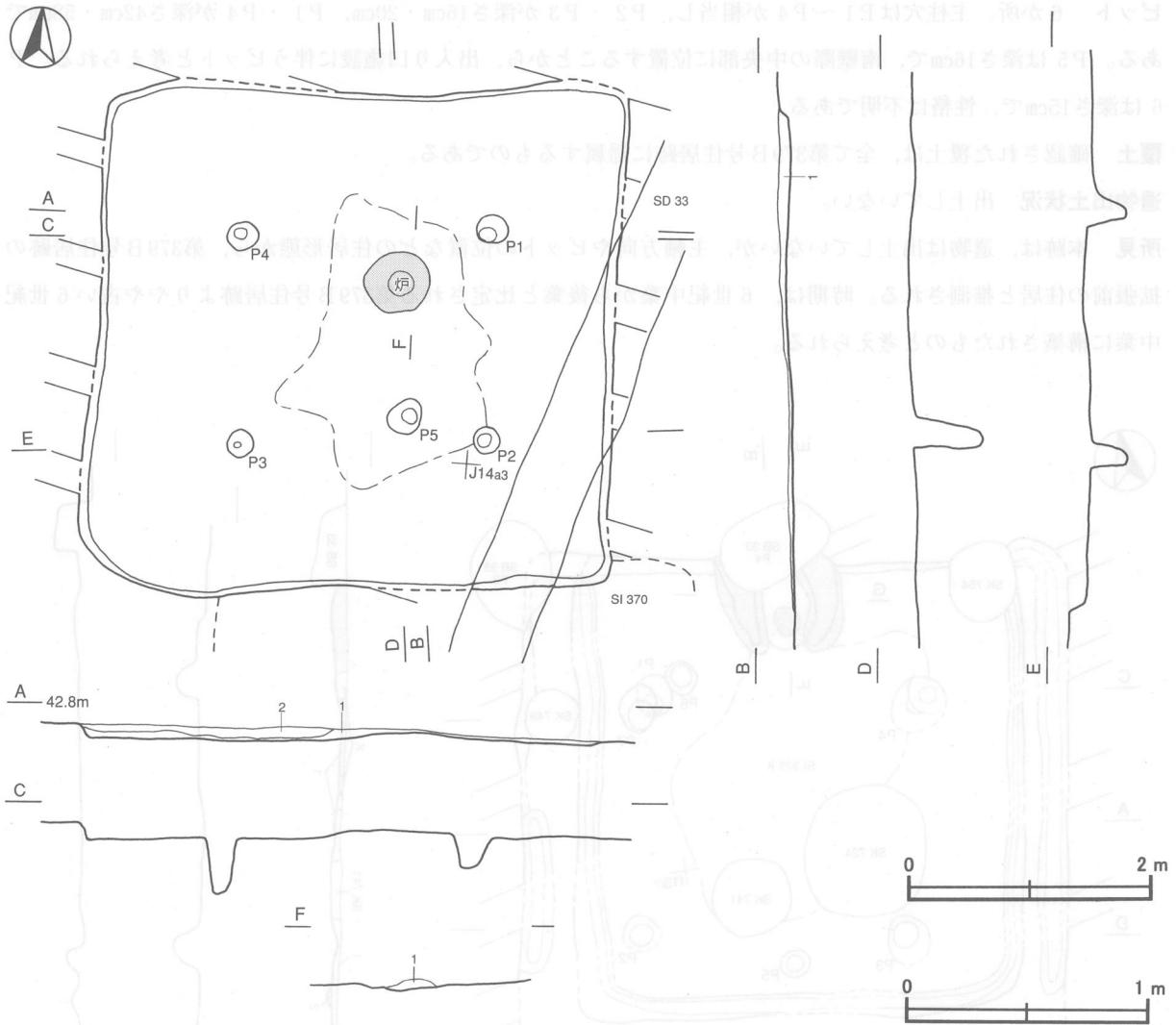
**覆土** 2層のみ確認されたが、堆積状況は不明である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量

**遺物出土状況** 土師器片316点（坏41，碗1，高坏14，埴3，甕257），須恵器片1点（坏）が散在した状態で出土している。大半が細片のため図示できたものは少なく、ほとんどが投棄や住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものである。

**所見** 本跡は、伴出遺物が少ないため時期は明確ではないが、大半が古墳時代中期の所産であることや炉を有する住居形態から、5世紀前半とされる第370号住居跡よりやや新しい段階と推測される。



第302図 第376号住居跡実測図

第379A号住居跡 (第303図)

**位置** 調査区中央部のI13h6区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第379B号住居、第33号掘立柱建物、第724・741・749・754号土坑に掘り込まれている。また、耕作による攪乱を受けている。

**規模と形状** 一辺約3.6mの方形で、主軸方向はN-5°-Wである。壁高は8~10cmと低く、立ち上がり状況は不明である。

**床** ほぼ平坦で、竈の手前から中央部にかけてがよく踏み固められている。壁溝は北壁を除き巡っている。

**竈** 北壁中央部に付設されているが、第33号掘立柱建物に掘り込まれているため、袖部幅の100cmだけが確認できた。火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

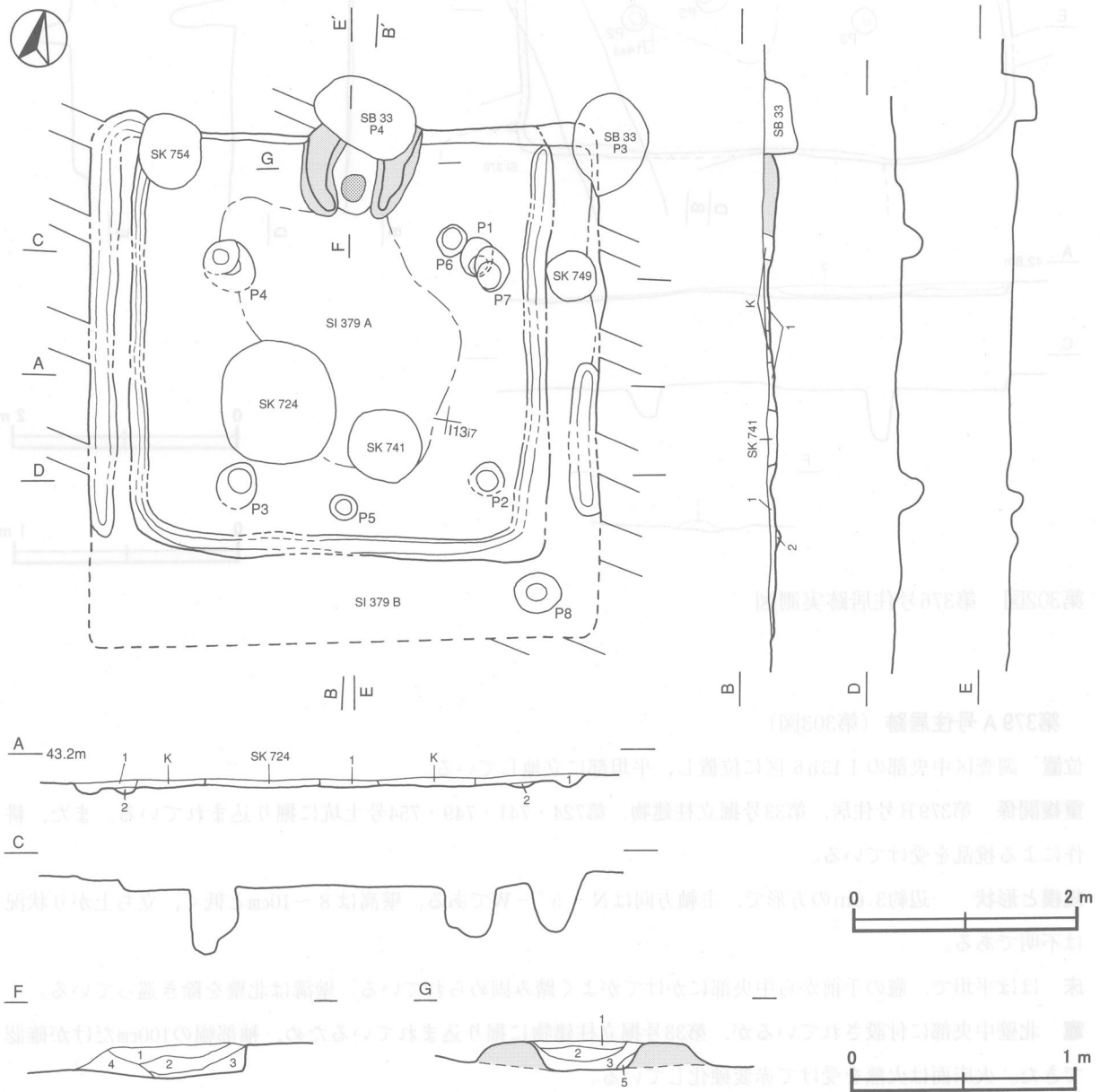
- 1 黒褐色 炭化粒子中量, ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量, ロームブロック少量, 粘土ブロック微量
- 3 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量, ロームブロック少量
- 4 暗褐色 焼土粒子中量, ロームブロック少量, 炭化物微量
- 5 暗褐色 炭化粒子・粘土ブロック少量, 焼土ブロック微量

ピット 6か所。支柱穴はP1～P4が相当し、P2・P3が深さ16cm・20cm、P1・P4が深さ42cm・58cmである。P5は深さ16cmで、南壁際の中央部に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ15cmで、性格は不明である。

覆土 確認された覆土は、全て第379B号住居跡に帰属するものである。

遺物出土状況 出土していない。

所見 本跡は、遺物は出土していないが、主軸方向やピットの位置などの住居形態から、第379B号住居跡の拡張前の住居と推測される。時期は、6世紀中葉から後葉と比定される第379B号住居跡よりやや古い6世紀中葉に構築されたものと考えられる。



第303図 第379A・B号住居跡実測図



### 第379B号住居跡（第303図）

**位置** 調査区中央部のI13h6区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第33号掘立柱建物、第724・741・749・754号土坑に掘り込まれている。第379A号住居跡の拡張後の住居跡である。

**規模と形状** 覆土が薄いため、壁の立ち上がりは確認できなかったが、遺存する壁やピットから、N-5°-Wを主軸とする一辺約4.5mの方形と推定される。壁高は2~4cmと低く、立ち上がり状況は不明である。

**床** ほぼ平坦で、竈の手前から中央部にかけてがよく踏み固められている。壁溝は東・西壁の一部で検出されている。

**竈** 北壁中央部に付設されているが、北部を第33号掘立柱建物に掘り込まれているため、袖部幅の100cmだけが確認できた。火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

#### 竈土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子中量、ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量、ロームブロック少量、粘土ブロック微量
- 3 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量、ロームブロック少量
- 4 暗褐色 焼土粒子中量、ロームブロック少量、炭化物微量
- 5 暗褐色 炭化粒子・粘土ブロック少量、焼土ブロック微量

**ピット** 2か所。P7は深さ42cmの主柱穴で第379A号住居跡の柱穴が同じ位置で使用され、P8は深さ8cmと浅く、性格は不明である。

**覆土** 2層のみ確認されたが、堆積状況は不明である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

**遺物出土状況** 土師器片105点（坏11，碗2，高坏2，甕90），須恵器片9点（坏2，甕7），灰釉陶器片1点（短頸壺），石器1点（砥石），礫片12点が出土している。それらの大半は細片のため図示できたものはない。なお、灰釉陶器片は後世の攪乱などによって混入されたものである。

**所見** 本跡は、第379A号住居跡から作り替えが行われ、東側へ約50cm、西側へ約40cm、南側へ約70cmほど拡張されているが、柱穴は同じ位置である。また、出土土器片の形状は6世紀後葉であり、本跡の時期はほぼ同時期と考えられる。

### 第381号住居跡（第304・305図）

**位置** 調査区中央部のI13g5区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第382号住居跡を掘り込み、第33号掘立柱建物、第730・731号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 一辺約4.3mの方形で、主軸方向はN-13°-Wである。壁高は13cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、ピットの内側から中央部にかけてがよく踏み固められており、壁溝が周回している。出入り口施設に伴うピットと考えられるP5の周囲には、土手状の高まりをもつ硬化面が検出された。

**竈** 北壁中央部に付設され、規模は焚口部から煙道部まで95cm、袖部幅80cmである。壁外の掘り込みは45cmで、火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用している。また、煙道は火床面から外傾して立ち上がる。

**竈土層解説**

- 1 黒褐色 炭化粒子少量, ロームブロック・焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 炭化粒子中量, 焼土ブロック少量, ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子中量, 焼土ブロック少量, 粘土ブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

**ピット** 5か所。P2は深さ20cmで、支柱穴と思われるが、P1は第33号掘立柱建物跡のP8が同位置に重複している。P3～P5の深さは20～40cmで、性格は不明である。

**貯蔵穴** 南壁際中央部やや東寄りに付設され、長径約70cm、短径約50cm、深さは約40cmである。底面は平坦で、壁は直立する。

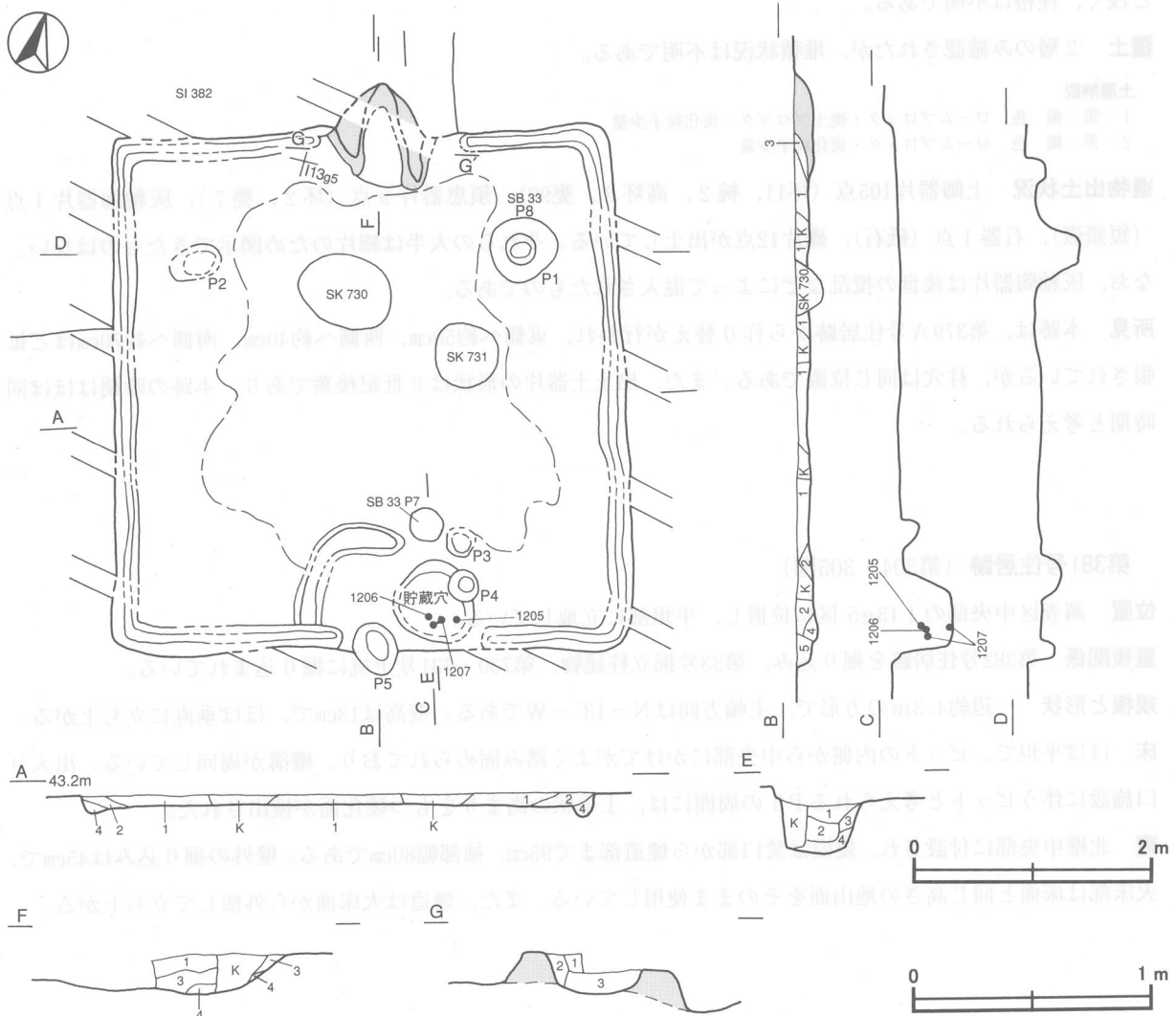
**貯蔵穴土層解説**

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化物少量, ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化物少量, 焼土粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック多量
- 4 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

**覆土** 5層からなり、各層にロームブロックを含む人為堆積である。

**土層解説**

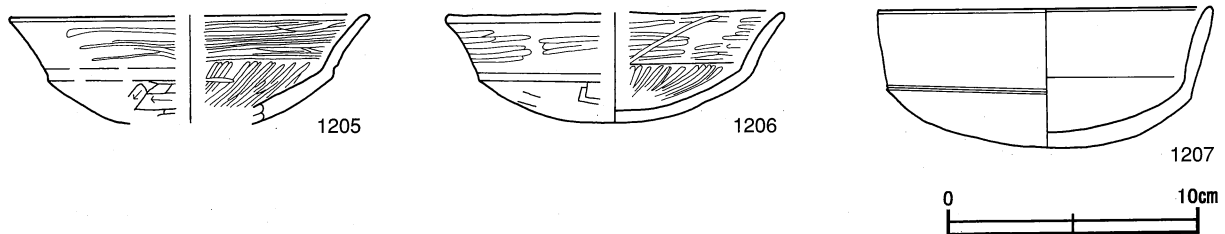
- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土ブロック微量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化物少量, ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量



第304図 第381号住居跡実測図

**遺物出土状況** 土師器片182点(坏31, 高坏5, 埴1, 甕143, 甑2), 須恵器片8点(甕), 土製品1点(支脚), 礫片4点が貯蔵穴を中心に出土している。1205~1207は貯蔵穴の覆土の中層・下層からで, 1207は貯蔵穴内から出土した破片が接合されたものである。これらは住居廃絶に伴って遺棄されたものと思われる。

**所見** 本跡は竈を北壁中央部に有し, 南壁際の貯蔵穴周辺に土手状の高まりを有する住居の形態的な特徴を示している。時期は, 遺構の形態と出土土器の形状から6世紀中葉と考えられる。



第305図 第381号住居跡出土遺物実測図

第381号住居跡出土遺物観察表 (第305図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1205	土師器	坏	[14.2]	(4.2)	-	雲母・赤色 粒子	橙	普通	体部内面・口縁部内外面ヘラ 磨き	貯蔵穴中層	25%
1206	土師器	坏	[13.4]	4.4	-	雲母	明赤褐	普通	体部内面・口縁部内外面ヘラ 磨き	貯蔵穴中層	30%
1207	土師器	坏	13.3	6.5	-	角礫・雲母・ 長石・石英	橙	普通	器面荒れ, 口縁部横ナデ	貯蔵穴下層	80%

### 第382号住居跡 (第306・307図)

**位置** 調査区中央部のI13f4区に位置し, 平坦部に立地している。

**重複関係** 第381号住居, 第8号掘立柱建物, 第727・728・730号土坑に掘り込まれている。また, 耕作による攪乱も受けている。

**規模と形状** 長軸5.2m, 短軸4.8mの方形で, 主軸方向はN-13°-Wである。壁高は14~18cmで, ほぼ垂直に立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で, ピットの内側から中央部にかけて硬化面が確認されたが, 壁溝は認められない。

**炉** 中央部やや西寄りに位置し, 径約60cmの円形を呈している。遺存状況が悪く, 覆土は確認できなかった。

**ピット** 6か所。主柱穴はP1~P4が相当し, 深さは40~50cmである。P5・P6は深さ25cm・15cmで, 南壁際の中央部に位置することから, 出入口施設に伴うピットと考えられる。

**貯蔵穴** 南西コーナー部に付設され, 平面形は長径100cm, 短径80cmの楕円形を呈している。深さは30cmを測り, 底面は平坦で, 壁は外傾して立ち上がっている。

#### 貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量

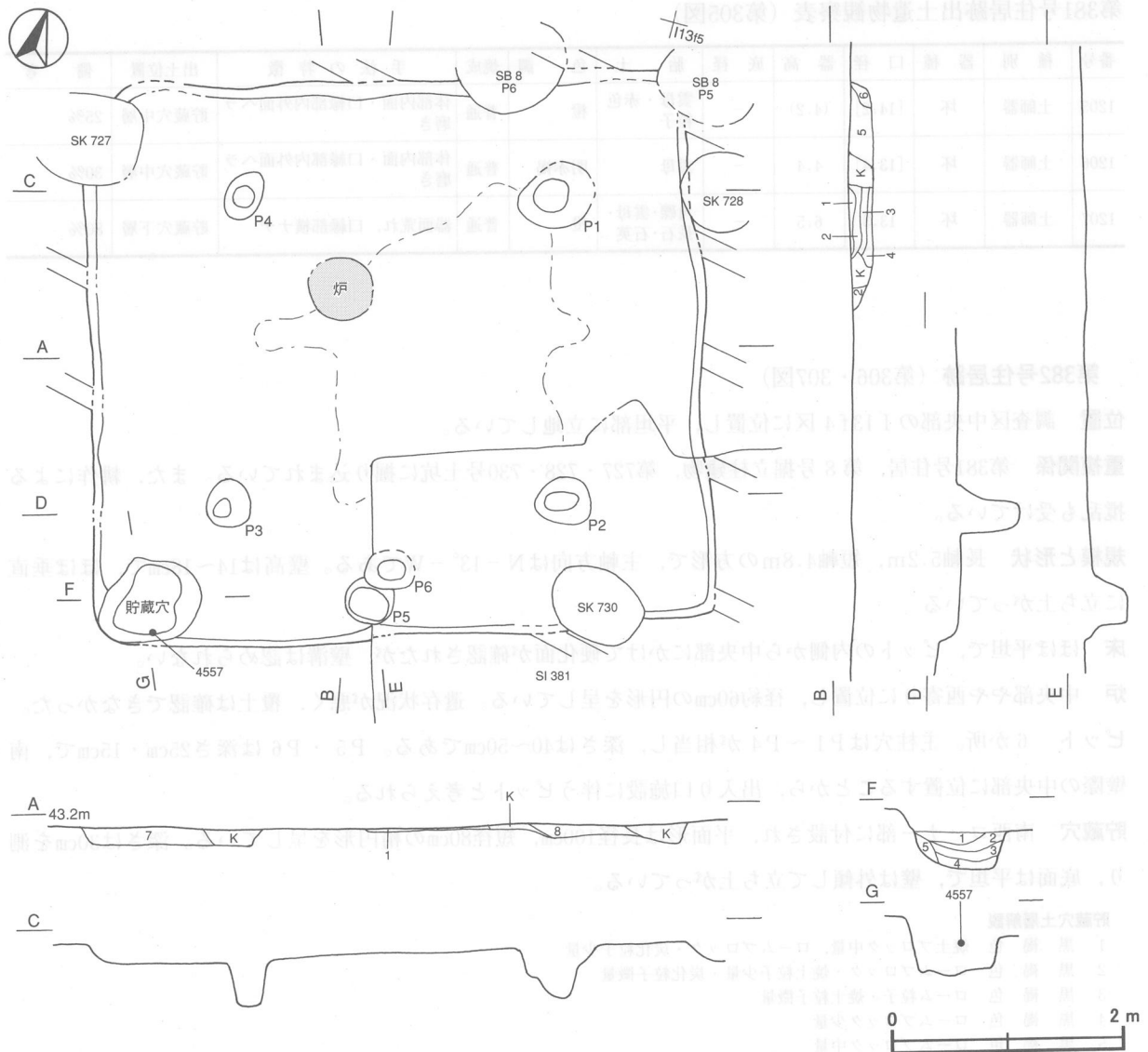
覆土 掘り方調査により、床を構築するために埋め戻した8層が検出された。

土層解説

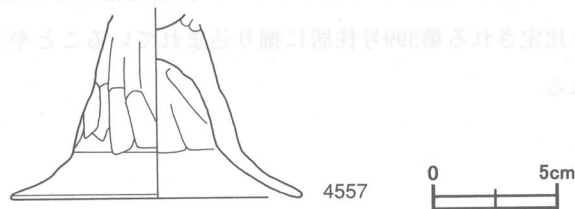
- 1 黒褐色 焼土粒子少量，ロームブロック微量
- 2 黒褐色 焼土ブロック・炭化物少量，ローム粒子微量
- 3 赤褐色 焼土粒子中量，ロームブロック・炭化物少量
- 4 黒褐色 炭化物少量，ローム粒子・焼土ブロック微量
- 5 極暗褐色 ロームブロック・炭化物少量，焼土粒子微量
- 6 褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 7 黒褐色 ロームブロック少量，焼土粒子微量
- 8 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片211点（坏58，高坏6，埴2，甕145），須恵器片9点（甕），灰釉陶器片1点（瓶）が全域で散在して出土しているが，大半は細片のために図示できたものは少ない。4557は貯蔵穴の覆土中層から出土したもので，住居廃絶時に遺棄され，貯蔵穴内に流れ込んだものと考えられる。なお，灰釉陶器片は後世の攪乱による混入と考えられる。

所見 時期は，出土土器から4世紀後半と考えられ，東へ約25mに位置する第350号住居跡と同一の集落を構成していたと想定される。



第306図 第382号住居跡実測図



第307図 第382号住居跡出土遺物実測図

第382号住居跡出土遺物観察表 (第307図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4557	土師器	高坏	-	(7.4)	11.5	石英・雲母・赤色粒子	赤褐	普通	脚部内・外面ナデ	貯蔵穴中層	60%

### 第383号住居跡 (第308図)

**位置** 調査区中央部東寄りのJ14d1区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第396・399・528号住居、第1516号土坑にそれぞれ掘り込まれ、耕作による攪乱も受けている。

**規模と形状** 大部分が第399・528号住居に掘り込まれているため、東西軸の1.5mと南北軸の1.0mだけが確認できた。遺存している北と東壁の一部から、 $N-9^{\circ}-W$ を主軸とする方形または、長方形と考えられる。壁高は約10cmで、緩やかに立ち上がると考えられる。

**床** ほぼ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。北東コーナー部の床面から焼土が検出され、焼失住居と考えられる。

**炉・竈** 第399・528号住居に掘り込まれているため、遺存していない。

**ピット** 検出されなかった。

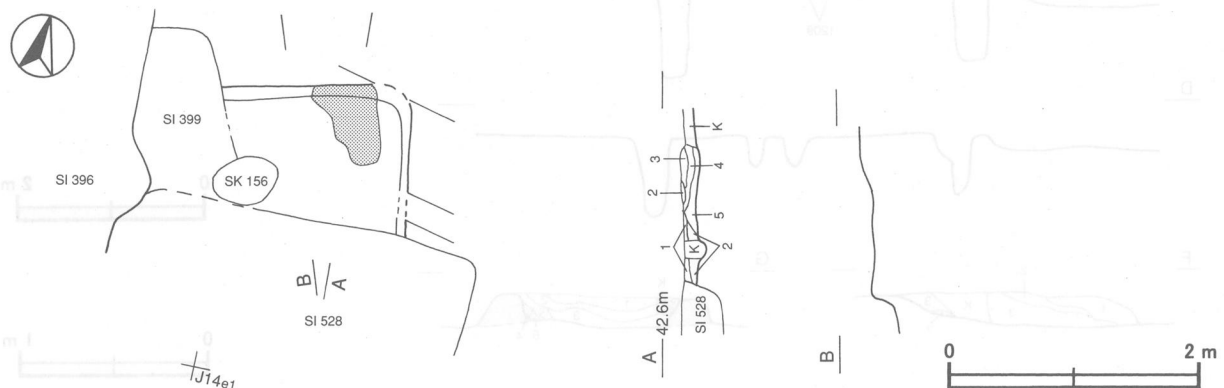
**覆土** 5層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 5 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

**遺物出土状況** 出土遺物は少なく、土師器片36点(坏11, 甕25), 須恵器片1(甕)が出土しただけである。

破断面が摩滅しておりいずれも細片で、混入したものである。



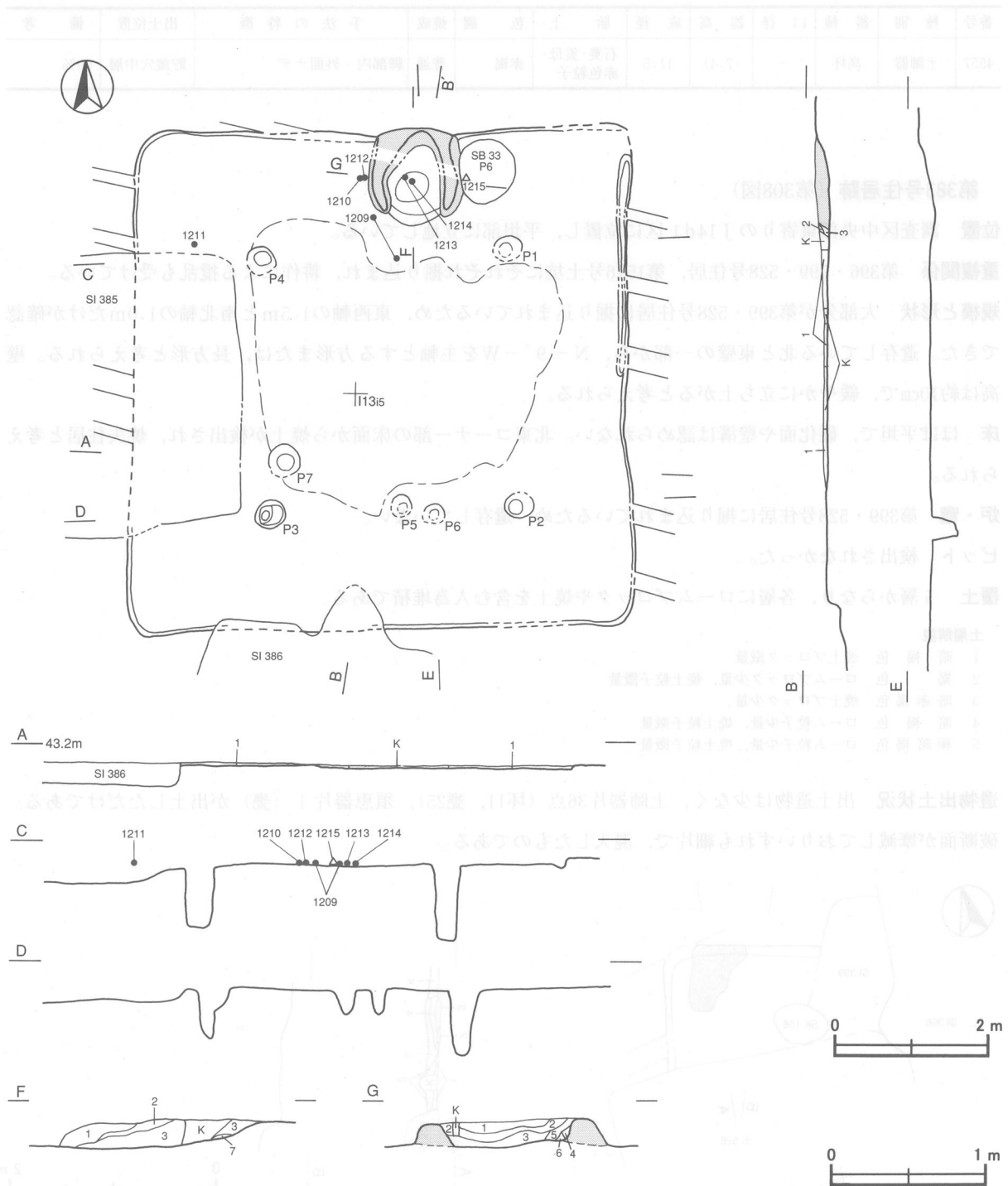
第308図 第383号住居跡実測図

所見 本跡は北東コーナー部の下層より焼土が出土しており、住居廃絶に伴う焼失住居と考えられるが、詳細は不明である。8世紀前葉と比定される第399号住居に掘り込まれていることや土師器片の形状から、時期は古墳時代後期以前と考えられる。

第384号住居跡 (第309・310図)

位置 調査区中央部の I 13h5 区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第385・386号住居，第33号掘立柱建物にそれぞれ掘り込まれている。



第309図 第384号住居跡実測図

**規模と形状** 一辺約6.4mの方形で、主軸方向はN-4°-Eである。壁高は2~10cmと低く、立ち上がり状況は不明である。

**床** ほぼ平坦で、ピットの内側から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は東部のみ検出された。

**竈** 北壁中央部に付設され、規模は焚き口から煙道部まで95cm、袖部幅90cm、壁外への掘り込みはほとんどない。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火床面が火熱を受けて赤変しており、煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。

**竈土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化物微量
- 3 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 4 にぶい黄褐色 粘土粒子多量、焼土ブロック少量、ローム粒子微量
- 5 にぶい黄褐色 焼土粒子中量
- 6 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 7 赤褐色 焼土ブロック多量

**ピット** 7か所。支柱穴はP1~P4が相当し、深さは70~85cmである。柱間寸法は約2.5mで規則的に配されている。P5は深さ33cmで、支柱穴間に位置する補助柱穴と考えられる。P6・P7は深さ35cmで、性格は不明である。

**覆土** 3層からなり、各層にロームブロックを含む人為堆積である。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

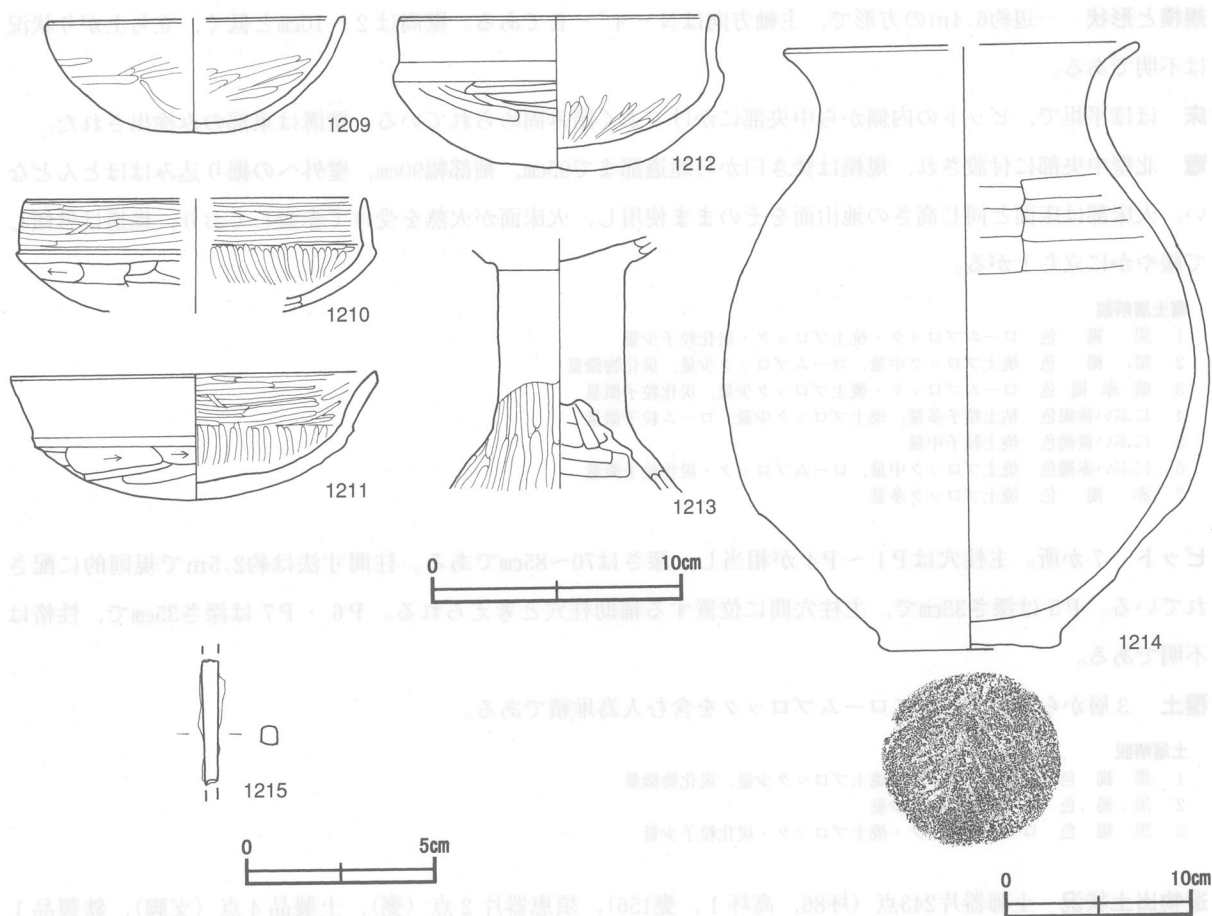
**遺物出土状況** 土師器片243点（坏86, 高坏1, 甕156）、須恵器片2点（甕）、土製品4点（支脚）、鉄製品1点（不明）、礫片4点が北部の床面を中心に出土しており、住居廃絶時に遺棄されたものである。1209・1210・1212は北部の床面から出土し、1212は竈内覆土中から出土した破片が接合されたものである。また、1211は西部の床面からで、破碎された状態で出土している。1213・1214は竈火床部から出土したもので、それぞれ被熱痕が見られることから、支脚に転用されたと考えられる。

**所見** 本跡は一辺6.0mを越える比較的大形の住居跡で、北壁中央部に付設された竈の煙道部の掘り込みはほとんど見られない。時期は、遺構の形態と出土土器から6世紀中葉と考えられる。

第384号住居跡出土遺物観察表（第310図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1209	土師器	坏	[11.8]	4.5	-	角礫・雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	体部内外面ヘラ磨き、口縁部横ナデ	北部床面	15%
1210	土師器	坏	[12.4]	(4.5)	-	雲母・長石・石英	にぶい黄褐	普通	体部内面・口縁部内外面ヘラ磨き	北部床面	30%
1211	土師器	坏	14.4	4.9	-	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内面・口縁部内面ヘラ磨き	西部床面	95%
1212	土師器	坏	12.5	6.1	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部内面ヘラ磨き、口縁部横ナデ	北部床面、竈内覆土中	70%
1213	土師器	高坏	-	(9.9)	-	雲母	明赤褐	普通	外面荒れ、脚部内面ヘラナデ	竈火床部	20%
1214	土師器	甕	[18.0]	31.7	8.8	雲母・石英	にぶい黄褐	二次焼成	外面荒れ、底部外面木葉痕	竈火床部	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1215	不明	(3.3)	0.4	0.5	(2.4)	鉄	断面方形、鎌の茎部カ	竈火床部底面	



第310図 第384号住居跡出土遺物実測図

### 第390号住居跡 (第311図)

**位置** 調査区中央部のJ13a7区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第374・469号住居跡，第793・794号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 床面の一部が削平された状態で検出されたため，規模及び平面形状は明確ではないが，遺存している床面の範囲から，N-3°-Eを主軸とする一辺約4.7mの方形と推定される。

**床** 遺存している部分はほぼ平坦であるが，それほど硬化した部分は認められず，壁溝も確認されていない。

**竈** 北壁の中央部に構築されていたと推測されるが，遺存状態は悪く，壁外への掘り込みが若干確認されたただけである。

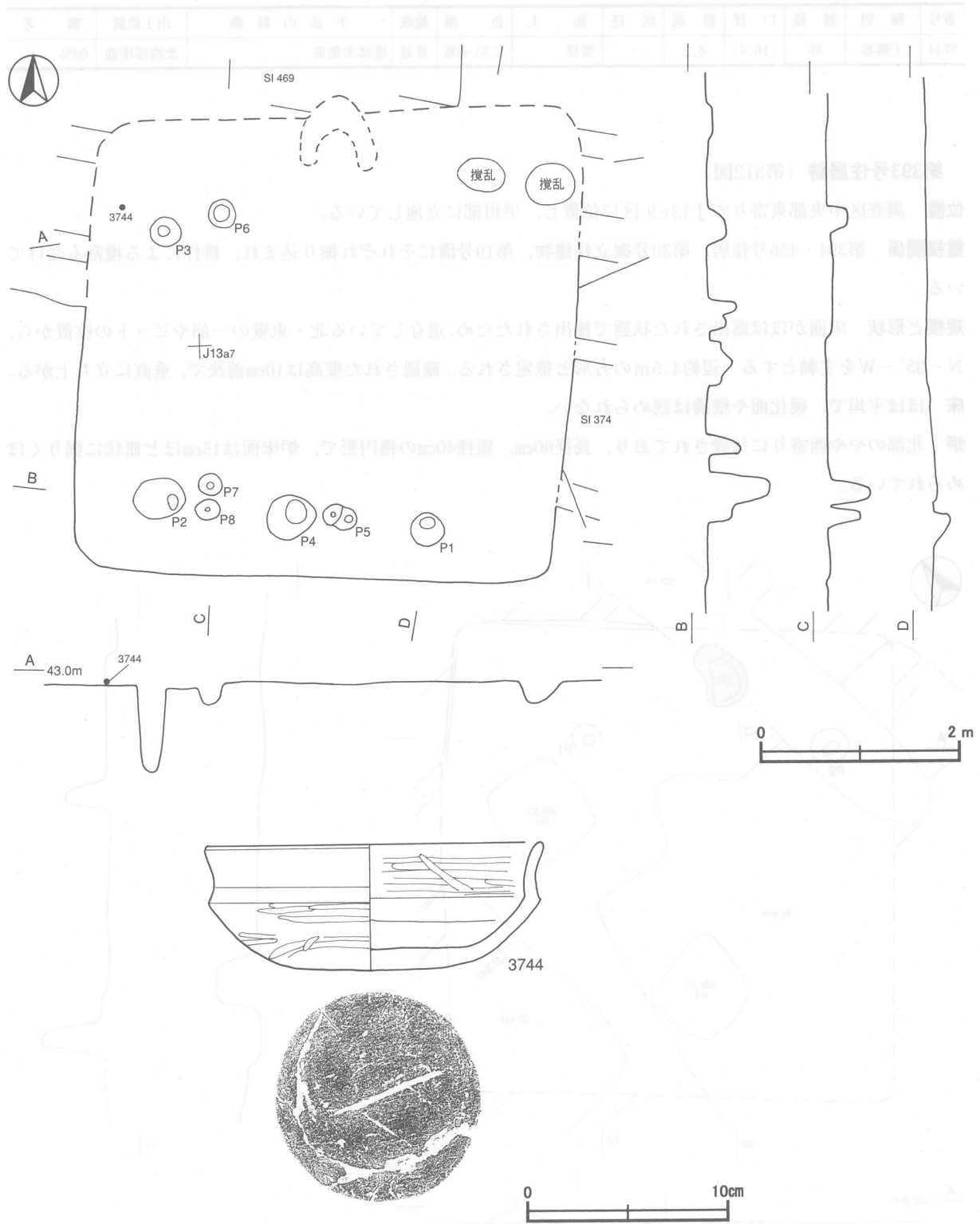
**ピット** 8か所。主柱穴はP1～P3が相当し，深さ16～58cmである。P1に相對すると予測される北東部分には，主柱穴は検出されていない。P4は深さ約24cmで，南壁際の中央部に位置しており，出入り口部に伴うピットと考えられる。P5・P6は深さ20cm・24cmで，形状から見て柱穴と考えられるが，位置が不規則で，詳細は不明である。

**覆土** 確認されていない。

**遺物出土状況** 土師器片198点(坏36, 高坏12, 甕150), 須恵器片19点(坏10, 蓋1, 甕8), 土製品1点(土錘)が出土しているが，床面の大半が削平されており，これらの遺物の多くは，主に耕作による攪乱部分から検出されたものである。伴出遺物と考えられる遺物は，北西部の床面から出土している3744だけである。



所見 床面から検出された土師器坏片から、時期は6世紀後半の可能性が高い。



第311図 第390号住居跡・出土遺物実測図

第390号住居跡出土遺物観察表 (第311図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3744	土師器	坏	[16.6]	6.3	-	雲母	にぶい赤褐	普通	底部木葉痕	北西部床面	60%

第393号住居跡 (第312図)

位置 調査区中央部東寄りのJ13e9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第394・456号住居、第30号掘立柱建物、第19号溝にそれぞれ掘り込まれ、耕作による攪乱も受けている。

規模と形状 床面がほぼ露出された状態で検出されたため、遺存している北・東壁の一部やピットの位置から、N-35°-Wを主軸とする一辺約4.5mの方形と推定される。確認された壁高は10cm前後で、垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。

炉 北部のやや西寄りに付設されており、長径60cm、短径40cmの楕円形で、炉床面は15cmほど皿状に掘りくぼめられている。



第312図 第393号住居跡実測図

#### 炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック多量
- 2 極暗褐色 焼土ブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

**ピット** 2か所。P1・P2の深さは42cm・60cmで、主柱穴と考えられるが、対応する柱穴は重複などのため確認されていない。

**覆土** 2層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 出土遺物は少なく、土師器片37点（坏10，高坏1，甕26）が出土しただけである。いずれも細片のため図示できたものはなく、破断面も摩滅しているため住居廃絶後の段階で埋土とともに混入したものである。

**所見** 覆土が薄く壁の立ち上がりも明確でないため住居全体の様相は確認できないが、炉を有する住居形態や出土した土師器片の形状から、時期は古墳時代前期から中期と考えられる。

### 第398号住居跡（第313図）

**位置** 調査区中央部東寄りのJ13d2区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第1342・1515号土坑，第30号掘立柱建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 大部分が調査区域外に延びているため、南北軸の約3.0mと東西軸の2.4mだけが確認できた。遺存している竈や西壁から、N-82°-Wを主軸とする方形または長方形と考えられる。確認された壁高は22～26cmであり、壁の立ち上がりは不明である。

**床** ほほ平坦で、竈の手前から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は認められない。

**竈** 西壁の中央部に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで40cm，袖部幅75cm，壁外への掘り込みは約15cmである。火床部は約10cmほど皿状に掘りくぼめられて、火床面が火熱を受けてかなり赤変硬化しており、かなり使用頻度が高かったことがうかがえる。煙道は火床部から緩やかに傾斜して立ち上がっている。

#### 竈土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 焼土粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量，ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
- 5 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 6 黒褐色 焼土ブロック微量
- 7 暗赤褐色 焼土粒子少量
- 8 暗褐色 ロームブロック多量
- 9 暗褐色 焼土ブロック少量
- 10 暗褐色 ローム粒子微量
- 11 暗褐色 ローム粒子少量
- 12 暗褐色 ロームブロック少量

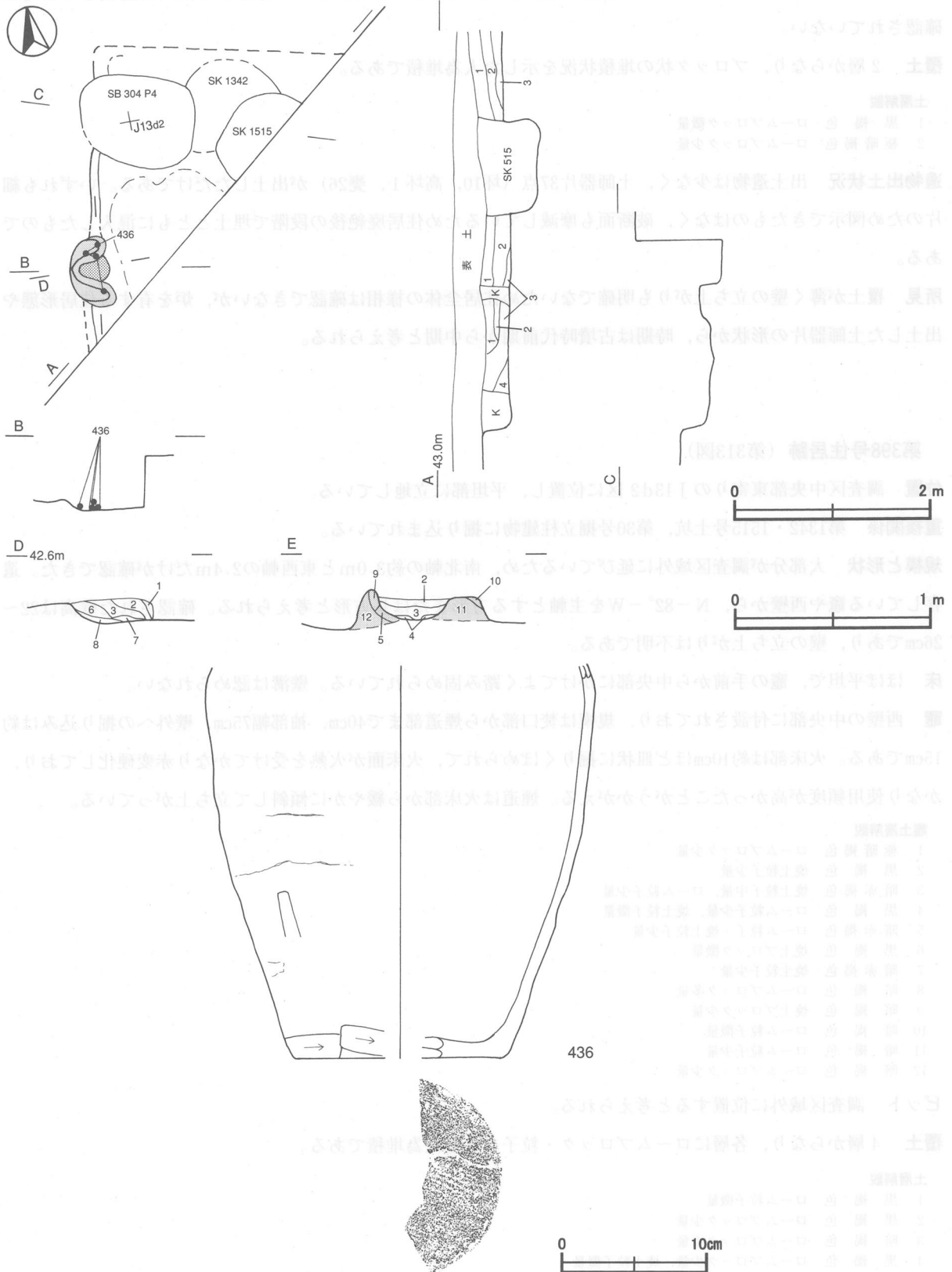
**ピット** 調査区域外に位置すると考えられる。

**覆土** 4層からなり、各層にロームブロック・粒子を含む人為堆積である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量，焼土粒子微量

遺物出土状況 出土遺物は少なく、土師器片22点（坏5，高坏1，甕16），須恵器片2点（甕）が出土した  
 けである。いずれも細片のため図示できたものは少ない。436はそれぞれ竈の左・右袖部内から出土した破片  
 が接合されたもので、竈の芯材として転用されたものである。



第313図 第398号住居跡・出土遺物実測図

所見 本跡は大部分が調査区域外に延びるため、住居全体の形状を把握することはできなかったが、竈袖部内から出土した土師器甕片の形状などから、時期は7世紀後半と考えられる。

#### 第398号住居跡出土遺物観察表（第313図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
436	土師器	甕	-	(26.4)	[13.4]	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面下位ヘラ削り、内面ナデ	竈袖部内	30%

#### 第400号住居跡（第314図）

位置 調査区中央部のJ13b7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第392号住居に掘り込まれている。

規模と形状 西部が第392号住居に掘り込まれているため、南北軸3.5m、東西軸は2.0mだけが確認できた。平面形は東側部分の形状から見て、 $N-0^\circ$ を主軸とする方形または長方形と推定される。壁高は4～9cmと低く、立ち上がり状況は不明である。

床 ほぼ平坦で、ピットの内側から中央部にかけてがよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈 北壁中央部に付設され、規模は焚口部から煙道部まで40cm、袖部幅70cmである。壁外の掘り込みは35cmで、火床部は6cmほど皿状に掘りくぼめられており、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がっている。

##### 竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 4 黒褐色 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック微量
- 5 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 7 黒褐色 ロームブロック微量

ピット 5か所。主柱穴はP1・P2が相当し、深さは18cmである。P3～P5は深さ12～27cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 北東コーナー部に付設され、長径74cm、短径55cmの長方形で、深さは56cmを測り、底面は平坦である。

##### 貯蔵穴土層解説

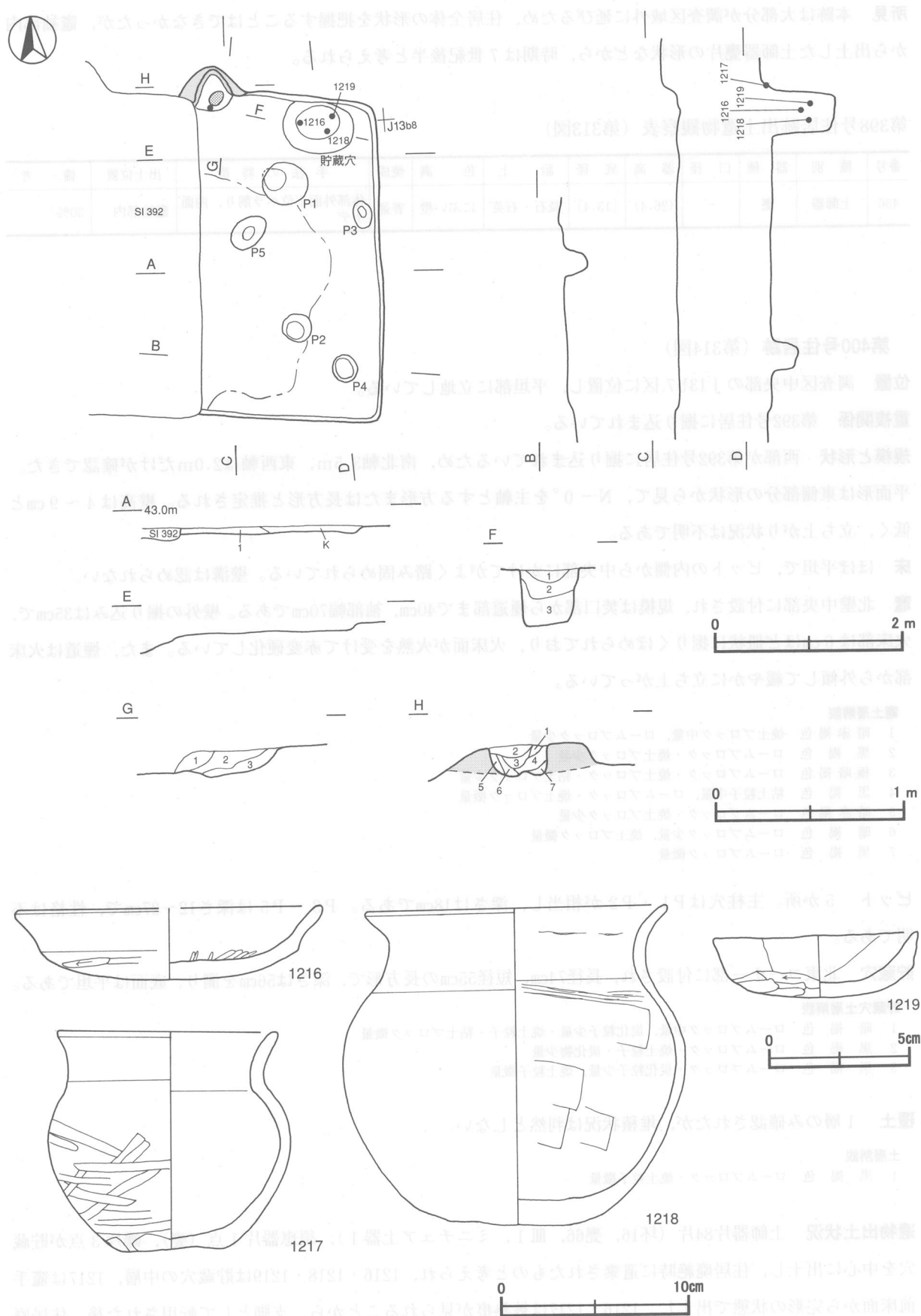
- 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量・焼土粒子・粘土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量

覆土 1層のみ確認されたが、堆積状況は判然としない。

##### 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片84片（坏16、甕66、皿1、ミニチュア土器1）、須恵器片1点（甕）、礫片3点が貯蔵穴を中心に出土し、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられ、1216・1218・1219は貯蔵穴の中層、1217は竈手前床面から完形の状態で出土し、1216・1217は被熱痕が見られることから、支脚として転用された後、住居廃絶時に貯蔵穴に遺棄されたものと推測される。



第314図 第400号住居跡・出土遺物実測図

所見 本跡は、煙道の壁外への掘り込みが30cmを超え、貯蔵穴を北東コーナー部に有する住居形態や出土土器の形状から、時期は6世紀中葉と考えられる。

第400号住居跡出土遺物観察表（第314図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1216	土師器	坏	[16.1]	3.8	-	角礫・雲母・長石・石英	赤褐	普通	体部内面ヘラ磨き，口縁部横ナデ	貯蔵穴中層	35%
1217	土師器	小形甕	11.5	11.6	5.6	雲母・白色粒子	橙	普通	底部外面ヘラ削り，口縁部横ナデ	竈手前床面	100% PL221
1218	土師器	小形甕	15.7	16.8	6.5	角礫・雲母・長石・石英	橙	普通	底部外面ヘラ削り，口縁部横ナデ	貯蔵穴中層	90% PL222
1219	土師器	ミニチュア土器	7.2	2.2	-	雲母・石英・白色粒子	橙	普通	体部下端ヘラ削り，内面・口縁部ナデ	貯蔵穴中層	100% PL221

### 第402号住居跡（第315・316図）

位置 調査区中央部東寄りのJ13e7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第404号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 一辺約5.0mの方形で、主軸方向はN-15°-Wである。壁高は約20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

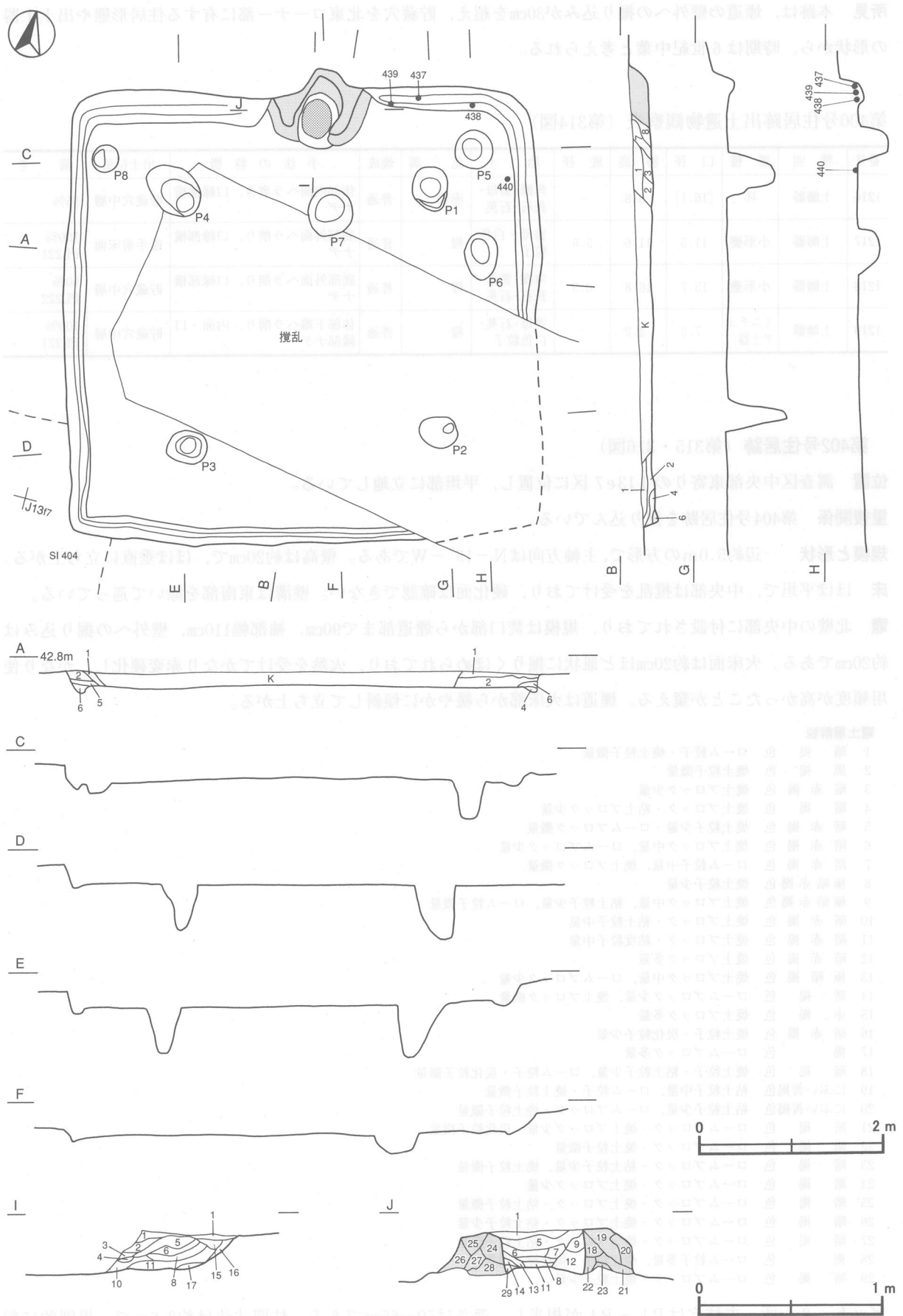
床 ほぼ平坦で、中央部は攪乱を受けており、硬化面は確認できない。壁溝は東南部を除いて巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで90cm、袖部幅110cm、壁外への掘り込みは約20cmである。火床面は約20cmほど皿状に掘りくぼめられており、火熱を受けてかなり赤変硬化し、かなり使用頻度が高かったことが窺える。煙道は火床部から緩やかに傾斜して立ち上がる。

#### 竈土層解説

- 1 暗褐色 色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 色 焼土粒子微量
- 3 暗赤褐色 色 焼土ブロック少量
- 4 暗褐色 色 焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 5 暗赤褐色 色 焼土粒子少量・ロームブロック微量
- 6 暗赤褐色 色 焼土ブロック中量，ロームブロック少量
- 7 暗赤褐色 色 ローム粒子中量，焼土ブロック微量
- 8 極暗赤褐色 色 焼土粒子少量
- 9 極暗赤褐色 色 焼土ブロック中量，粘土粒子少量，ローム粒子微量
- 10 暗赤褐色 色 焼土ブロック・粘土粒子中量
- 11 暗赤褐色 色 焼土ブロック・粘度粒子中量
- 12 暗赤褐色 色 焼土ブロック多量
- 13 極暗褐色 色 焼土ブロック中量，ロームブロック少量
- 14 暗褐色 色 ロームブロック少量，焼土ブロック微量
- 15 赤褐色 色 焼土ブロック多量
- 16 暗赤褐色 色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 17 褐色 色 ロームブロック多量
- 18 暗褐色 色 焼土粒子・粘土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
- 19 にぶい黄褐色 色 粘土粒子中量，ローム粒子・焼土粒子微量
- 20 にぶい黄褐色 色 粘土粒子少量，ロームブロック・焼土粒子微量
- 21 暗褐色 色 ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量
- 22 暗褐色 色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 23 暗褐色 色 ロームブロック・粘土粒子少量，焼土粒子微量
- 24 暗褐色 色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 25 暗褐色 色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量
- 26 暗褐色 色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量
- 27 暗褐色 色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量
- 28 褐色 色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 29 暗褐色 色 ロームブロック・焼土粒子少量

ピット 8か所。支柱穴はP1～P4が相当し、深さは50～65cmである。柱間寸法は約2.6mで、規則的に配されている。P5～P8は深さが10～40cmで、性格は不明である。



第315図 第402号住居跡実測図



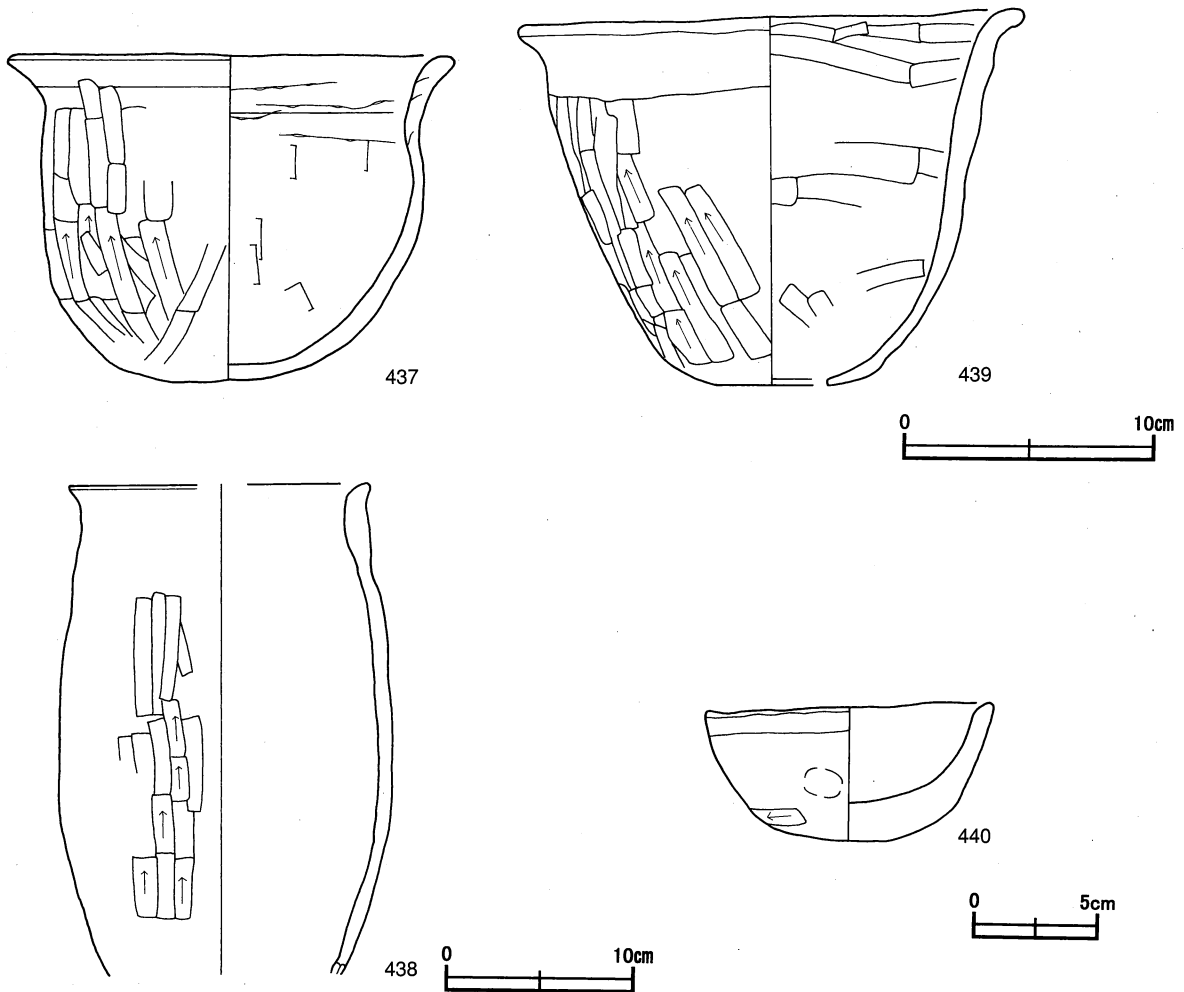
**覆土** 中央部は攪乱を受けているため、遺存状態は良好ではないが、8層が確認され、各層にロームブロックを含む人為堆積である。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック少量，焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量
- 7 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子・粘土粒子微量
- 8 暗褐色 ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片184点（坏39，高坏1，埴4，甕138，甑1，ミニチュア土器1），須恵器片5点（甕）が北東部の床面を中心に出土しており，住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。437～440は北東部壁際の床面から出土し，437は完形，439は底部に内側から穿孔された跡があり，甑に転用されたものと考えられる。

**所見** 本跡は一辺約5.0mの方形を呈し，支柱穴間は約2.6mと規則的に配されている。竈は北壁中央部に付設され，壁外への掘り込みは20cmで当該期の形態的な特徴が顕著である。時期は6世紀中葉と考えられる。



第316号 第402号住居跡出土遺物実測図

第402号住居跡出土遺物観察表 (第316図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
437	土師器	小形甕	17.7	13.0	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ, 内面輪積み痕	北東壁際床面	100%
438	土師器	甕	[16.0]	(26.0)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ, 内面ナデ	北東壁際床面	70%
439	土師器	甕	20.0	15.2	8.3	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	北東壁際床面	95%
440	土師器	ミニチュア土器	11.5	5.5	-	長石・石英・赤色粒子	褐灰	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ, 内面ナデ	東壁際床面	95%

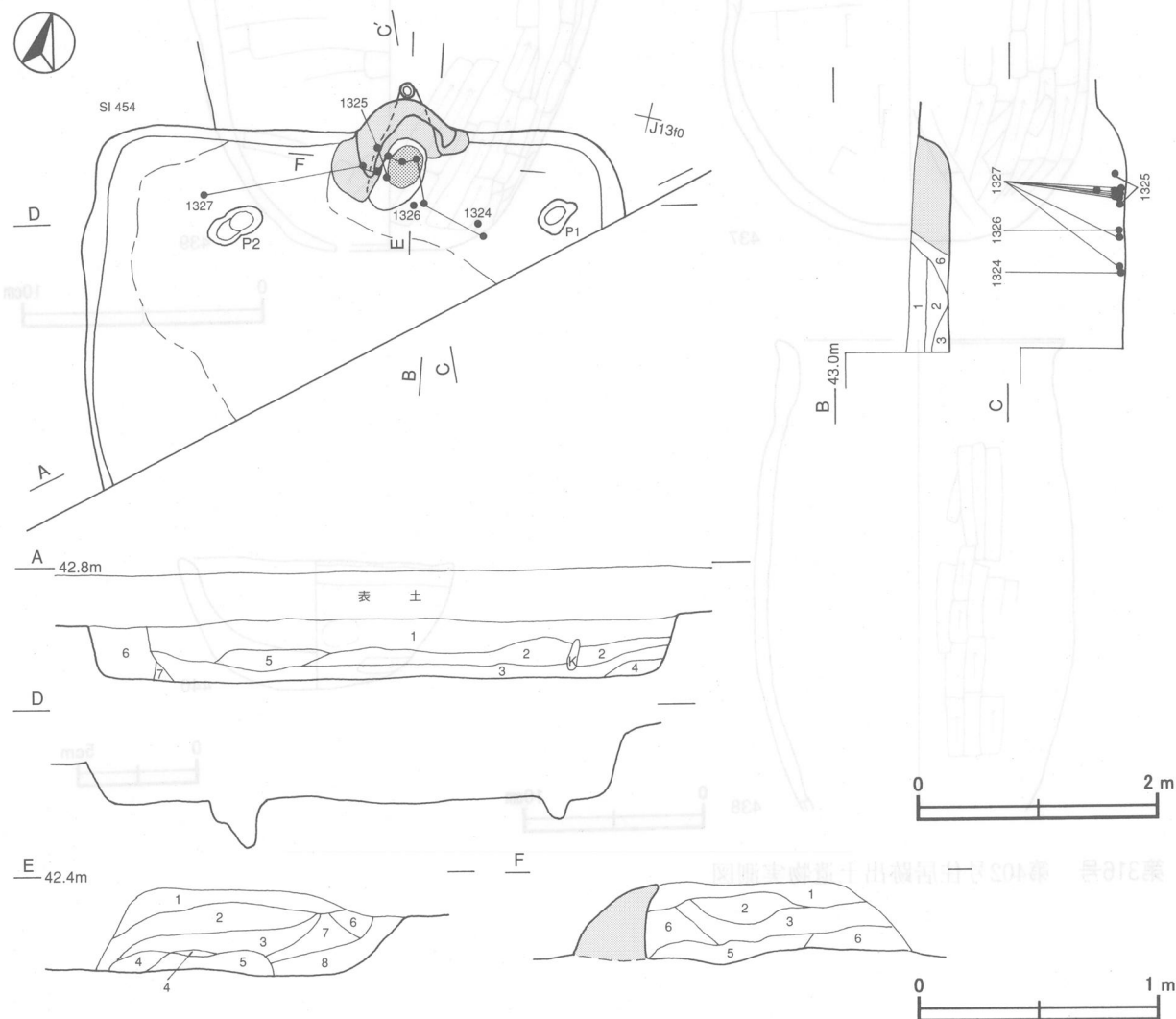
第403号住居跡 (第317・318図)

位置 調査区中央部東寄りのJ13f9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第454号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東西軸は約4.4mで、南東部が調査区域外に延びるため、南北軸は約2.7mだけが確認できた。平面形は北西部分の形状から見て、N-13°-Wを主軸とする方形または長方形と推定される。壁高は40~50cmと高く、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、北西部から中央部にかけてがよく踏み固められている。壁溝は認められない。



第317図 第403号住居跡実測図

**竈** 北壁中央部やや東寄りに付設され、規模は焚口部から煙道部まで約110cm、壁外の掘り込みは約40cmである。右袖部の遺存状態が悪く、袖部幅は確認できない。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道は火床面から外傾して緩やかに立ち上がる。

**竈土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 4 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量、焼土ブロック少量、ローム粒子微量
- 5 暗赤褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ロームブロック・粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 7 灰黄褐色 粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量
- 8 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量

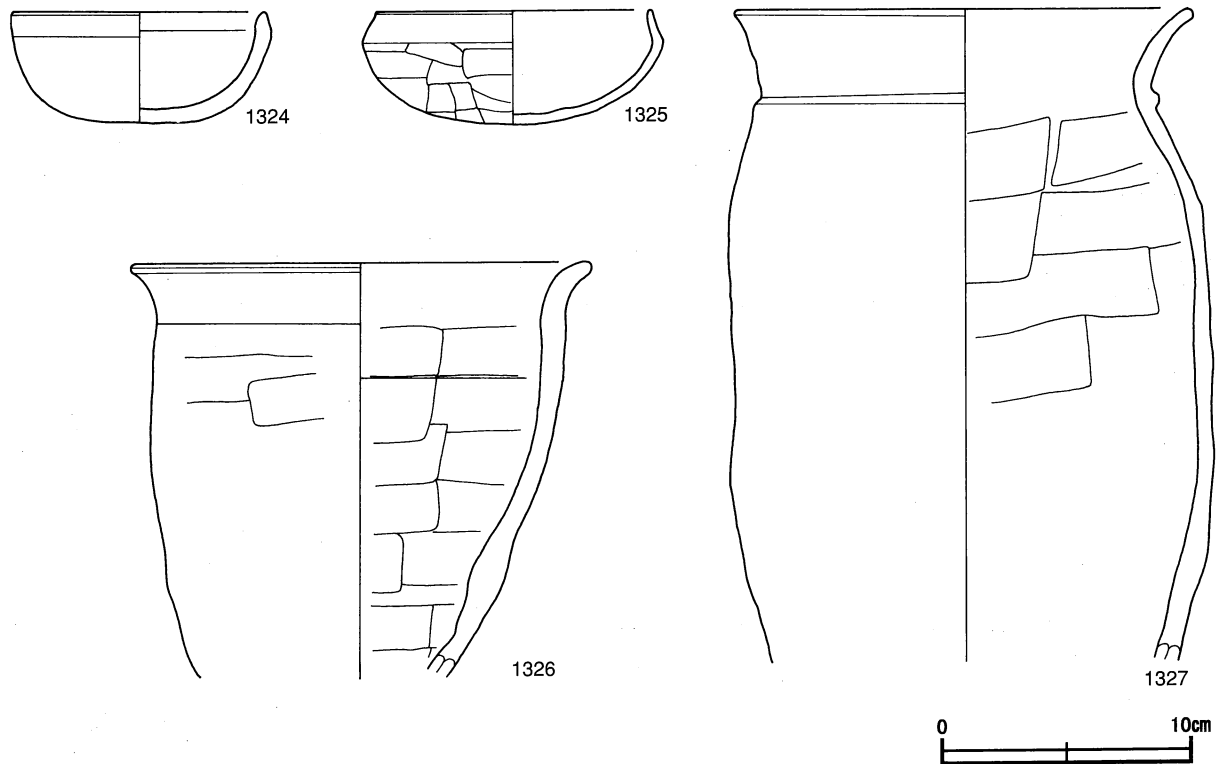
**ピット** 2か所。いずれも主柱穴で、深さは15cm・40cmである。

**覆土** 7層からなり、各層にロームブロックを含む人為堆積である。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

**遺物出土状況** 土師器片491点（坏41，椀1，甕446，甗1，手捏土器2），須恵器片2点（坏1，甕1），礫片19点，鉄滓1点が竈火床部や住居全域から散在した状態で出土している。1324は北東部の床面，1326は竈手前の床面，1327は竈火床部及び北西部の床面から出土した破片が接合されたものであり、いずれも住居廃絶時に遺棄されたものである。1325は竈火床部から出土し、被熱痕が見られることから、支脚に転用されたものと考えられる。また、須恵器片や鉄滓は破断面が摩滅していることから、後世の耕作などによって混入したものと考えられる。



第318図 第403号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡は南側部分が調査区域外に延びているため、住居全体の形状を把握することはできなかったが、竈を北壁の中央部に付設し壁外への掘り込みが約40cmである遺構の形態と、出土土器から、時期は7世紀前葉と考えられる。

第403号住居跡出土遺物観察表（第318図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1324	土師器	坏	10.0	4.7	-	砂粒	橙	普通	器面荒れ、口縁部横ナデ	北東部床面	100% PL221
1325	土師器	坏	10.9	4.5	-	雲母・石英・赤色粒子	赤褐	普通	体部内面ナデ、口縁部横ナデ	竈火床部	60%
1326	土師器	甌	18.0	(16.5)	-	長石・石英	橙	普通	体部外面荒れ、口縁部横ナデ	竈手前床面	70%
1327	土師器	甕	17.6	(26.1)	-	雲母・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面荒れ、口縁部横ナデ	竈火床部	60%

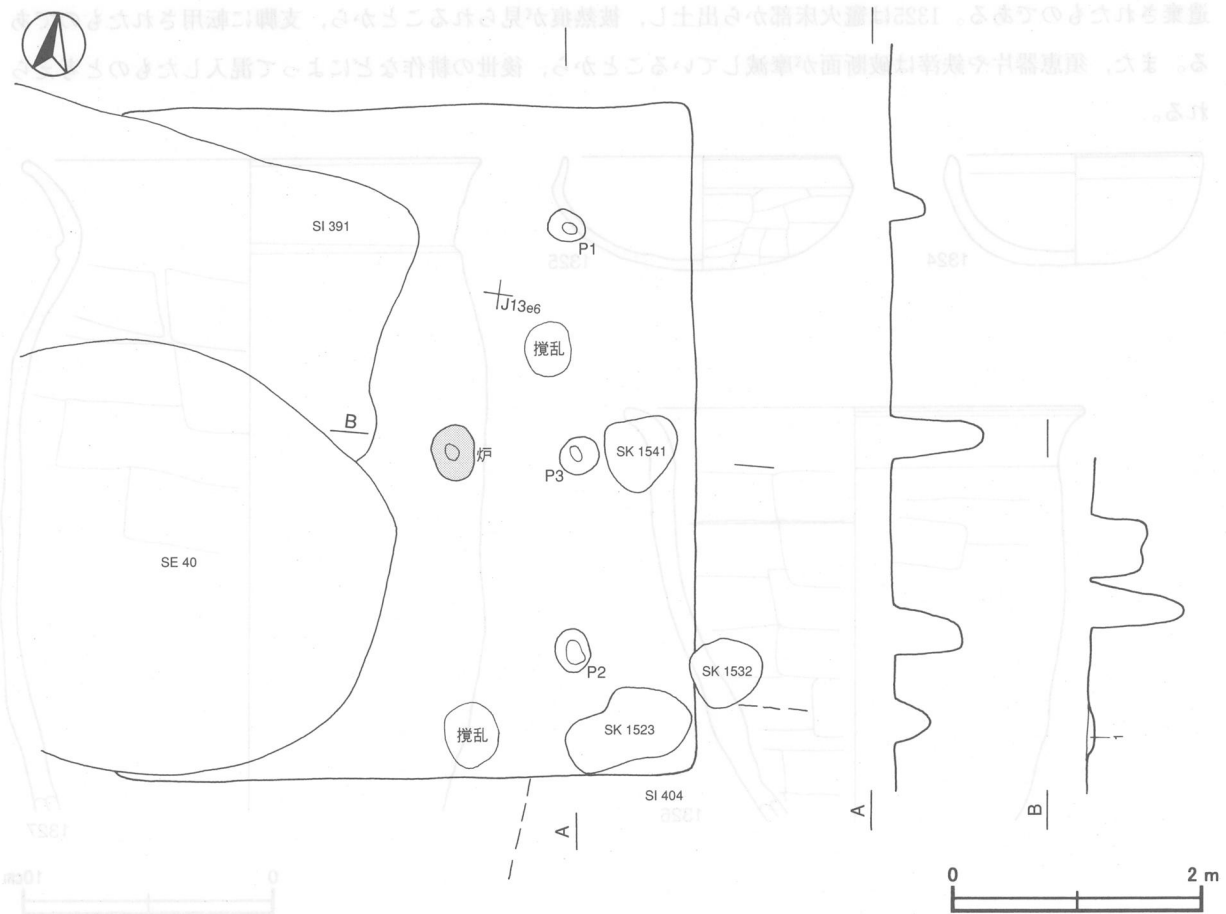
第405号住居跡（第319図）

位置 調査区中央部東寄りのJ13e5区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第404号住居跡を掘り込み、第391号住居、第1523・1532・1541号土坑、第40号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 遺存している炉やピットの位置から、N-8°-Wを主軸とする一辺約5.0mの方形と推定される。

床 ほぼ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。



第319図 第405号住居跡実測図

炉 中央部に付設されており、長径45cm、短径40cmの楕円形で、炉床面は10cmほど皿状に掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量

ピット 3か所。主柱穴はP1・P2が相当し、深さは25cm・50cmである。P3は深さ75cmで、P1とP2の間に位置することから補助柱穴と考えられ、他は重複のため検出されていない。

覆土 床が露出した状態で検出されたため、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 出土していない。

所見 本跡は床面が露出した状態で検出されて、遺物も出土していないため、住居全体の形状は把握できないが、一辺5.0mの方形で炉を有する住居形態から、時期は5世紀代と考えられる。

### 第406号住居跡 (第320図)

位置 調査区中央部東寄りのJ14b2区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第370号住居跡を掘り込み、第371・372号住居、第33号溝に掘り込まれている。

規模と形状 床面が露出された状態で検出され、壁の立ち上がりが明確にできなかったため、遺存する壁やピットの位置から判断して、N-9°-Wを主軸とする長軸6.5m、短軸5.7mの長方形と推定される。

床 ほぼ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。

竈 北壁中央部に付設され、規模は焚口部から煙道部まで80cm、袖部幅90cm、壁外の掘り込みは18cmである。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火床面が赤変硬化している。

竈土層解説

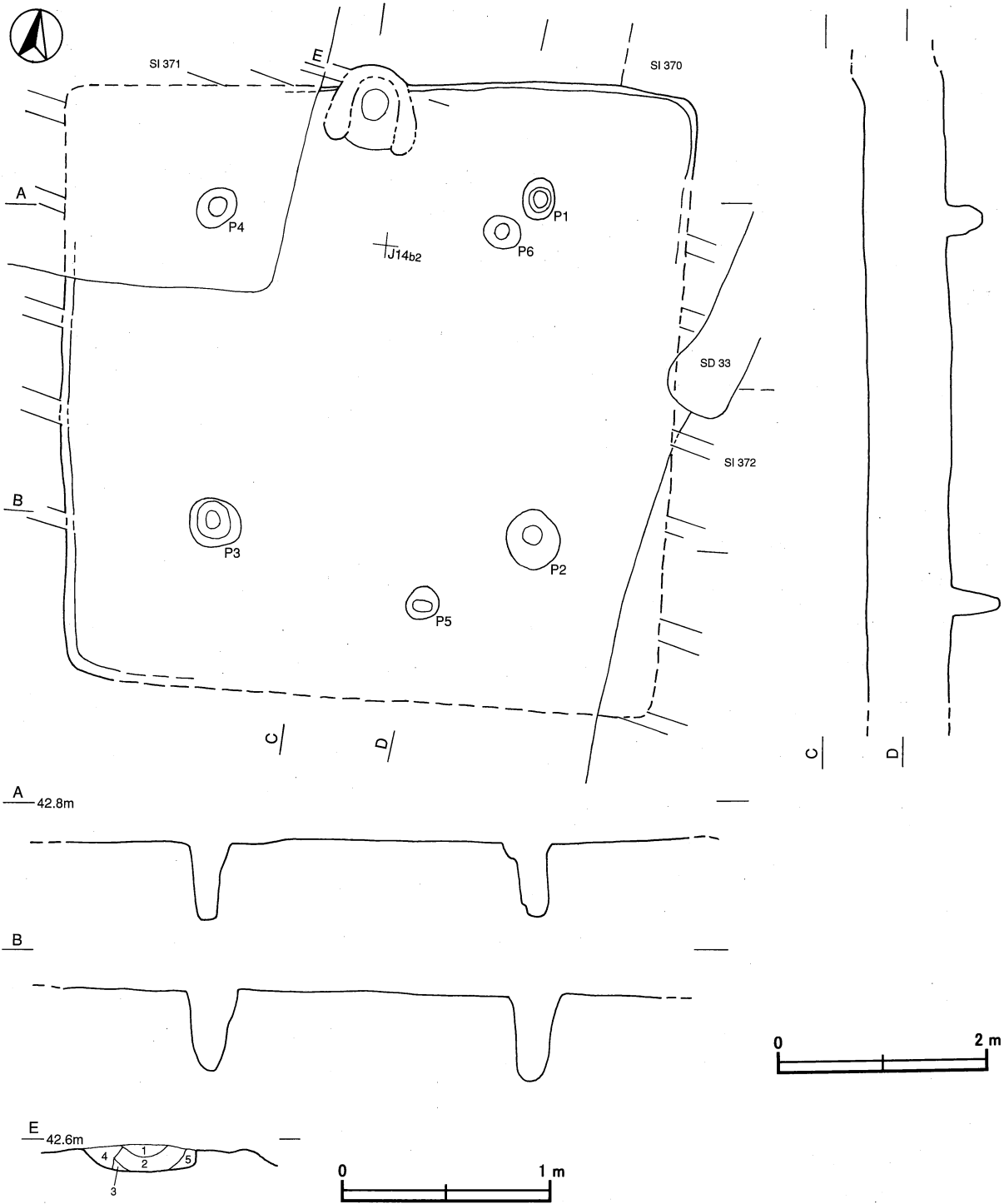
- 1 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量

ピット 6か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは70～80cmである。柱間寸法はいずれも3.0mで、規則的に配されている。P5は深さ45cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ35cmで、性格は不明である。

覆土 遺存していない。

遺物出土状況 土師器片64点(坏8, 椀1, 高坏1, 埴1, 甕53), 須恵器片1点(坏)が出土している。これらの大部分は細片であり、図示できたものはない。

所見 本跡の時期は、7世紀後葉と比定される第372号住居跡に掘り込まれていることや出土土器の形状から、古墳時代後期の6世紀代と考えられる。



第320図 第406号住居跡実測図

第409号住居跡 (第321・322図)

位置 調査区中央部東寄りのJ13g6区に位置し、平坦部に立地している。

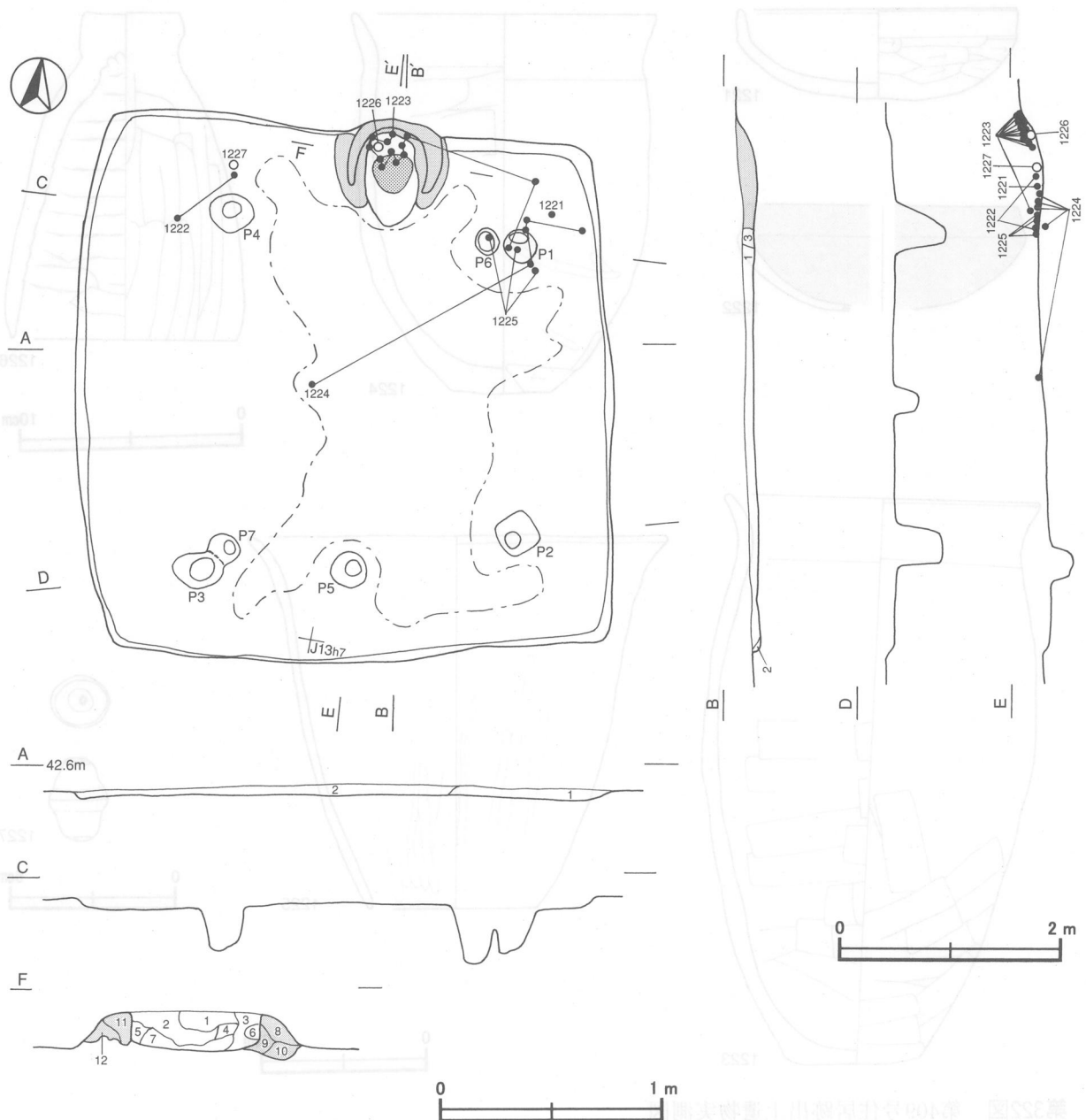
規模と形状 一辺約4.8mの方形で、主軸方向はN-11°-Eである。壁高は5~10cmと低く、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈の手前から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈 北壁中央部東寄りに付設され、規模は焚き口から煙道部まで約100cm、袖部幅約100cm、壁外への掘り込みは約10cmである。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 4 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量、ロームブロック微量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック中量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
- 8 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 9 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 10 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 11 暗褐色 ロームブロック微量
- 12 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量



第321図 第409号住居跡実測図

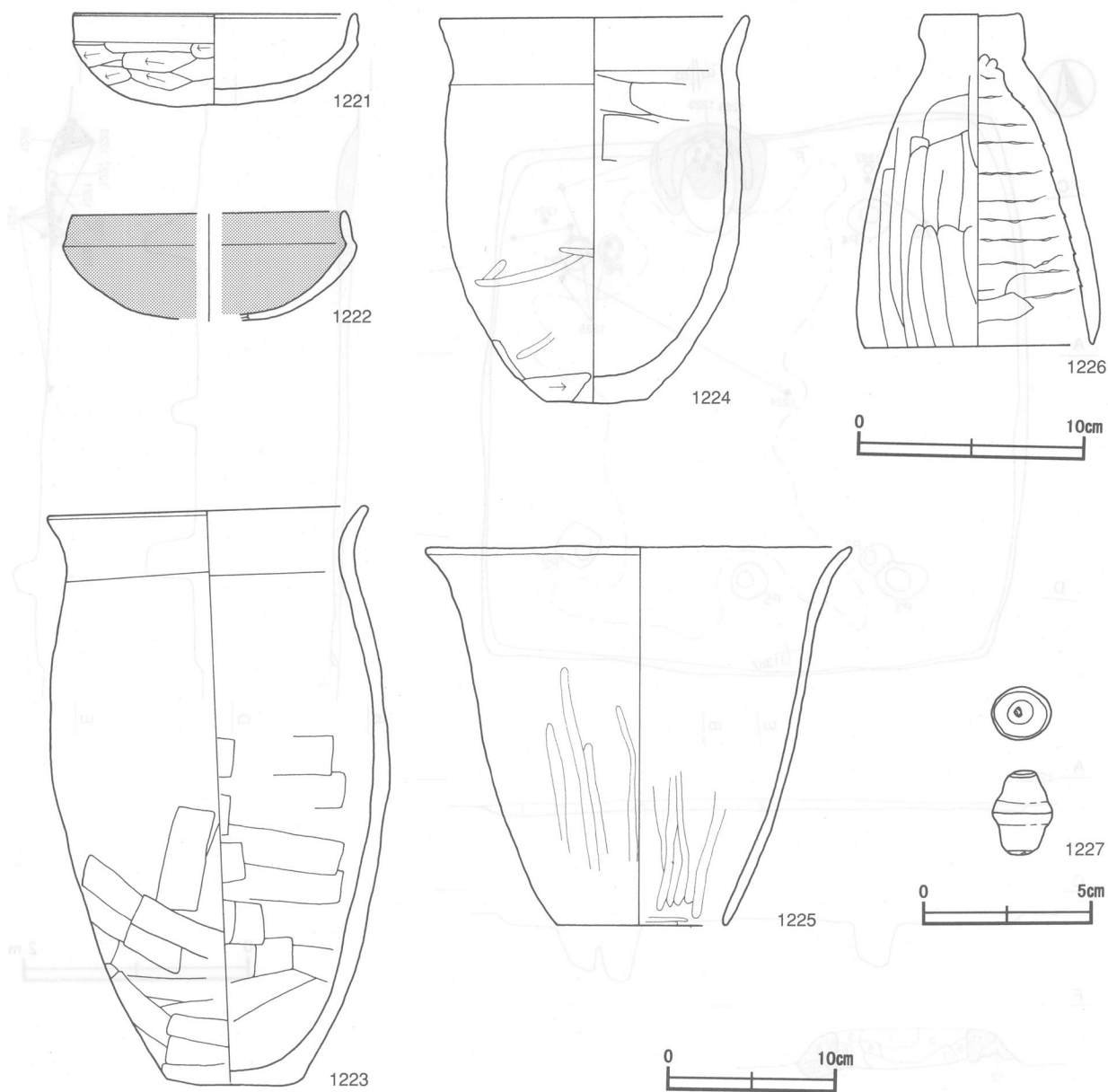
ピット 7か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは40～45cmであり、柱間寸法は2.8m前後でほぼ規則的に配されている。P5は深さ25cmで、竈と対峙する位置にあり、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は深さ56cm・20cmで、補助柱穴と考えられるが、明確ではない。

覆土 3層からなり、各層にロームブロックを含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片731点（坏195，碗2，高台付坏2，鉢1，高坏15，柑4，甕506，甑4，ミニチュア土器2），須恵器片2点（坏），土製品2点（土玉，支脚），礫片19点が北側部分の覆土下層及び床面を中心に散在した状態で出土している。1222は北西部の床面，1221・1224・1225は北東部の床面，1224は中央部の床面



第322図 第409号住居跡出土遺物実測図



から出土した破片が接合されたもので、いずれも住居廃絶時に遺棄されたものである。また、1223は竈の覆土中及び北東部の下層からの出土した破片が接合されたものであり、やはり住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。1226は竈内から出土し、被熱痕の見られる支脚である。1227は北西部の下層から出土している。さらに、土師器埴片や高台付坏片、須恵器片は破断面が摩滅していることから、後世の耕作などにより混入したものと考えられる。

**所見** 本跡は一边約4.8mの方形で、支柱穴の柱間寸法は約2.8mで規則的に配している。また、竈は北壁中央部東寄りに付設され、壁外への掘り込みが約10cmと少なく、重複関係がないため当該期の住居形態の特徴を知る上で好例といえる。床面から出土した土器の形状から時期は6世紀後葉と考えられる。

第409号住居跡出土遺物観察表（第322図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1221	土師器	坏	12.4	4.1	-	雲母	明赤褐	普通	体部内面ナデ、口縁部横ナデ	北東部床面	85%
1222	土師器	坏	[12.0]	(4.7)	-	雲母・白色粒子	にぶい橙	普通	器面荒れ、口縁部横ナデ	北西部床面	50%
1223	土師器	甕	19.0	34.4	7.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ	竈覆土中	50%
1224	土師器	甕	13.6	17.1	4.4	雲母・長石・石英	橙	二次焼成	体部外面荒れ、底部外面ヘラナデ	北東部床面	70% PL222
1225	土師器	甗	25.1	22.4	11.1	雲母・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、無底式	北東部床面	40%

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
1226	支脚	15.5	14.1	6.8	366.0	長石・石英	上面木葉痕、側面ヘラ削り、裾部横ナデ	竈火床部	90%

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
1227	土玉	2.5	1.8	0.3	5.2	砂粒	中央部に弱い稜が巡る、両面穿孔	北西部床面	

#### 第412号住居跡（第323図）

**位置** 調査区中央部のJ12e0区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第411号住居、第7号掘立柱建物、第579・815・831号土坑、第4・13号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 一边約5.3mの方形で、主軸方向はN-16°-Wである。壁高は約28cmで、外傾して立ち上がる。

**床** 遺存している部分はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は遺存部で確認されており、本来は周回していたと思われる。

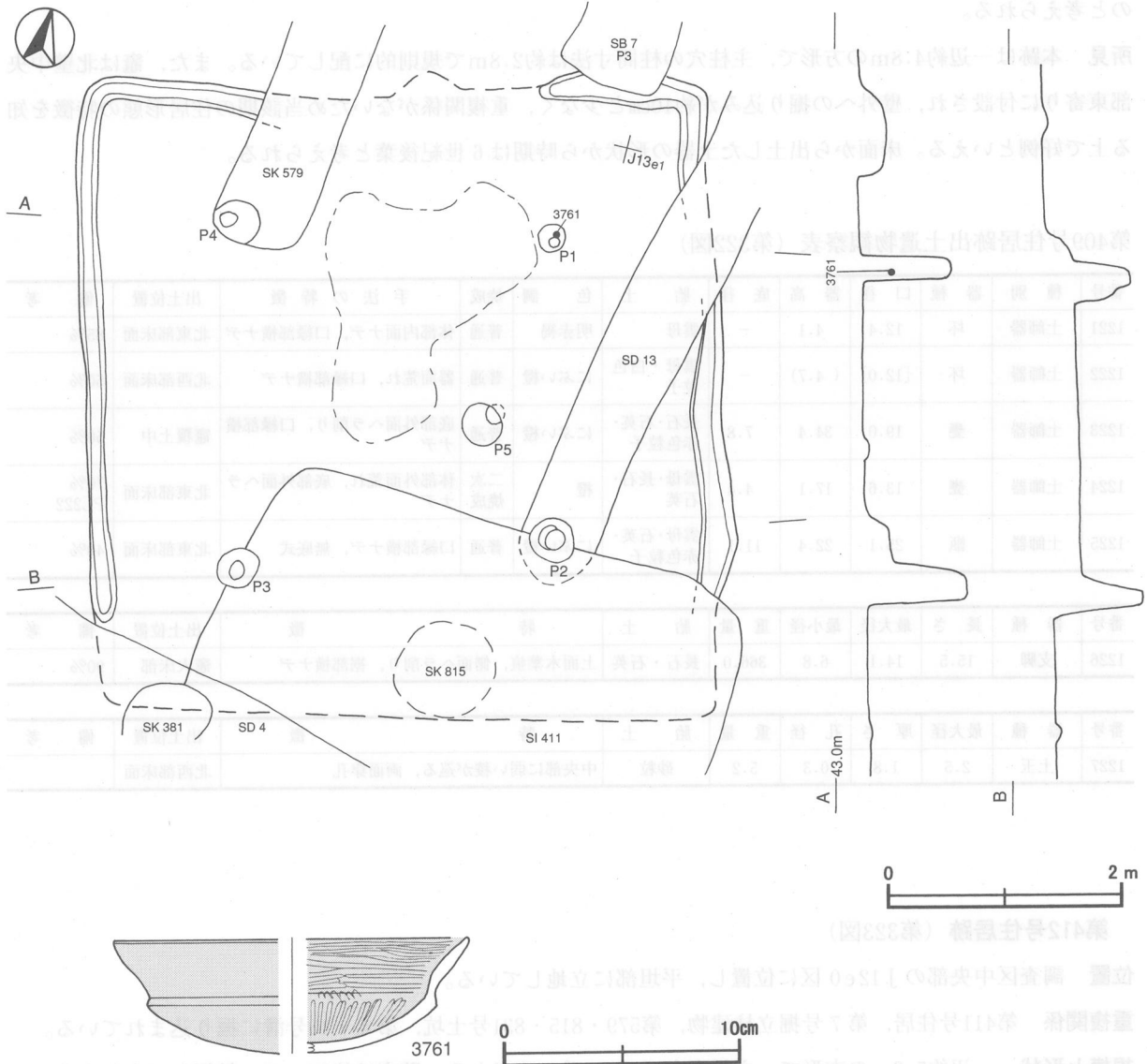
**竈** 大半が削片されているため詳細は不明であるが、北壁の中央部に砂質粘土を含んだ暗赤褐色土が広がっており、当位置に付設されていたと考えられる。

**ピット** 5か所。支柱穴はP1～P4が相当し、深さ44～84cmである。P5は深さ15cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 遺存していない。

**遺物出土状況** 土師器片29点（坏片23、高坏片1、甕片5）が、主に全域の床面から出土している。3761は、P1の覆土中層から出土しており、住居廃絶後に投棄されたと考えられる。なお、図示した3761以外はすべて床面から検出されているが、埋土中に混入していたと考えられ、細片で破断面が摩滅している土器が多い。

所見 伴出した遺物は見当たらず、大半が埋土中に混入していたと考えられ、時期を明確に判断できないが、出土土器が古墳時代後期の所産と考えられることや、主柱穴内から検出された坏の形状から、6世紀前葉と推測される。



第323図 第412号住居跡・出土遺物実測図

第412号住居跡出土遺物観察表 (第323図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3761	土師器	坏	[15.0]	(4.9)	-	雲母	赤褐	普通	底部ヘラ削り	P1覆土中層	40% 赤彩

第414号住居跡 (第324図)

位置 調査区中央部のJ12a8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第415号住居、第834・886号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南北軸は約4.6mで、西側部分が調査区域外に延びているため、東西軸は約3.2mだけが確認でき、N-9°-Eを主軸とする一辺5.0m前後の方形または長方形と推測される。壁高は3cmで、直立して立ち上がる。壁は遺存していないため立ち上がりは不明である。

床 遺存している部分はほぼ平坦である。中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認されていない。

竈 竈の上半部分が削平されており遺存状態は悪く、砂質粘土と焼土ブロックが直径約80cmにわたって検出できただけである。

ピット 確認されていない。

覆土 確認されていない。

遺物出土状況 土師器片22点(坏6, 高台付坏1, 甕15), 須恵器片8点(坏), 鉄滓3点, 礫片7点が、全域の床面から出土している。大半の破断面が摩滅した細片であり、完形に近い状態で検出された遺物はないため、これらは投棄されたものと考えられる。

所見 本跡の西側部分は調査区域外に延びており、また、伴出遺物もないため、時期を特定する資料に乏しいが、6世紀前葉以前と推測される。



第324図 第414号住居跡実測図

第415号住居跡 (第325・326図)

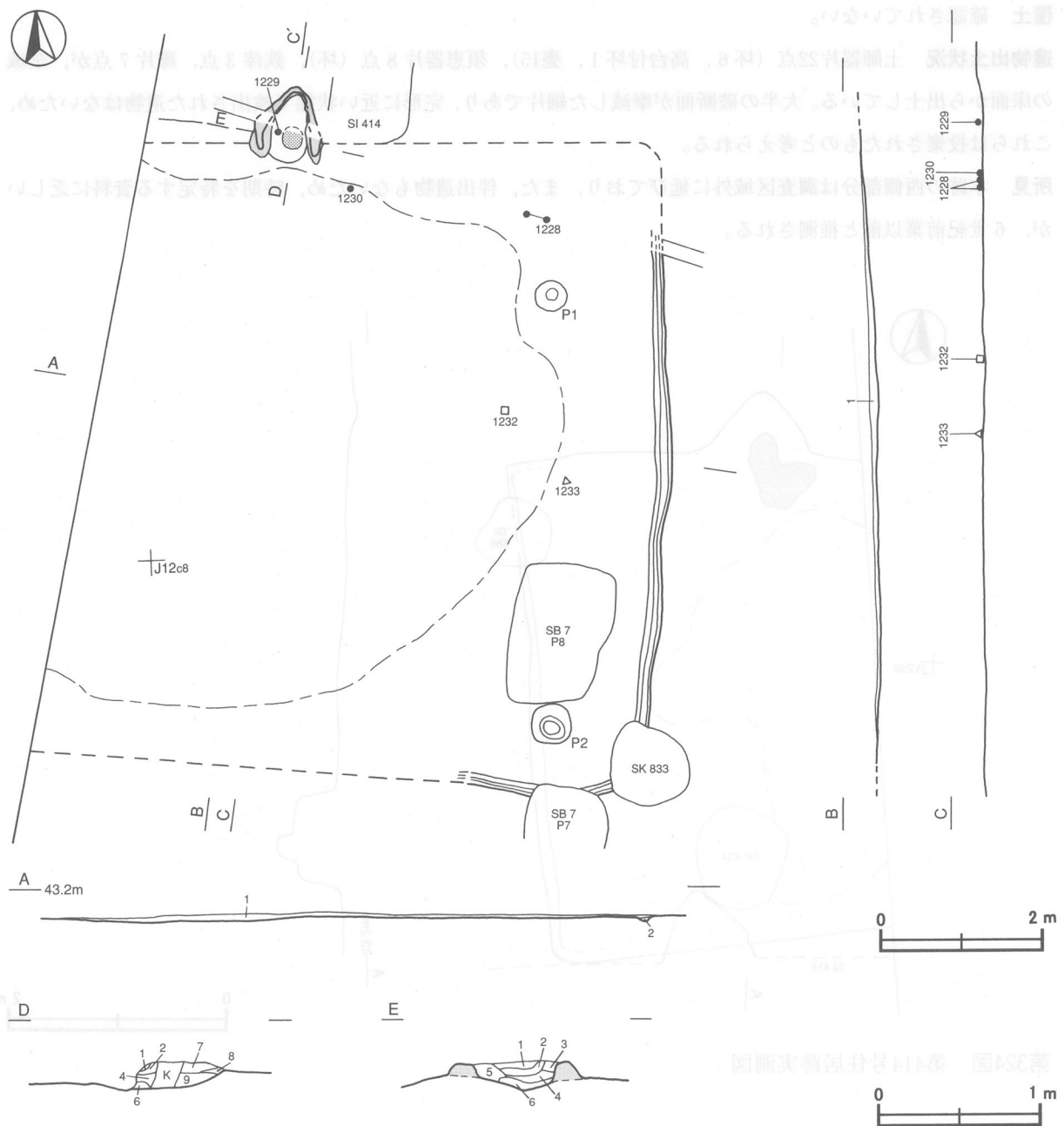
位置 調査区中央部西寄りのJ12b8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第414号住居、第7号掘立柱建物、第833号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 南北軸は約7.7mで、西部が調査区域外に伸びているため、東西軸は約7.3mだけが確認され、N-11°-Eを主軸とする方形と推測される。壁高は5cmと低い。

床 ほぼ平坦で、竈の手前から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は東部のみ検出された。

竈 北壁中央部に付設され、規模は焚き口から煙道部まで約95cm、袖部幅約90cm、壁外への掘り込みは約70cmである。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火床面が火熱を受けて赤変しており、煙道は外傾して緩やかに立ち上がっている。



第325図 第415号住居跡実測図

竈土層解説

- 1 極暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 2 赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量, ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土ブロック・粘土粒子微量
- 5 暗赤褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 6 赤褐色 焼土粒子多量, ローム粒子・炭化粒子少量
- 7 極暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 暗赤褐色 炭化粒子・粘土粒子少量, ローム粒子・焼土ブロック微量
- 9 黒褐色 焼土粒子少量, ロームブロック・炭化粒子微量

ピット 2か所。P1・P2はいずれも主柱穴で、深さは75cm・65cmである。

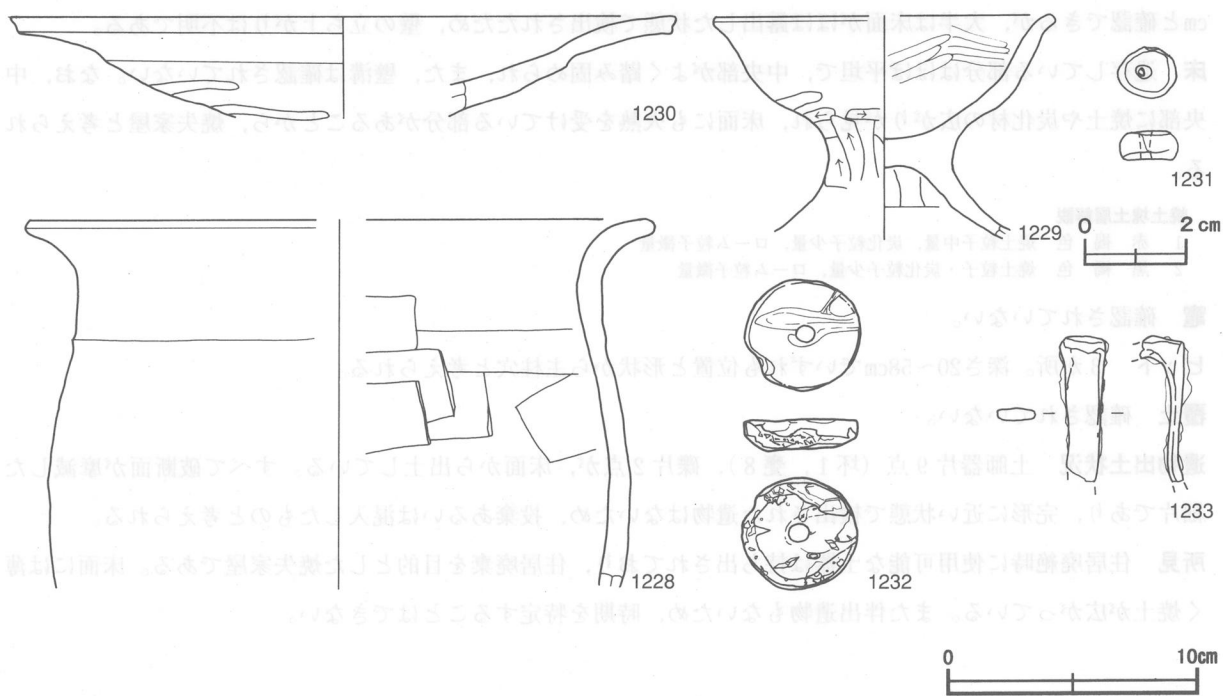
覆土 2層からなり、各層にロームブロックを含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片254点(坏34, 高台付坏1, 高坏31, 埴3, 甕185), 須恵器片19点(坏8, 甕11), 土製品1点(小玉), 石製品1点(紡錘車), 鉄製品1点(楔), 鉄滓1点, 礫片14点が北東部の覆土下層を中心に散在した状態で出土している。1228・1230は北壁際, 1233は東部のいずれも床面から出土しており, 住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。1229は竈火床部から逆位の状態で出土し, 被熱痕が見られることから支脚として利用されたものである。1231は覆土中, 1232は東部の覆土下層から出土している。埴片や高台付坏片, 須恵器片は破断面が摩滅していることから, 後世の耕作などによって混入したものである。

所見 時期は, 6世紀前葉と比定される第414号住居跡を掘り込んでいることや, 出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第326図 第415号住居跡出土遺物実測図

第415号住居跡出土遺物観察表（第326図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1229	土師器	高坏	[13.4]	(8.9)	-	雲母・石英	明赤褐	普通	坏部内面ヘラ磨き，脚部内面ヘラナデ	竈火床部	60%
1230	土師器	高坏	26.4	(3.8)	-	雲母・白色粒子	にぶい褐	普通	裾部横ナデ	北壁際床面	30%
1228	土師器	甕	[24.4]	(14.7)	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	体部内面ヘラナデ，口縁部横ナデ	北壁際床面	10%

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
1231	小玉	1.1	0.6	0.2	0.7	長石・石英	ナデ	覆土中	

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1232	紡錘車	4.5	1.2	0.7	(31.8)	粘板岩	剥落部分有り，片面穿孔	東部下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1233	楔	(5.8)	1.7	0.6	(13.9)	鉄	頭部は屈曲し，断面は長方形，先端部欠損	東部床面	PL284

第418号住居跡（第327図）

位置 調査区中央部のJ12i9区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係 第3号不明遺構，第31号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 長軸約4.4m，短軸約3.0mの長方形で，主軸方向はN-17°-Wである。壁高は北壁部分で約20cmと確認できるが，大半は床面がほぼ露出した状態で検出されたため，壁の立ち上がりは不明である。

床 遺存している部分はほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められ，また，壁溝は確認されていない。なお，中央部に焼土や炭化材の広がりが見られ，床面にも火熱を受けている部分があることから，焼失家屋と考えられる。

焼土塊土層解説

- 1 赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子少量，ローム粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量

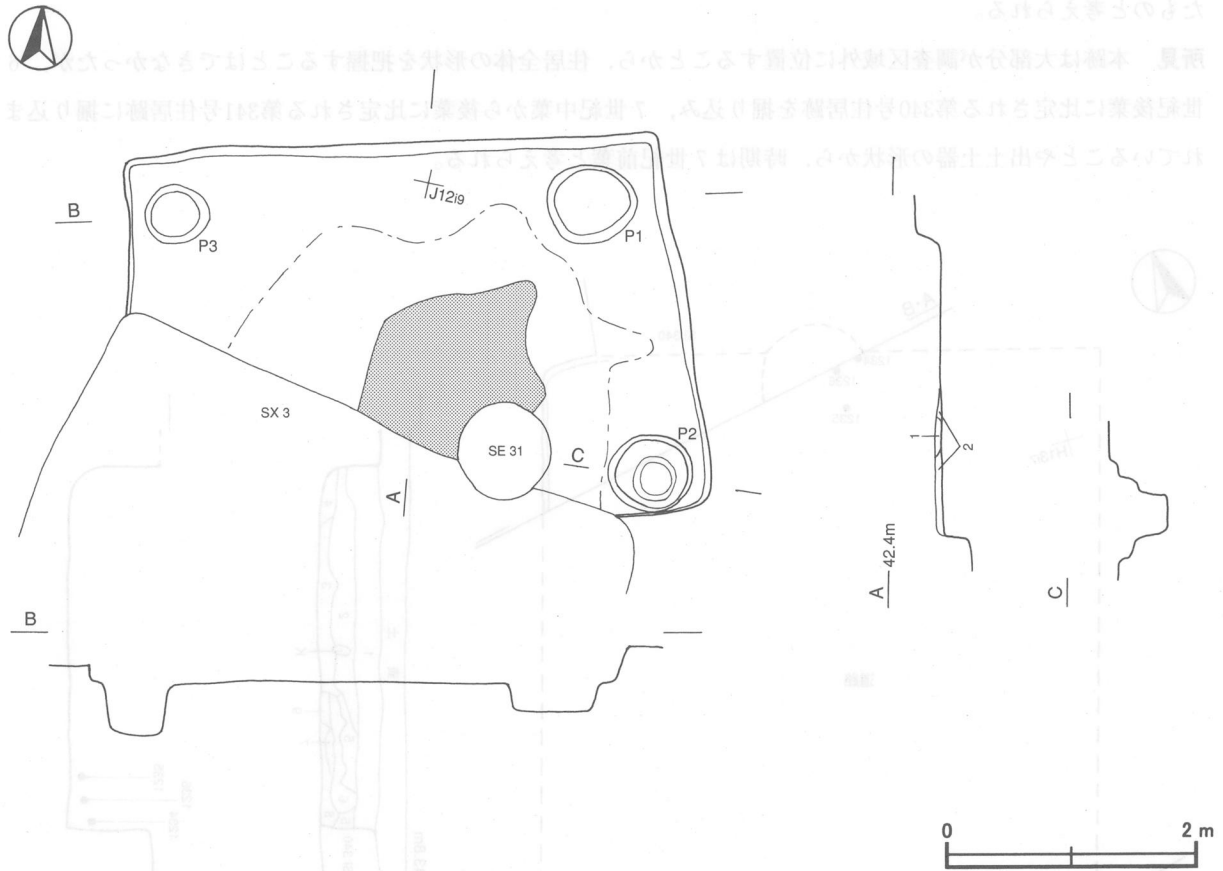
竈 確認されていない。

ピット 3か所。深さ20~58cmでいずれも位置と形状から支柱穴と考えられる。

覆土 確認されていない。

遺物出土状況 土師器片9点（坏1，甕8），礫片2点が，床面から出土している。すべて破断面が摩滅した細片であり，完形に近い状態で検出された遺物はないため，投棄あるいは混入したものと考えられる。

所見 住居廃絶時に使用可能な土器は持ち出されており，住居廃棄を目的とした焼失家屋である。床面には薄く焼土が広がっている。また伴出遺物もないため，時期を特定することはできない。



第327図 第418号住居跡実測図

第420号住居跡 (第328・329図)

**位置** 調査区中央部から北部にかけてのH13i7区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第340号住居跡を掘り込み、第341号住居に掘り込まれている。

**規模と形状** 大部分が調査区域外のため住居全体の形状は把握できないが、遺存する南東部と南西部の壁より、N-14°-Eを主軸とする長軸約5.0m、短軸4.4mの長方形と推測される。壁高は40cmで、垂直に立ち上がる。

**床** 大部分が調査区域外のため、確認できない。

**竈** 第341号住居跡に掘り込まれたと考えられ、遺存していない。

**ピット** 調査区域外に位置すると考えられる。

**覆土** 9層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

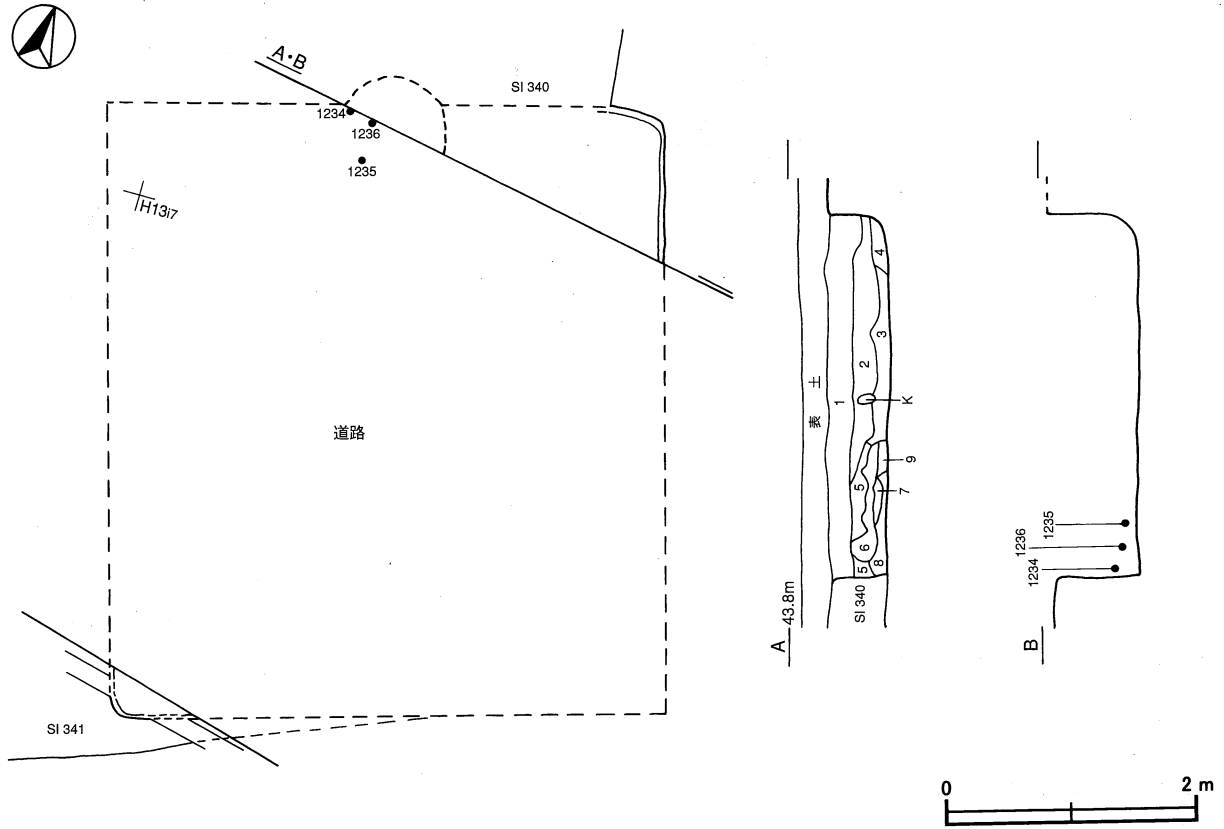
土層解説

- |   |      |                                 |
|---|------|---------------------------------|
| 1 | 極暗褐色 | 焼土ブロック・炭化物少量, ロームブロック微量         |
| 2 | 黒褐色  | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量    |
| 3 | 極暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量           |
| 4 | 暗褐色  | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量          |
| 5 | 極暗褐色 | 焼土粒子中量, 炭化物・粘土ブロック少量, ロームブロック微量 |
| 6 | 灰褐色  | 粘土ブロック多量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 7 | 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化物・粘土ブロック少量    |
| 8 | 黒褐色  | 焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック少量, ローム粒子微量     |
| 9 | 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量         |

**遺物出土状況** 土師器片77点(坏7, 甕70), 礫片1点が北部の覆土下層や中層を中心に出土している。1235・1236は北部の覆土下層, 1234は北部の覆土中層からそれぞれ出土し, 破損部端に研磨痕が見られ, 再利用され

たものと考えられる。

所見 本跡は大部分が調査区域外に位置することから、住居全体の形状を把握することはできなかったが、6世紀後葉に比定される第340号住居跡を掘り込み、7世紀中葉から後葉に比定される第341号住居跡に掘り込まれていることや出土土器の形状から、時期は7世紀前葉と考えられる。

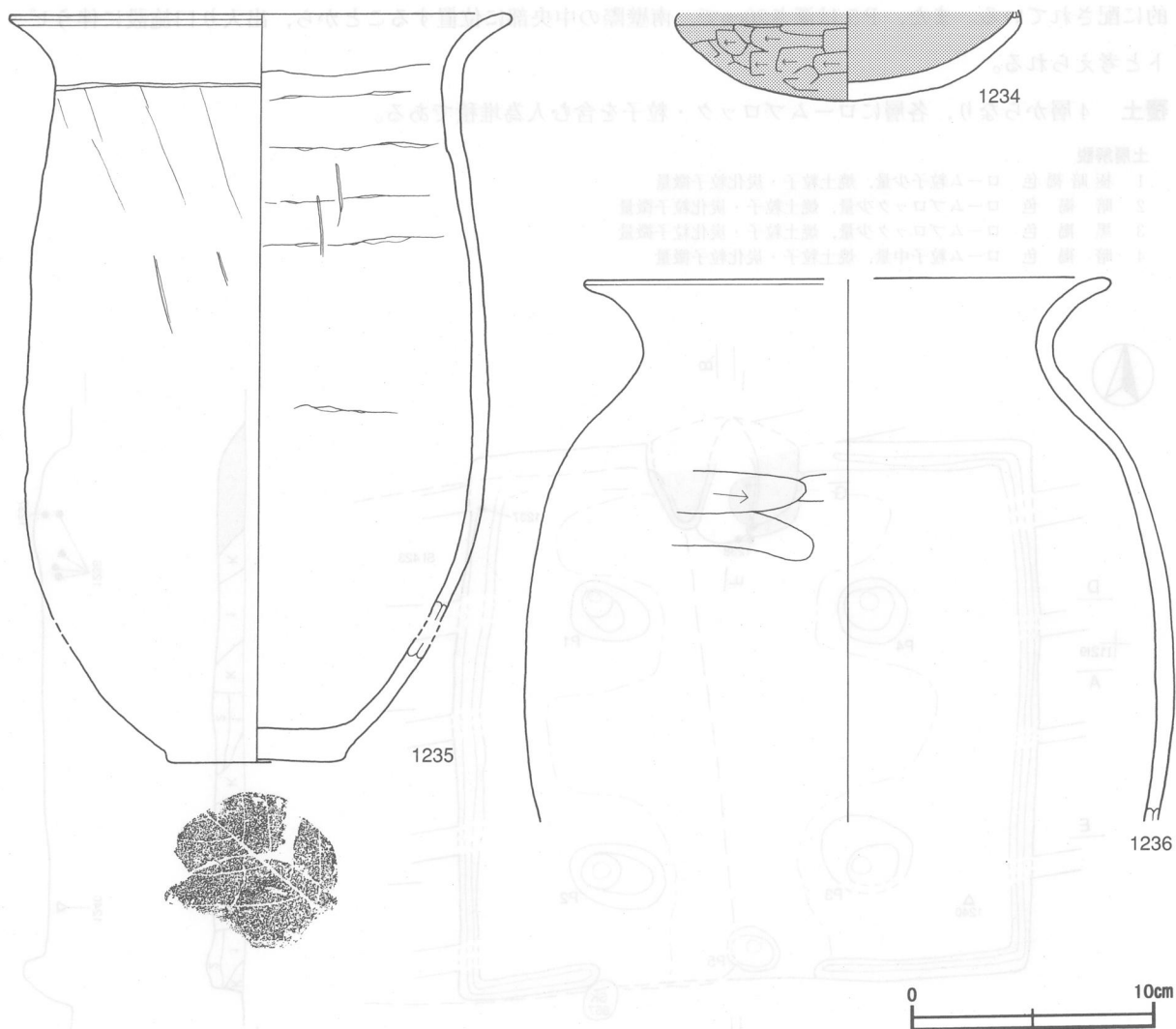


第328図 第420号住居跡実測図

第420号住居跡出土遺物観察表 (第329図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1234	土師器	坏	-	(3.7)	-	砂粒	にぶい黄橙	普通	内面荒れ、破断部を加工して擬口縁とする	北部中層	90%
1235	土師器	甕	20.5	[30.9]	7.3	長石・石英	橙	二次焼成	外面荒れ、底部外面木葉痕、口縁部横ナデ	北部下層	70%
1236	土師器	甕	[21.6]	(22.2)	-	雲母・長石・石英	黄褐	普通	外面荒れ、口縁部横ナデ	北部下層	30%





第329図 第420号住居跡出土遺物実測図

### 第425号住居跡 (第330・331図)

**位置** 調査区中央部西寄りのI12j9区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第423号住居、第867号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸4.8m、短軸4.4mのN-7°-Eを主軸とする方形である。壁高は18~21cmで、垂直に立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、竈の手前から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は周回している。

**竈** 北壁中央部に付設され、規模は焚き口から煙道部まで約105cm、袖部幅約110cm、壁外への掘り込みは後世の攪乱を受けているため確認できないが、ほとんどないと考えられる。火床部は8cmほど皿状に掘りくぼめられており、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

#### 竈土層解説

- 1 にぶい赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 灰褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック多量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 4 赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量

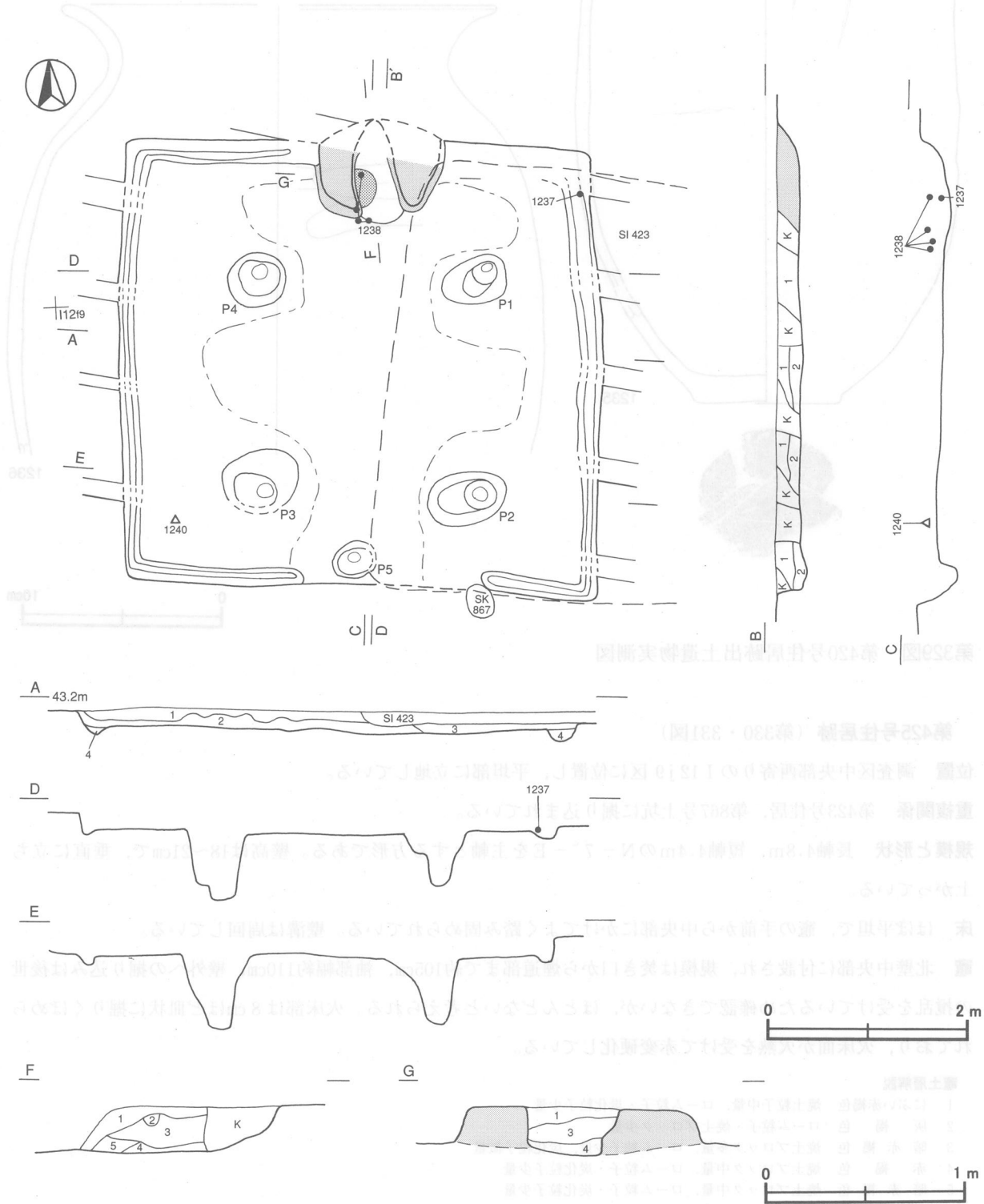
**ピット** 5か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは50~70cmであり、柱間寸法はいずれも約2.2mで規則

的に配されている。また、P5は深さ20cmで、南壁際の中央部に位置することから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 4層からなり、各層にロームブロック・粒子を含む人為堆積である。

**土層解説**

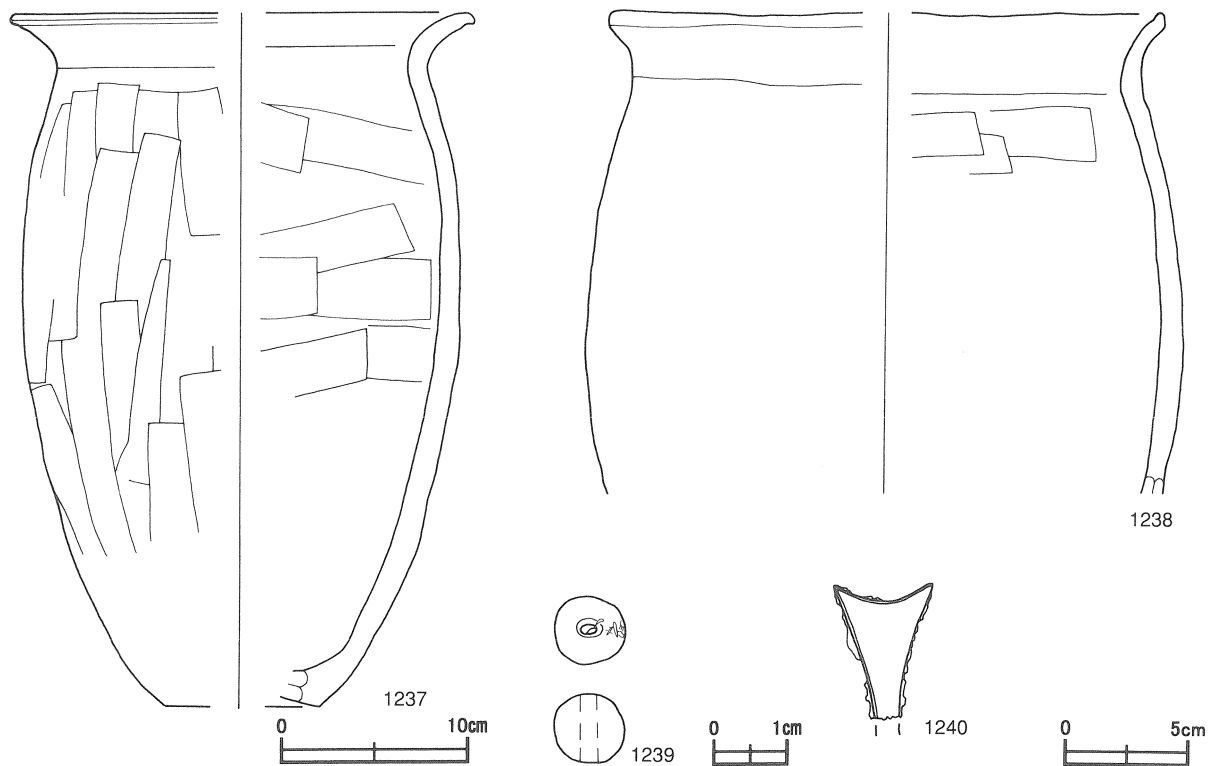
- 1 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量



第330図 第425号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片658点（坏91，高台付坏4，高坏1，埴1，甕560，甑1），須恵器片31点（坏24，高台付坏1，甕6），灰釉陶器片2点（長頸瓶），土製品1点（土玉），鉄製品1点（鏃），鉄滓1点，礫片2点が北部上層を中心に全域から出土している。1237は東壁際床面，1238は竈火床部から出土しており，本跡廃絶時に遺棄されたものである。また，1239は覆土中，1240は南西部の上層から出土し，須恵器片や灰釉陶器片，土師器の高台付坏片や埴片は，破断面が摩滅しており，住居廃絶後の埋め戻しや後世の攪乱などによる混入と考えられる。

所見 時期は，出土土器から6世紀後葉と考えられ，東へ約20mに位置する第390号住居跡と同一の集落を構成していたと想定される。



第331図 第425号住居跡出土遺物実測図

第425号住居跡出土遺物観察表（第331図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1237	土師器	甕	[24.3]	36.4	[8.1]	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部外面木葉痕，口縁部横ナデ	東壁際床面	40%
1238	土師器	甕	[22.0]	(19.2)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	二次焼成	器面荒れ，口縁部横ナデ	竈火床部	40%

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
1239	土玉	1.4	1.4	0.4	2.5	雲母・赤色粒子	ナデ，片面穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1240	鏃	(5.4)	4.0	0.3	(14.7)	鉄	鏃身部，雁又式	南西部上層	

第429号住居跡（第332図）

位置 調査区中央部のK12d6区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第19・25号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と形状 東西軸は約2.6mで、南側部分が調査区域外に延びているため、南北軸は約1.6mだけが確認でき、N-100°-Eを主軸とする方形または長方形と推測される。壁高は58cmで、直立して立ち上がる。

床 遺存している部分はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められ、壁溝が周回している。東壁中央部でわずかにくぼみが確認されている。

炉 中央部に付設され、径約40cmの地床炉で、炉床は約4cmほど掘りくぼめた皿状を呈しているが、焼き締まった感じはない。炉床面には藁状の炭化材が散在している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子・炭化材中量、ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量

ピット 確認されていない。

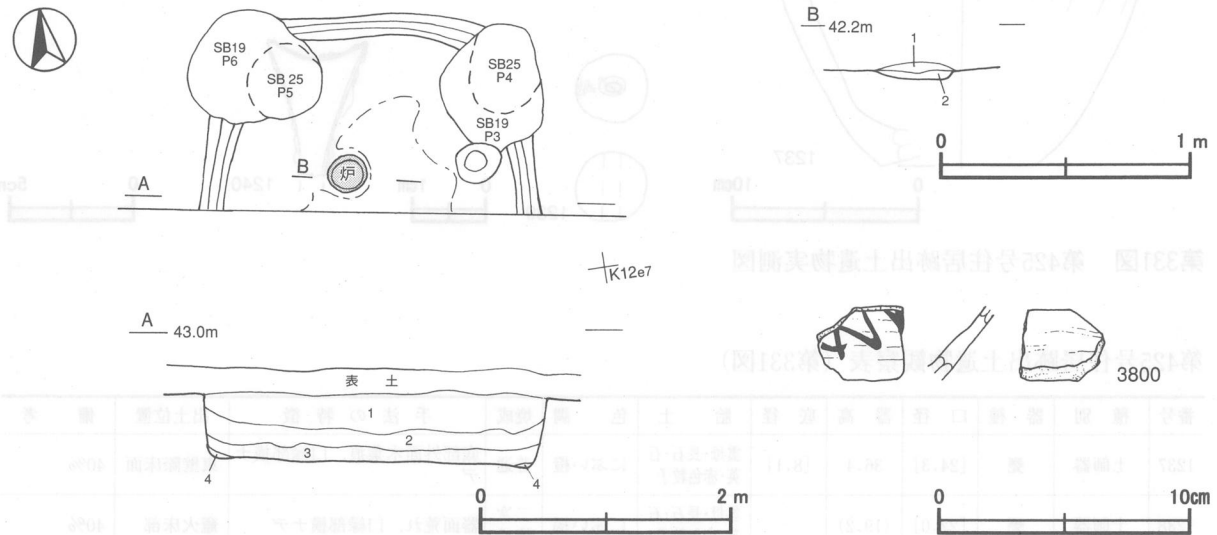
覆土 4層からなり、レンズ状に堆積した自然堆積である。第4層は壁溝部の層である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片23点（坏11，鉢1，甕11），須恵器片5点（坏3，甕2），礫片1点が、覆土中から出土している。大半が住居廃絶後に投棄されたと考えられる。

所見 本跡は伴出遺物がないが、炉が付設された小形の住居であり、時期は古墳時代後期以前である。



第332図 第429号住居跡・出土遺物実測図

第429号住居跡出土遺物観察表（第332図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3800	土師器	坏	-	(3.5)	-	雲母	黄褐	普通	体部内外面ヘラ磨き	覆土中	10% 墨書□

第430号住居跡 (第333図)

位置 調査区中央部のK12a5区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第426号住居、第836・837・857・858号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西側部分が調査区域外に延びており、また、床面がほぼ露出した状態で検出されたため、規模及び平面形状は明確ではないが、遺存している床面の範囲や竈の位置から、N-17°-Eを主軸とする一辺4.4m前後の方形または長方形と推定される。

床 遺存している部分はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認されていない。

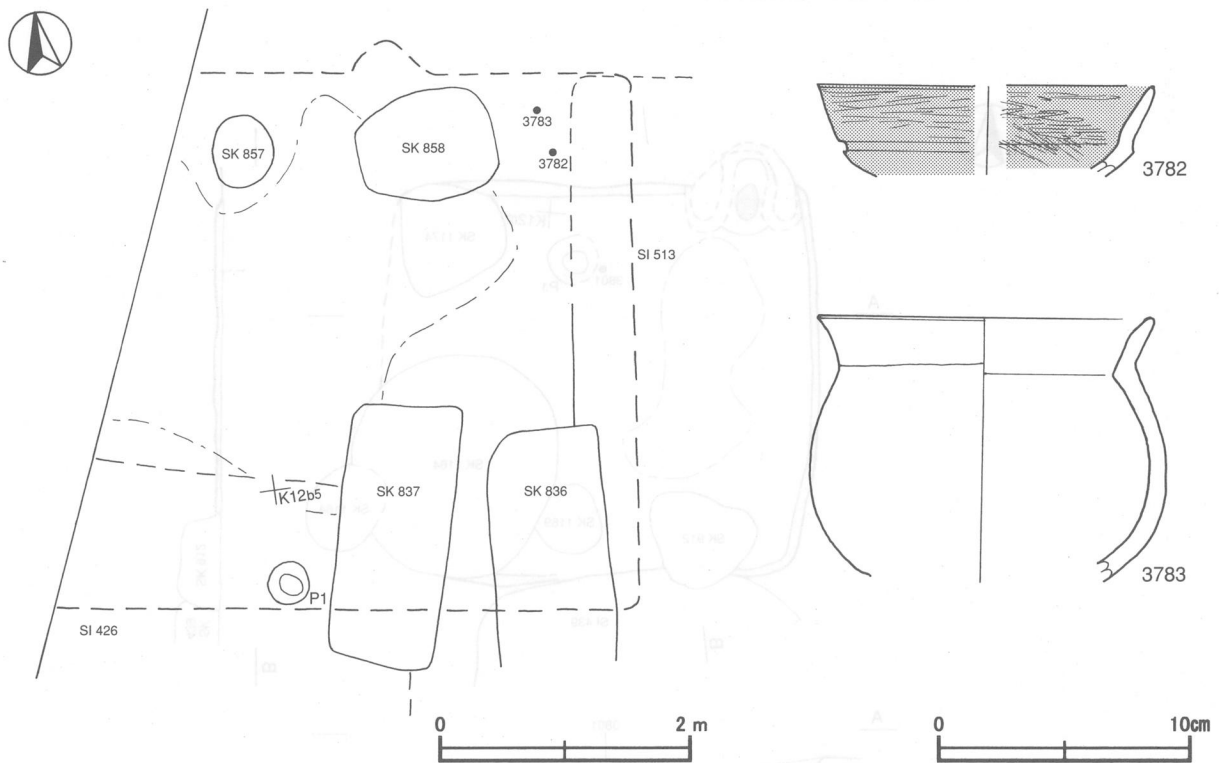
竈 大半が削片されているため詳細は不明であるが、北壁の中央部に構築されていたと推測され、火床部と思われる浅い皿状の掘り込みが認められたが、焼き締まっていたりはしない。

ピット 1か所。深さ約12cmで、南壁寄りに位置しているが、性格は不明である。

覆土 確認されていない。

遺物出土状況 土師器片55点(坏15, 甕39, 甌1), 須恵器片4点(坏3, 甕1), 礫片7点が主に全域の床面から出土している。大半が細片で、住居廃絶後間もなく、投棄あるいは混入したと推測され、伴出遺物は北東部床面から出土している3782・3783だけである。

所見 須恵器片を含め、出土した遺物の大半は、後世の攪乱により混入したと考えられ、伴出遺物は北東部から出土した土師器坏と小形甕の2点だけであるが、これらは住居廃絶時にまとめて遺棄されたと推測される。また、本跡は同時期の土器が出土した第412号住居跡と住居の形態が近似しており、時期は6世紀前葉と推測される。



第333図 第430号住居跡・出土遺物実測図

第430号住居跡出土遺物観察表 (第333図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3782	土師器	坏	-	(2.9)	-	雲母・石英	にぶい赤褐	普通	体部内・外面ヘラ磨き	北東部床面	10%
3783	土師器	小形甕	13.1	(10.4)	-	長石	赤褐	普通	体部内・外面ナデ	北東部床面	30%

第438号住居跡 (第334・335図)

**位置** 調査区南部のK12f1区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第439号住居、第912・1174・1164・1165・1169号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 南北軸は約3.2mで、東壁部分が土坑に掘り込まれており、東西軸は約3.5mだけが確認できた。N-2°-Eを主軸とする方形と推測される。壁高は約6cmで、外傾して立ち上がる。

**床** 遺存している部分はほぼ平坦で、竈の手前に硬化面の広がりが見られる。

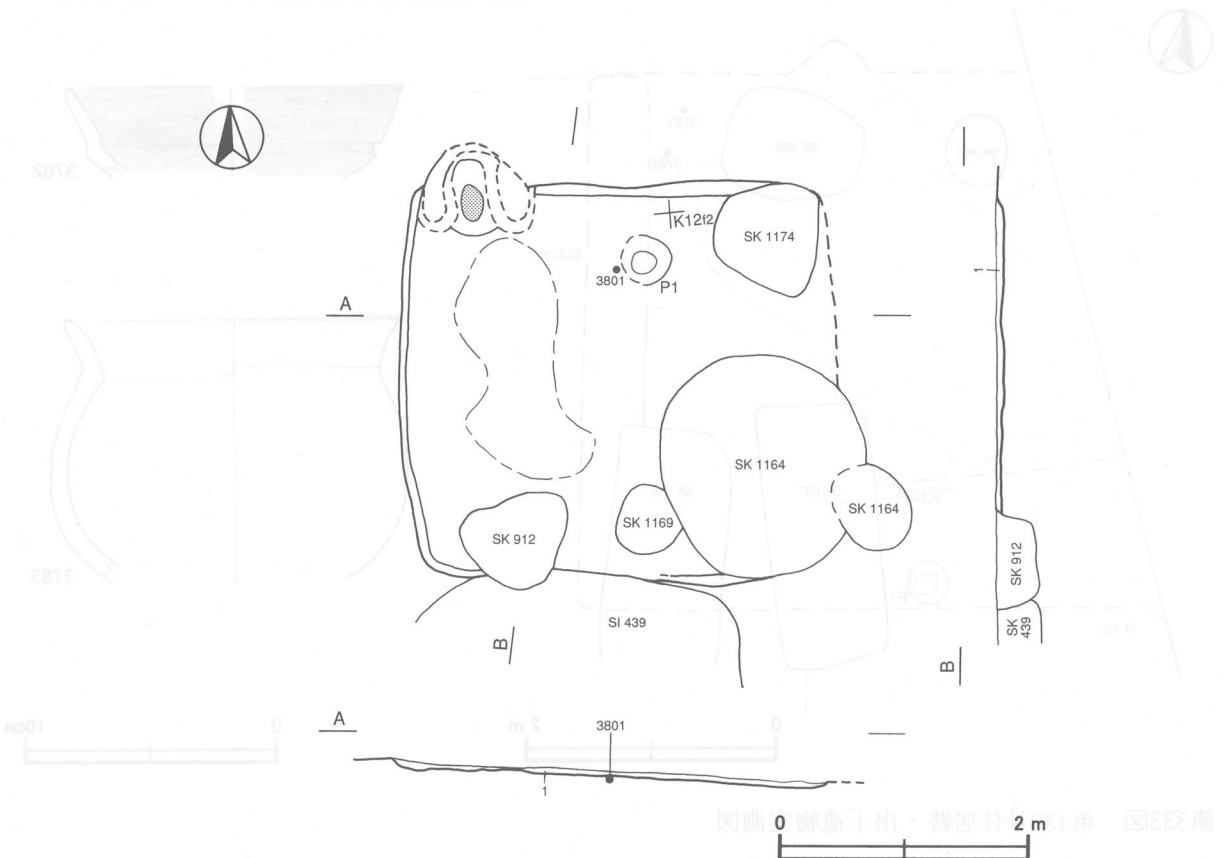
**竈** 北西コーナー部に砂質粘土で構築されている。また、後世の攪乱を受けているため、焚口部から煙道部までの長さや壁外への掘り込み等については不明であるが、袖部幅は約90cmである。袖部も遺存状態が悪く、壁面に貼り付けられた砂質粘土が痕跡として残っているだけである。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられているが、焼き締まった感じはない。

**ピット** 1か所。北壁寄りの中央部に位置しているが、性格は不明である。

**覆土** 覆土が浅く1層のみの検出であるため、堆積状況は不明である。

土層解説

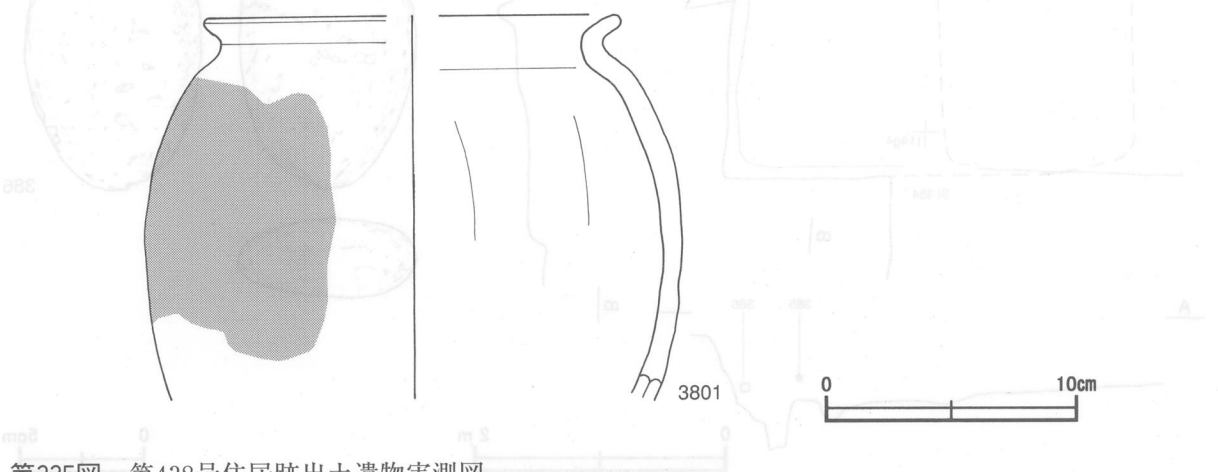
1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子、炭化粒子微量



第334図 第438号住居跡実測図

**遺物出土状況** 土師器片108点（坏54，高台付坏4，甕49，甗1），須恵器片4点（坏1，甕3），瓦1点，鉄製品1点（不明），鉄滓2点，礫片1点が中央部と北壁付近の床面，および覆土中から出土している。大半が細片であり，完形に近い状態で検出された遺物はほとんどなく，投棄あるいは埋土中に混入していたものと考えられる。3801は中央部やや北壁寄りの床面から出土している。

**所見** 伴う遺物が少なく明確ではないが，坏や甕の形状から，時期は古墳時代後期と推測される。



第335図 第438号住居跡出土遺物実測図

第438号住居跡出土遺物観察表（第335図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3801	土師器	甕	[16.4]	(15.3)	-	長石・石英	暗褐	普通	口縁部横ナデ，体部ヘラナデ	中央部床面	10%，外面煤付着

第441号住居跡（第336図）

**位置** 調査区中央部東寄りのI14f4区に位置し，平坦部に立地している。

**重複関係** 第354・363号住居跡を掘り込み，第296・359号住居に掘り込まれている。

**規模と形状** 西部を第296号住居に掘り込まれているため，遺存している東・南壁の一部から，N-0°を主軸とする一辺約3.0mの方形と推定される。確認された壁高は15~20cmで，外傾して立ち上がっている。

**竈** 遺存状況が悪く，確認できなかった。

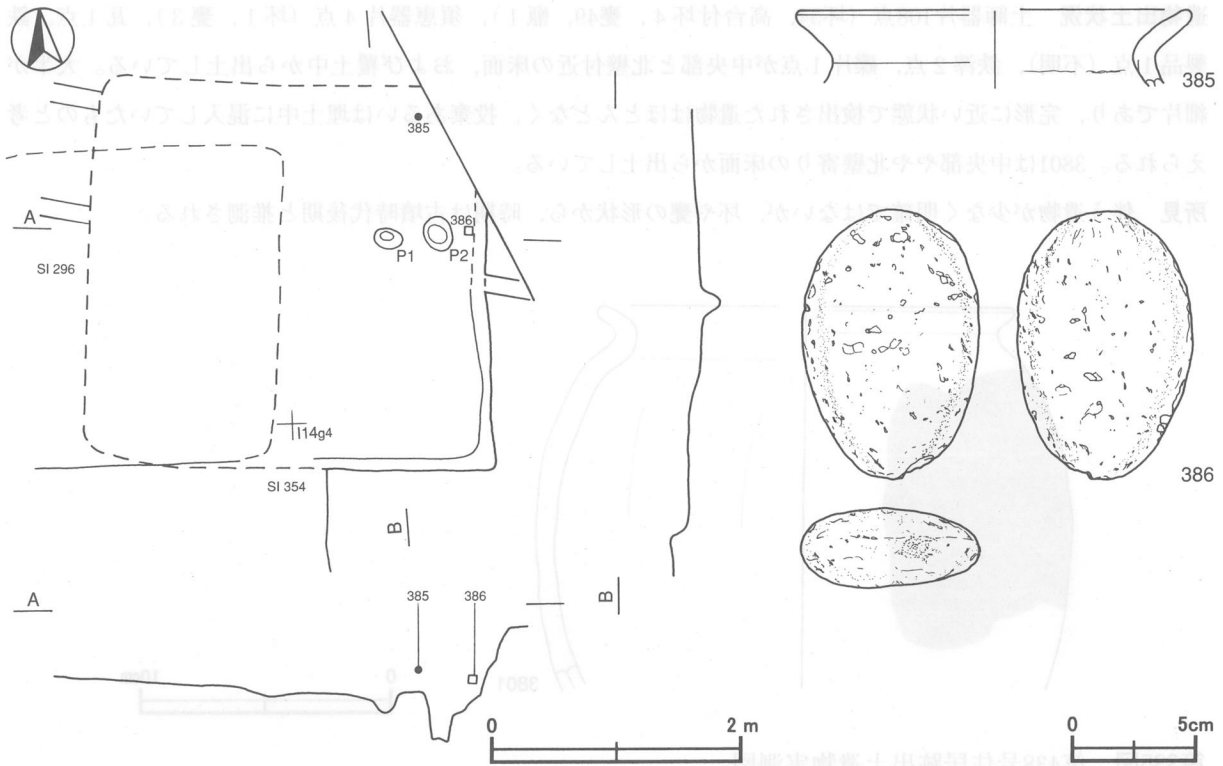
**床** 東部がやや深く掘り込まれており，硬化面や壁溝は認められない。

**ピット** 2か所。P1・P2の深さはそれぞれ18cm・34cmで，性格は不明である。

**覆土** 遺存状態が悪く，確認されなかった。

**遺物出土状況** 出土遺物は少なく，土師器片15点（坏2，甕13），石器1点（敲石）が出土しただけである。385は北東部の覆土中層，386は東壁際の覆土下層から出土しており，386の表面には敲き痕が多数確認できる。

**所見** 本跡は出土遺物も少なく時期決定が困難であるが，5世紀中葉と比定される第354号住居跡を掘り込んでいることから，時期は6世紀代と考えられる。



第336図 第441号住居跡・出土遺物実測図

第441号住居跡出土遺物観察表 (第336図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
385	土師器	甕	[15.6]	(3.1)	-	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ	北東部中層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
386	敲石	10.7	7.1	3.1	318	安山岩	下端に敲打痕	東壁際下層	

■ 第443号住居跡 (第337・338図)

**位置** 調査区中央部のJ13a5区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第386・387号住居，第12号柵列に掘り込まれている。

**規模と形状** 床面がほぼ露出された状態で検出されたため，住居全体の形状は把握できないが，遺存する壁から，N-9°-Wを主軸とする一辺約5.4mの方形と推測される。

**床** ほぼ平坦で，硬化面や壁溝は認められない。

**炉** 遺存していない。

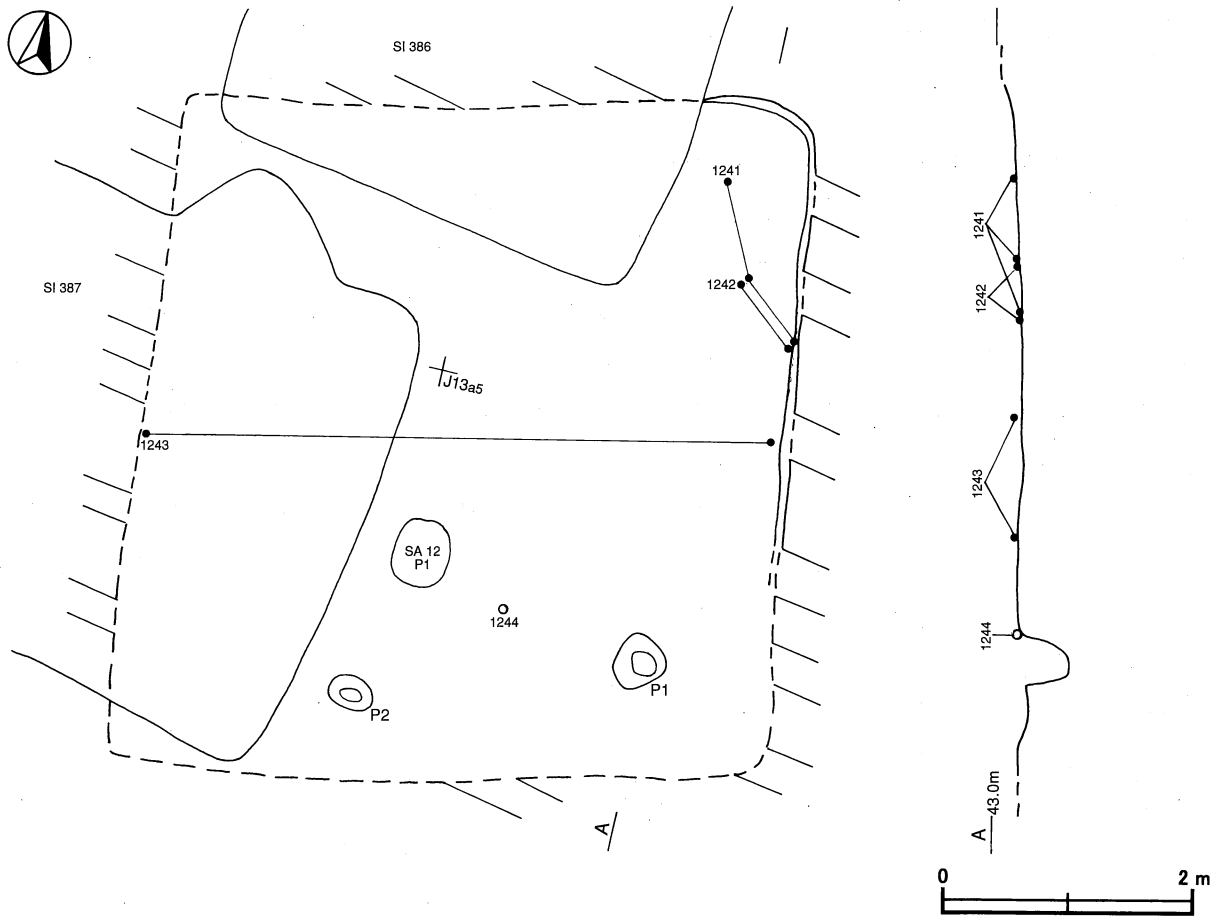
**ピット** 2か所。主柱穴はP1が相当し，深さは45cmである。P2は深さ58cmで，出入り口施設に伴うピットと考えられるが，西側へ寄りすぎており判断し難い。

**覆土** 遺存していない。



**遺物出土状況** 土師器片420点（坏120，鉢1，高坏6，器台2，埴19，甕272），須恵器片7点（坏3，蓋1，甕3），土製品1点（土玉），鉄滓2点，礫片20点が東部の下層や床面を中心に出土している。1241・1242は北東部の床面，1243は西部の覆土下層と東壁際の覆土中層から出土した破片が接合されたものであり，1243は大形のものとして推測される。また，1244は中央部床面から出土している。これらは住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。なお，須恵器片は後世の耕作などにより混入したものと思われる。

**所見** 本跡の時期は，出土土器の形状から4世紀後葉と考えられ，北へ約15mに位置する第382号住居跡と同一の集落を構成していたことが想定される。



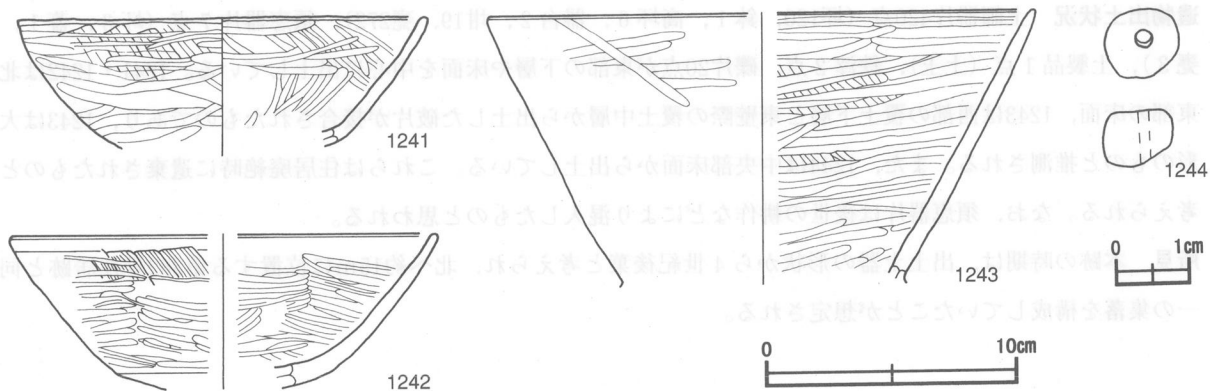
第337図 第443号住居跡実測図

第443号住居跡出土遺物観察表（第338図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1241	土師器	高坏	16.2	(5.1)	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	ハケ目調整痕を残す，内外面ヘラ磨き	北東部床面	30%
1242	土師器	高坏	[16.8]	(6.1)	-	長石・石英	明赤褐	普通	ハケ目調整痕を残す，内外面ヘラ磨き	北東部床面	35%
1243	土師器	埴	[21.8]	(10.8)	-	雲母・長石・石英	明褐	普通	ハケ目調整痕を残す，内外面ヘラ磨き	東壁際中層 西部下層	30%

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
1244	土玉	1.0	0.7	0.1	0.8	長石・石英	ナデ，片面穿孔	中央部床面	



第338図 第443号住居跡出土遺物実測図

第444号住居跡 (第339図)

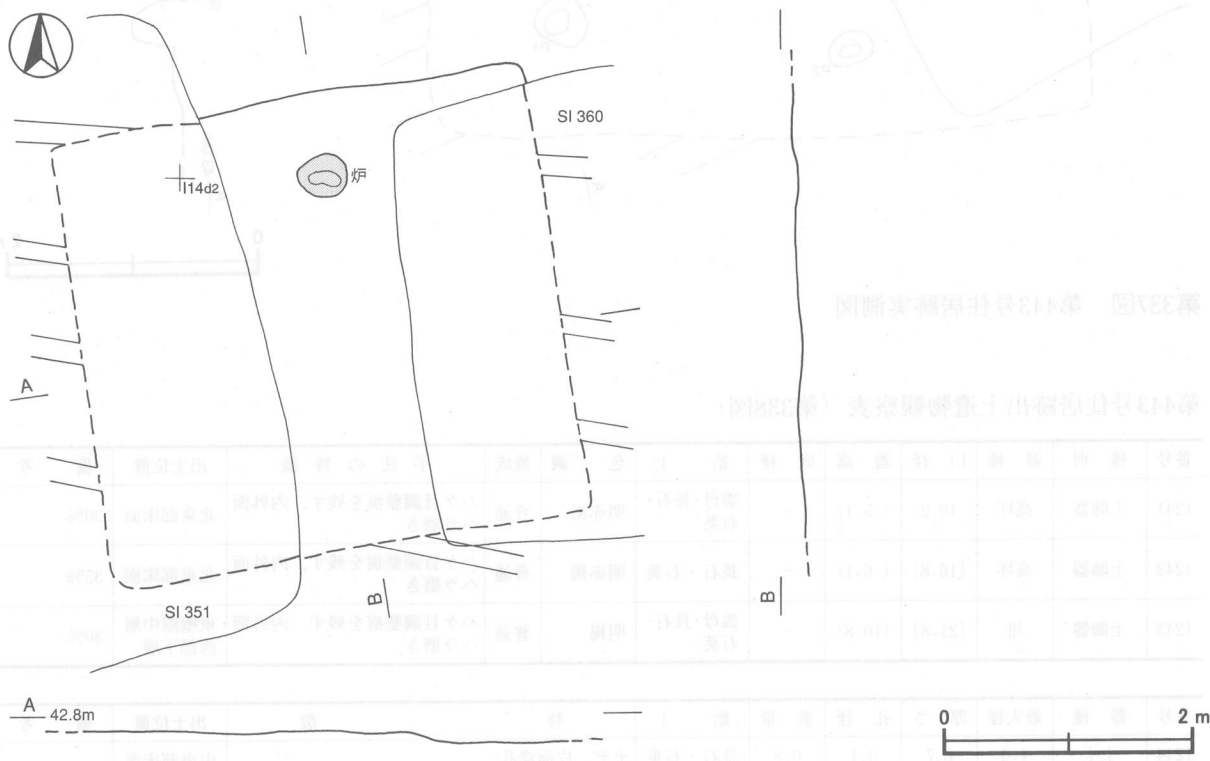
位置 調査区中央部東寄り I 14d2 区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第351・360号住居に掘り込まれている。

規模と形状 床面がほぼ露出された状態で検出され、東部と西部を第360・351号住居跡にそれぞれ掘り込まれているため、南北軸3.6m、東西軸は2.6mだけが確認できた。遺存する炉や南・北壁から $N-9^{\circ}-W$ を主軸とする方形と推測される。壁高は床面がほぼ露出された状態で検出されたため、不鮮明である。

床 遺存部はほぼ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。

炉 北部に付設され、径約40cmの円形を呈する。炉床は6cmほど掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化している。



第339図 第444号住居跡実測図

ピット 検出されなかった。

覆土 遺存していない。

遺物出土状況 出土していない。

所見 本跡は床面がほぼ露出された状態で検出され、また大部分を第351・360号住居に掘り込まれているため住居全体の形状は把握できない。しかし、6世紀後葉と比定される第351号住居や6世紀代と比定される第360号住居に掘り込まれていることや炉を有する住居形態から、時期は古墳時代で4世紀から5世紀代と考えられる。

### 第447号住居跡 (第340図)

位置 調査区南部西寄りのK11g0区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第449号住居、第968・969・1107号土坑などに掘り込まれている。

規模と形状 南北軸は約3.6mで、西部が第449号住居跡に掘り込まれているため、東西軸は約3.7mだけが確認できた。遺存する壁から、N-25°-Wを主軸とする方形と推測される。壁高は5cmと低い。

床 ほぼ平坦で、中央部から西部にかけてがよく踏み固められていると考えられる。壁溝は認められない。

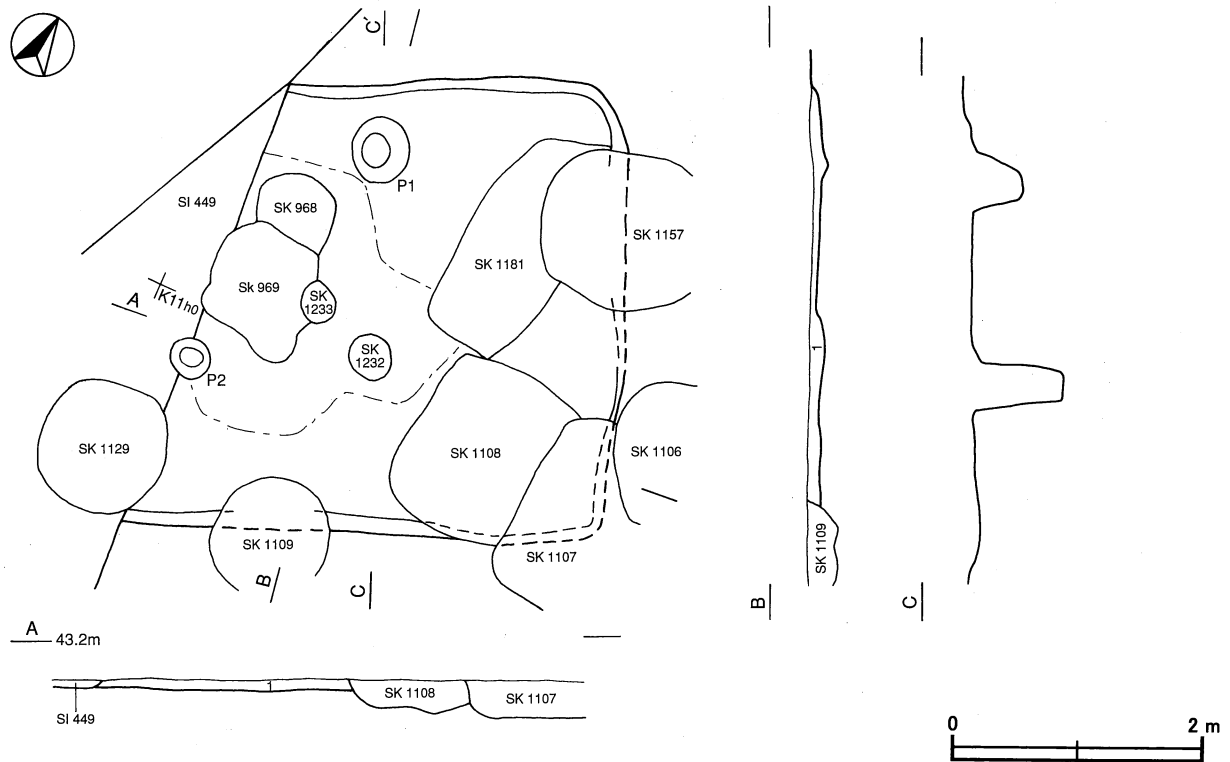
竈・炉 確認されていない。

ピット 2か所。P1・P2の深さは40cm・30cmで、性格は不明である。

覆土 1層のみ確認されたが、堆積状況は判然としない。

#### 土層解説

- 1 極暗褐色 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量



第340図 第447号住居跡実測図

**遺物出土状況** 土師器片300点(坏153, 高台付坏8, 高坏1, 甕138), 須恵器片8点(坏6, 高台付坏1, 甕1), 灰釉陶器片1点(皿), 常滑陶器片1点, 鉄製品1点(不明), 礫片15点が全域から出土している。しかし, 細片のため図示できたものはない。高台付坏片や灰釉陶器片などは, 破断面が摩滅しているため後世の耕作による攪乱で混入したものである。

**所見** 時期は, 7世紀前葉と比定される第449号住居跡に掘り込まれていることや, 出土した土師器片の形状から, 6世紀後葉と考えられる。

**第448号住居跡 (第341図)**

**位置** 調査区中央部の I 13e9 区に位置し, 平坦部に立地している。

**重複関係** 第358号住居跡を掘り込み, 第352・355号住居, 第9・16・24号掘立柱建物, 第795号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

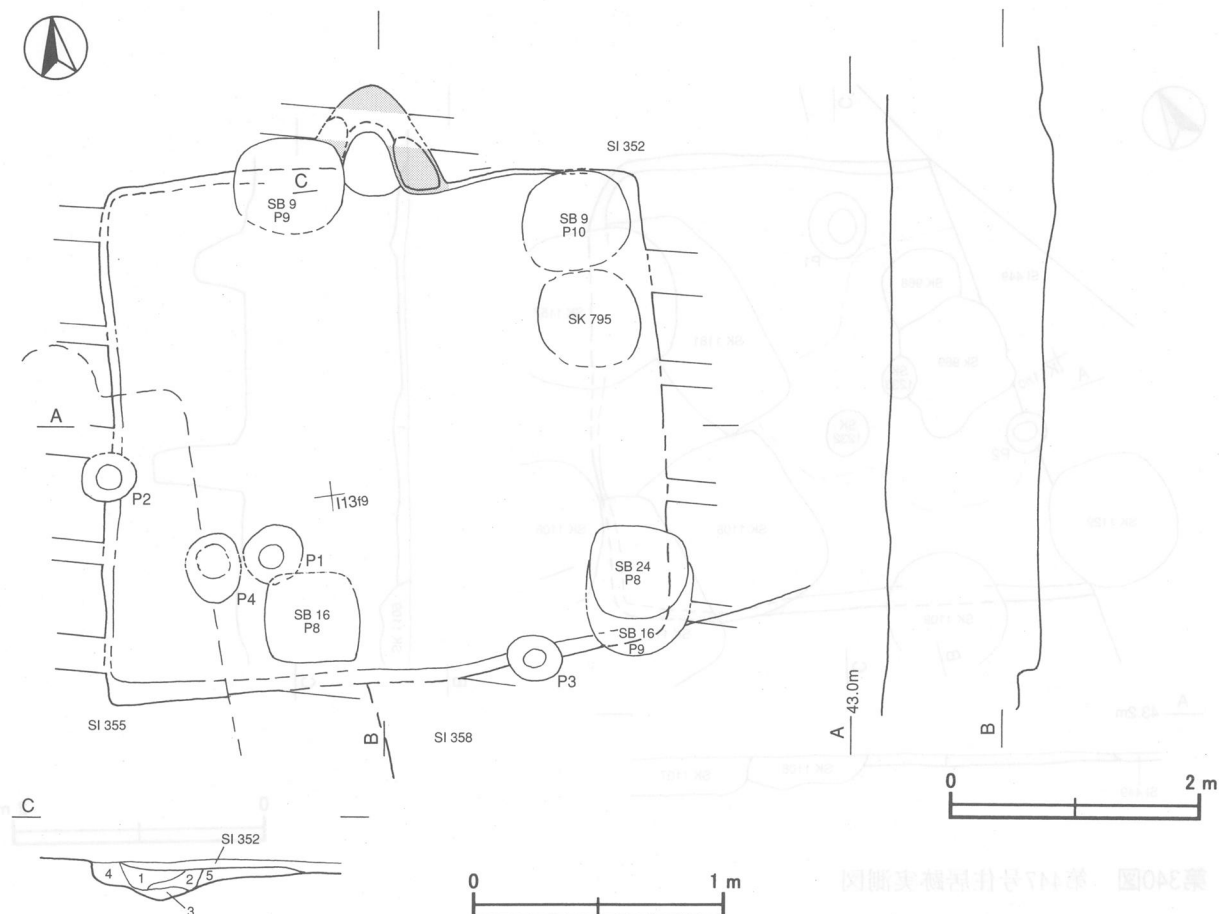
**規模と形状** 第352・355号住居に掘り込まれているが, 遺存する竈の位置や西壁から  $N-8^{\circ}-E$  を主軸とする一辺約4.3mの方形と推測される。確認された南壁高は2~13cmで, 垂直に立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で, 硬化面や壁溝は認められない。

**竈** 北壁中央部に付設されているが, 袖の一部が検出され, 遺存状況が悪い。火床部は10cmほど皿状に掘りくぼめられている。

**竈土層解説**

- 1 暗褐色 粘土粒子中量, ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 粘土粒子微量



第341図 第448号住居跡実測図

- 3 にぶい黄褐色 粘土粒子中量, ロームブロック・焼土ブロック少量
- 4 暗褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・粘土粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

ピット 4か所。P1の深さは75cmで、南西部の支柱穴の可能性が高いが、その他は検出されていない。P2～P4は深さ20～40cmで性格不明である。

覆土 遺存していない。

遺物出土状況 土師器片151点(坏24, 高坏5, 甕122), 礫片4点が出土している。ほとんどが細片のため図示できたものではなく、住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと思われる。

所見 時期は、7世紀前葉と比定される第352号住居跡に掘り込まれていることや、6世紀前葉と比定される第358号住居跡を掘り込んでいることから、6世紀中葉から後葉と考えられる。

### 第449号住居跡 (第342図)

位置 調査区南部西寄りのK11h9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第447号住居跡を掘り込み、第969・1129号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 大部分が調査区域外に延びているため、南北軸は約4.3m、東西軸は約2.3mだけが確認された。遺存する壁からN-0°を主軸とする方形または長方形と推測される。壁高は約10cmと低い。

床 ほぼ平坦で、壁溝は認められない。

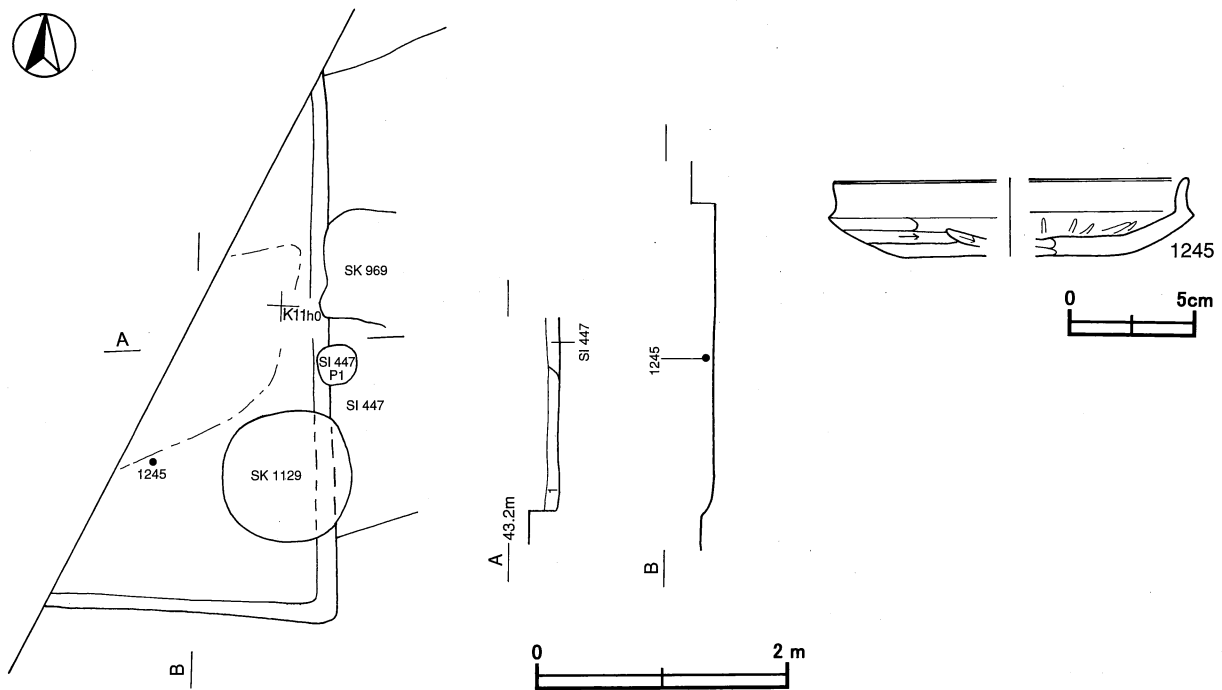
竈 調査区域外に付設されていると考えられる。

ピット 調査区域外に位置すると考えられる。

覆土 1層のみ確認されたが、堆積状況は不明である。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量



第342図 第449号住居跡・出土遺物実測図

**遺物出土状況** 土師器片70点（坏45，高台付坏5，甕20），礫片1点が中央部の下層を中心に出土している。1245は南部の覆土下層から出土し，破断面が摩滅しているため，住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと考えられる。また，高台付坏片は，耕作による攪乱などによって混入したものである。

**所見** 本跡の大部分が調査区域外に延びているため，住居全体の形状を把握することはできなかった。出土した土師器坏片は7世紀前葉であり，本跡の時期は7世紀前葉かそれ以前に構築されたものと考えられる。

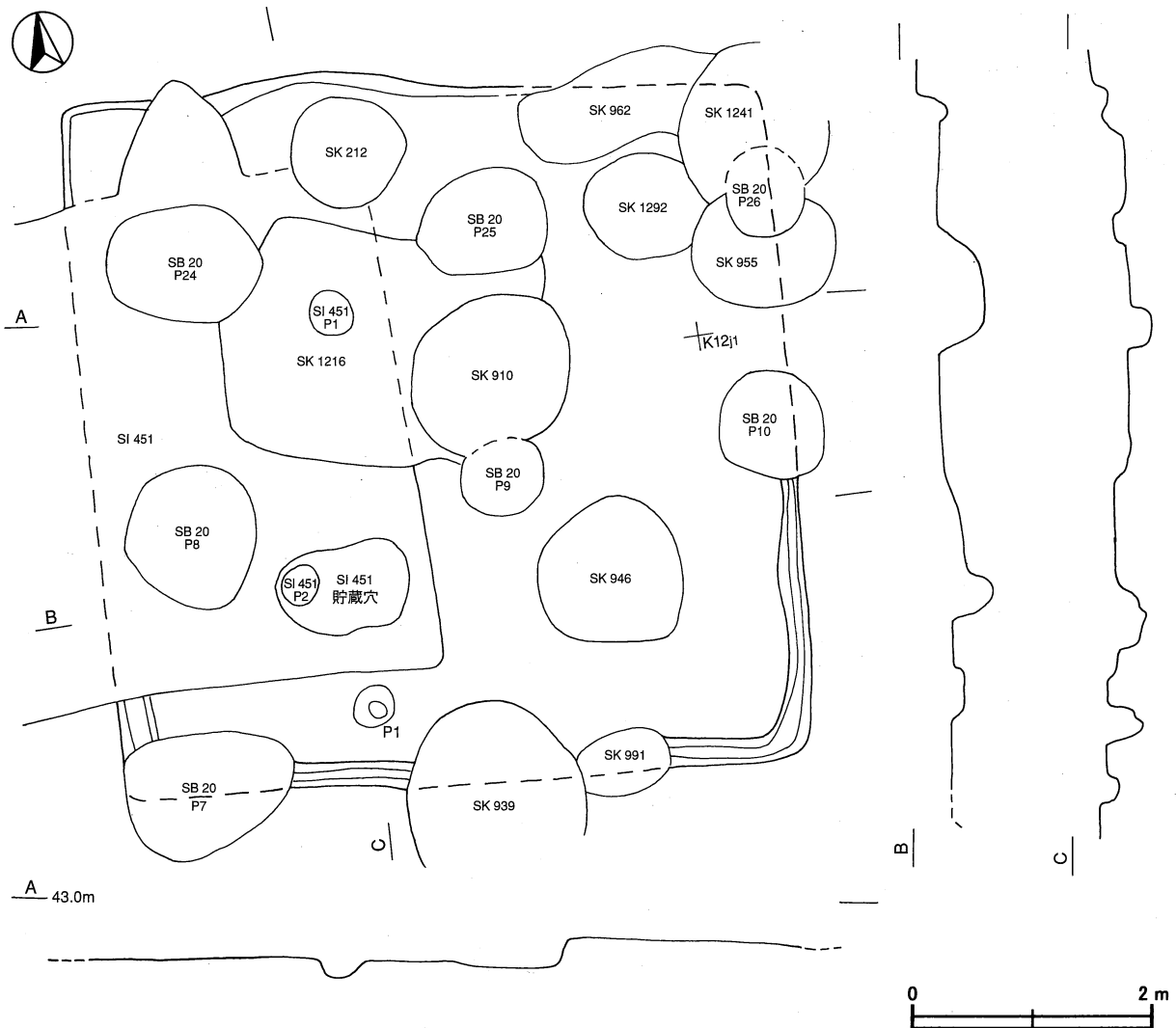
第449号住居跡出土遺物観察表（第342図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1245	土師器	坏	[14.0]	3.1	-	雲母・長石	にぶい黄褐	普通	内面荒れ，口縁部横ナデ	南部下層	20%

**第452号住居跡（第343図）**

**位置** 調査区南部西寄りのK11j0区に位置し，平坦部に立地している。

**重複関係** 第451号住居，第20号掘立柱建物，第910・939・946号土坑などに掘り込まれている。



第343図 第452号住居跡実測図

**規模と形状** 北東部や西部は壁の立ち上がりが確認できなかったが、遺存する壁の状況から、N-7°-Eを主軸とする南北軸約6.0m、東西軸5.7mの方形と推測される。確認された南東部や南部の壁高は10~20cmで、垂直に立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、硬化面は検出されなかった。壁溝は一部の壁際で検出された。

**炉・竈** 掘立柱建物や土坑に掘り込まれており、遺存していない。

**ピット** 1か所。深さは30cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられるが、西側に寄りすぎており判断し難い。

**覆土** 遺存状況が悪く、確認できなかった。

**遺物出土状況** 出土遺物は少なく、土師器片3点(坏1, 甕2)が出土しただけである。

**所見** 本跡は出土遺物も少なく、掘立柱建物や土坑に掘り込まれているために、住居の様相を把握することはできず、時期の判断は困難であるが、一辺6.0m前後の住居形態から、時期は古墳時代後期以前と推測される。

#### 第454号住居跡 (第344図)

**位置** 調査区中央部東寄りのJ13f8区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第403号住居に掘り込まれている。

**規模と形状** 一辺約5.0mの方形で、主軸方向はN-21°-Wである。確認された壁高は10cmで、垂直に立ち上がると考えられる。

**床** ほぼ平坦で、中央部や西部のやや南寄り的一部分に硬化面が検出された。壁溝は認められない。

**炉** 遺存状態が悪く、炉床の範囲のみ確認された。

**ピット** 4か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは40~45cmである。

**貯蔵穴** 南西コーナー部に付設され、平面形は長径110cm、短径75cmの楕円形を呈している。深さは50cmを測り、底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

##### 貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量

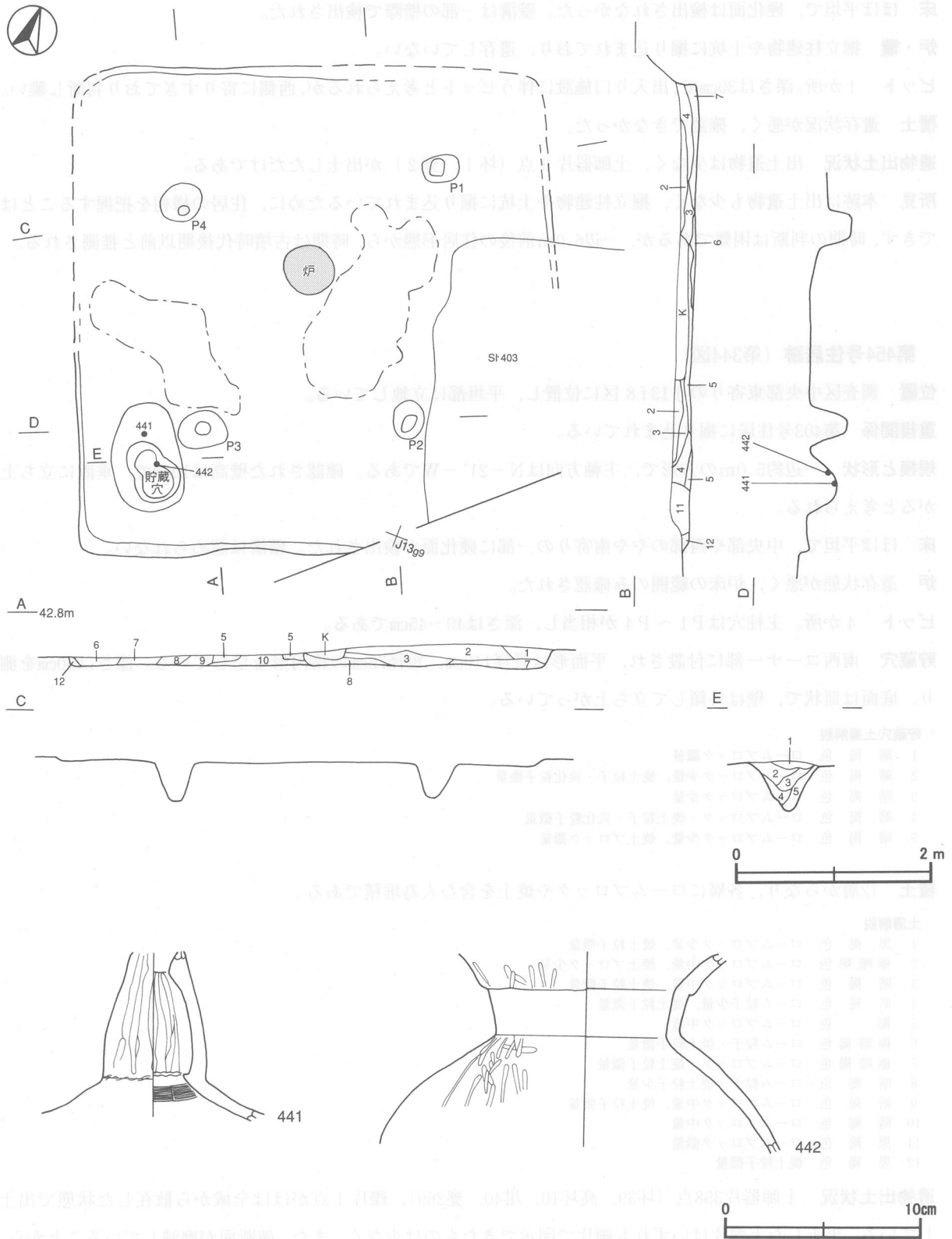
**覆土** 12層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

##### 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック中量
- 6 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 7 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 8 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 9 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
- 10 暗褐色 ロームブロック中量
- 11 黒褐色 ロームブロック微量
- 12 黒褐色 焼土粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片358点(坏39, 高坏10, 埴40, 甕269), 礫片1点がほぼ全域から散在した状態で出土している。出土した土器片はいずれも細片で図示できたものは少なく、また、破断面が摩滅していることから、本跡廃絶後の埋め戻しの段階で埋土とともに混入したものと考えられる。441・442は貯蔵穴から出土し、本跡に伴うものと考えられるが、接合できる破片は住居内からは出土していない。

所見一時期は、貯蔵穴から出土した土器の形状から5世紀中葉と推測され、炉を中央部、貯蔵穴を南西コーナー部に付設する当該期の住居形態の特徴を顕著に残す好例といえる。



第344図 第454号住居跡・出土遺物実測図



第454号住居跡出土遺物観察表（第344図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
441	土師器	高坏	-	(8.4)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	脚部外面へラ磨き，内面ハケ目調整	貯蔵穴底面	30%
442	土師器	壺	-	(9.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面・口縁部ナデ後へラ磨き	貯蔵穴下層	10%

第458号住居跡（第345図）

位置 調査区南部のL12a2区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係 第948・1228・1240土坑を掘り込み，第20号掘立柱建物，第1160・1231・1280・1281号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.2m，短軸5.8mの方形で，主軸方向はN-9°-Eである。壁高は5～10cmで，外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で，竈の手前から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は周回している。

竈 北壁中央部のやや東寄りに付設され，規模は焚き口から煙道部まで120cm，袖部幅95cm，壁外への掘り込みは50cmである。火床部は10cmほど皿状に掘りくぼめられており，火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 粘土粒子中量，焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 にぶい赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量，ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量，炭化粒子微量
- 5 黒褐色 粘土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量，焼土ブロック微量

ピット 9か所。主柱穴はP1～P4が相当し，深さは40～55cmである。P5～P9の深さは10～50cmであるが，P5は，南壁際に位置しており，出入り口施設に伴うピットの可能性が考えられる。P6～P9の性格は不明である。

覆土 4層からなり，ロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

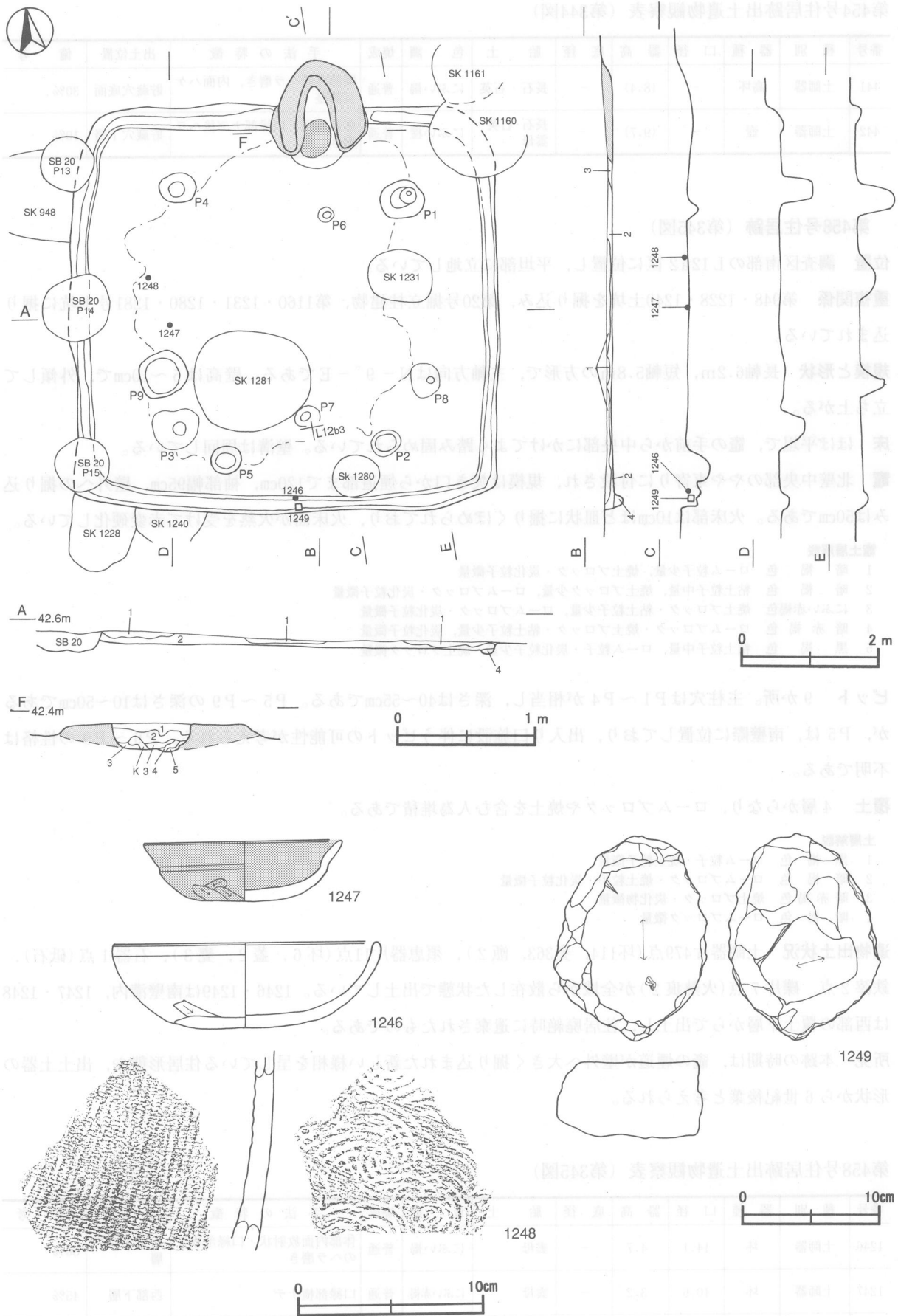
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物微量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片479点(坏114，甕363，甌2)，須恵器片11点(坏6，蓋2，甕3)，石器1点(砥石)，鉄滓2点，礫片7点(火熱痕2)が全域から散在した状態で出土している。1246・1249は南壁溝内，1247・1248は西部の覆土下層からで出土し，住居廃絶時に遺棄されたものである。

所見 本跡の時期は，竈の煙道が壁外へ大きく掘り込まれた新しい様相を呈している住居形態や，出土土器の形状から6世紀後葉と考えられる。

第458号住居跡出土遺物観察表（第345図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1246	土師器	坏	14.1	4.7	-	雲母	にぶい褐	普通	体部内面放射状・口縁部横位のへラ磨き	南壁溝内下層	80%
1247	土師器	坏	10.6	3.2	-	雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ	西部下層	45%
1248	須恵器	甕	-	(10.8)	-	砂粒	灰	普通	外面擬格子叩き，内面同心円状の当て具痕	西部下層	5%



第345図 第458号住居跡・出土遺物実測図

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1249	砥石	(14.4)	(10.8)	(5.5)	(1140.0)	砂岩	砥面2面, その他は破断面	南壁溝内	

#### 第459号住居跡 (第346図)

**位置** 調査区中央部中央のJ13c7区に位置し, 平坦部に立地している。

**重複関係** 第392号住居に掘り込まれ, 耕作による攪乱も受けている。

**規模と形状** 床面がほぼ露出した状態で検出され, 壁の立ち上がりは確認されなかったが, 炉の位置や暗褐色を呈した床面の広がりから, N-15°-Wを主軸とする南北軸約3.5m, 東西軸約3.0mの長方形と推定される。

**床** ほぼ平坦で, 炉の周辺に硬化面が確認されている。壁溝は認められない。

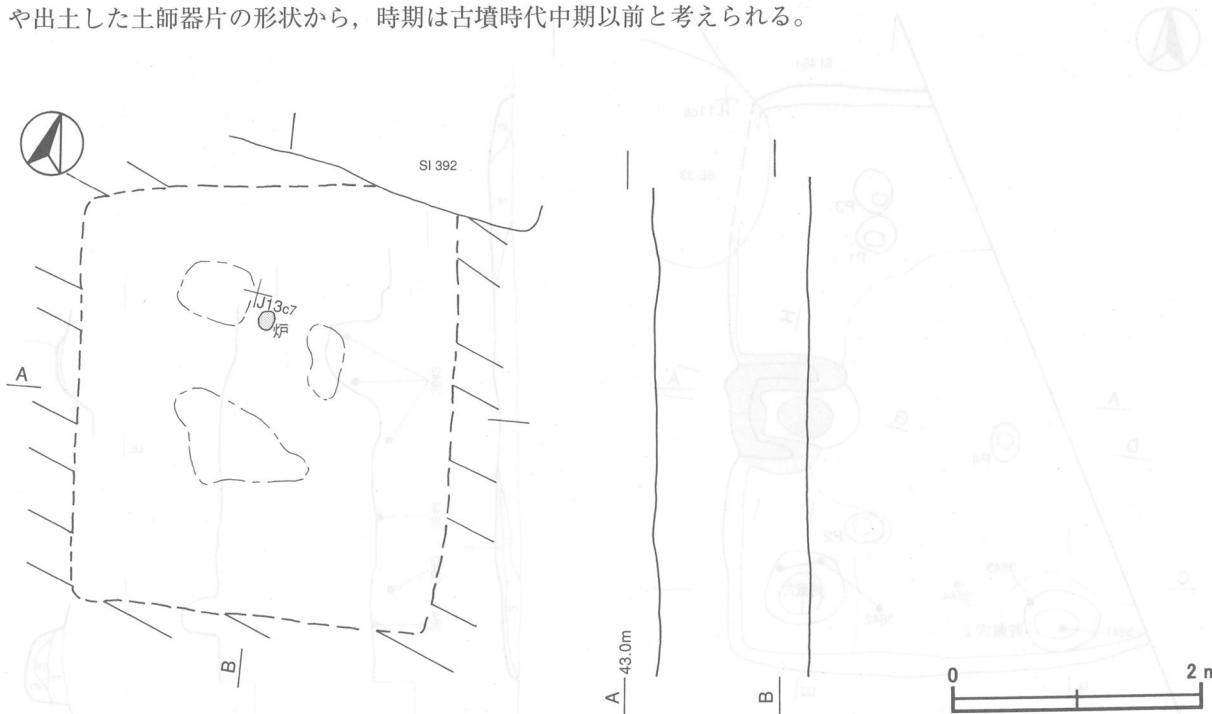
**炉** 中央部やや北寄りに付設されていると考えられるが, 遺存状態が悪く, 炉床面の一部が確認されただけである。

**ピット** 検出されなかった。

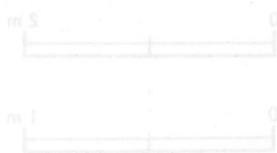
**覆土** 確認されなかった。

**遺物出土状況** 出土遺物は少なく, 土師器片16点(坏2, 甕14)が出土しただけである。

**所見** 壁の立ち上がりは確認されなかったため, 住居全体の形状は確認できなかったが, 炉を有する住居形態や出土した土師器片の形状から, 時期は古墳時代中期以前と考えられる。



第346図 第459号住居跡実測図



第462号住居跡 (第347・348図)

位置 調査区南部西寄りのL11c7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第461号住居跡を掘り込み、第33号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 西部が調査区域外に延びるため、南北軸は4.6m、東西軸は3.4mだけが確認された。遺存する壁や竈の位置から、N-93°-E主軸方向とする方形または長方形と推測される。壁高は8~14cmで、外傾して立ち上がっている。

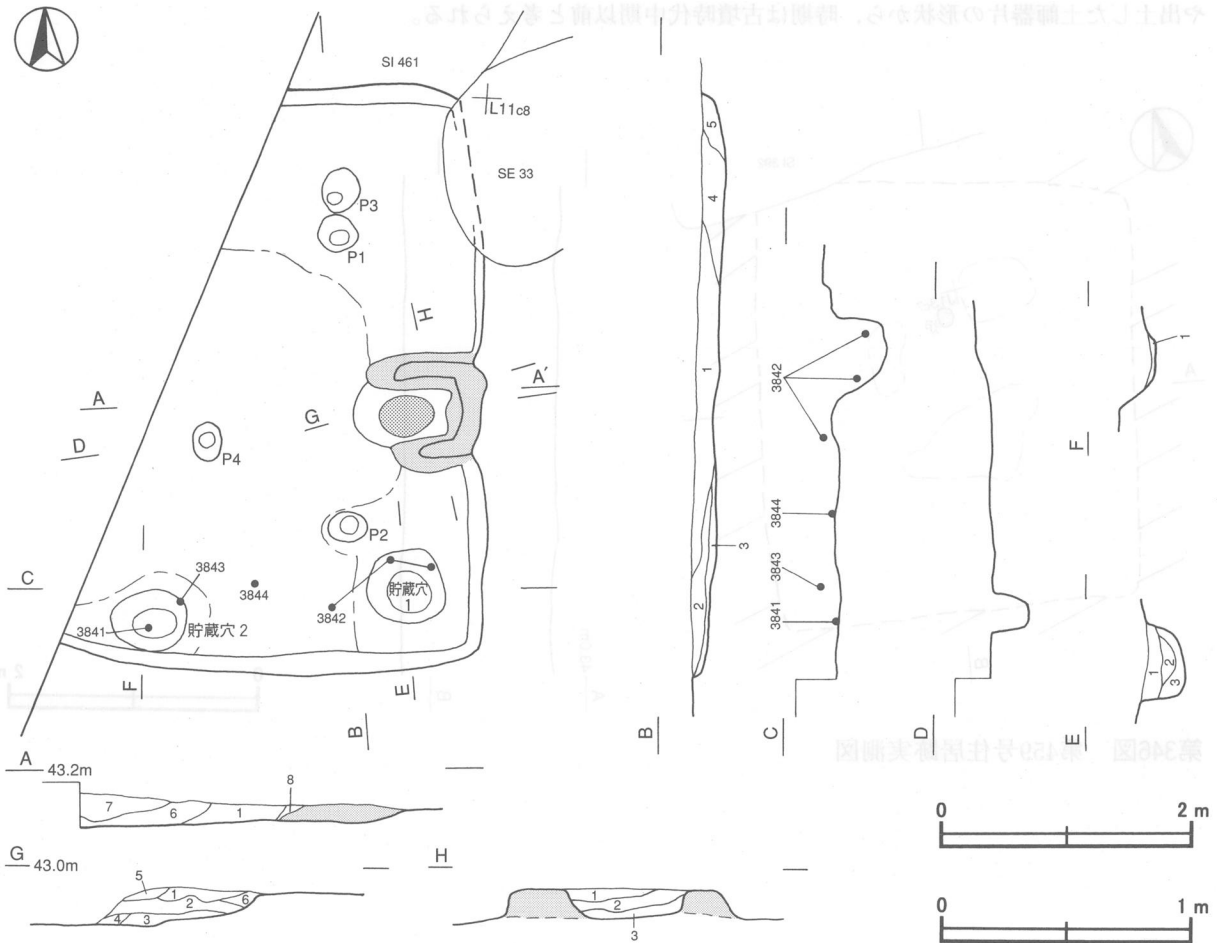
床 ほぼ平坦で、中央部から南部にかけてよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈 東壁中央部に付設され、規模は焚き口から煙道部まで100cm、袖部幅95cmで、壁外への掘り込みはほとんど見られない。火床部は床面と同じ高さの平坦面を使用し、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、砂質粘土微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土少量
- 3 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 4 明赤褐色 ローム粒子・炭化粒子中量、焼土粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量

ピット 4か所。主柱穴はP1・P2が相当し、深さは62cm・64cmである。P3・P4の深さは14cm・30cmで、性格不明である。



第347図 第462号住居跡実測図

**貯蔵穴1** 南東コーナー部に付設され、平面形は径約60cmの円形を呈している。深さは30cmを測り、底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

**貯蔵穴1土層解説**

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

**貯蔵穴2** 南壁際の中央部に付設され、平面形は長径60cm、短径50cmの楕円形を呈している。深さは6cmと浅く、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

**貯蔵穴2土層解説**

- 1 極暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量

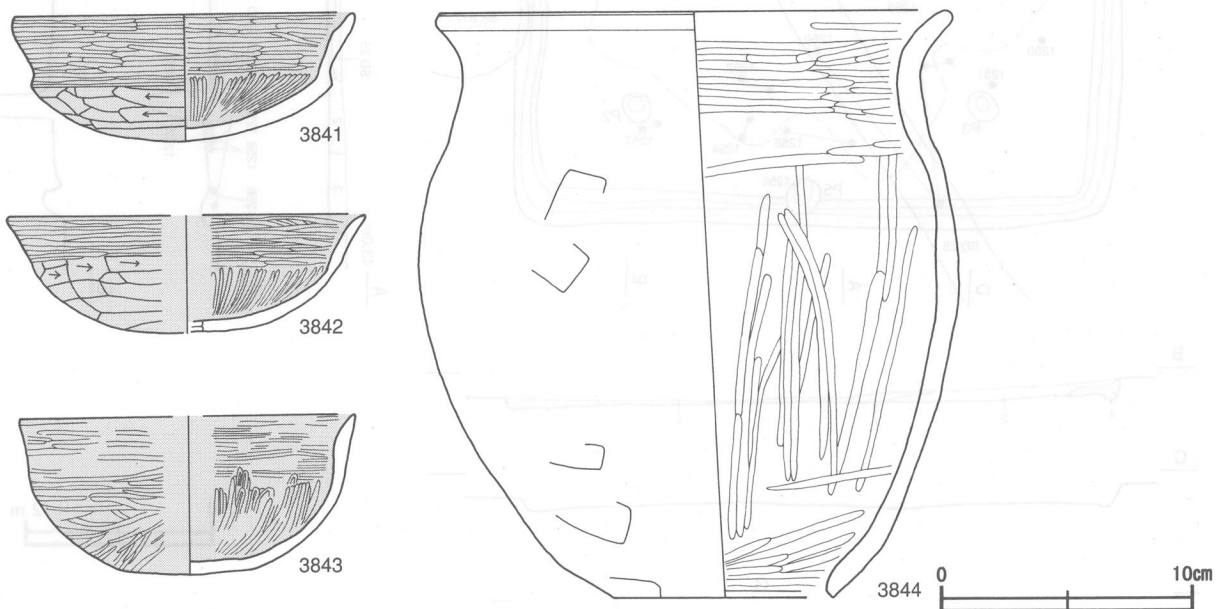
**覆土** 8層からなり、各層にロームブロックや粒子を含む、人為堆積である。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 7 極暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子、炭化粒子微量
- 8 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

**遺物出土状況** 土師器片187点（坏42，甕50，甗95），須恵器片3点（坏1，甕2），礫片8点が南部の床面や貯蔵穴を中心に出土している。3844は南部の床面，3842は貯蔵穴1の中層，3841・3843は貯蔵穴2の下層・上層から出土し，3842は南部の床面から出土した破片が接合されたものである。これらは，住居廃絶時に遺棄されたものである。

**所見** 本跡は西部が調査区域外に延びるため，住居全体の形状は把握できないが，竈を東壁中央やや南寄りに付設し，貯蔵穴を南東コーナー部に付設する住居形態と出土土器の形状から，時期は5世紀末から6世紀初頭と考えられる。



第348図 第462号住居跡出土遺物実測図

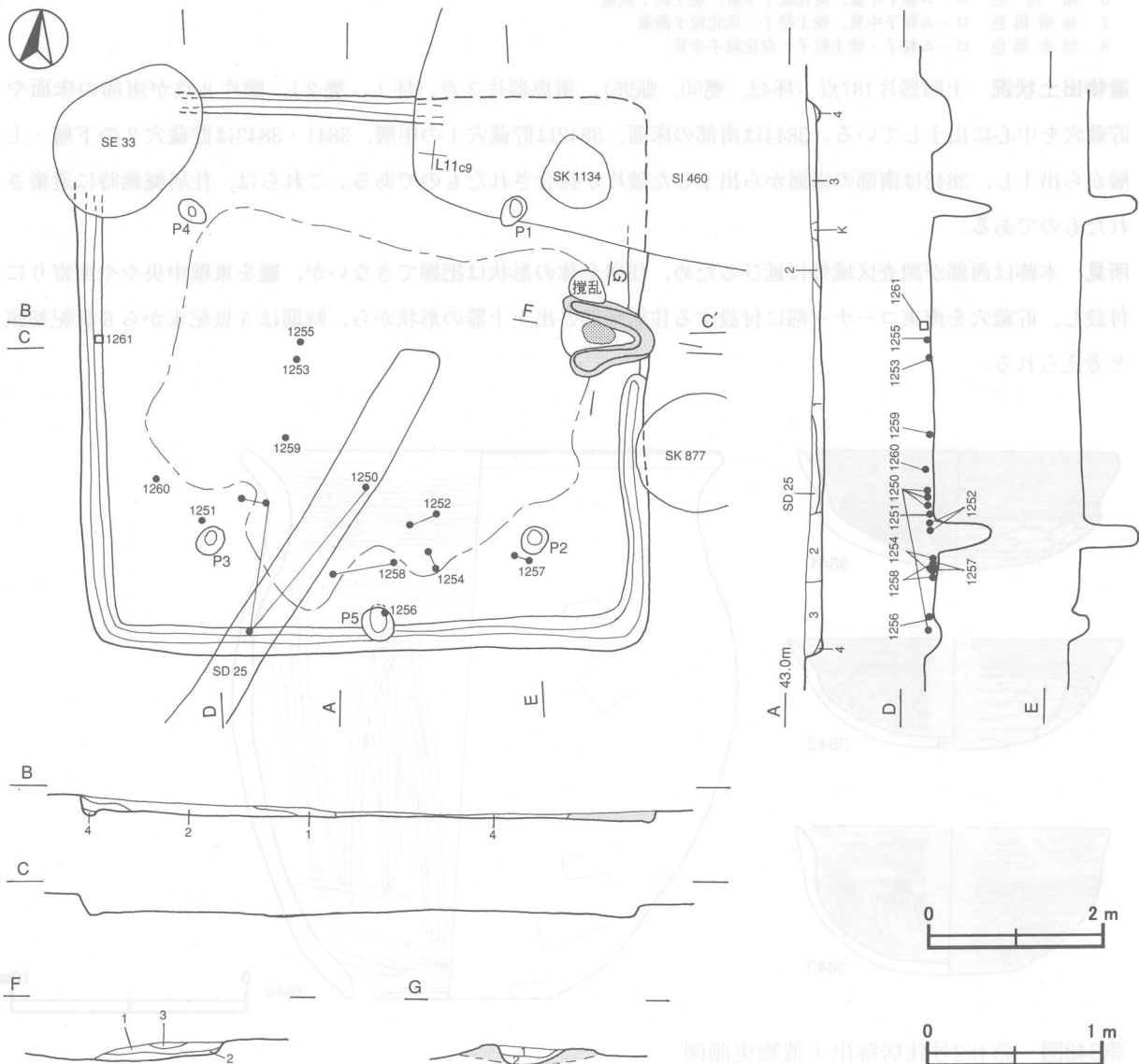
第462号住居跡出土遺物観察表 (第348図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3841	土師器	坏	13.6	5.0	-	砂粒	赤褐	普通	体部内面・口縁部横位のヘラ磨き	貯蔵穴2下層	90%, 赤彩 PL222
3842	土師器	坏	[14.2]	4.6	-	長石・赤色 粒子	赤	普通	体部内面・口縁部横位のヘラ磨き	貯蔵穴1中層南部床面	40%, 赤彩
3843	土師器	坏	[13.4]	6.2	-	砂粒	赤褐	普通	体部内・外面・口縁部横位のヘラ磨き	貯蔵穴2上層	30%, 赤彩
3844	土師器	甌	20.0	23.4	8.6	長石・石英	にぶい橙	普通	外面ヘラナデ, 内面ヘラ磨き	南部床面	60% PL223

第463号住居跡 (第349~351図)

位置 調査区南部のL11c8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第1135号土坑を掘り込み、第460号住居、第877・1134号土坑、第33号井戸、第25号溝にそれぞれ掘り込まれている。



第349図 第463号住居跡実測図

**規模と形状** 一辺が約6.4mの方形で、主軸方向はN-88°-Eである。壁高は16cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、竈の手前から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は周回している。

**竈** 東壁中央部に付設され、規模は焚き口から煙道部まで80cm、袖部幅60cm、壁外への掘り込みはほとんど見られない。火床部は4cmほど皿状に掘りくぼめられ、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

**竈土層解説**

- 1 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 2 極暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック微量

**ピット** 5か所。支柱穴はP1～P4が相当し、深さは40～50cmである。P5は南壁際の中央に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

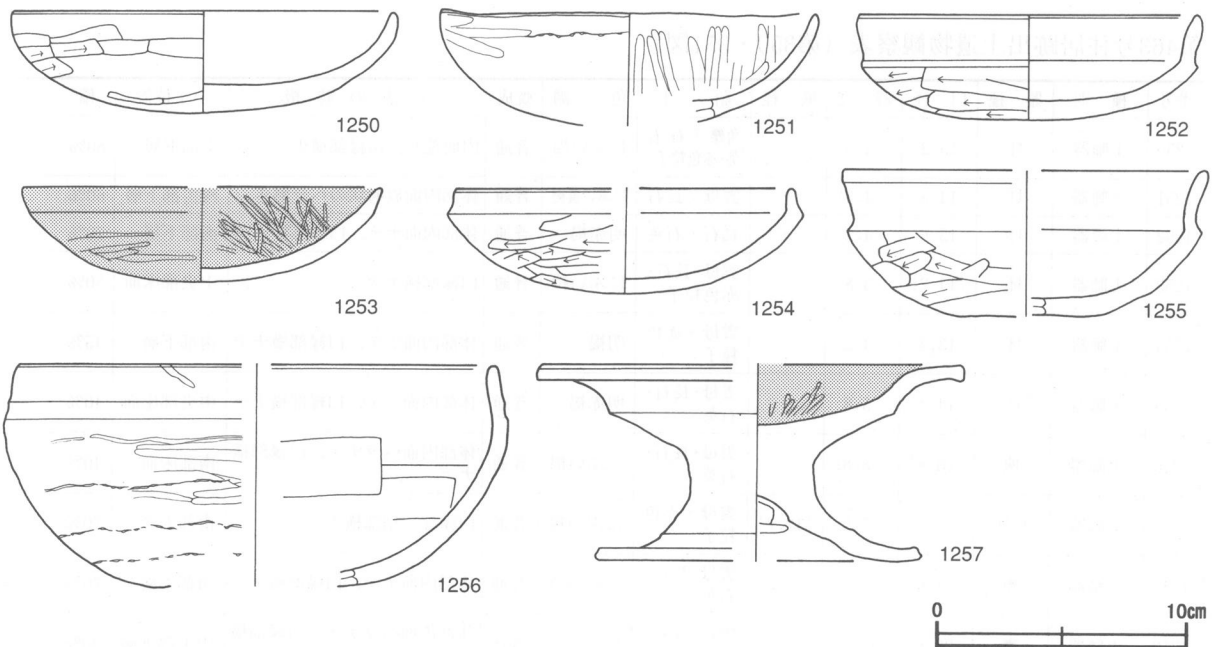
**覆土** 4層からなり、各層にロームブロックを含む人為堆積である。

**土層解説**

- 1 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

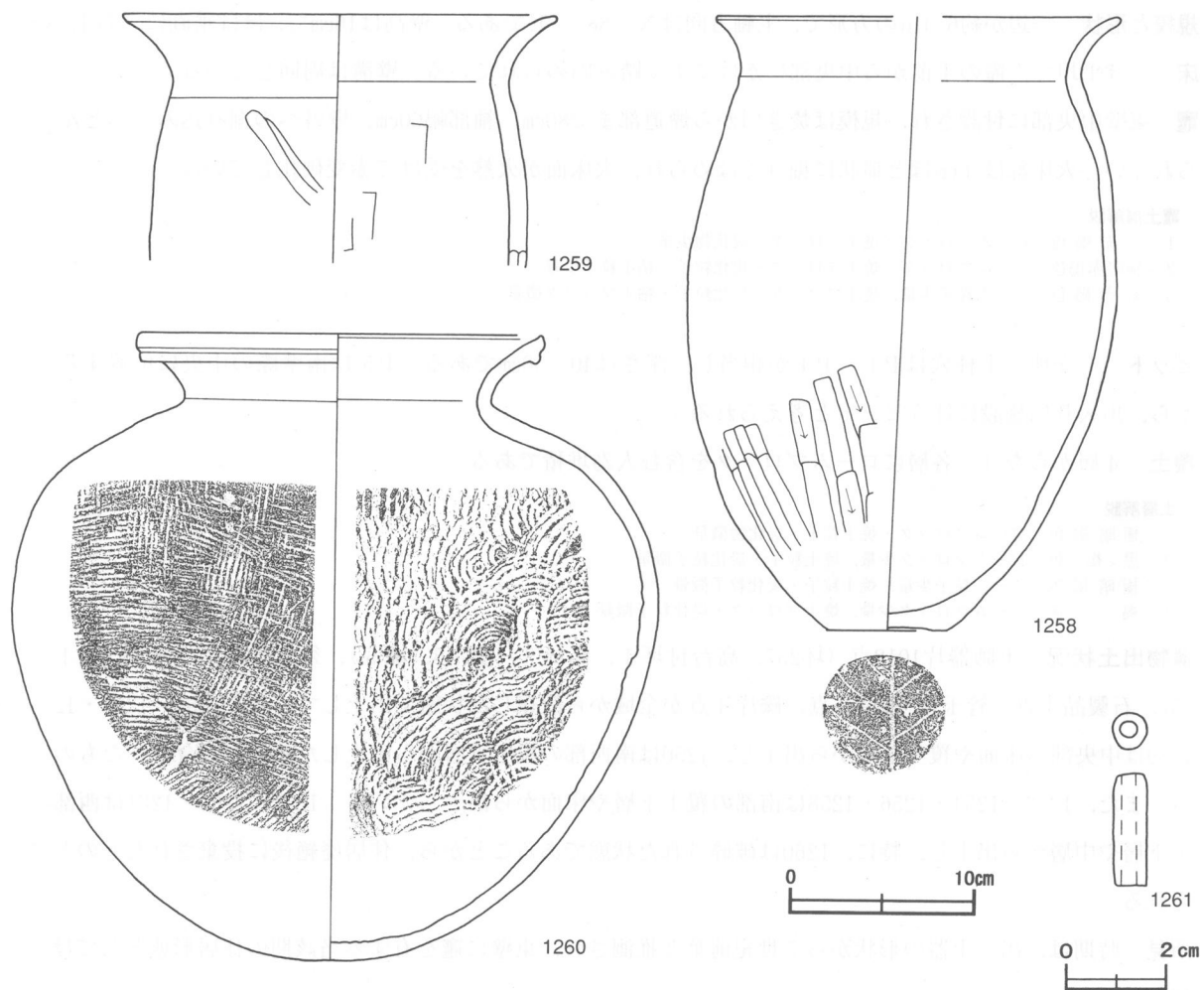
**遺物出土状況** 土師器片1012点（坏257，高台付坏1，高坏3，甕746，甗5），須恵器82点（坏6，蓋1，甕75），石製品1点（管玉），鉄滓3点，礫片4点が全域から散在した状態で出土している。1250・1253・1255・1259は中央部の床面や覆土下層から出土し、1250は南西部の覆土下層から出土した破片が接合されたものである。また、1252・1254・1256・1258は南部の覆土下層や床面から出土している。1251・1260・1261は西部の覆土下層や中層から出土し、特に、1260は破碎された状態であることから、住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器の形状から7世紀前葉と推測され、東壁に竈を有する当該期の住居形態としては異例である。



第350図 第463号住居跡出土遺物実測図(1)





第351図 第463号住居跡出土遺物実測図(2)

第463号住居跡出土遺物観察表 (第350・351図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1250	土師器	坏	15.2	4.0	-	角礫・長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	内面荒れ, 口縁部横ナデ	南部下層	80%
1251	土師器	坏	14.8	(4.5)	-	雲母・長石	にぶい黄褐	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	南西部下層	60%
1252	土師器	坏	13.6	4.2	-	長石・石英	明赤褐	普通	体部内面ナデ, 口縁部横ナデ	南部下層	70%
1253	土師器	坏	[14.2]	3.8	-	雲母・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	中央部床面	50%
1254	土師器	坏	[13.2]	4.2	-	雲母・赤色粒子	明褐	普通	体部内面ナデ, 口縁部横ナデ	南部下層	45%
1255	土師器	坏	[14.4]	5.8	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	体部内面ナデ, 口縁部横ナデ	中央部床面	40%
1256	土師器	碗	[18.8]	(8.8)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	体部内面ヘラナデ, 口縁部横ナデ	南部床面	40%
1257	土師器	高坏	[16.6]	7.9	[12.7]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部・裾部横ナデ	南部下層	70%
1258	土師器	甕	[21.5]	32.5	6.3	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部内面ナデ, 口縁部横ナデ	南部下層	70%
1259	土師器	甕	23.0	(13.4)	-	雲母・長石・石英	橙	普通	体部内面ヘラナデ, 口縁部横ナデ	中央部下層	30%
1260	須恵器	甕	21.2	33.2	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面平行叩き, 内面同心円状の当て具痕	西部中層	85% PL223



番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1261	管玉	2.3	0.7	0.4	2.0	滑石	片面穿孔	西壁際下層	

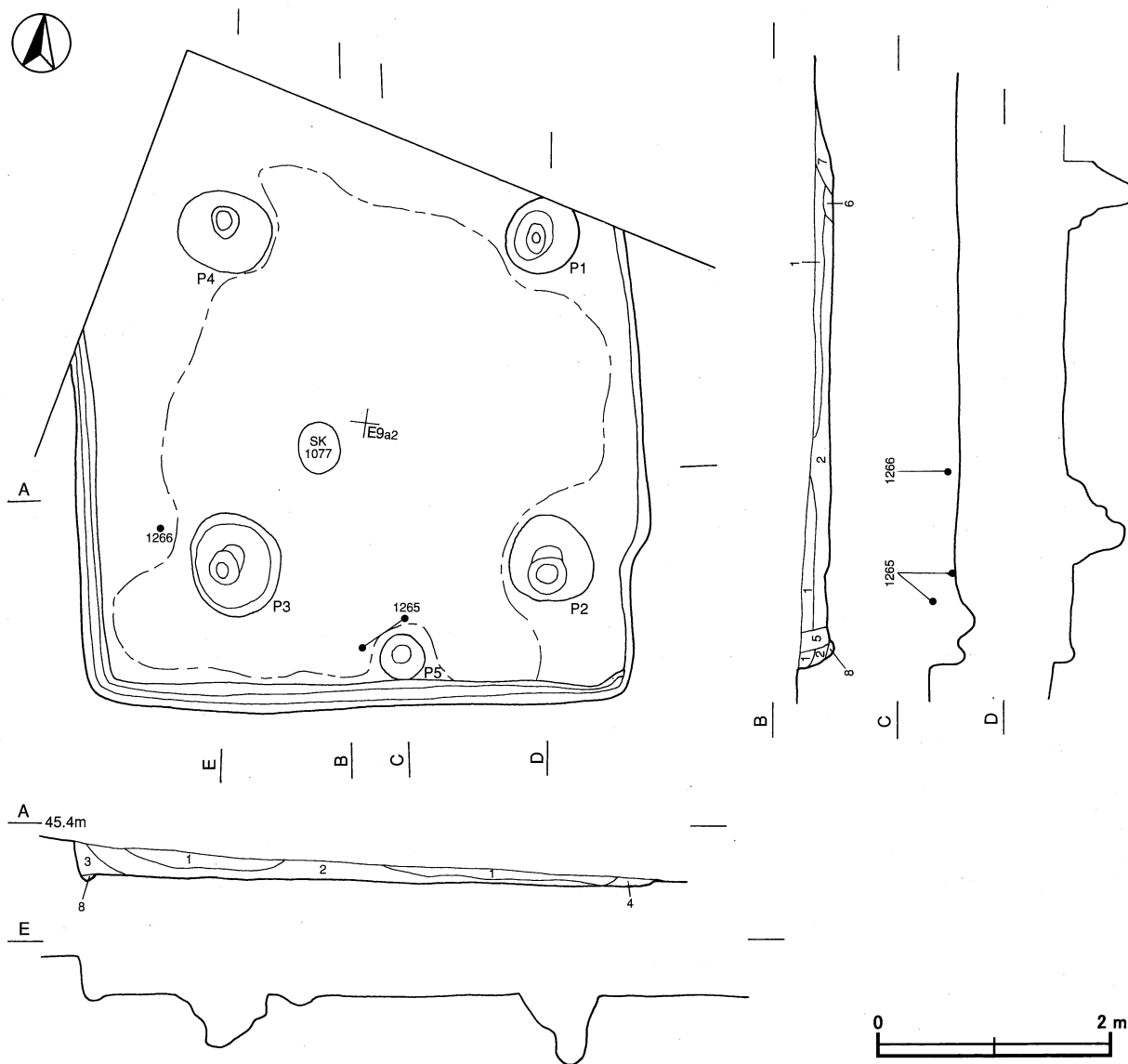
第484号住居跡 (第352・353図)

位置 調査区西部北西寄りのE9a1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第1077号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外に延びているため、南北軸の5.6mと東西軸4.8mだけが確認された。遺存する壁やピットの位置から、N-13°-Wを主軸方向とする長方形と推測される。壁高は13~30cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、ピットの内側がよく踏み固められ、南部は壁際まで硬化している。壁溝は南・西部のみ検出された。



第352図 第484号住居跡実測図

竈 調査区域外に位置すると思われる。

ピット 5か所。支柱穴はP1～P4が相当し、深さは40～60cmである。柱間寸法は約2.8mで、規則的に配されている。P5は深さ20cmで、南壁際の中央に位置することから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

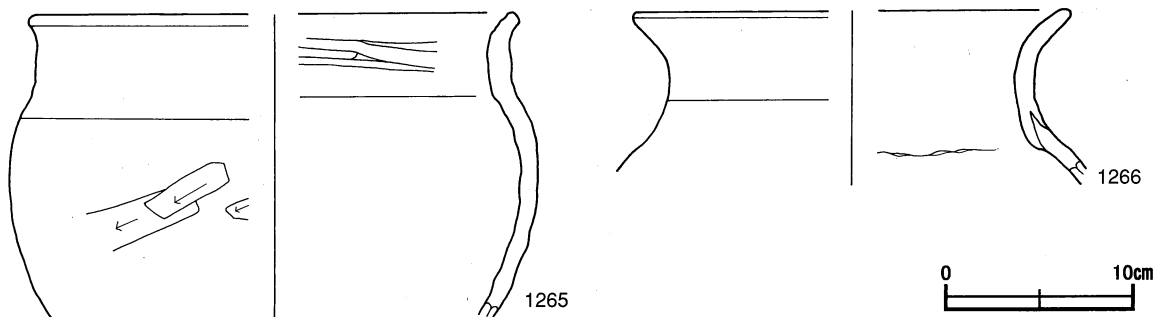
覆土 8層からなり、各層にロームブロックや粒子を含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土ブロック微量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片67点（坏14、椀4、高坏2、埴1、甕46）、礫片1点が南部の覆土下層を中心に出土している。1265は南壁際の床面、1266は西部の覆土下層から出土し、住居廃絶時に遺棄されたものである。

所見 本跡は北部が調査区域外に延びることから、住居全体の形状は把握できないが、出土した土師器甕片の形状から、時期は6世紀前葉と考えられる。



第353図 第484号住居跡出土遺物実測図

第484号住居跡出土遺物観察表（第353図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1265	土師器	甕	[25.0]	(16.0)	-	雲母・長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ	南壁際床面	10%
1266	土師器	甕	[22.6]	(9.1)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	器面荒れ、口縁部横ナデ	西部下層	5%

第489号住居跡（第354図）

位置 調査区西部西寄りのE9c1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第485号住居、第12・13号掘立柱建物、第1556号土坑、第29号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北部が第29号溝に掘り込まれているため、東西軸5.0m、南北軸は4.3mだけが確認された。遺存する壁やピットの位置から、N-0°を主軸とする長方形と推測される。壁高は17～20cmで、垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。壁溝は周回している。

竈 第485号住居や第29号溝に掘り込まれ、遺存していない。

ピット 5か所。支柱穴はP1～P4が相当し、深さは32～74cmである。P5の深さは50cmで、南壁際の中央

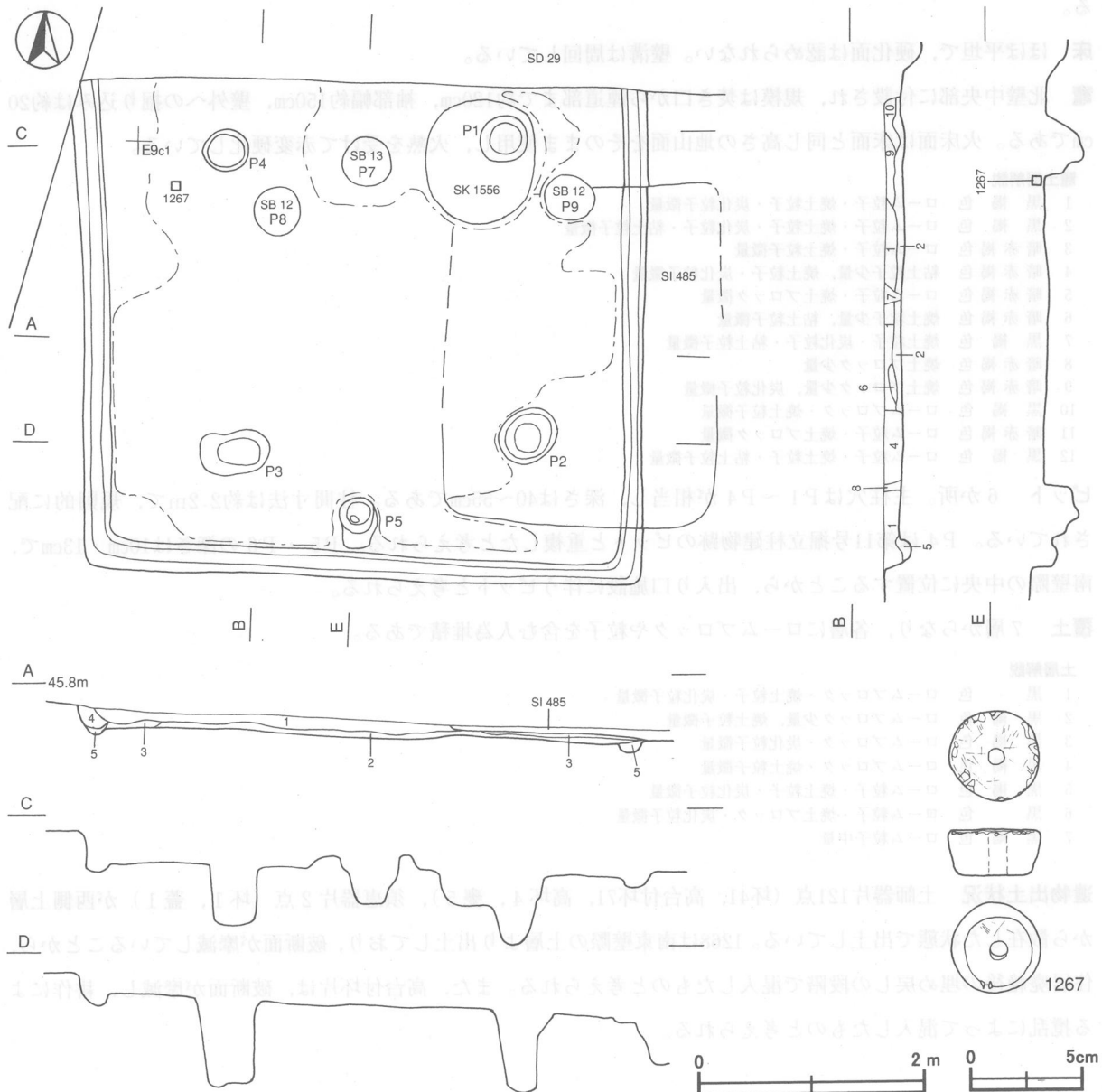
に位置することから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 10層からなり、各層にロームブロックや粒子を含む人為堆積である。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック微量
- 6 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量
- 8 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 9 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 10 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片144点(坏55, 椀1, 高台付坏4, 甕84), 須恵器片12点(坏6, 蓋2, 甕4), 石製品1点(紡錘車), 礫片2点が出土している。ほとんどが細片のため、図示できたものはなく、住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと考えられる。1267は西部の床面から出土している。



第354図 第489号住居跡・出土遺物実測図

所見 本跡は北部が第29号溝に掘り込まれているため、住居全体の形状は確認できないが、出土した土師器片や須恵器片の形状は6世紀後葉であり、時期は同時期かそれよりやや以前に構築されたものと考えられる。

第489号住居跡出土遺物観察表（第354図）

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1267	紡錘車	4.0	2.1	0.8	56.1	粘板岩	上面に擦痕有り、両面穿孔	西部床面	PL266

第491号住居跡（第355図）

位置 調査区西部西寄りのE9e1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第492号住居、第11号掘立柱建物、第1332号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 一辺約4.6mの方形で、主軸方向はN-7°-Eである。壁高は18~25cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、硬化面は認められない。壁溝は周回している。

竈 北壁中央部に付設され、規模は焚き口から煙道部まで約120cm、袖部幅約150cm、壁外への掘り込みは約20cmである。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 4 暗赤褐色 粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子少量、粘土粒子微量
- 7 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 8 暗赤褐色 焼土ブロック少量
- 9 暗赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 10 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 11 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック微量
- 12 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量

ピット 6か所。支柱穴はP1~P4が相当し、深さは40~55cmである。柱間寸法は約2.2mで、規則的に配されている。P4は第11号掘立柱建物跡のピットと重複したと考えられる。P5・P6の深さは10cm・13cmで、南壁際の中央に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

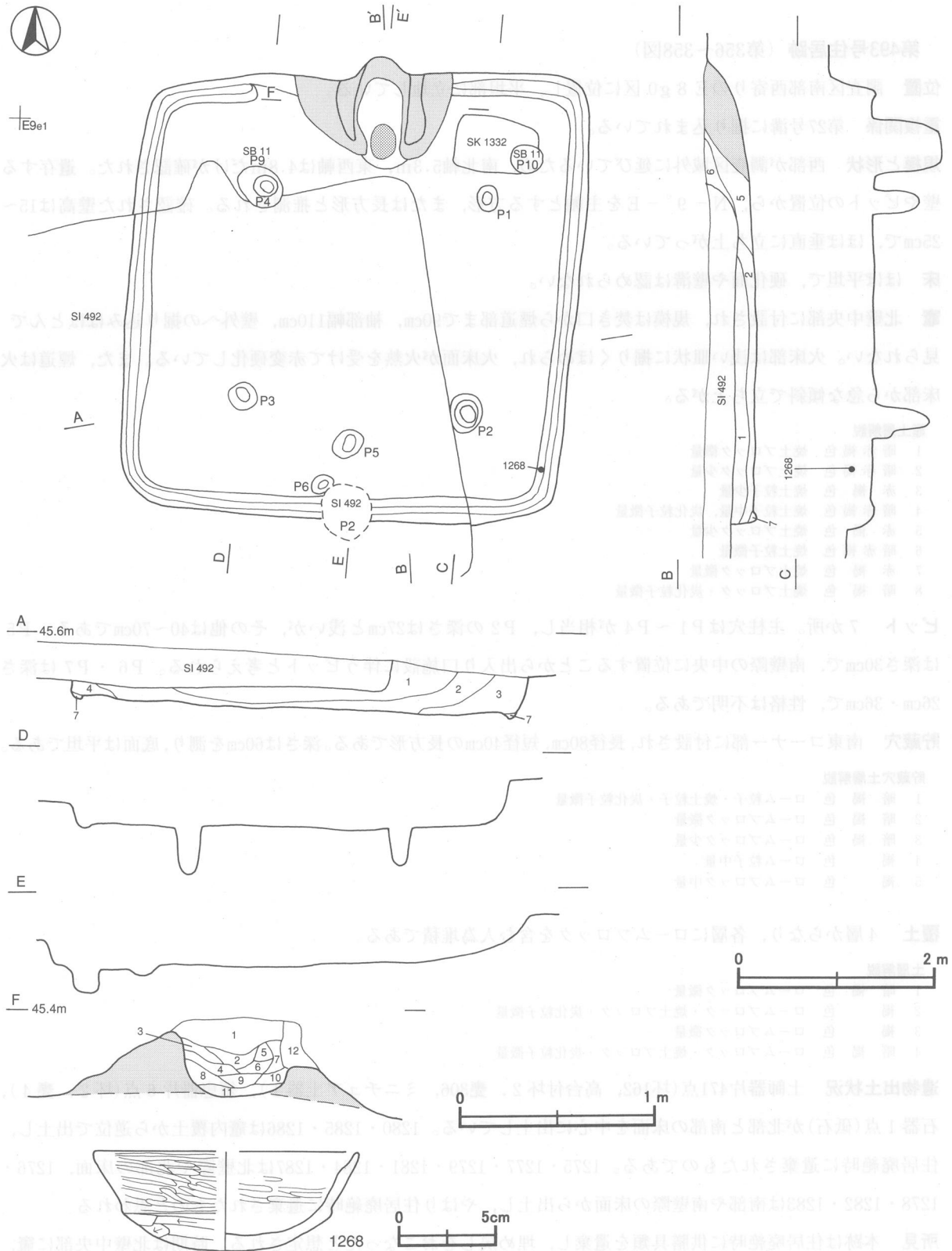
覆土 7層からなり、各層にロームブロックや粒子を含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 黒色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 7 黒褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片121点（坏41、高台付坏71、高坏4、甕5）、須恵器片2点（坏1、蓋1）が西側上層から散在した状態で出土している。1268は南東壁際の上層より出土しており、破断面が摩滅していることから、住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと考えられる。また、高台付坏片は、破断面が摩滅し、耕作による攪乱によって混入したものと考えられる。

所見 本跡は一辺約4.6mの方形で、支柱穴の柱間寸法は約2.2mと規則的に配置されている。また、竈は北壁中央部に付設され、壁外への掘り込みは約20cmである。出土遺物は少ないが、住居形態から判断して時期は6世紀後半と考えられる。



第355図 第491号住居跡・出土遺物実測図

第491号住居跡出土遺物観察表（第355図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1268	土師器	坏	[13.4]	5.0	-	雲母・石英	にぶい橙	普通	内面荒れ，口縁部内外面ヘラ磨き	南東壁際上層	35%

第493号住居跡（第356～358図）

**位置** 調査区南部西寄りのE 8 g0 区に位置し，平坦部に立地している。

**重複関係** 第27号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 西部が調査区域外に延びているため，南北軸5.3m，東西軸は4.8mだけが確認された。遺存する壁やピットの位置から，N-9°-Eを主軸とする方形，または長方形と推測される。確認された壁高は15～25cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で，硬化面や壁溝は認められない。

**竈** 北壁中央部に付設され，規模は焚き口から煙道部まで90cm，袖部幅110cm，壁外への掘り込みはほとんど見られない。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられ，火床面が火熱を受けて赤変硬化している。また，煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がる。

**竈土層解説**

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック微量
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量
- 3 赤褐色 焼土粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子微量
- 5 赤褐色 焼土ブロック少量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子微量
- 7 赤褐色 焼土ブロック微量
- 8 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子微量

**ピット** 7か所。支柱穴はP1～P4が相当し，P2の深さは27cmと浅いが，その他は40～70cmである。P5は深さ30cmで，南壁際の中央に位置することから出入口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は深さ26cm・36cmで，性格は不明である。

**貯蔵穴** 南東コーナー部に付設され，長径80cm，短径40cmの長方形である。深さは60cmを測り，底面は平坦である。

**貯蔵穴土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子中量
- 5 褐色 ロームブロック中量

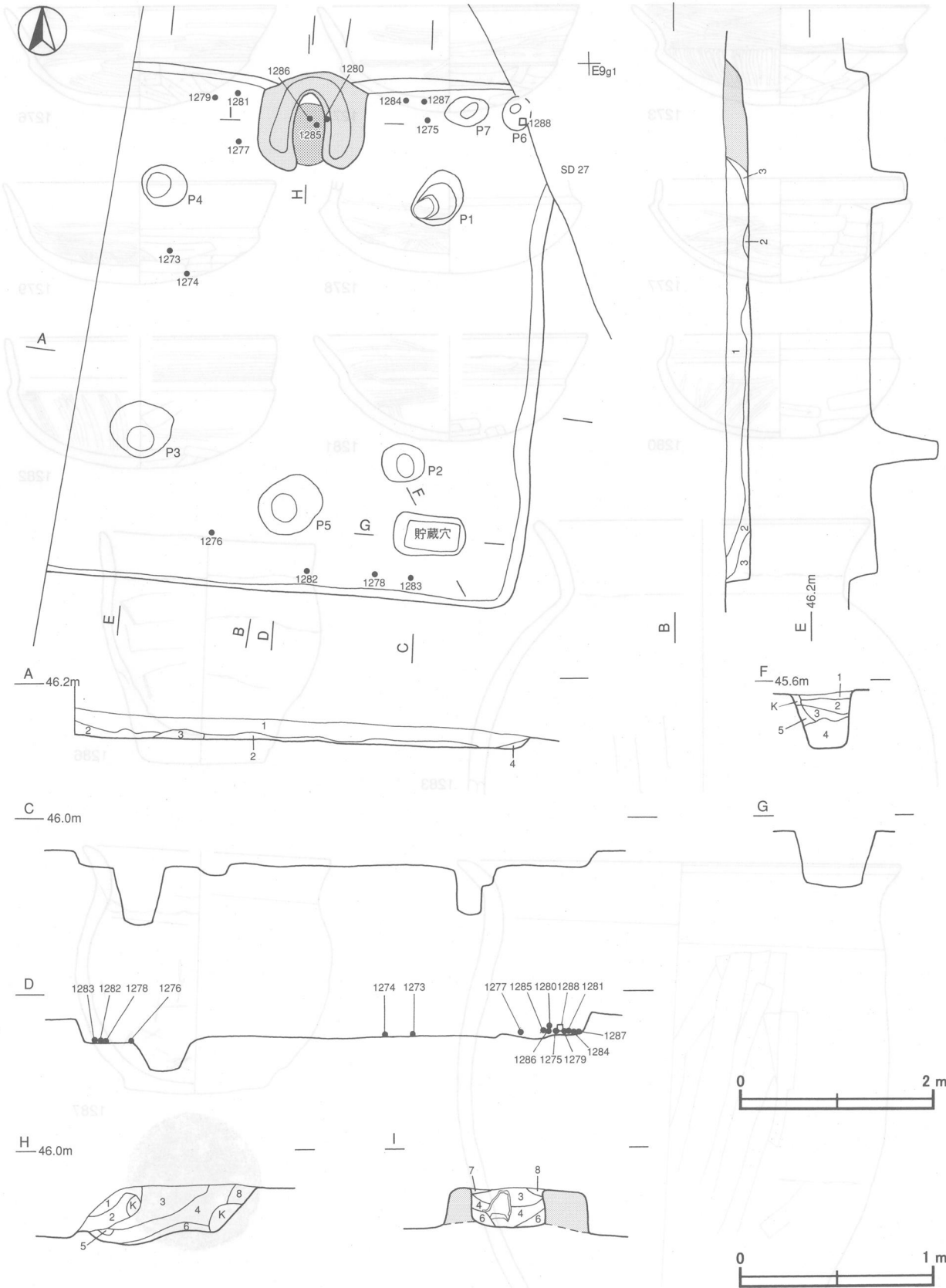
**覆土** 4層からなり，各層にロームブロックを含む人為堆積である。

**土層解説**

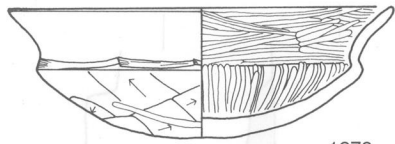
- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片471点(坏162，高台付坏2，甕306，ミニチュア土器1)，須恵器片6点(坏2，甕4)，石器1点(砥石)が北部と南部の床面を中心に出土している。1280・1285・1286は竈内覆土から逆位で出土し，住居廃絶時に遺棄されたものである。1275・1277・1279・1281・1284・1287は北壁際や北部の床面，1276・1278・1282・1283は南部や南壁際の床面から出土し，やはり住居廃絶時に遺棄されたものと思われる。

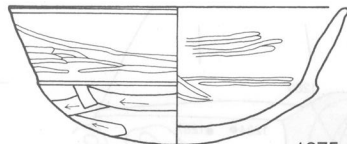
**所見** 本跡は住居廃絶時に供膳具類を遺棄し，埋め戻しをおこなったと想定される。時期は北壁中央部に竈，貯蔵穴を南東コーナー部に付設する住居形態と，出土土器から6世紀前葉と考えられる。



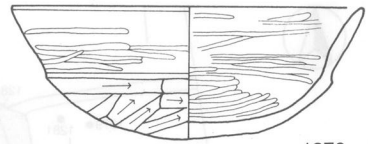
第356图 第493号住居跡実测图



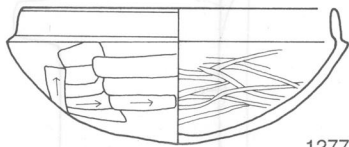
1273



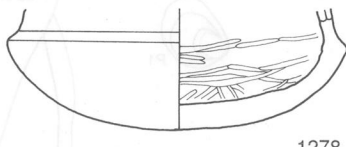
1275



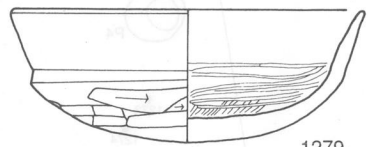
1276



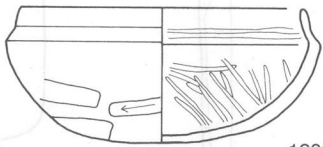
1277



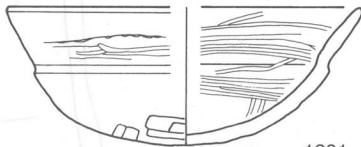
1278



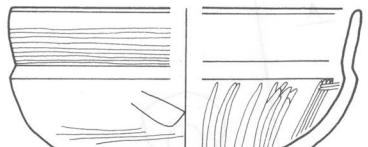
1279



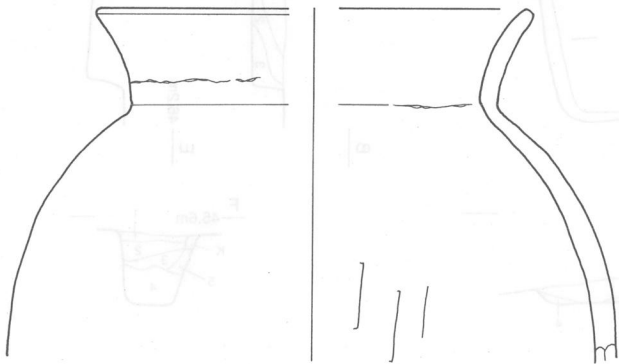
1280



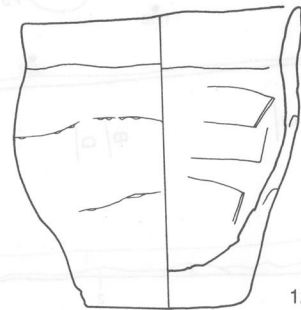
1281



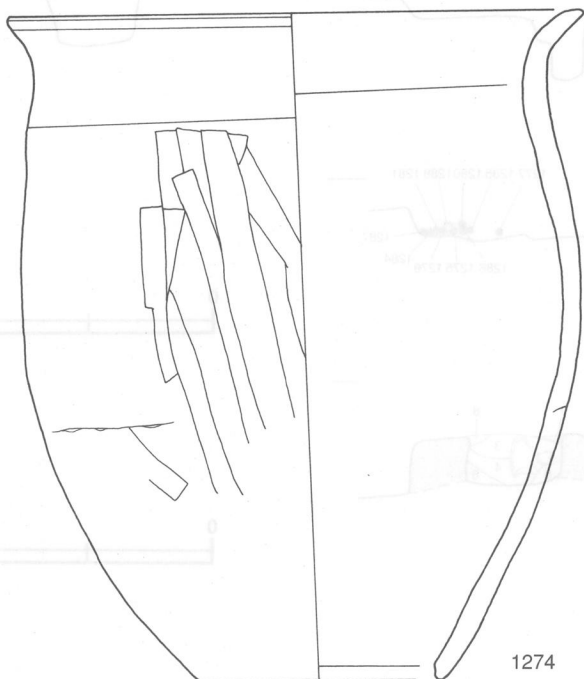
1282



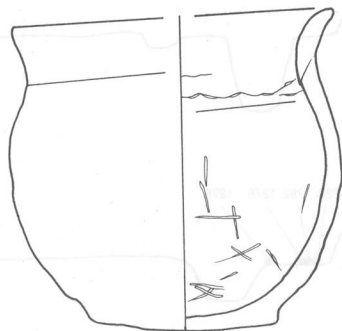
1283



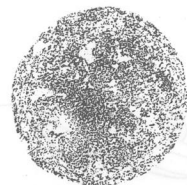
1286



1274

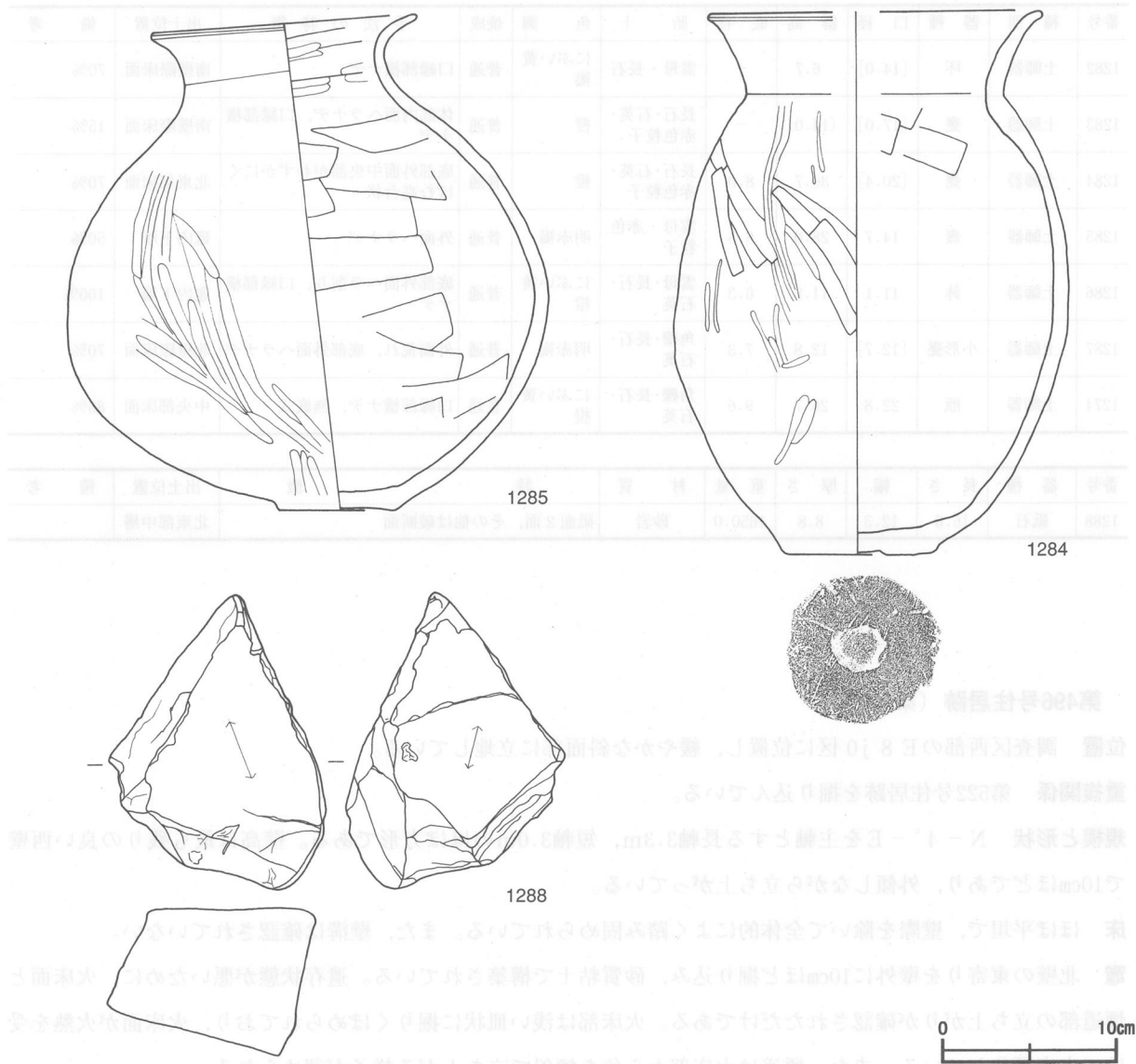


1287



第357图 第493号住居跡出土遺物実測図(1)





第358図 第493号住居跡出土遺物実測図(2)

第493号住居跡出土遺物観察表 (第357・358図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1273	土師器	坏	15.2	5.2	-	角礫・白色粒子	赤褐	普通	内面ヘラ磨き, 口縁部横ナデ	中央部床面	80%
1275	土師器	坏	13.4	5.5	-	雲母・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面・口縁部内外面ヘラ磨き	北東部床面	100% PL222
1276	土師器	坏	13.8	5.2	-	雲母・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面・口縁部内外面ヘラ磨き	南部床面	100% PL222
1277	土師器	坏	12.4	5.3	-	雲母・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き, 口縁部横ナデ	北部下層	100% PL223
1278	土師器	坏	-	(4.8)	-	雲母・石英	にぶい黄褐	普通	器面荒れ, 口唇部摩滅	南壁際床面	90% PL223
1279	土師器	坏	13.9	5.2	-	雲母・石英	にぶい褐	普通	口縁部器面荒れ, 体部内面ヘラ磨き	北壁際床面	100% PL223
1280	土師器	坏	12.5	5.4	-	雲母・長石・石英	にぶい黄褐	普通	口縁部横ナデ, 内面ヘラ磨き	竈内中層	50%
1281	土師器	坏	[14.2]	5.5	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	内面ヘラ磨き, 口縁部横ナデ	北壁際床面	60%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1282	土師器	坏	[14.0]	6.7	-	雲母・長石	にぶい黄褐	普通	口縁部横ナデ	南壁際床面	70%
1283	土師器	甕	[17.0]	(14.0)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部内面ヘラナデ, 口縁部横ナデ	南壁際床面	15%
1284	土師器	甕	[20.4]	30.7	8.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部外面中央部がわずかにくぼむ高台状	北東部床面	70%
1285	土師器	壺	14.7	28.0	6.5	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	外面ヘラナデ	竈内下層	50%
1286	土師器	鉢	11.1	11.8	6.3	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	底部外面ヘラ削り, 口縁部横ナデ	竈内下層	100%
1287	土師器	小形甕	[12.7]	12.8	7.3	角礫・長石・石英	明赤褐	普通	外面荒れ, 底部外面ヘラナデ	北壁際床面	70%
1274	土師器	甗	22.8	26.7	9.6	角礫・長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ, 無底式	中央部床面	85%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1288	砥石	16.6	12.3	8.8	1650.0	砂岩	砥面2面, その他は破断面	北東部中層	

#### 第496号住居跡 (第359図)

**位置** 調査区西部のE 8 j 0 区に位置し, 緩やかな斜面部に立地している。

**重複関係** 第522号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** N-4°-Eを主軸とする長軸3.3m, 短軸3.0mのほぼ方形である。壁高は最も残りの良い西壁で10cmほどであり, 外傾しながら立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で, 壁際を除いて全体的によく踏み固められている。また, 壁溝は確認されていない。

**竈** 北壁の東寄りを壁外に10cmほど掘り込み, 砂質粘土で構築されている。遺存状態が悪いために, 火床面と煙道部の立ち上がりが確認されただけである。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられており, 火床面が火熱を受けて赤変硬化している。また, 煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がる様子が認められる。

#### 竈土層解説

- 1 褐 色 粘土粒子少量, 焼土ブロック・砂粒微量
- 2 黒 褐 色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子少量

**ピット** 検出されていない。

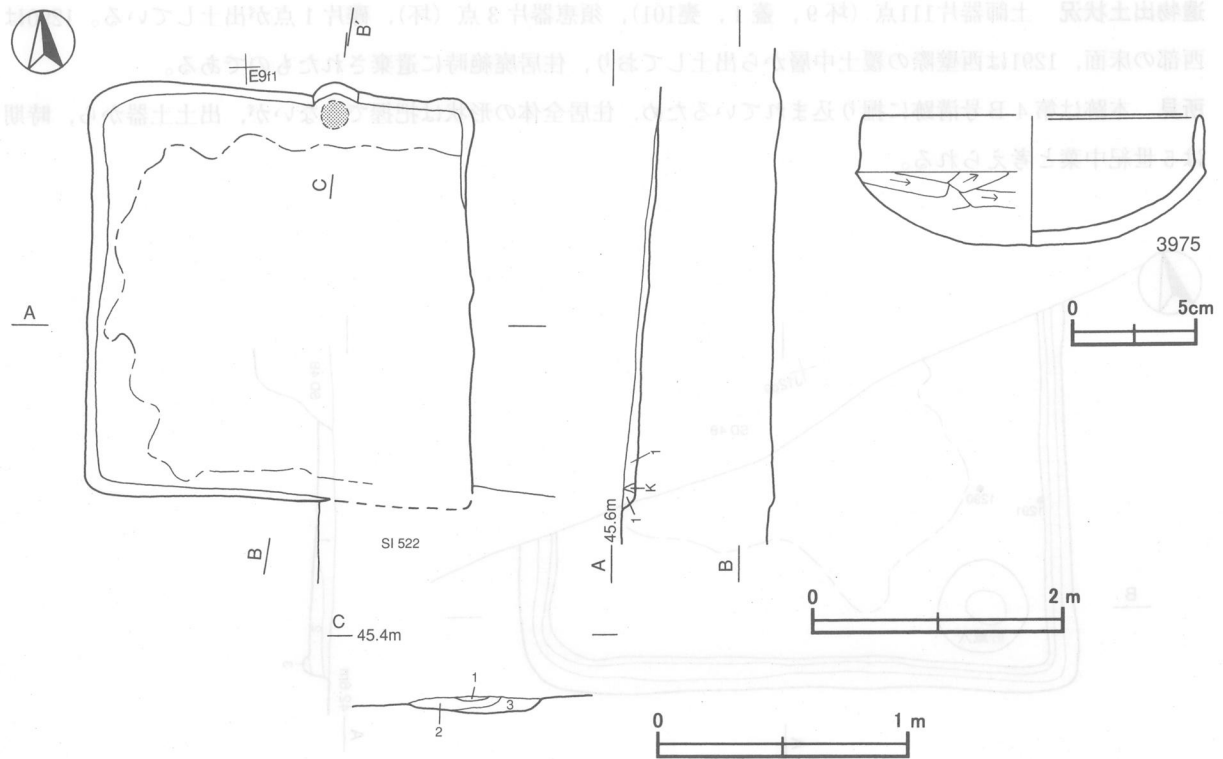
**覆土** 1層からなり, ロームブロックや焼土を含んだ人為堆積である。

#### 土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片1点(坏)が確認面から検出されただけである。

**所見** 本跡は, 竪穴部に主柱穴をもたない小形の住居跡である。時期は7世紀代の可能性がある。



第359図 第496号住居跡・出土遺物実測図

第496号住居跡出土遺物観察表 (第359図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3975	土師器	坏	[13.4]	5.2	-	長石・石英・雲母	黒	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り	確認面	50%

### 第508号住居跡 (第360図)

**位置** 調査区中央部南西寄りのJ12g8区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第4B号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 北部を第4号溝跡に掘り込まれているため、東西軸4.4m、南北軸は3.2mだけが確認された。遺存する壁や硬化面の広がりから、N-14°-Eを主軸とする方形、または長方形と推測される。壁高は12~17cmで、ほぼ直立している。

**床** ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っていることから、全周していたものと思われる。

**炉・竈** 第4号溝に掘り込まれたと考えられ、遺存していない。

**貯蔵穴** 南西コーナー部に付設され、径70cmほどの円形である。深さは50cmであるが、遺物は出土していない。

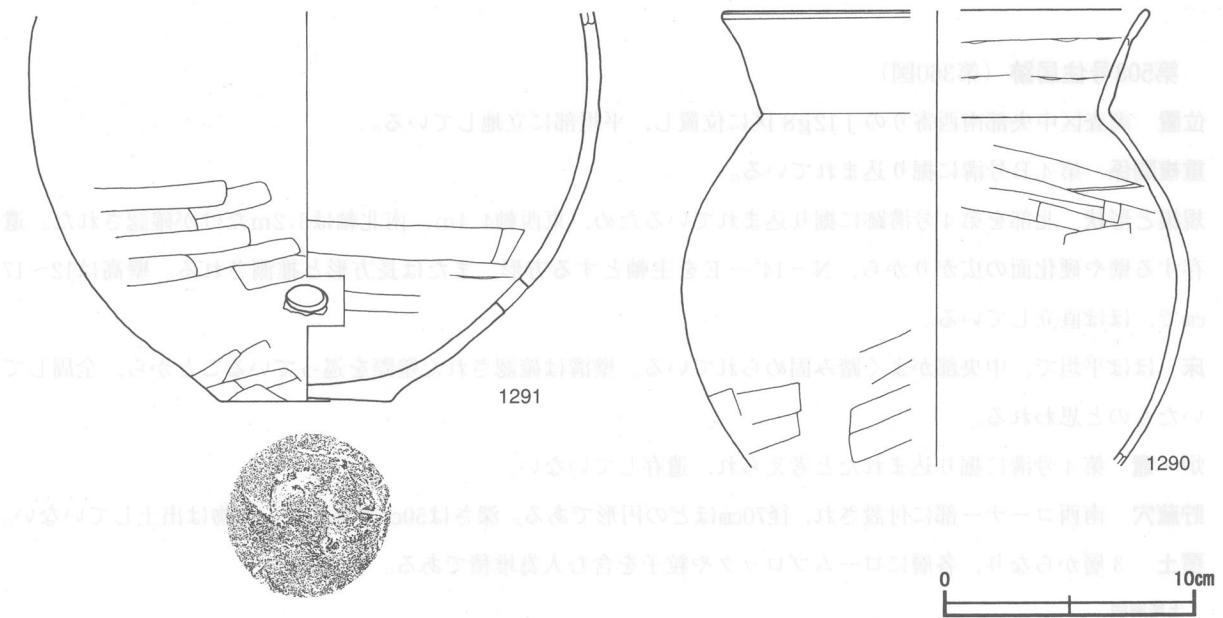
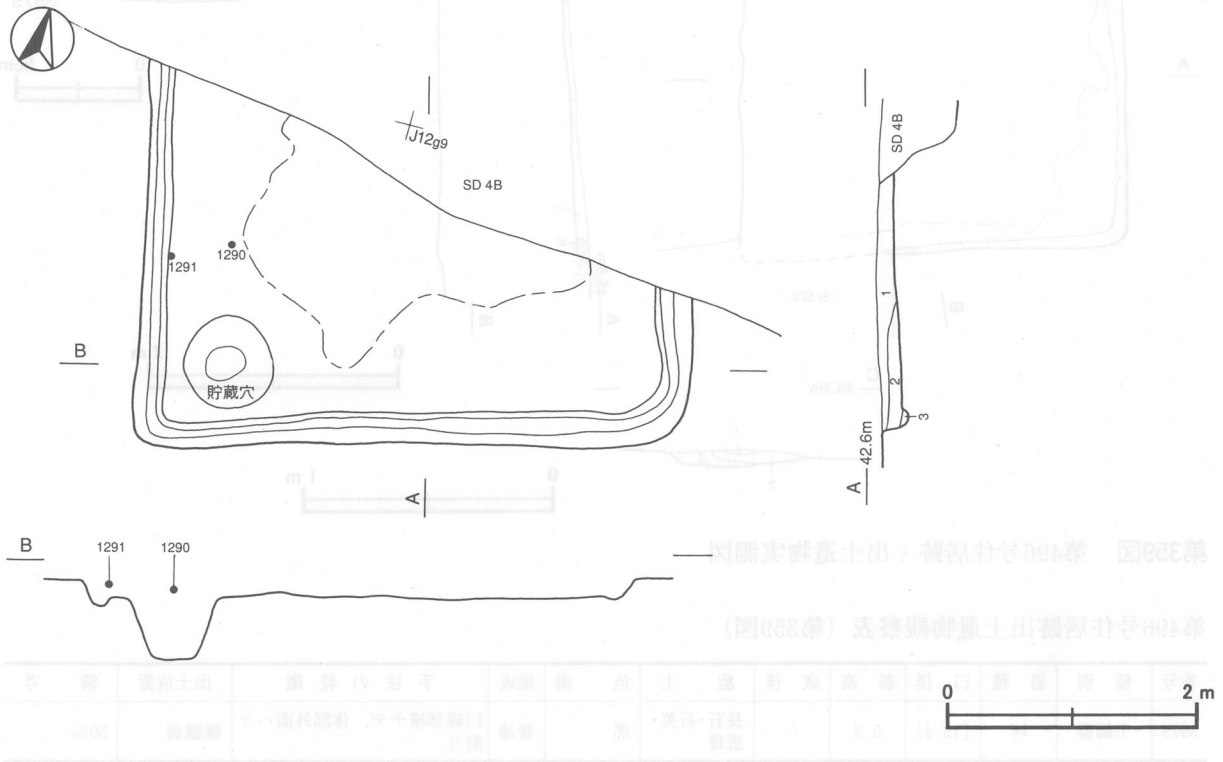
**覆土** 3層からなり、各層にロームブロックや粒子を含む人為堆積である。

#### 土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片111点（坏9，蓋1，甕101），須恵器片3点（坏），礫片1点が出土している。1290は西部の床面，1291は西壁際の覆土中層から出土しており，住居廃絶時に遺棄されたものである。

**所見** 本跡は第4B号溝跡に掘り込まれているため，住居全体の形状は把握できないが，出土土器から，時期は5世紀中葉と考えられる。



第360図 第508号住居跡・出土遺物実測図

第508号住居跡出土遺物観察表（第360図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1290	土師器	甕	[16.8]	(18.1)	-	長石・石英	明赤褐	普通	体部内面ヘラナデ，口縁部横ナデ	西部床面	40%
1291	土師器	甕	-	(15.4)	6.6	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	底部外面ヘラナデ	西壁際中層	50% 体部下位穿孔

第517号住居跡（第361図）

**位置** 調査区中央部東寄りのJ14b4区に位置し，平坦部に立地している。

**重複関係** 第372号住居，第682号土坑に掘り込まれ，耕作による攪乱も受けている。

**規模と形状** 南東部が調査区域外に延びているため，東西軸は4.3m，南北軸は3.5mだけが確認された。遺存する壁や竈の位置から，N-4°-Eを主軸とする方形，または長方形と推測される。確認された壁高は24cmで，立ち上がり状況は不明である。

**床** ほぼ平坦で，竈の手前から南東部にかけてよく踏み固められている。壁溝は認められない。

**竈** 北壁中央部に付設されているが，遺存状況が悪く，火床面が検出されたただけである。

**竈土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック少量，焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

**ピット** 検出されなかった。

**覆土** 3層からなり，各層にロームブロックを含む人為堆積である。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック少量，焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

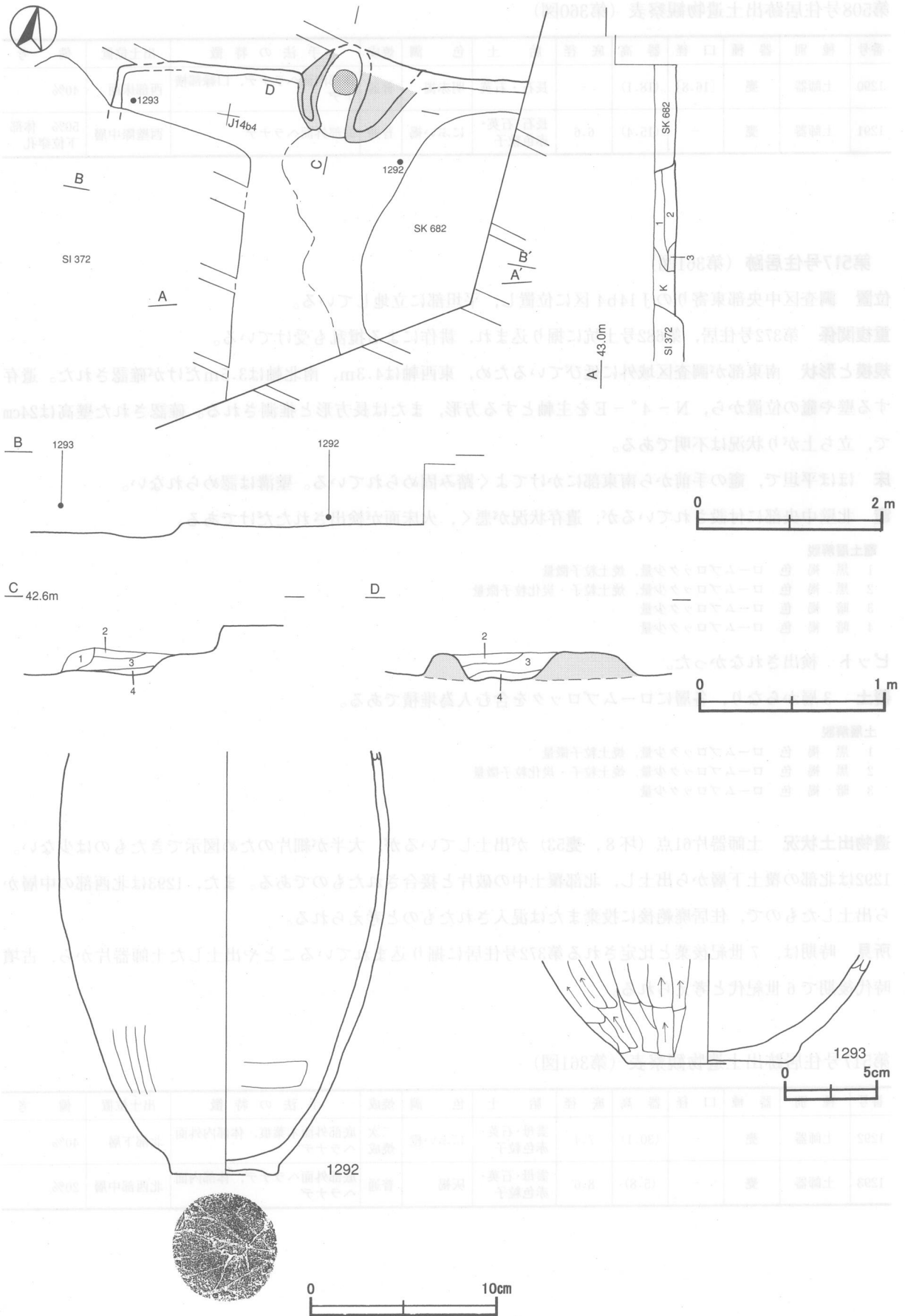
**遺物出土状況** 土師器片61点（坏8，甕53）が出土しているが，大半が細片のため図示できたものは少ない。

1292は北部の覆土下層から出土し，北部覆土中の破片と接合されたものである。また，1293は北西部の中層から出土したもので，住居廃絶後に投棄または混入されたものと考えられる。

**所見** 時期は，7世紀後葉と比定される第372号住居に掘り込まれていることや出土した土師器片から，古墳時代後期で6世紀代と考えられる。

第517号住居跡出土遺物観察表（第361図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1292	土師器	甕	-	(30.1)	7.4	雲母・石英・赤色粒子	にぶい橙	二次焼成	底部外面木葉痕，体部内外面ヘラナデ	北部下層	40%
1293	土師器	甕	-	(5.8)	8.6	雲母・石英・赤色粒子	灰褐	普通	底部外面ヘラナデ，体部内面ヘラナデ	北西部中層	20%



第361図 第517号住居跡・出土遺物実測図

## 第521号住居跡（第362・363図）

**位置** 調査区西部のF 9 a2 区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第497・522号住居に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸5.2m、短軸5.0mの方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁高は25cmで、垂直に立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、竈の手前から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は認められない。

**竈** 北壁中央部に付設され、規模は焚き口から煙道部まで120cm、袖部幅80cm、壁外への掘り込みは40cmである。火床面は10cmほど皿状に掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化している。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

### 竈土層解説

- 1 灰 色 粘土粒子多量
- 2 暗 褐 色 焼土ブロック・粘土粒子微量
- 3 暗 褐 色 焼土粒子・粘土粒子微量
- 4 暗 褐 色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 赤 褐 色 焼土ブロック・粘土粒子少量、ローム粒子微量
- 6 赤 褐 色 焼土ブロック・粘土粒子少量
- 7 暗 褐 色 焼土ブロック・炭化物・粘土粒子微量
- 8 暗 褐 色 焼土ブロック少量
- 9 明 赤 褐 色 焼土ブロック少量

**ピット** 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは40～60cmである。P5は深さ16cmで、南壁際の中央に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

**貯蔵穴** 北東コーナー部に付設され、長径70cm、短径50cmの長方形を呈している。深さは40cmを測り、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

### 貯蔵穴土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子微量

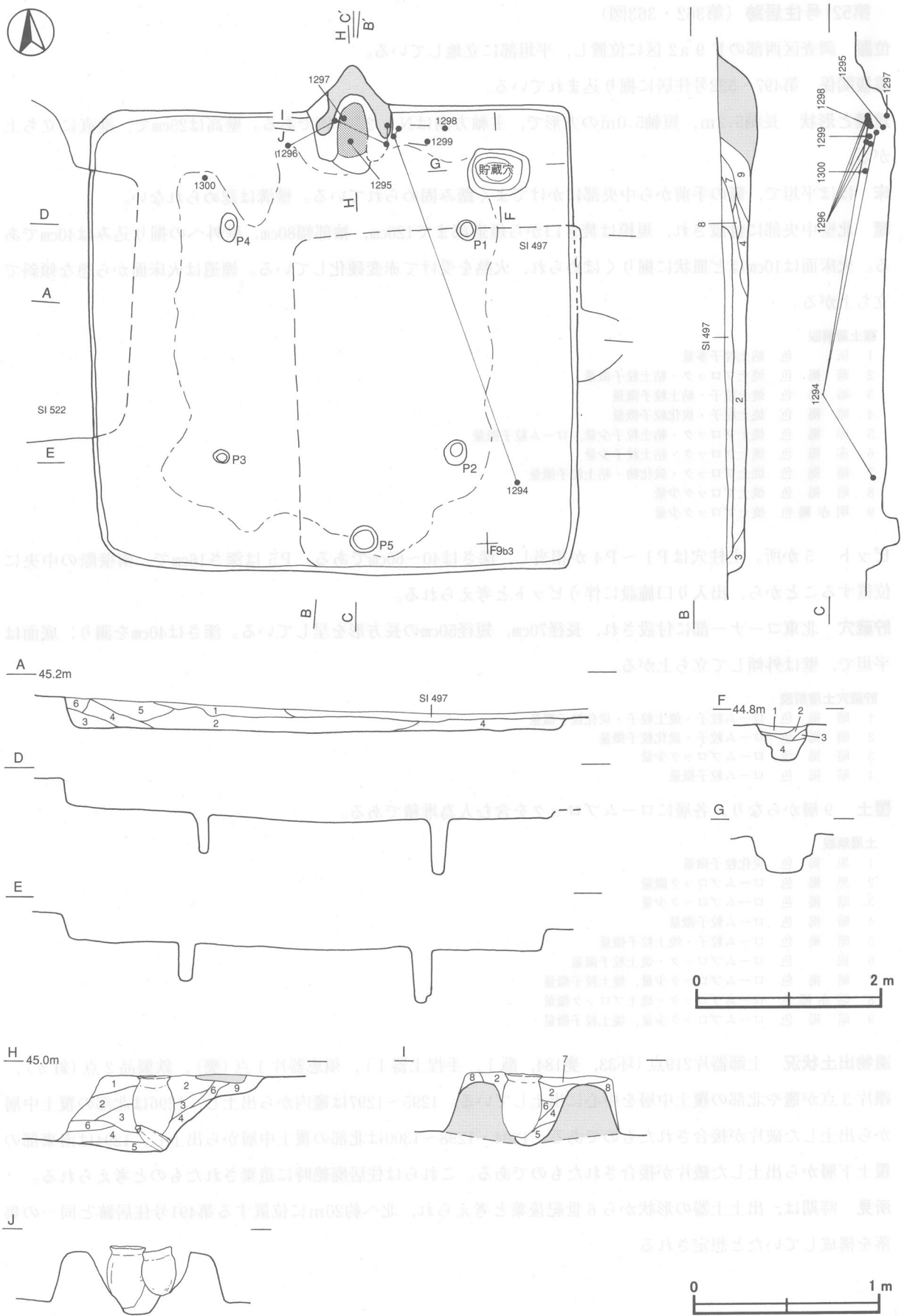
**覆土** 9層からなり、各層にロームブロックを含む人為堆積である。

### 土層解説

- 1 黒 褐 色 炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック微量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子微量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 6 褐 色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 7 暗 褐 色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 8 暗 赤 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 9 暗 褐 色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

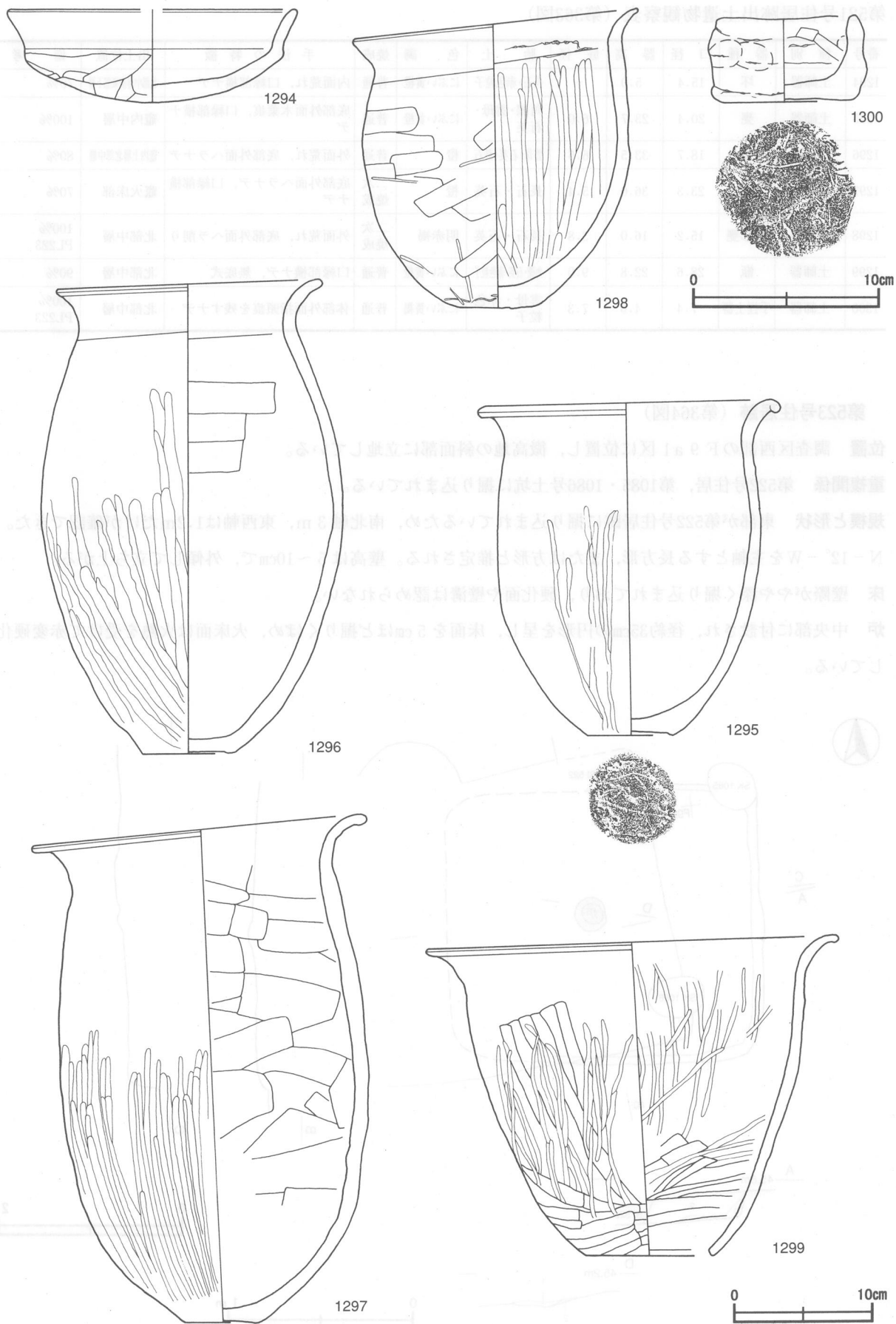
**遺物出土状況** 土師器片219点（坏33，甕184，甌1，手捏土器1），須恵器片1点（甕），鉄製品2点（釘カ），礫片3点が竈や北部の覆土中層を中心に出土している。1295～1297は竈内から出土し、1296は北部の覆土中層から出土した破片が接合されたものである。1294・1298～1300は北部の覆土中層から出土し、1294は南東部の覆土下層から出土した破片が接合されたものである。これらは住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器の形状から6世紀後葉と考えられ、北へ約20mに位置する第491号住居跡と同一の集落を構成していたと想定される。



第362図 第521号住居跡実測図





第363図 第521号住居跡出土遺物実測図

第521号住居跡出土遺物観察表 (第363図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1294	土師器	坏	15.4	5.0	-	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	内面荒れ, 口縁部横ナデ	北部中層南東部下層	70%
1295	土師器	甕	20.4	23.7	6.0	角礫・雲母・石英	にぶい黄橙	普通	底部外面木葉痕, 口縁部横ナデ	竈内中層	100%
1296	土師器	甕	18.7	33.5	6.6	雲母・石英・長石	橙	普通	外面荒れ, 底部外面ヘラナデ	竈内上層北部中層	80%
1297	土師器	甕	23.3	36.0	5.4	長石・石英	橙	二次焼成	底部外面ヘラナデ, 口縁部横ナデ	竈火床部	70%
1298	土師器	小形甕	15.2	16.0	3.8	長石・石英	明赤褐	二次焼成	外面荒れ, 底部外面ヘラ削り	北部中層	100% PL223
1299	土師器	甌	28.6	22.8	9.0	角礫・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ, 無底式	北部中層	90%
1300	土師器	手捏土器	7.4	4.6	7.3	雲母・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	体部外面指頭痕を残すナデ	北部中層	100% PL223

第523号住居跡 (第364図)

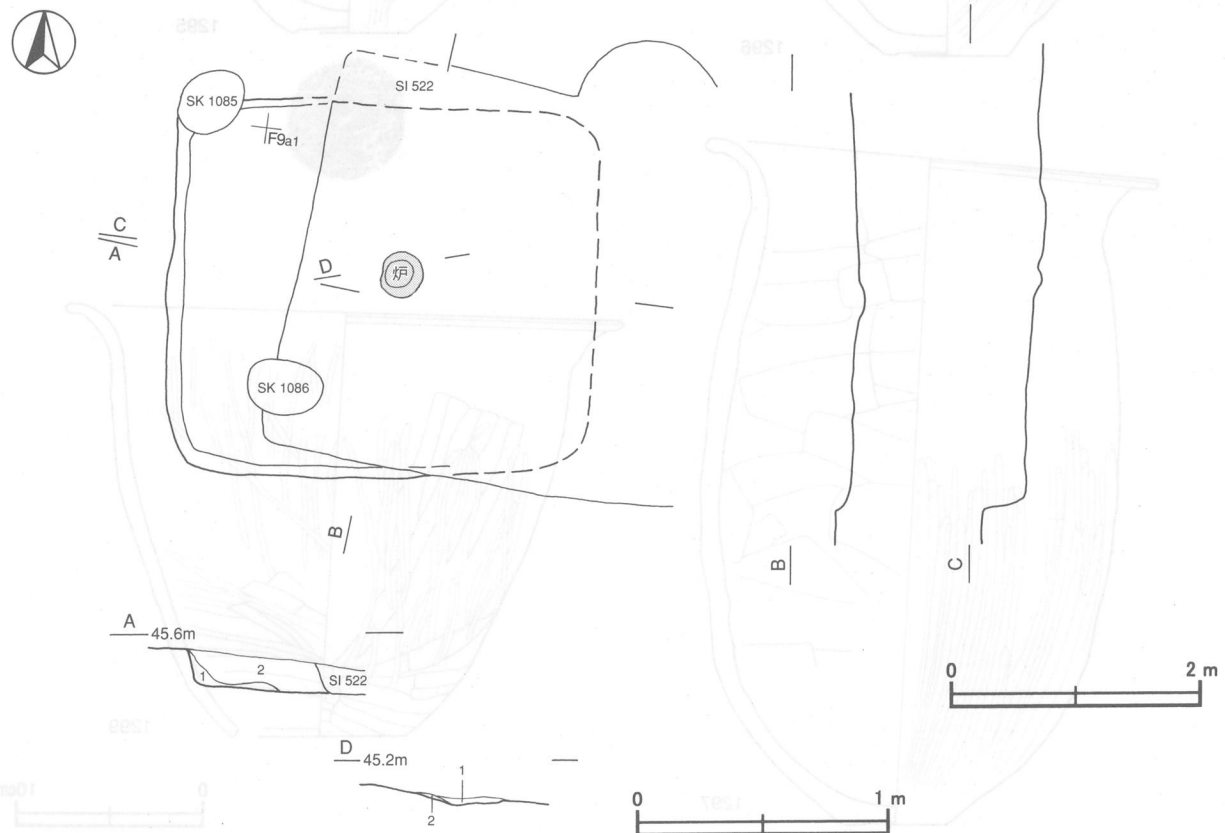
位置 調査区西部のF 9 a1 区に位置し, 微高地の斜面部に立地している。

重複関係 第522号住居, 第1085・1086号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東部が第522号住居跡に掘り込まれているため, 南北軸3m, 東西軸は1.2mだけが確認できた。N-12°-Wを主軸とする長方形, または方形と推定される。壁高は5~10cmで, 外傾して立ち上がる。

床 壁際がやや深く掘り込まれており, 硬化面や壁溝は認められない。

炉 中央部に付設され, 径約35cmの円形を呈し, 床面を5cmほど掘りくぼめ, 火床面は火熱を受けて赤変硬化している。



第364図 第523号住居跡実測図

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック微量

ピット 検出されなかった。

覆土 2層からなるが, 堆積状況は判然としない。

土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量

遺物出土状況 出土していない。

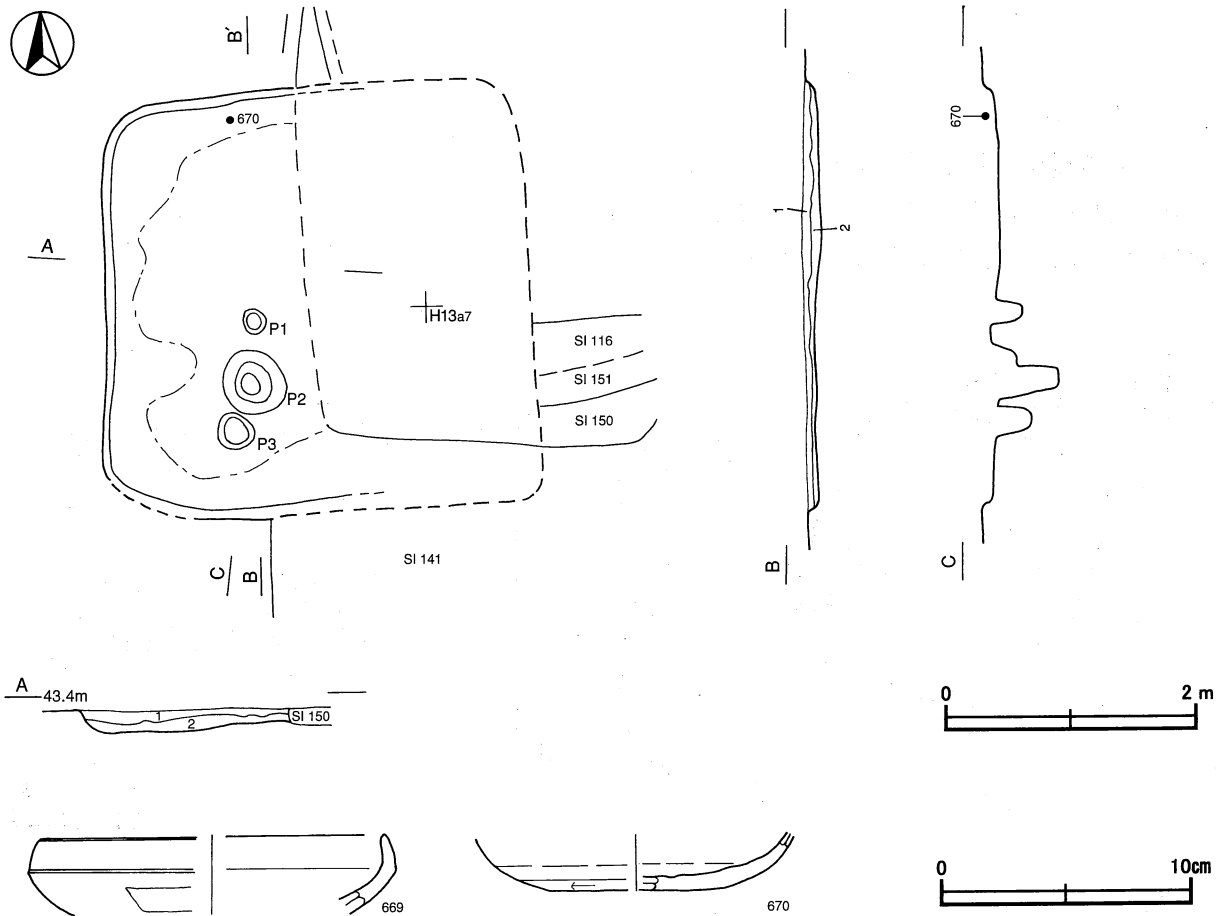
所見 本跡は出土遺物もなく, 時期の判断は困難であるが, 炉を有する住居形態から, 時期は古墳時代中期以前と推測される。

第532号住居跡 (第365図)

位置 調査区北部のG13j6区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第116・141・151号住居跡を掘り込み, 第150号住居に掘り込まれている。

規模と形状 一辺3.4m前後の方形で, 主軸方向はN-0°である。壁高は8~15cmで, やや外傾して立ち上がっている。



第365図 第532号住居跡・出土遺物実測図

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。また、壁溝は認められない。

ピット 3か所。P2・P3は深さが50cm・30cmで、その形状から柱穴と考えられるが、対応するものもなく詳細については判然としない。

覆土 2層からなり、各層にロームや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片62点(坏11, 甕51), 礫片3点がほぼ全域から散在した状態で出土している。669は覆土中, 670は北部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は重複のため炉や竈が確認できないが、出土土器が少ないことや、P2周辺の床面が特に硬化していることから考えて、生活だけでなく作業にも使用された建物跡と考えられる。時期は出土土器の形状と6世紀前葉に比定される第151号住居跡を掘り込み、さらに6世紀中葉に比定される第152号住居跡が隣接することから、7世紀代と考えられる。

第532号住居跡出土遺物観察表 (第365図)

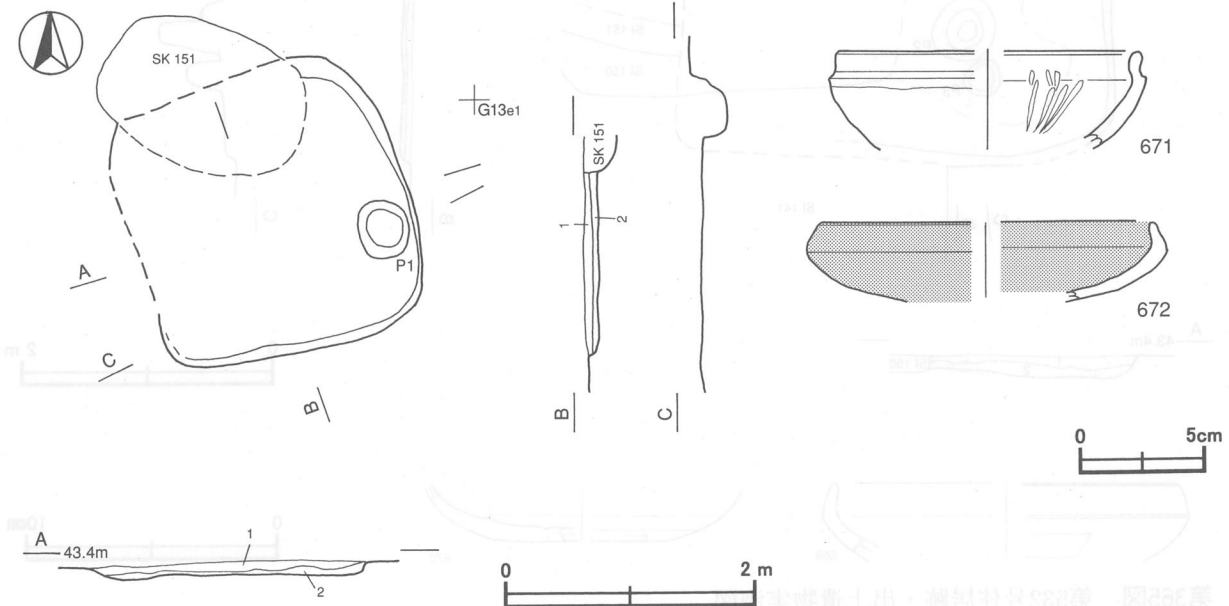
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
669	土師器	坏	[13.6]	(3.1)	-	石英	黒	普通	口辺部横ナデ, 体部外面ヘラ削り	覆土中	30%
670	土師器	坏	-	(2.3)	[7.0]	長石・石英・白色粒子	黄灰	普通	体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り	北部中層	20%

(2) 方形竪穴遺構

第4号方形竪穴遺構 (第366図)

位置 調査区北部西寄りのG12e0区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第151号土坑に掘り込まれている。



第366図 第4号方形竪穴遺構・出土遺物実測図

**規模と形状** 遺存している東と南の壁から、N-14°-Wを主軸とする一辺が約2.2mの方形と推定される。確認された壁高は10cmと低く、立ち上がり状況は判然としない。

**床** ほぼ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。

**ピット** 1か所。P1は径約40cmの円形を呈し、深さは20cmで、性格不明である。

**覆土** 2層のみ確認されたが、堆積状況は判然としない。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 暗褐色 焼土ブロック少量

**遺物出土状況** 土師器片97点（坏25，甕71，甗1），須恵器片1点（甕）が出土している。671・672は北東部の覆土中から出土しており、住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと考えられる。

**所見** 本跡では、床も特に踏み固められた範囲は見られないことから、居住を目的とした住居とは区別される。混入した土師器坏片は古墳時代後期の所産であるが、時期は同時期かそれ以後に構築されたものと想定される。

**第4号方形堅穴遺構出土遺物観察表（第366図）**

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
671	土師器	坏	[12.0]	(3.9)	-	雲母・赤色 粒子	にぶい褐	普通	体部外面ヘラナデ，内面ヘラ 磨き，口縁部横ナデ	北東部覆土 中	5%
672	土師器	坏	[13.2]	(3.2)	-	雲母・白色 粒子	にぶい黄橙	普通	外面剥落のため調整不明	北東部覆土 中	10%

**第5号方形堅穴遺構（第367図）**

**位置** 調査区中央部北寄りのI13a5区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第513・516号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸4.2m，短軸3.2mの長方形で、主軸方向はN-8°-Wである。壁高は85cmと高く、垂直に立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。

**ピット** 検出されなかった。

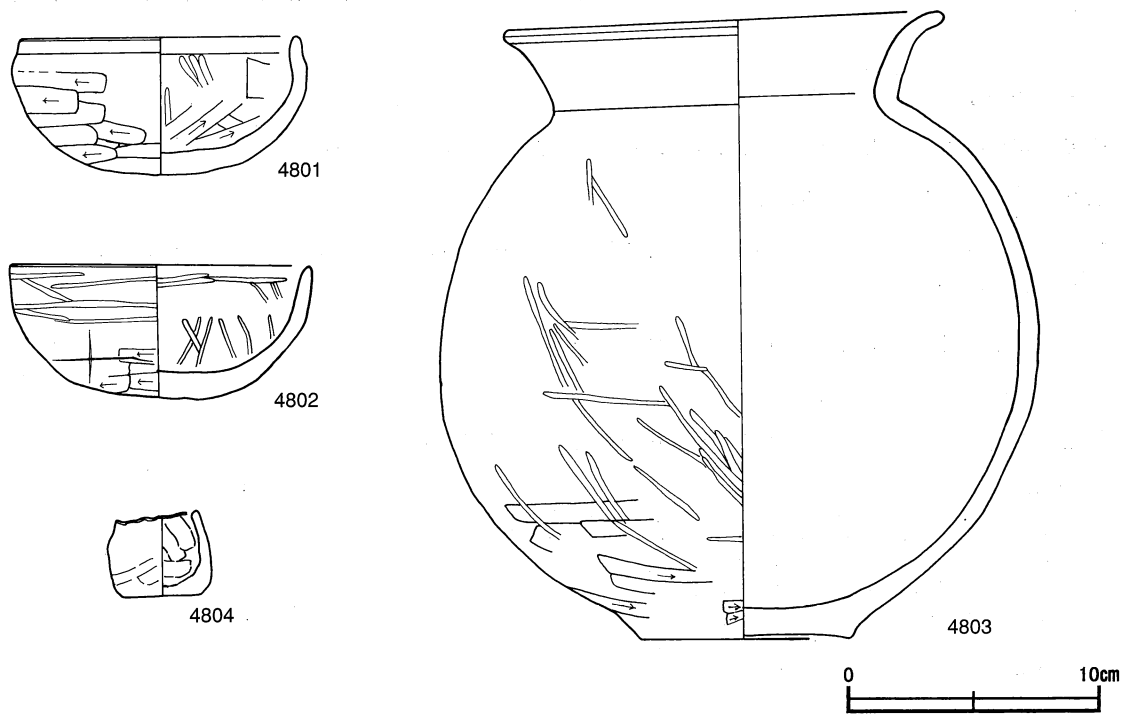
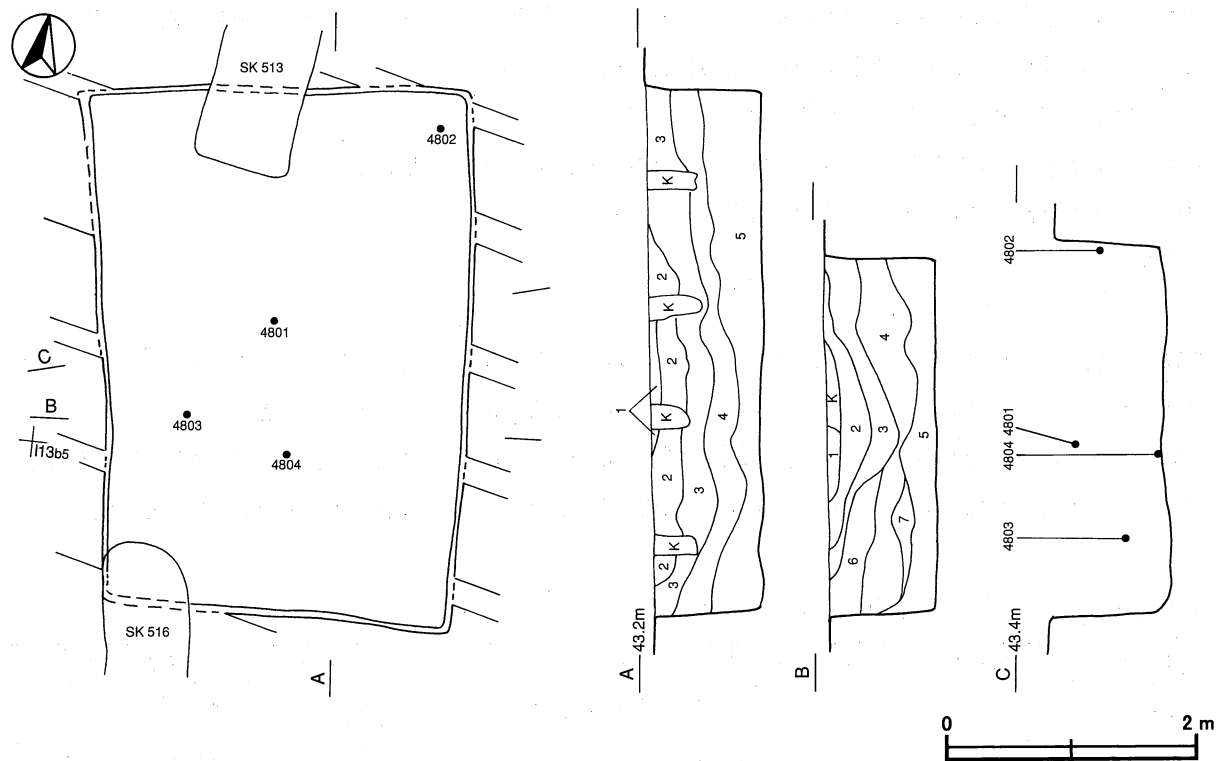
**覆土** 7層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量，炭化物・鹿沼ブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量，鹿沼粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量，炭化物少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・鹿沼ブロック中量
- 6 暗褐色 ロームブロック多量，炭化物少量
- 7 極暗褐色 ロームブロック中量，鹿沼ブロック少量

**遺物出土状況** 土師器片285点（坏35，高坏5，埴34，壺7，甕202，甗1，ミニチュア土器1），須恵器片2点（甕），礫片16点が出土している。土層断面や遺物出土の状況から、これらは住居廃絶後に混入、または投棄されたものと考えられる。4801・4804は中央部の覆土上層と床面からそれぞれ出土している。また、4802は北東部，4803は西部のそれぞれ覆土中層から出土している。

**所見** 本跡は深く掘り込まれ、床も踏み固められた範囲も検出されないことから、居住を目的とした住居とは区別される。投棄された土器は5世紀中葉であり、時期は同時期かそれ以前に構築されたものと考えられる。



第367図 第5号方形竪穴遺構・出土遺物実測図

第5号方形竪穴遺構出土遺物観察表 (第367図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4801	土師器	坏	11.0	5.5	-	長石・雲母・赤色粒子	赤褐	普通	口縁部横ナデ	中央部上層	100%
4802	土師器	坏	12.0	5.5	-	長石・石英	橙	普通	口縁部横位のヘラ磨き	北東部中層	100% 刻書

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4803	土師器	甕	17.7	25.1	8.4	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ	西部中層	70%
4804	土師器	ミニチュア土器	3.1	3.4	2.9	長石・雲母	にぶい黄褐	普通	体部外面ナデ, 内面ヘラ削り	中央部床面	100%

### 第10号方形竪穴遺構 (第368図)

**位置** 調査区中央部東寄りのI14e1区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第350・351・361号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 北部の遺存状況が悪いため、東西軸2.0m、南北軸は1.5mだけが確認された。東西・南壁から、N-9°-Eを主軸とする方形と推定される。確認された壁高は15cmで、外傾して立ち上がると考えられる。

**床** ほぼ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。

**ピット** 検出されなかった。

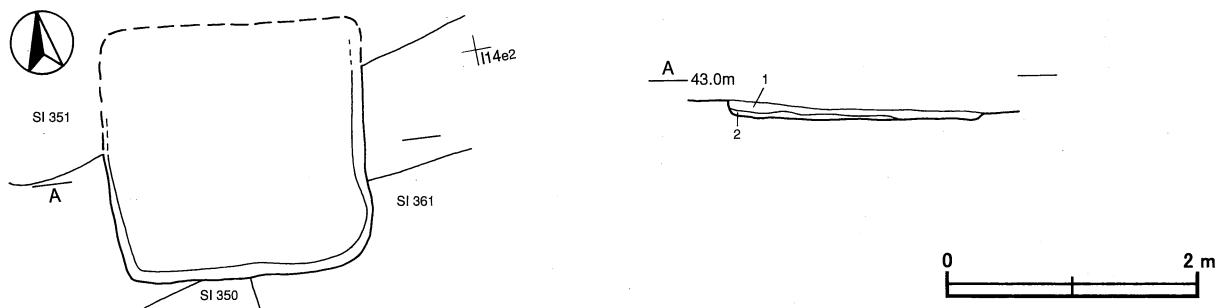
**覆土** 2層からなり、各層にロームブロックを含んだ人為堆積である。

#### 土層解説

- 1 黒色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 土師器片69点(坏26, 甕43)が出土している。出土した土師器片の大部分は細片で、図示できたものはない。これらの細片は本跡廃絶後に埋土とともに混入したものと考えられる。

**所見** 本跡は出土した土師器片の形状や、6世紀後半と比定される第361号住居跡と6世紀後葉と比定される第351号住居跡を掘り込んでいることから、時期は7世紀代以降と考えられる。



第368図 第10号方形竪穴遺構実測図

### 第11号方形竪穴遺構 (第369図)

**位置** 調査区中央部南寄りのJ13g4区に位置し、南東方向への緩やかな斜面部に立地している。

**重複関係** 第1号溝跡を掘り込み、第4号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸2.9m、短軸2.0m、深さ0.8mの長方形を呈し、主軸方向はN-16°-Wで、壁は外傾して立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、部分的に凸凹が見られるが、それほど硬さはない。

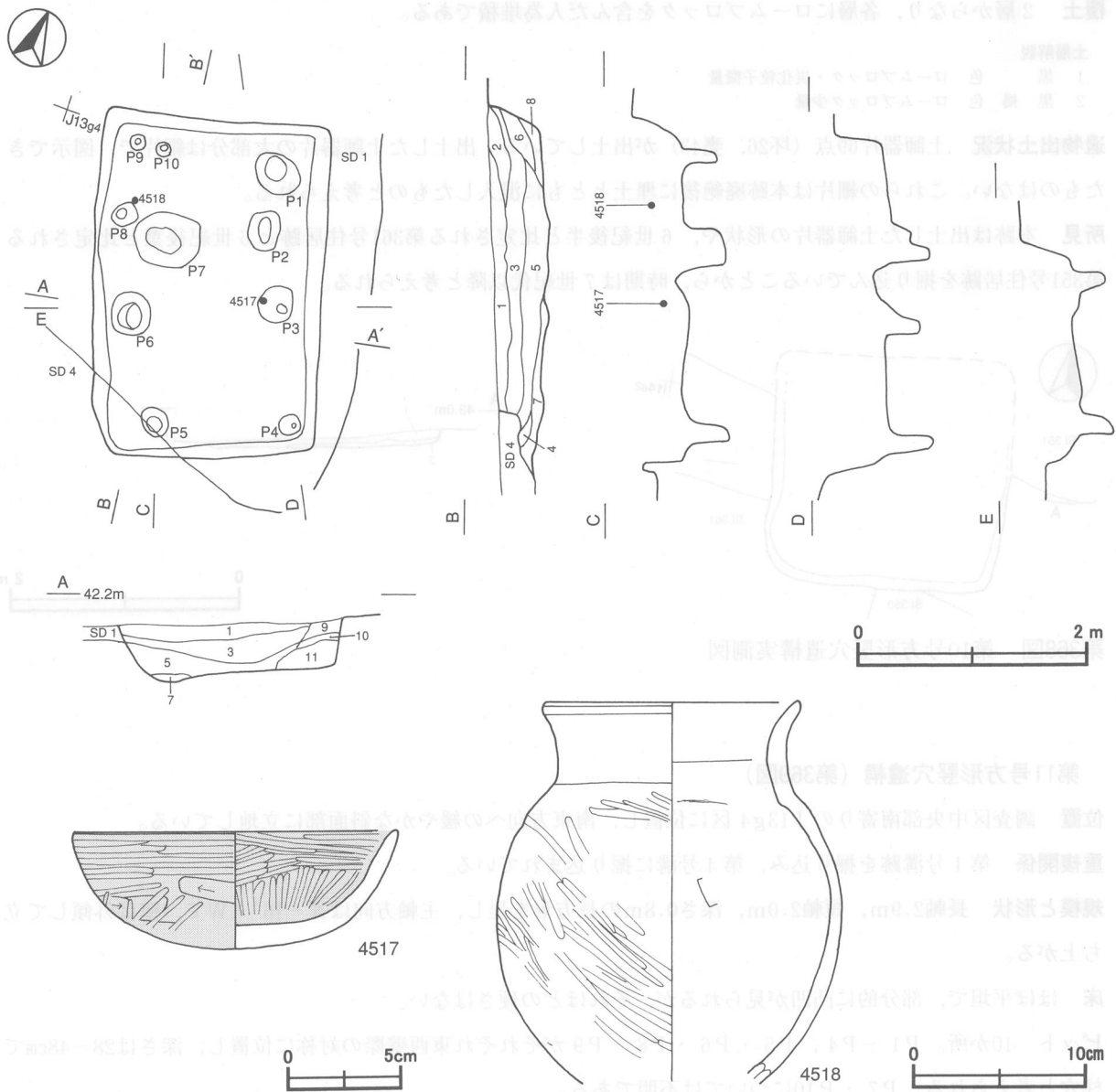
**ピット** 10か所。P1～P4, P5・P6・P8・P9がそれぞれ東西壁際の対称に位置し、深さは28～48cmで柱穴と考えられる。P7・P10については不明である。

**覆土** 11層からなり、覆土中に鹿沼パミスを含む層が見られる人為堆積の状況を示している。

土層解説	層別	土質	土色	土質	土色	土質	土色	土質	土色	土質	土色
1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量									
2	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量									
3	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量									
4	黒褐色	鹿沼パミス少量, ローム粒子・焼土粒子微量									
5	黒色	鹿沼パミス少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量									
6	黒褐色	鹿沼パミス少量									
7	黒色	焼土粒子・鹿沼パミス微量									
8	黒褐色	鹿沼パミス微量									
9	極暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量									
10	暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス微量									
11	黒褐色	鹿沼パミス少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量									

遺物出土状況 土師器片421点(坏56, 高台付坏1, 高坏14, 埴4, 甕346), 須恵器1点(甕), 瓦片1点, 礫片5点が本跡の中央より北部の覆土中より出土している。4517は東壁際, 4518は北西コーナー部のそれぞれ覆土中層から出土している。

所見 本跡は長辺に沿って各4本の柱穴をもつ方形竪穴遺構である。覆土は人為的な堆積状況を示し, 出土遺



第369図 第11号方形竪穴遺構・出土遺物実測図



物は埋め戻しの段階で投棄されたものと考えられる。投棄された土器は7世紀前葉であり、本跡の時期は同時期かそれ以前に構築されたものと考えられる。

第11号方形竪穴遺構出土遺物観察表 (第369図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4517	土師器	坏	14.0	5.1	-	長石・雲母	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り, 内外面ヘラ磨き	東壁際中層	100% 赤彩
4518	土師器	甕	14.4	(22.0)	-	石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ磨き, 口縁部ナデ	北西部中層	40%

第12号方形竪穴遺構 (第370図)

**位置** 調査区南部のK12h4区に位置し、平坦部に立地している。

**重複関係** 第52号井戸に掘り込まれている。また、中央部にかけて東西に攪乱を受けている。

**規模と形状** 遺存する壁から、N-88°-Eを主軸とする長軸2.6m、短軸2.2mの長方形と推測される。壁高は5cm未満と低く、立ち上がり状況は不明である。

**床** ほぼ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。

**竈** 遺存していない。

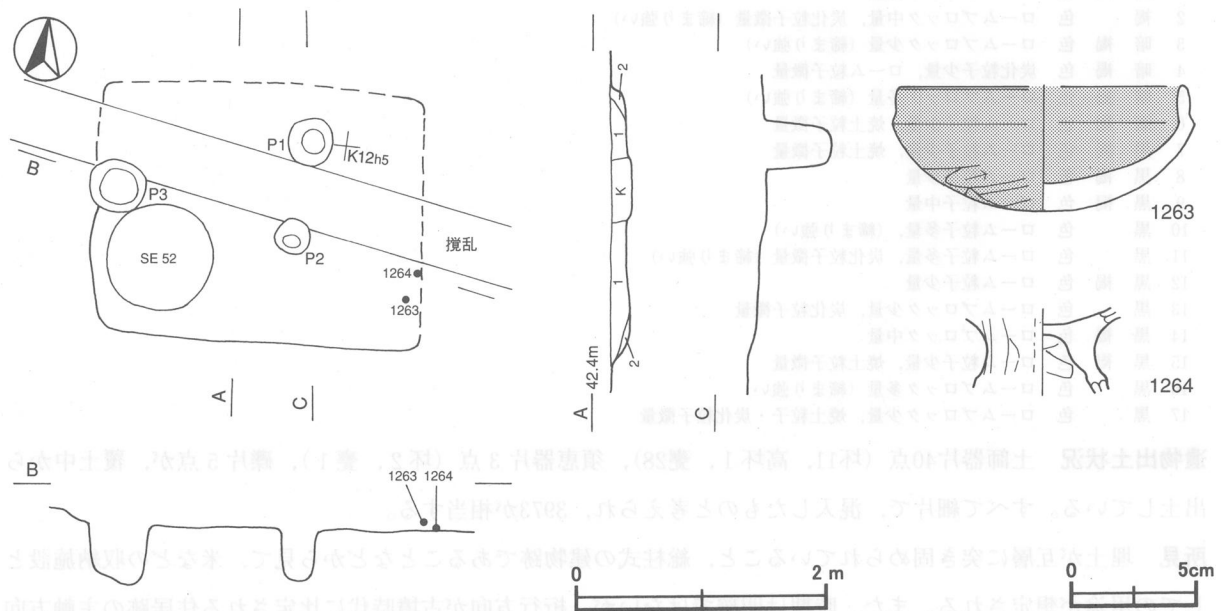
**ピット** 3か所。P1は深さ58cm、P2・P3の深さは40cm・50cmで、いずれも性格不明である。

**覆土** 2層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 土師器片195点 (坏117, 高台付坏1, 蓋1, 高坏1, 甕75), 須恵器片5点 (高台付坏2, 蓋1, 甕2), 灰釉陶器片2点 (瓶), 礫片1点 (被熱痕有り)が全域に散在して出土しているが、これらの大半は細片であり、図示できたものは少なく、埋め戻しの段階で埋土とともに混入したものと思われる。1263は南



第370図 第12号方形竪穴遺構・出土遺物実測図

東部の覆土中層、1264は東壁際の床面から出土している。なお灰釉陶器片は混入したものである。

所見 本跡では、壁溝、竈が確認されず床も特に踏み固められた範囲は見られないことから、居住を目的とした住居とは区別される。出土した土器は6世紀後葉から7世紀前葉と推測され、時期は同時期かそれ以後に構築されたものと考えられる。

第12号方形竪穴遺構出土遺物観察表（第370図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1263	土師器	坏	[11.2]	4.9	-	石英	黒褐	二次焼成	器面荒れ、口縁部横ナデ	南東壁際中層	50%
1264	土師器	高坏	-	(3.4)	-	雲母	にぶい黄橙	普通	器面荒れ、脚部外面ヘラ削り	南東壁際床面	10%

### (3) 掘立柱建物跡

#### 第1号掘立柱建物跡（第371・372図）

位置 調査区北部のF14i8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第15号住居跡を掘り込み、第25号住居、第42・52・63号土坑に掘り込まれている。なお、重複している第26・27・32号土坑とは切り合いがなく、新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行3間（平均5.1m）、梁間2間（平均4.2m）の総柱式の建物跡で、桁行方向はN-86°-Eの東西棟である。柱間寸法は桁行約1.7m、梁間約2.1mで、面積は約21.4㎡である。

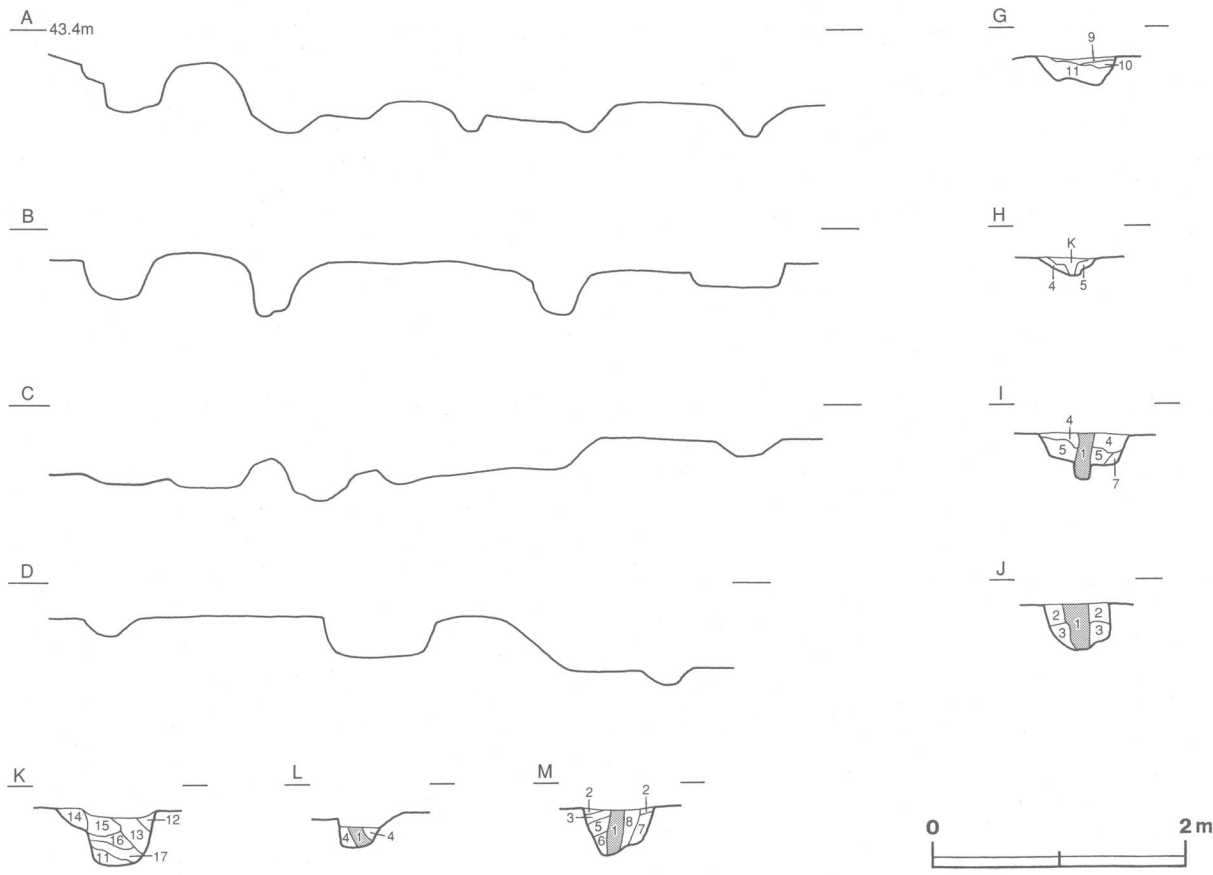
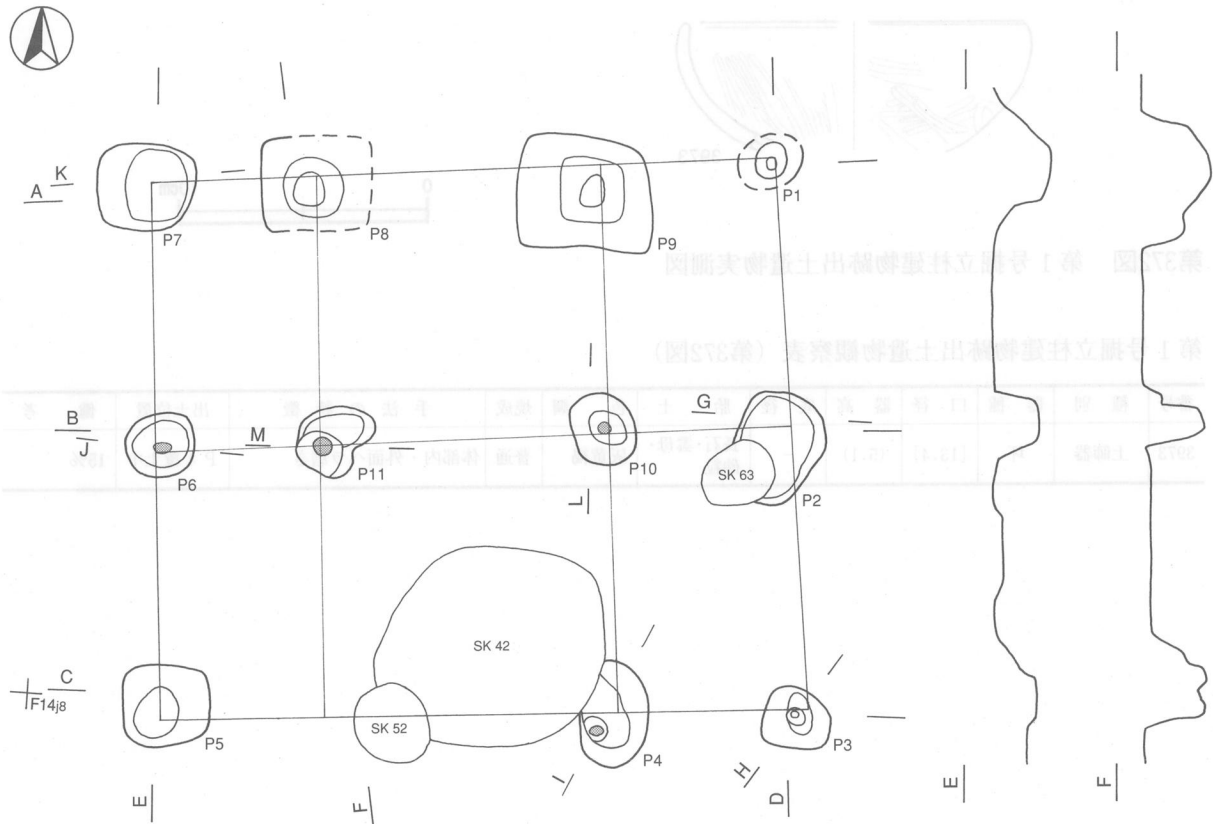
柱穴 第25号住居跡に掘り込まれている1か所を除いて11か所（P1～P11）が確認され、平面形が長径0.5～1.1m、短径0.4～0.9mの楕円形または円形である。断面形は逆台形状またはU字状を呈し、深さは13～53cmである。また、柱の抜き取り痕はP4・P6・P10・P11で認められ、柱材は径12～18cmと推定される。なお、第1層は柱の抜き取り痕である。

#### 土層解説（各柱穴共通）

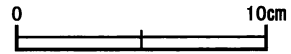
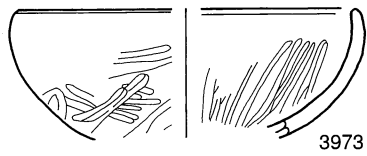
- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量（縮まり強い）
- 3 暗褐色 ロームブロック少量（縮まり強い）
- 4 暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック多量（縮まり強い）
- 6 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 8 黒褐色 ローム粒子少量
- 9 黒褐色 ローム粒子中量
- 10 黒色 ローム粒子多量、（縮まり強い）
- 11 黒色 ローム粒子多量、炭化粒子微量（縮まり強い）
- 12 黒褐色 ローム粒子少量
- 13 黒色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 14 黒褐色 ロームブロック中量
- 15 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 16 黒色 ロームブロック多量（縮まり強い）
- 17 黒色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片40点（坏11、高坏1、甕28）、須恵器片3点（坏2、甕1）、礫片5点が、覆土中から出土している。すべて細片で、混入したものと考えられ、3973が相当する。

所見 埋土が互層に突き固められていること、総柱式の建物跡であることなどから見て、米などの収納施設としての用途が想定される。また、時期は明確ではないが、桁行方向が古墳時代に比定される住居跡の主軸方向とはほぼ一致することや、重複関係などから見て、時期は7世紀後葉以降の可能性が高い。



第371图 第1号掘立柱建物跡実测图



第372図 第1号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第372図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3973	土師器	坏	[13.4]	(5.1)	-	長石・雲母・砂粒	灰黄褐	普通	体部内・外面ヘラ磨き	P 4 覆土中	15%

茨城県教育財団文化財調査報告第222集

## 辰海道遺跡 1

(第1分冊)

平成16(2004)年3月24日 印刷

平成16(2004)年3月26日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587

印刷 (有)川田プリント  
〒310-0041 水戸市上水戸4丁目6-53  
TEL 029-253-5551